大正四年八月廿五日印刷
大正四年八月廿八日發行

有朋堂文庫
宇津保物語下
（非賣品）

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理

印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登

印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

（岡山製本）

宇津保物語終

給ひてかへり給ひぬ。大將の御心ばへもめづらかに、愈世になき様にて、(一)親も子をもてなしかしづき給ふこととおぼし(二)宣はぬなしとなむ。

〔語釋〕
(一)「親をも子をも」歟
(二)宣はぬなしとなむ―宣はぬなし女大饗の有様季英の辨の女にきん敎へ給ふことなども多くあるべけれどさのみは煩はしうてさしおきぬ又事のついでに聞ゆべしとぞ―宣はぬなし次の卷に女大饗の有樣大法會のことはありき季英の辨のむすめにきん敎へ給ふことなど殘れり一つにては多かめれば中よりわけたるなめりと本にこそ侍るめれ

〔考異〕
(一)御志も—「も」ナシ
(二)大殿は—「は」ナシ

給ひて、朱雀「いと飽かずのみ思ひきこゆるを、いかでか又、かやうにては聞ゆべからむ。犬宮の、いと美しう物し給へる喜は、聞えむ方なきに、なほ限なき御(一)志もこもりたる身をこそまかせ奉らむと思へ」と、まめやかなる事ども、有りがたうおぼえ給ふ樣なれば、あはれにまめ〳〵しう宣ふを、御いらへ、今めかしからず、心恥かしき程に聞え給ふ。右の大殿(二)は、とくも出でさせ給ひなむと、心安からずおぼえ給ふ。嵯峨院、内侍のかみには、蒔繪の小辛櫃一かけに、女のよそひ、又、女の裝束三十くだり、皆裳、唐衣具したり。女房の中につかはす。朱雀院、衣筥一よろひに、唐綾、織物の夏冬のさうぞく、又女房の中に、女の裝束二十くだり、わらは四人、下仕四人、織物のかざみ、綾の上のはかま具したり。左右の樂人、みな二人の御方々より祿賜ふ。

事みな果てて、歸り給ひぬ。御方々、飽かずいみじかりつるものかな、常にかよる物の音を聞く、この人のかたち有樣を、如何ならむとゆかしく、あかぬ心地し

〔語釋〕
(一)金にて口のへり取りたる
(二)今夜の返禮には
〔考異〕
(三)給へり—給へりといふ
(四)宣はす—宣ふ

くおはします宮たちには、なべての樣にはあらず、いかでをかしき樣ならむ物こそよからめ」と聞え給へば、仲忠「然用意して侍り」とて、皆さまぐ\にまゐらせ給ふ。からの色紙の畫は、一卷といへども、四十枚ばかりなり。紫檀の箱の黄金の口置きたる(一)に入れたり。御覽じて、朱雀「こゝにこそ、今宵の物には(二)、不死藥にてもがな、と思へ。さても、これはいと見まほしく思ふものかな」と宣はす。嵯峨院の御笛の袋は、色よりはじめて、いと清らにうるはしき錦の袋にて、瑠璃の細き函に入れたる、透きて見えたり。人々興じ給ふ。上も好ませ給ふ物にて、いと御氣色よし。式部卿の宮三所の大臣には、女のよそひ、衣筥に入れたり。さての外は、例のことなり。御子たちには、銀の小鷹を作りて、黄金の透餌袋に入れて、皆ながら鈴つけて奉り給ふ。珍らかになまめかしうし給へり(三)。嵯峨院、「飽かぬ物の音を、中々になむ覺ゆる。いま一度だに、いかで必ずとなむ思ふ。それは、來年の櫻の花の折をなむ、ものし給はむにや」と宣はす(四)。朱雀院近う寄らせ

〔語釋〕
(三)「右大辨に」なるべし　左大辨は季英
(四)「内侍のかみに大將」なるべし
(五)俊蔭渡唐中の作をあつめたるもの
㊄仲忠、兩院以下に贈物を奉る。還幸。
〔考異〕
(一)朝臣を—朝臣をば
(二)奏せさせ—申させ

八尺ばかりして、上に平みたる松を見やりて、宮内卿兼蕠、

ひき植ゑし子の日の松も老いにけり千世のするにもあひ見つるかな

此の歌を、嵯峨院、いみじう哀がり給ひて、一院に、嵯峨「この返には、民部卿をあまたの人望み申すなるを、この朝臣を、必ずなさせ給へ」と奏せさせ給ひつ。朱雀「これのみこそ、古人の留まりたるはあれ。いと哀なり」と申し給ふ。嵯峨「いみじうおもしろき所なりや。時々物して、然るべからむ折に、左大辨に文作らせて、聞かむ」など宣はすれば人々、「げにをかしう侍らむ」と啓す。歸らせ給ひなむとす。朱雀院、大宮の御方に御對面せさせ給ふ。內侍のかみ、大將、仲忠「いと忝き御幸を、いかゞ仕うまつるべからむ。唐土の集の中に、小冊子に、所々畫かき給ひて、歌よみて、三卷ありしを、一卷を朱雀院に奉らむ。嵯峨院には如何」と宣へば、俊蔭女「高麗笛を好ませ給ふめるに、唐土の帝の御返賜ひけるに賜はせたる、高麗笛を奉らむ。上達部は、例の作法の御裝ありて。若

すむ人も宿もわかねば(一)まとゐして世をつくすべき心地こそすれ

右のおとゞに、朱雀「羨ましの家のあるじや」と宣へば、いと疾く、

兼雅「やゝもせば枝さしまさる木の下にたゞやどり木と思ふばかりを

今日よりは、ましていと畏くこそ」と啓し給ふ。心ばへ、哀なりと聞かせ給ふ。

嵯峨院、樓のかみにさし上りて、いといかめしき森のやうにて、櫻の木あり、嵯峨「あはれ、此の木見ることそいと恐ろしけれ。昔十餘歳にて、春ごとに來つゝ、書見るとて、見困じて、下りつゝ遊びし。いで、この樓(二)なくば、及びなむや」とて、

嵯峨 春きては我が袖かけしさくら花いまは木高き枝を見るかな(三)

近うさふらひ給ふ源中納言、

涼 かねてより雲かゝりけるさくら花うべこそ末の木高かりけれ

宮内卿、年七十なる、(四)忠保「あはれ昔を思ひ出で侍れば、あの岩のもとの松の木は、かの山に侍りしを、子日におはしまして引き植ゑ侍りしぞかし」と奏し給ふ。(五)七

〔語釋〕
(一)「あかねば」歟

〔考異〕
(二)樓—樓
(三)枝を見るかな—枝見つるかな
(四)なるあはれ昔を—なりむかしを
(五)奏し給ふ七八尺—申し給ふ七八本—奏し給ふ七八木

㉖兩院以下樓御覽。嵯峨院の懷舊。

（考異）
（一）上の―一院のうへの
（二）下に―しりに

院の上二所、左右大臣、宮たち、上達部おほん供にて樓御覽じにのぼらせ給ふ。嵯峨院は、西の對よりおはします。上の（一）御子たち、上達部左右別けて、御後に步みつゞきたり。樓の芳しき匂、かぎりなし。御方々御覽じまはすに、をかしくなまめかしく、見所ある、樓の中のありさま、御覽じて、「いみじくをかしく、めでたくもしたるかな」と仰せらる。まして嵯峨院は、らう〳〵じく、花やかにめでさせ給ひて、嵯峨「琴の音を聞くと、こゝの有樣を見るとこそ、天女の花園もかくやあらむと覺ゆれ」と宣ふ。朱雀院、こまかに御覽ずるに、飽かずめでたければ、朱雀「げに、こゝに、容貌よろしからざらむ人の、居るべき所の樣にはあらざりけり」と宣はす。やんごとなき限、隙もなく、樓のめぐりの勾欄にさふらひ給ふ。山の高きより落つる瀧の、傘の柄さしたるやうにて、岩の上に落ちかゝりて沸きかへる下に（二）、をかしげなる五葉の小松、紅葉の木、薄ども、濡れたるに隨ひて動く、いとおもしろきを御覽じて、朱雀院、

衞門のつかさどもは、行末の缺も心もとなく侍り。今も、唯仰せられむにならむ。

と奏せさせ給ふ。左大辨立ち歸り參りて啓すれば、宣旨の疾く下りたるを、院の上たちもよろこばせ給ひて、上達部の中に告げさせ給ひて、宣旨高く讀むを、内侍のかみ聞き給ふに、治部卿の所に、淚おち悲しくて、身の内侍のかみになり給ひしよりも嬉しくおぼえ給ふこと限なし。右大將、(一)この事の喜のよし奏せさせて、舞踏し給ふ。嵯峨院は、たちまちに、思す樣に花やかなることの、(二)大將のなきを、なほ飽かず思さる。御方々より、童べの舞ひつるに、かづけさせ給ふ物、いろ〳〵濃く薄くさま〴〵なる織物、かいねりのめでたく擣ちたる、朝ぼらけに、いと〳〵をかし。御方々、「世にまた類なく物し給ひける人かな」と宣はぬなし。犬宮の彈き給ひつる(三)さまを、親宮の、かの五十日の餠まゐりし程の、昨日今日とおぼすに、いと哀なり。藤壺これをわが御子と思はましかばと思す。

〔語釋〕
(二)「大將になきを」なるべし

〔考異〕
(一)この事―二の事
(三)給ひつる―給へる

ど、度々逃れ申せばなむ。故治部卿の朝臣、三位になむ侍りし。贈位の中納言になさせ給へ」と奏せしめ給ふ。一院は、朱雀「嵯峨院の御幸侍るに、對面賜はらむとてなむものし侍る。勞らむと思ひ給ふる童四人、(一)左右の衛門尉に缺侍らむに、これ同じうはなさまほしくなむ」と奏せさせ給ふ。(二)事のよしを奏す。委しく問はせ給ひ、聞召して、今上「げにいと珍らかなりける人の琴の聲なり。輕々しからずば參りても聞くべかりけるをとなむ覺えし」と宣ひて、嵯峨院の御返、

今上畏まりて承りぬ。げに、難く例なきことに侍りとも、仰せられむことは、いかで。ましていと易きことどもに侍り。

(三)右大將のことを聞かせ給ひて、今上「なほ用意ある人なりや」と宣はせて、治部卿を中納言になさせ給ひ、京極にかうぶり給ふ。内侍のかみのことも、奏し給ふままなり。朱雀院の御返、

今上かねて仰せられ、氣色承らましかば、自らも參り侍るべかりけるものを。

〔語釋〕
(一)さがのの孫
(二)右大辨忠澄が
(三)仲忠が大臣を辭したる由を

〔語釋〕
（一）「ところ」は此京極の舊邸をいふ歟

〔考異〕
（二）ことには思う—ことに思ひ

爲に、ところ（一）にかうぶりを賜はらむ」と度々啓し給へば、朱雀院は、嵯峨院へ、朱雀「啓せらるゝまゝにも」と聞え給へば、唯御消息にて、左大辨召して、嵯峨院内裏に奏せさせ給ふ。

嵯峨「年高くなり侍りて、心地のほれ〴〵しうなり侍るに、此の内侍のかみの家、昔見給へしゆかしさにまうで來て、琴ひかせて聞き侍るに、珍らかなる事どもなむ。故治部卿の朝臣、おほやけ人として侍りしあとだに、身を公にしたがへて、唐土の使にまうで、あたの風にあひて、多くの年月を經て、父母の顏も相見ずして、悲しき目を見て、たま〳〵歸り侍りて後、同じきやうに、いくばくも侍らぬ程になくなり侍りにき。内侍のかみ、男ならましかば、一度に大臣にもなさまほしくなむ。今宵のことには（二）思う給ふる。これ、いといと易きことに侍るを、唯今宣旨くだし給へ。

と奏せさせ給ふ。嵯峨「そのかうぶりには、右大將の朝臣大臣に、と思う給ふれ

階をものして、珍らかなることをとゞめ置かむなむ、かの身に榮あるべき。こゝ(一)に聞えむ」

内大臣に右大將藤原の朝臣それがし、(二)内侍のかみ正二位に加階し給ふべし。中宮、東宮、大臣家の大饗に準へて、内侍のかみの家に大饗ゆるされむ。數のまゝに女大饗あるべし。その宣旨をはじめて、(三)嵯峨院も奏しくだす。(四)かの日の設の物は、院よりおくるべし。次々の太政大臣、同じく傳へて用意せらるべし。朱雀院の女一の宮を、男に準へて、四品の位賜ふべし。この由をおほせ給ふべし。

とかゝせ給ひて、左右大臣左大將(五)のをばかゝせ給はで、つかさ位をこれに書きつけて、近う召して賜ふに、二三人は書き出でて奉り給ふ。右大將、その御氣色を賜はりて、仲忠「仰せごとは、限なくかしこけれど、さらに此の度の大臣の宣旨は、承らじ。強ひて御顧みさふらはど、忝く御幸せしめ給へる、(六)畏まらむ

〔語釋〕
(一)我その由を今上に申上げん
(四)誤あらんか

〔考異〕
(二)それがし―ナシ
(三)はじめて―めして
(五)左右大臣左大將―左大臣左大將右大臣右大將
(六)給へる―給ひつる

〔語釋〕
(五)俊陰の靈
(六)俊蔭女

〔考異〕
(一)水も—水の
(二)書かぬなり—かゝぬさは本のまゝなり
(三)いらへ—いざや

(廿)嵯峨院の奏請によりて俊陰に中納言を贈られ俊陰女正二位に叙せらる。朱雀院の奏請によりてさがのの孫四人衛門尉になさるる。

(四)珍らかなる—珍らしかな

この世にはあらぬことゝぞ思ほゆる空にはひゞき水(一)もながれて

右大將、

仲忠「ことの音の昔にすめる曉は水もながれて悲しかりけり

となむ。人々ありけれど書かぬなり(二)。源中納言は、大將に、涼「何事をか思ひ給ふ」と聞え給へば、藤壺の御局を見やりて、仲忠「いかでなほ物をば思はぬぞ。心憂の御心や」と宣へば、いらへ(三)、涼「などかは。如何聞きなさむ」とて笑ひ給ひぬ。朱雀院今宵の内侍のかみの祿に、いかなる事をせむ、犬宮に、いと上手に、同じごと彈き給ふにつけても、いかで珍らかなる(四)ことをせむ、とおぼす。萬兩の黄金も惡くおぼして、嵯峨院に、朱雀「世を去り侍りて、今宵の祿をこそ、え心のまゝに侍るまじけれ」と申し給へば、嵯峨「げに、如何はあるべからむ。こゝには、世をさりて久しくなりにたり。大將を、人より越して、大臣になして、こゝにて大饗せさせたらむ。昔の靈(五)も、少しうれしと見るべきを、かの正身(六)には、正二位の加

〈考異〉
（一）しらが—かしら

かくは侍らじ。これは、然るべくて彈き給ふなりけり」と聞ゆ。右の大殿此の中にすぐれて嬉しうおぼえ給ふこと限なくて、兼雅「喜にも、涙とゞめられず侍りける」と啓し給ふをば、女御の君、一の宮の御心、いと哀にうれしくおぼえ給ふ。嵯峨院、「老は厭ふまじかりけり。いみじう聞かまほしと思ひし、昔の手をひき、末の世にかく有りがたき事の留まりぬること」と興じ給ひて、いとになく上手に吹かせ給ふ高麗笛を、これに合せて吹かせ給ふに、さらに兒の彈き給ふやうならず、手のなりにけることと、いみじく哀なるにえ堪へずと宣はせて、立ちて舞はせ給ひつゝ、

嵯峨　ひめ小松ひきつることに忍びあへず白きしらが（一）の新羅舞せむ

と宣はするに、右のおとゞ、

兼雅　雲の上のしたにもかよふ末の世にひきとゞめつることの嬉しさ

式部卿宮、

には、かの(一)樂にぞ。いま少し、樂の聲高く、仕うまつれ。あやしく樂の音のたれてあるかな」とて遣はす。「樂の音、例かぎりあれば、曉に合せて仕うまつる」と申す。(二)なほ琴の聲はさま〴〵の響あまたに別れて、面白うて、(三)樂の聲はしづみて細う聞ゆ。ほの〴〵と明けゆくに、風の音はせで、空すこし霧りわたりすみたり。折の面白きに、琴の聲わきて(四)哀なり。内侍のかみ、一院にかくと聞かせ(五)奉らむ、とて、俊蔭女「いとようも彈かせ給ふかな」と聞え給ふに、おどろかせ給ひて、几帳のかたびらふと引き揚げて、御覽ずれば、内侍のかみの彈き給ふにはあらで、燈影のあかきに、犬宮のいと(六)白う美しげにて、彈き居給へるなりけり。早斯くなりにけりと見給ふ(七)に、いといみじくかなしく覺えさせ給ふに、涙こぼれさせ給ふ(八)を念じさせ給ひて、朱雀「これは、此の兒の彈くなりけり」と宣はするに、「如何に如何に」と人々驚きて、哀に、「物のついではいみじかりけるものかな」と聞きさわぎ給ふに、げに理と聞えたり。「たゞの人は、一生を添ひ居て習ふとも、更にえ

〔語釋〕
(一)誤あるべし
(二)樂人等の申す也
(五)犬宮が彈くなりと知らせんとて

〔考異〕
(三)面白うて—「て」ナシ
(四)わきて—まして
(六)いと—ナシ
(七)見給ふ—見給はする
(八)給ふを念じさせ給ひて—給ふ念じて

（廿六）俊蔭女、犬宮をしてりうかく風を彈かしむ。妙なる音。人々の驚嘆。

〔語釋〕
（二）朱雀が
（三）俊蔭女の心
（五）調子の變るは何故ぞ

〔考異〕
（一）とは—「は」ナシ
（四）りうかく風—「風」ナシ

とは（一）、身にこそ思う給ふれ」と聞え給ふ樣のいとめでたければ、いかで萬に斯かりけむと（二）おもほす。犬宮に、（三）りうかく（四）風を、かゝる大方の聲に合せて、彈かせ奉りて、試みむと思して、彈かせ奉り給ふ。院の上、朱雀「かはる（五）なるは」と宣はすれば、俊蔭女「りうかく風を、曉の調にものし侍る」とて我彈き給ふやうにて、彈かせ奉り給ふ。曉になりにけるに、いといみじく面白く、樂の聲、鼓の聲を、しばし整へさせ給ひて、みな一度におし入るゝやうに消ちて、たゞ琴の聲のかぎり、上にのぼりて、澄み響くこと、大將の御手よりはまさりたり。大將のみぞ、人知れずあやしと思ひ給ふ。源中納言の、涼「怪しく、りうかくの聲は、曉なれど少しこそかはれ。此の斯うざまの音は、大將は同じやうにはえ傳へ給はざりけることかな」と宣ふを、近き程なれば、一院の上、朱雀「げにまだ聞かざりつ。萬の樂の聲みな消ち、琴の聲のかぎり、聲々におもしろう哀なるは、さる調をはなれてありける

四人の童べ、細くやはらかなる聲の面白きを(一)出だして、秋の野の蟲の鳴かむよりも哀なることをいふを(二)、同じ聲に合せて舞ふに、愈哀がらせ給ひて、御扇して拍子うたせ給ふ。朱雀院の、

おもしろく哀にためしなき事をきゝて苦しくはなにのなにせむ(三)

といとめでたくをかしき御聲に合せて誦せさせ給へば、嵯峨院、

哀なることのしるしの見えざらば何をか後のかたみにはせむ

と聞えさせ給へば、人々めで聞ゆ。朱雀「今しばし」と宣はすれば、俊蔭女「日頃みだり心地の惱ましく侍るけにや」とて彈きさし給ひつ。朱雀院、なか〳〵此度は、いよ〳〵飽かずおほえさせ給ひて、内侍のかみに、斯く、

朱雀琴の音のあかざりしより白雲のおりゐて今日ぞうれしかりける

御返事、

俊蔭女塵つもる山もなにせむ雲かゝることのほかなる宿をうれしみ

〔語釋〕
(三)誤あるべし

〔考異〕
(一)面白きを—「を」ナシ
(二)いふを—「を」ナシ

〔考異〕
(一)雨よりも―雨のごとく

地震のやうに土うごく。いとうたておどろ〱しかりければ、たゞ緒一條をしのびやかに彈き給ふに、俄に池の水たゝえて、遣水より、ふかさ二寸ばかり水流れ出でぬ。人々あやしみ驚きぬ。一條はおもしろく、二條は悲しく、哀なる事、はじめよりは勝れたり。此の音を聞くに、愚なるものは忽に心さとく明かなり、怒り腹立ちたらむものは、心和かにしづまり、荒く烈しからむ風も靜になり、病にしづみいたく苦しからむものも、忽に病おこたり、動き難からむものも、これを聞きて驚かざらむや、とおぼゆ。いみじき岩、木、鬼の心なりとも、聞きては涙落さゞらんや、と聞ゆ。源中納言、いといみじく、萬のこと覺えず、心にしみて悲しくおぼえ給ふ。一院の上は、御目より、涙、(一)雨よりもしげく落させ給ふを見奉り給ふに、げに如何にきこしめすらむ、と悲しくおぼえ給ふ人々、多く、見まはし給へば、一人として、も、疎に思ひ、泣き給はぬなし。大將は、いまだ此年頃聞き給はぬに、親ともおぼえ給はず氣恐ろしきまで、悲しうおぼえ給ふ。

緒を一筋鳴らさせ給ふに、ひゞきいと珍らかなり。怪しとて、次の緒をかき鳴らさせ給ふに、露ばかりの音もせず、聲もなし。いと恐ろしき物にこそあめれ。(一)上たちも怪しがり給ひて、几帳の内へさし入れさせ給ひつ。内侍のかみ、賜はりて、引きよせ給ふに、まづ涙落ちて、昔宣ひしこと思ひ出で給ふことどもあり。强ひて涙を念じ、心をしづめて彈かむとし給ふ。(二)こゝばくの御子たち、上達部見て、これを如何ならむと、心を惑はして思ほえ給ふ。御方方、あるは耳はさみをし給ひて、晝のやうなる御殿油を、おしはりて、端近く居給ふ。内裏の御使も、(三)山中に入りて多くの年を過しけむ例のやうに覺えて、歸り參るべき心地もせで居たり。此の琴は、かの作り出で給へりし琴の中の、勝れたる一のひゞきにて山中の仙人の(四)勝れたりし手は、樂の師の心とゝのへて、深き遺言せし琴なり。唯、はじめの下れる師の(五)敎へたる調一つを、まづかき鳴らし給へるに、ありつるよりも聲のひゞき高くまさりて雷いと騷がしく鳴りひらめきて、(六)

〔語釋〕
(一)「あめれと上たちも」歟
(三)女が鬢に垂れたる髮を耳にはさむこと、常ははたちかんするときの仕度
(四)晉の王質が石室山に入り仙人の圍碁を見て斧の柄の朽るを知らざりし故事

〔考異〕
(二)こゝばく—こくばく
(五)仙人—山人
(六)鳴り—ナシ

と宣はす。

夜半ばかりになりゆく。切に、とかく啓して逃れ(一)給ふを、責めて肯き給はず。

朱雀「何かは、せぬわざ〳〵の事のあらむかし」とていと近くゐざり寄らせ給ふに、

いとゞむくつけく、世を何とか(二)、今はまして思すまじき御心なるに、思ひ煩ひて、

俊蔭女「いと怪しく、さらに珍らかなる様の侍らぬを、あいなう侍る(三)に、左のおとゞ、

春日詣などに、みな聞きなしたるなむ侍らむ。大将に仰せごとを」と申し給へば、

いとよく打笑はせ給ひて、朱雀「疾くこそ、かく教へ聞え給ふべかりけれ」とて大將を近く召して、責めさせ給へど、疾に立たねば、「一院の御許されなめり。早う」と宣はすれば、内侍のかみ、扇をうち鳴らし給へば、立ちて、楼に昇りて、(四)取りて参りたり。嵯峨院、やがて取らせ給ひて御覧ずるに、琴の様も例に似ず、清くめでたう、美しげなることを(五)、昔より、同じ唐土にわたりて、持て上りたりし、彌行が琴ども(六)にも似ず、治部卿の數多わたしたるにも似ず。御手すさびに、

〔語釈〕

(一)俊蔭女が

(二)「何とか」は「何とも」歟

(四)はし風の琴を仲忠が

(五)「ことを」の「を」衍文なるべし

〔考異〕

(三)なるに—なれば

(六)どもにも似ず—「も」ナシ

昔、内裏にて折節の節會、花の宴の折には、面白くかしこき文を興じ、よろづ思ふ事なくて、身をまかせて、年月を過し、をり〳〵の面白かるべき遊をし、琴彈かせしに、朝臣の世よりなむ、有りがたく勝れては覺えし。此の琴の聲になむ、世に心もなく物覺えつるに、今宵なむ、天の樂も斯くやあらむ、と覺ゆる」と宣ふに、源中納言涼「ほそを風は、犬宮の産屋に、大將のたゞいさゝかかき鳴らして侍りしは、たゞ面白くなむ侍りし。今宵聞き侍るには、いづれ(一)なれど、調ことにかはりて、又なくさま〴〵に哀に侍りけり。まして、七日の夜の琴は、いみじくこそは侍りしか。(二)これをいさゝかかき鳴らし給へらむ聲(三)に合せて、此の童べ四人舞ひて侍らば(四)、いかに面白くになく侍らむ」と啓し給へば、これに勝りて、げに如何ならむ、と思ほす(五)。一院、哀なる事を心深くおもほす御心に、ましてまだ聞かせ給はぬ樣の、いと珍らかに悲しう思さるゝに、世々を經とも忘れがたき人かなと、愈あさましき御心添ひて、朱雀「さて、かのはし風をなほかき鳴らし給へ」

〔語釋〕
(一)誤あるべし
(五)嵯峨院が

〔考異〕
(二)これを―かれを
(三)聲に合せて此の童べ四人舞ひて侍らば―ナシ
(四)侍らば―侍らむは―侍らむ

〔考異〕
（一）何ぞ―なぞ―なんぞ
（二）奏せよ―申せよ

いふかひなげなる姿したるものも、哀がり面白がり居たり。辛うじて參りて御階の下にて啓せむと思ふに、樂の聲、琴の響に聞きつけ給ふべくもあらず。强ひて、聲のかぎりを出だして、「藏人少將藤原信方、內裏よりさふらふ」と申す。內侍のかみ、疾く聞きつけ給ひて、琴を彈きやみ給ふ。上たち、聞きつけさせ給ひて、「何ぞ（一）」と問はせ給ふ。信方「しかぐ聞え侍りつるを、上聞召しつけて、「此の聲の聞えむ所を尋て奏せよ（二）」となむ仰せられつる。こなたに聞え侍りつれば」と啓す。御渡どもかませ給ひて、「いよく珍らかなりける事かな」と人々驚き給はぬなし。朱雀「內裏におぼつかなく思さるらむ。疾く參りて奏せよ。昔ほのかに聞き侍りしに、飽かずおぼえ侍りしを、然りぬべき折になど聞きて、ものして侍るを、耳近く哀に聞き侍りしが、內裏まで聞召しけるかな」と仰せらる。院の御前よりはじめ奉りて例の儀式にこと加へて、みな御酒など度々まゐれり。しばし有りて、嵯峨院、さらに、嵯峨「今宵なむ、露心地に思ふことなく覺ゆる。

〔考異〕
(一)空—雲
(二)早め—ナシ
(三)聞けば—聞くは

信方琴聲を尋ねて京極に到る。

むやは。あやし」と男女方聞きて、哀がり涙落さぬなし。上も、いと悲しくおはしますの御心にて、今上「なほ、これいと怪し。藏人所、瀧口の男ども、少將信方、寮に早からむ馬はや召しに遣はして、これが聲する方をさして參りて、目に見えずとも、その程と申せ」とおほせ給ふ。帝、限なく哀におぼされて、かつは物の變化にやとまでおぼして、涙落させ給ふこと限なし。高きもさらぬも、さふらひ給ふ御乳母、内侍、命婦、藏人、下のしなのも、泣く〳〵哀がり、あやしと思ふ。上は、端に出でさせ給ひて、ながめさせ給ふ。人々もさふらふ。空(一)のけしきも例に似ず、哀なる聲の聞ゆること、萬のこと深く思ふ心みな忘れて、たゞひとへに物悲しう、世の哀なる事のみ思ほゆ。

少將樂の聲聞ゆる方に、馬を早め(二)打ちてゆけば、京極なり。道は二三町をかぎりに、人隙もなく立ち居たり。御門はいとゞ足踏むべき隙もなし。人の中を、わりなくて分けて行く。近くて聞けば(三)、まして三つ四つ聲を合せて、さま〴〵哀なり。

〔考異〕
（一）殿上人—殿上の人
（二）給へば巽の—給へば東巽の

で來、星さわぎ、空のけしき恐ろしげにはあらで、珍らかなる雲立ちわたる。廂に居給へる人々、狹くて、人氣に熱かはしくおぼえ給へる、忽に涼しく、心地たのもしく命延び、世中めでたからむ榮をあつめて見聞かむやうなり。同じ調ながら、はるかに澄みのぼりたる聲、心細く哀にて、上は空をひゞかし、下は地の底をゆるがす。四方の山、林に聞きわかれて、悲しう哀なること、世の中は常なきことも忽に思ほえて、涙落つること留めがたく哀なり。帝よりはじめ奉り、そこばくの上下、聞き給ふに涙落さぬなし。

此の琴の音聞ゆること、響風に隨ひて、近くは内裏に、夜さりの威儀のおものに就かせ給はむとする程に、心ぼそう悲しう、哀なる物の音、風につけて聞ゆるを、驚きあやしがらせ給ひて、今上「殿上人（一）、此の物の音は聞くや。何處にかあらむ。いと怪し」と仰せ給ふ。「然侍る。いとあやし」と申す。強ひて聞かせ給へば（二）、巽の方より聞ゆ。藏人の少將、「面白くとも、京極の大將の家の琴の聲、内裏まで聞え

〔語釋〕
(二)「院の一の宮の御腹の犬宮の御祖母となり大臣の北の方となれども」などあるべき歟「なほち」一本「むち」

俊蔭女りうかく風を彈く。琴聲内裏に聞ゆ。今上、少將信方をして琴の聲を尋ねしむ。

〔考異〕
(一)觸れむ—觸れなむ
(三)りうかく風—「風」ナシ
(四)音を—音をば
(五)いろ〳〵の—いろいろに

に手觸れむこと、昔のこと思ひ出づるに、心くだけて悲し、七日の夜は棚機に奉る(一)べきには、犬宮に聽き知らせ奉らむと、それもたゞ忍びてかき鳴らしょなり、かく、帝と申せど、世に心ことに思はれ給へる(二)院の一の宮、犬宮の御おほぢとなり、大臣の北の方と思へども、なほ心ゆき、極まることとも思ほえず、二所の帝かしこくとも、はし風はしばし、と思ひみだれ給ふ。

十五夜の月の、明かに隈なく、靜に澄みておもしろし。「心もとなし」とあまた度嘆き宣はすれば、まづ習ひはじめの(三)りうかく風を、秋の調に彈きならし給ふ。音高く、清涼殿にて彈き給ひしには勝れて、世になくおもしろく、明かなり。萬の樂、笛の音(四)をはやし、諸のおもしろき聲を整へたり。二所の上、宮たち、御方方、りうかくの聲をほのかに聞きしもありしかど、「まだ斯うはあらざりき」と驚き給ふ。耳に入り、心にしみて面白き事、かゝる事あらむやと勝れて聞ゆ。次にほそを、曲の調にて一つ彈き給ふに、(五)いろ〳〵の霰しばしば降り、雲忽に出

かぎりの幸(一)を極めむ時、また世にいふかひなくなりさそらへむ(二)時にを」と宣ひ(三)しかば、空洞の獸の中にして、ほそを風の、聲のものの限は彈き給へしに(四)、人々聞きつけて物せられしかば、彈きさしてき、今然るべき(五)年の程にものし給はぬ(六)大將の御樣も、內侍のかみになさせ給ひし御心ばへも、限なく、昔の人の宣ひしありさまを思ひ出で給ふに、今日のありさま、位を去り給へど、二所の帝、これを聞かせ給ひにおはしましたり、式部卿の宮はじめて、こゝばく(七)の、時にあひ盛とおはします、內裏、東宮の上達部、つどひ給へり、后ときこゆる中に、勝れ給へる太皇太后宮、女王、左の大殿の北の方をはじめて五所、女御は式部卿の宮の御女を加へて三人おはす。たゞ人は、公私のやんごとなく重きものに思はれたる太政大臣上達部のかぎり十五人、三位、左右大辨、頭、藏人、すべて(八)殿上人おほくあるかぎり殘るなし、聞き知り給ふも、さらぬも數々はかりなき中に、さてもほそを風は、少しもなくとも、その曲の物の、果の音を彈かむことはいと易し。はし風

〔考異〕
(一)幸を極めむ時また世に—幸きはめ次には世に
(二)さそらへむ—さすらへむ
(三)宣ひしかば空洞の獸の—宣ひおきしをおほかみ獸の
(四)給へしに—給へしを
(五)然るべき—さべき
(六)給はぬ大將の御樣も—給はず大將の御樣を見給ひ
(七)こゝばく—こくばく
(八)すべて—ナシ

まほしき。又はし風などは、仄に聞きて、ことのさまに聴き(一)たる人なし。もしそれにやあらむ、と思ひあてに傳へ聞く樣なむありし。それ、今宵聴かせ給はゞ、此の世にも、世々にも盡きず嬉しくなむ。これをきかせ給はで、後の永き世に、人にきかせ給はゞ、世中に恨となむすべき。

いまは身のかぎりと思ふする爲の世にもとの恨をとく(二)もきかなむ

内侍のかみ、源中納言聞き給ひて、かく啓し給はむことのいかでかは、(三)怪しく思ひ給ふ。御返し、

俊蔭女「二葉にておもほえぬかな結び松うちとけてこそ人はひくらめ

なむ風は、數多しらべありとも思ほえ侍らぬ」となむ申し(四)給ふ。(五)朱雀院は、氣近くなつかしくて、萬の理なることを宣はせ、嵯峨院は、御年高く、かたじけなくおはしまして、古をかけて逃れがたく宣ふ。如何すべからむ、と思ひわづらひ給ふ。故治部卿は、ほそを、はしふ、二つの琴を立てて宣ひしやう、「世中今は

〔語釋〕
（二）とく——解く、疾く
（三）「いかでかは と怪しく」なるべし
（五）俊蔭女の心

〔考異〕
（一）聴きたる——聞えたる
（四）申し——きこえ

〔語釋〕
(一)未詳
(五)俊蔭
(七)雷鳴壺

〔考異〕
(二)みづしに―みつゝに
(三)責めさせ―めさせ
(四)入れて―「入れ」ナシ
(六)啓し―きこえ
(八)彈き給はずなむ―ひかずなむ―ひき給はなむ

はやと思ふに、右大將、心もとなくこそ覺ゆれ。かのりうかく、ほそを、又かの治部卿の朝臣の集の中に、今かみに書き消たれたりし、(一)さいこくに思ひくすべしとありし(二)みづしに」と度々(三)責めさせ給ふに、いみじく淸らなる、高麗の錦の袋に(四)入れてあり。とり渡すに、匂ひたるが、えならず、奉り給ふ。朱雀「今一つあり」と仰せらるれば、ともかくもえ啓せず。

内侍のかみ、如何にすべきにか、と思ひ煩ひ給ふほどに、嵯峨院、近くおはしまして、嵯峨「大將の朝臣にものせし事ども、傳へ聞き給ひけむや。(五)昔の人の、勘事、罪にあたるを、今は殘なくなりにたる身なるを、此の身にゆるし給はゞ、嬉しくなむ」など宣ふさま、らう〳〵じく愛敬づかせ給へり。俊蔭女「いと畏きこと」と(六)啓し給へば、嵯峨「さらば、かのりうかくよりしてなん風、はし風などいふなむ。(七)かんなりにて、大將中納言のひきし琴の聲なむあまたある心地せしを、空の雲の騷がしくらうがはしき事ありとて、彈きさして、殘その世に(八)彈き給はずなむ。いと聞か

〔語釋〕
(一)「のたまふへし」は「ものし給ひし」歟

〔考異〕
(二)なにとか—なにかは
(三)心ばへいかに—心ばへいまに—心ばへはいまに

えぬ物の音なむありし」とものせしかば、すべて、りうかくの調にはじめて、かの七日の夜のこと、今宵きかせ給へ。いつか、又かゝる夜の事あらむ。嵯峨の上、年頃ゆかしうせさせ給へる、殘少き御世になり給ひたる、斯くておはしましたるいと畏きことに、人知れぬ思ひ過しも心とゞめておぼされば、たゞ、今日やそのしるし見ゆべき。何事も思されぬにつけても、有りがたう聞えしことども、の(一)たまふへしことども、今日の夜の御心ばへにこそ、愈限なく覺ゆべけれ。大將の朝臣の悦なども、言ひてまし。なほさまぐに心憂くこそ思ほゆれ。此の聞ゆることどもは、然思はましや。如何に」と宣へば、俊蔭女「げに理と聞えさすべき、疎ならぬことをこそ、(二)なにとか啓し侍らましか、とより外にと思ひ給へしなむ。まことに、琴はあまた侍りともおぼえ侍らぬを、りうかく、ほそをばかりこそ。それは大將をりくに仕うまつりしを聞召され侍らむものを」と聞え給ふ。右のおとゞ心安からず見奉り給ふ。朱雀「左のおとゞの心ばへいかに、(三)なほたゞならじ

〔語釈〕
(二)「處せかる まじくとて」歟
(四)「御」は衍なるべし
(七)「給かくし」は「給へかし」歟
(八)「忘れねど」歟
(九)涼

〔考異〕
(一)昔時々—昔も時々
(三)こよなく—はかなく
(五)よう—かう
(六)はかぐしうも—「も」ナシ

おはして、朱雀「あさましく、覺束なくもてなして、年頃も、自らこそとてなむ。今日は、昔(一)時々聞かまほしきことも飽かずなりしかば、ところせかましく(二)とて車など物せしかど、効なくて止みにき。今は心安きさまにてだに、如何にと人知れぬ志もありき。こよなく(三)思ひおとされたるばかり、世にくち惜しう妬きことはなくなむ。よしや思ふ心のうちこそ及ばざらめ、易かるべき物の音だに。身の爲は、かくもてなさるゝこそつらけれ」と宣はすれば、内侍のかみ、俊蔭女「いとも畏き仰せごとを、明け暮れおろかならず思ひ給へながら、年頃は、宮、わか君たちの御事を、とかく見給へし程にこそ、時々もえ參り侍らで。御(四)琴は、いとよう(五)聞かせ給ふべかりけるは、ほれぐしうなりにて侍れば、はかぐ(六)しうも侍らじ。如何に侍らむ」と聞え給へば、朱雀「いとかしこくも宣へるかな」とて、「かやうになむ教へつる」とて引き寄せてきかせ給(七)かくし。かのほそをの曲の物「今三つ四つは」とありしも、更になむ忘れ(八)ぬと、(九)中納言の朝臣、「七月七日の夜、また聞

はぬを藤壺、中にも勝りたる二人を、いかで宮、(一)二の宮に奉らむ、容貌はまさるもまた有りなむ、小くてさまぐ\をかしく、(二)宮たちもてなし給ふに、嵯峨院さへ、「一人は院にさふらはせむ」と宣ふを羨ましくおぼして、二の宮の、御簾のもと近くおはするに、あて宮「かの笙の笛吹くは東宮に(三)奉らむ。横笛吹くは我得てむ」と大將に宣へ」と聞え給へば、大將の居給へるに、はた斯くと宣へば、仲忠「いとよく侍るなり」と聞え給ふ。一院の(四)五の宮六の宮、「我も得むとするなり。いかでか」と宣へば七の宮、「然ば、こゝに得むとしつるものをば不益なり」と(五)宮、「然ば、見てやあらむずるや」と宣へば、仲忠「かの今四人さふらふも、いとよく侍り。それらをも」と申し給へば、「いな、それは舞もえせず、惡ければ、辛きなり」と宣ひて、かたみに幼くおはするどちぞ宣ふ。院の宮たち、あるは「上に申さむ」など宣ふ。院の上、いづれともなく美しと見奉り給ふ。

かくて日暮るゝ程に、一院御床より下りさせ給ひて、内侍のかみの几帳のもとに

〔語釋〕
(一)宮は東宮
(三)あて宮が
(五)二宮歟

〔考異〕
(二)をかしく—をかしくて
(四)五の宮—「の宮」ナシ

㊟朱雀院、嵯峨院琴の祕曲を盡さんことを俊蔭女に迫る。俊蔭女の煩悶。

をつけて、見興じ給ふ。御階のもと近くて、「更に、さばかりの程にて、かく舞ふなし」とめで給ひて左右大臣、衵脱ぎて賜へば、御子たち、殿上人、同じく脱ぎかけ給ふに、舞ひさして逃げてゆけば、「かれ留めよ」と召すに、恥ぢて參らねば、人々興じ給ひて大將に、「誰が子ぞ」と問ひ給へば、仲忠「しか〴〵の者どもの、兄弟の子どもにて侍り。鄙びて、(一)斯くまかでつるなめり」と啓し給ふ。宮たち、上達部、「宜なりけり。時持は、いと淸げに侍りしものなればにこそありけれ。聲いとかしこく出で侍りしものなり」と申し給ひて、召せば、參りたり。仲忠「笛なむよく吹く」と申し給へば、「いとをかしき事かな」とて賜ふ。四人ながら(二)いとをかしう、吹かぬ笛なく吹きたてて、まだ小きも、顔かたち愛敬をかしげにて、かゝる才をいと美しくすれば、院の宮たち、我も〳〵と、得むと宣へば、左のおとゞ東宮の御弟の宮たちも、かゝる事するを、然しもあらぬをだにもてなし給ふ、(三)二人をだに、と思ひ給へど、同じやうなる宮たちの、乞ひ領じ給へば、えともかうも宣

〔語釋〕
(一)田舍形氣にて恥かしがりて迯げたるならん
(三)せめて二人だけも此弟宮たちに奉りたしと

〔考異〕
(二)いとをかしう―いといとをかしう

〔語釋〕
(三)正賴の心
(四)さがのの孫ども也

〔考異〕
(一)かみの—「の」ナシ
(二)裳の—「の」ナシ

丗 さがのの四人の孫人々に愛でらる。

几帳のほころびより御覽じて、いと美しとおぼす。内侍のかみ(一)の樣態、細やかになまめかしう、あな淸らの人やと見えたり。たゞ今二十餘ばかりに見えて、裳(二)の裾にたまりたる髮つや〳〵として、すそ細からず、又こちたからぬ程にて、引き添へられてゐざり入り給ふを、左のおとゞ、几帳さし給ふまゝに見給ひて、(三)いといみじかりける人かな、年の程大將の妹といはむにぞよき、仁壽殿の女御には、樣體けはひも勝り給へり、昔の心ならましかば、かゝるを見過さましや、と妬うおぼえ給ひ、辛くおぼしたり。

この(四)四人の童、一人はかたち、色いと白く美しげにて、舞も勝れてかしこくするを、御前よりはじめて、「彼はいとをかしき童かな」と興じ給ふ。院、朱雀「いと小くて、かしこく舞ふものかな。彼、こゝに召し寄せて、樂も靜に仕うまつらせよ」と宣ふに、左のおとゞ、正賴「四人はこの家に侍る童なり」と啓し給へば、朱雀「いとをかしく整ひて、いかで斯くあるらむ」と宣ふ。御子たち、御方々、これに目

御車寄す。四位、五位殿上人、階よりおりて、牛かけて寄せたり。一院、朱雀「かの車、巽の隅の勾欄はなちて寄せさせよ」と頭中將に宣はすれば、左右大臣さきに立ちて歩み給へり。右大將、犬宮の御車ひき給へり。右大將、右のおとゞ、几帳さしておろし奉らむとするに、「例の儀式あるを」とて御氣色賜はり給ひて、まづかんのおとゞ下り給ふ。次に犬宮の御車寄す。左のおとゞ手かけ給へば、次々の人おりて寄せたり。几帳、夕日の隙影より、内侍のかみ、紅の黑むまで濃き唐綾のうちあはせ一かさね、三重のはかま、龍膽の織物のうちき、唐のこま、羅かさねたり。地摺の裳、村濃の腰さして、唐の織物の、あか色の二藍かさねて、唐衣著給へり。犬宮、唐撫子のからあやのうちき一襲、きかう色の織物のほそなが、三重がさねの御はかま。内侍のかみ、ゐざりよりて、下し奉り給ひて、御衣ひき繕ひなどし給ひて、ゐざり入り給ふすきかげ、玉虫の巢よりすきたる樣に、あなめでたと見えたり。小き扇さしかくし給ひて、ゐざり入り給ふを、一院

〔語釋〕
（三）「桔梗色」歟

〔考異〕
（一）させ―ナシ
（二）給ふ―給ひ
（四）すきかげ玉虫の―すきかげ犬宮玉虫の

〔考異〕
(一)脇息とりて―脇息をとりて
(二)こゝばく―こくばく―そこばく

宮おろし奉り給ふ。右大將抱き奉り給ひて、几帳のさきに、童、こなたにも、裀、火取、薫物に、銀、黄金の壺二つすゑたるもの、(一)脇息とりて歩みたり。長とよのひ、髪長に一尺餘りたるが、容貌うつくしげなり。隙なくつゞきたる几帳、色色のうちき、裳の裾どものはづれたる、いとなまめかし。近き車どもよりも遙に見ゆるいとめでたし。左のおとゞ、几帳に添ひて、はつかに犬宮の御樣體を見給ふに、いみじく美しげにめでたう見え給ふこと、あて宮の兒におはせしにこよなう優り給ひて、あてになまめかしう、見驚くばかりいみじきものかな、(二)こゝばくの君だち、一二の宮ばかりこそは、品まさりては見え給ひしかど、まだ小き程に、いと斯うは見え給はざりき、これは、ゆゝしく變化の物と見え給ふ。樂の聲、御前の御子たちよりはじめて、彈物吹物、聲しづかに等しくて、おもしろきこと限なし。嵯峨院、御扇して、拍子うたせ給ふ。一の院、時々唱歌し給ふ。かゝる事又あらじと見え聞えたり。

（語釈）
（三）大宮の輦を俊陰女に用ひさせよ
（四）犬宮の事は我世話すべし
（五）誤りあらんか、一本「御かた」を「御くだ物」とかけり
（考異）
（一）心もなげに―心もとなげに
（二）ながら―給ひて

壺をうしろめたく思ふと、心もなげに、（一）一つにては皆狭げなりと御覧じて、かの東の放出の母屋、二間を、屏風立てて、「犬宮、内侍のかみは、こゝにものせらるべきなり」と宣はすれば、喜びながら（二）屏風立てしつらひ給ひつ。人々心ことに見給ふ。左のおとゞ、正頼「遅し。はや〳〵」と仰せらる。嵯峨院、「忝けれど、大宮の御（三）輦、内侍のかみ。一院のは犬宮」と仰せらるれば、承りて、右のおとど、いと花やかに行ふ。左のおとゞ、正頼「内侍のかみの御車寄せさせ給はむや。正頼、犬宮に物すべし。右大將の朝臣、思ふとも、身を二つにはえ分けじ」と宣ふ。右大將、（四）仲忠「こなたかなたに早々」と宣はすれば、蘇枋の裾濃の裳出だして、畫かき、縫物したる几帳ども、三十人のおとな取り續きて、童四人、綠のうへのはかま著たり。又犬宮の御方の人に、紫の裾濃に縫物して、唐組を紐にしたり。三十人、童の長これは少し劣りなる、なが〳〵とある反橋の上に、さし續きたる、いとをかし。まづおとゞ御かた（五）參りて、しもに、右のおとゞに讓り聞え給ひて、犬

㊂俊蔭女、犬宮樓を下る。
華の仰言。

〔語釋〕
（一）誤あるべし

裏には、誰かさふらはるらむ」左のおとゞ、正頼「大藏卿源朝臣、藏人少將信方、さては六位の男どもなむさふらふ」と啓し給ふ。車、東面をきはにて、西は三四町まで立てたり。次々の下人ども、路なく見ゆ。

午かぎりて、西のはじめに樓よりおり給ふべし。樂人も皆平張にあつまりぬ。一院御覽じて、右大將、左のおとゞに、朱雀「時やう〳〵なりぬめるは、いづら、遲し」と度々仰せらるれば左のおとゞ、頭中將、右近、藏人少將、こなたかなたにまかりて、「はや（一）とぞ仰せよ」と宣ふ。立ちて事の行事す。西の方の錦のひらばりより大鼓をうちて、靜にやう〳〵樂し出づ。八人の童、四人は孔雀の裝束す。四人は胡蝶。左右に立ち出でて、いとをかしう舞ふに、吹物、彈物あてて賜はす。宮たち、「手おそし」と宣ひて、吹き、彈き合せ給へり。院、大將を召して、朱雀「かの人々もはや物せられよ」とて、車よせて、かの西東の反橋に寄せさせて、一院の上は氣色おはする御心にて、多くの大臣たち、大宮方々に見せざるなるに、藤

む。内侍のかみの幼き人に琴教へて、今日もとの所へ帰り侍るを、かゝる序ならでは、聴きがたく侍るを、まことに御幸侍らば、参りてと思う給ふるを、例あらぬことならば、(一)びくなくや侍らむ。

とある御返事、

嵯峨承りぬ。こゝにも、まだ聴き知らねば、(二)ゆかしき人も侍り。兒のならひ給ふらむ聴かまほしくて、物し給へるに從ひてなむ、まうで來つるを、對面もおぼつかなきを、必ず御幸あるべし。例はありとおぼえ侍る。

と聞え給ひつ。(三)大將御むかへに參り給ふ。左の大殿、右の大殿、それより外は、ある限御供に仕うまつる。すなはちおはしましたり。太政大臣のおとゞ、次に參り給ふ。院の御子たち、この御腹の御子七所、淸らに美しげにて、五所は御かうぶりし給へり。二所はまだ童にて、うち續きて居給ひぬ。(四)一院は、淸らにうるはしく、そびやかにおはします。御覧じまはして、朱雀人々みな殘なく物するに、内

〔語釋〕

(一)「びく」は「びん」なるべし

〔異考〕

(二)知らねば—知らずなむ

(三)給ひつ—給へば

(四)居給ひぬ一院は—居給ひぬ嵯峨院は御物語御堂の御床の上にてし給ふ一院は

〔語釋〕
(三)嵯峨院が
㊅嵯峨院朱雀院御幸。
(四)船屋歟
〔考異〕
(一)言へる—言ひし
(二)きらきらしくて—きらきらしく—ナシ
(五)あらじかしそやかの—あらじはやかの

有樣かたち、帝と申すともきしろひ難くおほしたるを、少したけくおぼすに、今日の有樣、此處のつくり樣、人々のいみじう言へる、げにと思ひ聞え給ふ。未の時ばかりに、嵯峨院おはしましたり。右大將參り給ひて、御階に御車よせて、右の大殿、大納言三人、中納言宰相五所、源中納言、宮たち、いといかめしう淸らに、大人々々しくきらきらしくて、ひき連れておはします。七十二におはしませど、いと淸らに、若く、只今ぞ五十ばかりと見え給へる。御髮白からず、御腰すこしうつぶし給へり。いとよく笑ませ給ひて、嵯峨「いとおもしろき所と、昔見しを、ゆかしきになむ物しつる。かの池のふなやは、此度は、長ぞ高くなりにけり。いと哀に、たゞ同じやうなりや。我が見し同じ程を見し人あらじかし。山のそや、かの宮内の兼躬の朝臣有りける。覺ゆや」と宣はすれば、朱雀「然侍り。木ぞ高くなり侍りける」と申す。一院より、右馬頭なる人御使にて、朱雀右大將の朝臣の家に、わたりおはしましたり、と承るは、まことにや侍ら

欄の簀子にぞ居給へる(一)。太政大臣(二)のも、「院(三)の上のおはしまさば、參りて聞かむ」と宣ふ。一の院は、嵯峨院おはしましぬと聞かせ(四)給ひて、後に御對面あるべきにて、おはしまさむとし給ふ。東の對は、一院おはしまさむ、殿上、藏人所にせられたり。

明けゆくまゝに、御方々、南の方の池、中島、釣殿、坤の堂の方、左右の反橋、樓のさまなど見給ふに、限なくおもしろく、めでたしと見給ふ。北の方を見やり給へば、遣水をかしう落し、枝ざしをかしう、珍らかなる木ども、小松ども、遣水のこなたかなたに多かり。對などは、こなたには見えず。はるぐ〳〵と庭のたと(五)しへなく廣く面白きに、苔生ひ、紅葉の木ども見ゆ。藤壺見給ふに、大殿は、いかめしう上臈しう造りたることこそあれ、見所え斯うはあべきならず。かなたこなたを見遣り給ふに、いといみじく面白く見給ふ。(六)二の宮は何事をも思ほさねど、女御の君(七)は、東宮おはせねば(八)后にもなり給はぬを、心よからず思しゝに、大將の

〔語釈〕
(二)正頼の六の君
(三)嵯峨大后
(六)梨壺腹の皇子は何の感じもなけれど
(七)梨壺

〔考異〕
(一)居給へる—居ためる
(四)聞かせ—聞き
(五)たとしへなく—さま
(八)おはせねば—おはせず

き具して、御前仕うまつり給へり。儀式いといかめしううち續きて、三條殿の右大殿の宮、梨壺わたり給ひぬ。西の對なり、(一)かんの殿の人々も、みな坤の御堂の廂、渡殿にうつりて、西の對を嵯峨院、犬宮の殿上人、藏人所にしたり。藤壺、わか宮たち、寅の時にまかで給へり。大將、思ひかけ給はぬに、驚きたまひ、(二)俄に東の廂(三)四間に、南によりて二間を、一の宮の御方とおぼしたるを、一つにて中をへだてて藤壺のおはし所にし給ひ、次の二間を、庇かけて宮の御方おはす。內裏、東宮の殿上人、いと多く參れり。絲毛のになき御車、檳榔毛十二、たゞの二つあり。(四)一の宮、大宮の御方々の人々、かたへは釣殿にうつりぬ。藤壺の女御の、對かけたる渡殿などに、東宮の殿上、一間をわけてしつらひ居たり。南の廂の御階の東は朱雀院の宮たち、(五)御しとね、勾欄の端より西の廂は、嵯峨院、宮たち九所おはす。御裀、隙なくよそひ續けたり。母屋分けて、二つにしつらひて、(六)はしたてり。さるべき大將たち、おとゞばかりぞ、內にはおはす。(七)上達部は、勾

〔語釋〕
(一)「なり」は「なる」歟
(五)「御しとね」は衍文歟
(六)誤あるべし

〔考異〕
(二)驚きたまひ—驚きて
(三)四間に南に—四間を俄に南に
(四)一の宮—二の宮
(七)おはす—居給ふ

〔考異〕
(一)こゝばく―そこばく―こくばく
(二)乞食かたゐ―賤山がつ
(三)宮―この宮
㊅前夜より京極に集まる人々。
(四)なども―などとも
(五)檳榔毛合せて―びりやうげは合せて
(六)ひたしろ―ひたし人

儀式、心ことなるありさまを言ひ騷ぎ、「こゝばく(一)の限なき宮、殿ばらつくして渡り給ふべきことあり」とのよしれば、乞食(二)、かたゐまで「如何なる事ならむ。見聞かばや」と思ひ言ふ。

右の大殿の宮(三)、梨壺の御方、一つ所にとて、大后の宮、俄にわたり給はむとす。十四日の夜、嵯峨院の女御、大殿の御方々、おとな一人、わらは二人、御供にてわたり給ふ。御たちは、例の儀式にて、その車はおかず。南の方の山のかくれに立て並めたり。二御方の男君だち、姫君たち、御車ながら、「所もゆかし。かの降り給はむ有様、かくなども(四)見給はむ」とて十一人の御同胞、黄金造(五)檳榔毛、合せて十一、ひたしろ(六)にて、樓の西東のはし殿にむかへて立つ。大后の宮、絲毛の御車つゞけて、十四してわたり給ふ。西の御門より西の對に、人々、檳榔毛に乗りたるをばまづおろして、御車、中門より入れて、寢殿の坤の方の勾欄をはなちて、おり給ふ。儀式いといかめし。曉方なり。左大殿の君だち、いと多く、ひ

〔考異〕
(一)過ぎにし―そめにし
(二)わが佛え聞え―わが佛のきこえさせぬ
(三)馬檢所―馬見所―兩けん所

實忠 死にかへりおもひ過ぎにし(一)世の中のあかぬことこそ哀なりけれ
もし然るべくば參りなむや。
とあり。見給ひて、よろづの事より如何樣にして聞かせ奉らむと思ひ給ひて、
仲忠 悦びて承りぬ。(二)わが佛、え聞えさせぬ程に、いとも〳〵珍らしく、嬉しき事は、いでやけに、
年ふれど誰も忘れぬうき世にはなぐさむことの何かあるべき
まめやかに、世の中の哀に心細くおぼえ給へば、しるしばかり、幼き人に、月頃ものし侍りて、忍びたる所、侍りがたくも、あながちにてもと思ひ給ふるを、と聞えさすれば、(三)馬檢所の法師の心地なむし侍る。
と聞え給ひつ。
世に安からずのゝしれば、御方々の北の方たち、御女たち、宮たち、如何樣にてこれを聞かむと、おぼし給はぬなし。忍びてとおほせど、院二所おはしますべき

〔語釋〕
（一）正賴が
（二）あて宮が今上にねだりて
（三）早速行き給への意歟
（四）實忠

宣へば、正賴「さればよ」とて出で給ひぬ。

いとまめやかにむつかり申し給ひて（一）、御暇強ひて聞え給へば、今上「はや（三）。いとよかなり」とて、今上「出で（二）給ひなば、やがて彼處に物し給へ。萬の人の思はむよりは、大將の朝臣の思はむぞをかしきや」あて宮「みな人も聞き給はぬに、獨りものし侍らばこそ、さも思ふ人も侍らめ。大后の宮よりはじめ奉りて、おはせむには」と申し給へば、今上「それはさしもあらじ。げにかの宮おはせば、さあるばかりに、宮ぞ、ものし給はむ。よし聞かむ。さもあらじとて、また内侍のかみの琴きかぬ人は、世にはあらずやあらむ」と宣はすれば、藤壺、大后、必ずおはせむなど人知れずおほす。

（四）新中納言、今は人にもことに見え交り給はぬを、斯くなど聞き給ひて、

實忠「夜の御事ならば、忍びて參らまほしくなむ」承る。

とて、

〔語釋〕
(一)自分一人だけ
(二)御許容の御樣子はあり
(四)今上が
〔語釋〕
(三)など—なんど

正頼「こゝに斯く宣はすればこそ」と歎く〳〵參り給へり。居給ふまゝに、あて宮「まろを彼處にまかせて、たゞにあらむと思ひ侍りしを、かう離ちすゑ給ひて、むつかしき事をのみ聞き、有り難う聞かまほしきことを、誰も〳〵聞き見給へること。心に思ふことなく、あらまほしき目を見聞かむこそ、思ふやうなるべけれ。十五日、犬宮、内侍のかみ、樂して物し給ひ、院の上もおはして、かの手の限、さまざま彈き給ふべかなるを、后の宮もおはすべかなるに、(一)一人しも、斯く交らふまじく侍るなむ、いとあさましく侍る」と泣き給ひぬばかり聞え給へば、正頼「いと怪しく。げに有りがたき事を聞かせ給はゞ、いとよき事にこそ侍らめ。大后の宮も、必ずやおはしますらむ。時にのぞみて、あるまじなど人申さば、如何侍るべからむ。御暇は」あて宮「(二)上は御氣色は侍り。昨夜いみじう聞えしかば、知らず(三)なども宣はず。こればかりは、天下に宣ふとも、行かではえあらじ」と宣ふ折に、(四)わたらせ給へり。おとゞ、隱に居給ひぬ。あて宮「明日の夜さり、必ず迎へ給へ」と

らむこそ」とて一人とゞまり給ふべきならず。東の廂には、宮、内侍のかみ、院の女御の御局とおほす。左の大殿の大殿腹の男君だち四人、宮ばら七人の男君だち、「いとむづかしう責めらるゝを、然りぬべからむ物の間に」と切に覺しつゝ、せめ聞え給へど、あるまゝに、逃れ聞えざるべき方なきまゝに、仲忠「明きたる方なきを如何せむ」と聞え給ふ。

かゝる事を藤壺聞き給ひて、左のおとゞに、あて宮「只今、みづから聞ゆべき事なむ」と聞え給へれば、宮に、正頼「さればこそ。此の事ならむ。いかにか聞えむとすらむ。暇ゆるされ給ふべうはいとよし。定めて、聞召し忍びて車にてどあらば如何せむ。すべていと苦し。大事の聞きにくき事ありぬべかめり。然ばわたりなむ。(一)彼方にはものせらるとも、此方にはなわたり給ひそかし」と聞え給へば、大宮「然もありぬべけれど、久しくをかしき物の音も聞かぬを、さう〴〵しく思ふに、内侍のかみのひき給はむは、いかで、かゝる折ならでは聞かむ、と思へばなむ」

〔語釈〕

(一)あて宮は聞きに行くとも其方は行くなといふ意歟

〔語釋〕
(一)大后宮に

〔考異〕
(二)給へるはなく—給ふべきなく

(三)大將—大殿

ぬ。大將の、何時にかありけむ、早う彈きしを、いといみじく世になく覺えし。ましてかの內侍のかみの彈きたらむ、いかで聽かでは、あるべきにもあらず。御供にて聞かむ」と聞え給へば、嵯峨「如何なるべき事にかはあらむ」とは宣へど、止り給ふべきならず。內裏の女御にておはする、此の大后の宮御腹の若宮も、承香殿「いとよき事なり。こゝにも聞き侍らむ。必ずおはしませ」と聞え(一)給ふ。女一宮は、女御、男君たちのかぎり七所、二の宮とおはすべし。源中納言、かの七月七日のことをさへ、睦しき御中らひに聞え物し給へば、我も〳〵、とまり給(二)へるはなく、おはすべし。御供の人までは、居べき所なし。寢殿の西の廂に大后の宮、北の廂には大殿、大宮、その御腹の女御の君、今の女御はなち奉りて八所、大殿の腹の女君だち五所、母上わたり給ふべき方なり。かく御方々、我も〳〵と宣へば、「大將(三)くるしう宣はむものぞ」と制し聞えさせ給へば、「あぢきなき事なり。然るべく御暇得給ひて、聞き給はざらむにより、世に聞きがたきことを聞き侍らざ

(語釋)
(一)以下仲忠の心
(二)斯樣々々と朱雀院へ申上げたらば
(三)「きこえ申して」は「聞えありて」歟、一本「きこえ給ひて」
(五)誤あらんか
(六)「うるはし」は「うるはしく」歟
(八)「家」は「我」歟、自分の分として紫檀の濱床をつくらせての意なるべし
(九)「たり」は衍歟

(考異)
(四)よりこなた―よりはこなた
(七)ながら―ナシ

朱雀院は、大將に、必ずかの日行かむ、ことゞしからず、中々知らぬやうにて(一)物せられよ、騷がしきやうなり、右の大殿の、迎にもぞとてあると思ふなり、と仰せられけるに、又嵯峨院返す〴〵忝く仰せられしを、然など啓し申さんに、(二)人たゞ便なく言ひなしてむ、おのづからきこえ申して(三)、然らば然りと思はむ、おはしまさむ様の用意せむとて、治部卿集の中にある、唐土よりあなた、天竺(四)よりこなた、國々のかみを(五)、その年頃の有様を、かの大將書かせ給へる屛風、例に似ず淸らに、うるはし(六)。皆ながら唐綾にかきて、緣の錦裏よりはじめて淸らなり。寢殿に二所ながら(七)おはしますべくして、御簾の帽額には、大紋の錦をせさせ給ひ、たかく捲き揚げて、御濱床に蒔繪して、家(八)も紫檀のを造らせ給ひて、黃金の筋やり、螺鈿摺りたり、珠入れたり(九)。大方の所の面白きよりも、御しつらひいとめでたし。

嵯峨院の大后の宮、「七十に餘りぬるに、萬の事聞き見るに、琴の音よきなむ他か

誦したる折侍らぬを、おほかたの聲、書講じ(一)侍りしよりも、聲の出づるかぎり、昔の詩ども誦し(二)侍りしなどは、すべて涙留められずこそ侍りしか」院、嵯峨「いとおもしろく、哀なる事かな。いかでこれを、思ふ様に聞くべからむ」中納言、涼「犬宮に、手の限、この二年をしへ調へて、此の十五日になむ、樂人ども集めて、左右と樂して樓よりおろすべく侍る。かの日興あることども侍りなむ」院の上、嵯峨「かの日こそ彼處に俄に御幸せめ。如何に」と宣はすれば、涼「ある者の申すは、一院の、かの日ぞ、彼處におはしますべしなど申すなりし。さやうに侍らば、さる御心せしめ給ひてこそよく侍らめ」嵯峨「如何は。九月九日、右大辨(三)に、さりぬべく文作らせて見むとてなむ、女の裝など(四)、少し物せさせよと、仰せたるを、二十くだりばかりは、少し(五)よくせさせよと仰せたるを、まづ然ばかの家の琴聞かむ。内侍のかみの(六)、いと聞かまほし。右大將いみじき人なり。天下におもしろく哀に有り難きことどもの留りたる家よ」など宣はせて、中納言まかで給ひぬ。

〔語釋〕
(三)季英

〔考異〕
(一)講し―そうし
(二)誦し侍りし―ずんじて侍りし
(四)など―なんど
(五)少しよくせさせよと仰せたるを―ナシ
(六)かみのいと―かみのこといと

〔語釈〕
(一)仲忠が
(五)「侍るには」は「侍るよりは」歟

〔考異〕
(二)けり—ナシ
(三)聞き給へし—聞き侍りし
(四)あがり侍らましかば—あがりましかば

おぼす。宮わたり給ふべし。内侍のかみ、犬宮の御方々の人々あはせて四十人、わらは下仕、例の扇、裳、唐衣、心ことにせさせ給ふ。犬宮、いよ〳〵ひきかへたる様に大人しくおはす。琴は、たゞかんの殿と同じさまに、これは今少し音は優りざまに弾き給ふに、今は限なく、この世に思ふ事なくなりぬとおぼす(一)。程は八月十日ばかりなりけり(二)。

かくて源中納言、嵯峨院にまゐり給ひて、「みだり脚病いたはり侍るとて、石山などにまうで侍るとてなむ」と御物語申し給ひて、「云々して、いみじう世になき物の音を聞き給へし(三)。珍らかなるまで、哀にかなしく侍りし。はじめよりは、いま少し心すごく、まだ聞き給はぬ音どもの侍りしは、なほ祕したることや數多侍らむ。いかでこれ聞召させ侍らむ。今すこし高く響きあがり侍らましかば(四)、いといみじうなむ侍るべかりし。官位のこよなく侍るには(五)、かく世の中の上下にすぐれたる、物の上ずに物し侍るなむ、めでたき事に侍る。公の御前などにて、打解けて

〔語釋〕
(二)仲忠が
(四)俊蔭女の心
(五)京極より本邸に
㊟仲忠樓を下りて三條邸に歸らんとす。其の準備。涼、嵯峨院に參りて七夕の夜の嘯をなす。兩院大后宮以下爭うて仲忠が樓を下る當日京極に參會せんとす。

〔考異〕
(一)顔の—「の」ナシ
(三)朔日にもなりぬ—つごもり
(六)給ふ—給ひつ

のせよ」とて、やがて殿にとゞめさせ給ふ。(一)顔の清げに愛敬づき、らう〳〵じきこと、殿上童とも言ひつべし。夜うさり召し出でて、笛賜はせて吹かせ給へる、田舎びず、いとになく吹く。四人ながら皆様々にいとよく吹きたり。いと嬉しきものかなと思す。舞せさせ給ふ。ましてこれは、明け暮れ心に入れたりければ、になし。人々、(二)「いとをかしくさふらひける者かな」と興じ申す。

八月(三)朔日にもなりぬ。(四)九月上の十日の程に(五)帰り給ふべきに、楽人召して、西東にて遊せさせむ、と思して、今よりかづけ物の事などせさせ給ふに、この童べのかたち整ひて、いと思ふやうに舞するを得給へるにつけても、見給ひける夢悲しうおぼす。今四人の人々にあてててせさせむと思す。いかめしき御莊どもに、きぬども召し集め、あや、織物、羅など殿中のしつらひ儀式忍びていといかめしう、然べき人々に仰せ給ふ。左の大殿の所々にも聞かせ奉り給はず。童べは今四人加へて、とのべさせ給ひて、夜晝しらべ整へさせ(六)給ふ。八月十五日と、この御急ぎ

〔語釋〕
（一）汝は暫時京に留れ
（五）「なりけりと　殿の内」なるべし

〔考異〕
（一）あり給ふ—おり給ふべき有樣次の卷に見えたり
（三）知らぬ—知らず
（四）かふる—かゝる
（六）急ぎ—ひとり

畫詞　こゝは寢殿。時宗童べ四人。御前にあり、大將殿、もの宣ひなどす。

こゝは犬宮の樓よりおり給ふ。（一）

大將殿より、紅のうちき一襲、織物の御さしぬき。仲忠「これは、かゝるありきに入るべきものなめり」と宣はす。きぬ廿匹。仲忠「これは、國にあらむ人に物せよ」とて。仲忠「馬につきたらむ者に」とて調布三十匹賜はす。守のもとに、やがて殿の下家司そへて、くだし遣はす。仲忠「人をやりて、暫もあれ」（二）と宣はすれど、時宗「かく限なきことを、とくまかりて、聞かせ侍らむ」と申す。時宗「年頃、田舍に、むづかしき目どもを見、又かくいみじう言ひ懲ぜられて、泣き歎きて侘しかりつるに、覺えぬ物どもを賜はりたるよりも、まだ知らぬ（三）、清らに光り給ふやうなる殿の御容貌を、けぢかく、今は吾が物と見奉らむとするは、いみじき吾が幸かな。禍は、忽にかふる（四）ものなりけり（五）」殿の内めでたきを見るに、物覺えぬまで嬉しくて、急ぎ（六）まかでぬ。童はさるべき人におほせ給ひて、仲忠「よく勞はりも

はすべかりしほど、あさましく、後の人に横樣に越えられ侍りて、賜はらずなりにしこと」ども(一)申せば、仲忠「いと易きことなり。今の(二)御代にも、(三)出で立ち申さばものしつべきを、今はあぢきなし、ことざまにて(四)、いとよく顧みむ。子ども、京にあらば、家をも顧みさせむ。誰も〳〵、時々はかよひて住めかし。このわたりにも、さるべき(五)所ものせさせむ」と宣へば、時宗「限なく畏きこと」と申す。仲忠「苦しからむ。物などまづ(六)食へ」と宣ひて賜はす。仲忠「守のもとには、家もとよりよく造りて取らせ、うちのもの、數によりて取らすべき由言ひにやらむ。又かの國に、院方より領ずる所あり。今よりは、時宗に預け知らせむ」と宣ふ。かんの殿、かいねりの綾のひとへがさね、織物のうちき、はかま、一くだり賜はす。又きぬ十匹、俊蔭女「これは、かの國にあらむ人々にものせよ。必ず〳〵京に上れ。さてのみなむ、思ふやうにあるべき」となむ宣はす。限なく、返す〳〵悦び聞えさす。

〔註釋〕
(一)「ども」は「と」歟
(三)申立てたらば
(四)他の方法にて目をかけてやるべし

〔異考〕
(二)御代にも出で立ち申さば―御代には出で立ち申さば
(五)さるべき―さすべき
(六)物などまづ―まづ物など

〔語釋〕
(一)「と」衍文歟
(二)「ものしたれ」にて此儘我方に仕へよの意歟
(三)これはさがの娘どもなるべし。此處脫文あらんか
(五)「その妻は」歟

〔考異〕
(四)いと―ナシ

ねざりつる。いとこそ嬉しけれと、(一)かくてものしたる(二)」と宣はす。(三)年若く、いとかたちある下仕にてぞ仕うまつりける。今も田舍びず、由々しく、かはらかなる顏つきして、髮、細脛ばかりにて、時宗「かのあらぬ若き人々具し給へるが、みなみな率て參り侍りつる」仲忠「いとよきことなり。さやうの人々の、いとよう仕うまつりつべき君だちものし給ふ」と宣ひ、かの童べ召せば、時宗「然さふらふ」と申せば、仲忠「なほよし。此處にまうで來」とて召し出でて御覽ずるに、いとをかしげにて、白くらう〳〵じき顏したり。仲忠「(四)いと思ふやうなる者どもかな。遊はすや」と宣へば、時宗「二人は、笛をなむ吹かまほしうし侍る。いま二人は、舞をぞ好み侍る。さやうの事もし侍りぬべしとて、かくいと生憎に、いみじき目をも、さま〴〵に見侍りつるなり」仲忠「いとをかしき事かな。みな一所に置きて、さまざま好むらむ舞もせさせむ」と宣ふ。時宗「かの近江掾に侍りし時持が妻は、朱雀院の御時、采女をなむし侍りし。(五)そが妻は、上人と官なり侍りて、かうぶり賜

（語釋）
（一）俊蔭女
（二）病氣が もう直るか 直るかと
（三）俊蔭女が
（五）尋ねて來たる汝等を
（六）我々に對して窮屈に思ふな
（考異）
（四）人には―人にも
（七）物―ナシ

病つきにけるに、子の許に往かまほしけれども、此の殿の、（一）たゞ一所幼き子を持給うておはしける、え見捨て奉らで、（二）心地今や歇む、と思ひ居りける程に、京にてはかなくなりにけり。申しけることども、今日聞き給ふにつけても、思ひ出でられ、胸ふたがり、悲しくおぼえ給ふまゝに、（三）つく〴〵と涙のみこぼれ給ふ。しばしためらひ給ひて、大將にも、昔聞え知らせ給へりければ、然なりと思すに、いと嬉しとおぼす。しばしためらひ給ひて、俊蔭女「盡きせず哀なる、昔の人のことを物し給へば、いと悲しくなむ。何かは、昔の人のこと、覺束なからずものし給へばなむ。委しき事は（四）人にはな宣ひそ。たゞ、かの人の代とは、とかく（五）尋ねものしたる人をこそ、同じ事に思はめ。（六）此處をも、など（七）物心苦しうあつかひ立て給ふ。吾が大將にぞおはすめる。うれへ歎きたる事ども、いとあやしき事なり。忽に、かの攝津守のもとにも言ひやらせ給ひてむ。とく物し給はで、今まで然りけること。かの人々、何處にとも、はか〴〵しう聞き置かずなりにしかばなむ、今に心には思ひながら、え尋

連れて捿み侍り。その子どもの童べ四人、いときたなげには侍らぬ、そこに侍るものども、身の程の樣などおとなしく、(一)程につけては、京の殿ばらに奉らむと申すを、去年までは親の服に侍りしかば、籠めすゑて侍りしを、(二)國分寺の童べのあきたる事のさふらふなど申しき。此の童べを法師ほしがり侍りつるに、(三)親侍りし時、俗になさむと、母にて侍る者どもの申しき。これらが事を國の守に言ひなどし、(四)何かとむつかしう申して、僧の方よりも、公がたにつけて、責め勘じ、(五)家を亡し侍り。これらが母の申すは、「おのづから、某侍らむ。此の母、(六)若くより宮仕を仕うまつりし、身の程あやしきをも知らず、(七)故殿の御はての世までさふらひて、子どもの顏をも、終にはか〲しく見侍らで、みまかり過ぎ侍りにき。我等のみ、殿をもえ知り奉らず、かく侘しくうれはしき事」いとも〱かしこくて、數多の世の御榮おはしましてなんど申すものの侍りしかば、泣く〱思ひ給へ悦びてなむ、斯くさふらひつる」と申す。かのさがのといふ女、いと哀に、

〔語釈〕
(二)國分寺に召使ふ童子に缺員ある由噂あり
(六)さがのをいふ
(七)俊蔭

〔考異〕
(一)おとなしく—おとなおとなしく
(三)法師はしがり侍りつるに—法師のはりし侍りつるを
(四)言ひなどし何かとむつかしう—言ひおどし何かとうべ〱しう
(五)勘じ—てうじ

てなむ、委しくは申し侍るべき。かく申し侍るは故治部卿のおとゞのおはしまし
し世に、さがの(一)(二)とてさふらひし、かのさがのが族にてさふらふ」と申す。かんの
殿、御几帳のほころびより見給ふに、十ばかりにて、げに見給ひし者なり。哀に、
げに當時おぼゆる人なり。さがのといひしぞ、末の世に、年いたく老いて、哀に
たゞ一人、大將の生れ給ふべきこと、急ぎありきしなりけり。俊蔭女「いと哀に思ひ
し人の子なりける。此の年頃、(三)この人の年若くてあらましかば、と思はぬ時なく
なむ。女などのある(四)と聞きしは、ありや」男「三人侍りし大あねは、なくなりさふ
らひにき。今二人さふらふは、近江椽よしむねの時持といひ侍りし、その同胞
の右馬允にて侍りし、姉妹、(五)年頃すみ侍りしを、一昨年、いとあやしく、二人な
がら亡くなり侍りし。男子二人づつなむ生ませて侍りし。此の參り(六)て侍るぞかう
と申す。男は、(七)嵯峨院の御厩の、(八)長門かけて侍りし者の弟の時宗といひ侍る、攝
津國にぞ侍る。かの近江に侍りし姪(九)ども、いとかう侍れば、去年より子どもひき

〔語釋〕
(一)俊蔭女が仲忠を産む時に世話せし老婢
(三)さがのが
(五)姉は時持の妻になり妹は右馬允の妻になりし也
(六)連れて來たるが即ちその子どもなりとの意なるべし
(七)私は
(八)御厩をあづかりて長門の椽か目などを兼任せる也。「みまや」一本「みや」
(九)姪は即ちさがのの女ども也、この男はさがのの弟と見ゆ

〔考異〕
(二)さがの…族にて―さがのせきとてさふらひしかのさがのせきが子にて
(四)あると―ありと

〔語釋〕
(二)かく申上ぐると申上げて下され
(六)主の男も
(八)此男が

〔考異〕
(一)といらふ然ば—といふさるべき—とこたふさば
(三)とり—ナシ
(四)はど—程に
(五)齊しく—齊しう
(七)笏に取りて—さしかざして
(九)せられつるぞ—せらるゝぞ

の御末の後か」といへば、門番「然。此の御後のおはします」(一)といらふ。男「然ば、「ふるき家司、御廚子所に、切にうれへ申すべきこと侍るとてなむ、昔この殿にさふらひし、下人なむ參りたる」(二)とこれ申すとと(三)り申し給へ。一生の君と仕うまつり、悅び申さむ」といふ。門番「斯くなむ」と申せば、大將聞き給ひて、仲忠「あるやうあらむ」とて、まづ寢殿なる人對におろさせ給ひて、我出で給ひて、仲忠「ただ此處に參れと言へ」と召し入る。悅びて、いとをかしげなる童の、長四尺に足らぬほど(四)、髮膕ばかりにていと齊しく(五)整ひたる、いと淸げに、裝束かせて、四人後に立てて參りたり。(六)これもいと淸げに裝束きて、扇笏(七)に取りて具したるさま、いとゆゑ〳〵し。年四十ばかりなり。北の廂にかんのおとゞ、大將の君もおはす。大將を見(八)奉るに、げに恐ろしきまで淸げに氣高うおぼえて、上らず。いと氣なつかしう、仲忠「此方や」と宣へば、上り參りたり。仲忠「いづこより物せられたるぞ。誰に逢はむと、ものせられつるぞ」(九)と宣へば、男「まづ、仰せられむ事承り

〔語釋〕

（四）今日尋ね來る人あるべしと俊蔭が告げし人

（六）今住める大將は俊蔭の子孫か

〔考異〕

（一）給ひつる—給へる

（二）かの—木の

（三）給ひしも聽き給ひけるよ—給ひけるを聽き給ひけるにこそ

㊅珍客。よしむねの時宗、老婢さがのの孫四人を携へて來る。俊蔭女の懐舊四人の孫を留めて雇用す。

（五）具したりつる—としたれたる—おしたれる人

む見え給ひつる。（一）此のなん風は、中に勝れておもしろき物にし給ひしを、（二）かの空洞より出でむとせし時、さては昨夜こそ、いさゝかかき鳴らしつるを、聞き給ひけるか。哀なる詩を誦（三）し給ひしも、聽き給ひけるよ。いみじう悲しうなむ覺ゆる」とて泣き給ふ。大將も聞き給ひけることと、悲しくて泣き給ふ。理なり。仲忠（四）「人の事、如何なることならむ。斯かるを見給ひける、と、思ふなむ、效はなけれど、いと哀に嬉しう」など聞え給ふ。御門には、つとめてより、然べき人々に宣ひて、仲忠「如何にもあれ、人の來む、斯くなむと申せ」と宣ひて、今日は寢殿におはす。

酉の時ばかりに、東の御門に、馬に乗りたる男、童四人具したり（五）つる人來て、下りて、向なる御厩にて、御門に居たる人に問はす、童「此の殿なむ何とか申す」といへば、門番「大將殿となむ申す」といふに、童「此の殿に昔より住み給ふ人や聞き給ふ」と問はす。門番「治部卿の殿となむ申し侍りし」と言へば、童「此方に物し給へ」とてみづから逢ひて、男「吾が佛。いと嬉しう、いらへ給へる」とて、男（六）「か

詩を誦し給へる、聞きしらぬ人だに、涙落さぬはなきに(一)、まして大將の、此の所にて誦し給へるは、聲よりはじめておもしろう哀なるに、御直衣の袖、まして絞るばかりになる。琴の聲、がくの聲、もろ聲にしみたり。盡きずおぼえ給へど音せずなりぬれば、あかで歸り(二)給ふ。道のまゝ、世の中いとはかなくも哀にて、紀伊國に年經給ひしなど、よろづ思ひつゞけられ給ふ。

大將もうち臥し給ふ。かんの殿も、琴に手をうちかけて、いさゝか寐入り給ふともなき程に、見給ふやう、「昔のものの聲の、さも哀に珍らしく聞き侍りつるかな。大將(三)も、おほん樂の聲も、哀にかなしうなむ。さて今日、御門に參らむ人、必ず召し入れて見給ふべき人なり」と治部卿の御聲なり。いらへ聞え給はむとする程に、醒めて、いみじう泣き給ふ。大將、まだ寢給はねば、あやしと驚き申し給へば、俊蔭女「いと哀なることをなむ見つる。かくれ給ひて後、「夢にだに見え給へ」と心細う侘しかりしまゝに思ひしかど、絶えてなむ見え給はざりしに、(四)只今かくな

〔語釋〕
(二)涼が
(三)「大將の」歟
(四)俊蔭女夢に父の告を聞く。夢のしらせの珍客を待つ。

〔考異〕
(一)なきに―なきを
(四)只今―今

〔語釋〕
（一）涼の心
（二）俊蔭
〔考異〕
（三）主の書―集
（四）知らぬ―おりて

り。響澄み、音高きことすぐれたる琴なれば、かんのおとゞ忍びて、音の限もえかき鳴し給はず。色々の雲、月のめぐりに立ち舞ひて、琴の聲高くなる時は、月、星、雲も騷がしくて、靜になる折はのどかなり。聞き給ふに飽くべき世なう、曉までも聞かむとおぼすに、夜半おほく過ぐるほどに、彈きやみ給ひぬ。
大將、次に横笛を聲の出づるかぎり吹き給ふ。おもしろき折にあひて、哀にすごう、これも世になく聞ゆ。聞き驚き給ひて笛は、（二）昔、われと等しうこそありしか、ことに好み給はずと聞くに、いとこよなうまさり給ひにけり、とあさましう覺え給ふ。曉になりゆく。空しづまり長閑なるに、（三）治部卿の主の書の中に、唐土より知らぬ國に到りて、（四）知らぬ道を行き給ひけるに、いみじう哀におもしろき所々に、四季の花咲きみだれ、ある所には恐ろしくいみじき容貌したるもの集りてあるわたりを過ぎ給ふとて、道のまゝに長く思ひつゞけて、哀なる聲を出だして誦し給へる、また歸りて後、家のさびしきを眺めて、時につけつゝ作り集め給へる、

く。萬の鼓、樂のものの笛、琴、彈物、ひとりしてかき合せたる音してひゞき上る。おもしろきに、聽く人空に浮むやうなり。星ども騷ぎて、雷鳴らむずるやうにて、ひらめき騷ぐ。かつは、如何にせむとおほえ(一)給へど、聽きさし(二)給ふべくはたあらず。御供なる左衛門尉なるものに、太刀を抜かせて聽き給ふ。樣々におもしろき聲々の哀なる音、同じ聲にて、命延び、世の榮を見給ふやうなり。(三)(四)わりなくても、斯くて聞かざらましかば、如何にくち惜からまし、と覺え給ふ。左衛門尉は、天を仰ぎて聽きゐたり。夜いたう更けぬれば、七日の月今は入るべきに、光たちまちに明かになりて、かの樓の上と覺しきに(五)あたりて耀く。雷はるかに鳴りゆきて、月のめぐりに星集まるめり。世になう芳しき風、吹き匂はじたり。少し寐入りたる人々目さめて他事おぼえず、空に向ひて見聞く。樓のめぐりは、まして樣々に珍らしう、芳しき香滿ちたり。(六)三所ながら、大將おはする渡殿にて彈き給ふなりけり。下を(七)見おろし給へば、月の光に、前栽の露玉を敷きたるやうな

〔語釈〕
(一)涼が
(三)涼の心

〔考異〕
(二)給ふべくはたあらず—給ふべきわざにあらず
(四)わりなくても—「て」ナシ
(五)あたりて耀く—あたりてり耀く
(六)三所…彈き給ふなりけり—ナシ
(七)見おろし—見いだし

㊂七夕に仲忠等星に手向けんとて琴を彈く。奇特。涼、庭にありて琴を聽く。

〔語釋〕
(一)歩障歟

七月七日、犬宮御髮すまさせ奉り給ふとて、樓の南なる、山井の尻ひきたるに、濱床水の上に立てて、內侍のかみもろ共におはす。それもすましためり。人も見えぬ方なれど、ほうせう(一)ひかせ給へり。乳母の君も、二人して、袙ばかり著て、童べ取り次ぎたり。御髮、心もとなしと宣ひし、長になり給ひにけり。御容貌も、變化のものの樣に、なりまさり給ふ。棚機祭、かなたこなたとせさせ給へり。內侍のかみ、棚機に、今宵の御供のもの、少しひきて奉らむ、靜なる所なり、とおぼすに、二方に、君だち人々、反橋に几帳ばかりを立てて出で居給へり。宵少し過ぐる程に、源中納言、狩の裝にて、馬にておはして、南の山の籬の外におはして、御座敷かせて、傘、かの木の空洞におき給ひ、頰杖つきておはす。氣色だつ風冷やかにうち吹く程に、かんのとの、役降女「いざや、御供彈き奉りなむ」とて、はし風を我彈き給ひ、ほそを風を犬宮、りうかく風を大將に奉り給ひて、曲の物たゞ一つを同じ聲にて彈き給ふに、世に知らぬまで、空に高うひゞ

（語釋）
（三）有の儘にもの意歟
（五）梨壺腹

（考異）
（一）なければ―なし
（二）おはしませばありありしうも宣はず―おはすればあり〳〵しうよに宣はむとおぼす
（四）御子に我―御子には我

とて、え荒く聞え給ふべき方もなければ、俊蔭女「此方おはしませ」とて御座うち敷きて、すゑ奉り給ひて、俊蔭女「何か御覽じつる」（一）と聞え給へば、いと靜に、皇子「物やは見つる」と聞え給ふ。いみじううつくしげに心深く、大人のやうにおはしませ（二）ば、あり〳〵（三）しうも宣はず。幼き心地、小き人々を見るに、まだかゝる人は見ず、いみじう美しう、また見まほしきかな、もろ共に遊ばゝや、と心にしみて覺え給へど、物も宣はず。犬宮は、宮の君にだに見えぬものを、あさましきわざかな、と恐ろしきまでおぼえ給ふ。御子に（四）、我、とりすゑて、御菓物まゐり給へど、ことにまゐらず。宮の君、若君、いと美しうて、「宮こそ、おはしませ。鳥の水に下るゝ見給へ」と聞え給ふに又や見べき、と氣色見給へど、さるべくもあらず。大將おはすれば、おはしましぬ。仲忠「あなかしこ。騷がしう、宮（五）や入りおはしたりつらむ、と思ひ給へつる」と宣ふもいとほし。夜さりまで、鵜飼などして歸り給ふ。大將は、殿の御送しておはしぬ。

〔語釋〕
(三)誤あるべし、「給ふと」一本「給ふに」
㊂六月の祓。

〔考異〕
(一)中にもいとよく—中にもとよく
(二)給へば—給ふ

はせ給へる、いとおもしろし。此方彼方の人は、泉殿に出でて聞く。殿の人々の(一)中にも、いとよく琴習ひたる數多あり。いづれと聞き別き奉らず。今、手の限をつくして、彈きとゞめたる折につけつゝ、琴をかへて彈き給ふ。靜なる音、高うひゞき出で、土の下までひゞく音す。哀に心すごきこと限なし。

六月暑けれど、樓の上は、山高き木どもの風、いみじう涼し。犬宮、白き羅、ひとへがさね著給へり。晦に、御祓し給ひに、二所ながら、御前いかめしうて、河原に出で給へり。右大殿の梨壺の御子も率て出で奉り給へり。大殿の御孫もまうで給へる程に、平張いと近し。御子君、若君と遊び給ひて、梨壺皇子「いざ、かの平張に往かむ」と宣ひて、御簾ふと掲げて入りおはします。犬宮、かんの殿の御傍に、三尺の几帳立てて居給へるに、さしのぞき給へる、うち見合せ給へば(二)、ふむ後とき給ふに、內侍のかみうち驚き給ひて、胸ふたがり、いみじきわざかな。大將の給ふと(三)思ひ給ひて、遠くわれゐざり出でて。俊蔭女「いふかひなきわざかな」

四月祭の日、葵かづらいとうつくしう麗しき樣にて、禰宜の太夫、かんの殿の御方に持て參りたり。かづけ物し給ふ。大將淸げなる四位、五位して、かんの殿の御簾につけさせ給ふ。あをき薄樣に書きて奉り給ふ。

俊蔭女　玉すだれかゝる葵のかげそへば心のやみもなかりける世を

大將御返、

仲忠　雲井なるかつらにかゝる葵にもむかはぬ程ぞくれ惑ひける

掛けさせ給ふにつけて、つきせず思ひ給ふる。あなかしこ。

と聞え給ふ。かたみに哀におぼえ給ふ。

五月節供、右の大殿よりあり。宮の御方の女御にも贈り給ふ。この殿のも、(一)心ことになくて參らせ給へり。君だち、(二)下仕までも、衝重いと淸げなり。例もかんの殿の御節供は、藏人ぞ參り給ひける。今は長雨がちなり。しづやかに降りくら(三)す日、時鳥かすかに鳴きわたり、月ほのかに見えたり。三所(四)ながら、靜に彈きあ

〔語釋〕
(二)「君だち」は「御たち」歟
(四)俊蔭女、仲忠、犬宮

〔考異〕
(一)殿のも—「の」ナシ
(三)降りくらす—降りてくらす

〔語釋〕
(二)正頼の一家と忠雅兼雅の一家なるべし
(三)未考誤あるべし

⑬樓上の二月、三月、四月、五月。

〔考異〕
(一)べき―べい

れば、「さう〴〵しかるべ(一)き年かな」と人言ふ。晦がたに、「子日せよ」とて、二(二)かたの人々あまた、山にありかせ給ふ。日のどかにて、樓より見おろしたれば、色々にわかき人々、わらは、下仕、裝束き、つぼ(三)よりもありて、此方彼方の人々歌詠みたらむかし。

二月　晦がたよりは、猶樓にてならはし奉り給ふ、山のけしき、色づく見るもいとをかし、とて。三月節供、例のいと清らにて參り給ふ。櫻の花、樺櫻の花、いとおもしろし。樓はたゞ櫻の花の中につゝまれたり。犬宮、一所まめやかにておはすればにやあらむ、いとこよなく大人々々しうなりまさり給ふ。鶯の聲いと近う、花に居て啼くを、いとのどやかに、その聲にあはせて彈き給ひつゝ、

犬宮　鶯の花にむつるゝ聲きけばこひしき人ぞ思ひやらるゝ

と彈き給ふを、大將いと哀に聞き給へど、かしづき給へば、いと恥かしげに物恥をし給へば、たゞにおはす。

ゆしう侍るを、二日はなほわたらせ給ふべく聞えさせ給へ」とあれば宮、女一「世の常ならず心ある人ならば、さりともみな思う給ふやうあらむ。なほ早わたり給(一)へ」と聞え給へど(二)寄り臥し給ひぬ。(三)女御の君より、御菓物を(四)中の折敷三つ四つし(五)てまゐらせ給へれど、まゐらず出で給ひぬ。

中納言、立ちながら對面し給へり。涼「女御の君おはすれば、如何に、さりとも御(六)對面はありつらむな」仲忠「さも侍らず。腹立たしければ、急ぎまかづるなり」(七)中納言、涼「くやしき事をして、その儘にまた目も見あはせられず(八)かたことにとりは(九)なたれにたり」仲忠「あやしかりける事を、うたてこそ憎き御心なれ」中納言、涼「かの國譲のこと(一〇)思し給はずや。帝をだに、事ともせられぬ、(一一)かのわたりは」と宣へば、仲忠「いでや、かの御心に似給へる(一二)こそは、いと憎きことなれ。あなかまや。まろがならむ様に、なほあるばかりぞ」(一三)などて出で給ひぬ。

左の大殿(一四)の厄年におはするとて、大饗せられねば、いま二所(一五)も、「何かは」とてあ

〔語釈〕
(一)踊り給へ
(二)仲忠が
(四)「中の」は「沈の」を「ぢうの」と書けるより誤れるなるべし
(六)女一に
(一一)正頼の一族は
(一二)女一が
(一三)「などとて」なるべし
(一五)忠雅兼雅も大饗を見合せたる也

〔考異〕
(三)女御の君より―女御より大將殿に
(五)三つ四つして―三まいして
(七)なり―ナシ
(八)られず―られて
(九)はなたれ―はなれ
(一〇)思し―おぼえ
(一四)大殿の厄年におはするとて―大殿は忌み給ふ年におはするとて

㊉新年。

〔語釈〕
(一)仲頼
(二)仲忠が
(三)「する」は「ある」歟
(五)女一宮
(六)誤あるべし、一本「えしも」を「えしとも」に作る
(九)「よろしからぬ様に」歟

〔考異〕
(四)あやしう恥かしう—あやしうくやしう恥かしう
(七)生憎に—あやにくく
(八)理と—理に

らきらし、(一)入道の君の御許、忠君僧都の御もとに、奉り給ふ。
正月朔日には内裏、院、東宮、大后の宮などに(二)参り給ふ。御前いといかめしう、御かたぐ〜の人々ものしうみ奉る。宮におはしまして、大宮の御方、つぎに女御君拝し奉り給ふ。女御、仁壽「わかうより帝を見奉る、などかはする。(三)この大将見るこそ哀ならねど、(四)あやしう恥かしう、命延ぶる心地すれ」宮(五)の御方に入りたまへば、逃げて女御の御方におはすれば、仲忠「こは何ぞ」と見苦しかり聞え給はすれば、二の宮、女二「犬宮おはするまでは見えじ、とて、去年の秋より斯くなむ。藤壺に宣ふらむもはづかし、とて(六)如何にえしも聞え給はず」と聞え給ふ。女二「げに、あまり(七)生憎に怪しきわざなり」とて、かく聞え給ふ。女二「身をつみ給はどとこそ。みには、思ひ聞えむ程は、思すまじくや。侍らじとあめるも(八)理となむ」大将うちわらひ給ひて、仲忠「仲忠こそ、うれへ聞えさせむと思う給ふこと侍れ。いかに聞えさせ給へればか、年の始に、(九)よろしからむ様に宣はすらむ。ゆ

るべし」と聞え給(一)へれば、女二「院の女(二)御殿、辛うじてまかで給ひて、とし返し給ふ(四)べければなむ。犬宮、御車ながら見む。此方に」と宣へれど、仲忠「御子(三)たちのおはするに、便なし」とて聞き給はず。

(五)國々の御莊より、節料に人の奉るきぬ、わたなど(六)かんの殿君たち、御許人、下にさふらふ人々に、例の御節料より外に、いといかめしう分ち給ふ。女御殿の御方に、いとうるはしうて、さま〲に奉らせ給ふ。三條殿の對におはする御方々、宮の君の御方(七)にも色々に奉り給ふ。內侍のかみ、對の宰相殿の御方(八)、なまめかしき樣にて、もの奉り給ふ。御使人々召して、はなだの綾のほそながかづけ給ふ。さま〲に持て出づれども、又同じごと、御前の庭のはる〲と廣きに、三百ばかり、樣々にをかしき物ども添へて、置き集めたる、例のありさまならず。御遊の具など、いろ〱、見所あり(九)調じたり。かんのとの見給ふに、大臣の所にだに、いと斯くはあらず、いかめし、と見給ふ。院、東宮の御方より得給ふ物、いとき

〔語釋〕
(二)仁壽殿
(三)年を越し給ふの意歟
(八)「御方にもなまめかしき」歟
(九)「ありて調じたり」歟

〔考異〕
(一)給へればー給へれど
(四)べければなむーべければ便なし
(五)おはするに便なしーおはすれば
(六)などかんの殿君だちーなどかんの君のーなどを上の君たち
(七)御方ー御許

誰にかは、かくばかりめでたき女持給へる。多からじかし(一)」「左衛門督の、いとよ(二)しとか」大將、仲忠「いで(三)、さりとも、え人知らじ」(四)など物語りあかし給ひて、あけぬ。仲忠「この(五)祿に、何事をか、まことは仕うまつらむ」涼「他事もなし。たゞに(六)、内侍のかんの殿の手のかぎり彈き盡し給へらむ、犬宮の習ひはて(七)給へらむぞ、いと聞きあはせまほしき」仲忠「いと易きこと」と宣ひて、涼「しばし」と聞え給へど急ぎおき給ひて、宮の御方におはして寢給へる間に當りたる格子をうち叩きて、

仲忠「すもりこのかへらぬ程は冬の夜の鴨の浮寢ぞわびしかりける

さても生憎き目を見るかな」とをかしき聲して詠みかけておはしぬ。聞き給へど女二「憎し」とて返も宣はず。まめやかに、月日に添へて、古こひしう宮もおぼす。中納言、いかゞあさましとて、物も聞え給はず。

十二月、すこし(八)あきらかなる折ありて、懲りずまに大將(九)わたらせ給ひつ。仲忠「年のはじめに獨り侍る(一〇)、あしかるべし。其方にと思ひ給へるは、うしろめたく(一一)聞え侍

〔語釋〕
(二)忠澄の娘が器量よしとか
(五)若宮を見せて下されたる禮に
(八)誤あるべし。一本「あきらかになる」
(九)女一宮へ

〔考異〕
(一)多からじ—おぼえじ
(三)いで—いらへ
(四)など—なんど
(六)たゞに—なほも
(七)はて—ナシ
(一〇)侍る—ゐて
(一一)うしろめたく—うしろめたう—うしろめたなく

🅒歳暮に仲忠節料を處々に頒つ。

〔語釈〕
(一)仲忠が
(三)涼が
(五)仲忠に語る也
(六)今宮が我を
(七)「空口」詐の意歟
(八)「をわたり」は「御わたり」歟
(一〇)女一宮のも、犬宮をいふ
異」
(二)給へり君ー給ふさまみや
(四)わざはー「は」ナシ
(九)美しげなるー美しき
(一一)御かたちー御様

仲忠「燈臺の燈の明きに、その御顔よ」と宣へば、涼「いかでか。然までは」とて抱きながら立ち給へる、つやつやとして、縹のいと薄き唐綾のうちぎにかゝりたる御髪、尾花の末のやうなり。いとなまめかしき容貌なり。燈のあかき方に置かくとて獨り居給へりける、こともなげなり。急ぎて入り給ひぬ。犬宮のいとをさなげに、兒の顔し給ひて、けだかう優れ給へる、げにこよなしかしとおぼえ(一)給へり(二)君、今宮「いとあざましく珍らかなること」とて腹立ち給へば、ついすゑて、逃げ(三)て出で給へば、今宮「物に狂ひ給ふなめり。萬の人を集めて見せむよりも、此の大將には、かゝるわざ(四)はし給はましや。目見合せ奉るや」と宣ふを、涼「云々なむ(五)悔りつる(六)。いみじう騒がれなむ。いとうたてし。常にそらぐち(七)もし給へるをわた(八)りにこそあめれ」とてうち嘆き給へば、仲忠「吾が佛。なほおはせよ。けしうはあらじ。さても、美しげ(九)なる御樣かな。宮のも(一〇)同じ年にこそ生れ給ひし。御髪長さまさり御かたち(一一)も同じ程を、いま少しばかり勝り給へりと、まろは思ふことなきを、

〔語釋〕
(二)「をつ〳〵」は「せちに」の誤歟
(三)涼の若君が
(五)若君が
(七)仲忠が

〔考異〕
(一)とてをつ〳〵宣へば―とかたみに宣ふ
(四)見給ひつれ―見給へれ
(六)すこしぞ長に―すこしろしろたけに―すこしぞこしたけに

奉りては、また犬宮ならべてゆかしうなむある。行末の人も、今然にぞ聞えむ」と言ひし。かたみに睦ましう見奉らむかし」とて(一)をつ〳〵(二)宣へば、涼「犬宮は、不意にこそ、たゞかたはらの御姿を見奉りし。内侍のすけは人に心傲せさせて物言ふさがな者なり。さても、母君(三)と畫かき給ふめりつるを」と宣へば大將、仲忠「それこそよかなれ。忍びて率ておはしてのぞかせ給へ」中納言うち笑ひて、涼「をかしの事や。しれものとこそ見給ひつれ(四)。さばれ賺され奉らむかし。伯父ぬしたちに、夢にも見せぬものを」とて、おきて、俄に入りおはして、畫かくとて居給へるを、傍より、ふとかき抱きて、燈の程、間半ばかり離りてついすゑ奉り給へる樣態、頭つき、げにいみじうあてに細やかなり。仲忠「いで〳〵」とておはすれば、いとあさましき心地し給ひて、立ちて、中納言の御方に歸り給ふ程、犬宮の御長にて(五)。髪は今すこしぞ長に(六)はづれ給へる。これは、樣態小ながら、大人にていみじう美しう、中々飽かず(七)おぼえ給ふ。涼「いとほし」とて、抱きて立ち給へば、

（語釋）
（一）他の事は教へても琴は教ふまじと
（二）雷に打ち殺さるゝ法もあれ、「いかづち」一本「かぐらち」
（四）我子は器量悪し
（六）以下涼の心
（九）我子が犬宮に劣るかも知れねど
（一〇）我子も
（一一）我子の犬宮をばよく君は見たりしものを
（一二）御娘を
（一三）涼の娘
（一四）「これ見奉りては」歟

（考異）
（三）にぞ—「に」ナシ
（五）とは—など
（七）我のみ—我らのみ—我とのみ
（八）少しも劣らめ—少しも劣らぬ—少しも劣らず

る事は知らせじとて、腹立たしくて、他事は教ふ(一)ともとてなむ」仲忠「あひなの御事や。萬の事よりも、かの琴彈かざらむをば何にかはせむ。いで、まろいかで見奉らむ。さらずとも、犬宮とひとしく教へ奉らむ」涼「な習はし給ひそ」仲忠「い(二)かづちの神にもうち殺され奉らむ。眞にぞ(三)とよ」中納言、涼「御傳はしも、けに必ず然るべきことならむ。これはわざとならずともあへなむ。まづ／＼、(四)顔いと、醜し。心劣りし給ひなむ」とは(五)聞え給ひながら(六)いみじう、我(七)のみになきものをと、思ひ給ふに、我もものを見知らずやはある、内侍のすけの言ひしやうに、げにあなめでたと、花やかなる事の、(八)少しも劣らめ、(九)なべては、このわたりにも、また斯ばかりの容貌はあらじ、(一〇)これもけしうはあらざりけり、今もや見せ奉らむ、と思ひ給ひて、如何にせましと思ひ給ふに、仲忠(一一)「まろがいと明らかに見給ひてしを、よかなり、吾が佛、なほ見せ(一二)給へ。内侍のすけの聞えしは、見苦しう、まだあやめも見えざりしをだに、「かの犬宮見ては、(一三)この姫君ゆかしく、(一四)これに

ち側(一)みて居給へり。(二)師の君をば、いとやんごとなく、大納言の御女にて、(三)心殊にして、我だに賄もせさせずと宣ひしものを、(四)いとほしう思す。中納言の君といふは、奥の方より、あるじ殿の御臺まゐる。童べも、これは又ことなり。いづれとなく淸げに目留まりぬばかりなり。大將後向きながら、仲忠「淸う、(五)人にもかくしひのやくはじ給ふや」と宣へば、中納言「帝よりや」と忍びやかに聞え給へば、仲忠「さてなにぞ。殿上も許し聞えむかし」と宣へば中納言、「いと辛きこと」とて皆わらひ給ひぬ。御臺まゐり、御菓物などまゐり給ひて皆まかで給ひて、(六)二所臥し給ひて中納言、涼「子持くさからぬ衾持て來」とて、かうの辛櫃より(七)しみかへりたる持て參りたれば、二所うち著給ひて、樣々にをかしう、怪しき御物語し給ひて、中納言、「いで、そのかんの殿の、手の限ひき給ふらむ、聽かせ給へ。(八)物習ひ給はむ程も、聞かまほしきものかな。(九)夜習ひ給はむ程も」仲忠「易きこと、さて御姫君には、何をかは敎ふる」涼「琴のはしを知らせむかし、と思ひしかど、中々な

〔語釋〕
(一)側見をして
(二)仲忠の心
(三)涼が大事にして
(四)「いとほしろと思す」歟
(六)涼と仲忠
(七)香をたきしめたる

〔考異〕
(五)人にもかくしひのやくは―人にはからしゝゐなのやくは―人にもはからくしゐのやくは―そちの君にいとかたじけなしやいき所もなくとかうしのやくは
(八)物習ひ給はむ―よにならひ給ひてむ
(九)夜―よる〳〵

〔語釋〕
（一）女一宮の
（三）帥の君も中納言の君も涼方の女房の名
（四）帥君が

〔考異〕
（二）食まずや—たばずや

涼「げにいみじう侍り。かゝるやうにぞ、しつらひたりけるや」と笑ひ給ひて、涼「まづ、御衣ぬがせ給へ」と取りて、屏風にかけさせ給へば、仲忠「いとあやしう、女房になし給はむや」とて中納言、涼「身にあまりたる事したらむ人ぞ、然はあらむ。擇屑の人は」など笑ふ〳〵、御前の長角櫃の火おほくおこさせ給ひて、御衣架にかけたる袿ども五つひき襲ねて、涼「これは汚れず」とて著せ給へれば、仲忠「例の物狂ほしさ。今大人々々しうおはせむや。さても、いみじき宮（一）の御心かな。さはれ、いとうれしき夜なり。もろ共にあかさむ。など疎くもぞ思す。例のまゝにてあらむかし。いづら目安くも、まだ物も食まずや（二）。（三）師の君、日暮るゝなり。御賄せられよ。中納言の君、おそし。いづら〳〵」と宣へば、帥君「いとわりなき世かな。然ば如何はせむ」とて、色摺目などもえならぬ、めでたく装束きて、帥の君、三尺の几帳ひき添へてゐざり出でたり。よき童べの、はかまいとつやゝかにて、燈よき程にとりなさせて、御臺は參らせ給ふ。大將は、（四）恥かしと思ふらむとて、う

〔釋語〕
(一)「いらめ」は「いかめ」歟
(四)「給へば」は「給ふ」なるべし
(五)「人よりも」は「いつよりも」歟

〔考異〕
(二)君の—まろの
(三)二の宮と—二の宮とは
(六)すくみにて—すくみて
(七)入り給ふに—「に」ナシ

㊈仲忠、涼を訪ひて強ひて其の子を見る。

川へこそいらめ、とて、強ひて歩み出でておはせしを思ひ出で給ふに、雨の脚よりもけに多う、(一)袖に涙の落ち給ふも、ゆゝしう覺え給へど、え念じ給はで、

俊蔭女　山はさえ川べのこほり雪しみてなみだの雨とふりし宿かな

とおぼえ給ふを、犬宮、「な泣き給ひそ。まろも念じてこそあれ」と聞え給へばおとゞ、俊蔭「宮をば、いと戀しうや思ひ聞え給ふ。いかゞありし」犬宮「雪の降るまで見奉らねば、いと佗しけれど、君の(二)「な泣きそ」と宣へば。宮は、雪をぞ山につくらせ給ひて、まろと二の宮と(三)竝びて見侍りしかし」と宣ふまゝに泣き給ひぬべければ、他事にまぎらはし給へば、(四)いと黑うつやゝかなる御衣に、薄蘇枋の、唐綾の御ほそながにはえて、淸らに、いよ〱美しげになりまさり給ふ。雪山つくらせ給ひて、雛遊などもろ共にして、見せ奉り給ふ。

大將、(五)人よりも疾く、宮にまかで給へるに、例の入れ奉り給はず。佗びて、源中納言の方におはして、仲忠「身もすくみにて(六)侍りや」とてたゞ入りに入り給ふに、(七)

空の氣色苦しげなり。かんのおとゞ斯かる折にあひし(一)手彈かせ奉り給ふに、いさゝか誤らず。今すこし(二)、もとの(三)御琴の音よりは勝れたりと聞ゆ。大將(四)も驚き給ふ。大將、かんのとのに聞え給ふ、仲忠「大人だに、心には得ながら、え斯うはかき鳴らさず。院の上、これをいかに限なく哀に見奉り聞召さむ。他人は、源中納言ばかりぞ聽き知り給はむ」と聞え給ふ。

畫詞 こゝは新嘗の日、大將殿の内裏へ參り給ふとて、世に覺あり、みめきらきらしき四位、五位、數をつくして參り集ひたり。寢殿と、西の對と、渡殿、北の廊かけて、居並みたり。

雪よるよりいと高う降りて、御前の池、遣水、植木どもいとおもしろし。一尺ばかりいと高う降り積みたり。人々、「此の年頃、いとかゝる雪は降らずかし。これに歩きたるをば、おぼろげならずかし」といふを、かんのとの、あはれ(五)昔かゝる年ありきかし、いと然るにはいかでか、と言ふをも肯かで、山へこそ行かざらめ、

〔語釋〕
(三)俊蔭女の手よりは
(五)以下俊蔭女の心、仲忠が幼かりし時の事を思へる也

〔考異〕
(一)あひし手―あひしらひ
(二)今すこし―「今」ナシ
(四)大將も―内侍のかみも

〔語釋〕
(一)「宮を」歟
(三)犬宮にさへ逢はぬに
(五)京極へ
(七)兼雅が
(九)「見參」歟

〔考異〕
(二)まぜなどに—まぜになど
(四)ともすれば—ともあれば
(六)獨臥をせらるゝに—ひとりふしものせらるゝに
(八)いとをかしき—いとしき

㊇犬宮の進歩。仲忠の驚嘆。雪の日雪山をつくりて犬宮を慰む。

かくて宮(一)に、大將おぼつかなく哀におぼえ給へど、限なき大事を夜晝思ひ給ひて、過し給ふ。月に四五日まぜ(二)などに、夜おはすれど、宮、女二(三)「こひしき人をだに見ぬに、見苦しの樣や」とて格子もあげさせ給はねば、仲忠「あやしき勘當かな」とて勾欄に居明かしつゝ歸り給ふ。右の大殿、さるべき折やとて、ともすれば(四)おは(五)すれど、かんのとの、俊蔭女「わかき人だに、子を思ひて、うちはへ(六)獨臥をせらるゝに、いと見苦しからむ」とて、さらに出で給はず。俊蔭女「對面し給ひては、あぢきなく、大事と思ふことあらむ」とてそのまゝに還し奉り給へば、いとまめやかにむつかり給へど、俊蔭女「大將の思はれむ程もむつかし」とて答へもはてさせ給はねば、腹(七)立たしうおぼえ給へど、大將の御ことかゝりたる事なれば、むつかる〳〵歸り給ひぬ。此方彼方の人々見聞きつゝ、「いとをかしき(八)御中らひかな」といふ。

十一月朔日より、いと遙に、げざん(九)とてわたらせ給ふほどに、便なしとて、寢殿にて、人げも遙なれば、さて習はし奉り給ふ。風かぎりなう烈しく、日荒れ、

〔語釋〕
(二)父に
(四)以下また俊蔭女の心
(五)父が今は如何なる世界に轉生し居るならん
(七)「うたをもよみ給ふ」は「たふとみよみ給ひ」歟、一本「うたをもよみ給ふは」
(八)「せかいはかくせさせむ」は「いかで八講せさせむ」歟、一本「せかいはかくせむ」又「せかいはかかせさせむ」

〔考異〕
(一)奉りて―「て」ナシ
(三)見給ふらむ―見給ふならむ
(六)給ひつらむ―給へらむ
(九)陀羅尼―たえず

落させ奉り(一)て生立ちける報にや、また知らず悲しくいみじき目を見けむ、昔より、我がうまれける日より、亡くなり給ふまで、思しけるやう、有りける事どもを、記しおき給へる日記は、肝絶えてかなしきこと數知らず、大將の御ありさま、公私の天下にて一の才かたち、心有様を見聞くに、すこし思ひ慰む心地すれど、これをえ(二)見せ聞かせ奉らぬ、悲しう効なきこと、如何なる人か、帝ご申すとも、さらぬ人も、八九十餘までの命ありて、めでたき末の世をも、あくまで(三)見給ふらむ、心憂く悲しくもあれ、と思ひつゞけて悲し。(四)(五)如何なる身とかなり給(六)ひつらむ、一生の間、(七)うたをもよみ給ふ、わづかに請ぜさせ給ひし法師しても、讀み講ぜさせ給ひし提婆品最勝王經、此處にして、日々に、かの御爲に讀ませむ、せかいはかくせさせむ、やうく年もねびゆく身に、かぎりては思ふ事もなし、(八)心靜にて、われも(九)陀羅尼念じ奉ることとせむ、すべて、萬に算からむこと、いかで此處にてせむ、など、來し方行末まで、哀によろづ思ひ臥し給ふ。

〔語釋〕
（一）「ふ」は譜歟
（二）「きゝつけて」歟
（五）「いとゞしう」は「いとどう」歟
（七）俊蔭をいふ
（八）以下俊蔭女の心
（九）父俊蔭が
（一〇）我國にありて

〔考異〕
（三）そよと—そよやと
（四）臥し—となむ臥し
（六）そよと—そよやと

み給へるやうなる折なり、折にあひたるふ（一）の、いと哀なるを遙にうち誦し給ひて、仲忠もろこしの山の山彦ひきつけて（二）そよと（三）いふまで響きつたへむ

臥し（四）給へれど、いとゞしう（五）聞きつけ給ひて、涙こぼれ給ふこと限なし。臥しながら琴に忍びやかに、

俊蔭女山彦はそよといふとも調べおきし人（七）なき宿を見るかひもなし

心に思ひ臥し給へり（六）。世（八）の中を見れば、言ひ知らぬ人しもあれば、才も時にあひ人々しければこそ、めでたう効あれ、人より殊に、才ものし給ひけれど、こゝに（一〇）して効ある事もなく、知らぬ世界に、年若うして行き傳はり給ひつゝ（九）、悲しき目のかぎりを見給ひて、多くの年を經給ひて、内裏はじめ、世の中のこと、飽かぬことを歎きて、年月をあかし給ひける程に、また頼もしく言ひ傳へおき給はむ人もなく、何事も、我身を人並々になすべきことも及ばず、年高うなり、心ぼそくおぼし給ひけるまゝに、これをまた歎とし給ひて、十六年のあひだ、多くの涙を

〔語釋〕
（一）「やく」は「せく」歟
（二）誤あるべし

將、「かの坤の山よりこそまかり歩きしか」と聞え給ふ。御硯ひき寄せて、

仲忠　山おろしの風もつらくぞ思ほえし木の葉もみちもやく（一）とみしかば

と書きつけて、おき給ふ心地もいと悲し。

俊蔭女　（二）ひきあてて峯だにわけし心には紅葉の關をこととやはせし

かたみに哀に思すこと限なし。犬宮も、楓の琴の上に散りおほひたるを、

犬宮　まろが彈くうらやましとや琴の上にかへでも

とばかり宣ひて、犬宮「恥かし」と宣ひて、末も宣はぬを、かんの殿、俊蔭女「如何にか。なほ宣はせよ〳〵」と宣へば、

犬宮　かゝる音をひかむとか

と宣はす。木の葉散る風のあらき音に、いとかしこく合せて彈き給へるを大將かなしう聞きおはす。

十月時雨に紅葉かきつくし、とゞまる木の葉稀なり。大將、かんのおとゞうち休

〔語釋〕
（一）空洞の住居の當時

㊆仲忠母子昔を思ひて感傷す。俊蔭女父の菩提を弔はんことを思ふ。

も、犬宮を樓のはしまで抱き奉り給ひて、乳母人々まゐる、抱き移させ給ひて、かんのおとゞの御手かけさせ給ひつゝ、おろし奉り給ふ。仲忠「人々あるものを」と宣へば、俊蔭女「斯くおはしますことだにいと畏きを、他人の兒ならば、斯くもおはしますまじけれど、院の御心ばへのいと忝く、萬におはしますに、効ありて、心ことに思ひ給ふる程に、いと不便に侍る」と申し給ひて、例の御送し給ひて、俊蔭女「物聞食さゞめる、いと〳〵惡きこと」とて、手づから然るべきさまに調じて參り給ふとておはしぬ。

かく心得給ふまゝに、いとかしこく、いさゝか苦しと思したらで、萬の折々に著う、曲の物彈き給ふ樣いと悲し。前栽も山の木どもも、紅葉し、櫨の紅葉今色つく、樣樣に面白く、風やう〳〵荒く、山の中より落つる瀧も、靜なる所にて聞き給へば、よろづ物の音にあひて哀なり。かんの殿、（一）むかし思ひ出で給ふこと多くて、俊蔭女「何方ぞや、このはゝ斯くてあるに愛しと宣ひしは」と宣ふまゝに、涙こぼれ給ふ。大

(一)ダ　は母上に御逢ひなさ　」

〔考異〕
(二)寐で－見て

(一)宮見奉り給へるか。「戀しうとも念ぜよ」と宣ひしを、今は忘れやし給ひぬらむ。御文も賜へかし」と宣ふまゝに泣き給ひぬべければ、仲忠「な泣き給ひそ。御文侍り。それには「よく習ひ給ふや。今はさらば、わたり給ひて見奉らむ」となむ侍りつる」と聞え給へば、いと嬉しと思ひ給ひて、いとよう彈き給へり。いと心苦しう、理なりとて、おもしろき畫など取う出見せ奉り給へど、ことに例のやうにも見給はで、心にしみて琴を彈き給ふ。月のいと明かに、空澄みわたりて靜なるに、山の木蔭、水の波、やう／＼風涼しくうち吹き立てたるに、いとおとなおとなしう彈き合せ給へるを、大將、かんのおとども、折も心ぼそくなりゆくに、涙落ちて、琴教へさし給ひて泣き給ふ氣色を、犬宮、「まろを宣へど、宮戀しくおぼえ給ふべかめり。母君も泣き給ふか」と内侍のかみに聞え給へば、皆いとをかしくなり給ひぬ。俊蔭女「苦しう思ひ給ふらむ」とて、俊蔭女「下へ」とて聞え給へば、犬宮「月あかきには、なほ寐で(二)久しう彈かむ」とて、夜中までおはす。下り給ふに

〔語釋〕
(一)女一が
(二)序に犬宮に逢ひ給へといふ事歟
(三)「たいらんに」は「たいどもに」にて宰相上等を訪ひたるなるべし、「一本「たいめんに」又「たいめに」

〔考異〕
(四)家司ども—家司ばら

㊅犬宮母を慕ふ。琴に出精す。俊蔭女、犬宮を労はる。

かたはらいたがりて入り給ひぬ。むつかる〳〵出で給へり。大將うらみ聞え給へば、女一「逆樣なりや。人の見聞かむ事(一)こそ恥かしき。いと戀しきに、見でや無期にあらむ」大將、仲忠「今、御物忌などの序(二)に。いとむづかし。人々ものし侍り。それに暇の入るべく侍りてなむ」女一「さて如何」仲忠「いとうつくしう彈き給ふべかめり」など聞え給ふ。

曉に右の大殿に參り給ふ。宮の君も、わか君も、めづらしがり悅び給ふ。大殿、兼雅「あさましく覺束なく、はては御返もなかめり。いと覺束なきをば、九日の物忌しに、いと忍びて物せむ」と宣ふ。仲忠「よう侍なり。菊の宴なれば、參るべく侍り」など聞え給ひて、たいらんに(三)、立ちながら「如何に」など聞え給ふ。つれ〴〵に見え給ふ樣なれば、殿家司(四)ども召して、菓物、さるべき物など、御方々に參らせ給ひて、急ぎおはしぬ。

かくて、檀の色々、いとをかしくなりゆくを見給ひて、犬宮「宮のも斯くやあらむ。

なしや。國々のなるべき文どもあなるものを。然なる大事あらむ日は、參らるべきものなり」いらへ、仲忠「走り參るべく侍る」朱雀「犬こそ、如何に琴習ひつべからむや」仲忠「然(一)。いと疾く心得つべく侍り」と啓し給へれば、いとよう笑ませ給ひて、朱雀「うつくしき事かな。內侍のかみのとゞめらるゝ手なめるを、皆彈きうつしたらむは、いと思ふ樣なるべきかな。さても、何時ばかり習ひ給ふらむ」仲忠「心につけてものし侍らば、疾くも果て侍りぬべけれど、幼くものし給へば、心靜に物を心得させつゝ侍るべければなむ。時のうつるに隨ひて、曲の物などは、習ふやう侍れば、またさる節會などに參るべく侍るべければ、(二)すが〳〵とも得」朱雀「珍らし。げに然もあらむ。いと面白かんなる。いかで見む」と宣はす。(三)女御の里にぞおはしける。

夜さり宮に(四)おはしたりけるに、(五)二の宮と遊び給ひて聞き入れ給はず。仲忠「院のうちに久しうさふらひて、苦しう侍るを、犬宮の御事も聞えむ」と宣へば二の宮、

〔語釋〕
(二)さつさと濟まして仕舞ふ譯にもゆかぬ
(三)「女御は里にぞ」歟
(四)女一宮の處へ仲忠が
(五)女一が

〔考異〕
(一)然—いらへ

とぞおどろ〳〵しう叩かせて宣へり。いといたく妬がり給ひて、

仲忠「こゝのへをいかでわけけむ(一)鹽づつのからき袂のくちをしき身は

よう(二)過ぎさせ給へり。つかせ(三)給ふべき所もなくなむ。まめやかには、今自らまゐりてなむ。

とてうつし(四)に乘せ給ひて、走らせ給へれば、御門おり給はぬに聞え(五)けり。

〔畫〕詞　こゝは内侍のかみの御方に、右の大殿より、白き色紙に、こと多く恨み聞え給へり。大人、わらは、居竝みたり。あざやかなる裝束ども、いろ〳〵縫ひたり。犬宮の御方には、御櫛匣殿より、縫ひかさねて、九日の御節供にもて來たり。大人、わらは、几帳そばめつゝ、物語讀み、遊したり。佛の御口、内侍のかみ、御堂にまうで給ひて念誦し給ふ。御前にて、年老いたる人名香とり散らして、著き居たり。

大將、内裏よりも度々召あれば、參り給ふ。まづ院に參り給へり。朱雀「いと覺束

〔語釋〕
(二)御立寄りなされてよい都合なりし
(三)御出下されても御坐りなさる處もなし
(四)うつし馬
(五)涼に追付きて返事を奉れり

〔考異〕
(一)さけけむ―わくらむ

㊄仲忠、朱雀院と女一宮と兼雅とを見舞ふ。

〔語釋〕
(一)「御遊がたきに參らせむと」歟
(三)今から御側におきたらば成長の後入内せしめん折必輕蔑せらるべしと
(五)「こそ」衍文歟
(六)「持たまひては」歟
(八)仲忠の樓を
(九)「からもり」は古き物語の中の主人公の名
㊃涼、樓の門前を通りかかりて歌を仲忠に贈る。

〔考異〕
(一)なるが—なりし
(四)内裏に—のちに
(七)なるが—「が」ナシ

人たちは、みな宮をば限なき物にこそ思ひ聞えさせ給ふめれ。中納言も、此の大宮、同じ程の幼き御子うみ給うたるを、いみじうかしづき物にし給ふなるが、(一)「いかで宮の御遊に參らせむと(二)思ふに、目に近きわたりの、(三)内裏に參り給へらむに、(四)定めて、こよなく思しおとさむこと」など宣ひながら、さる財の王の傳にてこそ、(五)世にあり難き笛の御遊の具など、めでたきを持たらひては、(六)「いとうつくしげなるが賜べまろに、といふにも見せじ。思ふ樣あり」とぞものし給ふなる」(七)など聞え給ひて、出で給ひぬ。

源中納言祓して歸り給ふとて、餘所ながら、車とゞめて見給ふに、(八)げに此の樓、いといみじき見物にぞあるがしと、涼「いとらう〳〵じく叩きて、かく聞えて、ふと來ね」とて、

涼　からもりがやどを見むとて玉ぼこに目をつけむこそかたは人なれ

と(九)思ひ給ふれば、まかり過ぎぬる。川原よりなむ。

〔語釋〕
(一)あて宮腹の皇子たち
(二)「入れたるさて」は「入れたまひて」歟
(四)東宮が仰せらるゝ
(五)「もと」は「本」にて手本の意なるべし
(六)本人の仲忠が
(七)誤あらんか
(八)「ふさい」は「ふさひ」にて氣に入る意
〔考異〕
(三)ひき〳〵にーかた〳〵に

え給へば、あて宮さて有り難くて、今より然敎へ奉りたらむこそ、いとになき傳ならめ。此の宮たち(一)の、遊にのみ心を入れたる(二)、さておはする事。かの梨壺の宮は、いとなつかしう、美しげにもかき給ひ、書も讀み給ふなれば、東宮敎へ奉らば、いとよくさやうにおはしぬべきを、皆人は、ひき〳〵(三)に思ひ挑まれておる身なれば、宮たち心に入れず、物習はし奉る人もなかめり」正賴「たい〴〵しう、誰か然は思ひ奉らむ。學士こそは、明暮參りて仕うまつらめ」あて宮、「いさや。まづいと怪しきは、「學士には讀まじ。大將、源中納言にこそ、書も讀み、何事も習はめ。かほ醜き人には向はじ。憎し」(四)とあめる、何でふことぞ。手ばかりは、大將のもと(五)あめりし、いとよう書き似せ給へるめりとぞ、御主(六)宣ふめり。書も何も、行政の中將のをぞかし(七)給ふ。いと心こはく、今めかしき人々のをのみふさい(八)給ふ、心づきなし。源中納言はしも、うち〳〵にきけば、今より哀に宣ふもあめり」など聞え給ふ。殿は、正賴「美しうもおはします」など聞え給ひて、正賴「この

〔語釋〕
(一)仲忠母子
(三)女一宮

㊂あて宮、父と犬宮、東宮などの事を語る。

(六)それ程にせずともよき事なるに
(八)仲忠に書を講ぜさせし時は仲忠が。藏開の卷にありし事

〔考異〕
(二)調を—「を」ナシ
(四)遊を—「を」ナシ
(五)こゝばく—こくばく
(七)をも—「も」ナシ
(九)千年を—せんねんも

今は彈きてむ」など語らひ給ふ。夜いとふけたる月夜の、はるかに澄みたるに、二所(一)彈きあはせ給ひて、犬宮に同じ調(二)を彈かせ奉り給ふ。唯同じことなるを、うれしう大將おぼえ給ふ。

あて宮、いみじう妬う、羨ましう思したるに、一の宮おはせぬをぞ、少し嬉しうおぼす。藤壺に左の大殿參り給へり。あて宮「一の宮何事を思すらむ。女御子おはせましかば、羨ましからまし」と聞え給へば、うち笑ひ給ひて、正賴「東宮のおはしますよりほかに、羨ましき事や思すべき。(三)宮、大將をば物とも見給はで、かの犬宮と明けくれ雛遊(四)を起き臥しし給ふを、(五)こゝばくの日頃いと然し(六)もあらずありぬべきを、內侍のかみ(七)をもひき離ちて物せらるれば、此處にも彼處にも、怨じ恨みて、右のおとゞは、さらがへり文をぞ書き通はし給ふなる。一日院の仰せられし、「わが文讀(八)ますとて有りし程は、一夜も(九)千年を暮らすやうに思ひたりしを、おぼろげにはあらじ。人々しう如何にや」など仰せられし。怪しき心に」など聞こ

たゞ日に二つ三つを数へ奉りつゝ、過し給ふ。

(一)日数添ふまゝに、前栽いと面白くなりゆく。犬宮、南の山の方を見出だし給ひて、獨語に、犬宮「宮もろ共に、え見せ奉らぬよ」と宣ふを大将聞き給ひて、いと哀とおぼして、仲忠「今、此の琴いとよく習はせ給ひてむ時に、わたり給ひて、もろともに御覧ぜむ」とぞ宣ひし」と宣へば、恥かしうて物も宣はず。夕暮、晝などに、内侍のかみも、大将もうち休み給ひて聴き給へば、琴を習ひ給へる、いとになく、いさゝか誤りたが(二)へる所もなく弾き給へり。二所ながら、いと悲しくゆゝしく(三)覚え給ふ。如何なる時にかあらむ、かんのおとゞに、犬宮「下仕を召し、ちやを呼ばゝや」と聞え給へば、召したり。(四)これは、ことに参らず。されど、(五)うつくしがり奉りて、猶まゐり習はしたりければ、哀とおぼして参らせ給ふなりけり。琴ひき居給へる御程のまだ斯かるを、大将哀に見聞え給ふ。侍従参り(六)て、侍従「御琴は弾かせ給へる(七)なりや」と申し給へば、犬宮「弾きつべし。宮などのやうに、側におきて、常に

〈語釈〉
(五)ちやが犬宮を

〈考異〉
(一)日数添ふまゝに―庭の山―こゝは庭の山―ナシ
(二)たがへる―たがへたる
(三)覚え―思ひ
(四)これは―こぞより
(六)参りて―さふらひて
(七)給へるなりや―給へるべしや

〔語釋〕
（三）「つぎに」なるべし
（六）未考

〔考異〕
（一）いな遊を―ひいな遊を
（二）御含嗽取りて―御ぞかいとりて
（四）居給へる―居給へりつる
（五）かけそ―かけ
（七）ごと面白し―ごといと面白し
（八）多くも彈き―多く彈きも

例の、夜さりの御臺は、樓に參らす。大將、仲忠「苦しくやおぼえ給ふ。然ばこよに、侍從ばかりは召さむよ」と聞え給へば、犬宮「いな。（一）遊をこそあらめ。なほこれを、宮の彈き給ふやうに、月の見ゆるまでこそ彈かめ」と宣へば、いと嬉しとおぼさる。御臺下仕四人とり續きて、裳唐衣著てまゐる。上﨟二人、さきに三尺の几帳さして、樓にのぼりて參らす。御まかなひは、例の大將仕うまつり給へば、俊蔭女「あな見苦し。中納言、侍從を」と宣へば、仲忠「何か」とてまかなひし參り給ふ。中納言は御（二）含嗽取りて參りておりぬ。犬宮の御方にも、おなじき、うるはしく裳唐衣著たる御乳母二人あり。大將とりつぎて參り給ふ。御菓物ばかりをまゐりて、ことにまゐらず。へきに（三）、大將の居給へる（四）所に、かたちよく、髮長くて、髮一もとに結ひたる男童の、よき程なる四人、かけそ（五）（六）にして、南の方の山の、木の根に造りかけたる反橋の方より參らす。少し下りたる勾欄に出でて參る。給にかきたるごと（七）面白し。かくて、多く（八）も彈き習ひ給ひぬべけれど、ことさらに、

〔語釋〕
(一)女一宮が心配して
(三)「とて」衍文なるべし
(四)彈正宮をいふ歟
(六)乳母といふ名はつけたれど
(七)女一宮が
(八)「給ひ」なるべし

〔考異〕
(二)御中—「御」ナシ
五)乳をたらしはしり參り—ちをたらしはしし參り

の君や。人々の御中(二)に、菓物めさせて、ひき散らさせ給へ。碁、雙六、例の打たむかし。うしろ(一)めたうおぼえて宣ひたりける、只今の樣にては、思ふやうに、と(三)て彈き給ふべく見ゆ」とて、げに御心地よげに仰せておはしぬ。侍從の乳母といふは、嵯峨院の御子の、兵部卿にておはせしが御女なり。此の侍從の、童にて御遊がたきなりし一の宮の御同胞の宮の(四)、いと忍びて、容貌いみじく美しげなれば通ひ給ひしに、(五)乳をたらし、はしり參りけれど、乳母とすべき樣ならずとて、名(六)はつきたれど、(七)宮のいとらうたきものにし給へ(八)けるなり。御返、

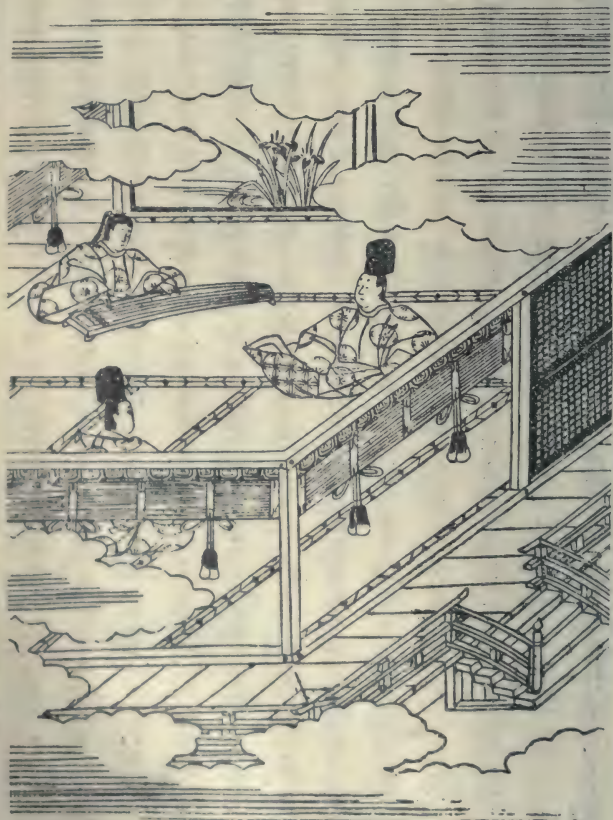
侍從聞え給ふめれば。御琴は、いとよく習はせ給ふにこそ侍れ。殿の御氣色もいとよげにこそ見奉れ。あさましく、雲居遥にてこそ、え承り侍らね。帥の君聞えさせ給へ。

と聞えつ。宮見給ひて、いと嬉しとおぼさる。女二「怪しの心ときめきや」とてうち置き給ひつ。

とあり。樓におはする程なりけり。仲忠「然るべき事あらむには、釣殿にて手鳴らせ(一)」と宣ひ置きければ、中納言といふ、よき若人なり、みやぎといふ童に御文持たせて、釣殿へ行かむとて、御許たちに、中納言「さても我らが(二)覺よ。人に異なりかし。かばかりの事を、手鳴らして(三)呼び奉らむずるよ」など笑ふ。釣殿の南の端なる帽額の簾の、長押の下に居て、わらはは勾欄にいたりて手鳴らせば(四)、大將おはしたり。見給ひて、仲忠「硯こゝにありや」中納言「さふらふ」とて參らすれば御返、

仲忠「畏まりてなむ。御氣色のいとおそろしう思ひ給へりしかば、え聞えさせで、覺束なさは更に聞えさせむ方なくこそ。如何とものせさせ給へるは、身に勝りてなむ。これに、覺束なきことは慰め侍りぬべかめるを、まことにいと哀にこそ見奉れ。なほも(五)、秋の夜をながめ明かさむことは(六)、とがなむつむや

と宣はせためるは、戀しう侍める身をこそつみ侍れ。

と聞えさせ給ふ(七)。やがて人の居たる所までおはして、さし覗き給ひて、仲忠「大貳

〔考異〕

(一)手鳴らせ—手をたゝけ

(二)我らが—わが

(三)手鳴らして—手たゝきて

(四)手鳴らせば—鳴らせば—たゝけば

(五)なほも秋の—なほも事ぞとも思ひながらに秋の—なほも〳〵事ぞとも思ひながらに—なほ事ぞとも思ひならず

(六)ことは—ことゝて

(七)給ふ—給ひ

にて習はし給ひしに、心には入れながら、程もなくて、乳母の膝に居ながら、手どもは彈きとりて、音をよく彈き傳へたる事は七つよりなむ、大人のごとくの音になりぬ、と宣ひし。これは、大人だに琴の音を、斯くうるはしうは彈き立つることは得せぬものを」と聞え給ふ。大將斯くおはするを、本意は叶ひぬべかめり、嬉しう覺え給ふこと限なし。俊蔭女「まだ彈き給ふべけれど、苦しくもぞおはする。今日はこれを」と聞え給ふ。三度と問ひ給はず、年月を經て、上手に彈きおきたりける人の、今人の彈くをきゝて心得るやうなり。年頃も宮の彈き給ふを、添ひゐて、彈かまほしうし給ひしものなれば、いさゝか苦しくも覺え給はず、御心に入れ給へるさま限なし。

又の日、宮より、侍從の乳母の許に、

女一「いとおぼつかなく、夜の間は如何あらむとなむ。習ひ給へらむや。見聞かぬもあやしうなむありけるを、夜や彈き給へらむ。いと戀しうなむ。ありさま宣へ。

〔語釋〕
（一）父が
（三）犬宮は
（四）「べかめりと嬉しう」なるべし。

〔考異〕
（一）ごとくの―ごとの
（五）給へらむや―給ひつらむや
（六）見聞かぬ―え聞かぬ
（七）ありけるを―「を」ナシ
（八）給へらむ―給ひつらむ

㊁女一宮侍從の乳母に消息して樣子を尋ぬ。乳母の返事。

琴取り寄せて奉り給へば、犬宮「雛に聞かせむ。いづら」と宣へばわらひ給ひて、仲忠「こゝに侍り」とて、御前にさしすゑ給へり。内侍のかみ見奉り給ふに、おはせしよりもいとこよなく美しげになりまさり給ひけり。(一)氣高う、清らにおはする(二)樣、程よりはいとこよなうおはしけり、と哀に見奉り給ふに、靜に、兒の御有樣ともなく、おほどかなり。まづ、かの治部卿の習はし奉り給ひしりうかく風を犬宮の、ほそを風を大將のにて、彈かせ奉り給ふ。(三)まづかんのおとゞ、二つながら取り寄せてしらべ試み(四)給ふ音の(五)、限なくおもしろし。大將、犬宮にりうか(六)く風奉り給ひて、彈きはじめ奉り給ふに、御手はいと小きに、彈き鳴らし給へる音、さらに心もとなからず、いとかしこく心え給ひてひき給ふ。片時に習ひ(七)はて給ひつ。次にまた、曲の物一つ教へ奉り給ふに、いと同じく彈き取り給ふに、かんのおとゞ、俊蔭女「然べきにて斯くおはすると見奉り給ふに、ゆゝしくなむ」、とて彈きたて給ひかきあはせ給へる程に、涙の落ちつゝ宣ふ、俊蔭女「むかし、四つ(八)

〔語釋〕
(五)音の―「の」衍文歟
(八)我四歳の時父が琴を

〔考異〕
(一)氣高く―氣高う
(二)樣程よりは―樣は
(三)給ふ―給はす
(四)しらべ試み―しらべさせ
(六)りうかく風―「風」ナシ
(七)習ひはて給ひつ―しらべひれ給ふ

概

奇特。人々の感動。● 俊蔭女、犬宮をしてりうかく風を彈かしむ、妙なる音。人々の驚嘆。● 嵯峨院の奏請によりて俊蔭に中納言を贈られ、俊蔭女正二位に叙せらる。朱雀院の奏請によりてさがのの孫四人衛門尉になさる。● 兩院以下樓御覽。嵯峨院の懷舊。● 仲忠、兩院以下に贈物を奉る。還幸。

●犬宮樓上に琴を習ふ。頴悟絶倫なる犬宮。

〔語釋〕
(一)朝飯
(二)俊蔭女と犬宮
(六)俊蔭女の
(八)とて留めおきて

〔考異〕
(三)つゞき—つゞけ
(四)つゞきたりまづ—つゞけたり銀のすき餌袋に御くだ物入れたりまづ
(五)奉り給ふ唐綾の—奉り給ふ者給へる唐綾の
(七)めでたし—めでたう見ゆ
(九)皆—ナシ
(一〇)宣ひて—宣うて

斯くて、つとめて(一)の御臺、こゝにて參らせ給ひて、とばかりありて、樓へ、二所(二)わたし奉り給へり。かんの殿のも、犬宮の御方のも、おとな十二人、几帳さしつづきたり。まづかんの殿のぼり給ふ。段階は、御手をとりてのぼせ(五)奉り給ふ。唐(三)綾(四)の御衣一かさね、紫苑色の夏の織物のうちぎ、紅の三重がさねの御はかま、大將白き綾のひとへ、紅のうちあはせ、脱ぎ垂れ給へり。几帳のさしはづれたるよりはつかに見ゆる御容體、七尺餘の御髪の、瑩しかけたるやうなる、いみじうめでたし(七)。中納言の君(六)といふをば、「しばしさふらひ給へ」(八)とて、東の樓に、犬宮いだき奉りて、仲忠「几帳を高う皆(九)させ」と宣ひて(一〇)、これも同じごと、長々と人歩みつゞきたり。御衣、縹色のほそなが、御はかまいと長し。率てのぼり給ひて、

樓の上(下)

梗

(一) 犬宮樓上に琴を習ふ。穎悟絶倫なる犬宮。(二) 女一宮侍從の乳母に消息して樣子を尋ぬ。乳母の返事。(三) あて宮、父と大宮、東宮などの事を語る。(四) 涼樓の門前を通りかゝりて歌を仲忠に贈る。(五) 仲忠、朱雀院と女一宮と、兼雅とを見舞ふ。(六) 犬宮母を慕ふ。琴に出精す。俊蔭女、犬宮を勞はる。(七) 仲忠母子昔を懷ひて感傷す。俊蔭女父の菩提を弔はんことを思ふ。(八) 犬宮の進歩。仲忠の驚嘆。雪の日雪山をつくりて犬宮を慰む。(九) 仲忠、涼を訪ひて強ひて其の子を見る。(十) 歳暮に仲忠節科を處々に頒つ。(十一) 新年。(十二) 樓上の二月、三月、四月、五月。(十三) 六月の祓。(十四) 七夕に仲忠牽星に手向けんとて琴を彈く。奇特。涼庭にありて琴を聞く。(十五) 俊蔭女夢に父の告を聞く。夢のしらせの珍客を待つ。(十六) 珍客。よしむねの時宗、老婢さがの孫四人を携へて來る。俊蔭女の憫怜。四人の孫を留めて寵用す。(十七) 仲忠樓を下りて三條邸に歸るべき準備。涼、嵯峨院に參りて七夕の夜の噂をなす。兩院、大后宮以下爭つて仲忠が樓を下る當日京極に參會せんとす。(十八) 前夜より京極に集まる人々。(十九) 嵯峨院、朱雀院御幸。(二十) 俊蔭女、犬宮樓を下る。饗の仰せ。(二十一) さがの四人の孫人々に愛せらる。(二十二) 朱雀院、嵯峨院琴の祕曲を聽かさん事を俊蔭女に迫る。俊蔭女の煩悶。(二十三) 俊蔭女りうかく風を彈く。琴聲內裏に聞ゆ。今上、少將信方をして琴の聲を尋ねしむ。(二十四) 信方琴を尋ねて京極に到る。(二十五) 朱雀院、俊蔭女に迫りて更にはし風を彈かしむ。

〔語釋〕
(六)朱雀院が俊蔭女に來よと切に言はるれど犬宮がまだ幼稚故參られぬといふ意歟
(七)成るべく兼雅に來てもらひたくなしといふ意
(八)我が君を思ふ程君は我を思はぬと也

〔考異〕
(一)忘られ―忘れ
(二)さぶらふ―ナシ
(三)給ふ―給ひつ
(四)よう侍めり―よくはべなり
(五)院の上の切に宣ふを―院にせちに申し給へり
(九)辛しや―憂しや

給ふ。大將殿、いと思ふやうなる心地し給ふ。右の大殿は、斯かるにつけても、何事も片時忘られ(一)給ふ世なく、物のおぼえ給へば、我も涙のこぼれ給ひぬべけれど、(二)さぶらふ人々の見奉れば、よく／＼念じ給ふ。(三)兼雅「いと覺束なかるべし。忍びて時々はものせむ。いかゞ」と宣へば、俊蔭女「よう侍めり。(四)有樣にしたがひてとり申させ侍らむ。暇の度ごとにをと、(五)(六)院の上の切に宣ふを、只今はおよすけ給はねば、夜もさるべくば、(七)かゝる折は如何となむ思う給ふる」と申し給へば、兼雅「なほ難かるべきなり。この思には、(八)劣りたりける。(九)辛しや」と宣ひておはしぬ。十七日なりかし。

〔語釋〕
(一)俊蔭女が
(二)「折の心地の」なるべし

はして見給ひしに、屋のそら、所々朽ち明きたりしより、月の光(一)見て居給へりし程を見つけ給へりしこと、わりなく出で給ひにし折、(二)心地の思ひ出でられ給ふに、いといみじう、胸ふたがる心地し給ひて、涙のつぶ〳〵と落ち給ふを、大將、昔おぼし出で給ふなめり、と見給ふ。かんの殿も、そこら見出だし給ふに、年々の草は八重葎の板敷よりも高う生ひのぼり、軒のつまの草は繁くたふれて、下様に生ひ凝りて人影もせずありしを思ひ出で給ふに、大將のかく二方にひき續き、率てわたり給ふべく造りなし給へる樣、出で入りし給ふ勢見奉り給ふに、年頃おもひ忘れ給へる古の御有樣、よろづに思ひ出で給ひ、え念じ給はず、涙のこぼれ出で給ふをしのび給ふ御氣色を、兼雅「ゆゝしう、斯かることえ忌みあへ給はじと思ひきかし。さりとも念じ給へ。うべこそ、まろが仕うまつりしは、けしうはあらぬはや」と右の大殿聞え給へば、俊蔭女「さらずば然あるまじうやは。大將もわろくや」といらへ給へば、兼雅「さてそれは、誰が子にかあらむ」など戯に聞えなし

〔語釋〕
(一)其方の側を離れては居難し
(二)「あらめ」なるべし
(三)「たま」は「だに」歟
(六)兼雅も
(七)「たりけれとてむかし」歟
(一〇)兼雅か

〔考異〕
(四)忍び〳〵に時々まうで來む—忍び〳〵は時々まうで來むとす
(五)にて—「て」ナシ
(八)瓦は—かうらんは
(九)草蓬—草ども蓬

殿、兼雅「紛らはし言なし給ひそ。こゝに琴教へむからに親とある人の中をも、みな取り離つ。怪しうこそ宣へれ。片時も、見奉らでえぞあらぬ(一)。宮をも急ぎわたし給へ。我も、たゞ此處にこそあらむ(二)」かんの殿、俊蔭女「よし、聞かじ。今しばしこそ念じ給はめ。大將のかしこにたま(三)まうでられぬを」と宣へば大殿、兼雅「今おのれは、天下に言ふとも、忍び〳〵(四)に時々まうで來む」とて、物憂げにて(五)出で給ひぬ。明くなりにけり。
大將殿、大殿の御前に參り給へば、御供にて所々見ありき給ふさま、たゞ兄弟のやうにて、これも(六)、いと清げに、若うなまめかしき御容貌なり。大殿やがてかんの殿の御方に入り給ひて、兼雅「これは、もとの礎のまゝか」俊蔭女「然侍り」いと面白くこそ造られたりけれ(七)」むかし屋どもみな倒れ、所々に部などの、高き草の中に朽ち倒れて、念誦堂の柱のみ、所々立てわたし、寢殿の瓦(八)はある所なく散り落ちて、いといみじかりし、長よりも高かりし草蓬(九)が中を分けて入りお(一〇)

しからむ。晝ぞあらぬ、夜々はなほまうで來む」と聞え給へば、俊蔭女「物狂ほしく、若々しき事な宣ひそ(一)。夜こそ、まして心靜に習ひ給はめ。宮の御方(二)忝く、心安くは思すべし。さてわたし奉り給ふめる、おぼろげには。對などにも、つれ(三)づれに人々思すらむに、今めかしく物し給へ(四)」と聞え給へば、兼雅「めでたからむ。(五)またこゝにも(六)離れ居給ひて、つひに何事ともしはて給ひてむ」俊蔭女「いかゞ(七)今然あ(八)らむ。年頃さまぐ\に集めたりけるを」とていと愛敬づき、恥かしげにうちほゝ笑み給へば、兼雅「今(九)やがて琴ひき習はせ給ひなば、院の上たち二所ながらも、御覽ぜむとておはしまさむと宣はしつる。大將、そこながらも、まろが爲にも御爲にも、事はひき出でむ(一〇)」と宣へば、俊蔭女「かゝる耳いかで聞かじ。この程は、すべて門さして、公私ごとも聞かじ(一一)、他事もなく思ひまどふ人を(一二)、かの聞かれむに、かゝる事なし給ひそ。あけぬ前に早々(一三)おはしね。宮の君、若君、いかに戀しうおぼし給ふらむ。それをだに、此のほどはわたし奉らじとあるぞわりなきや」大

〔語釈〕
（三）女三宮宰相君などが
（五）此處誤脱あるべし
（一一）「聞かじと」歟

〔考異〕
（一）宣ひそ—し給ひそ
（二）忝く—しづ心なく
（四）へ—など
（六）こゝにも—こにも
（七）いかゞ—いかて
（八）あらむ—あちむもの
（九）今…二所ながらも—今ひかむ琴ひかせ給ひて院の上内裏の上も
（一〇）事はひき出でむ—こと聞いと恥かし
（一二）人を—ものを
（一三）早々—はやく

（語釋）
（一）女一宮
（四）女一宮の歸りを
（五）內裏へ
（考異）
（二）ながれてきよき―ながれてぞきよき
（三）六人―六人ばかり
㊄仲忠、母及び犬宮と京極に籠居す。兼雅京極を訪ふ。兼雅夫婦の懷舊。

俊蔭女かしこまりて賜はせつる。

老の世にながれてきよきくれ竹の末のよにこそ結ぶ名もたて
(一)

とぞありける。

四日の夜、夜半ばかりに、宮かへり給ふ。忍びやかにて、さるべき四位六人、五位十人ばかりして。大將いと覺束なくおぼえ給ひけれど、よろづに聞え慰め奉り給ふ。曉にかへり給ひぬ。二の宮は、「いとつれぐに侍るに」とて喜び聞え給ふ。
(二)(三)(四)

大將、仲忠「召なくは參るまじ」とて、然るべき年老いたる大舍人頭の大ふる、小ふるなどいふものども五六人、番をくりてさふらはせ給ふ。御門守、夜半だにたしかに候はせ給ふべき由、たしかに宣ひつゝ、御門も、ことなる事なければ開けず。
(五)

かくて右の大殿、かんの殿の御方におはしまして、兼雅「覺束なからむ事、いと苦

み立てられ侍らねば」といふ聲も、片言のやうなり。飲む眞似にてうち溢しつれど、いとほしくてえ又も強ひず。唐綾の瞿麥襲のほそなが、二藍の織物の唐衣、うすものの地摺の裳、はかま一くだり、大將の御返、取りて出で給へり。藏人、「みだれ脚は動かれず侍り。みきにかづき給ふものは、簑虫のやうにてや、むぐめきまゐらむ」といふ程に、内よりふと、

雨の脚はむらさめなるを簑虫となにむづかしくかけていふらむ

藏人、「物もおぼえ侍らずや」とて、

藏人「朝夕にてりみかどやく大殿になくべきもののかげにや簑虫

ことわり〳〵」とて逃げて、倒れもこよひつゝ往けば、内にもをかしがり、大將も笑ひ給ひぬ。庭の前に、かづけ物を落し往けば、大將、人召して車に入れさせ給ふ。かんの殿の御返、

〔語釈〕
(二)「一くだり賜ふ大將御返とりて」なるべし
(四)誤あらんか

〔考異〕
(一)つれど—つれば
(三)樣—ナシ
(五)むらさめなるを—しぐれなるをや
(六)夕に—夕日
(七)なく—なる

（考異）
（一）戸口にも―とみにも
（二）よろぼひに―「に」ナシ
（三）わらひ給ふ―わらふなり
（四）みだり脚も―みだり心地脚も

て、御返とらせ給ひて、前におし立てて、西の對にて、いといみじく醉はし給ふ。藏人「いかで、かゝる御使を召し籠めて、かう懲ぜさせ給ふ、いと不便に」と申せば、いみじう笑ひ給ひて、仲忠「勘當は、仲忠こそはさいなまれめ」とて物もおほえず醉はし給へり。宮の御方よりは、紫苑色の綾のほそなが一襲、はかま添へ給へり。また女の方に、「御使の藏人こなたに」とて、戸口に、朽葉の裾濃の几帳の縫物したる立てて、いとおとなしう宿徳なる聲にて、「なほ此處にこそ」とて褥さし出でて、赤色に蘇枋がさねの織物の唐衣黒むまで濃く淸らなるに、紅のはりあはせ一襲著て、色ずりの裳、いとあざやかに見ゆ。袖口ながやかにさし出で、土器さし出でたる、見るにいよ〳〵いと侘しう、心地あしうなりて、藏人「いかに仕らむ」とて苦みて、戸口(一)にも寄らねば大將、仲忠「例なき事なりや。早う」と宣へば立つに、たゞよろぼひに(二)倒れぬ。内に人々わらひ給ふ(三)。取るとて、藏人「唯今は御返は賜はるまじく侍り」「如何なれば」といらふれば、藏人「今日はみだり脚も(四)踏

りしは、けしうはあらぬは」と右の大殿聞え給へば、俊蔭女「さらずば然あるまじくやは。大將も惡くや」といらへ給へば、兼雅「さて、それは誰が子にかあらむ」などて(一)戯に聞えなし給ふ。大將いと思ふやうなる心地し給ふ。

三日、院より銀の髯籠二十、銀、黄金して毬栗、松の、實榧、棗など、作り入れさせ給ひて、宮(二)の御許に、

朱雀覺束なき程になりにける。騷がしき程すぎて、犬宮の物習はれむ手つきのゆかしきに、いかでかとなむ。この髯籠は、白髮になりにける程も哀になむ。

と宣はせたり。かんのおとゞにも、同じ數にて、

朱雀あさましく忘られにてや。こゝには何時となくのみ。

うらやまし明けくれ人と結ぶらむ髯籠のさまはかげも離れで

末の世にこそながるべかりけれ。聞かまほしき事どもあらむかし。

と書き給へり。御使(三)藏人に出であひ給ひて、東の對にて、よき程に醉はし給ひ

〔語釋〕
(一)「などとて」なるべし
(二)女一宮
⊜朱雀院より女一宮及び俊蔭女を訪はる。
〔考異〕
(三)ながる―なる

らし給ふ。月の水にうつりたるを、宮の御伯父の右衛門督、

兼澄 うべこそはすむ人ありと思ほゆれ雲井の月もうつりける宿

大將

仲忠 我が宿をすぎずと思へど月影の水のうへぞと見ればかひなし

こと人々も詠み給へれど、騷がしくて聞かず。

(一)かんの殿の御方の御前には、大將の御方よりかづけ物は賜ふ。又の日、かんの殿いにしへ思ひ出だし給ふに、年々の草は、八重葎の板敷よりも高う生ひ、くりの木のつまの草は高う生ひたふれて、下樣には(二)はびこりて、人影もせずありしを、思ひ出で給ふに、大將の、二方にひきつゞきて率てわたり給ひ、つくりなし給へる樣、出で入りし(三)給ふ勢見奉り給ふに、年頃おもひ忘れ給へりし(四)古の御有樣、よろづに思ひ出で給ふにえねんじ給はず、涙の溢れ給へば忍び給ふ氣色を、兼雅「ゆゝしう、かゝる事忌みあへ給はじ、と思ひきかし。さりとも念じ給へ。まろが仕

〔語釋〕

(一)此圍みの中なる文は次の六七八頁の文の攙入したるものにして現に春海本には彼處にありて此處にはなし。されば削るべきものなれども多少の相違あるを以て姑く之を存せり

〔考異〕

(二)はびこりて―むひなりて

(三)し給ふ勢―し給へるを今

(四)給へりし―給へる

る二つの樓の、なかみばかりを、いと高き反橋の高さにして、北南には沈の格子かきたり。白き所には、(一)白粉には屋久貝を舂き交ぜて塗りたればきら〳〵とす。樓の上に、(二)檜皮をば葺かで、あをじの濃き薄きを、(三)皆瓦のかたに燒かせて、葺かせ給へり。(四)樓の西より、西の對の南の端なる念誦堂に著く程、十五間なり。山の井の尻ひきたる水の流の上なる反橋の左右には、勾欄にして、瓦葺にしたり。東の(五)釣殿に盡くまでの程は、同じ十五間なり。樓のそばにも、かゝる反橋をしたり。長は、たゞの人の歩くばかりにて、長々と造られたり。水はなが〳〵と下より流れ出でて、(六)樓をめぐりたり。立石どもは、樣々にて、反橋のこなたかなたにあり。めぐり〳〵人々見給ひて、「言はむかたなく面白き事」とめで給ふこと限なし。「見さして歸るべき事なくなむ。これを朱雀院、峨嵯院に御覽ぜさせばや。如何にいみじう興ぜさせ給はむ。(七)はまの石には、春は花、秋は紅葉の盛などには、かの惜しませ給ふ手は、えとゞめ難くこそあべけれ」(八)など宣ひて、夜に入るまで立ち暮

〔語釋〕
（一）「なかみ」は「なから」歟、一本「なかしま」
（二）「には」の「は」衍文なるべし

〔考異〕
（三）薄きを皆瓦の—うすきゝばみたるをはしの
（四）樓の西より—樓より西
（五）尻ひきたる水の流の—尻をやり水の
（六）出でて—まいて
（七）給はむはまの石—給はむはまの木—給はむかはざまの石
（八）あべけれ—あんべけれ

(一)三日の御賄は、宮の御前の殿上人までおしなべて(二)左の大殿、二日のは(三)右の大殿、三日のは大將殿。宮の御前の、内侍のかみ、犬宮、淺香の折敷十二、紫檀の高坏、羅の打敷なり。上達部の(四)お前に、盃度々になりぬ。かんの殿の御方より、心殊にまうけ給へるかづけ物、南の庭より取續き歩みたる、色々にしかさねたる、いと淸らにうるはしく、薫物の香など匂めでたし。六位の藏人には、織物の三重がさねの小袿、三重襲のはかま、帶刀には、羅のこうちき、一重襲のはかまなり。これより下には更にも言はず。上達部、殿上人のさふらひ、御隨身、御前の人々、皆かづけ給ふ。かんのおとゞの御方の御前には、大將殿の御方よりかづけ給ふ。

又の日樓へ皆おはす。宮も見やり給ふに、聞き給ひしよりも、あなめでたと見り、るに、近うて見給ふ人々の御目には、照りかゞやきて、此の世にかゝる事またあらじと、目もあやに見えたり。南の庭の、遥なる水の洲濱のあなたの山際にたて

〔語釋〕

(一)「三」は「今」の誤なるべし

〔考異〕

(二)左の大殿―左大臣

(三)右の大殿―右大臣

(四)御前に―御前の

㊉樓上の景色。

〔語釋〕

(一)今の東宮の御世には犬宮が寵を專にすべしと也

(四)「給へれば」歟

(七)仲忠が

㊄到著。饗宴。

〔考異〕

(二)かしづくと—かしづく〳〵と

(三)とぞあらむ—にぞならむ

(五)ゐざり—ナシ

(六)なまめかしく—なまめかしう

る急とし給ひし、女御殿の宮腹の大將の姫君のめでたき幸の料なりけり。藤壺のゝしり給ふも、かの東宮の御世に、この犬宮(一)の御世の中とぞあらむ。我らがか(二)しづくと思ふ子は、本意もかなはで、皆その折の擇りくづとぞあらむ(三)」など宣ふ。車の有樣よりはじめて、世の中の人々めで騒ぐめり。

おはし著きて、まづ主方にて、かんのおとゞの御車、西の御門より入れて、西の對の南に寄する。殿を二方しつらひ給へれ(四)ど、西の對におはすべきに、宮の御車、東の對の南に寄す。それより殿にわたり給ひて、まづ宮下り給ひて、四尺の裾濃の龍膽の御几帳さして下り給ひぬ。犬宮の下り給ふには、同じ色の三尺の几帳さして下り給ふ。大將、仲忠「乳母抱き奉りており給へ」と宣ふに、犬宮「いな。宮の御樣に下りむ」と宣ひて、小き扇さしかくし給ひて、靜にゐざり(五)おはする樣、今からいと(六)なまめかしくせさせ給へるを、いと美しくゆゝしく、(七)覺え給ふ。殿ばらは、東の對の釣殿に居並み給へり。

みるぞ心憂きや、と思せど、もとより怪しきまで御心よくあてなる(一)宮におはすれば、然る(二)べきにこそあらめ、梨壺のみ時々に見聞きてむ、げに言ふとも、まづ一の御子を産み給へらましかば、如何にかはあらまし」とのみ身の憂きのみ思す。殿宮の御方に入り給ひておはす。

大將いと疾う、宮の御車おほく内にいらぬ(三)程におはして、宮の御車ちかう、院の御方ともうちまじり給ふを見れば、夕映して、いといみじく色うるはしう、花やかに清げに見え給ふを、そこばく立てて見る車ども、「宮(四)何を思ひ給ふらむ。たゞ人にはさらにもいはず(五)、宮たちと聞ゆるも、更にいと斯(六)ばかりおはするなければ、めでたしと見給ふらむかし」と人々やすからず言ふ。宮の御伯父の、中納言と聞ゆる、御車にさし寄り給ひて、簾おしあげて、（中納言）「さも幻のやうにも」と聞え給へば、打ほゝ笑みて、（女二）「蓬萊(七)の山にまかりたりつるや」と宣へば、（中納言）「さても餘にこそ今日は見ゆれ」と宣ふ。一つ車に乗り給へる殿ばら、「あらはれ(八)の大な

〔語釈〕
(二)女三の心
(四)女一宮、仲忠の妻
(六)仲忠程立派に
(七)長恨歌の術士が蓬萊宮に到りし故事を幻といふ語によりて思へる也

〔考異〕
(一)なる宮—ナシ
(三)いらぬ—入りつる—入りぬる
(五)いはず—いはじ
(八)あらはれの—あらはなる

〔語釋〕
（一）女一宮
（三）「九」は「三」の誤なるべし
（五）俊蔭女が
（六）仲忠の事はいふまでもなし
（八）之に比べては
（一〇）兼雅の持物たる女三宮
（一一）俊蔭女の
（一二）「などとて」なるべし
（一三）大宮、正頼の妻

〔考異〕
（一）あひなし―あいなし
（四）おはして―おはしぬ
（七）もてなし給ふ―ナシ
（九）儀式―けしき

れ」とて制し聞え給へど、兼雅「知りてあひなし（一）」とて、かねてより然思ひ給へりければ、なほ二十五なり。

時なりて、殿は御車寄せさせ給ふ。宮（二）の乗り給ふ御几帳、左大殿、大將、とさし給へり。乗り給ひぬるすなはち、大將、九（三）條殿に馬を打ちおはして（四）、南の廂に出（五）で居給へるを、仲忠「はや／＼」とて乗せ給ふ。几帳も、殿二所してさし給へり。宮の御方々の人々見て、「殿（六）をば聞ゆるに限もあらずや。斯う言ふばかりもなくめでたき大將の（七）もてなし給ふ御樣よ。帝にて子を持たらむも、（八）めでたくも有るまじからむ。この子もてかしづき給ふは、いみじきものかな」とめであへり。次々の車ども、乗りつゞきて出で給ふ儀式（九）、げにいとめでたうあらまほしき樣なり。宮見（一〇）出だし給ひて、女三「いかめしの人の（一一）御幸や。一人にても、斯く子を産みけむよ」などて（一二）、わが姉宮（一三）を思ひくらぶるに、斯う、子孫まで、我がまゝに廣ごり充ちてのゝしる、かゝる中らひにて見るにも、よく物を言ひ思ふべくもあらず、あたを

〔語釋〕
(一)「給ばむとす」なるべし。一本「給はむも」
(一一)此方の車の數を多くして二十五にせむと也

〔考異〕
(二)どもは―ナシ
(三)いと―ナシ
(四)日の―ナシ
(五)右の大殿―右大臣殿
(六)いかめし伯父の―いかめしうをぢ
(七)仕うまつり―つかまつり
(八)子ども―子どもの
(九)かけ給へば―し給へば
(一〇)及ばざらめ―及ばね
(一二)こそ―こそは

大路をわかれて入り給はむと、(一)西の御門より、內侍のかんの殿、東の御門より、宮の御車參るべきなり。その御前どもは、(二)宮の御方に、院より四位の殿上人十人、五位三十人、かたちいと淸げなる六位二十人、殿上わらは二人、(四)日の裝束どもいと麗しくしつゝ參れり。(三)これに(五)右の大殿など、すべていといかめし。(六)伯父の、中納言、宰相などにおはするは、車にて仕うまつり給ふ。中納言の君だちは馬にて(七)仕うまつり給ふ。かんの殿に四位八人、五位二十人、六位十五人、六位といふも、受領の(八)子ども、雅樂助、主殿の助、兵衛の左右の尉などいふなり。大將、東宮大夫かけ給(九)へば、帶刀十二人を、中よりわけて仕うまつらせ給ふ。たゞの四位、五位もいといかめし。黃金づくり、たゞの絲毛、此方のも二十有るを右の大殿、兼雅「これこそ現なる移ろひなれ。左の大殿の、いかめしうて、二方もてかしづき給ふに、己が劣るべきか」とて、兼雅「子どもの數こそ及ばざらめ、(一〇)車は、いま五つ、(一一)此方のはまた添へむ」と宣へど、仲忠「便なく侍らむ。仲忠が、これはわたし奉るにこそ(一二)侍

て、ひきて急ぎたり。大將、仲忠「かんの殿の御前どもは、若やかなる、女郎花色の下襲を著よ」と宣ふ。仲忠「宮の御方のは、うすき二藍を著よ」と宣ふ。女房車ども、かんの殿の上臈三車は、紅のうちあはせに、はしの織物、(一)つぎ〳〵のは朽葉、かうのかさね色の地摺の大海の裳なり。(二)宮の御方のは、上臈車四つに(三)は、紫苑色のうちぎに、赤色に二藍のからきぬ。次々のは、薄二藍、をみなへし色などのを著て、青摺墨摺の裳なり。童も、おなじく著せたり。夏の緣の上のはかま著たり。

【畫詞】こゝは大將殿の御方、中のおとゞ。人々參り集まれり。

酉の時なり。殿の中、宮たち、殿ばら、いだし車し給ふ。居集まれり。大將殿は出で居給へり。(四)院より人々參り、また「出で給はむ、見奉れ」と仰せられつる」とて左馬頭源宗良さふらふ。やがて、宮の御方の女房車の、次第立てて、寄すべき事おこなふ。同じ時に、かんの殿も出で給ふ。車の次第定めにぐければ、

〔語釋〕
(一)未考
(二)海邊の樣を模樣にあらはしたる裳

〔考異〕
(三)上臈車四つには—上臈四車あるには

㊅犬宮京極に移る。行列。女三宮の感傷。見物人の評判。

(四)給へり—給ふ

〈語釈〉
（二）「唐松に孔雀を縫はせ給へり」歟、一本「唐とりくさぐ」を縫はせ給へり」
（五）「一條」は「三條」歟

〈考異〉
（一）かんの殿―ないしのかみ
（三）かたをうつし―かたくさむら
（四）虫鳥―むら鳥
（六）左右の―左の右の
（七）参り交らざらむは―まじらざらむは―まゐらざらむは

彼處にわたり給ふは八月十三日なり。大將、かねてよりも心殊にてわたし奉らむと思しければ、内侍のかみの御車、新しく調ぜさせ給へり。かんの殿のは、濃紫の絲毛に唐松にくさぐ〳〵を縫はせ給へり。宮の御は、二藍に雲襷、秋の野のかたをうつし、薄、虫、鳥のかたを、いろ〳〵に縫はせ給へり。いとなまめかしう、樣々にをかしう、鞦にも唐草のかたを縫はせ給へり。下簾も、かうの地に羅かさねて、小鳥、蝶などを縫ひたり。右大殿も、もろ共におはして、三日過して還り給ふべし。右大將殿も、御前いかめしう調へ給へり。左の大殿の御方にも、人の容貌よきを仰せられ、院よりも四位、五位、六位、かたちよく年若き、内裏の藏人經たるも擇びて、かの一條京極なる所にわたり給ふなるに、仕うまつるべきよし仰せ給へれば、我も〳〵と、賀茂の祭はさるべき限こそあれ、これは左右の大殿、院とゝのへさせ給ふに、世の中に物のおぼえある人々、「この中に參り交らざらむはいみじき恥なり」と申し、裝束を調へまどひたり。馬鞍よりはじめ

ほえ給ふべきを、うちまもり奉り給ふに、涙のこぼれぬべければ、今少しも聞え給はず、苦しと思すまじき事を語らひ給ふ。

大將わたり給ふべき人々の裝束、宮にもかんの殿にも分たせ給ふ。御渡の料とて、人々(一)にも奉りたり。内侍のかんの殿にきぬ百疋、綾二十疋、織物、うすもの(二)、染草などは、ことに奉り給ふ。尾張守に料を賜ひてせさせ給ふ。宮の皆あり、綾同じ數なり。同じ日、宮(三)にもわたり給ひて、三日過して還り給ふべし。大人、かんの殿に三十人、わらは四人、宮の御方も同じ數なり。女御殿のみぞ、これは數勝りたるといふべきなり。宮の御方のおとなは、皆還り參るべければ、この數へのうちには入らず。容貌ども勝れてめでたし。かんの殿の御方に、少しねびたるが交りたりしも、なほ人に勝れて、もてなし有樣心憎くめでたし。この御方(四)の宮、はじめの時に整へられたりし、なほ心有樣目やすくよしと、女御殿の御方に見給ふ人をば、(五)此處に賜ひなどもし給ふれば、いと類なしと見えたり。

〔語釋〕
(一)犬宮の供して京極に行くべき人々の
(二)犬宮の京極に移るべき日の準備。
(三)女一も同行して
(四)女一宮
(五)女一宮へ

〔考異〕
(二)うすもの―うすものなど

などは、などか物せざらむ。なほ此處には聞かせじとなめり。かんのおとゞ「いかでか、心静に聞かせむ」と常に物し給ふ事はあらずや。その程だに然らずば何時」と宣へば、仲忠「いかゞは、然こそは。それも、末つ方になむ、忍びて渡らせ給はむを、此の人々聞きつけ給はゞや(一)、むづかしう、人々のものし給はむにこそ、(二)お前をだに、とて過し侍らむとなり」と聞え給ひて、今ぞ思ふやうなる心地じ給ふ。

宮　女一「久しう見奉らざらむを」とて明けぬれば暮るゝまで、(三)犬宮雛遊し給ふ。女二「(四)外にては、戀しく思ひ給ふべしや」と宣へば、犬宮「如何は。(五)琴の彈かまほしければ、(六)念じてやあらむ。(七)密におはせよ。この雛にもや聞かせじとする」と宣へば、いと哀にをかしうおぼえ給ひて、女二「などてか。率ておはせ。大將のをばきくとぞ聞ゆる。雛遊は時々をし給へ。琴を心に入れ給へ」とて、女二「いと面白く彈かむと思せ」など聞え給ふに、久しく見奉り給はざらむ事のいみじう戀しくお

〔語釈〕
(二)女一さへ入れぬ故他人は一切入れぬと斷りて
(三)「犬宮と雛遊」なるべし
(四)他所に居るならば我を

〔考異〕
(一)給はゞやむづかしう—給はゞやうかましう—給はゞやかましう
(五)琴の—「の」ナシ
(六)念じてやあらむ—念じてあらむ—念じてやおはす—念じてやおはする
(七)密におはせよ—密にはおはせよかし

む。犬宮の事」といとまめやかに宣へば、仲忠「いとまが〳〵しき事宣はす。かく宣はせば、(一)更に二三年もわたし奉らじ。いと心憂く、戯れにくゝ、かゝる事は仰せらるべしやは」とて怨じ聞え給へば、女二「これこそまが〳〵しかめれ。琴弾く人は、たゞ人見ず、離れてや習ふ。靜なる處は然もありななむ、「一年ばかりは」とあれば、いとあさましく、幼ければ、何心なくて(二)、何時とも知らで離れてあらむと、ものしげにこそあらむなれ。しばし、人々の物せらるゝ時、彼方にあるをだに、(三)心もとながり纏すものを、侘しともこそ思へ。如何なるべき事にかあらむ」といと心苦しげに宣へば、大將、仲忠「理なれど、何事も、心に入れて習ひ移すにのみこそ、人よりことに侍れ。幼くおはせむも心苦しとてやは。思ふやう侍るものを。然らば聞えさせじ。ともかくも御心なり。此處には教へ奉らじ」とまめやかに聞え給へば、さてあべい事ならねば、宮も、この事を、心ことにい(四)かでと思す事なれば、女二「さらば念じてこそあらめ。いと忍びて、あからさまに

〔語釈〕
(三) 誤あるべし

〔考異〕
(一) 更に―さらば
(二) なくて―「て」ナシ
(四) いかでと―いかでかと

む」と宣ふ。(一)(二)お前に見におはしまさば、院、宮たち、また誰も騷がしう侍らむに、本意なかるべし。(三)おはしまさせで、たゞ一所をなむわたし奉りたる、とて門もあけ侍らじとす」と聞え給へば、女二「いく久しさかは」と宣へば、仲忠「いかでかは。いと疾くは、みな習はせ給はじ。物の心くはしく(四)見させ給ひてこそ。内侍のかみ、四つより三歳こそ、他遊せられで習ひ(五)給ひぬれ。これは七つになり給ひぬれば、いとよく、然りともいと疾く彈き給ひてむ。今まで習ひ給はぬ、いと心もとなき事なり。院、内裏の御書などの事により、徒らに年月を過し侍りにたり。世の中も(六)いくばくかなき物か、なほ一歳ばかりとなむ思ひ侍る。内侍のかみ、心細くあつしく物し給ふ。この(七)(八)御世に、これを覺束なからず習ひ給はむこそよからめ」宮、女二「いかで、いと然まで、戀しく見ではあらむ。時々は渡りてこそは見め」と宣へば、仲忠「仲忠も、おぼつかなからず、夜などは參り來なむ。それを御覽ぜば、慰ませ給ひてむ」など聞え給へば、女二「それは、やがて見ずともありな

〔語釋〕

(一)(二)女一が犬宮に逢ひに來たらば

(三)女一を來させずに

(六)誤あるべし

(七)俊蔭女在世中に

〔考異〕

(二)お前に見に—御前の見給へに

(四)見させ—見せ

(五)給ひぬれ…いとよく—給ひけれ七つになり給ふ犬宮いとよく

(八)御世—「御」ナシ

恥かしう、なまめかしき顏姿(一)にぞ物し給ひつる。側より見るだにあり、向ひ居てあらむは。大將、いと疾く(二)見つけて、いみじと思ひて、乳母を言ひつるにやあら(三)む。今年は、琴習はさむとて、內侍のかみもろ共に、京極に移るべきなめり。此の姬君(四)、容貌はいとこよなうは劣り給はじを、何事にも勝れたりける(五)上手の筋にて、今より、何事にも世の中を響かすこそいと妬けれ。小き子どものいとをかしげなるを、大人につくりてぞありける。萬の事、あやしく珍らかにものし給ふ人にこそあれ。女兒も、いかに見るかひありと思すらむ」など宣ふ。

大將殿(六)、宮に、仲忠「中納言の、この京極の事にて物し給へるに侍り。斯く、上下かねてより、事々しう、公私とものし給ふを、思ふやうに彈きつたへ給はずば、如何にくち惜しからむ。生れ給ひし時よりだに、如何ならむと、安からず人人はものし給ひしを、「異なる(七)事なくば、公事をものせず侍らむ」とて院に暇申し侍りしを、來む月よりとなむ思ひ侍る。犬宮は、いとよく「離れ(八)奉り給ひてあら

〔語釋〕
(三)「あらむ」の下脫文あるべし
(四)涼の娘
(七)格別の御用の外は
(八)母に

(六十)仲忠、犬宮の修業中は一切人に逢はずまじき由を女一宮に告ぐ。女一宮、犬宮に名殘を惜む。

〔考異〕
(一)姿にぞ物し給ひつる―かたちにぞ物し給へる
(二)疾く―とう
(五)何事にも勝れたりける―何事もすぐれたる
(六)殿―ナシ

涼「さても、何時かわたり給ふべき」仲忠「相撲のこと、國々騒がしき事ありて、今年はあるまじとか聞き侍りつる。もし然あらば、立たむ月の間にやとなむ思ひ(一)給ふる」涼「近く(二)侍るなるは、さば必ず〳〵」と聞え給ひてわたり給ひぬ。

中納言、御(三)方に、涼「いと美しきものをも見侍るかな。大將の御方にまうでたりつるに、犬宮、しか〴〵なむ。天下のあて宮、さらに今の程よりはかくものし給はざりけむ。すべて、斯ばかりの容貌は、此の世に又はあらじとなむ見えたる。いとをかしかりける君かな」今宮「あさましく、今に見せ給はぬ(四)こそ。いかゞものし給ふ」涼「いで、更にめでたう、聞えむ方もなしや。大人の世には、用意などしてもてなしすれば、(五)少しのことあり。これは、いと美しくこそおはしけれ。髪の樣など、まだいと幼げなる顏の、けだかく美しげなるに、髪のつや〳〵とよりかけたる樣にて、懸かりたり。たゞ兒にかづらをうち懸けたる樣にて、何心もなくて、蝶にやありつらむ、物の飛びつるを、扇さゝげてうちあふぎ給へるこそ。それに、

〔語釋〕
(二)仲忠が樓へ移ることが
(三)妻いま宮
(五)巨勢氏曰、「少しの事は」にて多少の風情はあるもの也との意なるべし

〔考異〕
(一)思ひ—思う
(四)こそ—こそは

彼處におはする兒は、この御同じ程ぞかし。いと醜く物し給ふに、思ひわづらひ(一)侍りぬるものを」など宣ふ。仲忠「氣色をかしげなるべし。内侍のすけ知り聞ゆめりき」とてゆかしう、如何ならむとおぼえ給ふべし。中納言殿、大將殿に宣ふ、涼「あが君〳〵、かの御手の限をつくして、教へ給ふらむは、さる事はありなむや。人に實になべて聽かせ給はじ。たゞ、片時の程、いと聽き侍らまほしきを、必ず聽かせ給へ」と懇に聞え給へば、仲忠「(二)あが佛、隱し聞えさせず。いと面白き事は、あるべきこと(三)にも侍らず。兩方の院の上も、怪しう聞召して、仰せられつる。この侍る所は、いと騒しく、宮たちもあわたゞしうおはしまして、人繁ければ、たゞ、犬宮一人を、かしこにわたして、仲忠が教へ奉るべきなり。内侍のかみも、身もあつしう物し給ふうちに、あわたゞしき人の扱などせられて聞ゆとも、心靜にも物し給はじ。犬宮も、いといはけなくおはすれば、はかばかしく(四)えやは習ひ給はざらむ。今は、昔のやうに、聞かまほしき樣も、え彈きなされずや」

〔語釋〕
(一)涼の子をいふ

〔考異〕
(二)あが佛―あが君佛
(三)にも―「も」ナシ
(四)「えや」ナシ

て見え給へる容態、顏いと花やかに、美しげに、あなめでたのものやと見え給ふを、(一)え念じ給はで、笑みて見遣り給ふに、大將あやしと見おこせ給ふ。あらはなればば、仲忠「いと不便なりや」とて立ち給へば、涼「何の不便なるぞ。若き時は、うち(二)はえて、ほのかに人に見え給へるこそ美しけれ。世の中にのゝしり給ふ人も、むげに見ぬは、心地むづかしき時は、いでや、如何ありけむと見ゆるものなり。いみじう、世に物思出で來ぬべき世なめり」とて飽かず美しくおぼえ給ふ。仲忠「またこそ見え給ふ」とて入り給ひて、御乳母たちに、仲忠「いとあさましう、云々なむ有りつる。いみじきわざなり。(三)近うあらぬわざ、いと惡し」と宣へば、乳母「蝶の、御簾のもとに飛び侍りつるを、この幼き人々の、われも捕らむ〳〵と騒ぎ侍りつるを、御覽じつるならむ」と申せば、仲忠「いと、(四)此おとなども、いはけなしや」とて出で給ひぬ。仲忠「(五)かた思ひはとこそ言ひ侍るなれ。(六)くち惜しきわざかな」と宣へば、涼「まめやかに、いといみじう、美しうおはしつる樣かな。何を思すらむ。

〔語釋〕
(一)涼が
(三)汝等が犬宮の側につきて居らぬが惡い
(四)「いと」は「いで」歟
(五)引歌未考

〔考異〕
(二)うちはえて—うちはづれて
(六)侍る—「る」ナシ

中納言、涼「いでや、

涼　吹上の濱べの契りなごりなくかひあることは見せじとぞ聞く

御物がくし、(一)なほあらじの御詞などは、琴などの音よりも勝れてこそおはすれ。萬の事、いかで、かくしもみな具し給ひけむ」と笑ひ給へば、大將もいと快くうち笑ひ給ひて、仲忠「何事をかは隱し聞えむ。(二)物覺えずなりにて侍る(三)なごり、京極は、然御耳とまるべくも侍らぬものを。高き物おもしろくば、朱雀門、旗鋒などを、いかに絕えず見る人侍らまし。靜なる處なれば、時々もまかり移りて、(四)心安く行をもと思う給ふるなり」など聞え給ふ程に、入日のいと赤くさし入りたるに、犬宮白き(五)羅のほそながに、二藍のこうちぎ(六)著給ひて、長は、三尺の几帳に足らぬ程なり、御髮は、絲をよりかけたる樣にて、細脛にはづれたり、扇の小きささげ給ひて、兒、大人ども三四人添ひてあれど(七)所々にとて、簾のもとに、何心なく立ち給へるに、風の簾を吹きあげたる、立てたる几帳の側より、傍顏の透き

〔語釋〕
(一)てれかくしの詞
(三)「なごり」は「なゝり」歟
(七)「所々にて」歟。一本「心々にとて」

〔考異〕
(二)聞えむ…なごり—聞ゆらむともおぼえずなりて侍るなごり
(四)心安く行をもと—心安くもと—心安くと
(五)白き—白い
(六)こうちぎ著—こうちぎを著

なくこそ嬉しく思ふ給へしか。何時しかも、一所にて、思ふやうに聞え承りて心安く(一)遊をも、とこそ思ひ給へしか」など聞え給ひて、涼「先は、いみじき大事の事を思すなるこそ。涼には隱し給ふを(二)思ふ給へれば、如何つらしと思ひ聞えぬ」大將、仲忠「いと怪しく。げに一所に(三)(四)思ひの外の住居にてさふらはせ給ふ心慰めには、げに明暮きこえさせ承らむを、慰めにせむ、となむかねて思ひ(五)給へしを、何の、いふらむやうに、心靜にも侍らずなむ。昔の心ばへ、たゞ思すらむ心のやうに。今は、いま少し睦まじうなむ、思ひ聞えさする」中納言、涼「いでや、かの京極殿を、世の中ゆすりて、珍らかなる樣に樓などつくらせ給ふと承るを、[illegible]うとき人々だに、定めて有るやうあらむと物し侍り。行政の中將、左兵衛督などものせられしと侍りしも著く、になく面白き事侍るめるを、などか、昔の御心ばへの名殘あらば、けしきばかりも聞かせ給はざらむ」とて恨み聞え給へば、大將殿(六)、

仲忠　紀伊國の吹上(七)のはまの濱べにて契りしかひはなぎさなるかは

〔語釋〕
(三)我と同じ都に

〔考異〕
(一)心安く—心安き
(二)給ふを—給ふと
(四)一所に思ひの—一所にあらず思ひの—一所によくもあらず思ひの
(五)思ひ—思う
(六)殿—ナシ
(七)吹上の—吹上が

のらう〳〵じく愛敬づき、いかなる樣をか(一)御覽じつけられむ、とこそ思ひ侍れ。まことや、此の樓作らせ侍る事を、今よりはいと(二)こと〴〵しう聞召しつゝ、尋ね問はせ給ふに苦しくなむ。御幸あるべく仰せられつる。本意なく騷がしくやあらむ。果て方になどは(三)、面白き事はあらむかし」など聞え給ふほどに、涼の中納言おはして、涼「久しく對面の侍らねば、參り來たる。嵯峨院に參りて、まかで侍るなり」と聞え給へば、仲忠「あな苦し。何事ならむ。院の、琴を興ぜさせ給へれば、來給へるなり」と宣ひて、仲忠「そのことのたひにやあらむ(四)」とて、仲忠「それへだに(五)こそ參り侍らめ、と思う給へれ。たゞ今かく侍り」とて、直衣著かへ給ひて、西の對と渡殿の南の間にて、對面し給へり。涼「一所にては(六)、覺束なからず承りなむ、とこそ思ひ給へしを、本意もみな違ひにけり。いにしへ契り聞え侍りし事どもは、皆ぞ思し忘れたりける。遙なる程に住み侍りし折にも、とりわきて、いかで對面もがな、と思ひ給へしに、たま〳〵の對面の有りがたくて侍りしかば、極

〔語釋〕
(四)未詳、誤あらんか
(五)當方より御尋ね申さんと
(六)同じ都に住む事となりては

〔考異〕
(一)樣をか—樣をかかつ
(二)いと—ナシ
(三)などは面白き事はあらむかし—など面白き事なむせむかし

なり。いと面白くなむ侍る」と聞え給へば、犬宮「さてちやはは(一)」と宣ふは、中に思す御乳母なりけり。仲忠「それは近う候ひなむ」犬宮「さば、宮、羨ましと宣はむ(二)な」、仲忠「されど、聲きかぬ程にこそは。侍りて、御乳ほしうおはしまさむ程は、ふとおはしまさせてむ」犬宮「さてなほ久しくや(三)、宮は見奉らざらむずる」仲忠「などてか。たゞしばしが程(四)なり」と聞え給ふにも(五)いと哀に、まつはし奉り給へるに、兒(六)におはするは、こしらへてもおはしなむ。宮いかに思し宣はむずらむ(七)、といとほしけれど、然るべき事ならねばと思す。仲忠「御前に乳母たちさふらひ給ふや。いづら(八)、この駒競(九)の音しつる人々も參れ」とておはしぬ。暮方(一〇)になりにけり。

仲忠「朱雀院(一一)に久しくさふらはで(一二)參りて、まかでつるまゝに、嵯峨院に召ありつれば、參りて、今まで侍りつるを、いと恐ろしう、御年の程よりはさかしう物仰せ(一三)らるゝ君にこそおはしませ。此の院の御前にさふらふは、恐ろしう、萬に宣ふ事

〔語釋〕
(二)犬宮が氣に入りの乳
(五)仲忠の心、女一が犬宮を寵愛せらるゝに
(六)子どもの方は職されてもあるべけれど
(九)前に「見つけて走れば」とありし童ども也
(一一)女一宮に語る也
〔考異〕
(一)ちやはは―ちやはははーちゝはゝ
(三)久しくや宮は―久しくや宮
(四)が程―ナシ
(七)宣はむずらむ―宣はすらむ
(八)いづら―いづこにや
(一〇)暮方―くれ〳〵方
(一二)さふらはで參りて―さふらひて
㊄涼、仲忠を訪ふ。樓の嚀。涼、犬宮を隙見す。歸りて妻今宮に犬宮の美しさを語る。
(一三)物仰せ―物を仰せ

〔語釋〕
（四）仲忠が
（五）女一宮
（六）誤あらんか

〔考異〕
（一）これら見つけて―これらにつけて
（二）いふがひ―いひがひ
（三）美しと―うれしと

見給へば、恥ぢ給ひてうち給はず。これら見つけて走れば、「いといふがひなき御供人かな。裳著たる足音にはあらずや」と宣へば、大人ども「げに」とて笑ふ。大將は、犬宮に聞え給ふ、仲忠「彈かまほしくし給ふ琴習はい奉らむ」と宣ふよりいと嬉しとおぼして笑み給へり。いと花やかに、見まほしう、愛敬こぼるばかりにておはするを、いと美しと見奉り給ふ。仲忠「琴習はせ給はゞ、宮には聽かせ奉らでなむ習ひ給ふべき。いと面白うをかしき處に率て奉りて、かんのおとゞはおはしましなむや」と宣へば、犬宮「さりとも、宮おはせではいかでか」と宣へば、仲忠「いとくち惜しく。さては不用に侍なり。人に聞かせで、仲忠、かんのおとゞなむ、人に敎へ侍る。しばし念じ給ひて、おはしませ。さてよく彈き取り給ひてむ程に、宮にはおはしましなむ」と聞え給へば、犬宮「さらばよかりなむ。などて宮には隱し給ふぞ」仲忠「みな人の聞くにも彈き給ふは、この侍る琴をなむ、さは彈き給ふ。これは異なり。人に聞かせつれば、聲もせず、みならはず侍り。宮も二の宮もおはせぬ所

は、げにと心安く覺えめ」大將、仲忠「昔の事は、委しうも知り給へず。仰せごとは、いとよく物し侍らむ。(一)今はほれ〴〵しうなりて侍れども、そのうちにも參りて、いとよく聞召させ侍りなむ」院、うち笑ませ給ひて、嵯峨「否。それはえあるまじき事なり。公私となくならはれたれば、かの兒に教へはてられむ末つ方なむ、いと聞かまほしき」などさま〴〵に、古の哀なる事も、いさゝかほけ〴〵しからず仰せらる。おはしまさむこと、(二)免あるべからず(三)宣はす。院のうちしつらひておはします。年高うならせ給へる樣ならず、いと淸らにめでたし。月の十五日には、僧あまた召して、御念佛、殿上人、上達部あまたして、それに堪へたる人しては、さうがう(四)せしめ給ふ。院のうち、儀式いとになし。かくてまかで給ひぬ。

犬宮の御方には、同じ母屋の西に、げに小さき几帳立てて、しつらひ給へり。小さき人人、さゝやかなる碁盤にて、碁うち居たり。御手の、綾のひとへの黑きよりさし出で給へる、いと美しげにおはす。(五)父君、仲忠「兵衛など、(六)犬宮といかゞうち給へる」とて

〔語釈〕
(一)母が
(二)嵯峨院が京極へ御幸あるべき事

〔考異〕
(三)あるべからず—あるべきならず
(四)未詳
(五)父君—父宮
(六)兵衛など—兵衛かれと

㊃仲忠樓上にて琴を教ふべき由を犬宮に告ぐ

も聽き給ひけり。俊蔭朝臣の、唐土よりのぼりて、琴を奉りしに、その音、例の琴にも似ず、響よくおどろ〳〵しかりしかば、彈きとゞめてともものせしにも肯かず、聞かまほしかりしかども聽かせず、斯かることとなる事を好みし間に、「文の道をばさる方にて、この方の師にせむ。女宮たちにも敎へ奉られよ」と度々言はせしにも肯かで、かの内侍のかみを、父母のかなしがる人にて、限なく勞はしう、またなきものに思ふと聞きて、心もありしかば、女方よりも度々ものする事ありしにも、いと心強う、心深かりし人にて、公を恨み、世の中を知らでなむ、身をも心づから沈めてし。その折の大臣どもの、「この國の爲の、限なき面目を弘めむ」と言ひ出だし立てし事を、此處には惜しみ思ひしかひなく、我一人に怨を留められしになむ、今に飽かずあはれに思ふ。「この御世にだに、かの勘事を、今はかく殘なき身に許されなば、如何に嬉しからむ、となむものしつる」とかならず傳へられよ。それを聞かむには、琴の聲を、あくまで彈きてきかせ給はゞこそ

〔語釋〕

（一）琴の

（二）俊蔭を遣唐使にやりし譯なるに

（三）俊蔭の恨を

（四）餘命幾許もなき身に

（五）俊蔭女に

しを、今ほのかに思ひ出づるに、いと(一)哀にゆかしき所になむあるを、如何なる業をせらるべきぞ、然るべき事あらばこかむ(二)の事おぼえて、交らまほしくなむある」と仰せらるゝを、常に(三)古のこと思ふにも聞くにも、哀にのみ物おぼえ給ふ(四)に、覺束なかりつる事も、明らかに宣はするに、面白う忝うおぼえ給ひて、仲忠「あなかしこ、御念佛にもなどかは、必ず参り侍りて(五)。昔がたは、年ぶかく参り(六)侍らで、思ひ給へ憚りしを、今は快く、何かの事のをりにも、仰言のまゝにこそ、背かずは侍らむと思ひ給ふるに、仲忠こそはへだてあらためられめと思ひ給ふるうちに内侍のかみ本意ありて、今はかの所には侍らむ(七)。ついでに、一の宮の若君(八)の、今はおよすけて、琴彈かまほしうし給ふに、敎へさせ侍らむとてなむ、大方にては、靜ならず侍れば、すこし離れて高き様なるもの建てさせ侍るを、然ことぐ〜しく人の奏するにや侍らむ」院、大におどろき興ぜさせ給ひて、嵯峨「行幸(九)よりは、それこそ天下に面白きことはあなれ。朱雀院は、内裏にても、相撲のをり

〔語釋〕
(三)仲忠の心
(五)「侍りてむ」歟
(六)「年ふかく参り」は「年若く思ひ入り」歟
(七)誤あるべし
(八)犬宮

〔考異〕
(一)いと—ナシ
(二)こかむの事おぼえて—こうむの事おはくて
(四)給ふに—給へば
(九)行幸—みゆき

がなと、今一度とのみぞ思ひ出づる。あはれに心細き慰めにと思ふかな。まこと(一)や人の聞ゆるは、舊き跡あらため造られて、樓など珍らかなるさまに造りて、いと面白きことあるべしといふを、(二)などかいと心憂く、むげに(三)思ひ棄てられ給ふらむ。院の御幸内裏の行幸などあらむには、こゝにも對面のかたに。人々にはさやうの序にだにいかで、となむ思ふ」(四)と宣はすれば大將殿、仲忠「畏まりて承りぬ。屢〻もさふらひぬべきを、公私と、えさらぬ事(五)どもの侍りてあけくれ暇候はずしてなむ。宮の(六)御事は某が取り申しつる事にも侍らず。ことに觸れて、忝く、如何にと畏まり給ふる事をなどなむ、(七)いとよく仕うまつるを、思ふ事ものせむと(八)宣はせてなむ」と聞え給ふ。院、嵯峨「(九)(一〇)かの所ゆかしう覺ゆることは、(一一)昔の滋野の王布留朝臣のないはう(一二)は、わが祖母にいまそがりし宮なり。俊蔭朝臣の母の源氏は、御息所腹のまた妹なりしかば、我まだ親王なりし時かの祖母宮の住み給ひし時、いとおもしろかりし所なりしかば、(一三)これかれ春秋文作りにものして見(一四)

〔語釋〕
(三)我を
(六)女三宮を兼雅が迎へ取りし事
(八)兼雅が
(九)京極の舊邸
(一一)俊蔭の妻の父
(一二)「内方」歟、妻をいふ

〔考異〕
(一)まことや人の聞ゆるは—まことにある人のいふ
(二)いふを—きくを—のみきくを
(四)と宣はすれば—ナシ
(五)事どもの侍りて—事ども侍りて—事ども侍るに
(七)なむいとよく—なむといよ〳〵
(一〇)かの所ゆかしう覺ゆることは—かの所なむゆかしと覺ゆるやうは
(一三)これかれ—ナシ
(一四)見しを—見しをば—見しに

れたらむ悦も、今は斯く(一)なりたりとも、然りとも(二)此處にこそはせめ。いと嬉しく、一の宮の御許に此の手のとまるこそ、本意なる心地すれ。さて、暇は、心しづかにて見許されがたくや物せられむ。如何に」と宣はす。大將殿、仲忠「この事(三)をなむ。たゞ御氣色になむ侍る」「難かるべうとも、然こそはあべかめれ(四)」と仰せらるゝ。(五)かの書の殘ゆかしく思ふ樣など仰せられて、まかで給ふに、嵯峨院の藏人、御使にて、(六)御車のもとに寄りて、藏人「殿に參りて侍りつれど「院になむおはします」と侍りつれば。必ず參り給ふべき」と聞ゆれば、やがて參り給ふ。外の方に(七)おはしましけり。嵯峨「月ごろ待ちかねてなむ。然るは、いと嬉しき悦もいかでかと思ふや。この事は、一條に心苦しうて物せられし宮の(八)、あはひめ見(九)ゆるさまにてなむある、とものし給へりしを(一〇)、その事(一一)、御許に言ひ催されたるになむ、事に觸れて(一二)いと哀にうれしと言ひ給へば、行末今はいと短きに、いと嬉しくなむ。(一三)かくいと恐ろしげにて、人に厭はるゝ世に、(一四)四世のいかうにたたむ事も

〔語釋〕
(一)退位はしたれども
(五)仲忠が進講したる俊蔭の遺書
(六)仲忠の
(七)嵯峨院が
(八)女三宮
(一一)女三を兼雅が迎へしは仲忠の勸めによりしとか
(一二)女三宮が
(一三)かく老い朽ちて

〔考異〕
(二)然りとも―ナシ
(三)この―その
(四)あべかめれ―あるべけれ
(九)あはひめ見ゆる―あそび給へる―あはれめ見ゆる
(一〇)給へりしを―給ひしかば
(一四)四世のいかうにたたむ―しをのいかうにたたむ―しせのいかくるたえむ

なる事し給ふべき(一)ならむ」とゆかしがり給はぬなし。一二町を經て行く人々(二)の、此の樓の錦、綾の、許多の年月、さまぐ\の香どもの香にしみたる、風吹くたびごとに芳しきをめで怪しむ。

大將、院(三)に參り給へるに、朱雀「古き所、珍らかなる樣に、樓など造るべかなるは、如何なる事あるぞ。男ども、「いとをかし」などとこそ言ふめれ」と宣はすれば、仲忠「何でふことも侍らず。犬こそ(四)の、しづかなる所に侍れば、彼處にて琴習ひ給ふべかなり(五)。內侍のかみ、「いまはやうく\身あつしく侍るに、此の手傳へ留めむ事、今は誰にかは(六)」と侍るを、昔のやうにも侍らざめれば、仲忠、おほやけに暇賜はりて、心しづかにて物し侍らむ」と奏し給へば、いと御氣色よろしくて、朱雀「げに然るべき事なり。それこそ厭(七)なき事にはあなれ。相撲(八)にいとはつかに聞きて、えまた聞かずなりにしこそ、いとくち惜しけれ。はじめには、うたて心あわたゞしき樣ならむ。かならず、かの末つかたに、行きて聞かむ。思ひのやうに教へら

〔語釋〕
(三)朱雀院なるべし
(八)相撲節會の時に俊蔭女の琴を
(主)仲忠、朱雀院及び嵯峨院に參る。嵯峨院、俊蔭女の琴を聽きに京極の邸に御幸あるべき事を約す。

〔考異〕
(一)し給ふべき―し給へる
(二)人々―人
(四)犬こそ―犬宮
(五)べかなり―べきなり
(六)かは―「は」ナシ
(七)厭なき事にはあなれ―いとびんなき事にはあらざめれ

麗錦を張りたり。板敷にも、錦を張らせさせ(一)給ふ。わが御座所には、たゞ唐綾の薄らかなるを(二)、天井にも、張りたる板にも敷かせ給ふ。西の樓にかんのおとゞの御座所、東の樓には、犬宮の御座所(三)なり。濱床(四)をのみぞ、犬宮の御料は、さゝやかにせさせ給へる。その濱床には、紫檀、淺香、白檀、蘇枋をさして、羅鈿すり、珠入れたり。三尺の屛風四帖、唐綾に唐土の人の畫かきたりけるを、手づか(五)ら大將の張らせ給ひて、一雙づつ、二の樓の濱床の後に立てたり。樓の天井には(六)三尺の淺香を、かんのおとゞの御にも、これにもかけ給へり。いといみじき香の匂は、四方に薫りわたれり(七)。此のしつらひ、細なる有樣、造りはてたる(八)、照り輝き、珍らかなるを、工匠、造物所の者ども、「また斯かる事あらじ」と言ひ(九)思ふ。大將は、しばしにても、思ふやうにて珍らかなる樣にて、かんのおとゞをわたし奉りて、見奉るべきも(一〇)、犬宮のし給ふと、いとゞ美しう、すゞろにてはいかで見ましと、思ひ奉り給ひて(一一)、此の事を聞きつぐ(一二)人々ふかき心を知らぬは、「いか

〔語釋〕
(三)「お座所したり」歟
(四)帳臺の中の床
(一〇)此處誤脫あらんか
(一一)「給ふ」なるべし

〔考異〕
(一)張らせさせ—張らさせ
(二)薄らかなるを—筋ろちたるを
(五)手づから—こゝにて
(六)天井には三尺の淺香を—天井に三尺のからかみを
(七)四方に薫りわたれり—世にかうばしきよりも
(八)たる—たり
(九)言ひ—ナシ
(一二)聞きつぐ—聞きつつ

〔語釋〕
(五)仲忠の手を傳習し置きたらば
(七)あて宮の機嫌あしく

〔考異〕
(一)上わたらせ給へり―わらはせ給ひて
(二)なりぬるを―なりに
(三)給はめ―給ふらめ
(四)犬宮のうつし傳へたらむは―犬宮にうつし傳へたらむは―犬宮にのこし傳へたらむは
(六)につけて―つきて

㊀新築の樓の結構。

ば、上わたらせ給へり。(一)あて宮、「一の宮何事を思すらむ。この造りのよしある樓は、いみじうおもしろきことあるべかなり。内侍のかみもろ共にむかへて、犬宮に琴教へむを、一の宮聞き給はむに、世にさる事はまたあらじを。年頃聞かまほしうし給へど、こゝに聞かせずなりぬるを、(二)惜む手を、かの折にこそは、殘なく聞き給はめ。(三)羨ましうこそあれ。よろづの事よりは、面白きことを、明暮聞きてあらむことより外の事あらじ」と宣ふ御氣色むづかしければ、上にも、げに、いみじう有りがたき事ならむかしと思せど、物宣はで今上「犬宮のうつし傳へたらむは、(四)(五)東宮の御世に、さりとも飽くまで聞き給ひてむ。こと樣にはたあらじ。心のどかに物思ふこそよけれ。此の大將の事につけてこそ、(六)度々氣色あしう苦しけれ。(七)いたう腹立ち給はぬさきに」とてわたらせ給ひぬ。

かくて、樓にのぼり給ふべき程の呉橋は、いろ〳〵の木をまぜ〳〵に造りて、下より流るゝ水は涼しく見ゆべく造る。樓の天井には鏡がた、雲のかたを織りたる高

ど、あらはなるうち造り(一)などには、かの開け給ひし御倉に置かれたりける、蘇枋、紫檀をもちて造らせ給ふ。おろしがね(二)には、銀、黄金(三)に塗り隠をす。櫺子すべき所には、白く、青く、黄なる木の沈をもちて、いろ〳〵に造らせ給ふ。さるべき所々には、銀、黄金の筋やりたり。まづ門さして、大將殿おはし給ひて、御覧じて造らせ給ふ。中に勝れたる上手、いどみかはして、有り難うめでたう造る。

此の事を内裏、院にも聞かせ給ひ(四)、殿ばら聞き給ひて(五)、「珍らかにをかしき事なり」とて、涼の中納言、行政の中將、これかれ行きあひ給ひて、「いかで見む。あやしう、絶えず珍らかなる事出で來る所にてこそあれ。定めて有る樣あるべからむ(六)」とゆかしがり給ふ。藤壺の方の孫王の君の同胞の四の君、犬宮の御方の宮(七)の君といふに、物詣に行きあひて、宮の君「殿の、犬宮に琴教へ奉り給ふべき事なげき給ひし有樣、ほのかに聞きしは、少々の琴の音聞かむよりもめでたかりしものかな。「今まで教へ奉らせ給はぬこと」とてぞ歎かせ給ふや」など語り(八)けるを聞えけれ

〔語釈〕
(一)造作
(七)女一宮に仕ふる宮の君
(八)孫王君があて宮に

〔考異〕
(二)おろしがね—しろかね
(三)黄金—ナシ
(四)給ひ—給ひて
(五)給ひて—給ろて
(六)あるべからむ—あべからむ

なるにおほせ給ふ。北の對、西、東の對、ことにうるはしくよかりけり。四面に(一)かきのくに、白き壁塗らす(二)べかめり。この西の對の南の端に、坤の方かけて、昔の墓ありける迹のまゝに念誦堂立てたり。南の山の花の木どもの中に、二つの樓、長よき程に、こちたからぬ程に、たちまちに造るべし。西、東に(三)ならべて、樓の二つの中に、いと高き反橋をして、北、南には、(四)かうしかくべし。それに、(五)我は居給はむとす。仲忠「これ造らむには、なべての工は(六)えせじ。修理職の(七)中に、勝れたらむもの二十人を擇りて、(八)方分きて、心殊に造らすべきなり」とて、畫師召して、造るべきやう(九)仰せかゝせ給ふ。東の對の南の端には、廣き池流れ入りたり。その上に、釣殿立てられたり。その水のさま洲濱のやうにて、御前の南には中島あり。それに、樓は建つべきなり。「御殿の(一〇)長高けれども、外よりは南なる木ども繁ければ、透きて僅に見ゆべし。西、東の(一一)側よりは見えたらむは、柳の木どもの中より、木高くおもしろからむこと限なからむ」など人々興じ申す。樓の勾欄な

〔語釈〕
(一)未詳。一本「かきのま」
(四)格子歟
(五)仲忠は
(一一)「側よりは」の「は」衍文歟

〔考異〕
(二)べかめり—べかんめり
(三)ならべて—ならびて
(六)えせじ—よせじ
(七)中に—なにがし
(八)方分きて—かたはなる事なく
(九)仰せかゝせ給ふ—仰せ給ふ—宣はせ給ふ
(一〇)長高…繁ければ—長の高きをそれよりは南なる木し繁ければ

り給はず。祖父大臣、ゆかしがり聞え給へど、更に見せ奉り給はず。公も、かの讀みさし給ふ文聞かまほしうし給へど、とかう免れ申し給ひて、おぼろげならで參りにくくし給ふ。

かくて京極におはして、靜に見めぐらし歩き給ふに、世の中にありとある木草、花紅葉、數をつくしてあり。唐土にもありけるものの、實をかしく、花紅葉めづらかにする木草どもの種をさへ、植ゑおき給へりけるも、山なる所々に、いとおもしろく、何とも人知らぬ、生ひたり。一歳は、おほよそにこそ面白しと見給ひしか、のどかに今見給ふに、かゝる所なし。年經たる巖の、いろ〳〵の苔、生ひ樣もいとをかしう珍らかなるを、立て置かれたりける。さらに取り動し直すべきにもあらざりけりと見給ふ。治部卿は、うつほの卷に見えたり。其の後大辨滋野の親王の聟なりしかば、この家もと名高き宮とて、今の世のおもしろき所にはいひ勝れたるなり。この三月十餘日ごろより造るべき山を、修理頭、宮の乳母の同胞

〔語釋〕
(三)仲忠が
(六)藏開の時の事
(八)「治部卿…いひ勝れたるなり」は傍註の攙入せるなるべし。一本「うつぼの卷に見えたり其の後大辨」なし
(九)「いひ」は「いと」歟

㊉仲忠京極の舊邸に大宮に琴を敎ふべき樓を造る。人々の噂。

〔考異〕
(一)給はず祖父―給はずたゞ二宮ばかり女御殿とは見奉り給ふ
(二)かくて―ナシ
(四)木草―草木
(五)山なる―山中
(七)一歳はおほよそに―一歳はいたくおほよそに
(一〇)ごろ―ナシ

宰相上 故郷はいづくともなく忍草しげき涙の露ぞこぼるゝ

とてさし出で給へれば、見給ひしもげに如何にぞ(一)と、哀におぼえ給へば、御筆のおろしにて、

仲忠 住み來しも見しもかなしき故郷を玉のうてなになさばなりなむ

など聞え給ひて出で給ひぬ。

大將は、御德もいといかめしう、大殿に次ぎ奉りては、この殿を、天下世の人もかしこう賴み奉り、參り集ひ、何事も物宣へなど思へり。(二)一の宮は、犬宮と雛遊し給ふ。(三)御かたち日々に光り勝るやうにおはす。(四)いみじう腹立ち、恐ろしきものの心にも、見奉らば萬の事わすれて笑まれぬべし。あて宮も、今のほど斯くはえおはせざりけむと、思ひ泣ぶべき様ならず見え給ふ。御乳母五人、宮の(五)君、源氏の君と、御乳主。乳母子六人、おなじ程にて、長五尺なる裳を、結ひ籠めに著せ給ひて、御遊の具にてさふらはせ給ふ。これより外の人々には、見せ奉

〔語釋〕
(二)女一宮
(三)犬宮の

⊕犬宮の美くしさ。仲忠の祕藏。

〔考異〕
(一)如何にぞ—「ぞ」ナシ
(四)いみじう—いみじき
(五)斯くはえ—かくばかりにて

昔の世の中の事をかけじ」と宣へば、俊蔭女「たゞ、今めかしきことの限もおぼえ給ふなるかな」とて、斯く書きつけて居給へり、

俊蔭女 いにしへのちゞやちぐさの物思ひを今もかなしといかゞ忍ばむ

と書き給ふにも涙落ち給ふを、殿もあはれに覺え給ひて、兼雅「いでや、

兼雅 ちぐさには涙ぞ露とむすびけむかゝるこの世に思ひ遂げなむ

おろかなる御守か。

と書きつけて見せ奉り給ふ。大將、これを取り給ひて、出で給ふまゝに、對におはして、仲忠「久しく參らず」と聞え給ふ。御褥まゐらせ給ひて、ゐざり出で給へり。宰相上「げに、覺束なき程になり侍りにけるかな。いとうれしく宣はするに、萬の事みな慰まれ侍りてなむ、明け暮らし侍る」と聞え給へば、仲忠「あやしき故郷の侍りつる、ついでに、今めかしき御中に宣へる事」とて、ありつる物御懷より引き出でて見せ奉り給へば、いと哀におぼえ給ひて、かたはらに、

〔語釋〕
（三）宰相上の方
（四）兼雅夫婦の贈答の歌を

〔考異〕
（一）今めかしき—いまはしき
（二）あはれに覺え給ひて—いでや—哀とおぼえ給ひて いでや—哀におぼえ給ひて いとしく—あはれにおぼえ給ひて

かで、世にあらまほしく珍らかなる事を御覧ぜさせむ、となむ(一)思ひ給ふる」など哀なることども聞え給ふ程に殿、兼雅「前おふ聲して、久しくなりぬるは、ことにものせらるゝにこそありけれ」とて、御子いだき奉り給へり。宮の君、「まろも」と聞え給へば、宮をば、肩にかけ奉り給ひて、いま一所をば、たゞにかき抱きておはす。若君もおはしたり。いづれとなく、樣々に淸らに美しげにおはする、うつくしう見奉り給ふ。かんのおとゞも、大將の御氣色も、泣き給へりけるを、兼雅「など例ならぬ樣に見え給ふ。もし、(二)宮の御事、對などの人々の中に、便なき事言ふやあらむ」と、大將思すらむ事恥かしくて宣ふ。かんの殿、いとよう笑み給ひて、俊蔭女「あな物狂ほし。京極つくらむとあるにつけて、哀なる事(三)思ひ出づるなり」殿、兼雅「それこそは、(四)思し出でむにいと苦しけれ」とまめやかに宣へば、俊蔭女「怪しく、(五)それより前にも、いみじう哀なる事どもは無くやは」と聞え給へば、兼雅「そよ。それにつけて、物思はせ奉りけむを思ふに、いと苦しうなむ。いかで、

〔語釋〕
(二)女三宮、「御事」は「御方」の誤なるべし
(三)「思ひ出でつるなり」歟
(四)自分が俊蔭女を棄て置きしを思出さるべければ也
(五)兼雅の關係なき時分にも

〔考異〕
(一)思ひ—思う

〔語釋〕
(一)京極の舊邸
(三)兼雅
(四)仲忠の言ふに隨ふべし
(五)故俊蔭の追善
(八)「こゝろぐ〵」は「ところぐ〵」の誤なるべし
(九)兼雅存生中は出來がたかるべし
(一〇)佛事なるべし

〔考異〕
(一)造り—造らし
(六)いかでと—いかでかと
(七)私—私と

るべき様に造り(一)しつらはせ侍りて、となむ思ひ侍る。萬の處よりも、かの殿(二)をなむ、然ものせむに本意のごと侍るべき。殿(三)や便なしと宣はせむ。仲忠、これこそは一生の大なる大事に思ひ侍れ」かんのおとゞ、俊蔭女「更なる御事なり。便なしとありとも、それにやは。たゞ宣はむ(四)にのみこそ。彼處はいと世に異なり。年頃思ふに、なほ聞きわたり、住まゝほしう思ひ侍り。心のどかに昔を思ひ出でて、然べき尊きことをもせさせ、行も彼處にてせむとなむ思ひ侍る」など宣ふに、涙もとゞめ難う落ち給ひぬ。大將も、かなしき事や思ひ出で給ふらむ、泣き給ふ。仲忠「よく思し仰せらるゝ事なり。仲忠も、世の中といふもの、常なきものなり、しづかに、時々は籠り侍りて、見給はまほしき法文、書どもも侍り。然るべき昔(五)の御爲の事どももいかでと(六)思ひ給ふるも、公私(七)(八)こゝろぐ〵の暇なく侍るになむ。しづかなる御行、(九)殿の御世の間はせさせ給はじ。尊きこと(一〇)はしも、思ふやう侍り、犬宮の、思ふやうに物し給はゞ、さやうの折にも、猶かくてこそは御覽ぜめ。い

（語釋）
（一）小君を
（二）「おとゞの」の「の」衍文なるべし
（三）「おとゞの」の「の」衍文なるべし
（四）今までなぜ大宮に敎へざりしぞ
（六）母を誦じて
（七）「愛らしくも」の意歟一本「あやしく」
（八）犬宮が

（考異）
（一）には—「は」ナシ
（五）までは—「は」ナシ
（九）おもひ—覺え
（一〇）人—いと

きかし。大殿の誦じ給ふ御聲にはまさるなめり。いとおもしろう哀になむ」仲忠「いとをかしう侍る事かな。犬宮の御事をこそ、何事にもまづは思ひ侍るに、妬く疾くもおとなしう敎へなさせ給ひてけるかな」かんのおとゞの、俊蔭女「心憂くもわきまへ給へるかな。よくぞ、私のものにし給ひてける。いかゞ御琴は、今までは」と聞え給へば、仲忠「いと彈かまほしう物し給ふを、いかゞとのみ思ひ給ふる。公にも院にも、御氣色賜はりて、暇申して、よろづを棄てて靜にこもり侍りて、忝くとも、おはしまさせて、おぼつかなき所々も承りてとなむ、夜晝なげき思ひ給ふる」かんのおとゞ、俊蔭女「げに、その御事をなむ、こゝにも思ひ給ふる。いとあいしくもなりにたるを、さらば、早う思し立てかし」仲忠「いと恐ろしうも物の心よう思ひ知りたる樣におはすれば、いとよう彈かせ奉り給ひてむ」と宣ふ。忍びやかに聞え給ふやう、仲忠「この事おもひ侍るなむ、多くのこと侍る。かの宮は、いと人騷がしく、不用なり。此の殿も、さるべきにも侍らず。京極を、然

〔語釋〕
(一)女一の彈くやうに
(二)「など」衍文なるべし
(六)誤あらんか「みはし」一本「みはら」

〔考異〕
(三)あしうぞ―あしく
(四)侍らず―あらず
(五)出で―ナシ
(七)べかりきかし―べかめりきかし

出づればこそ、琴の音も彈くに隨ひてひゞき、萬の折にはあひ侍れ。(一)遊ばすやうに、たゞ彈きにやは彈くものならむ」と聞え給へば宮、いと哀に、疎ならむ心を思ひて彈きならすことにはあらざりけりと、恥かしく聞き給ふ。かゝりける事どもを、さても、などて一つをだに敎へらるまじき。など(二)、犬宮のをりこそ聞き習ふべかなれ」など宣へば、うち笑ひ給ひて、仲忠「今いとあしう(三)ぞ聞召してむを。まめやかには、此事を思ひ侍るに、獨寢たまはらまほしきを、如何にさても侍らむ、然るべき所を思ひめぐらし侍るに、こゝはいと騷がしくて、然るべきにも侍(四)らず。かんのおとゞの京極を、然るべき樣に、まかり出(五)でて造らせむ。此の頃、伊賀守辭するを、「明年の院の御給を、今年申させ給へ」と女御殿の御前に聞えさせ給ひて。さるべき屋どもは、一歲つくらせて侍り。對などなむ造らすべきやう侍る」とて「みはしにや侍らむ」とてかんのおとゞに參り給へり。御物語聞え給ふ。おとゞ、(六)俊蔭女「小君に千字文ならはし奉り給ひしかば、やがて一日に聞きうかべ給ふべ(七)かり

〔語釋〕
(一)俊蔭
(三)俊蔭

〔考異〕
(二)時には―時にこそ
(四)こそ―ナシ
(五)ほのかに鳴く―ほのかなる
(六)思ひあはせ―思ひあはれみ
(七)彈き出づればこそ―ひき侍れば

の朝臣は、七人の山人の中の劣りの手よりこそ、勝れたる極の手をば彈きとり給ひけれ。(一)仲忠が彈き侍るを、院の上などはよしと仰せらるれど、かんのおとゞを同じう宣へむとも覺えずこそ侍れ、かの彈き給ふ時(二)には、(三)治部卿いかに彈き給ひけむとこそ、昔戀しく思ひやられ侍れ。かんのおとゞは、如何は。一所におはして、(四)まづ仲忠が覺えむ限をこそは、習はし奉らめ。春は霞(五)ほのかに鳴く鶯の聲、花のにほひを思ひやり、夏のはじめ、ふかき夜の郭公の聲、曉空のけしき林の中を思ひやり、秋の時雨、夜の明かなる月、思ひ〳〵の虫の聲、風の音、色色の紅葉の枝をわかるゝ折のけしきを思ひ、冬の空さだめなき雲、鳥獸のけしき、晨の雪の庭をながめ、高き山の頂を思ひやり、したゝる池の下の水をあはれび、深き心たかき思ひも、諸の事を思ひあはせ(六)、世の中の、すべて千種におりと見ゆるものの覺ゆるもの、又時に隨ひつゝ、色衰へ、久しくなり、又むなしくなりぬるものを、心に思ひつゞけて、琴の音に彈き添へむと、思ひをなして彈き(七)

〔語釋〕
(二)わが人に勝りたる心地すといふのが御分りなさらぬは犬宮を何とも思はれぬからの事
(三)犬宮が物心つかば
(六)「人々だにこそあれ」なるべし
(七)仲忠は心靜に犬宮に敎ふる暇はあらじ

〔考異〕
(一)何を―「を」ナシ
(四)心―ナシ
(五)事かんのおとゞは―事となむ歎き侍るかんのおとゞは―事となむ歎かしう侍るかんのおとゞは
(八)心―ナシ

ひ侍れば、世の中に物思ふにこそなりぬべけれ。身に限りては、人にまさりたる心地こそし侍りつれ」宮、女二「何を(一)」と宣へば、仲忠「犬宮(二)などをおろかにおぼしたるにこそ侍るめれ。まだ這ひゐざり給ひし時だに、此の琴を見たまひて、いと彈かまほしうし給ひき。此の年頃は、月日も疾く過ぎなむ、(三)ものの心も知り給はば、(四)心靜にて然るべからむ所をつくりて、率て奉りて、習はし奉らむ、と夜は目をさまし、晝はこれを思ひめぐらし侍るに、本意のごと、靜なるべい事の、難かべいをなむ、如何樣にせまし、と思ひ侍る。來む年は七つになり給ふ。今までこれを敎へ奉らぬ事(五)。かんのおとゞは、四つよりこそ彈き給ひけれ。御袴著の事急ぎ侍りしに、ことにもあらざりけり」となげき聞え給へば、女二「げに、身にも思ふ事なり。然しもあらぬ人々(六)にだにこそあれ。世の常ならむは、いとこそ効なかるべけれ。そこにこそ、え(七)心(八)靜に物し給はざなれ。かんのおとゞこそは」と宣へば、仲忠「獨り離れてもえおはせじ。又下れる手よりこそ習ひ給ふべけれ。昔

心こそ恥かしけれ」(一)とて給ひつ。かれらの透箱一つにはからあや五疋、いま一つ
には沈紫壇の櫛あるを、對の御方に(二)奉らせ給ふとて、かんの殿、
俊蔭女思ひやる心をつげの櫛ならばおぼつかなさを嘆かざらまし
とて 奉り給へれば、御返、
宰相上そのかみにふりにしことを(三)改むるこれこそつげの小櫛とは見れ
おいのと(四)思う給へらるゝ。
と聞え給へり。さまぐ\に心にくく申しかはし給ふ。いと忍びて然べき折には、
此の御方には對面し給ひて、かたみに心ふかう、哀に聞え契り給ふ。
(五)大將は、院、内裏、東宮など、おぼつかなからぬ間に參り給ふ。また、動すれば召
され給へば、(六)心地さへ世に心しづかなる折なくおぼえ給ふ。宮に聞え給ふやう、
仲忠「身に思ふ事侍りし時、かくて侍りてば、心のどかに思ひなり侍りしを、犬宮
うまれ給ひて後は、いよく\命も惜しう思ふ事あるまじと思ひ侍りしを、よく思

〔語釈〕
(一)「とて奉り給ひつ」歟
(二)誤あるべし
(四)末詳。一本「をはのと」
(五)俊蔭女が宰相上に逢ひて

〔考異〕
(三)ことを—ものを
(六)給へば—給ふ

九 仲忠、犬宮に琴を教ふべき心構を女一宮に語る。母を訪ひて同じ事を語る。兼雅來合せて夫婦古を追懐す。

仲忠「疾く〳〵。」(一)と宣へば、孫王「さのみやは。まことは、いと美しき御有様を、つねに参らせ給へ」とて宮(二)もろ共に出で給へり。(三)見くらべ奉らせ給ふに、(四)うつくしげに、あてにけだかき事の、いとこと(五)の外にもあらぬを、子にひき連れて見むぞ、面だたしく覚え給ふ。銀、黄金のわらはの、相撲とりたる形を得(六)給ひて、まかで給ひぬ。

かんの殿に、仲忠「云々なむ」と聞え給へば、いと嬉しとおぼす。宮の君は、殿(七)をば「父君」とてむつれ奉り給ふ、大将をば餘所に見奉り給ひて、「大将参り給ふめりや」など聞え給ひてことにさし離ち給ふ。小君は(八)大将をば「父こそ」(九)とつけ給ひて、いとようし奉り給へば、をかしがり美しがり奉り給ふ。

(一〇)かくて大貳のぼり來て、殿に銀の透箱二十、唐綾、沈のみねに螺鈿すりたる櫛など奉りたり。内侍のかみ、宮の御方に七つ、我が御方に四つ、御方々にも二つ三つづつくばり奉らせ給ふ。殿は、人(一一)の御次第に宣へど、傍蔭女「然べき事なれど、人は(一二)

〔語釈〕
(二)東宮
(三)仲忠が
(四)小君の様子
(五)あまり東宮と違はぬを
(六)小君が頂戴して
(七)兼雅
(一一)人によりて等差をつけて贈れと宣へどの義歟

〔考異〕
(一)と宣へば—とのみ宣へば
(八)小君は—宮は
(九)父こそ—はゝこそ
(一〇)かくて—ナシ
(一二)人は—人の

㊇傍蔭女、太宰大貳の贈物を人々に分つ。

何に」と宣へば、仲忠「さらに、いと見苦しう。たゞ宮の御眞似をして、さがなう心強く、なまめかしきけも侍らず。されば、宮にも、あからさまにも率て參れば、見給ふとて、「生れし時より心恐ろしきものと見き。犬宮の同胞にはあらざめり(一)。率て去ね」とぞ宣ふ。おとゞはたゞ心にまかせて見給ふ。不用のものなり。此の君、仲忠らが(二)教へむことも聞きつべし。手などもいと美しう書き、聲もいとをかしうぞ侍る」東宮、「藤壺の御方にいざ」と率て(三)おはす。大將參り給ふ。内にたゞ呼びに呼び入れ給ひつ。几帳ばかりひき寄せておはす。いみじううつくしがり給ふ。大將孫王の君に、仲忠「いと幼き人(四)參り給ひにけり。呼び入れ給へ」孫王の君、「いと美しきは、誰に奉らせ給ふにかあらむ」とて隱もあらせ給はざめれば大將、仲忠「あらじものを、くは(五)、見給へかし」とてむき(六)給へ(七)ば人々笑ふなり。仲忠「まことはけさ(八)のたまひもあなれば、物のはじめにゆゝしきを、いかでか」とて、仲忠「まかでさせむ」と宣へば、あて宮「あやしの事や」とて忍びやかに笑ひ給ふけしきも聞ゆ。

〔語釋〕
(三)若宮を
(四)あて宮が
(五)すは。一本「よく」又「人々」
(六)「向き給へば」の意歟
(八)誤あらんか。一本「まことはまことゝけさのたとひもあれば」

〔考異〕
(一)あらざめり—あらざりけり
(二)仲忠らが—「ら」ナシ
(七)給へば—給へれば

㊆仲忠、小君を携へて參內す。東宮小君を携へてあて宮の許に至る

〔語釋〕
(一)仲忠の男の子
(二)誤あるべし
(八)東宮腹

〔考異〕
(三)御裝束し給ひびづち結ひ給へれば—御裝束はし給ふびんづら結ひ給へるは
(四)仕うまつれ—つかまつれ
(五)給へば—給ふ
(六)宣はすれど—宣へど
(七)いで—いでて

宣ふ。

かくて、內裏東宮にも、若君(一)見まほしうせさせ給ひて、度々宣へば、おのれは、(二)若小君ゐて參らせよとて、參らせ奉り給ふ。かんの殿の御方にて(三)御裝束し給ひ、びづら結ひ給へれば、いま少しをかしげに、めでたくおはす。率てまゐり給へれば、內裏、東宮も一所におはしまして、「いと美しき人なりけり」と宣はす。有樣らうたげにをかし。琵琶召して、「彈け」と宣はす。しばし御答もし給はねば大將、仲忠「なほ仕うまつれ(四)。まだいと幼く侍り。大なるは、人に抱かれてなむ彈き侍る」と奏し給へば(五)、女房たちあまたさし出でて見る。源中納言、涼「この聞きつるはこれか。いと美しかりける人を、今まで見奉らざりけるよ。この膝にを」とて抱きて彈かせ給へば、少しばかり、いとになく彈きてさし置き給ふ。上も宮も、「やがて留めむ」と宣はすれど(六)、仲忠「まだいと幼く侍りて」と奏し給ふ。中納言忍びやかに、涼「いで(七)、その宣ふ宮(八)とて、かたじけなけれども、此の若君にはまさり給はじ。如

〔語釋〕
(一)かく俊蔭女一人を守り居りても手柄でもあるまじ
(二)宰相上
(三)兼雅が
(七)梅壺

〔考異〕
(四)十五夜は―十八夜は―二十日をば
(五)外は―外をば
(六)などには―にも―に

よくなむあるべき。左のおとゞは、宮、大殿、いとうるはしくこそ、十五夜づつおはしつゝ、子どもいづれともなく思ひかしづき給へ。かくて添ひおはせむからに、かしこくやは有るべき。そが中にも、宮の御方は、院(一)のとりわきて思ひ聞え給ひて、をりをりも聞かせ給ふらむ、いと忝し。(二)對の君などは、御心ざまなどもあはれに見え給ふ人なめり。それぱかりには、なほこゝに聞えむまゝに、人よりは殊にもてなし給へ。大將も「伯母君の、泣く泣くよろこび給ふなる、おのれ一人して思ひ聞ゆるも、ゆゝしくのみ覺ゆるに、心深からむ人には、思ひおかれ給ふらむぞ嬉しき。行末に行きあふ事もあるものなり」など切に聞え給へ(三)ば、十五夜(四)は此方に。その外(五)は、宮の御方などには(六)」など宣ふを、兼雅「さばその程に、思ひくにおはせむ」と宣ふ、兼雅(七)「更衣の方は、らうらうじく、くせぐせしう物し給ふ。式部卿の君は、心おきなくて、乳母の物言なめし。對の君は、おいらかなれど心深ければこそ人々の御爲にも心安けれ。それぱかりは、げに宣はむに隨はむ」など

〔語釈〕
(一)兼雅が
(二)仲忠が
(三)「背き給ひ」なるべし
(六)兼雅が俊蔭女の處にのみ居るは
(一一)外の女の許へ兼雅が通ふを俊蔭女が不満に思はゞ遠慮もあるべけれどの意歟

〔考異〕
(四)給へるを取り—給へるをなほ取り
(五)見給へるを—見給ひつるを
(七)十日—十夜
(八)十日—十夜
(九)給ふ人も—給ふも—給はむも
(一〇)ものしたる事はまた—またものしたる事は

給へば、仲忠「いとよう仰せられたり。爰にかくて、わが御儘にておはします。仲忠侍り。今は人とかく申すべきならず、聞えにくきを、宣はせむ序に、申し出でむ」と宣ふに、入り(一)おはしたり。いとをかしと(二)見奉り給へり。仲忠「人々の、あるは世を背き(三)給ふ、所々に幽にてものし給へる(四)を、取り申すまゝに、目やすく斯くものせさせ給へるを、いと嬉しく見給へる(五)を、一方(六)にのみおはしますは、いとものしき様に侍り。此方に十日(七)、宮の御方に十日、いま十日(八)を三所におはしませむ」と聞え給へば、うち笑ひ給ひて、兼雅「いとあやしく、果は有るまじき事をさへ物せらるゝ。昔若かりし時こそ、さまよひありくも目やすく、見まほしく思ひ給(九)ふ人もありけめ。今は身の覺えも花やかならず、腰も痛ければ、え歩くまじ。一所にもの(一〇)したる事はまたいとをかしう、いかゞ人も思ふらむ、とてこそあめれ。あるまじき事なり」と宣へば内侍のかみ、俊蔭女「否や。御心さりとていかゞなど思はばこそあらめ。人々もつれ〴〵にながめ給ふらむ。さてうち通ひ給ひて(一一)おはせば、

〔語釋〕
(一)女三宮付の女どもは
(三)兼雅
(四)俊蔭女の方に
(六)女三宮

〔考異〕
(二)安からぬ世の中かな—安からず世の中あぢきなう
(五)給ひて—給うて
(七)よろしきに—よろしく

など宣へば、御かへり、

兼雅 餘所ながらおもひかさぬる山菅をひとつにつらき例とやする

目もたど〳〵しく、今は覺え侍るを、なほ昔のやうに、近き程にやはものせさせ給はぬ。

とて、後にむかへ奉り給ひて、東の二の對の、北の廊かけておはす。なかにも宮(一)の御方の人々は、「安(二)からぬ世の中かな。あはれ古を思ひかへせば、わが君かゝる御住居をせさせ給はむとや思ひし。品にもよらずや」など言ふを、かんの殿の人々聞きてまねび聞ゆれど、俊蔭女「あなかしこ。ゆめ聞き入るな。下人は然ぞあなる」とていと淸らにもてなさせ給へり。殿(三)は、一月を、二十五日は此方(四)に、いま五夜をば宮の御方、この對などには通ひ給ひ(五)て、晝も此方にのみおはするを、かんの殿、俊蔭女「なほこれなむ、いと見苦しく見奉る。今は心しづかに、時々は行もしてあらむ。宮(六)の思すらむこともあり。これよろしき(七)に聞え給へ」と大將に聞え

（語釋）
（一）誤あるべし
（三）俊蔭女の侍女の侍從といふ女
（四）宰相上の侍女の少將といふ女
（五）伯母君等のいふ也
（六）「御心の」の「の」衍文なるべし
（七）母俊蔭女の
（八）兼雅
（一〇）小君が
（一一）宰相上を兼雅が迎へて己を迎へざるを
（一二）今「りうのひげ」といふ草

（考異）
（二）たとしへなく—「し」ナシ
（九）こそ—こそは
（一三）つゝみてかうの—たゝみてからの

㊅兼雅梅壺を三條に迎ふ。俊蔭女に對する他の妻妾たちの嫉妬。俊蔭女、兼雅に愛を他の女に分たんことを勸む。

普く情あり、世に久しくおはせばこそ、己なくとも、大將の御爲にも頼もしう善からめ。顔容貌の、さ（一）思ひ給へらむに、物しく心も見ゆるもなし。いとたとしへな（二）く思し給はむをこそ、人はうたてなむ見奉らめ」などうち〳〵に聞え給ふ事を、（三）かの御方の侍從の君、（四）對の御方の少將の君とは、從姉妹どちなれば、往きあひて語れば、伯母君も母君も、「嬉しき事」とよろこび給ふ。「（五）大將の（六）御心の有樣かたち、よくおはするは、（七）この御心ばへの斯うおはすればこそ有りけれ。（八）この殿の御心は、いでや。心深からざらむ人は、人のいはで思ひたらむ心ばへなどこそ（九）思ひ知り給はね。うべたゞ大將殿をのみ（一〇）思ひ聞えたりけり」など宣ふ。

かくて後、梅壺の更衣と聞えし、（一一）怨み聞え給ひて、（一二）山菅を（一三）つゝみてかうの扇、薄樣の中に入れ給ひて、

梅壺　うらやましおなじ麓の山すげもわきてぞ人はおもひかさぬる

思ひ出づること多く。

〔語釋〕
(一)兼雅の心
(二)小君
(四)兼雅が
(六)北山の空洞の住居の時の事をいふなるべし

〔考異〕
(三)あなれ—あんなれ
(五)見捨てて—うち見捨てて
(七)心憂しと—心憂くぞ

まゝにうつくしう見給ふ。御遊の具によかめり、大將子すくなう物し給ふに、かたみに行末を思ひ後見るも善かりけりと思す。(一)入り給ひて、兼雅(二)「對の子を人々のをかしと言ひつる。あやしきは、大將見つけて侍りし、宮などにも睦れおそび給へるめり。我をば親とも思はず。子は、誰とも言はで、つきたればこそらうたけれ」と宣へば、俊蔭女「理にこそあなれ。(三)小き人は、たゞ思ふ人に睦るゝものなり。一日見奉りしかば、對の簀子にて、(四)宮をいだき奉り給へりしに、宮の君「まろも〳〵」とありしをいだき給ひしに、打見あげて立ち給へりしを、小き心地に見捨てておはせしかば、一人勾欄にながめてなむおはせし。などか、この君も、時(五)時は抱き奉り給はざらむ。すべて、かゝる御心のあれば、月を經しかど、物の思ひ出でもなくて、おはして、(六)いみじき門の限見しぞかし。涙落ちぬべく、つらき氣色みえ給ひしか。大將は、宮をも誰をもわかず、さま〴〵にこそ思ひ聞えたれ。かの伯母君などの見給はゞ、(七)心憂しと思ひ給ひなむ。人の歎負ひたまはず、

へば、「かの御子か。いとかしこう似給ふめり(一)。宮の君はらう〳〵じく、これはなまめかしくおはすめる(二)」などて(三)呼び奉り給へれば、おはしたり。御髪も、なかに長く淸らなり。大將殿(四)、宮に、仲忠「參り給はむには、指貫著てこそ」と宣へど、宮も、女二「宮の君もかやうにこそ(五)」とて著せ奉り給はぬなりけり。案内も知らぬ人は、「大將の一つ(六)御腹なめり」と聞ゆ。宮笙の笛、宮の君橫笛、皆いとめでたく吹き給ふ。「此の君何かし給ふ」と聞え給へば、「琵琶ひき給ふ」と宣へば、「いとをかしき事かな」とて大殿の侍從大納言の御太郎、藤宰相の御弟四位の少將、大宮の御方に琵琶聞え給ひて(七)、「これ」とて彈かせ奉り給へば、小君「人に抱かれでは彈き侍らず」と宣へば、「おはせ〳〵」とて抱き給ひて、彈かせ奉り給へば、いとになく面白くひき給ふ。笛にひきあはせて、三所あそび給ふ。人々、「いと珍らかにをかしき御有樣どもなり。內裏などに御覽ぜさせばや。いみじき物の上手は、またも出で給ふべき所なめり」と感じあはれがり給ふ。大殿も、さ

〔語釋〕
（三）「などとて」なるべし
（六）小君を
（七）琵琶を請求して

〔考異〕
（一）似給ふめり―わたらせ給ふめり
（二）おはすめる―おはすめるは
（四）大將殿―「大將」ナシ
（五）宮の君もかやうにこそ―宮の君もわがやうにぞ―宮の君にもさやうにこそ

供十餘人して、いときら〳〵しくてわたり給ひぬ。大將、仲忠「などか、曉がたにはなり侍りぬらむかし」と申し給へば、兼雅「いとうたて、渡らじとありつれば(一)、若人も、もろ共に、とて強ひてなむ物しつる」とてかんの殿の御方(二)へおはせむとし給へば、仲忠「早しづまりて人も寢入りて侍らむ」とてみな思ふやうにおろしおきて、出で給ひぬ。(三)宮に、仲忠「あやしく夜更け侍りにけり、おとゞ(四)、今めかしく(五)古事あらためさせ給へるとて」女一「何事ぞ」仲忠「さら(六)の人なり」など聞え給ひて御殿籠りぬ。

かくて、參り給へれば(七)、若君の、此の(八)殿をば「父こそ」とて、睦まじうまとはし奉り給ふ。居給へる所にも、いと近う睦れ居給へり。(九)殿をば「殿」と聞え給ひて、ことに睦れ聞え給はず。

小弓射給ふ日、大將殿の君だち、大殿(一〇)へあまた參りたり。梨壺の宮の君、此の若君の、いと淸げに(一一)裝束きておはする、人々若君を「いと美しげにおはするは誰ぞ」と問ひ聞ゆれば、「おとゞの子少く、さう〲しとて物したためる」と聞え給

〔語釋〕

（三）女一宮

（四）兼雅

（六）誤あらんか、「さら」一本「さう」

（八）仲忠

（九）兼雅

（一〇）兼雅の處

（一一）此處誤脱あるべし

〔考異〕

（一）ありつれば—ありしかば

（二）御方—御前

（五）今めかしく—今めかしき

（七）給へれば—給ひつれば

かでか」と宣へば、宰相上「さらば、今(一)すこし大人々々(二)しからむ程に、物せさせ給へかし。心細げにものせらるゝ人を、いとうしろめたく侍ればなむ。なほ後に」と聞え給ふ、兼雅「それも、やがてもろ共に、物せさせ給へ。人も住まで、いと心やすき所ぞ」女君、宰相上「(三)いかでか」殿、兼雅「昔には似給はず、いと心憂く思しなりにけり」とまめやかに恨み聞え給へば、うち笑ひ給ひて、宰相上「昔の心のやうには、實にえあらずこそは」と聞え給へば、兼雅「吾が佛。理(四)には、聞ゆる限りもあらず。疾く〱」と宣へば、宰相上「かゝる所に、(五)一人離れておはせむが、いと心苦しう覺え給へばなりけり。然ば聞えむ」とて入り給ひて、宰相上「なほこの度(六)とあめるを、わたり給はずば、更に物し侍らじ」と聞え給へば、伯母「あな見苦し。さらば」とて出で立ち給ふ。大將の御許に、兼雅「その御車只今賜へ」と聞え給へば、奉り給へり。これの女君、若君の御乳母(七)を御車には(八)伯母北の方、御親族におはする大輔の君、少將などいふ乗りぬ。次におとな三人、童二人乗りぬ。さるべき御

〔語釈〕
(一)小君が成長してから連れゆき給へ
(四)「理は」歟
(六)兼雅が今日引越せと勸めらるれど伯母君と一緒でなければ行かぬ積
(七)誤脱あるべし

〔考異〕
(二)大人々々し—大人し
(三)いかでか—わが君いかでか
(五)には—「は」ナシ

燈の下に立ち寄りありき給ふ。見給へば、おとな四五人ばかり、小くて(一)をかしげなる童などあり。いと目やすし。昔いときらやか(二)なりし人の、いとめでたくてしつらひ、聟取り(三)給ひしを、思ひ出で給ふも、いみじう悲しうおぼえ給ふ。兼雅「わか君はや」と宣へば、大人しくつい居給へり。兼雅「此のわらはは、その燈取り寄せよ」と宣へば、持て參りたり。見奉り給へば、大將の兒なりし時、かくやありけむと、美しげに恥かしき顏の笑み給ふ(四)は、げに愛敬いとにほひやかなり。女君に、兼雅「いと怪しく、またも見せ給はで(五)、ひき隱し給ひてしこそ」など年頃の物語など聞え給へど、人(六)のやうにも恨み聞え給はず、たゞいとおいらかに恥かしう、いらへ聞え給へば、なか〳〵(七)宣ふべき事もなし。いと哀に昔思ひ出でられ給ふ。しばし打臥し給ひて、兼雅「夜更けぬらむ。いざ給へ」と聞え給へば、宰相上「こゝにもや(八)、さらば」兼雅「さて參り來つるぞかし」と宣へば、宰相上「何か、心靜に。かつ〴〵、然ば早う」と聞え給へば、兼雅「怪しき事。さらば、何(九)せむにか。また幼き一人をばい

〔語釈〕
(三)兼雅を
(四)小君を
(五)小君を
(六)宰相上が
(七)兼雅が
(八)我も行かねばならぬか

〔考異〕
(一)小くて—「て」ナシ
(二)きらやか—きよら—きよらか
(九)何せむにか—なでふにか

〔語釋〕
(三)兼雅を宰相上の所へ
(五)「織物に」歟
(四)なよゝか―なやゝか

〔考異〕
(一)おとゞ―との
(二)おはせめ―おもはせめ

五 兼雅自ら行きて宰相上を三條に迎ふ。宰相上腹の小君、兼雅に懐かずして仲忠を慕ふ。

して教へ給へるなめり。母君もいとよく彈きき」と宣ふ。かんのおとゞ(一)、俊蔭女「口暮れたらば、早うおはして、なほ一度にわたし奉り給へ。いでや、あやしく心憎き人、さま〴〵に集め給ひける程よりは、なまめかしくをかしくこそおはせめ(二)。左のおとゞは、いと愛敬づき、をかしくこそ見え給ふめれ」殿、兼雅「いでや、その大殿こそ、目につきて覺え給ふらむな。身の上めでたく、今めかしくおはしますを見奉り給ひて後こそ、己をも思ひおとして、かく恥のかぎり宣ひ出だせ」と宣へば、俊蔭女「例の事よ。さりとて、病したる理なれば。口ふたげ」とて薫物などよくせさせ給ひてやり(三)奉らせ給ふ。

御車にておはしたり。昔見給ひしよりも、いみじうなりにけり。几帳などは、いと淸げなり。たゞ入りに入り給へば、燈よき程にて、母屋に、いとなよゝかなる(四)袿に、柳の織物のうすき、織物(五)かさねて著て居給へり。わか君は、いと淸げに裝束かして直衣のかぎり著給へり。御髮は臑すぎ給へり。さがりば、いと淸らなり。

〔語釋〕
(一)「世の常にも」歟
(二)宰相上が來られなければ不都合なるべき由
〔考異〕
(三)さらずば―さらば―さらに
(四)はや―をや
(五)らうたく―らうたう

て、お前の村薄の上にうち懸けて走り出でぬ。「いとされて、くち惜き童かな」と言ふ。御返參らすとて、童「云々なむして、迯げて參りつる」と申さすれば、仲忠「いとをかしくしたり」と仰せられて、御袙一かさね賜はす。御文見たまひて、「さればこそ、悔しう、何せむに、(一)世の常もこそ思ひ給へ、かゝる氣色を見えぬらむ、と恥かしくおぼえ給ふ。

又の日、殿に參り給ひて、仲忠「昨日かしこにまうでて侍りき。いかゞ物し給ふ、見給はむとて、聞えしかば、自らはおはすまじげにこそ宣ふなりしか。度々、さら(二)(三)ずば便なかるべき由聞えしかば、しか〴〵宣ひしを、おはしましてなむよく侍るべき」と申し給へば、兼雅「怪しき事かな。などか然はあらむ。恐ろしげに、頭もなりにたらむ。容貌もめでたかりしが、あはれ今まで物し給ひける。琵琶は今の世に、さばかり彈きたる人はあらじはや(四)」と宣へば、仲忠「そよや。わか君こそ、しか〴〵物し給ひしか。理にこそ侍るなれ」殿、兼雅「をかしき事かな。らうたく(五)

のうちぎ、櫻の織物の直衣、躑躅の織物のさしぬきなど入れ給ふ。女のはかまの腰に、あかき薄様に、

仲忠人知れぬむすぶの神をしるべにていかゞすべきとなげく下紐

とて御文もなし。いと小き小舎人童「御返賜はらむ」といふ。宰相上「いと恥かしく、あやしき有様を思しはかり給ふ事」と宣ふ程に、これを見つけて、あさましく覺え給へば御返も聞え給はず。(一)母君、「いとあはれに忝く、(二)何事も思すまじく、萬に、此の御心の斯うもてなし給ふにこそあれ。なほしるしばかり(三)は宣へ」と切に宣へば、たゞ斯く、

宰相上うちとけてうらもなくこそ頼みけれ思(四)の外に見ゆる下紐

樣々にも見給へられて。

など聞え給へり。童に、躑躅のこうちぎ、若君の御今やう色のうちぎ一重添へてかづけ給へるに、使童「御返のかぎり」(五)とて取らねば、強ひて取らすれば、歩み避り

〈語釋〉

(一)「母君」は「伯母君」の誤なるべし

(二)宰相上の氣安き樣にと仲忠が心配するものと見ゆ

(四)仲忠の歌の戀を含めるを咎めたる也

(五)御返事だけ頂戴すべしとて

〈考異〉

(三)ばかりは―「は」ナシ

〔語釋〕
(一)母の性質をいふ
(五)あて宮
(六)「御心にもすこし」歟
(七)戀慕の情をもほのめかしたけれど
(九)「いと便なき事」歟

〔考異〕
(二)御心劣もやと思う給へる—御心劣るやと思う給ふる中に
(三)聞えさせなむと—聞えさせむなんど
(四)めでたく—めでたう
(八)べけれど—べけれども
(一〇)一くだり—一つには

りわきて思ひ聞えさせむ。睦ましく思さるべきものなり。いま近くても見給ひてむ。古めかしく、(一)いと心安く、御同胞などのやうに思されむに、いとよくなむ侍るべき」など聞え給へば、宰相上「いと嬉しきことにも侍るべきを、近くては御心劣(二)もやと思う給へる。こゝにも、いと心苦しくてものし給へば、「小き人は、添ひたる人も侍りなむ。餘所ながらも、今は頼み聞えさせなむ」(三)と聞えさせ給へ」など宣ふ樣の、いとめでたく、(四)限(五)なき人の御けはひにも通ひたれば、いとまめやかなる御心、(六)すこし僻言も聞えつべけれど、(八)有るまじく便なき事、と思ひかへし給ひつ、然(七)も聞え給はず。仲忠「いと(九)なき事。時々はわたらせ給ふとも、此度は、いかでか渡らせ給はざらむ」宰相上「今それは此頃過してなむ」と聞え給へば、仲忠「いとあしき御事に侍るなり。かの御本意なく侍らむ」など聞え給ひておはしぬ。

夕つけて、衣箱一よろひに、唐綾の瞿麥のうちぎ、濃紫の織物のほそなが、三重がさねのはかま一(一〇)くだり、若君の御料に、いと濃きうちぎ一かさね、薄き蘇枋の綾

て、仲忠「いで、その御琵琶持ておはせよ。たゞ今なむ參り來つる。今は、なにかは恥させ給ふらむ。やがてや參り侍るべき」と聞え給ふ。仲忠「御迎は、(一)明日なむ侍るべかめる」など聞え給ふ。母君、(二)いと恥かしく、あさましかりけるわざかな、然ばかり心(三)恥かしげにおはする人の、いかに見給ひつらむ、(四)と思す。御返りは、(五)宰相上「承りぬ。只今自ら聞えさす」とて母屋の障子のもとにて對面し給へり。「今は世にあらむやうも(六)思されで歇みにしを、いかに聞えさせ給へれば、「ちかき程(七)に」などまで宣ふらむと思ひ侍れば、聞えさせむ方なく、なほも何とも思ひ(八)給へ侍らで、明暮もことに見給ひ入れざりしを、(九)ほれぐ\しくなられたる人、殘少くおぼえ給ふ、さらにいと歎かしきことに宣へるを、今は後安くなむ」と聞え給へば、仲忠「それこそはいと理に侍るなれ。(一〇)こゝには、殊に聞ゆる事も侍らず。まことに、年頃覺束ながり聞え給ひつ。仲忠が母ものし給へど、(一一)いと心細く、ただ一人物せらるれば、あまた物せさせ給ひける御中に、何とも思されずとも、(一二)と

〔語釋〕
(二)宰相上
(六)「あらむやとも」歟
(七)近々迎取るべしなど
(九)父が晩年に我身の上を氣遣ひしを今は父も死したる事なれば假令どうなりても苦勞はなしの意歟
(一〇)私が別に父に勸めたる譯でもなし
(一二)宰相上の方では俊蔭女を何とも思はずとも

〔考異〕
(一)明日なむ侍るべかめる—明日なむ侍るべかんなる—明日となむ侍る
(三)心—心ばへ
(四)見給ひつらむ—見給へらむ
(五)は—ナシ
(八)思ひ—思う
(一一)給へど—給ふも

〔語釋〕
(二)これ宰相上也
(四)小君
(七)「給ひつゝ」は「給ふ」歟
(八)仲忠が
(九)宰相上が
(一〇)小君

〔考異〕
(一)濃き—こゞろき
(三)長げなり—なまめかしーナシ
(五)思ひ—思う
(六)をかしくらう〳〵じ—こう〳〵しくをかしく
(一一)給へば—給へり

の障子も壊れたり。南の隅より上りてのぞき給へば、東の妻戸の簾あげて、人々物めしゐたり。母屋の方の柱に、いと濃き(一)うちぎの艶やかなる、一かさね、薄き縹のあやのはりわた重ねて著て居たる人(二)のかみ、絲をよりかけたる樣に艶やかに(三)長げなり。額にかゝれる程、いと美しげなり。そびやかになまめかしき容貌、内侍のかみの御樣躰かたちに覺えたり。ありし君(四)、かいねりの濃きうちぎばかり著給ひて、鶴脛にて、いと小くをかしげなる琵琶かき抱きて、前に居給へば、いと美しと思ひ(五)給ひて、髮かき遣り給ふ手つき、いと美しげなり。此の君、琵琶をいとをかしくらう〳〵(六)じく彈き給ひつゝ(七)。君、宰相上「今さへ、この小き琵琶をひき給ふは、いと見苦しからむは」と宣へば、小君「然ば御膝に居てひき侍らむ。たゞは倒れに侍り」とて大なるを彈き給ふ。いと上手なり。これを彈き給ふを、殿に見せ奉らまほしく(八)おぼえ給ふ。大將うちしはぶき給へば、驚きて、(九)几帳ひき寄せ給ひて、(一〇)此の君して、御裀出だし給へば(一一)、仲忠「おはせ。忝し」とてかき抱き

に、いとをかしげなり。こゝには(一)同胞など言ひ睦まじき人もなし。心細きに、心ざまなども、思ふやうにおはすなゝり(二)。とりわきて(三)思ひ聞えば、大將をも同胞のやうに思ひ給ふべし。怪しく(四)、大人々々しくなられたれども、まづはかなき事も、己と言ひあはするに、亡くなりたらむ世にさうぐ\しと思ひ惑はむもいと哀なり」と殿にも聞え給へば、兼雅「ゆゝしき(五)事はうたてあり。大將あひ思ひ、互にうしろ安く思ひ給はむには、いとよろしき心樣ぞ。あはれ宮の君こそ(六)、やんごとなく思ひ聞えし効なく、物はかなく、いふかひなけれ」など宣ふ。

【畫詞】こゝは東の一の對。大將の御物忌などに、時々わたり給ふ所なり。さるべき樣にしつらはせ給ひ屏風どもなど立てさせ給ふ。

大將殿明の夜(七)ぞおはしたり。木ども、前栽などは、數あまた有りけれど、げに山里の樣に(八)なりにけり。對ども、廊などかたぶき、怪しき樣なり。人の音せず(九)。東の方によりたる格子の、二間ばかり明きためり。坤の戸より見入れ給へば、中

〔語釋〕
(三)我が宰相上を愛したらば
(四)仲忠は
(五)俊蔭女が死後の事をいふを忌みたる也

〔考異〕
(一)こゝには同胞など言ひ—とりわきて思ひ
(二)なゝりとりわきて—なりさとりわきて
(六)こそ—ことに
(七)明の夜ぞおはしたり—あすの夜とておはしたり
(八)樣になりにけり—樣なりけり
(九)音せず—音もせず

㊃仲忠宰相上を訪ふ。父に自ら宰相上を迎へんことを勸む。

を、今然てのみは。まで給ひなば、いとよろしからむ(一)。心安くてわたり給ひぬべき所なむ侍る。御むかへ、すこし(二)、心苦しき人の戀しさも、

すみなれし垣ほ離れて年ふれどわがとこなつはいつか忘れむ

さりともとかや。さて、これは、人のものし(三)(四)給ふめる。何にかあらむ。とて、早くかの御方に心寄せにてありし、大和介なる人を召し出でて奉り給ひ(五)つ。殿人出であひて、珍らしがり、御返り、

宰相上(六)めづらしよくみ給ひつるは、げに覺束なき程になりにけるにや。

もろともになれにし中の床夏を露とおきふしわれぞ忘れぬ

心苦しく(七)思すなるは、ともかくも持てなさせ給へかし。これはまた(八)やつたへ(九)むと見給へるも、今更にあひなき(一〇)にや。と聞え給ひつ。御返、かんの殿に、兼雅「これ見給へ。手こそ、この氣ぢかく見し人人よりは(一一)、よく書きたれ。見所ある様にをかしく書きたるや」かんの殿、俊蔭女「け

〔語釈〕
(二)「すこし」は「すべし」歟
(三)人よりの貢物なるが歟
(六)「珍らしく見給へつるは」歟
(七)此子を可愛そうと思召すならばよき様に御計ひありたし
(八)誤あるべし

〔考異〕
(一)よろしからむ—よく
(四)人のものし—たゞ今人の—人の
(五)給ひつ—給ふ
(九)つたへむ—つたへてむ
(一〇)あひなきにや—あひなき方や
(一一)よりはよく書きたれ—よりよく書きぬれ

〔語釋〕
（一）誤あるべし
（四）物の入りたる儀宰相上へ御贈りなされて然るべし
（六）斑絹歟
（七）小君をいふ

〔考異〕
（一）見給へ―見奉ら
（三）心ばへは―「は」ナシ
（五）三重がさねの御衣また人に賜はむとて―三重がされにもき給はむとて

おはすとも、なほこれ心苦しう見給へ（一）。さらむ、心ぼそく物はかなき樣にて散り侍らむは、いと悲しかるべくなむ。容貌（二）は、世にもいと多く侍らむ。心ばへ（三）は、え憎ませ給はじ」と言ひしものを。何をかは遣るべからむ」と宣へば、仲忠「かく心深かりける御心を、いかにさて頼もしかりける。いでや」とて、仲忠「尾張より奉りたりし辛櫃あらば、入物（四）ながらや、よからむ」とて召し出でたり。片つ方にきぬ廿疋、あや十疋、いま一つ方には、内侍のかみ、俊蔭女「こゝに物入れむ」と宣ひて、かいねりの綾のきぬ一かさね、薄色の織物のほそなが、はかま一くだり、山吹のあやの三重（五）がさねの御衣、また人に賜はむとて、（六）またらきぬなど入れ給ふ。御文は、

兼雅「あさましう、年頃になりにけり。おぼつかなさ、心より外にてなむ。何處とも知らせ給はざりけるも理なれど、よろづ心憂く。大將聞えられければ、哀なる人（七）もあやしう。又も見せ知らせ給はざりしかば、いと覺束なき

むかへ奉らせ給へ。東(一)の一の對の、南かけてこそはよく侍らめ」など聞え給へば、兼雅「いさや、心などの思ふ様によくもあらずば、御爲にも面目なくこそは。左のおとゞの、ぐさ(二)のやうにて、ゆら〳〵(三)とひき連れ(四)てありき給ふに、一人(五)なれど、彼(六)(七)をおし伏すばかりに物し給ふこそ、世中の人も、なか〳〵辛しと思ひたるを、なま(八)よろしくてあるべき」と宣へば大將(九)、かんのおとゞも聞え給ふ。俊蔭女「すべて御心せばく思ほせばなりけり。たとひ、人の同胞、なま惡くても侍らむからに、それにつけてや、覺の劣らむ。(一〇)思ふやうに物したまはずとも、それにつけてこそ、いとゞ(一一)かの勝れたる様は、見聞え給はめ(一二)。いと心憂き御物言なりや。はや迎へ奉り給へ」と聞え給へば、兼雅「今ははや、ともかくも」と聞え給ふ。大將、仲忠「今朝の御おくりに、人奉りつるに、かの(一三)住み給ふなる所は、いみじう荒れて心ほそげになむ侍るなる。まづ御文なども、只今は物せさせ給ひてや、よく侍らむ」殿(一四)、氣色いとすが〳〵し、兼雅「昔、あはれ、源宰相(一五)の、「ゆく末やんごとなき人(一六)

〔語釋〕
(一)宰相上の居處としては
(二)「ぐさ」に古本「具者」と註せり
(四)多くの子どもを
(五)仲忠は只一人の子なれど
(六)正頼の子どもを壓倒する位に
(八)今更よい加減な子どもを外に儲くるは異な物ならん、「なまよろしくて」の上「いかで」などあるべし
(九)「大將」衍文歟。一本「殿は」
(一〇)その子がさ程よくなくとも
(一一)仲忠の
(一三)宰相上の
(一四)兼雅
(一五)宰相上の父なるべし
(一六)外に立派な妻を設けたりとも

〔考異〕
(三)ゆら〳〵と―ゆうゆうと
(七)彼をおし伏す―彼に劣らむとす
(一二)給はめ―給ふべかめれ

又の日も、呼び(一)奉り給ひて、御菓物などまゐり(二)給ひて、遊をのみし給ふ。大將の詩誦し給へば、聲いとをかしうて、諸共(三)に誦し給へば、仲忠「いと美しう。誰か教へ奉りしぞ」小君「母君」と聞え給へば、をかしかりけりと思す。

三日果てぬれば、出で(四)給ひなむとす。仲忠「何處より參り來(五)べき」と聞え給へば、宰相上「言ひ知らぬ山里のやうになりにたるはべり。御覽ぜむにも、いと怪しげになむ侍る」と聞え給ふ。同じ程に出(六)で給ふ。此の君の御供に、ことに人もなし。(七)御迎に參り給へる、然るべき人、睦まじき人を、仲忠「まゐれ」とて添へ(八)奉り給ふ。西の大宮なりけり。一町なれど、いといみじう荒れて、いと幽なり。伯母君も、(九)斯くなむと聞き給ひて、限なく喜び給ひ、人どもに菓物など淸げにして出だし給へり。

大將は、やがて殿に參り給ひて、仲忠「物忌し侍らむとて、石作寺にこもりて侍りつるに、しか此(一〇)の人なむ、いと美(一一)しうてこそおはしけれ。はや、今日明日にても、

〔語釋〕
(一)小君を仲忠が
(三)小君が
(四)仲忠が
(六)宰相上が
(七)仲忠の
(八)宰相上に
(九)宰相上の隱家が
(一〇)宰相上が

〔考異〕
(二)給ひて—給へど
(五)來べき—候ふべき
(一一)美しうて—うつくしげにて

㊂仲忠邂逅の趣を父に告げて先づ父を賻らしむ。

〔語釋〕

(一)宮の君に似たりといへる兄

(二)小君の目より見たる仲忠の樣

(三)宰相上より

(四)仲忠が

(六)兼雅が

(九)小君の身上につきては兼雅はあてにならぬ故

〔考異〕

(五)御上—御聲

(七)今は…人にて—常にかく煩らひ侍る人にて—常にかゝづらひする人にて—常にかたらひする人にて

(八)見苦し—見苦しう

と聞え給へり。小君(一)には、仲忠「まろが弟におはしけれど、子の樣に思ひ聞えむ」などいとよう語らひ聞え給ふ。いと(二)思ふやうに、めでたき樣にて、かう宣へば、見ならひ給はぬ幼き心にも、いと嬉しくて、小君「まろも思ひ聞えむ」など聞え給ふに、「おはせ(三)」とあれば(四)入り給ひぬ。御乳母など限なく喜ばしう思ふ。日暮れて、屛風のもとにて、對面し給へり。いとあてに、けはひなども、式部卿の君よりも心にくく恥かしげに物し給へり。院の女御の御上(五)におぼえ給へり。若君の御事も、おいらかに宣ふさま、恥かしげなり。仲忠「今必ず御迎侍りなむ。しかぐ\なむ常(六)に聞え給ふ」と宣へば、宰相上「なにか。自らは今(七)は隱ろひたる人にて、侍らむも見苦し(八)。心苦しう見給(九)へる人は、かの御心は頼もしげなくおぼえ給ふを、げに御心留めさせ給はむこそは、たのもしう侍らめ」大將、仲忠「いかゞ」など聞え給ひて、仲忠「やがて率て奉らむ」と宣へど、宰相上「今まづ、然る人など聞え給はむに、げにとおぼし出づる事侍らばこそ」と宣ふ。

〔語釋〕
(二)仲忠の心
(三)兼雅が
(四)出家などして居給はずば
(五)私を

〔考異〕
(一)思う—思ひ

うおぼす。白き色紙に、

宰相上 いとおぼつかなう思(一)う給へらるれど、

わたり川たれか尋ねむうき沈み消えてはあわとなりかへるとも

え覚えずぞ侍る。

とかき給へり。思(二)ひあてに、かの見たまひし手よりは、いとなまめかしう、あてに書きたれど、それなめり、けにまがへる心かな、と思す。たちかへり、

仲忠心 憂く、もてはなれては思されじものを。今よりは親などこそ頼み聞えさせむと思う給へらるれ。いとまめやかに、年頃「いかで物せさせ給ふらむ」と(三)なげき聞え給ひて、「思(四)の外ならぬ御さまにて物せさせ給はゞ、御迎もいかでか」などなむ聞え給ひたる。心細く思ひ給ふに、いと嬉しく見奉るも、いと頼もしくなむおぼえ侍る。殿をば、忝けれど、然る方に思ひきこえ給ひて、(五)心やすく思さば、とりわきてとなむ、君には語らひ聞えさする。

〔語釋〕
（一）仲忠の心
（二）兼雅が
（六）宰相上が
〔考異〕
（三）承りにし—承り給ひにし
（四）近く—近う
（五）賜うて—賜うとて
（七）なり—なめり
（八）おもひ—おぼえ

も肯かず。大將、膝にすゑ給ひて、仲忠「母君は此處にか」と宣へば、兒「おはすめり」仲忠「誰が御子ぞ」兒「知らず」仲忠「御父は、誰とか人はきこゆる」兒「右の大殿とかや人は言へど、まだ見え給はず。呼ぶなり。まうでなむ」とて立ち給ふ。（一）あやしき事かな、「西の對の君にこそ兒ありしを、たゞ一日見ずて、伯母君なむ、かなしうして取り籠めてし」と宣ひしにやあらむ、（二）あはれにもあべきかな、其にやあらむ、なほ氣色見む、とおぼして、硯召し寄せて、

仲忠 わたり川いづれの瀬にか流れしと尋ねわびぬる人を見しかな

おはしまさせ給へや。まめやかには、いかでか承りにしがな。（三）しるべは、いと善うこそに。

とかき給ひて、上に近く（四）使ひ給ふ童して、奉り給ふとて、仲忠「この御返賜うてなむ、わか君を」と聞え給ふ。取り入れさせて見給へば（六）大將の御手なり。（七）いといみじう恥かしう、いかに見給ふらむとおもひ（八）給へど、佛の御驗もあらむと、嬉し

き聲して、上に人二人ばかり、下仕なめり、人にいたうも隱れで、几帳のほころびより見えたるも目やすし。大德の、御堂のうちより來ためれば、乳母なるべし、さやうの大人々々しき聲にて、「此の君の御事よかんべく祈り給へや。親におはする殿に知られ奉り給へと申し給へと、いと心苦しうなむ、おぼし歎くを見奉る」など言ふ。逢ふ期あるにやあらむ、(一)哀なる事なりや。親子と見ず知らざらむよ、誰ならむと聞き給ふ程に、八つ九つばかりなる男子の、(二)髮も膕ばかりにて、かいねりの濃き袿一かさね、櫻の直衣のいたう馴れほころびたるを著て、白う美しげにて、あてに美しげなるが、假粧もなく、たゞ見に立ち出でて、外のかたに立ちたり。よう見給へば、宮の君の顏に似たり。聲はいとあてになまめかしう、愛敬づきて幼げに物など言ふ。いと美しげに、(三)み給へば見あはせ給ひて、扇して招き給へば、うち笑みて、ふとおはしたり。內に、いとあてなる聲にて、「かれ呼び給へ。かの君は、何方ぞ。あな見苦し」と言へば、「おはしませ〳〵」と言へど

〔語釋〕
(一)仲忠の心
(三)仲忠が此兒を見れば兒が目を見合せて

〔考異〕
(二)男子の—「の」ナシ

が、其の御母女御のかくれ給ひぬれば、のぼり(一)給はむとす。右大将殿(二)宣ふやうこの宮の御母方も、(三)離れ給はねば、はやう、ちかうて時々見(四)奉りしに、御かたち清げにて、をかしくおはせしが、折々に聞えかはしゝに、何かは(五)思し契りしを、俄に下り(六)給はむとせしに、(七)又かく見つけ奉りて、他事おほえでなむ」大将殿、(八)仲忠「げに物せられなば、忍びてたまさかにさやうに(九)有りなまし。まだ御年も若うおはすらむかし」兼雅「何かは。今も然おはせかし。(一〇)宮いかゞおほさむ。忝けれども、こゝには、大将の年の(一一)程見給ふに、今にあらねばこそ」と聞え給へば、仲忠「いさや。なほすさめ事なり。今の一條西の對の君は、(一二)尋ね侍らむ」と聞え給ふ。

かくて、石作寺の藥師佛現じ給ふとて、多くの人まうで給ふ。大將殿御物忌し給はむとて、いと忍びて一所、御供に人多くもなくて參り給へり。げにいみじう騒がしきまで人まうでたり。

暁には、皆出でぬ。この御局のかたはらに留まりたる人、いとあてはかに故々し

〔語釋〕
(一)伊勢より京に
(二)誤あるべし。「右大臣殿」歟
(三)我が親族故
(四)齋宮を
(五)誤あるべし
(六)齋宮になりて伊勢に
(九)齋宮に通ひたし
(一〇)女一宮が不快に思はるべし
(一一)誤あるべし
(一二)宰相上

〔考異〕
(七)せしに又―せしをや

㊀仲忠石作寺に參籠して宰相上とその子とに邂逅す。

(八)大將殿げに物せられなば―大將殿だにものせられずば―大將の侍りしけに物せられなば

㊀兼雅一條西の對に遺題の歌を見て宰相上の行方を尋ねんと志す。俊蔭女之を仲忠に謀る。

〔語釋〕
（二）兼雅
（三）兼雅の妾の一人也
（四）藏開には「年をまちわびて」とあり
（五）三途の川
（七）多くの妾たちが居られしに
（八）「さう／″＼しきに」歟
（九）兼雅がかく／＼仰せらるゝ故
（一一）嵯峨院の女御也

〔考異〕
（一）まことや―ナシ
（六）をば―「ば」ナシ
（一〇）とゞめて―「て」ナシ

まことや（一）、三條の右の大殿の、かの一條殿の對どもに居給へりし御方々、宮、むかへられ給ひて、今は（二）限なめりとて、思ひ／＼にわたり給ひにし中に、西の一の對に、源（三）宰相の君、

宰相上ふるさとにおほくの年（四）は住みわびぬわたりがは（五）には訪はじとやする

と書きつけ給へりしを、殿おはして見つけ給ひて、兼雅「心ふかくをかしう、容貌などもことに難なかりしを、いかでこればかりをば（六）、在處を聞かましかば、尋ねてしがな」と宣へば、内侍のかみ、俊蔭女「いとよき事なり。宮のおはしける所に、（七）あまた然てものし給ひけるを、女子もなく、さう（八）ぐ／＼しき。處は、廣うおもしろう、めでたきに、元のやうにて物し給はゞ、聞え交してあらむ」とて、右大將の參り給へるに、俊蔭女（九）「こゝに宣ふめる事なほ御心とゞめて（一〇）たづね給へ」と聞え給へば、げにながくと思す。

かゝる程に、朱雀院の御同胞、承香殿（一一）の女御と聞えし御腹の齋宮にておはしつる

樓の上（上）

梗概

（一）兼雅、一條西の對に遺題の歌を見て宰相上の行方を尋ねんと志す。俊蔭女之を仲忠に謀る。（二）仲忠石作寺に參籠して宰相上とその子とに邂逅す。（三）仲忠邂逅の趣を父に告げて先づ文を贈らしむ。（四）仲忠、宰相上を訪ふ。父に自ら宰相上を迎へんことを勸む。（五）兼雅自ら行きて宰相上を三條に迎ふ。宰相上腹の小君、兼雅に懷かずして仲忠を慕ふ。（六）兼雅、梅壺を三條に迎ふ。俊蔭女に對する他の妻妾たちの嫉妬。俊蔭女、兼雅に愛を他の女に分たんことを勸む。（七）仲忠、小君を携へて參内す。東宮、小君を携へてあて宮の許に至る。（八）俊蔭女、太宰大貳の贈物を人々に分つ。（九）仲忠、犬宮に琴を敎ふべき心構を女一宮に語る。母を訪ひて同じ事を語る。兼雅來合せて夫婦古を追懷す。（十）犬宮の美くしさ。仲忠の祕藏。（十一）仲忠京極の舊邸に犬宮に琴を敎ふべき樓を造る。人々の噂。（十二）新築の樓の結構。（十三）仲忠、朱雀院及び嵯峨院に參る。嵯峨院、俊蔭女の琴を聽きに京極の邸に御幸あるべき事を約す。（十四）仲忠樓上にて琴を敎ふべき由を犬宮に告ぐ。（十五）涼、仲忠を訪ふ。樓の噂。涼、犬宮を隙見す。歸りて妻今宮に犬宮の美しさを語る。（十六）仲忠、犬宮の修業中は一切人に逢はすまじき由を女一宮に告ぐ。女一宮、犬宮に名殘を惜む。（十七）犬宮の京極に移るべき日の準備。（十八）犬宮京極に移る。行列。女三宮の感傷。見物人の評判。（十九）到着。饗宴。（二十）樓上の景色。（廿一）朱雀院より女一宮及び俊蔭女を訪はる。（廿二）仲忠、母及び犬宮と京極に籠居す。兼雅京極を訪ふ。兼雅夫婦の懷舊。

〔語釋〕
（三）女四宮

〔考異〕
（一）よく—ナシ
（二）ばかり—ナシ
（四）擬生衆まで—清らにて

時なりぬとて騷ぐに、今上「しづ心なく言へば。然ば狹くまゐり給へ」とよく聞えこしらへ給ひて出で給ふに、后宮より、源中納言の奉り給へりし女の裝（一）二十くだりばかり、（二）櫻色の細長、あはせのはかまなど、上達部殿上人に賜ふ。院の御方（三）よりも、例の公樣にてはあらで、御子たち、上達部に、例の女の裝束一具、殿上人には細長はかま、下臈の文つくりなどには、腰插棒持の綿、（四）擬生衆まで賜ふ。大將には、講師の祿とて、御馬一つ、御子たちにも御馬一つ、帝たちには、世にかしこき御帶、御佩刀など奉り給ふ。

畫詞 こゝは嵯峨院の花の宴の所。

〔語釈〕
(一)皇子をなぜ早く生み給はざりし
(二)女四腹の皇子を
(四)産の時あて宮は里に下りたれば小き時は見ざりしと也

〔考異〕
(三)あるものか―あるにや

せ給ふなめり。萬の事かたみにならひて、哀に睦ましくこそ。あさましう打ち泣き給ひしかば恐ろしさにこそ聞えざりしか。などかは、かゝるわざをも、(一)疾くはし給はざりし」など聞え給へば、女四「あなむつかしや。何でふ然るものをか」上、今上「かゝる程のをまだ見ねばぞや。かゝる序に、此處のを見で、いつか。なほ見せ給へ」と宣へば、乳母召して、見せ奉り給ふ。まだ五十日にも足り給はず、いとつぶらかに、白く肥え給へり。上、(二)抱き給ひて、今上「あなちひさや。人のはじめは斯くあるものか、(三)我らも然ぞありけむかし。かゝるものを大になすこそ、女は恐ろしけれ。宮は、いと大になりにけり。はじめはいとあさましや」女四「月ごろ御覽じならひたらむを」今上「それはまかでにき。(四)大になりにたり。それをぞ小きと見しか」とて、今上「これをも對面とや言はむ」とてあこめの御衣ぬぎて乳母に賜ふ。

かくて上達部殿上人座に著きさふらひて、御輿寄せてぞ「久しくなりぬ」と奏せさせ給ふ、上、今上「あな物憂や。こゝに泊りなばや」と宣ふに「亥四刻」と申すに、

〔語釋〕
（一）「考へさせ侍らむに」なるべし
（二）「たうばり」なるべし、封祿
（三）皇后と名のらせたし
（四）あて宮を后にしたく思はるべし
（五）女四宮
（六）女四腹に皇子誕生の事
（七）大后から女四宮腹を立てよとの仰せありては一大事と思ひて
（八）東宮が
（九）皇子出生せば東宮に立てんと約束せし故
（一〇）天子は空言せずといふ語あり
（一一）「こ」衍文なるべし
（一二）今の東宮も此大后の曾孫なれば也
〔考異〕
（一三）申し給ひて—申し奏して

疎しくものし給ひしかば、思ほし直すまでとなむ、しばし物聞えざりし。宣はする事は、かやうの事は例とはせでなむ物すなるを、考へ（一）させ給ふらむに、然る例あらば、何かは。然らずば、封賜はり（二）などをこそは、御位久しく物すべく侍るなれ」宮、后宮「封賜はりなどせずとも、この（三）位とこそ言はせまほしく侍れ。其處には、坊の母（四）をとこそは思すらめ。（五）此の人をば哀と思さましかば、（六）かゝる事も侍りけるを、しばし待たせもこそはし給はましか。（七）然もや聞ゆるとて、急ぎし給へるこそは」帝、今上「かゝる事の疾くものし給はましかば、何の疑にかは。年頃さもあらで、（八）彼が出でまうで來たりしかば何心もなく、（九）「然あらむをりは然せむ」と宣ひてしかば、「空言せず」（一〇）といふ族にまかりなりにたれば違へじこと（一一）てなむ。（一二）彼も思ほし棄つべきにもあらぬを」と聞え給へば宮、后宮「すべて幸なき者は」とて御氣色よからねば、立ち給ひて、四の宮の御方に參り給ひて、今上「いと痛く醉ひにけり」とて裝束解きひろげて臥し給ひて、今上「いとよく案内申し（一三）給ひてさいなま

曉ただ人などのみな集ひにけるをや」と宣ふ。

内裏の帝立ち給ひて、后の宮(一)に對面し給へり。后の宮、「あなかしこや。久しうもなりにけるかな。三條に侍る御子(三)の、若菜摘にまうで來たりしまゝにや侍らむ」(二)帝、今上「屢〱(四)もまうで來べきを、まかりありきも心にまかせ侍らざりければなむ」宮、后宮「今は、かく今日明日になりにて侍れに、聞えさせ置くべき事も、聞えさせ置きて、冥路も安くと思ひ給へるを、いと〱嬉しく、わたりおはしましたる事をなむ。此承香殿に侍る人(五)は、思ほえず老の後に出で來て侍りしかば、中にかなしく思ひ給へて(六)(七)、「顧みさせ給へ」とて參らせし効なく、人數にも思ほされざなれば、恥かしう(八)思ひ給へる(九)を、此の位(一〇)讓り侍りななとなむ思ひ給へる。「便なき事」と、これかれ聞ゆとも、昔思う給へし志叶ふるとおぼして、必ずをせさせ給へ」帝、久しく思ほし煩ひて、今上「まだ物の心も知らず侍りし時、見なれ奉りにしかは、睦まじく賴もしきものには、彼處(一一)をなむ。あやしく人にも似給はず、疎

〔語釋〕
（一）嵯峨大后
（三）正賴の妻大宮
（六）嵯峨院第四皇女、今上の御姿
（一〇）后の位
（一一）承香殿を

〔考異〕
（二）久しうも—「も」ナシ
（四）屢も—「も」ナシ
（五）思ひ—思う
（七）承香殿に侍る人—あづけ奉り侍りつる人
（八）思ひ—思う
（九）思ひ—思う

とあるを、朱雀院いといたく誦ぜさせ給ひて、土器參らせ給ひて宣ふ。

朱雀　わが前に木高くなりしもと櫻山べにえだぞ朽つと嘆きし

內裏の帝、

今上　朽ちぬとてなげきし枝は春を知るあり(一)し櫻の見えぬ今日かな

嵯峨院、

もろともにおひし櫻のまづ(二)枯れてのこれる枝を見るがかな(三)しさ

(四)なむとて御土器度々になりぬ。御時よき程にて、御遊さかりて、大將源(五)中納言などに、箏の琴賜ひて、(六)みな人も物の音仕うまつりあはせて、順の舞し、歌うたひ猿樂せぬはなし。上たち、いみじう興じあはせ給ひて朱雀院、「今日はいと興ある日なりや。いぬる年の秋仲賴が居つる所にて、此の族まかりて、人も聞かぬ所にて、己がどち、隱したる手どもあらはして、警束に侍りけるこそいとになく侍りけれ」嵯峨院、「然聞くや。(七)忠まろ法師に陀羅尼讀ませて、かの朝臣の琴ひきける

〔語釋〕
(一)仲賴をいふ歟
(二)仲澄をいふ歟
(四)「などとて」なるべし
(七)忠こそをいふ

〔考辨〕
(三)かなしさ—かなしき
(五)源中納言—「源」ナシ
(六)みな人—みな〳〵

民部卿、

實正　老もみな花をり遊ぶ此のくれは春(一)さくらやとしもにわくらむ

藤大納言、

忠俊　立ちよれば老をのみます櫻花折りつゝかさず君は幾世ぞ

權中納言、

忠澄　ちる花に頭のおほく白くるは世々をへだつるやどにさけ春(二)

源中納言、

涼　花の色はさかりに見えて年ごとに春のいくたび老としつらむ

(三)左衛門の督、

清雅　老いぬとて春をばをしむ頃しもぞよろづの花は盛なりける

新中納言、

實忠　君むれて花みるけふと思はずばやまの朽木も春を知らめや

〔語釋〕

(一)誤あるべし

(二)「さけ春」は「さけばか」の誤なるべし、一本「さけやと」

(三)「右衛門督」なるべし

〔語釋〕
(一)「我ら」は「我がみ」歟
(二)朱雀院第六の皇子歟

五の宮、

風をいだみ我ら(一)にふれる花をさへかしらの雪と見るな宮人

常陸(二)の太守の親王、

さくら花咲かざらませば野べに出でて春の齢を何に知らまし

大政大臣、

忠雅 櫻花いつかあくべき野邊に出でてこゝろ〴〵に君がをしむに

左の大殿、

正頼 もとゆひに花結べりと見ゆるまで見れどもかゝる春の花かな

右の大殿、

兼雅 散りぬとて手ごとに折れば櫻花髪さへ白くなりまさるかな

右大將、

仲忠 さくら花幾世をふれば木隱れてみる人ごとに老を見すらむ

〔語釋〕
(三)朱雀院第四の皇子

〔考異〕
(一)すゞろに—すくわい
(二)春の—雪の

しろくとも千代しつもらば花を見にいづれの春かつれて來ざらむ

式部卿の宮、

つもり行く花もなげきに木隱れて空にしられぬ下枝なりけり

など申し給へば五の宮、「すゞろに(一)仕うまつりそしたるや」とて御土器まゐり給ふ。

土器くだりて、中務の宮、

かくばかり枝は盛に匂ひつゝいつかは春の(二)ふかく積りし

兵部卿親王、

いにしへは春の色をや君はみなこひてををしむ花はちらめや

彈正宮、

ちる花ぞかしらの雪と見えわたる花こそいたく老いにけらしな

(三)師の親王、

うちむれて花をしをりてかざさずば何にか春の老も知らまし

〔語釋〕
（一）誤あるべし
（三）女一宮の御產の時の事をいふ

〔考異〕
（二）つゝむ—つちむ
（四）花を—花に
（五）雪と見るかな—雪ぞふりける
（六）帝—御歌
（七）けむ—ける

入りぬ。文みな奉り侍れば、（一）文題とらせ給ひて讀ませ給ふ。大將まゐらせ給ひて讀み申し給へば、帝たちよりはじめて、皆聞き給ふ。いさゝか怖ぢつゝむ（二）所なし。朱雀院、かゝるものに心強き、物に怖なき人、（三）いかで前後知らず惑ひけむ、なほ吾が御子をおろかには思はざりけり、と思す。やんごとなき文どもをば誦せさせ給ふ。大將の文を、みな帝たち誦じ給ふ。土器まゐる。新中納言いみじう褒めらる。右大辨土器まゐる。

かくて、御遊はじまりて、朱雀院、「老せる春を弄ぶ」と歌の題にかゝせ給ひて嵯峨院に奉り給へば、御土器とりて内裏の帝に奉り給ふとて、

嵯峨　春くればかみさへ白くなる花（四）をことしは君も雪と見るかな（五）

内裏の帝、（六）

今上　積りけむ（七）花をもなどか見ざりけむ春とはわれも言はれつる世に

朱雀院、

〔考異〕
（一）御子たち―御子たちは、
（二）笛―ふみ
（三）ゆるらかに吹く―ゆたかに吹く―ゆるうふく

り。朱雀院の御子たち（一）、后腹の二の御子は、御病して、法師になり給ひて、西山におはす。大殿腹の四人、后腹の五人さふらひ給ふ。七の御子、中の君のあね、女御の御腹、それ參り給はず。九の御子は、更衣腹、わらはにて參り給はず。嵯峨院の御子は、三人ながら、内裏の御ともに仕うまつり給へり。御前ごとに皆まゐれり。文人樂所の者どもなどに物賜ふ。上たち御琴あそばし、上達部御子たち、（二）笛仕うまつり給ふ。樂所には、樂仕うまつりあはせて、いと面白し。申の一點ばかりに、擬生の文題とらせ給はむとすれば、あるは清く書きたるもあり、あるは半書きたるもあり。とかくし惑ひて、手をひろげて奉り參るに、途に倒るゝもあり。かく惑ふを今日の物見にはしたり。花さそふ風（三）ゆるらかに吹く夕暮に、花雪のごとく降れるに、大將文奉るに、胡籙負ひてかうぶりに花雪のごとく散りて、仲頼「右の近き衛の府のかみ、藤原の仲忠」と申し給ふ聲、いと高ういかめし。嵯峨院、「よき講師の試の聲なりや」とて笑はせ給へど、つれなくて

〔考異〕
(一)文題ども賜ふに高く
も―文題どものたまふに
かたくも

せて、おもき祿賜はせむ」院うち笑はせ給ひて、朱雀「今は、賜はすべき祿もなし」とて笑はせ給へど、いさゝかつゝみたる氣色もなく、いと目安くて入りぬ。つぎに源中納言目安くて入りぬ。新中納言出で來たるを、帝たち、「山籠は、いかで出で來たるにかあらむ。今日めづらしき事は、先づこれなりけり」と驚き給ふ。内裏の帝、「辛うじて召し出でたるなり」と宣へば朱雀院、「あたら、さてもありぬべき公人の、怪しうてもありつるかな。此の朝臣の、常に嘆きしものを」など宣ふ。

午の二點ばかりに、擬生の男どもに、文題ども賜ふに、高くもあらず、五位、六位なり。あらはなる所にさふらひて、近衞づかさの官人ども、左右にさふらひ、そなたに居たる、近く參りて、仕うまつらせ給ふ。探韻賜はる人の目やすきをば譽め給ふ。見苦しきをばわらはせ給へば、憶しつゝ、天下の失禮を仕うまつりあへり。上たちも、御文あそばす。御子たち、上達部、御心にまかせて作り給ふもあ

〔語釋〕

(一)誤あるべし、「はう」一本「かう」又「け」

(三)未考

〔考異〕

(二)心勞し―心をらうじ

ちに役仕うまつらせむ。右大辨季英の朝臣に、はう(一)仕うまつらせむ。右大將の朝臣には、講師仕うまつらせむ」朱雀院、「いと興あり。朝臣は、文講師する事をなむ申し侍り」内裏の帝、「御前の講ぞ、いとになく仕うまつりき。よき今日の講師に侍り」と皆ゆるし給へば大將、然ればよ、何事にあて給はむとは思ひつる、いかで仕うまつらむとすらむ、と思ほす。

かくてみな探韻す。大將、文を賜はりに參るを、嵯峨院御覽じて、嵯峨「この朝臣見る時こそ、齡延ばはる心地すれ。いと警策になり勝りにけり、この國の人には餘りにたる人かな」朱雀院、「この頃は憔悴しにたるにこそ侍るめれ。先つ頃、ほとほとしき病者をなむ持て侍りて、かしこく心勞し(二)侍るなり」嵯峨院、「然聞き侍りき。三の内親王のもとに、とぶらひに物して侍りしかば、頼もしげなくものして侍りしを、ことなる事もなく物せられけるを喜び侍り」朱雀院、「いみじう侍りけるを、辛うじてちうはいして(三)侍り」嵯峨院、「今日此の朝臣に、何でふわざし出ださ

ば、心空にて、過をしてや騒がれむ。そのうちに、嵯峨院の見付け給はゞ、も(一)しぢうやくにさしあて給ふ。御前にて騒がしき目を見せ給ひしも、かの御そゞの(二)かしにて、上は責め給ひしぞかし。別いても、然てぞかくてもさふらふぞかし」(三)など宣ひつ。その日になりて、事缺けぬべし。右のおとゞは院の御供に仕うまつり給ふべければ、大將さふらひ給はではあるまじ」と騒げば、むつかりて參り給ひぬ。

辰の、一點ばかりに、朱雀院に、(四)上達部、御子たちひき率て參り給ひぬ。辰の二點ばかりに、内裏の帝行幸し給へり。此院、喜びかしこまり給ふ。花の蔭に舞(五)人ども、樂所の者ども、皆さふらふ。文人は、博士よりはじめて、進士より出でたる人三十人、擬生(六)も召したり。しばし有りて右大將、源中納言、新中納言、宰相の中將、右大辨、良中將、藏人の少將、ちかすみ(七)などは文の人に召さる。嵯峨院題給はせて探韻せさせ給ふ(八)。仰せらるゝ、嵯峨「このえう(九)にも有りしもせじ(一〇)。公卿た

〔語釋〕
(一)「もしぢうやくにやさしあて給はむ」歟「ぢうやく」は「重役」なるべし
(二)嵯峨院の御勸にて
(三)さて責められて琴をひきしが故にこそ斯く君と夫婦にもなりたれ
(四)「朱雀院に」の「に」衍文なるべし
(六)追て省試といふ試驗を經て進士になるべき者
(七)「ちかすみ」は傍註の攙入歟
(九)誤あらんか

〔考異〕
(五)舞人—才人
(八)給ふ—給へと
(一〇)有りしもせじ—有りもせぬ

まじきを、(一)里にはた久しう物せらるなるを、仕うまつられなむ。世にあらむ人の明口見ざらむや。ひがみて」など仰せられたり。民部卿、實正「かく度々仰せらるゝを、(二)なほ參り給へ。(三)かの女御、世に、志なくてあるき給ふとも聞き給はじ。中し給ふ事を聞き給ふ(四)とぞ思さむ」中納言、實忠「何か、それをば(五)思ひしもし侍らねど、久しく交らひもし侍らぬに、そこばくの帝の御前には、いかでかさふらはむ。そが中に、嵯峨院は、いかに目癖つい給へる(六)帝には」民部卿、實正「東人は、宮のうちには、來ぬものか。然思ひてこそ參るべかなれ」とて。さふらふべき由奏せさせ給ふ。民部卿よろこびて、我仕うまつらむとて調ぜられたる直衣の御衣どもを奉り給ひて、我はあるにしたがひて仕うまつり給はむとす。

(七)大將も、暇文出だして參り給はぬを、行幸あるべしとて召せば、え參るまじき由を奏せさせ給へば、(八)かくて宮、女一「猶參られよかし。(九)などかは」と宣へば、仲忠「かくておはするを(一〇)見棄てて參りて、しづ心もなからむに、文作り、遊せよと責められ

〔語釋〕

(二)實忠に勸むる也

(三)御供に參りたりともあて宮が我に對して薄情なりとは思はるまじ

(七)仲忠

(八)「かくて」衍文歟

〔考異〕

(一)里にはた久しう—里には久しう—里にはさいしやう

(四)とぞ—とや

(五)思ひしもし侍らねど—思ふにあらねど

(六)帝には—帝ぞ

(九)などかはと宣へば—などせめ給へば

(一〇)見棄てて參りて—見棄て參りては—見すて奉りて—見すて奉りて

❸嵯峨院の花の宴。今上朱雀院以下參會。詩歌。仲忠講師をつとむ。嵯峨大后今上の女四宮に厚からざるを怨む。

〔語釋〕
(三)賓忠

〔考異〕
(一)給へればー給ひつれば
(二)思してー思召し

おはすとも、今もさやうにたばかられよかし。否とも言はじや御伯父どもに」など宣ふ。

畫詞　こゝは御產屋のところ。

かくて、年いとおそき年にて、三月かみの十日ばかり、花盛なり。嵯峨院、花の宴きこしめさむとて、造りしつらはせ給ふ。よろづの財物をつくして、御前の物どもまうけ給ふ。多くのまうけ物せさせ給へば、源中納言は院の家司なれば多くのかづけ物調じ給ひて、奉り給ふ。

かくて、十日なむ、その日なりける。かねて、朱雀院に嵯峨「花御覽じにわたらせ給へ」と聞え給へれば、(一)參り給ふを、內裏の帝、聞召して、朱雀院に參らむと思ふを、同じくばその日嵯峨院に參らむ」と(二)思して、御供にとて、度々中納言を召すに、參り給はむともなければ、明日になりて、藏人御使にて、今上「嵯峨院に參(三)るべきを、院の御供に、民部卿これかれ仕うまつるべければ、御供に人さふらふ

〔語釋〕
（二）祐澄に女二宮を
（四）越後乳母が

〔考異〕
（一）乳母は—「は」ナシ
（三）ける—けるが
（五）さいなみて—おひ出でて
（六）呼び—ナシ

大將、仲忠「今よく物し侍らむ。いといみじき人なり」など宣ふ程に、左近の乳母といふ、騷がしげなる氣色にて、出で來て申すやう、左近「いと恐ろしき事をこそ聞き侍りつれ。二の宮の越後の乳母は、（一）宰相中將に盜ませ奉らむとたばかりて、（二）多くの物賜はりにける。大なる瑠璃の壺に、黄金一壺入れて、沈の衣箱に、きぬ綾入れてこそ賜はりにけれ。（三）かゝる事知りたる下衆を、はかなき事にてうちさいなみてければ、（四）（五）腹立ちて、言ひのゝしりければ、皆人聞き侍りつ。前々もおほくの物得てけり」と聞ゆ。宮、女二「然ればこそ。それを思ひて、一夜も呼び入れ奉りしぞかし。（六）あなかまや。聞きにくし」大將、仲忠「何事ぞや」と宣へば宮、女二「あらず」と宣ふ。大將、仲忠「いとよく知りて侍る事ぞや。五の宮も、狩衣すがたにて、細殿に立ち給へりけり。さるさわぎに、少將入りなましかば、如何ならまし。心すとも、さるべき心か」と宣ふ。乳母、左近「左近等こそ然るいみじき物も賜はらず、恐ろしきはかりごとも仕うまつらで歇みぬれ」大將、仲忠「やぶれ子持に

みじう煩ひ(一)給ひつれば、御髪や落ちむと思ふこそいとゆゝしけれ」宮、女二「さるは、少し人心地もせば院に參らむと思ふものを、かくて歇みぬるにやあらむ、と思ひしかば、いと戀しく覺え給ひしものを」仲忠「それも、見所ありて、人の樣に物し給ひしかば、それを思してゆかしがり聞え給ふにこそあらめ。今は效(二)なからむや、見え奉り(三)給ひぬべしや、見奉らむ。起き給へ」と聞え給へば、女二「さらば見よ」とておき給へり。大將うち笑ひて試みに、仲忠「むかひ(四)居給へるこそつれなけれ」とて御髪をかき撫でて見給へば、落ちげもなくめでたし。かくてすこし瘦せ青み(五)給へれど、いと淸らなり。仲忠「(六)かくながらも、憎げには見奉り給はねども、今すこし人となりてこそは。しばし念じ給へ。衣更の程にをまゐらせ奉らむ。吾が君、かくて見奉るこそ、徒ら人(七)に見奉りたる心地もすれ。死にて臥し給へりし樣よ。いづれの世に、左の大殿の御心を(八)忘れ聞えむ」宮、女二「物も覺えざりしに、律師の加持せしこそ、とほく聞えて、助かる心地せしか。いかでこの悅言はむ」

〔語釋〕
(二)嵯峨院へ參りて參りがひある程の器量なりや否や
(六)此儘ても

〔考異〕
(一)給ひつれば—給へれば
(三)給ひ—ナシ
(四)むかひ居—「居」ナシ
(五)給へれど—給ひつれど
(七)人に—「に」ナシ
(八)忘れ聞えむ—忘れむ

〔語釋〕
（一）女一宮に
（二）女一宮が
（四）「おきな」は此赤兒をいふ
（五）俊蔭女が

〔考異〕
（三）此度のはなをくしかる―こたみのいなをしかな

仕うまつり給ふ。御たち、「犬宮の御時おもしろかりしを、此度は醒めたりや」といふ。

かくて七日過ぎぬれば、かんのおとゞ、宮（一）に聞え給ふ。俊蔭「すこしさわだち給はば、院（二）に参り給ふべかなり。御方、とく参り給ひなむ。此度のはなをくしかる（三）。おきな（四）ゐてまかりて、徒然とさうぐしくて侍るに、もてかしづきぐさにもし奉らむ。ゆかしく思さむ時は、ゐて奉りて御覧ぜさせむ」ときこえ給へば大將も、仲忠「いとよき事なり。憎くとも、つねに参りて見侍りなむ。御覧ぜむと思さむ程には、迎へて見せ奉らむ」と宣へば宮、女二「いさや、かく恐ろしきことなれば、またあるべくもあらぬを、吾兒をこそは」仲忠「犬がもてあそびにもとてぞや」女二「然らば何かは」と聞え給へば、乳母湯まゐる。ないしのすけひき率てまかで（五）給ひぬ。

かくて、大宮もおとゞもわたり給ひて、萬の物調じて奉り給ふ。大將、仲忠「い

ば、賜はりて率てまかりなむ」と宣ふ。宮、女二「何か。しばし。今見む」と宣ふ。大將、仲忠「いみじき目見(一)給へるものを、なにか見給ふべき」と聞え給へど(二)、女二「何か憎かるべき」とてゆるし給はず。おほん臍緒切りて、湯殿まゐる。講師文よむ。左のおとゞ、お物湯につけて、まづ大將の主にまゐらす。正頼「いみじういら(三)れ給へる、理や。よくもあらで數多侍るが、一人かけにたるだに、いかゞ思ふ。御後見しに參りつるぞ」とて參り給ふ。かく、いみじう惱み給ひつれど(四)、產み給ひては、ことなる事もなし。たゞ他事なく(五)、御身すくみてぞおはする。朱雀院に御使參りて、くはしく奏す。限なく悅び給ひて、よろづの物多く奉り給ふ。左のおとゞ、正頼「いたく煩ひ給ひつ」とて、例の御手づから君だちひき率給ひつゝ、物調じて奉り給ふ。

例の御產養、所々より有り。御產屋、いと面白ういかめしけれど、大將入り臥し給へれば、興ある事もなし。女御殿もえ入り給はず。かんのおとゞのみ、夜晝

〔評釋〕
(三)氣をもみ給へる

〔考異〕
(一)目見―目を見―目を見せ
(二)給へど―給へども
(四)給ひつれど―給へれど
(五)他事なく―ことなく

知らひたる人抱きつきて侍る。おとゞ、弓走り引きて、うち聲づくり給ふ。大德たち、近うさふらへど、加持高うもせさせ給はず。仲忠「弱き人は、それにまどひ給ふものぞ」とて密に讀ませ給ふ。眞言院の律師一人、いち早く讀む。いと尊し。おとゞ、正頼「かゝる折には、人多くなさふらひそ。騷がし」とて、御湯度々まゐりて、弦打しつゝ、聲づくり居給へるに、寅の時ばかりに、いか〳〵(一)(二)と泣く。おどろきて、女御探り給へば、後のもの平かなり。臥せ奉りて、大將やがて添ひ臥し給ひぬ。ないしのすけ、「仕うまつるやうあり。あやし」と聞ゆれば、仲忠「なほさて仕うまつり給へ」とて起き給はず。笑ひて、物など著せかへ奉りて、「いとあやし。なほ起きさせ給へ」と集まりて聞ゆれば左のおとゞ、正頼「よかんめり。なほ休ませ奉れ。いみじく迷ひ給へる人(三)なめり。まづ湯まゐれ。そも〳〵何ぞ」(四)と問ひ給へばすけ、「おきな」(五)といと心よげに、ないしのすけ申す。仲忠「あなむくづけ。はや追ひ遣れ。いと恐ろしきものなり」と宣へばかんのおとゞ、俊蔭女「さら

〔語釋〕

(一)赤兒の泣聲の形容

(三)仲忠をいふ

(四)生兒は男か女か

(五)男兒を祝ひて翁といふなるべし

〔考異〕

(二)いか〳〵と泣く—うまれ給ひぬいかにかくなど

あり。おのれ、二十餘人の子どもの親なり。こゝらの御子たちは、誰がのも〱、(一)居立ちてなむ生ませ奉りし。まづ、湯まゐれ」とて、(二)おとゞは湯、父おとゞは物とりて、すかせ給へどえすかせ給はず。辛うじてこしらへて、參りて、正頼「いざさせ給へ」とて率て入りて、(三)正頼「人々しばし入り給へ。(四)この主えみ奉らず、と侘びまどひ給ふ。入れ奉らむ」女御の君、仁壽「何か。くちをしうなり給ひにたるものを、今更に」と宣へど、人は出で給ひぬ。二の宮は添ひておはするに、ちひさき几帳隔てたり。(五)女御の君、仁壽「おのれは、物の恥も知らず、さきにいとよう見給ひてしものを」と宣へば、入りて見給ふに、いと御腹たかくて、息づき臥し給へり。大將、仲忠「わが君は、如何に侍れとてか、かくは臥し給へる」とてかき起して、湯まゐり給ふを、えまゐらねば、仲忠「ともかくもなり給ふとも、仲忠が志と、御湯聞しめせ」と泣く〱聞え給へば、一啜まゐる。お物一口くゝめ奉り給へば、すき給ひつ。よろこびて、脇息に尻かけて、(六)かき抱きあげ給へば、心

〔語釋〕
(二)正頼は湯兼雅は食物
(三)仲忠を
(四)仲忠
(六)仲忠が女一を

〔考異〕
(一)誰がのも〱―たがのをも〱―たがをもたがをも
(五)隔てたり―たてたり

あらじと見給へるものなり。いとよく仕うまつりなむ。此の君徒らになり給はば、やがて淵河にも落ちいりて死に侍りなむ。更におくれじ(一)」と聲も惜まず泣けば、かんのおとゞ、俊蔭女「目もこそ二つあれ。一所を、親君とたのみ奉るわが子にて、などか斯くは宣ふ。我が子の御代に、我こそ死なめ」と臥しまろび給ふ。左のおとゞ、正頼「男は、必ずかゝる目をぞ見る。(二)左衛門佐の折になむ、かゝる目見侍りし。(三)人のかなしう覺え侍りしよりも、嵯峨院の思召しけむことを思ひ侍りしなむ、いと辛かりし。これも、院のかく思しさわぐらむを聞き給ふらむ所、苦しうおぼえ侍らむ」大將、仲忠「それまでも覺え侍らず。かの御身のいみじきをのみなむ。御方々物し給ふとて、あたりへだに寄せられねば、御面をだにえ見奉らぬこと」と宣ふ。左のおとゞ、(四)うち笑ひ給ひて、正頼「かゝりける御中を、はじめは心ゆかず思ほして、(五)勘當せられしはや」と宣へば、人々わらふ。正頼「物な思しそ。正頼生け奉らむ。(六)人の勞れにたるならむ。かやうの事は、人勞れぬれば、斯うも

〔語釈〕
(二)宮あこ君誕生の時
(三)妻の
(五)私があて宮を許さぬとて君に怒られたり
(六)産婦の

〔考異〕
(一)おくれじと—おくれじとすと
(四)うち—ナシ

とて奉り給ふ。
大將殿、衣も脱ぎあへ給はず、直衣などのうへに、水を浴みつゝ、まどひ給へば、人々脱ぎかへさせつ。庭に出でて、大願を立てて申し給ふ、仲忠「この人え免れ給ふまじくば、おのれを殺し給へ。片時おくらし給ふな」と伏しまろび泣く。簀子に、上達部、御子たちおはす。ありとある人は、立ち竝みてぬかづく。朱雀院の御使は降る雨の脚のごと、參りては立ち竝みてあり。萬のところ〴〵の御使あり。左右のおとゞ、下りておはして、「などか、かくも見え給はぬものを、心弱くは見え給ふ。よろづの事、心をしづめてこそは」とて集まりのぼりて、父おとゞ、兼雅「女にもまたも逢ひぬるものにこそあれ。親こそ、え逢はざんなれ。よしや、兼雅をば然も思ふらむ。かたのやうなる女子もあり、女親をば如何にせよと思ふぞ。昔忘れにたるか」と宣へば、仲忠「女親にはた、あるに隨ひて仕うまつり侍りにき。殿にまだえ仕うまつらぬ。仲忠が代には犬を顧みさせ給へ。女子なれど、たゞには

〔語釋〕
(六)「女にはまたも」歟、妻は再び得べし親は再び得べからずの意なるべし
(七)犬宮
(八)俊蔭女

〔考異〕
(一)衣も脱ぎあへ―衣は脱ぎもあへ
(二)かくも―「も」ナシ
(三)弱くは―「は」ナシ
(四)こそは―「は」ナシ
(五)集まり―集まりて
(九)昔―昔は

〔語釈〕
(二)朱雀が

〔考異〕
(一)こそは己を人とも―こそ己をも人にも
(三)聞きつるは―「は」ナシ
(四)侍ると―侍るを

しうなむ。此の宮により奉りてこそは(一)己を人とも思したれ。片時も、見奉らでは如何はあらむ」と泣きまどひ給ふ。朱雀院より御使、(二)「只今も、いみじう聞きつるは(三)、如何なる事にかあらむ。定かに宣へ。いとくち惜しく、年頃いとおぼつかなく思ひつるを、斯くいふかひなかなる事。只今ものせむとするを、男ども一人もなく、皆そこに物しにければなむ。「心のうちに、己にあひ見むと念じ給へ。ここにも限りなくなむ願し侍る(四)」と聞え給へ」とあり。大宮、見給ひて、大宮「斯くなむ」と申し給へば、女二「ねたく、召しゝ折参りなむとせしものを」と息の下に宣ふ。大宮、御返、

大宮 畏まりて承りぬ。おほせごと賜へる人は、この晝つかたより、物も宣はず。いと頼もしげなくなむ。かくても、平かにあるものとは思う給へながら、心細くなむ。かくなむと物し侍りつれば、「参らずなりにける事」となむ聞え給ふ。

〔語釈〕
(四)女一宮が仲忠に止められて朱雀院へ行かざりしを

〔考異〕
(一)恥ぢ聞え給ひて—こえて
(二)給ひて—給ひつ
(三)持ち給へる—も給へる

へよ」と聞えよ」と宣へば、然聞ゆ。宮あまたの御方々を(一)恥ぢ聞え給ひて、まどひて泣く〳〵入り給へり。女二「此方寄り給へ。わが許なしりぞき給ひそ」とてすゑ奉り給へるに、心知りたる人々は、いみじく泣く。その夜、いとおそろしく病みあかし(二)給ひて、その日の晝つかたより、をさ〳〵物も宣はず、たゞなへになへ臥し給ひぬ。女御の君聲も惜み給はず、ふしまろび泣き給ふ。大宮、「あなかまや。かく宣へば、いとゞ湯水も參らずまどひ給へば、我も死なむと泣きこがれ給ふめり。あまた(三)持ち給へる族にだに、斯く宣はするを、まして唯一人持ち給へる父母、如何聞き給ふらむ。誰もかゝる目をこそは見しかど、今まではあらずやは」と聞え給へば、仁壽「數多おはすれど、この宮をば、小くより、上の限なくかなしきものにし給ひて、「寶持ちたる心地こそすれ」と宣ひつゝ、「年頃見ぬこと」とおもほし嘆きて、迎へ奉り給ひしにも、(四)參り給はざりしを、いとくち惜しと思ほしたりしものを、今一度見せ奉らずなりぬるにやあらむと思へば、いみじう悲

〔語釈〕
（二）女二宮を
（三）御氣がかりて
（五）女一宮をいふ
（七）后宮の機嫌を損ねまじとて
（一〇）女一宮は女二宮が朱雀院を下りし時の騒ぎを聞知り居る故

〔考異〕
（一）壺坂よろづの—壺坂までよろづの
（四）腹立ち—腹立ちて
（六）死なゝむと手を打ち—しゝなむと手うちて
（八）人々さわぎ—人々多くさわぎ
（九）この折に盗み出でむ—この折には盗みもしてむ

はじめて、左右の大殿、朱雀院よりも修經の使乘り連れて、行きちがひつゝ、初瀬、壺坂（一）、よろづの所々にまうで、左右のおとゞ、御子たちも皆おはしましぬ。よろづの人、皆簀子に居竝み給へり。

かゝる折に、人々騒ぎてしづ心あらじと思ひて、例の君だちは、乳母を語らひて、萬のたから物を取らせて、「日だに暮れば盗ませよ（二）。入れよ」とて暮るゝを待ち給ふ。朱雀院には、帝（三）やすくもおはしまさず出で入り思ほし歎きて、おはしまさむとすれば、后の宮腹立ち（四）のゝしり給ひて、いみじき事をし給ひて、后宮「この盗人（五）死な（六）なむ」と手を打ちて宣へば、（七）御心をやぶらじ、とてえおはしまさず。五の宮、「彼處の（八）人々さわぎたらむ。（九）この折に盗み出でむ」とて日の暮るゝをまち給ふをも知らず、女御の君よりはじめて、宮にかゝり奉り給ひて心まどひ給ふに、二の宮は、何心なくて西の方に人少にておはす。（一〇）一の宮、まかで給ひし夜のことをきゝ給ひにしかば、さるいみじき御心にも、女二「二の宮に「おはして我を見給

と聞え給へり。二の宮、見給ひて、女二「あなうたてや」と宣ふ。女御の君、見給ひて、仁壽「げに然もし給ひてまし。あな煩はしや」など宣ふ。宰相中將、藏人の少將など、今は氣色にも出ださで、女御の(一)君には見え奉り給はで、まうで語らひ給ひつゝ、よろづの事志ふかう仕うまつり給ふ。

かくて(二)大將殿は、(三)宮の平かにおはしますべき事を、神佛に申させ、所々に修法などせさせ給ひ、(四)御産屋をありしよりも淸らにして待ち給ふに、十月といふ上の十日過ぎぬ。人々心もとながり給ふに、中の十日も過ぐれば、萬のかしこしといはるる僧都、僧正、申し集めて、不斷の御修法七八壇せさせ給ふ。(五)眞言院の律師して、孔雀經の御修法行はせなどして、思しさわぐに、廿三日の晝つ方より惱みはじめ給ひて、その夜一夜なやみ給ふ。いとほしがり騷ぎて、大宮、かんのおとゞわたり給ひて、明る日一日惱みくらし給へば、民部卿の北の方、(六)大殿の、子産み給ひていくばくもなければ、あえ物にとて聞え給ひければ、わたり給ひぬ。宮の内より

〔語釋〕
(二)仲忠
(三)女一宮の安産
(五)忠こそ法師
(六)「大殿の」衍文歟、一本「大殿に」

(梗)女一宮難産。人々の周章。仲忠の悲痛。正頼の同情。男子を生む。女二宮の乳母が祐澄の賄を受けて女一宮の御産の騷ぎに紛れて女二宮を盗ませんとせし噂。

〔考異〕
(一)君には—君に
(四)御産屋を—御産屋のさま

り。此處(一)にも斯くてのみやは侍らむ、いかで(二)見むと思ひしを(三)、然宣ふと聞きしかば」五の宮、「この(四)(五)御子を賜べ」忠康「それは讓り聞えむ」などて(六)、五宮「この文を疾く〳〵」と宣へば、二の宮の御もとに御文かき給ふ。

忠康 夜の間いかゞ。昨夜御送もえせずなりにしをなむ。平かにや(七)。覺束なくなむ。

とて、

忠康 これは、いと哀に宣へば、いとほしさ(八)に奉るなり。

とかき給へり。見給へ(九)ば五の御子の御文には、

五宮 よべは御供にと思ひしを、あさましく、上の許させ給はずなりにしかば、中空になむ。

かへり行く鴈のさとへと思ひしを雲にまよひて(一〇)ひとり音ぞなく

今そこに參りこむ。別いても近き衞どもこそいと恐ろしけれ。

〔語釋〕
(一)我も
(二)女二宮を手に入れんと
(五)女二宮を我に讓り給へ
(六)「などとて」なるべし
(八)五宮が賴む故差上る也と五宮の文を封入したることわりをいふ也
(九)女二宮が

〔考異〕
(三)思ひしを―思ひしかど―思ひしかども
(四)この―二の
(七)にや―にやは
(一〇)まよひて―まどひて

ば、如何にせよとて、この宮(二)をばまかでさせ奉り給へるぞ。かゝる心ありとて、宮(二)も月頃は見給はず、上もよからず思したれど、それも思はず。宮に、(三)(四)我を子にして助け給へ」など宣ひあかして、つとめて御文かきて、五宮「これ、御文の中にて(五)奉り給へ。まろをば、(六)よも憎しと思はじ。皆人に憎まれぬ人を、(七)宮たちにも思しつらむ」と宣へば彈正宮、忠康「こゝにこそ、人に憎まれて獨りのみ侍れ」(八)五の宮、「あな痴や。(九)同じ心なりけむ人を、何につゝみてたゞにはあらじぞ。(一〇)わりなくても、物をだに言ひそめつれば、その人をこそ我いかでと思ひたれ。何れの男か、人を思ひかけて、それに憂くて一人はある。上の御心を思はずば、宮をも今までかく思はましやは。昨夜は、萬のこと覺えざりしかど、とらへて參り給ひに(一一)しかばこそは、え見合せ奉らずなりにしか」彈正宮、忠康「中納言(一二)の女のもとに、(一三)御文遣はすと聞きしは、(一四)それこそ人も見つべう聞ゆれ」(一五)五の宮、「よしと人の言ひしかば、文やりしかども、返事もせず」兄宮、忠康「なほそれを宣へかしといふな

〔語釋〕
(二)女二宮
(三)彈正宮が
(五)君の御文の中に封入して女二宮に上げて下され
(七)「人と宮たちにも」歟
(九)あて宮が嫌でもなかりしに何を憚りて手を出さゞりしぞ
(一〇)「ありしぞ」なるべし
(一一)女二宮
(一二)女二宮を
(一三)實忠の女そて君
(一五)妻にしてもよき器量と聞く

〔考異〕
(二)この宮—二の宮
(四)宮に—宮の
(六)をば—をも
(八)にも—にぞ
(一四)聞きしは—聞きしが

門督と立ち給へば、女御の君、仁壽「あな見苦しや。こゝには(一)恥ぢ奉らず。物恥し給ふ人こゝにものし給ふめり」大將、仲忠「宮たちもおはしまさぬを、とてさふらふなり。仲忠をばな疎ませ給ひそ。火を暗うなさむ」とて御松明も暗うなさせ給へば、さる樣こそ(二)あらめとて、まづ(三)下り給ひて、宮たちおろし奉り給ふ。おとゞ、左衞門督、御几帳さして入り給へば、大將後に立ち入り給ひて、やがて御座所へも入れ奉り給はず、一の宮の御方におはしまさせて、御帳の内に入れ奉りつ。宰相の中將、祐澄「こは、大將の今日盜人の氣色を見てするにこそあらめ。宮たちもおはせで、いとようたばかりつべかりつるものを」とて齒咬をして出でぬ。少將もすべり出でて去ぬ。つとめては、つれなくて皆出で來たり。大將、見合せて、いとをかしと思ひたれど、いとまめやかにうち語らひ給へば、氣色いと惡くて、宰相の中將居たまへり。

かくて五の宮、彈正宮の膝を枕にして、夜一夜、泣く〳〵物語して、五宮「まろを

〔語釋〕
(一)我は恥かしくもなけれど
(三)仁壽殿が

〔考異〕
(二)こそあらめ―こそはあらめ

(要)五宮、彈正宮に托して文を女二宮に贈る。

出で給ひぬ。御車の左右には、おとゞ、大將の御車をひき竝べて、(一)御前に君だちうち圍みておはしませば、こゝかしこに、(二)(三)ひたぶる裝束したる者ども、うち群れつゝあれど、(四)寄り來べくもあらねば隱れぬ。

大將、宰相の中將、藏人の少將の(五)なきに、(六)これはみなたばからるゝ樣あらむ、此處をば離れぬ、彼等ぞ煩はしき、と思ほして、御車をひき別れて走り先だちて、宮におりて、入りて見給へば、宰相の中將、かゝる業の爲に片時に千里行く馬立て飼ひ給ひけるに、鞍おきて、(七)やごとなく睦ましう仕うまつり給ふ四人、狩衣に草鞋はきて隱れ立ちたり。をかしと見給ひて、上にのぼりて見給へば、御車寄する程にあたりて、立てり。見ぬやうにして入りて、紙燭をさして、御帳の內その邊をめぐりて見給へば、藏人の少將、直衣すがたにて、壁代と御障子との間に立てり。いとをかしと(八)見給ひて、待ち奉り給ふに、おはし著きぬ。

御車寄せて、御几帳さして、仲忠「はや下りさせ給へ」と聞え給へばおとゞ、左衛

〔語釋〕

(二)かひ〳〵しき出立ちしたる者、女二宮を奪はんとせる也

(六)仲忠の心、祐澄近澄等はたくめる所ありと見ゆ

〔考異〕

(一)御前に—御前の

(三)ひたぶる裝束—ひたぶるの裝束

(四)寄り來べくも—寄るべくも

(五)なきに—なきを

(七)やごとなく—やんごとなく

(八)見給ひて—見て

〔語釋〕
(一)警固の武士あり
(二)朱雀院
(三)女一宮懷胎中也
(四)庶澄
(六)誤あらんか、五宮をいふなるべし
(七)心得違したる樣なるは如何

〔考異〕
(五)入り給ふ—入り給ひつゝ

宰相などは御馬にてまうで給ふ。

朱雀院の御門には、后の宮おはすれば陣居たり。(一)御車も寄せさせず。御門にひき立てて參り給へり。上おはします。女御、仁壽「まかで侍りて、(三)御産平かにものし給はゞ、いと疾く參り(二)侍りなむ」うへ、朱雀「かく大事とて物せらるれば、賴もしきものを。されど、今日やんごとなき迎人ども、賴もしくあめれば。男御子たちは、な率て物し給ひそ。いと騷々しからむ」と宣ふ。上おもほす御心ありて制し宣はせて、御車近う寄せさせ給ふ。左のおとゞ、右大將、左衞門督、(四)近くさふらひ給ふ。五の宮いとしどけなき氣色にて、上立ち給へる御前より、二の宮の御許へ、たゞ入りに入り(五)給ふ。今上「何方にぞ。あな騷がし。(六)かのおほいまうち君は」大將の朝臣の見給ひて、仲忠「いと怪しからずや」とて引き留め給へば、涙をながして、たゞ泣きに泣き給ふ。今上「など御子の(七)あやまりて見ゆる。思ふ心あらば、我にこそ言はめ」と宣へば、涙を拭ひてさふらひ給ふほどに、皆ひき連れて

(四七)正頼、女二宮女四宮を自邸に迎ふ。祐澄近澄等女二宮を途中に奪はんとして成らず。

〔語釈〕

(一)女二宮の迎に正頼等

(二)「忠澄ら参りて」なるべし

(四)勿體ぶりて居る間に

(五)實は祐澄がかねがね女二宮に懸想し居る也

(六)近澄

(九)實正、涼、藤英

〔考異〕

(三)然れど―さば

(七)大事は―大事の

(八)をば―「ば」ナシ

(一〇)胡簶負ひたる男ども―胡簶を負ひたるをのこら―胡簶おひたるものをのこら

かくて、御迎に、(一)おとゞ、君たち出で給ふ。左衛門督の君、忠澄「何か。まゐり給はずとも、忠澄は(二)参りて、まかでさせ奉りてむ」おとゞ、正頼「然れど、(三)一所をだに、我らかしづき奉るべし。況や、七所の孫の宮たち迎へ奉りたらむに、何の事かあらむ。宿徳(四)つくらむ間に、事惹き出でては、え効もあらじ。我主たちの御心もしらず、わかき男女、同胞と具し給ふ、やすく思ふべきにもあらざりけり」と宣へば宰相中将うち笑ひて、祐澄「聞召し懲りたる事やあらむ。さやうに好いたる人も、今は侍らぬものを」(五)とつれなく言ふ。下には、いかでこの折に盗まむ、と思ひたばかる。(六)蔵人の少将は、物も言はで、下りて入り給ふらむほどに、入り臥しなむ。まさに殺されむやは。又、さらば然て死なむ、と思ひおはす。かくてみな出で立ち給ふ。おとゞ、正頼「私(七)の大事は、この事にまさるはあらじ。此の事かく同じ心にし給はざらむをば(八)怨み申さむ」(九)民部卿、源中納言、右大辨、まうで給ふ。上達部は御馬にて御前、弓、胡簶負ひたる(一〇)男どもあまたして、衛門督、

て、心細げにおぼしたればなむ、まかりありきもえせぬ」北の方、侍從女「げにさぞなり給ひぬらむ。參らむとするを、按察使など、憎しと見むと思へば、恥かしくてこそ。院の上は、(一)などか今まではまかで給はざらむ」仲忠「いさや、かの二の宮を、(二)五の御子の、世を世ともし給はず、帝后も物聞え給はぬ人の、いかで取らむとのみし給ひて、「まかで給はゞともかくもせむ」とのみあれば、里にもえ。(三)然らぬ「人知れず盗まむ、入らむ」とのみあなれば、それに怖ぢて、えまかで給はぬぞや。藤壺の、さばかりのよしられ給ひしかど、情づき、人の御返事申しつぎ、えすまじきは、さてこそあらまほしくてえ給ふなりしか。これは物驗がしくぞあるや。「さては(四)得ぬものと懲りにたるにこそはあらめ。然てのみあらむやは」とて明日ぞ、これかれ大事(五)して迎へ奉り給へるなる」と聞え給ふ程におとゞおはしぬれば、御物語など聞え給ふ。

畫詞 こゝは右大臣殿。

〔語釋〕
(一)仁壽殿
(二)仁壽殿腹女二宮
(三)五宮以外の人も、「さらぬも人知れず」なるべし
(四)とても奪取ることは叶はぬものと
(五)「大事」は「御車」の誤なるべし

申させ給へ」と宣ひつ。

〔畫詞〕こゝは右大臣殿の御方。修理頭年(一)六十ばかりなり。宮、おとゞに梨壺の御文見せ奉り給ふ。女三「この頃は、なまうで給ひそ。藤壺、隔てもこそ思せ」兼雅「今衣更の程にものせむ」とて、生れ給ひし宮の、脇息をおさへて立ち給へるを、抱きてありき給ふ。

かくてかんのおとゞの御方に、大將まうで給ひて、仲忠「なほ申すべき事の侍るを、疾くわたり給ひなむや」北の方俊蔭女「此の晝ぞ(二)まうで侍りぬる。夜はこゝにもとまり給はず。(三)かの宮見奉りにぞ、かく晝間には」大將仲忠「この東(四)にはものし給ふや」北の方、俊蔭女「わざとにはあらで、夕暮、夜の間にぞこうじ(五)隱せらるなるや」大將、仲忠「然思すべき人にこそは。年頃いかに思ひつらむ。かの按察使(六)の君なども、いと目やすき人にぞありける。かゝる人どもを見捨てて、いかで物し給ふらむとこそ。屢まゐり來べきを(七)、かしこに疑はしき程になり給ひぬるを、人少に

〔語釋〕
(二)兼雅が
(三)梨壺腹の皇子
(四)中の君等をおきてある處
〔要〕仲忠、母を訪ふ。女二宮の噂。
(五)「こうじがくれ」は「小路隱」歟、一本「こしがくれ」又「かうしかくれ」
(六)仲賴の妹
(七)女一宮
〔考異〕
(一)年―ナシ

と」兼雅「げに、いと怪しう沈み給ひつるを、如何に思はれつらむ。此御慶は、兼雅らにはえ宣はじ。東宮の女御になむ、返すぐ申さるべき。かの女御こそ、度々申されけれ。(一)他人あまたあり、かの御同胞の左大辨、(二)「兼けて仕うまつらむ」と切に申されけれど、(三)主を申しなされけるとぞ聞きしか」修理頭、おどろきて、忠保「何の故にか、女御然奏せしめ給ひけむ。私事には侍れど、(四)「仲頼の朝臣の、山にまかり籠りしも、かの女御によりて」とて、(五)童べの佗び申すことを、聞召すところや侍らむ、と畏まり侍る。忠保は、「男の好色といふものは、怪しきものに侍れば、おほけなき心の侍りて、身をも亡(七)ぼして侍るにこそあれ。女御知り(六)給ふべき事にもあらず」と愚なる心にも制し侍るを、身の便なきまゝに申すなり」おとど、兼雅「男の好色は然ぞあるや。女あるときけば、(八)天上の天女をも持てならさすめればにこそ。かの女御(九)は有識にて、さやうの事を思して(一〇)勞られたるにこそはあらめ。新中納言御兄弟を越してこそは物せらるなりしか。彼處に、(一一)藏人の少將などして、(一二)

〔語釋〕
(一)修理頭を望む者他に數多あり
(二)師澄
(五)仲頼の妻
(一一)あて宮へ
(一二)近澄などに取次を頼みて

〔考異〕
(三)主—まし
(四)仲頼の—「の」ナシ
(六)ものに—ものにて
(七)亡ぼして—「て」ナシ
(八)天上の天女をも持てならさすめれば—天下の仙人も御目ならさめれば
(九)女御は—「は」ナシ
(一〇)思して—「て」ナシ

り。三條院よりもいかめしう仕うまつり給ふ。

畫詞　こゝは嵯峨院の四の宮の御方。

かくて修理頭は、覺えぬ喜して、驚きよろこぶこと限なければ、(一)出でてありかむとするに、年老い、牛車、裝束もなし。直衣裝束は、女著せたれど、上のきぬは無し。女紀念にせむとて少將の裝束一くだり持たりける、取う出たれど、うへのきぬは元より無し。とかうたばかる程に、三日も過ぎぬ。辛うじて、所々に慶申すとて言ふ、忠保「こゝらの年頃、公に捨てられ奉りて、諸資財を賣りて、世にかなしく佗しき目を見て、わづかに侍る女の童の夫に侍りし山伏の、苔の衣をぬぎ松の葉を包みて、深き山よりとぶらひ侍る物を(二)わかちて養ひ侍るにかゝりて、一人の從者も侍らず衣裳も侍らで籠り侍るを、(三)明王の出でおはしまして、斯くまかり浮びたる慶を、すなはち申さむと(四)思ひ侍りつれど、(五)とかくの事ども出で侍りつる程に、今までになり侍りにけり」と申すを、他人はなほ聞き給ふ。左(六)のお

〔語釋〕
(六)「右のおとゞ」の誤

〔考異〕
(一)なければ―なけれど
(二)物をわかちて―をもちて
(三)侍るを―侍るに
(四)申さむ―奏せむ
(五)とかくの事ども出で侍りつる程に―かくの如くはていし侍りつる程に

めに過したること有りて沈むとこそ聞きしか」女御、あて宮「さ侍らば、いと哀にて侍るなるを、修理頭のあきて侍(一)るなるにやはなさせ給はぬ」うへ、今上「など、勞るべき樣やはある」女御、あて宮「さも侍らねど、兵(二)衞が親がたにて、常に申さすれば」など聞え給へば、なされぬ。世の中に「いみじき官得つるものかな」と驚きさわぐ。左のおとゞ、よき折に奏し給ふ、正頼「このはなち遣はしてし、滋野眞(三)菅さけしき人に侍りしかど、その罪を、後まではかうぶり侍るまじ。かく御世のはじめなどには、天下の罪あるものを免させ給ふなる。(四)かの男どもの、哀にて侍るなる、召につかはさむは如何侍らむ」うへ、今上「ともかうも知らざりし事なり。これかれよろしう定められて、あるべからむ樣に物せられよ」と宣へば、喜びて、みな召に遣はす。

かゝる程に四(五)の宮男御子生み給ひぬ。大后宮、斯かりけるものを、今しばし、坊定まらざらましかば、と思す。御産屋(六)いとになく、所々より御産養例の作法な

〔語釋〕
(二)あて宮の侍女兵衞がわが親の身寄なればとて

〔考異〕
(一)侍るなるにやは—侍るにや
(三)眞菅さけしき人に侍りしかど—眞菅はさかしき人に侍りしかば
(四)かの男どもの—あの男どもが
(五)四の…大后宮—嵯峨院の四の宮男宮うみ給へり父みかど大后宮
(六)いと—ナシ

事も、宣はせ(一)ではし給はず、奏し給ふことも否び給はず。おとども、公の謗と(二)あるべきことは定め(三)給はず、やんごとなき事ならぬは奏し給はず。右の大臣をば、心憎き恥かしきものの心ある人にし給ふ。右大將は、公私にも、かしこきものに思はれ給へり。然あらぬ人も、調ひたり。(四)新中納言、よろづ人に惜まれ、上も、これ宮仕せさせてしがなと思す。

かくて年還りぬ。朔の日、朝拜きこしめす。二日、朱雀院、嵯峨院に參り給ふ。三日朱雀院に行幸あり。大將、思ひあるべければ、かうぶり賜はせず、やく(五)なきものどもに賜ふ。これはた、かうぶり賜はりぬ。次々の節會どもも、みな聞召す。(六)内宴には、平中納言殿(七)の御息所なり。容貌も淸げなり、ある中に下﨟にてまかなひ給ふ。

司召にもなりぬ。女御奏し給ふ、あて宮「宮内卿(八)忠保朝臣は、よき官はえ賜はるまじき人にや侍らむ」うへ、今上「然も聞えず。よろしき人なめるを、嵯峨院の御た

〔語釋〕
(一)正賴に御相談なくては
(四)實忠
(六)賄役をつとむる也
(七)宣耀殿
(八)仲賴の妻の父

(筋)新年。菅原忠保修理頭に任ぜらる。滋野眞菅父子赦されて召還さる。女四宮皇子を産む。

〔考異〕
(二)あるべき―なるべき
(三)定め……ならぬは―御爲にやんごとなき事にても
(五)やく―やごと

ありてこそ、院にも騷がれ奉りしか」など宣ひて巡にて(一)(二)まうのぼらせ給へば、いと花やかになまめかしくもてなし給ひて、世中まつりごとも、いとかしこうせさせ給ふ。御學問に心を入れて、御遊も常にせさせ給ひて、いとおもしろうし給ふ。梨壺は、なほもの宣ひなどす。他人は、(三)まうのぼり給へど、殊なることなし。人の御宿直の夜も、藤壺の御ためには、然るやうにもあらずもてなし給ふ。四の宮は、藤壺參り給ふべしとてまかで給ふに、(四)さがなものはまだ參り給はず。式部卿の宮のは、女御にならずとて、父宮おぼし嘆くと聞召して、度々召しければ、登華殿「如何はせむ」とて參り給へれば、輦ゆるされ給ひぬ。時々まうのぼり給ひ、晝も時々わたらせ給ふほどに、十月ばかりよりはら(五)(六)み給ひぬ。父宮、すこし嬉しと思す。

かくて世の中定まりけり。太政大臣は、さるやんごとなき一の人におはす。左大臣のおとゞ、世の中をまつりごち、(七)帝も政事をあづけ給へる樣にて、いさゝかの

〔語釋〕
(一)女御たちを
(四)昭陽殿
(五)登華殿が

〔考異〕
(二)巡にて—女御巡にて—女御
(三)まう……ことなし—まう上り給へと申し給ふことなし
(六)はらみ—にんじ
(七)帝も—「も」ナシ

りまう上り給へ」とておはしましぬ。

まう上りて下り給へば、今上「坊(一)呼びてするゑ給へれ。こゝに物せむ」と宣ふ。下り給ひて、左衛門(二)の君に、「わたし(三)奉り給へ」と宣へば、大殿、上人などしてわたり給ひぬ。知らぬ顔にてわたり給へば、いと〳〵(四)おとなしう、紐ついさしてさふらひ給ふ。御髪は居長にて、いと氣高う淸らなり。今上「げにこれは(五)、聞きつるやうに、たゞの人には見えざりけり。親(六)にこそいとよう似たりけれ。あいなう心さへ似るかな」と宣へば、女御、あて宮「いかゞ(七)然は侍らむ」上、今上「人のえもどくまじ(八)う、心強くこそは」と宣はす。

かく(九)、來つゝ(一〇)つねに宮たちを見給ふ。夜ごとに參らせ(一一)給ひ、晝も日々にわたらせ給へば、女御、あて宮「身一つ候ふ(一二)だに、ゆゝしく聞きにくき事さふらふものを、かく若き宮たちひきつれて候ふこと、いかにうたてある事侍らむ」うへ、今上「今は然もあらじ(一三)。人々の心をやりても、いとよくありぬべかりけるものを、思の儘に

〔語釈〕
(二)「左衛門督の君に」歟、忠澄なり
(三)東宮を
(四)東宮が
(六)あて宮をいふ
(一〇)今上があて宮方へ
(一一)あて宮が今上へ
(一三)あて宮が他の女御たちと同列にてどの女御たちにも平等に滿足を與へて然るべき時に我儘にあて宮をのみ寵せし故昔は不平も言はれしが

〔考異〕
(一)坊―坊を
(五)これは―見れば
(七)いかゞ―いかゞは
(八)もどくまじう―もどかるまじく
(九)かく―かくて
(一二)候ふ―ナシ

見るに、二の宮あそび給ふをかき抱き給ひて、御膝にすゑて、かき撫でつゝ見給ふ。御髪はやうしかけ(一)たる様にめでたし。肩うち過ぎたり。御容貌いとめでたし。うへ、今上「坊をこそ、まづ見むと思へ。呼びにやり給へ(二)」と聞え給へば、あて宮「いま、今日明日過して」と宣ふ。今宮の御乳母、いとねたしと思ふ。二の宮のは、乳母「されば我(三)こそ」とて誇る。今宮、なにに心もなくたゞ笑ひに笑ひて、二の宮に這ひかゝり給へば上、今上「(四)これも類の人ぞ。これも憎くはあらねど、いたく我に物を思はせつるや(五)」とて宣ふ。

今上二葉にもまだ見えざりし玉かづら這ふまでまつぞ久しかりける

女御、

あて宮まつだにも苦しからずば玉かづら立つをぞ君に見せむと思ひし

うへ、今上「(六)おそく參り給ひしかば、これをいと憎く、見じと思ひつれど、親の罪(七)をも負ふまじきものかな」とて(八)かき抱き給ふ。おはしまし暮らして、今上「(九)夜うさ

〔語釈〕

(一)「えう(瑩)しかけたる」なるべし

(六)あて宮の參内が此の子故に遲なはりし故

〔考異〕

(二)やり給へ―やりて給へ

(三)我―ナシ

(四)これも類の人ぞ―これも類の人ながら―これはたゞの人ぞなど

(五)とて―「て」ナシ

(七)罪をも負ふまじき―罪も思ふまじき

(八)かき―ナシ

(九)夜うさり―「う」ナシ

あて宮　夜々は知りけるものをこよひしもなほさへとくはなどか聞くらむ(一)

上、今上「うたてくも(二)言ひなさるゝかな。さりとも「うちなす鐘の(三)」など宣ふほどにあかくなれば急ぎ下り給ひぬ。すなはち御文あり。

今上　只今は、

歎きつゝふる夜もあれど朝ぼらけおきつる霜のわびしかりつる

女御、

あて宮　明けぬれば雲のうへにもとまらずておきゆく霜の寒きをぞ知る

と聞え給ふ。

二の宮、赤らかなる綾かいねりのひとへがさね、織物の直衣、襷がけの御はかま、今宮(四)(五)、こもんの白きあやの御衣一かさね奉りて、襷かけて、いとをかしく肥えて、這ひありき給ふ。女御(六)、上(七)わたらせ給へば、みな出だしすゑ奉りて、乳母たちは、御几帳の後に泣み居て、いづれ(八)の宮をかまづ抱き給ふと、挑みかはして

〔語釈〕
(三)未考
(四)あて宮腹第二皇子
(五)あて宮腹第四の皇子
(七)今上
(八)今上が

〔考異〕
(一)とくは—うくも
(二)うたてく—うたてう
(六)女御—ナシ

〔語釋〕
(三)あて宮が帝の所へ

〔考異〕
(一)二人は—「は」ナシ
(二)御供人などと—二十人と
(四)御物語—御物語に
(五)給ひつゝ—給ふかつがつ—給ひつゝかつがつ
(六)間の—間を

(筋)今上、あて宮幷に其腹の皇子たちを寵愛せらる。登華殿懷胎。

などいふほどに、御前は中の御門にいたりぬれば、後は宮まだ近し。かくて參り給うて、まづ東宮入り給ふ。御車に、乳母二人(一)はさふらふ。今二人は、藏人御(二)供人などと歩み入り給ひぬ。梅壺におり給ふべしと、輦の宣旨申して、女御入り給ふ。御輦にては、宮たち、いま宮の御乳母、孫王の君さふらふ。後におとな六十人ばかり、わらは、下仕あゆみ、四位五位具したり。こと君たち、皆おはす。かくて藤壺におり給ひぬ。御おくりの人、男女まかで給ひぬ。

畫詞　こゝは東宮まゐり給ふ所。

かくてまう(三)上らせ給ひて、月頃の御物語(四)、おそく參らせ給へる事など、かたみに聞え給(五)ひつゝ、まだ御殿籠らぬに、「丑二つ」と申すに、女御下り給ひなむとすれば、今上「しばし待ち給へ」とて、今上「この頃の夜は、かう言ひてもまだ暗し。

今上獨りねし夜はまちかねし時の間(六)の疾くもこよひは思ほゆるかな

明けがたかりしものかな」と宣へば、女御、

かば、如何ならまし。容貌心めでたかりしはや(一)。手をかき、歌をよく讀みしはや」(二)と車ごとに言ふ。少將(三)の妻母、ひとつ車にて物見る。母、「わが聟の君をほろぼし給ひてし人(四)の、めでたくて物し給ふかな。斯かりける幸人を、思ひかけ給ひけるぞ、おほけなきや」女、仲賴妻「さればこそ、死に入りて久しかんめりしか。山へ入るとてこそ生き出でたりしか。そのかみ侍從(五)なりし人だに斯くなり給ふめれば、(六)(七)かの君は、今は大臣にもなりなまし」母、「かの大將のやうに、いかで。宰相などには然もありなまし。されど、君(八)なればこそ、かゝる君たちの、うち羣れて、深き山邊を尋ねて、いみじう志をしてとぶらはれ給へ。その御德にぞ、かゝる面白き目をも見れ」とてみな泣く。女、

仲賴妻　かたらひてむれつる(九)鳥を見る時ぞのこれる袖も朽ちはてぬべき

母、

袖のみやくちははつらむ君なくてみも見る効のみえずもあるかな

〔語釋〕
(三)仲賴
(四)あて宮
(五)仲忠
(六)仲賴
(八)仲賴なればこそ

〔考異〕
(一)はや―をや
(二)はや―ぞや
(七)かの君は―「は」ナシ
(九)むれつる―むれくる

〔語釋〕

（四）仲賴

〔考異〕

（一）乘りたれど―乘りた

（二）うちまぜ立てたり―うちまぜて立てたり―うちまで立てたり

（三）ごとくなる御前に松明しごとくて御前まつたき

車の次には、御櫛匣殿の人だまひさながら立つ。その次に、よろづの宿德乘りた（一）れど、女御の御方の人だまひの後にぞ立てける。宮たちの御乳母のいふやう、「同じ御腹に生れ給ひつる同じ宮に仕うまつれど、如何なる人の、一の車に乘るらむ。我ら如何なれば、宮のをさめ、御厠人の後に立つらむ」と腹立つ。孫王の君、「かの宮をかしづき聞え給へばぞや」と言ふ。大宮の大路よりのぼり給へば、おほくの左右の物見車、うちまぜ立てたり（二）。夜靜に月の光晝のごとくなる（三）御前に松明ともしたり。絲毛の車には御前六人、檳榔毛には四人、火ともせり。車の簾高くあげて、後口よりこぼれ出でつゝ乘りたまへば、裝束、容貌、あらはにめでたし。物見車、大將と中納言とを見て言ふやう、「これは、名だたりし涼、仲忠ぞな。めでたくもなり勝りたるかな」といふ。右大辨を見て、「これは藤英ぞかし。生きながら、人の身變るものなりけり。この世にも淨土はありけり」又ある女良中將を見て、「これは行政ぞな。いといみじく淸らなりや。あはれ源少將（四）法師あらまし

嵯峨院の庖の人の子なるを、長ひとしく、容貌あるをえらびて、十二人、かいねりがさねの下襲、線鞋靴(一)はきて、後には宮の藏人、所衆ぞ仕うまつる。女御の御車は、南の御門、三條の大路にひき立てたり。御車牛、黑牛(二)かけたり。御車添、御方のさぶらひの人十二人、葡萄染のしたがさね著たり。後に廿人仕うまつる。上達部、左の大殿の御子ども三人、源中納言、良中將、右大辨、おほき大殿。御族(三)は、后の宮聞召すことありとて仕うまつらず。民部卿の御族は服なり。さあらぬ殿上人は、四位、五位無きなし。六位も目あきたるは無きなし。宮(四)おはしませば、藏人ども、宮の御車にたてまつる所に、さながら仕うまつり給ふ。御車の後に、乳母二人、左大臣殿の君たちは、女御の御車に奉る。大宮、いと參らまほしう思せど、まかで給はむが煩はしかるべければ、とまり給ひぬ。一の人給は宮たちの御乳母三人、孫王の君。

かくて出で給へば、みな人馬に乘りぬ。次第司二人、事行ひつゝ、女御の君の御

〔語釋〕
(三)「おほきおとゞの御族は」なるべし、忠雅の一門の人々
(四)東宮

〔考異〕
(一)線鞋靴—ふかぐつ
(二)黑牛—黑うて

て、まがりなどして物調ず。割籠、(一)する物あり。これは東のかた。御簾のうちに、北の方臥し給へり。姫君物まゐる。おとな、童多かり。姫君の御乳母のいふ、「上の、うちはへ惱み給ふを、おとゞの氣近う(二)見給へば、如何なるぞとも聞えつ(三)べけれど、もて離れ給へればこそ」まさご君の乳母、(四)「芦の根這ふらむとも知らずや」姫君、「あな聞きにく。何事ぞや」など宣ふ。

かくて東宮參り給ふ日になりぬ。御車、宮の御方に十、女御の御方に二十、絲毛六つ、檳榔毛二十、うなゐ下仕、車二つゞつ、人給どもは、これかれ出だし給ふ。車の口付ども、裝束どもとゝのへ、容貌もえらびて、十人づつ付けたり。(五)宮の人給は、褐のきぬ、冠したり。あるは(六)銀の箔ちらしたる白袴、あるは薄色の下襲、裾濃のはかま、心々にせられたり。女御の御方の人給は、狩裝束、車ごとに心々なり。かくて、東宮の御車は東の大路の前、大宮の大路に引き立てたり。(七)宮の御車は(八)あかすけにて、輦の大なるやうなり。黄なる御車牛かけたり。御車添は

〔語釈〕
(一)「すみ物」歟
(二)「見給はゞ」なるべし
(四)内々は夫婦の中は元の如くになれるを知らずやの意
(五)東宮
(七)「宮の」衍文歟
(八)誤あらんか

(廿三)東宮あて宮參内。行列。仲頼の妻と其の母、見物の中にまじりて行列を觀る。

〔考異〕
(三)べけれど―べけれども
(六)銀の箔ちらしたる白袴―白かされ白はかま

る。一日、(一)左の大殿の宣ひしは、「后の宮の、(二)よくもし給はずば、この御子して、名を立てさせて、恥を見せて、(三)棄て給ひなばいかゞせむ。子どもよりはじめて、いくらもあらむ人を(四)申し加へて、(五)この御子まかでさせ奉り給へ」と宣ひしかど、(六)たのみ給ふ人の中にも、然思ひたるも(七)多かめれば、如何にあらむ。かく(八)生憎心おはする宮なれば、よろしと聞き給はゞ、たゞ入りに入りおはしなむ。なほ然思ほせ」實忠「いさや。(九)所々にて思ほし合せむに、恥かしげなるものも、同じ所にて見くらべ給はゞ、土と玉との如こそあらめ」實正「いで、何か、(一〇)この君ことに劣り給はじ」中納言、實忠「いみじきことをも(一一)宣ふかな。如何ならむ人とか思す。女一の宮こそ、おとり給はずと聞きしか。それも向ひ居たまへりしかば、氣劣りてこそ。(一二)世に類あるべき人にもあらずや」民部卿、實正「かたへは見なしなり。思ふ人は然ぞ見ゆるや」實忠「(一三)吾君は、あやしき御族に(一四)こそは」など宣ふ。

[畫詞] こゝは三條の西のかた。民部卿、中納言、物まゐる。御前に、(一五)ちろし

〔語釋〕
(一)正頼
(二)用心せねば
(三)忠康が女二を捨てたらば
(四)女二宮の警固の人數に加へて
(五)女二
(六)正頼が番人とたのむ積の人の中にも
(九)別々の處におきて比較すればよく思はるゝ女も
(一〇)そで君はあて宮に別段劣るまじ
(一二)あて宮は
(一三)あて宮をいふ
(一五)地爐歟、一本「ふろ」

〔考異〕
(七)多かめれば―多かんなれば
(八)生憎心―あやにて
(一一)宣ふ―申し給ふ
(一四)こそは―「は」ナシ

然しもあらじ。かの女御の御心に入れ給ふと見給はゞ、いと哀にぞ思さむ。前々の人はあれど、みな中どもの惡しければ、女御も心解けず物し給ふなれば、それに隨ひて、上ものし給ふを、彼處に勞り給はゞ、いとよくぞあらむや。この御服はてて、四月ばかりに裳など著せ奉り給ひて、出だし奉り給へ。己らも、もろ共にこそ參らせ奉らめ、たゞの人の然りぬべきもなし。宰相中將こそは、昔より志有るなどあめれど、見給ふるに、物思ふ人にこそ。然あらぬわかき人々は、數多あれど、然せむやは」中納言、實忠「この日頃は、五の宮の御文とて度々見ゆれど、世の中の煩はしさに、「物な聞えそ」とてぞ侍る」民部卿、實正「それは然るあだ人にて、女ありと聞く所にては、然ぞ宣ふるなる。朱雀院の二の宮をも思ひかけ給ひて、入りなどし給ふなれと、男御子つどひて、夜晝遊をしつゝ、起き居給ふなれば、上も、それ聞召すとておはしますなれど、さりとも、帝の御前に參りなどし給ふなれば、その折には人こむ、とて兵をまうけてぞ待ち給ふな

〔語釋〕
(一)今上が
(二)他の女御たちと中あしければ
(五)あて宮が身を入れて世話したらば
(七)季明の喪
(八)入内の世話すべし
(九)今の御妾たちの中には
(一〇)祐澄
(一二)「三の宮」なるべし、彈正宮忠康
(一三)返事するなと娘に言ひつけ置けり
(一四)朱雀院
(一五)誤あらんか、一本「その折は」又「その折々は」

〔考異〕
(三)中どもの惡しければ—中々ものあしければ
(四)ものし給ふを—ものし給ふなり
(六)いと—ナシ
(一一)見給ふるに—きゝ給ふるに—きこえ給ふに

〔語釋〕
（一）東宮の事
（三）季明
（四）實忠が
（五）實正
（七）そて君
（八）今上へ
（九）そて君を我が手許へ
（一〇）我が娘の如きは

〔考異〕
（二）宮の御事は―見給ひつ宮の君の御事は
（六）けり―ナシ

と聞え給へり。見給ひて御返、
あて宮（一）（二）の御事は、あしきやうに言ひ騒ぐなりしかば、いとゞ昔（三）の人のものし給はぬをなむ、哀に心細く思う給へし。今も心ゆるびなく、恐ろしき世なれば、（四）御宮仕などし給ひて、後見きこえ給はゞ、頼もしうなむ（五）。民部卿殿に聞ゆる事ありしや。聞き給ひけむ。なほおぼし立たば、よもうしろめたうは。
と聞え給ふ。見給ひて民部卿殿の物し給ふに、實忠「かゝる、何事にか侍る」と聞え給へば、實正「そよ。然る事ありけり（六）。姫君（七）の御事ぞや。「睦まじき人（八）奉らまほしきを、事々しくはあらで、忍びて局に物し給ふやうにてまゐらせ奉り給へ、と聞えよ」となむ、女御になり給ひし慶に、かしこに物する人（九）のまうでたりけるに宣ひける」中納言、實忠「苦しや。前々のやんごとなき人をだにも、あるものともし給はざなるものを、（一〇）これらは何の事にかあらむ。親の人泣々にて勞るにこそ、女は人とも見ゆめれ。かゝる徒ら人の子をば何にせむ」民部卿、實正「それは

仲忠「巖のうへの種よりまつと聞きしかば緣もはるぞふかく知るべき」

など聞え給ふほどに、大殿おはし合ひて、内裏に宮參り給ふべきことを定め給ふ。十月十五日、女御もろともに參り給ふべしとて、あるべき事どもみな定め給ふ。かくてみな參り給はむとて、童、下仕とゝのへ、大人三十人、わらは八人、唐綾のあを色の五重がさね、繚のうへのはかま、下仕八人、檜皮の唐衣、うちぎども著たり。かくて出で給ふに、三條の新中納言殿より御文あり。

實忠「いとも〳〵、思ふやうなる御慶は、まづ自ら參りて聞えさせむとせしを、忌々しげなる樣に思う給へつゝみてなむ。「近うさふらはゞ」とか宣はせしを、陰踏むばかりにて久しうなりぬれど、いとおぼつかなくて參り給ふべかなれば、あさづまの心地してなむ。

身をすてし山邊にもなほあるべきをいまもまどはす君にもあるかな

宣はせむまゝにと思う給ふるこそ心ならぬ樣にも。

〔語釋〕
(一)正賴
(二)東宮
(三)あて宮へ
(四)居處の近きをいふ
(五)未考

㊃あて宮、實忠にそて君を入内せしめん事を勸む。實正の賛成。

うまつるべく侍るを、路し無く(一)とも承りなむ。さても(三)先つ頃、世中(二)にあやしき事を申しけるを、いかに思ふ給へるならむと聞召しけむことをなむ、此處にも彼處にも、限なく(四)思う給へなげきて、誰々もまかりありきもせで侍りつる。所々(五)より、かの三條(六)に、とかく宣はする事なむありける。さる心も思ひ知れとて、かの宮(七)消息にて侍りし、事定まりて御覧ぜさせむとてなむ、まだ失はで侍る」とてこの君して、宮の御文を奉り給ひて聞え給ふ、仲忠「かくも聞ゆまじけれど、昔(八)の志うしなはず、今行くさき頼み聞ゆることもなほ侍れば、うたてある心も持たる者(九)ぞともぞ思し出づる(一〇)」と聞え給へば見給ひて、大宮なども、いと恐ろしくもありけるかなと思す。大將、仲忠「御覧じてば賜はりなむ」と聞え給へば女御の君、かく書きて出だし給ふ、

あて宮くる春を雲に知らせずなりにせばふちも絶えぬる松にやあらまし

大將、見給ひて、

〔語釋〕
(一)御取次なしに御話いたしたし
(二)立太子の事に關して
(六)兼雅の許に
(七)朱雀の后宮
(八)孫王の君
(一〇)「思すとてと」なるべし

〔考異〕
(三)さても―はなどて
(四)なく―なくなむ
(五)所々より―により
(九)者ぞともぞおぼし出づる―ものぞとぞ思しつる

へ。それらも皆。(一)

とて、これはたの藏人して奉り給ふ。喜びて持て參れり。大宮もおはす。見給ひて、大宮「嵯峨院も、聞え給ふ事あとり聞きしぞかし」(二)と宣へば、女御の君、あて宮「の(三)とこそきけ。怪しくも」とて笑ひ給ふ。御返、

あて宮　承りぬ。(四)月日とか侍るは、

いづれともくもへだつれば月も日もさやけく人に見ゆるものかは

それも御心にこそは、と承りしかば。

と聞え給ふ。

かくて東宮の御讀經に、物のはじめなりとて、僧綱たち、名ある智者どもなど召して、論義などせさせ給ふ。大將參り給ひて、(五)夕つ方、(六)西のおとゞに參り給ふ。(七)簀子に袍まゐり給ひてこれかれ物聞え、大將、(八)女御の君に物聞え給ふ。孫王の君して御いらへなど言ひつがせ(九)給へば、大將、仲忠「今はかく、ありしよりも親しく仕

(語釋)
(一)それらも皆御身を愛するからの事
(二)立太子の事につきて
(三)脫文あるべし
(六)あて宮の方
(八)あて宮に
㊟仲忠、あて宮の御方に伺候す。東宮參内の用意。

(考異)
(四)月日とか侍るは—月と日とは
(五)給ひて—給ふ
(七)參り給ふ—參り給ひて
(九)言ひつがせ—取りつかせ

あて宮 いと珍らしう賜はせ給へるは、畏まりて承りぬ。いとも〳〵嬉しき御喜は、まづ奏せむと思ひ(一)給へりしかど、月頃仰せごとも侍らざりしかば、如何なる御氣色にかと思ひ給へつゝみてなむ。山彦とかや宣はせたるも、いさや。

白雲もいろかはりぬと聞きしかばやまびこもいかゞ答へ憂からぬ

おぼろげにや。參り侍らむことは、(二)この宮今日明日參り給ふべか(三)めり。(四)同じくばとてなむ。

と聞え給ひて、織物のほそなが、おはせのはかま一具賜ふ。御かへり御覽じて、(五)參りぬべかめりとおぼして、

今上 昨日は珍らしきなむ。(六)雲の色とか。

たつ雲をいろ〳〵みだる風といへどいづる月日をかざしやはする

悦とかあるは、おぼろけの志にやは。(七)この宮一人によりてなむ、數多の親にも恨みられ奉りぬる。(八)下にはまが〳〵しげなりや。今傍も羨ましとこそ思

〔語釋〕

(二)東宮

(四)なるべく同行せん

(七)東宮

〔考異〕

(一)思ひ—思う

(三)べかめり—べかんめり

(五)參りぬ—參り給ひぬ

(六)なむ—ナシ

(八)下にはまが〳〵しげなりや—しだいはさかしきなりや

給ふ所もなし。起き臥しおぼすに、月頃は御使もたてまつり給はず。坊するゑては、その喜してむ、それにつけてを、と思して待たせ給へど、然もあらねば、今上「あさましう、心強き人にもあるかな。例の、我こそは負けぬべかめれ」とて木工助なる藏人して、御文奉れ給ひければ、御たちめづらしがり悦びて、御簾のもとにたゞ出でに出で、土器さしなどす。御文には、

今上たちかへり聞えても、覺束なく、度々のを、見つとだにあらざりしかば、見る人もあやしがりしを、常に世の例にはあらでもありぬべしや。月頃は、ある樣にもあらずや。

とて、

今上山彦のこたへざりしを聲々にまだしらくもと騷がれしかな

なほ參らるまじきにや。

とあり。いと珍らしと思して御返、

〔語釋〕
(一)今上があて宮へ

〔考異〕
(一)月頃は御使もたてまつり給はず—月頃御使もたてまつり給はで

然ぞあらむと思しければ、惡しとも聞召さず、たゞ嵯峨院の后ぞ如何に思すらむ、とぞ思しける。

かくて内裏の帝、母后の、御心もゆかでまかで給ひにしをいとほしと思して、只今生れ給へる梨壺の御子を、今上「坊にすゑよとこそ宣ひしか」とて親王になし給ふ。藤壺の二の宮は、二なれど、三の親王になし給ふ。東宮孕まれはじめ給ひしより、「世中たひらかに思ふやうならば、必ず(二)」(三)など宣ひ契りて(四)、年月ゆくを待たせ給ひし程に、あるは生れあるは孕まれ給へるを、母后は、昔よりの筋ありとて、大后公卿、一つ心にて宣ひたばかる(五)なり、おほやけ(六)、帝、大后(七)、孕まれ給へる御子をと思して、返すぐ、一つ御心にして妨げ給ふべし、と聞召して(八)、人にも宣はで、帝(九)御心一つに思して、その日まで音もせで、俄には(一〇)すゑ給ふなりけり。后の宮の御氣色を見、(一一)世人の言ひのゝしるなりけり。

藤壺の參り給はぬことを、夜晝上はおほし嘆く。人もことにまう上らず、わたり

〔語釋〕
(二)必ず此御子を東宮に立てんと
(廿九)梨壺腹の御子、あて宮腹の第二の御子共に親王になさる
(四)今上があて宮と約束して
(五)梨壺腹を立てんと
(六)朱雀院、嵯峨院、嵯峨大后
(七)女四宮腹の御子を立てんと
(八)今上が
(一〇)あて宮腹の御子を東宮に

〔考異〕
(一)御心も―「も」ナシ
(三)など―と
(九)帝―ナシ
(一一)見世人の―世人の―みな人の

(卅)今上、あて宮の歸りを促す。

童あまた。御前に人の奉りたる物いと多かり。簀子に大納言、宰相いますがり。宰相中將、藏人の少將など物語し給ふ。

かくて、嵯峨院、もし宮(一)男もぞ生み給ふと思して、朱雀院降り給ひてはじめて參り給へりけるに、大后の宮聞え給ふ、嵯峨后「いかで聞えさせむ、と思ひ給ひつるに、一(二)の宮、時過ぎてめづらしき事のありけるを、もし思(三)ふやうにてあらば、「斯く今日明日になりに(四)たるは、斯く(五)し給へ」と内裏にも聞えむとなむ思ふ。(六)院にも御心えて申させ給へ。(七)三條の御子も、聞きてつらしと思はめど、かの人まだ小かりし時、そこをば、大人になし給ひしなり。然思ひ(八)奉りしかば、目に近く見るはかなしきうちに侍(九)るべけれ」など聞え給ひければ、朱雀「それまで定まらずば、然こそ物すべう侍るなれ」后の宮、嵯峨后「それを、定まるまじきやうに聞え給へかし。これを思ふになむ、限になりにたる命は惜う、冥路は安かるまじけれ」と聞え給ひけるに、斯く聞(一〇)召して、くちをしう、急ぎてもしてけるかな、と思す。朱雀院は、

◉嵯峨大后の落膽

〔語釋〕

(一)女四宮懷胎中也
(二)「四の宮」なるべし
(三)生れたる皇子男ならば
(五)四宮腹を太子に立て給へと
(六)朱雀も其積りて今上に申し給へ
(七)正頼の妻、大宮
(一〇)太子のあて宮腹に定まりたりと聞きて

〔考異〕

(四)なりに—「に」ナシ
(八)思ひ—思ひて
(九)侍るべけれ—はぢ給ふべけれ

〔語釈〕
(一)正頼が引留めし様に
(四)若し我が其方を愛せずして正頼の言ひし如き振舞をしたらば
(五)「子どもなどを」歟
(七)寺のちご位

〔考異〕
(二)給へる—給ひつる
(三)こそは—「は」ナシ
(六)ことになど—ことになは

の妬くもと思して、おとゞ(一)のとゞめ給へる(二)やうに聞え給ふ。おとゞ、忠雅「然思しけるこそは(三)心憂けれ。天下に然宣ふとも、此方に疎なる心はありなむや。よし、親然宣ふとも、哀とおぼさば、月頃かく侘びさせ給はましやは。(四)そこをおろかに思ふ人にて、人のおぼし宣ふ様にしてましかば、我が様なる人にしもなくて、こ(五)とに(六)などを如何にし給はむ。よき人はありとも、己が志のやうなる人はえしもあらじや」北の方、聞き給ひてけりと思して、ありし様をはじめより聞え給ふ、六君「宮の御文奉り給ひし時は、限となむ思ひし。その御文を見せ給はずなりにしかば、つらきになむ」と聞え給ふ。おとゞ、忠雅「それは、實に然聞き給ひければ思しけむ。いかでか、然おほぞうには思ひなむ。こゝにありや」とて取り出でて奉り給ふ。斯くて、ありしよりおほん中いとめでたし。

〔畫詞〕こゝは大殿の北の方、御物語し給ふところ。君だち遊びありき給ふ。女君御髪喝食(七)ばかり、いとをかしげにて、雛遊し給ふ。御だち三十人ばかり、

(一)二の宮を切に聞え給へば、いかでかと思したり。

かくて后の宮、わが御族よりはじめ、上達部、御子たちを憎しと思したれば、睦ましかるべきおとゞたちも、畏まりて參り給はず。斯かれば、(二)なほ(三)心憂き世なり、これ等が世になりはてぬるにこそはあめれ、斯かる事を見で、御髪おろして、然りぬ(四)べからむ所に、籠り居にしがな、と思せど、只今は心をさめぬ樣なりと(五)思す。

【畫詞】こゝは朱雀院。

かくて太政大臣の(六)北の方は、この事によりてこそ、宮の御聟取もあべかりしか、今は音もなし、若君だちは戀ひなき給ふ、御腹は(七)ゆく〳〵と高くなる、何心もなく出で給ひて、秋の頃ほひ(八)夜寒に心細きを、月頃離れ給ひて心ぼそく思す。(九)おとども夜毎におはしつゝ、泣きわび給へば、六君「如何せむ」とて(一〇)わたり給ひぬ。忠雅「何事に(一一)より、如何に思ほしてありつるぞ」と聞え給へば、斯かる事をなむ聞きしかとも聞え給はず、(一二)世の中にのゝしりいで給ふ宮なれば、男の御心といふも

〔語釋〕
(一)女二宮
(二)后宮の心
(六)六の君
(九)忠雅
(一〇)六君が夫の許へ歸りたり
(一二)后腹の女三宮は

㊆六君夫の許に歸る。

〔考異〕
(三)心憂き—心憂い
(四)べからむ—べき
(五)思す—おもほす
(七)ゆく〳〵と—ゆらゆらと
(八)夜寒に心細きを—夜寒心細き
(一一)より—よりて

み聞え給はざりけり。下には、いと妬しと思すこと限なし。この腹の御子たちみな死なむ、遂に思ふ如せむ、などおぼして、朱雀院に出で(一)給ひぬ(二)女御憎しと思すこと、昔よりこよなし。(三)いかで憎み立てて、院の内にえも(四)さふらはせじ、と思せど、近きに大殿を二つ三つばかり賜はり(五)給へば、御子たちの御局をしつゝ、やんごとなき人の御女を迎へて、(六)八の宮も宰相(七)の御女をえ給ひて、迎へてさふらひ給ふ。我も〳〵と清らをしつゝ、めでたき御勢なり。彈正の宮御妻のなければ、物すこし覺え、かたちよく親ある人、我も〳〵と參り集へば、それしもぞ人はさまざま多くさふらひ給ふ。女御の御許に、宮たち集ひて、御かたちは花をおりたる(八)如して、大人も童も、夜晝あそびのゝしり給へば、院の帝は、これを御覽じ聞召すとて、此方(九)にのみおはしまして、朱雀「一の宮むかへて、大將(一〇)の朝臣あはせて、遊をせさせて聞きしがな」と宣ふ。父おとゞ、御同胞の君だち、常にまゐり仕うまつり給ふ。大將も聟たちも、院に參り給ふとてとぶらひ聞え給ふ。五の宮も、

〔語釋〕
(一)あて宮腹の、以下后宮の心
(二)「給ひぬる女御」なるべし
(三)后宮の心
(五)仁壽殿が
(七)祐澄歟
(九)仁壽殿女御の方
(一〇)仲忠

〔考異〕
(四)えも―だも―も
(六)迎へて―「て」ナシ
(八)おりたる如して―おりたるにまして

〔語釋〕
(一)私に人選せよとの仰故
(三)東宮大夫
(四)希望者の中にて
(五)仲忠
(七)藤英の妻十四の君

〔考異〕
(二)思ひ—思う
(六)大將の殿人—大將殿の人
(八)上には—ナシ
(九)ことに—ナシ

(畫)后宮、仁壽殿女御の榮華を憤る。出家の望。

正頼承りぬ。宣はせたる人の事は、いとやすき事なり。一人(一)は此處にものせよとあれば、然るべき人も侍らぬ(二)を思ひ給へ煩ふを、然りぬべしと御覽ずる人侍らむを、よろこび聞ゆる。

と聞え給ふ。

かくて、大夫(三)には伯父たちならまほしう思したれども、帝、心寄(四)あるやうに聞ゆる中にて、然てぞよからむと思して、大將(五)をなし給ふ。權亮には、大殿の御勞にて、學士には、もとより宮に仕うまつる文章博士、大進は大將の殿人(六)、少進には、大宮の御いたはりにて一人、女御の君のいたはり給ふ一人、もと宮なる一人なりぬ。それより次々の、みなこれかれ御勞になりぬ。御櫛匣殿、右大辨の北(七)の方。

畫詞　こゝは東宮のはじめの所。

かくて后の宮は、御心にこそ萬思したばかりつれ、帝にはじめ聞え給ひしに、御氣色惡しかりしかば、ことに聞え給はざりしかば、斯かることも、上には(八)ことに(九)怨

と聞え給ひつ(一)。

かくて夕方になりて、宣旨持て參りて、上達部などみな參り給へり。中納言殿に(二)、今日はまうけし給ひつれば、皆あるべき樣にせられぬ。帶刀(三)どもは、君たち、御聟たちの中に然りぬべき、一人づつ出だして、なし給ふ。殿上人(四)、藏人などぞ(五)、これかれ御勞りにて、みなまゐりぬ(六)。宮司召さるゝ(七)程に、大將殿より、人のなる(八)べき御文してあり。見給へば、

仲忠日頃、宮に度々まゐるれど、物騷がしきやうにて、え聞えさせず。さるは自らも聞えあきらめぬ(九)べき事(一〇)も侍るを、いかで。さて年頃相顧みるべきものの侍るを、數ならぬ心地して、え勞り侍らぬを、この折にだにこそはとてなむ。かれこれの御賜、しか侍るめれど、御勞になさせ給へ、とてなむ。然も仕う(一一)まつりぬべきものなり。宮の大進にまかりならむ、となむ申し侍る。

と聞え給へり。それは、伊豫介になされしが今一人(一二)なりけり。御かへり、

〔語釋〕
(一)涼なるべし
(要)立太子の宣旨。東宮附職員の任命。
(三)東宮附の武官
(四)東宮の
(五)「なぞぞ」の「ぞ」衍文なるべし
(八)推薦狀をよこしたる也
(九)辯解すべき
(一一)御役に立つべき
(一二)仲忠北山より出てし時の馬添の一人

〔考異〕
(一)給ひつ―給ふ
(六)みな―みな〳〵
(七)召さるゝ―なさるゝ
(一〇)事も―事ども

思し出づることども多かり。されど人々の(一)いとほしう言ひのゝしりつれば、いとほしう思ほしけるを(二)、斯かれは、耳安く聞き給ふ。

かゝる程に、院の(三)女御の御許に御文あり。

實忠月頃いと思はずに承りつれば、心憂く思ひ給へつるを、只今なむ承り直しつる。眞にやあらむ。大方のいとほしさよりも、殿におほし歎きつるなむいみじう。(四)宮たちも、みづから參り來むとすれば、ゆゝしげなる身なれば、物のはじめにはとてなむ。いま今日明日過してぞ聞えさせむ。

となむある。御かへり、

仁壽承りぬ。宣はせたる事は、けさ太政大臣の消息になむ、さやうにありける。今の程も如何にぞと(五)、いと煩はしく、恐ろしき世の中なれば、今見給へ定めて、ことごとには聞えむ。宮たちの御消息(六)思ふには、何事にかは思ほし屈す(七)らむ。

〔語釈〕
(一)梨壺腹立太子の事を
(三)仁壽殿
(四)「宮にも」歟

〔考異〕
(二)けるを―けれど―ければ
(五)如何にぞと―如何にとぞ
(六)御消息―御様こそ
(七)屈すらむ―くんずらむ―うんずらむ

たち、大人、わらは、里なりしも皆まうのぼりて、髪揚げ、裝束したり。西の御方には、例の御方々みなわたり給ひぬ。大宮、太政大臣の、民部卿の宮の北の方たちは、寢殿にわたり給ひぬ。

大將聞き給ひて、仲忠「この事によりて(一)、頭をえさし出でて、朱雀院には、ひがひがしき樣に思されき。三條には、たえまうでゝ、辛き目を見つるかな」とて內裏へいそぎ參り給ひぬ。右の大殿、中宮(二)より斯く宣へれど、夢にも思ひかけず、然(三)るべくばかゝる人の腹に、(四)こゝら生れ集まり給はましやは、天下に言ふとも、まさに、と思して、斯くなむと人にも宣はず。兼雅「こゝらのならひならねば(五)、人に心もおかれじ。善からぬもの一二人心をあはせてだに、惡しと思はれぬれば、人を徒らになすものなり」とて思しかけざりつれば(六)、斯かるをもなにとも思さず。されども、內裏へも參り給はず。(七)新中納言は、小野へものし給はで(八)、此の頃は京にものし給へど(九)、例のかたぐ疎々しうて物し給ふに、誰も聞えたまはで、昔を

〔語釋〕
(二)梨壺腹の皇子が東宮たるべき旨を
(三)今更梨壺腹が立つ位ならば、以下兼雅の心
(四)あて宮の腹に
(六)梨壺腹立太子の事は
(七)賢忠

〔考異〕
(一)よりて—「て」ナシ
(五)ならひならねば—ならひならねど—なからひならねば
(八)給はで—給ひて
(九)給へど—給はて

と宣へば、近澄「まづ此處に參るとて(一)」と申し給へば、正賴「はや告げよや。(二)思ひ困じぬらむ」とて御氣色いとよし。

少將は、南の宮に參りて見給へば、若宮(三)をば膝にすゑ奉りて、今宮(四)をばいだき奉り給ひて、帝の年頃の御契を思し出でつゝおはするに、藏人の少將、近澄「斯う〳〵なむ」と聞え給へば、女御の君うち笑ひ給ひて、あて宮「然ればこそ。年頃の御契はよもあやまち給はじと思ひつれど、怪しう言ひのゝしりつれば、心地もあわたゞしうぞありつるや」とて宮をひきすゑ奉り給ひて、御裳ひき懸けておはする程に、おとゞ君だち、裝束し給ひて、打連れておはして、寢殿の東(五)の御方にわたし奉り給ひつ。二の宮をば西の對にうつし奉り給ひて、君だち殿人ひき率て、しつらひ仕うまつり給へば、片時に、玉の如しつらはれぬ。所々みな有るべき樣にしつらはれぬ。御前には、いと雪の降れる庭のごと、砂子敷かれたれば、かねてせられ(六)たらむ樣なり。斯く、しすゑ奉り給ひて、みな內裏にまゐり給ひぬ。上には乳母

〔語釋〕

(三)あて宮が

(四)第四の皇子

〔考異〕

(一)參る—參れ

(二)告げよや思ひ—告げよいと思ひ

(五)東の御方—北の方

(六)せられたらむ—せられし

はてて、物も言はねば、宰相の中將、辛うじて、(一)うち戰きて、忠雅「如何に。誰か
(二)定まり給ひぬる」と宣ふ。少將の(三)いらへ、近澄「知らず。おとゞの御文ぞある」と
うち戰きて宣ふ。君たち、あけて見むと騷ぎ給ふ。少將、近澄「御文をいかで」と
て塗籠の戸をたゝきて、近澄「近澄さふらひ侍り。取り申すべきこと侍り」といふ
聲を聞き(四)給ふにおとゞ、いとゞ物おぼえ給はず。宮、大宮「言ふべき事こそはあら
め」とて明け給へば、君だち押し込み入りて、御文を奉り給へば、おとゞ、御衾
をひきかづきて、うつぶし臥して、御文を(五)左衛門督の殿に、讀めと宣へば、(六)女
手して、

忠雅「東宮には、(七)若宮居給ひにけり。昨日の酉の時ばかりになむ、宣旨下り侍りに
し。例の作法にもあらず、(八)御心一つにせさせ給ひて、「宣旨の前に人に漏ら
すな」となむ仰せられたる。巳の時にぞ、列引くべう侍る。參り給へ。

と聞え給へり。おとゞ、いとすくよかに起き居給ひて、正頼「(九)彼處には告げつや」

〔語釋〕
(二)東宮に
(五)忠澄
(六)假名にて
(七)あて宮腹第一の皇子
(八)今上の
(九)あて宮

〔考異〕
(一)うち―ナシ
(三)のいらへ知らず―いさまだ聞かず―いさえ聞かず
(四)聞き給ふにおとゞ―聞くにおとゞは

かくて、酉の時ばかりにおとゞ參り給へれば、上、ともかくも宣はで御硯とり寄せて、物を書かせ給ひて、封じて(一)、頭中將(二)して奉らせ給ふ。おとゞ見給ひて、御氣色よろしきを、藏人少將、これ(三)は我が御甥の御子なれば、思ふやうなりと思したるなり、と思して、我が親は徒らになり給ひぬと思ふに、色もかたちもなくなりてさふらふを、上御覽じて、をかしう哀なりと思してうちほゝ笑ませ給ひて、今上「すこし生き出でて、太政大臣の御後につきて立ち給へ」と宣へば、御供に宣ふことやあると、氣色を見ありき給ふ。

その夜は、職の御曹司に(四)とまり給ふ。(五)其處にまうでて、御前にさふらひ給ふ。曉方におとゞ、人間をはからひて、御文をいと小く書きて賜ふ。賜はりて、急ぎ出でて見れば、「おとゞの御許に」とある御文、いとよく封じてあり。從者の行末も知らず、御門に立てる馬にのりて、馳せて(六)三條院に參り給ふを、君たち、太刀を(七)ぬきて殺しに來る者かとおぼして、如何に言はむとするものならむと、身も冷え

(語釋)
(一)忠雅
(二)實賴をして忠雅に渡さしむ
(三)梨壺腹東宮に定まれるならんと想像せる也
(四)忠雅が
(五)近澄が
㊥忠雅 密書を正賴に贈る。あて宮腹の皇子立太子の吉報・一家のさゞめき。兼雅仲忠等の態度。
(考異)
(六)馳せて—ナシ
(七)ぬきて—とりて

からず羨まれ言はれし人の、かく人笑へに恥を見むを見ては、世にもまじらふべ(一)きにあらず」と宣ふほどに、「明日(二)になりぬ」といふ。君たちは萬に聞え給ふをも、正頼「すべて我このこと聞かじ。人も言ふな」と宣ひて、その日のつとめて、塗籠にさし籠り給ふ。大宮、「我も、何(三)せむにかゝる目を見るべき」とてもろ共に入り給ひぬれば、君だちは、左右の戸口(四)に泣み居給ひて、泣きまどひ給ふこと限なし。

その日晝つ方、「まゐり給へ」とて御使あり。「斯くなむ」と聞(五)ゆれど、音もし給はねば、參り給はぬよしを申させ給へば、太政大臣を召す。それも參り給はねば、立ちかへり召せば、(六)(七)今は斯く俄になりにたれば、(八)我がすると人(九)の思ふべきにあらず、と思してまゐり給ふ。正頼「(一〇)藏人の少將の君、左衛門佐の君、(一一)なほ參りて、物の氣色も(一二)案内せよ。こゝ(一三)に參り給へとありつる、疑あり」とて參らせ給へば、我か人かにもあらで參り給ふ。

〔語釋〕
(二)立太子の事が
(五)正頼に取次げども
(六)忠雅の心
(八)立太子の取計らひを
(一〇)近澄
(一一)宮あこ君
(一二)知らせよ
(一三)我に

〔考異〕
(一)べきにあらず―べきや
(三)何せむに―なでふに
(四)泣み居給ひて―なみだをおさへて
(七)今は―「は」ナシ
(九)一人の―人も

〔評〕立太子の當日。忠雅召さる。

へもし給はず。

畫詞 こゝは右大辨殿。

かくて東宮月のうちに居給ふべしといふ。右大殿の御門の外(一)には、人も避りあへず、馬車立ち、市の如くのゝしる。后の宮よりは、日ごとに御消息あり。三條院には、内裏の御使も見えず。かゝる事の筋も聞え給はねば、おとゞ(二)、ともあれかうもあれ、この事定まりなば、又の日頭おろして、山に籠りなむ、と思ほして、然るべき所おぼし設け、法服などまうけ給へば、男君(三)も女君たちも、集ひてさふらひ給ひ(四)て、泣く〳〵聞え給へば、おとゞ、正頼「我女子おほかる中に、此(五)の子生れしよりらうたげなりしかば、懐よりといふばかりにおほし立てて、いかでこれをだに人並々にと思ひしに、ある時は對面におもだたしき時もあり、ある時はいとをかしき時も有り來しに、なほいかでと思ひて持たりしに、これによりて人の恨(六)をも負ひ、徒らになるといふ人も聞えしかど、強ひて宮仕に出だし立てたれば、安

〔語釈〕
(二)正頼
㊂立太子の期近づく。絶望せる正頼。
(五)あて宮

〔考異〕
(一)の外―ナシ
(三)男君―男子
(四)集ひてさふらひ給ひて―集ひさぶらひて
(六)恨をも―「を」ナシ

ろく頼もしく、思ふ事なく侍りし。今かう、公に仕うまつり、かゝる御中にさふらへど、物思はしう、侘しうなむ。それは、かう見奉るかぎり、親(一)にも對面し給はず、世には心もゆかぬ樣にて經給へば、生きて侍る效なむなき。拙(二)き人につき給へりとて、親を勘じ奉る(三)なむひがみたる樣なる、おとゞ(四)は、御前(五)去らず召しつかひ給ひ、公事につけても、思ほし數まへ給へり。御前をも、斯くてこそ思召しかへりみ給はめ。いとあぢきなき御物恥なり。世の中ははかなきものぞや。藤壺の、昔よりななり(六)(七)給ひて、多くの人をいたづらにしなし、宮仕をし給ふとては、傍(八)ほとりに人寄せ給はず、すなはちより子を生み(九)給ひしかば、坊、(一〇)居がねとののしられ給ひしかど、音もし給はず。思ひがけざりし人の(一一)昨日今日うち生みてし給へるこそはあめれ。(一二)(一三)かゝれば、かく花やかに見給ふらむ人々はかなうなりて、季英人々しくならむとも知らず。大學院の藤英と言はれ侍りしかども、上達部の端にまかりならずや。博士とて侍る人の、(一四)侍らぬをぞ思ひ侍る」と聞ゆれど、いら

〔語釋〕
（一）十四の君が藤英を不足に思ひて常にすねて居る也
（二）我如きつまらぬ者に嫁したりとて
（四）正頼
（五）我を
（六）「名鳴り」歟
（八）寵を專にして
（九）其の生みたる御子が
（一一）梨壺
（一二）却つて皇太子にもならんとす

〔考異〕
（三）奉るなむひがみたる樣なる―奉り給ひなむひがみたる樣なり
（七）ななり―なり―なら せ
（一〇）坊―はゝ
（一三）あめれ―あれ
（一四）人の―「の」ナシ

（語釋）
（一）正賴邸
（三）仲忠方
（四）實賴
（五）兼雅邸なるべし
（七）藤英
（八）不詳、一本に「檢非違使か」と註せり
（一一）藤英は
㊇藤英時めく。妻の己に不滿なるを諭す
（一四）正賴の十四の君
（考異）
（二）馬車も―「も」ナシ
（六）集ひまゐる―つどきまゐる
（九）衆―すけ
（一〇）こといとかしこし―とくいとかしこしと
（一二）今の―今も
（一三）この―ナシ
（一五）大學の院に鶴脛―此の院に鶴脛―此の院に侍りし程は鶴脛

と書きて奉り給ひつ。きぬ、綿を見れば、いと多かり。親に奉り給ひ、按察使の君の許に、箱に入れて奉りたまふ。御たちも、みな賜はりて、引き散らしてむしりなどす。女君、仲賴妻「昔も今も、この吹上の君の御贈物をこそ、豐に見れと宣ふ。

畫詞　こゝは宮内卿殿。

かくて三條(一)の院には、四面めぐり立ちし馬車(二)もをさ〳〵見えず、藤壺の御方に人もなし。大將殿(三)にいと多かり。頭中將(四)の御方に數多あり。大殿(五)には集ひまゐる(六)人人、君たちの御車ども。右大辨殿(七)の御かた、式部の大輔かけたれば、此頃ひしせ(八)むとて、大學の衆(九)の車あまた立つこと(一〇)いとかしこし。世におもく思はれ、人に許されたる學士なりしかば、今の(一二)帝、御心に御書入れ給へれば(一一)、常に御前にさふらひて、この(一三)議り申すことども、いと疾くきこしめす。容貌もいとものものし。北(一四)の方に聞ゆるやう、藤英「昔、大學(一五)の院に、鶴脛はだかにて、飯に飢ゑつゝ、書の見ゆる限は守らへて、夜は螢を集めて、學問をし侍りしときに、心地常におもし

あらじ。山の末よりも、時々とぶらひ聞えむにつきて物し給ひぬべうは、さても、

松風のさむきまに〳〵年を經てひとり臥すらむ君をこそ思へ

さては、これは粥の料とて、人の賜へりし。そこにて煮させ給へ。子どもの宿直物、綿おほく入れて賜へ。戀ひ聞ゆれど、暫し琴もならはせむ(一)とてなむ。とて奉れ給ふ。女君見給ひて、いみじく泣きて御返、

仲賴妻　承りぬ。客人たち、いとめでたう、花やかにてまうで給ふなりしをなむ、いと悲しう承りし。世人のやうにてとか。いでや、人に見えぬべき所なりとも、今更にさる心をば、いかでか。(二)さやうなる樣にて、近うだにいかで、とこそ。松風はそれをのみなむ。

ひとり寐るよさむもいざや苔を薄み霜おく山のあらしをぞ思ふ

この粥の料は、宣(三)へるやうに。

〔語釋〕
(一)我も出家してせめて御近處に居りたし

〔考異〕
(一)琴もならはせむ—琴どもならはさむ

(三)宣へる—宣ひつる

〔語釈〕(五)夫を持ちて暮したくば望の如くにせよとの意歟

〔考異〕(一)申し—奏し
(二)ありし大將…文ども などー ありしと問はせ給ふ文どもなど
㊂仲頼涼に贈られし米綿などを妻の許に分つ
(三)奏しー申し
(四)給ひつればー給へれば
(六)わいてもこゝにーわいてだに

宣へば大將、いとほしう苦しと思ひてものも申し(一)給はず。久しうありて、仲忠「年頃勞るところありて、まかりありきもえし侍らざりつる。仲頼が侍る所にまかりて、相勞り侍りてなむ、辛うじて參りて侍る」と申し給へば上、朱雀「それは皆獨居してこそ物せらると聞きしか。何でふ事かありし(二)」大將、彼處のあはれなる樣奏し(三)給ひ、人々のつくれる文どもなど御覽ぜさせ給ふ。

畫詞 こゝは院の御前。

かくて山籠は、人々の奉り給ひし物ども見給ひて、人々に賜ぶべきは賜びて、わが御用になるべき留めなどして、中納言の粥の料にとてありし物をば、子どもの母君の許にやり給ふとて、御文には、

仲頼日頃は、これかれ人々物し(四)給ひつれば、騷がしくてなむ。いかに徒然にとのみぞ。(五)なほ人の有る樣にてあらまほしく思されば、さやうにても。(六)わいても、こゝに見奉りし樣にてもありにきとな思しそ。今の人の心は然しも

〔語釋〕
(一)仲忠が
(二)女一宮

〔考異〕
(三)野べにいでて―秋の野に
(四)知らせやはする―知らするとやは―知らするかさは
(五)し給ふこゝは畫かくありき―し給ひこゝかしこありき
(六)つれ／＼とまもり給ふ―つく／＼とまもりも居給ひ

●仲忠、朱雀院に參りて水尾の有樣を奏す

(七)住居の斯く―住居のみ
(八)久しう見ねば―久しうこそ見ねば
(九)とか―ナシ

見給へば、宮ありき給はでおはすれば、いと嬉しとおぼす。小鳥ども、生きたるは犬宮に奉り給へば、もてあそび給ふ。御餌袋なるは、調じて宮にまゐり給ふとて、聞え給ふ、

仲忠　君がため小鷹手にすゑ野べにいでてまつむしをくふ鳥をとりつゝ

宮、

女一　鷹すゑて野べにといふは我がためにかりの心を知らせやはする

と宣へば、仲忠「思ひぐまな」とて按察使の君に山のありつる様など御物語し給ふ。

畫詞　こゝは畫。

かくありきはじめ給ひてぞ、院に參り給ひける。上きこしめして、御前に召して、物も宣はで、つれ／＼とまもり給ふ。久しうありて、朱雀「年頃かゝる住居の、斯くせまほしかりつることも、見まほしき事もせむ、とこそ思ひしか。などか參られざりつらむ。一の宮も久しう見ねば、迎へに物せしかど、止められにきとか」と

して繪かきたり。あや、かいねりの袿、薄色の香(一)のさしぬき、御供の人は、薄色の襖、露草して遠山を摺れり。わた皆入れたり。下人は朽葉、色の襖など、心にまかせて著たり。山ごもり、子ども、法師、童べ御供にて、ふもとまで御送し給ふ。君たちは、御馬牽かせて徒歩より、大將は笙の笛、中納言は横笛、中將篳篥、松方、近正は御さきに立ちて、陵王落蹲(二)舞ひて他人々御後に立ちて、錦の如く散りたる紅葉の上を歩み出で給ふ。山のあらしに、いろ〳〵の紅葉雨の如く降りかゝれば、御襖にいろ〳〵に付きたり。麓にて別を惜みて、歌よみて、山ごもりはかへり給ひぬ。

君たち御迎に(三)、さま〴〵人多く參れり。大將、中納言の御迎に、人々小鷹手にすゑつゝ參れり。歸り給ふまゝに、野邊ごとにあさらせ給ひて、御餌袋に入れさせ給へり。右大辨は路にて別れ給ひぬ。人々は、大將の御送して殿へかへり給ひぬ。御供人(四)、饗まうけて(五)、御前にはかづけ物し、御馬添、雜色には腰插せさせ、入りて

【語釋】
(一)香染歟
(二)舞ひて—「て」ナシ
(四)「御供人に饗まうけて」なるべし

【考異】
(三)御迎に—御迎の
(五)まうけて—「て」ナシ

〔語釋〕
(一)いよ〳〵東宮に立たれなば
(四)我には隱してある
(五)當然と思はるゝ事なれば
(七)「思さゞらむと」歟
(九)「などとて」なるべし
(一〇)子どもは今日にも引取るべし

〔考異〕
(一)それぞ—それは
(三)されど—さりとも
(六)たゞ—ナシ
(八)給ひためれば—給ふめれば—給ひたれば
(一二)多く御物語—御物語多く

む東宮に奉らむとなむ」大將、仲忠「藤壺の一の宮こそは。(一)それぞ、さらにたゞの人とは見え給はぬ。今ながら、内裏の御氣色に劣り給はず、いと氣かしこくなむ」山ごもり、仲賴「また承るやうぞ侍る。(二)さらば、まして、如何にこれらが爲に嬉しう、さふらはまほしう侍らむ」大將、仲忠「あなうたて。何でふさる事か」中納言、涼「されど、(三)みな定まりたる様にこそ。日さへ取られにたりとか申すなる」大將、仲忠「すべて知り侍らず。(四)こゝには忍びてなむ」中納言、涼「御心にこそ、忍びてとは思せど、他人は然思ひたらざめり。(五)然もはた覺えたる事なれば」大將、仲忠「おのづから終には見えなむ。(六)たゞ藤壺は、え然や思すらむ、(七)と思ふのみこそ、いみじうかたはらいたけれ。それも、おとなしき心つき給ひためれば、(八)然思すやうもあらむ」(九)などて、仲忠「さらば、このあこたちは、(一〇)今日もいざかし」山ごもり、仲賴「今年ばかりは、物の音すこし聞き知らせ侍りて、(一一)年かへりて奉らせむ」などこれかれ多く(一二)御物語してかへり給ふ。御裝束どもは、白き襖、綿入れて、銀の泥

給ひなりにしかば、この三條の本家なりし方になむ侍る、東の對になむすませ奉る。さても、殊に頼もしげなる事も無けれども、自ら(一)をだに人にもし給はぬかな。(二)幼きものの(三)侍るめるを惡み(四)きたながるめれば、身にはらうたくおぼえ侍るになむ、(五)あづけ奉りてなむ侍る。いと目やすく、警策なる人にこそ物し給ふめれ。君をのみ見奉りて、彼處(六)に對面せざらましかば。人のいふことは空言になむ」山ごもり、仲頼「然だに御覽じなさば、いと嬉しく、佛の御德と(七)なむ。この侍る童べも、母亡せ侍る。身ひとつだに、侍りがたげに承れば、こゝら召しあつめて、松の葉をも苔の衣をも、もろ共にこそはと思ひ給へてなむ。女子をさへものして侍るを、童べは、いかで宮仕も仕うまつらせむ、と思ひ(八)給ふれど、親(九)は便なく侍れば、いかでかは、とてなむ」大將、仲忠「何處に、如何にせむとか思ほす。せむ樣を宣へ。かの伯母君にあづけ奉りて、いかうに(一〇)(一一)この事をうしろみ奉らむ」いらへ(一二)、仲頼「いと嬉しき事になむ。昔だに、いと御前にさふらひ難かりし上に侍らじ(一三)。今居給は

〔語釋〕
(一)仲頼の妹の謙遜なるをいふ歟
(二)犬宮
(三)女一宮が
(五)仲頼の妹に
(六)仲頼の妹に
(九)仲頼自身をいふ
(一〇)「いかう」は「一向」なるべし
(一三)「侍らせじ」歟

〔考異〕
(四)惡み—ナシ
(七)御德と—御德に
(八)思ひ—思う
(一一)いかうに—いやうに
(一二)いらへ—げに

うちき、さしぬき、黒橡のうへのきぬ、五條の、袈裟具したる法服三くだりは主に、裝束四くだりは上童の料に、下衆の裝束三十具ばかり、童子の中に皆し給ふ。これより外は、心にまかせてをかしき土產ども。

かくて物など參りて、又の日は文つくり、その寺にも、めぐりの寺にも、御讀經せさせ懺法せさせ(一)(二)などし給ひて、その夜はとまりて、とざまかうざまに遊び給ふ。山ごもり、大將に聞え給ふ、仲賴「昔(三)一條殿に侍りし人の、便なげにて侍るめりしを、見給へ棄ててまかり籠りて(四)、年頃いかで侍らむと思ひ給へしを、殿になむ顧みさせ給ふと承るをなむ、深うよろこび畏まり聞えさする。別いても昔だ(五)にようも侍らざりしを、如何樣にと思ひ給ふるになむ、かたはらいたくは」大將仲忠「年頃さて物し給ひしを、え承らざりき。去年、事のついでありて、彼處に宣ひしになむ、驚きながら聞えむとせし。これかれ集はれて騷がしかりし程は、さし別きたる樣なりしかば、え(六)。その宮むかへ奉りてしかば、これかれ外へわたり

〔語釋〕
(一)非道を行はざる旨を佛に誓ふ法
(三)仲賴の妹
(五)妹の人柄をいふ

〔考異〕
(二)懺法せさせ—こんぐ打たせ
(四)籠りて—「て」ナシ
(六)え—ナシ

あつく入れて、いと多う持たせ、長櫃どもに飯入れさせ、酒樽に入れて、持たせてまうでて、山伏どもめし集めて、飯酒くはせ、乾飯、襖、一つづつ取らす。大將もたせ給へりし長櫃、御衣櫃、山ごもりに奉り給ふ。(一)こ櫃には、淺香に沈の脚つけて、蘇枋を枋にして、銀の鉢(二)、金碗、かいさし、銚子、水瓶など、よろづの調度つくし入れたり。御衣櫃には、御法服一つ、限なく淸らにて、夜の裝束、綾のさしぬきに、織物の襖、あやの裏どもなどして、その襖に書きて結びつけたり(三)。

仲忠　露けくて山邊にひとりふす人のよるの衣にぬぎかへよとぞ

子どもの裝束、女子のも、いと淸らにし入れてまゐり給ふ。山ごもり見て、

仲賴　世をすてしこけの衣にぬぎかへばまた夜々にものをこそ思へ

とて賜はり給ひぬ。中納言は、きぬあやをいとのくゞつ(四)に入れて、供養のやうにて、(五)三所ばかり奉り給ふ。右大辨も、いとをかしき物奉り給ふ。律師は、よろづの行の具、菩提樹の數珠よりはじめて用ある物を奉り給ふ。中將は墨染の裝束、

〔語釋〕
(一)「こ櫃」は「長櫃」なるべし
(四)袋
(五)「三袋ばかり」歟

〔考異〕
(二)鉢―はし―ナシ
(三)たり―たる

〔語釋〕
(一)此處にある者誰かあて宮に戀せざりし者あらんや
(三)「くらみ」なるべし

〔考異〕
(二)袖のみをにも—そのみのをにも
(四)もて—ナシ

仲頼 烟たついへは思ひの苦しさに身も消ちがてら入れるみづのを

大將、

仲忠 こゝに(一)かくあるどち誰か燃えざりし袖(二)のみをにもぬるみやはせし

中納言、

涼 人よりは我ぞけぶりの中なりし今もきえねどえやは出でける

辨殿、

藤英 夜をくらめ(三)螢もとめしわが身だに消えしおもひの目にけぶりつゝ

中將、

行政 もえ渡る火のほとりにはありながら乾かぬものは袖にぞありける

など宣ひつゝあそびあかし給ふ。

かくて日やうやう晴れもて(四)ゆく程に、種松山籠の御料に、粥の料、あはせ、いと淸らに調じて、馬どもに負せて、乾飯、馬二十ばかりにおほせて、布のあを、綿

〔考異〕
(一)多う—多く
(二)にもまゐり—にまゐる
(三)がた—ナシ
(四)たゞごと—常ごと—つねのこと
(五)やどもり風—やまもり

つくる、一人は講師す。かゝる程に、源中納言殿より、檜割籠、たゞの割籠、屯食などいと多う(一)あり。御前どもにもまゐり(二)、人々にも賜ぶ。よき物いと多くもてこみ給ひて、日暮れて文つくりはてて、讀ませ給ひて、おもしろきはみな誦し給ふ。右大辨の御聲は、いと高ういかめしう、大將の御聲はいとおもしろう哀なり。夜更くるまで、文誦じ、曉がた(三)になりて、風いと哀に、木の葉の雨の如くに降るほどに、律師陀羅尼よみ給ふ。大將いみじくめで給ひて、箏の琴ひき合せ給ふ。おもしろきこと限なし。山人も里のも、みな涙落さぬはなし。しばし遊ばせ給ひて、山籠たゞごと(四)にて陀羅尼をよみ給ふ。中納言やどもり風(五)召して調べ合させ給ふ。かくて暫しありて、君だち、諸聲に文あそび給ふ。律師、山籠の御聲のいと尊きを聞きめでて、土器取りてかく申し給ふ、

忠こそ　出づとせし身だに離れぬ火の宅を君水の尾にいかですむらむ

山ごもり、

近正

君によりしぐるゝ袖のふかき色ををれる紅葉と里人や見む

時蔭、

いにしへは君がころもにみえし色の今は山べに散りまがふかな(一)

とて中將は琵琶、山籠箏の琴、權頭琴、近正和琴、時蔭橫笛、またそれらが中に、篳篥吹くものと吹きあはせて、他人々は唱歌し、歌うたひ、夜一夜あそび給ふ。所々見やれば、遠う火を燒きて、その山のめぐりの山じにたにあり(一)。ちかう見れば、火を山のごとくおこして、大なる鼎たてて、栗を手ごとに燒きて粥(三)に煮させ、よろづの菓物食ひつゝ、人々の御供なる人に賜び居たり。夜更けゆけば、露霜おく。夜一夜あそびあかし給ひて、つとめてになれば、御粥まゐる。露に濡れたる御衣ども脱ぎかへ給ひて、山籠の御供に、よき人の子ども四人あるに、四所ながら取らせ給ふ。

その日は題出だして、用意しつゝ文つくり給ふ。右大辨の御供なる秀才一人は文

〔語釋〕

(一)「山ぶしふさにあり」歟、一本「山ふたたにあり」

〔考異〕

(一)まがふ—まよふ

(三)粥に—「に」ナシ

〔考異〕
(一)大將殿―大將も
(二)秋山も―秋山の

仲頼 谷風の吹上ぞわれもおもほゆる山の錦にまとゐせるけふ

大將殿、(一)

仲忠 もゝしきの昔の友を見にくればあらしの風もにしきをぞ敷く

中納言の君、

涼 君をのみたづねていまは秋山(二)もみぢも深くなりにけるかな

右大辨、むかしの藤英なりし火影姿思ひて、

藤英 七夕のあふ夜ぞわれも君をみしたれも心のめづらしきかな

律師、

忠こそ 限なく憂かりし身だにありはてぬ山にて君がおもひをぞ知る

中將、

行政 君をだになしと嘆きしもゝしきにありし世さへも變りぬる哉

右馬助、

碗に入れつゝまゐれば、君たち興じつゝ召し添へて參り、(一)御物語などし給ふほどに、御割籠ども持ちて參れり。取りわたして、山籠の御弟子、童子、その邊のものの此の君に仕うまつるなど召し集めて賜ふ。御菓物ばかり、御前には(二)參れり。御酒度々きこしめして、物の音どもかき立て、山風は紅葉の散りたるをば吹きたて、枝なるをば散らしなどする夕暮の興あるに、松方の雅樂頭、おほきなる木の節の、いとをかしきを取りて、(三)山伏と御土器まゐるとて申す、松方「權頭は、昔は、(四)いさゝかの御ありきにも、後れ奉らずこそ仕うまつりしか。かゝる路におもむき給ひにし折、告げさせ給はましかば、御供に仕うまつりて、御弟子にてもさふらひなましものを、世の中に交らひ侍れど、何の勇も侍らぬに」と泣く〳〵御土器まゐりて、松方「(五)嵯峨野の樣にも侍るなり」とて、

松方　吹上にさそひしとものの山深くたづねて君を見るが(六)かなしさ

(七)山籠も「今日は」(八)などて、

〔語釋〕
(三)「山伏に」なるべし、山伏は仲頼をいふ
(八)「などとて」なるべし

〔考異〕
(一)添へて參り—添へ參る
(二)御前には—「は」ナシ
(四)昔は—昔—昔の
(五)嵯峨野の樣にも—釋迦の供養にも
(六)かなしさ—かなしき
(七)山籠も—「も」ナシ

〔考異〕
(一)なほかゝる―多かる
(二)山籠は…うち群れておはしたれば―ナシ
㊅仲賴の歎待。管絃。讀經。贈物。仲忠、仲賴の子どもを世話すべき事を約す。
(三)まづ紅葉の―まつの紅葉の―まづこの紅葉の
(四)ども―ナシ
(五)まづ―ナシ
(六)おもの―もの

そこにて饗などして出で立ち給ふ。大宮の大路より、北樣にのぼり給ふほど、車どもいみじく立てつゞけ見る。徒人もいとおほかり、忍びて、やんごとなき人ども。なほかゝる中にも、大將はいとこよなう淸げなり。山路まで、御送の人いとおほかり。到り著き給ひて、麓より「迎にものせよ」とてかへされぬ。

畫詞 こゝは水尾の路。

かくていたりつき給ひて、山籠は、年頃、堂などもいと廣く、いかめしう、瀧いとおもしろく落したる所に住みて、里なりし女子迎へて物ならはす。山犬、里犬といふ男子どもに、笙吹き横笛吹かせて、箏の琴女にならはして居たる夕暮に、うち群れておはしたれば、山籠喜びかしこまり聞え給ふこと限なし。まづ紅葉の林に御座ども敷きて、みな居給ひぬ。まづ「勞れ給ひぬらむ」とて、山の法師ばら、童べ出だして、をかしき枯木拾はせて、お前に銀のまがりなどとり出でて、おものの炊がせ、お前の朽木に生ひたる茸ども、羹にさせ、苦茸など調じて、銀の金

のさしぬき、青露草してらうずりに摺りて、白き綾のうちき、白馬、御供の人よりはじめて、さま〴〵の白、青、しな〴〵に著たり。(一)中納言は、あか色の織物の襖、(二)鈍色のさしぬき、綾かいねりのうちき、(三)あかうま、御前二人は劣れり。(四)やどもり風といふ琴持たせ給へり。(五)右大辨は青鈍あを、その外も皆同じ色のあを、御馬添四人、(六)せいありて、學生とも御前四人、秀才二人、進士二人。御供の人、みな大學の衆の下臈なり。(七)良中將は青色のあを、白のさしぬき、薄色のあやの袿、御供の人前の如し。琵琶持たせたり。(八)雅樂權頭、琴持たせたり。右馬助近正は和琴、左衞門の非違尉時正、笛持たせたり。これかれ裝束は心にまかせたり。(九)律師、わらは四人、法師四人、童子六人、これもみな、よう裝束とゝのへたり。この人々の御供に、かゝる物の上手の限おはしつどひて逍遙し給ふべしとて、人の數少く擇らるとて、我も〳〵見聞かむと思ひて、雜色は、やんごとなき侍の人ぞ出で立つ。御衣櫃、割籠もちには、侍出で立つ。かくて、二條の院に集まりて、

〔語釋〕
(一)涼
(三)「あかうま」は「はかま」
(五)藤英
(六)「せい」は「制」歟
(七)行政
(八)松方
(九)忠こそ

〔考異〕
(二)鈍色の―「色」ナシ
(四)やどもり風―山もり

（語釈）
（六）按察使の君を

（考異）
（一）といふ—となむいふ
（二）按察使に—の
（三）侍る—はべなる
（四）大將殿—「殿」ナシ
（五）聞えつ—聞えなどす
（七）これかれ—それかれ

㊆仲忠、涼、藤英、行政、忠こそ等仲賴を訪ふ。

かしき人得つと思ほす。按察使の君といふ。（一）大將殿按察使に（二）宣ふ、仲忠「水尾へまかるなり。御消息やある」按察使、「かくあらはれて侍りとて、恥ぢ侍る（三）ものを」と聞ゆれば大將殿、（四）仲忠「世に然もあらじ。いとよく褒め聞えつ（五）」と宣ふ。犬宮をかしげにて、ひとり立ちし歩みはじめ給ふ程なり。父君見奉り給ひて、仲忠「ここに、かく（六）睦まじくなし奉るは此の子によりてなり。火水に入れども、宮は見も入れ給はず、乳母どもの限は、うしろめたければなむ。侍らざらむ程に、出だし給ふな。いとあわたゞしくて、出でつゝ人に見ゆれば、見苦しくなむ。上局などして、斯くてものし給へ」と宣ひ置く。宮に、仲忠「今、いと疾くまうで來なむ。聞えさする樣にを」とて出で給ひ、其處にてこれかれ（七）待ちつけ給ふ。
山籠にとらせ給ふべき物とて、御衣櫃一かけ、長櫃一かけ持たせ給ふ。ほそを風といふ琴持たせ給へり。御供には御前六人、御馬添六人、御前二人は四位、二人は五位、二人はやんごとなき官ある六位、御隨身四人、雜色六人、裝束白きろう

ずなりにしを、此の頃、紅葉の散らぬさきにとてまかり出で立つなるを、一二日侍らざらむ程のうしろめたければなむ。然あらむほどは(一)、「あからさまに渡り給へ」とありとも(二)、ゆめわたらせ給ふな。まかり歩きてまうで來るに、此方におはしまさぬ時は、いと便なく佗しくなむ。なほ然きこゆる心あり。歸りまうで來なむ(三)、待たせ給へ」ときこえ給へば宮、女二「いづちか(四)。苦しくのみあれば、臥し起きも心安くてこそ。日頃はこれかれ物し給はねば、人少にてさう〴〵しき(五)をのみなむ」大將、仲忠「それ、然ぞ實におはしますめる。この東の對に侍る人(六)を、召しあけてさふらはせ給へ。琴などいとよう彈きて、樣々にせぬわざ無う、よき人なり。心なども善げに侍るめり」宮、女二「恥かしげに、かくいと(七)異樣なる頃(八)しも、いかでか」大將、仲忠「何かは、いと恥(九)かしく侍らぬ人なめり」とてまうのぼらせ(一〇)給へば、いと目やすく裝束きてのぼり給へり。容貌もいとおとな〳〵しう清げなり。宮、御琴賜ひつゝ彈かせ給ふ。いとおもしろく彈き、さま〴〵にいとらう〳〵しく、を

〔語釋〕
(二)正賴方より言ひ來るとも
(四)何處へ行くものぞ
(六)仲賴の妹
(七)懷胎の頃
(一〇)仲賴の妹を招きたれば

〔考異〕
(一)ほどは—「は」ナシ
(三)まうで—まで
(五)さう〴〵しきを—「を」ナシ
(八)頃しも—折しも
(九)恥かしく—恥かしき樣

かくいふ程に、十月になりぬ。大將宮に聞え給ふ、仲忠「世に人のいふなる事は、こゝにも知りて侍らむやうに聞き給へらむがいとほしき事。自ら御覽ずらむ。御卽位(一)に參りて侍りしまゝに、院のかく旅におはしますだに(二)參らず、三條にもまからで侍るは、知り侍らぬよしを、一所(三)に御覽じてば、罪(四)にはあて給はじとてなむ。太政大臣の、ひとり(五)月頃おほし歎くなるを、人の御上とも承らず。こゝには、見給へ煩ふべき人あまたも侍らねど、一所の御心を思ひ給ふるも、恐ろしくなむ」宮、女二「それは、人のし給ふにもあらざなり。對面し給はぬをこそ、誰も誰も宣はすなれど、聞くやうありとて、正身(六)こそ對面給はざめれ。こゝには、さやうにたばかるとも、し果てられむ樣をこそ見侍らめ。大將、仲忠「何事を、いかやうなる筋に」宮、女二「みな集はれてこそ、定められけれ。知らず顏にも」大將、仲忠「すべて、この事な宣ひそ。さらに知り侍らず。さるは、去歲より「水尾の山籠(七)とぶらひにまからむ」と言ひ契りて侍るを、花盛にも、とかく障りて物せ

㊅仲忠の女一宮に對する辯解。仲忠水尾に仲賴を訪はんとす。

〔語釋〕

(一)自分も梨壺方に賛成したる樣に

(二)「おはしますにだに」歟

(三)女一宮が見知りたらば

(五)六の君が里に留りて歸らぬを

(六)假令本人は后宮に御目にかゝらずとも事を圖る事は出來ぬにあらず

(七)仲賴を尋ねに

〔考異〕

(四)罪には—罪にも

左のおとゞは、御聟たち（一）をつらしと思す。御聟たち、かく言ふことを、如何に思すらむ、夢にても知らねど、など互に思せど、誰も〳〵物もきこえ給はず。女御（二）の君につき奉りつゝ物望せし人々、一人目に見えず、若宮（三）の御方に參りつどひし人々も參らねば、ひきかへたる樣に、いとしめやかにながめおはします。內裏よりも、久しく御消息も見えねば、おとゞ（四）、この事實に定まりなば、またの日法師になりなむ、なでふ（五）にか世に交らふべき、とおぼし嘆きて、君たちもみな集ひて、萬にこしらへ給へど、思ほし慰むべくもあらず。藤壺は、萬におもほせど物も宣はず、（六）帝の御心あやまりにたればこそ、人も斯くは言ふらめ、かく言ふも著く、御返聞えねど立ちかへり賜ひし御使も見えぬは、如何なるにかあらむ、この事は、げに〳〵然なりて、おとども宣ふやうになり給はゞ、我も尼になりなむ、何か世に交らむ、と思ほす。宮たち（七）を見奉りておはす。若宮は、何心もなくて、遊びありき給ふ。

〔語釋〕
（一）忠雅等
（二）あて宮
（三）あて宮腹第一の皇子
（四）正賴
（六）あて宮の心

〔考異〕
（五）なでふにか世に交らふべき—なでふ事にか世に經まじるべき
（七）宮たちを—「を」ナシ

〔語釋〕
(三)東宮に

〔考異〕
(一)いかでと—いかでかと
(二)いと—ナシ

(晝)世間の噂。正賴あて宮の落膽。

衆雅　畏まりて承りぬ。仰せられたる事、世にいかでと(一)思ひ給ふれど、あひ叶ふ人の侍らぬになむ。今、かたぐ宣ひ語らひて聞えさせむ。

と聞え給ひて、大將の御許に、「宮より斯くなむ」とて奉り給へれば見給ひて、人にも見せで隱しつ。

晝詞　こゝは右大將殿。宮の御方。右近の君といふ人、御前にて聞ゆるやう、

右近「宮のすけ、大臣にて、思ふやうにておはしまさば、まかるらむ」と申す人侍る」宮、「あな聞きにくや。いと(二)心違なり」と宣ふ。人々多く參り集へり。人の奉りたる物、いと多かり。こゝは宮、乳母たちなどして遊び給へり。殿內、ひきかへたる樣に、人多く參り集ひて、市の如のゝしる。

かくて、內裏よりはじめ、世界にのゝしりていふやうには、「梨壺の御腹のなむ(三)居給ふべき。后の宮、夜晝泣くく聞え給へば、帝然思しなりにたなり。おとゞたちは、知らぬやうにて、皆心を一つにてなむ物し給ふなる」と言ひのゝしる。

りて、など聞ゆれど、然しもあらぬやうに。かの事は如何思しなりぬる。そこにもや、昔の懸想人(一)の心つゝましくなむとて、長き世の悦とあるべき事をも、せじとは(二)思すらむ。こゝには、萬に思へど、人に(三)逢ひて、言語らふべきにもあらず。かの(四)人にもあひ給ひつゝ、よく言語らひ給はゞ(五)、然りともなむ。大將、そこに、やんごとなく思さむ事を、何か妨げむ(六)。然らば、子ともな見給ひそかし。天下にかしこき身なりとも、親の見給はざらむ子は(七)いと悪しからむは。四人翁(八)を語らひてこそ、事は成し(九)にけれ。五人の心を一つにて、「昔より斯うなむある、この事許されずば、山林に交りて、公にも仕うまつらじ。何を勇にてか」と申されば、然りともえ否び給はじ。此事に叶はざらむ人をば、かく數(一〇)ならず思はれたりとならば、この世にも、あの世にも深くつらしと思はむ。とあり。おとゞ、「大將をな(一一)見そ」と宣ひつるに驚きて、坊をばすゑず(一二)とも、大將の疎にはいかゞ思はむ、かく宣ふが恐しく畏きこと、と思して御返事、

〔語釈〕
(一)あて宮の手前を兼ねて
(四)忠雅
(五)同意せぬ事はあらじ
(六)父の意に背くならば子と思はぬがよし
(八)商山の四皓の力によりて漢の文帝が皇位に即きしをいふ
(一〇)我を
(一一)手紙の中にある文句
(一二)「大將を」歟

〔考異〕
(二)とは―「は」ナシ
(三)人に逢ひて―人にもあひつゝ
(七)子は―には
(九)成しに―「に」ナシ
(一二)すゑずとも―すゑずば―するず

れ給はず、さる氣色侍りける夜、「思ふやうにてあらば、必ず然せむ」と宣はせければ、親もこれかれも、然思ひて侍りけるを(一)、かゝる折節にも、かくやんごとなく妨げ給ふ人(二)の出で給ふめれば、父母、「今まで世に侍りて、かゝる恥を見ること(三)」と伏し沈みて湯水も絶えて(四)思ひなげき侍るなれば(五)、親をなげかするにまさる幸なき事は、何處にか」と聞え給へば、上、朱雀「よに然契られたらば違へられじ。われらが心には似ずさる所し給ふ人の御心なればあるぞかしと聞えしかど(六)、あるまじき事とこそものせしや(七)」と宣ひて夜晝物し給ふ。

【晝詞】こゝは仁壽殿の女御の御方。

后の宮聞召して、思ふやうに子どもひき率て、我が儘にはた目ざましや、と思して、右の大殿に御消息奉り給ふ。

后宮　對面聞えまほしけれど、これも煩はしくし給へばなむ、ものし給へと聞えぬ。太政大臣に聞ゆべき事ありて、度々ものし給へと聞ゆれど、惱むことあ

（語釋）
（一）豫期の如くにゆかば此子は實忠に妻あはせん
（二）今上
（考異）
（三）ことーこそ
（四）絕えてー絕ちてー絕え
（五）侍るなればー侍れば
㊃后宮兼雅に文を贈りて立太子の事を迫る。
（六）あるぞかしとーある所かゝると
（七）事とこそー事とー事こそ

り給ひて、朱雀「一の宮をこそ、こともなしと思ひしか。これも、怪しうはあらざりけり。琵琶、箏の琴の上手もがな。この(一)御子たちの料にせむ」と宣ふ。男御子たちも、みな同じ所にて、夜晝御遊せさせ給ひておはします。御妻持たまへるは、夜はまかで給ふ。彈正宮は、夜晝さふらひ給へば上、朱雀「などか、この宮たち(二)の、見る限まかでぬは。里もなき、ようする(三)人のなきか」と申し給へば女御、仁壽「これかれ、(四)然ものする人侍れど、如何なるにか、かく獨りのみぞ」と聞え給へば、朱雀「もし藤壺をや、月見るやうに思ひけむ。實忠の朝臣こそ、さやうに聞きしか。それだに今は然も無かなるものを」仁壽「それ、山里に侍るまゝにさふらひし、とて喜びにまうで(五)來たりけるを、言ひこしらへ侍り。それは、時々京に通ひまうで來けるを民部卿の言ひたばかり(六)て侍りけるにこそ」上、朱雀「怪しみ思ひしは、こしらへ(七)られたりけるにこそは。心さへこそあらまほしう。かの朝臣(八)は、山籠こそあいなかりしか」女御、仁壽「いでや、いと幸なく侍りける人にこそ。若君(九)のまだ産

〔語釋〕

(二)「たち」衍文の歟

(三)用する歟

(四)忠康を聟にせんと望む人あれど

(八)「朝臣の」歟、實忠をいふ

(九)あて宮をいふ歟

〔考異〕

(一)このーなし

(五)まうでーまで

(六)て侍りーナシ

(七)られたりけるにこそはーられにたりけるにこそ

（語釋）
（二）兼雅
（三）仲忠
（六）后宮
（一〇）女一宮の容色が衰へたりとかこつけて取かへさるゝを恐れて外へ出さぬ也
（一一）給ひつ—給ふ

(百)朱雀院の氣樂なる生活。御子たちを招く。仲忠警戒して女一宮を參らせず。

（考異）
（一）目を—目をば
（四）添ひ居て—「居」ナシ
（五）する—などすれば
（七）のみ—のみは
（八）御子たちは—「は」ナシ
（九）呼び參らせ給へば—御消息ありつれば

つ、目を（一）はなち給はず、守らへておはする、右の大殿（二）の聞き給ひて、然思ひしことぞや、后の宮にも、然聞えてきかし、と思す。右大將（三）我もかゝる目をや、と思し怖ぢて、ありきもし給はず、夜晝添ひ居て（四）、御消息あれば參りて、人の參りまかでする（五）車の音すれば、たづね問はせ給ひて心ゆるびなく思す。

かくて朱雀院には、こと人々また參らせ給はず、仁壽殿の女御のみ、出で給ひし御供に仕うまつり給ひてさふらひ給へば上、朱雀「今はかく、中宮（六）も内裏のみこそは。こと人々は參りもせじ。そこにのみ（七）添ひて、御子たちは（八）あまたあれば、睦ましきものには。凡人のやうに、子ども前にするゐて、つい並びてあらむと思ふなむ」とて御局ひろく造りしつらはせ給ひて、殿上人、上達部も、さりぬべき、御前におはし、車どもなどして、朱雀「女御たち、一の宮も參り給へ」とて呼び參らせ給へ（九）ば大將、仲忠「この頃、（一〇）いたく損はれ給ひにためり。然あらざらむ時、ことさらにも參らせ奉らむ」とてとゞめ奉らせ給ひつ（一一）。二の宮は參り給ひぬ。上、見奉

(十二)六の君なほ歸らず。仲忠妻を警戒す。

〔語釋〕

(一)忠雅自身來れども

(二)忠雅も歸れと口では言ひ居る中に自分の方から離れて仕舞ふがましなり

(四)母をさがして

(五)忠雅

〔考異〕

(三)去り侍りなむ―去り侍る・

ぬ。

かくて太政大臣の北の方、大宮の御許にわたり給ひて、おとゞの御消息はあれど、御返も聞え給はず、(一)まことに物し給へど、對面し給はず。宮もおとゞも、正頼大宮「あぢきなし。童べにもあらず。心のかはり給はむにだに、身一つにもあらず、子どもあまたあり、かく物し給ふめれば、忘れ果てじとこそ思はめ。かく宣ふめるを、對面し給へ」と聞え給へば北の方、六君「何か、背う人に知られぬ前に、(二)彼處にもかう宣ふ程に、己が心と(三)去り侍りなむとなむ。これかれ見習ひてもあるものを、己しも、かしこき心に忘れじとなむ。たどつきたりし乳母なくて懐にのみ習ひたる子の、求め(四)泣くなれば、らうたさに、とざまかうざまにたばかりて迎ふれど、許されぬをのみなむ、いと悲しくは」とて物も聞え給はねば、(五)大殿は、かくやんごとなき折にもまゐり給はず、君だちをのみもて煩ひ給ひつゝ、姫君をば、北の方のいと悲しうし給ひしかば、これ見には、然りともわたり給ひなむ、と思しつ

悩み給ふことも無かなるものを」と宣へば又他人、「かの北の方、親の許にこもり居給へれば、(一)小かりし子どもの騒ぐなるをこそ、もてあつかひてものし給ふなれ」と。右の大殿、(二)右大將、(三)この事の聞えの出で來たるにこそあめれ、然は思ひし事ぞや、など心の中に思ほす。大將、藤大納言などは、太政大臣をだに、斯くし奉り給へば、まして如何に、など思ほしつ。

かくてかうぶり賜ひ、みな人加階し給ふ。(四)大殿、右大殿、二位になり給ふ。東宮亮、四位階こえて、學士の右大辨(五)三位になる。家あこの衛門尉、かうぶり得給ふ。女かうぶりに女御、更衣、皆かうぶり賜はりぬ。乳母たち加階す。藏人たち、かうぶり得などす。

かくて晦に、司召のころ、右衛門督かけたる宰相なくなりにければ、宰相には右大辨季英、(六)右大將按察使かけ給ふ。右衛門督に兵部大輔、(七)「いと難くなり給へり」(八)と世に言ふ。兵部太輔に顯澄、右大辨に東宮亮、(九)これはた(一〇)の藏人右衛門尉になり

〔語釈〕
(二)兼雅仲忠
(三)后宮の隠謀
(四)正頼兼雅
(五)季英
(六)仲忠
(七)兼澄
(九)兼澄歟

〔考異〕
(一)居給へれば―居給ふれば
(八)難く―いたく
(一〇)これはた―これこそ

(十)即位式。忠雅不參。正賴以下昇位。司召。季英以下昇進。

〔語釋〕
(一)今上の
(二)あて宮をいふ

ちくらして、歸り參りて、「ともかくも仰せられず」と申せば、怪しと思す。この御腹の君たち四所、十一なるを兄にて、四つ五つなるおはす。七つにおはする女君ぞ、父母いみじうかなしうし給ふ。女はそれが限なり。

かゝる程に、御即位二十三日あるべしとのゝしる。帝は、かゝる事を何とも思さで、たゞ藤壺のゐまり給はぬを、夜晝おぼし嘆けど、御使も久しう奉り給はず、后の宮の聞え給ひし事をのみ御心憂しとおぼしつゝ、御徒然とながめおはしませば、御乳母たち、命婦、藏人などは、「かゝる物の初に、おもしろく興ある事をこそ。かく物をのみ思ほし嘆き、日々に御かたちの衰へおはしますこと」など言ふ。

かくて御即位になりぬ。上達部みな參り給ふに、太政大臣、暇文出だして參り給はず。御心もゆかず、萬の事、もろ共に、と思しゝ人に見せぬ事、と思せど、これはかれそゝのかし聞え給へば、出で給ひぬ。例のことなりぬれば、上達部、陣にて宣ふ、「太政大臣の、かゝる大事に參り給はぬかな。暇文出だし給へれど、ことに

〔語釋〕
(二)正賴の子息等

〔考異〕
(一)おとゞの―「の」ナシ
(三)しなゝや―しなりや―しなかや
(四)日一日―一日

やう高くなり、御前の遣水、前栽さま〴〵に面白く、蟲の音も哀に、風も涼しきまゝに北の方、六君「かくて後、我が心とこそ、親の御許などにおはして、餘所なる折もあれ、恐ろしき所に取り籠められなば、如何樣にせむ」などおぼし嘆く。他人々も、母屋の隅のもとに集まり、おはする所のいと近ければ、(一)おとゞの宣ふ、忠雅「今參りたらむ童べのやうに、御簾の外にさふらはせ給ひて、內にこれかれ御覽ずるこそはしたなけれ。例ならず斯かるは、內裏の御方の御もてなしにやあらむ」など聞え給へど、出で給はず。夜、一夜おはすれば、(二)君たちえ立ち給はず。曉に、おとゞ、かへり給ふとて、御消息あり。

忠雅　よろづ怪しくならはぬ心地こそ、よきものゝしなゝや。(三)

世の中はかゝる物ともしら露のおきゐて消ゆる今朝ぞ知りぬる

老の學問を、などなむ。只今わたらせ給ひねとて、御迎に奉る。

とあり。北の方、御返もきこえ給はず、御消息もなければ、御迎の人は、(四)日一日立

て、「俄にわづらひ侍りて、いと怪しくなむ」と告げまうで來つれば、「空しくもこそなり侍れ。見給へざらむやは」とて、みだり車ながらまかり下りてなむ。昔の事どもは、何か仰せらるゝ。萬の事、いかでとのみこそ。(一)少しも踏立てられ侍らばまゐり侍らむ。

とておし包みて奉り給ひつ。

宮の亮が御許へ參りて奉るを御覽じて、后宮「いづくに如何樣にて逢ひつる」と問はせ給へば、亮「左大臣の家の藤壺の女御のものし給ふ方に、公卿たち數多、これかれして(二)なむものし給ひつる(三)」宮、后宮「心地病むとあるは、然あるにや」亮「委(四)しうはえ見奉らず。車は門の外に立ちて侍りつ。(五)簀子にことなる事もなげにて」など聞ゆれば、宮、后宮「なほ聽かじと思ふなめり。負けじ。脚病むといふは、輦の宣旨を申しくださむ」など宣ふ。

(六)おとゞなほ簀子におはす。夜の更け行くまゝに、八月十七日ばかりの月のやう

〔語釈〕
(一)いかで御力にならんとのみ思ひ居れり
(五)忠雅は
(六)忠雅

〔考異〕
(二)して—ナシ
(三)給ひつる—給へる
(四)委しうは—「は」ナシ

(十)忠雅歸りて大君を招く六君歸らず。

人はいとほしと思す。おとゞは、胸つぶれて、開けて見給へば、

后宮 切なる事ありて、度々ものし給へと聞ゆれど、「悩ましげにて」とのみあるを、然しもおはせぬ様に承るは、おこたり給ひけるにや。たゞあからさまに、立ちながら物し給へ。斯う數にもあらず、人侮られなる身にはあれども、昔(一)の人々(二)の、「世にあらむ限は、思し寄らむこと聞え合せて(三)あれ」とこそ宣ひしか。萬の憂はしからむことをも、誰にかは(四)聞えむとてこそ。必ず。

と書き給へり。見給ひて、夢にもこの事(五)とは思さで、この東宮定の事にこそあらめ、斯う御消息などあるに、思ほし疎みて、いとゞ相見え給はじ、と思していとほしく思ほす。内には、かゝる事を知り給へれば、限ぞと思ほして、北の方はうつぶし臥して泣き給ふ。おとゞ、

仲雅 畏まりて承りぬ。日頃は、みだり脚氣にや侍らむ、更に踏み立てられ侍らず、立ち動もし侍らぬを、年頃(六)あひかへりみ侍りつる者の、親の許にまうでき

〔語釈〕
(一)世になき父母が
(三)君に
(五)聟取の事
(六)妻が

〔考異〕
(二)人々の—人々—人々も
(四)誰にかは—「は」ナシ

〔語釋〕
(三)權のかみ也
(四)忠雅が
(五)「くだし」は御下命の意か、一本「てたし」

〔考異〕
(二)給ふとあるは―給ふとてあるは
(一)承りて―給はりて

懐に入れて、太政大臣の御許にもて行きて、人傳ならで、御手にたしかに奉れ。惱み給ふ(一)とあるは、まことか空言か、たしかに案内して言へ」と宣ふ。かしこまり承(二)りて持て參るに、この南の御門に、大殿の御車、御前など、北に立てり。こゝにおはするなるべし、と思ひて、下りて入り見れば、おとゞこれかれおはす。(三)宮の亮、消息申させて、たゞまうでにまうでて、御階のもとに侍るを、疾く(四)見つけ給ひて、何事ならむ、これに見えぬる事、煩ふ由申したるものを、と思して物も宣はず。御簾のうちに集まりて、立ちさわぎ給ふ。左衛門督の君、忠澄「宮の大夫の朝臣侍り」と申し給へば、忠雅「何事によりてぞ」と問はせ給ふ。亮「宮の御使にさふらひつるなり。「これ、まのあたりにて參らせよ」と侍りつるくだし(五)の侍りつれば」とて懐より、陸奥紙にてある文を、藏人の少將の君して奉らす。御簾の内には、「さればよ」とて集まりてまどひ給ふ。北の方は、青草の色になりて、大君「今宵呼びもて去なむずるにこそあめれ」と涙をながして伏し轉び給ふ。他人

に御過やある」と聞え給へば、大君「かゝる事のありけるを、知らせざりけるが憎ければぞや。あぢきなや」と聞え給ふ。簀子に御座まゐりて、左衛門督の君、(一)宰相中將、左大辨などはべり給ひて、おはしますべき所に、これかれものせらるべければ、とてすゑ奉れり。御前に、此方の御腹(二)の君だち、皆おはするほどに、(三)后の宮は、この事をいかでと思して、姫君(四)を玉の如くに(五)つくろひ磨き奉り給ふべし。天上の吉祥天女を持たるものの夷なりとも、わが宮をば、と思しつゝ、たびたび(六)御消息を聞え給へど、かく病中(七)をのみしつゝ(八)參り給はぬを、我(九)まことの天地に承けられたる、國の親ならば、しはづさじとおぼして、昔若小君をもとめし(一〇)中將の、母北方の兄、宰相になりて若くて亡せにける子の小かりけるを、取りて養はせ給ひける、今は宮の權のかみになして、いとやんごとなきものにし給ふ人、いとかしこう萬正しう、おほやけ人なり、(一一)おほき大殿もおなじ御親族にて、馴れ仕まつる人(一二)にて、御文をかきて取らすとて、宣ふやう、后宮「これ、人に持たせで、

〔語釋〕
(一)忠澄祐澄師澄
(二)大宮腹
(三)「おはすかゝる程に」なるべし
(四)女三宮
(六)忠雅方へ
(七)忠雅が病氣居をして
(九)后宮の心
(一〇)兼雅をさがせし時の事俊蔭卷にあり
(一一)忠雅
(一二)權のかみをいふ、「て」は衍文なるべし

⑨后宮使を以て忠雅を招く。忠雅御氣と稱して行かず。后宮、忠雅の假病を悟る。

〔考異〕
(五)如くに—「に」ナシ
(八)しつゝ—して

し嘆きて泣き給ひつゝ、よき事もあしき事も知らぬやうにて經給へば、(一)え聞え給はず。おとゞは、(二)この君をぞ私物にて、らうたくし給へど、心もゆかずのみおはす。兵部卿の宮の(三)は外住し給うて後、まだ藤壺に對面し給はざりつれば、あて宮「年頃の御物語聞え給へ」とて切にとゞめ聞え給へば、またわたり給はず。かくて御方々も、大宮、男君たちもみなおはす。御裝束ども(四)は、あはせ一かさね、御小袿とも　さま〴〵にいと淸らなり。

夜うさりになりて、太政大臣殿より、御迎たてまつり給へれど、六君「今宵はこゝになむ」と聞え給へばおとゞ、例ならずあやしと思して、おはしたり。北の方、六君「いと狹うて、これかれ物し給へば、さらに對面すべき所もなし。歸らせ給ひね。今一日二日ばかりありて、其方にを」と聞え給へば、おとゞ、忠雅「あやしう、例ならず宣へば、聞きならはぬ心地なむ、驚きながらなむ。など斯う(五)遙けげには宣へる。たゞ此處もとに出で給へ」と聞え給ふ。大宮、「なほ對面し給へ。(六)かしこ(七)

〔語釈〕
(二)忠雅歟
(三)十一の君
(六)忠雅に

〔考異〕
(一)經給へば―ナシ
(四)どもは―「は」ナシ
(五)斯う遙けげには―斯うは遙けくては
(七)かしこに―かしこの

と聞え給ふ。一の宮より、

女一日頃あさましく、頭ももたげられずありて、え聞えざりつる程に、思ふにもしるき御喜あなるをなむ。これはさるものにて、かの事をなむ念じ聞ゆる。こゝにあめるものは、「怪しき事あなるを、更に知り侍らぬを、もし誰も誰も思ほしや疎むらむ」とぞ、いとほしがり聞ゆる。

とぞ聞え給へる。御返、

あて宮日頃はなやませ給ふなるに、自ら參るべけれど、え然も侍らぬをなむ。思ほしけることは、いでや、この頃の花櫻ばかりにこそ思う給へらるゝ。宣はせたる人の御消息は、さる御心のなからむこそ、僻みたる樣には。かく宣はせたるをなむ頼もしうは。

と聞え給ふ。

左大辨殿の北の方、かくて後は思ほし倦じて、親同胞にも聞え給はず、夜晝おほ

〔語釋〕
（一）立太子の事
（二）仲忠は后宮の陰謀には我は無關係なれど若其に與したる樣に思はれはせぬかと心配し居る
（四）仲忠の御傳言は
（五）后宮に黨する心のなきは寧ろ不自然なり

〔考異〕
（一）ありて—ナシ
（六）御心なからむこそ—御心ならむこそ
（七）「太政大臣殿の北方」の誤なるべし忠雅が后宮の聟になる噂をきゝて六君が憤りたる也

みなむ。さて物たばかりは、そがいと様々なるを、あぢきなく、人の御爲にさへあべかなるをぞ思ひ歎く。

と聞え給ふ。藤大納言殿の(一)北の方は、たちぬる月の晦にこそ子産み給へる。まださはだち(二)給はねば、御使して聞え給ふ。源中納言殿より、

涼(三)參りても聞えさすべけれども、(四)こゝに日頃惱まるゝに、見給へ讓る人もなくてなむ。いとも嬉しく、いつしかと待ち聞えし樣におはしますなるを、(五)內侍のかんの殿たちなどには、物や遣はすべき。さらば宣はせよ。こゝにものし侍らむ。

と聞え給へり。御返事、

あて宮　承りぬ。なやみ給ふは、如何樣なるにか。さらに承らざりけり。まち給ひける事は、時過ぎたる(六)やうにて。乳母たちは、いさや然する物にやあらむ。今されば聞えむ。

〔語釋〕
(一)忠俊の妻、七の君
(四)妻が病氣にて
(五)女御になりたるにつきて尚侍典侍などに下され物などの御用あらば承はらん

〔考異〕
(二)給はねば—給はねど
(三)參りても—參りまうでて
(六)やうにて—やうにては

れ。彼處には(一)、いとめでたきものにこそせらるなれ。中納言をば、いと疎きもの
にして、いらへも昔は聲も聞えざりける人に、今は親同胞の如して(二)、親も子も
さしむかひてあるとこそいふめる」女御の君、あて宮「年頃、いとおやしくて、所々(三)
にものせられたり(四)つれば、かの中納言對面して、なほ(五)斯くてをとこそ物せしか。
かのそで君の、よく生ひなり給へるを、いかで内裏に參らせてしがな。睦ましき
人のい(六)と奉らせまほしきを」北の方、三君「さなむ思ふとあらば、いとよく奉
られなむ。今。ことの序あらば、彼處にものし侍らむ」と聞え給ふ。
朱雀院の女御の御もとより、
仁壽(七)必ずゝ(八)有るべきことと思う給へしかど、うたてきしろふ人がちなりけるを、
かく物し給ふをなむ。今一(九)つの事を、内裏の御用意にこそは。
と聞え給へり。御返、
あて宮 承りぬ。宣はせたる事は、もし參ることあらば、徒走の苦しかりしをの

〔語釋〕
(一)實正は
(二)實正にそで君母子が親しむとなり
(三)實忠が妻と別居したるを
(五)同居を我が勸めたりき
(七)仁壽殿
(八)あて宮の女御になりたる事
(九)立太子の事
〔考異〕
(四)たり—ナシ
(六)いと奉らせまほしきを—いとゞ奉らまほしきを

り思しつきたればにこそ。(一)かの宮、さらに劣り給はざなる。まだかたなりにて、いとをかしげにおはすなり。今すこしねび給はゞ、いとようなり給ふべき人にこそ」北の方、六君「二の宮、思ふやうにおはすなり。いかで見奉る物にもがな。大將こそ羨ましく目ざましけれ」と時々宣ふを、(二)此の宮(三)さやうに聞え給へば、よもあしと思はじや」民部卿殿の、三君「こゝにも、(四)あの乳母のいふとて、言ひしろひなどせられたりけり。それは、たゞ此の事により、萬の事をすとてたばかるなめり」など女御の君と御物語し給ふ。三君「新中納言(五)の御事は昨夜きこしめしたりや。「己(八)いとこそをかしかりけれ。かの三條に、昔の(六)(七)人を迎へおきて、然も知らせで、が侍るぞ」とて率てまかりたりければ、そで君の、あらぬものに生ひなりてあむなるを、己と見なしたりけるは、いとこそ怪しかりけれ。されど己が(九)方をなむ、いと疎く、心にもあらぬやうにて(一〇)物せられける。小野へとてかへり給ひけるを、一日なむ、(一一)此處にものせむとておはしたなるが、(一二)かの北の方こそ、いとよき人な

（語釋）
（一）后腹の女三宮
（二）忠雅が
（三）女三宮を后宮から申込あらば
（四）女三宮の乳母
（五）實忠
（六）實忠の舊妻
（八）三の君が居るとて
（九）舊妻に對して
（一一）あて宮を尋ねるとて

（考異）
（七）昔の人―「の」ナシ
（一〇）やうにて―「て」ナシ
（一二）おはしたなるが―「な」ナシ

ど、更に宣はせねど、著くなむ」大宮、「方々、とざまかうざまにたばかり給ふめり。たゞ此處には、おとゞ(一)をのみ賴み聞えたる。さりとも、一つ心になり給はずばとこそ思へ」北の方、六君「かしこ(二)には、世(三)にもかく思し騷ぐが苦しき事、とこそ思はれためれ」大宮、「いさや、いとあやしき事をぞ人言ひつるや。眞にやあらむ、おとゞ(四)を、あるやんごとなき所に取り籠めらるべしとや(五)。それこそ、いと恐ろしきたばかりなれ」北の方、六君「何處に、如何聞召しつるぞや」大宮「后の宮の姫宮にとかや」北の方、胸つぶれて、六君「あな心憂や。さも知らずかし。こゝにはさる氣色もなきは、隱さるゝにやあらむ。幼きものどもあまた侍るに、またも見まほ(六)しうて侍るに、さる名だたるめでたくおはする所に取り籠められなば、顧みもせじ。如何樣にせむ」と氣色惡しうて聞えたまへば、大宮「いさや。さぞ言ふなりつる(七)。たしかなる事にやあらむ」北の方、六君「彼處(八)よりたびたび「忍びて」とぞあるや」宮、「朱雀院は、一の宮より勝るはなしとぞ思したなる(九)。それは、小くよ

〔語釋〕
(一)忠雅をのみ力にして居る
(二)忠雅は
(四)忠雅を
(八)后宮より

〔考異〕
(三)世にもかく—とにもかく
(五)とや—となり
(六)見まほしうて—「て」ナシ
(七)つる—つるは
(九)思したなる—「な」ナシ

疎にはあらじ、と御心一つに、人には言はで思ほす。たび〳〵聞え給へど、(一)參り給はず。

かくて、藤壺の御方に、よろこび聞え給ふとて、これかれわたり給へり。大宮も民部卿(二)の宮の御方も、おほきおとゞ(三)、兵部卿の宮(四)、民部卿殿(五)の北の方も渡り給へり。「必ず、何かはと思へる事なれど、あやしく妨げられつるやうに聞え侍るを、かくてだに」と宣へば、「年頃は(六)、かしこの國讓の事によりて、思ひ歎き、心損ひたるやうにて、内裏へも(七)參らず、ものし給ふこそいと見苦しけれ。子持たるも苦しげなるものにこそ」大宮、「いでや、こゝにも、この御事を、とざまかうざまに思はば、おぼろげにやは。ほと〳〵斯くもえ有るまじきにこそは聞えつれ。又いかなる(八)恥をも見むとすらむとぞ、彼處にも思ひ歎かるめれ」おほき大い殿、六君「その事、いと騷がしかりなむや。一日も、后宮から(九)召すめりきや。度々になりぬれど、煩はしとて參り給はずなりにし氣色を、「それはかやうの筋なるべし」と(一〇)問ひ申せ

〔語釋〕
(一)忠雅が
六 あて宮の姉妹等あて宮の祝に集まる。立太子の噂。忠雅が后腹の女三宮の聟になるべき噂。處々よりの祝の文。
(二)五の君
(三)忠雅の妻、六の君
(四)十一の君
(五)三の君
(八)あて宮腹の皇子が太子に立ちかぬる恐あるをいふ

〔考異〕
(六)年頃は─「は」ナシ
(七)内裏へ─も─湯水も
(九)后宮から召すめりきや─后宮より召すめりき
(一〇)と問ひ申せど─とは申せど

㊆后宮、忠雅を招く。來らず。

〔語釋〕
(一)后宮の心
(二)朱雀院
(四)忠雅をわが腹の皇女の聟にして事を謀らんと巧める也
(六)后腹の皇女三宮

〔考異〕
(三)惡しうも―あしくも―あしとも
(五)たるをば―たるは

【畫詞】こゝは御國讓の所。

かくて后の宮の思すやう、同じ日、坊をすゑずなりぬれば、今はしにくかりぬべき事、一の人の心だに一つになしてば、子ども親に從はざらむやは、と思して、彼岸の程によき日を取りて、さるべき事おぼし設けて、太政大臣に忍びてものせむ、院きこしめしても、惡しうも宣はじ、右大將をだに、よき聟にし給へば、これも、年もまだ若う、かたちも心も目やすく、世の一の人にもあれば、など思はして、太政大臣に、后宮「聞ゆべき事なむある。今宵、こゝに忍びてものし給へ」とあり。おとゞ怪しく、かゝる事によき日といふなる口しも、斯う〳〵宣へれば、坊定のことにやあらむ、煩はし、と思して、兼雅「畏まりて承りさふらひぬ。さふらふべき由仰せられたるをば、日頃勞る所侍りて、院にも内裏にも參り侍らぬ。いま今日明日過して、ためらひて參り侍らむ」と聞え給へれば宮くち惜しう、いかでかこれ呼び取らむ。天下に思ふ人持たりとも、わが御子を見奉らむ人は、

なれ。必ずなし給へ」と聞え給へば帝、今上「二人は、太政大臣の女なり。これは下臈にこそあらざらめ。(一)相次いでこそはあらめ。(二)これをしてはいかでか」と聞え給へば后の宮、「このさがなもの(三)(四)をなし給ひそかし」と聞え給へば、今上「いかでか。これこそ、ある中の上臈なれ。公に、世をしづめ、久しう仕うまつりたる人の女なり。そのうちに、いと便なく心細き人にこそ。こゝにだに顧みずば如何せむ。なほなして、(五)輦(六)を梨壺に許さむ」と申し給へば后の宮、「さも、とざまかうざまに、申す事を聞召さぬかな」と聞え給へど、皆し給ひて、梨壺には輦(七)をゆるし給へり。(八)かくて、四の宮は、承香殿に、故大臣殿の昭陽殿、(九)今のは麗景殿、(一〇)左の大殿のはやがて藤壺、式部卿宮のは登華殿、右の大殿のは梨壺、平中納言殿の君宣耀殿にすませ給ふ。御名も皆しか申す。登華殿は女御になり給はず。父宮よりはじめ奉りて、かゝる恥を見る事と思し嘆きてまゐり給はず。昭陽殿は、服にて里に久しく居給ひてまうのぼらせ給はず。

〔語釈〕
（三）昭陽殿
（五）昭陽殿を女御にして
（九）季明の女は
（一〇）忠雅の女は

〔考異〕
（一）あらざらめ―あらめ―ナシ
（二）あらめ―ナシ
（四）このさがなもの―このときなしのさがなもの
（六）輦―うしぐるま
（七）輦―うしぐるま
（八）給へり―給ふとぞ

と聞え給へれば、たゞ斯くなむ、

あて宮　ながきよを見る(一)べき人はうと(二)ければ餘所にのみきく雲の原をば

と聞え給へれば、この后の宮宣ひし事によりてなりけりと思ほして、あな幼や、天下に言ふらむと思す。

十一日に、御國讓り給ひて、帝は朱雀院に出で給ふ。仁壽殿の女御、御供仕うまつり給ふ。后の宮は、內裏におはしませど、藤壺のもろ共に見給はぬを、夜晝思(三)ほし歎きて、更に人もまうのぼらせ給はず。こと君たちは、みな參り集ひ給へり。しばしありて女御なし給ふ。唯今しも、なし給ふまじけれども、藤壺を參らせ給はむとおぼして、急ぎなさせ給ふ。四の宮ひき越えて、故太政大臣殿の、一の女御、(四)今の太政大臣(五)のと、藤壺とを二の女御となし給はむとする時に、后の宮(六)の聞え給ふ、后宮「いかでか、梨壺をばなし給はぬ。さかしき世ならば、これも王の親ともなりて(七)、高き位(八)にもなるべき人なり。かく亂るゝ折なれば、かくいふにこそあ

〔語譯〕
(一)我が生みの御子の太子に立たぬを怨みたる也
(三)新帝が
(四)昭陽殿
㊅朱雀院讓位。今上卽位。女四宮(承香殿)、季明の女(昭陽殿)、忠雅の女(麗景殿)、あて宮(藤壺)等女御になさる。
(五)忠雅の娘の麗景殿とあて宮とを
(八)皇后にもなるべき

〔考異〕
(二)うとければ—ことなれば—ことなれど
(六)宮の—「の」ナシ
(七)なりて—「て」ナシ

へど、世をば左大臣、仲忠の朝臣となむ政つべき。太政大臣、いとよき人なれども、才なむなき。才なき人は、世のかためとするになむ悪しき。(一)右のおほいまうち君は、有樣、心もかしこけれども、女に心入れて、好いたる所なむついたる。然るべき人は、頼もしげなくなむある。この二人は、(二)大將の朝臣は更にいふべきにもあらず。今一人(三)も、才(四)もあり心もいとかしこく重し。その(五)人臥し籠りて、女どもとり持ちて惑はさむに、人々なむ騒ぐ事あらむ。よし見給へ」と聞え給へば、

后宮「よし聞えじや」など怨じ聞え給ふ。

かくて御國譲明日になるまで、藤壺、藏人の事も申させ給はず。宮、斯うながらあらば、徒らになりなむと思して、その日勘事ゆるさせ給ひ(六)て、さて夜うさりつ方、他藏人して聞え給ふ。

東宮日頃は、ことに參り給ふやとのみ。年頃契り聞えし事を、違へ給ふめるこそ。

もろともに思ひそめてし紫(七)の雲の原をば(八)ひとり見よとや

〔語譯〕

(一)兼雅

(二)仲忠

(三)正頼

(五)正頼が不平を起して娘どもを引取りたらば

(七)帝位を我獨りのものと見よとていつ迄も歸らぬのか

㊄あて宮歌を以て東宮に立太子の噂につきての不平を漏す。

〔考異〕

(四)才もあり心もいとかしこく重し—才あり心もいとかしこくをかし

(六)給ひて—給ふ

(八)をば—をも

左(一)のおほいまうち君の思はむ事あり。そこばくの御子の祖父にて、かくあること(二)思ひて、(三)女御をもまかでさせ給ひて参らせずば如何せむ、と思ほして、朱雀「何か。只今ならでも有りなむ。自ら位にあり定まりて、親とあらむ(四)人の心よろしからむやうに定められむ。然しも思はざらむ人を子にしたらば、あぢきなくさかしら(五)をも。恥かしき人にさも覺えじや」と宣へば、后宮「この仁壽殿の盜人により、宣ふぞかし。ふけう(六)し奉りて、籠り居りて、戀(七)ひ悲しび、待ち居て、青蠅のあらむ樣に立ち去りもせでおはすれば、如何に恐ろしく思さるゝらむ。さる人のゆかりをこそ思すらめ」上、うち笑はせ給ひて、朱雀「何か、然までも思すや。めづらしき人ならばこそ。神さびにたる子どもの母(八)をば何か。十の君の、まだ見ざりつるが有りければ、それ(九)見にこそ時々わたれ(一〇)。さて宣ふやうは、彼處(一一)に、しづかになりなむ時、あるべき樣に語らひ給へ。便あるべからむことを宣はせむには、よも否びられじ。やんごとなき人の、みな御脚末にてあんめる(一二)を、わいても思ふ人の類と宣

〔語釋〕
(一)正頼
(二)帝の外戚になりえぬ事を怒りて
(三)仁壽殿
(六)不孝歟、仁壽殿が帝を嫌ひ奉りての意歟
(七)帝が
(八)仁壽殿をいふ
(一〇)仁壽殿へ
(一一)東宮

〔考異〕
(四)あらむ―あるらむ
(五)さかしらをも―さかしらも
(九)それ―それを
(一二)あんめる―あめる

ば、思ひかけぬなり。たゞ仰せごとになむ。萬の事、仲忠の朝臣に語らひて侍るを、大方の心よせよりも、また思ひ侍るめる筋侍るめれば(一)(二)、よにも動じ侍らじ(三)」宮、后宮「いと不孝の子こそ、然こそあなれ。然不孝ならむものをば、子ともな見給ひそかし。さもあらばあれ、それ等は一つ心ならずともありなむ。たゞ一の上だに一つ心ならむ(四)」と宣へば、兼雅「承りぬ。たゞ宣はむになむ(五)」とてまかで給ひぬ。

かゝる程に、上わたらせ給ひたるに、后宮「國譲は、實にいつ程にか侍らむ」上、朱雀「この十餘日ばかりになむ」后宮「坊も同じ日にや(六)は定めさせ給はぬ」上、朱雀「何か、然あらずとも。騒がしきやうなり。長閑にもありなむ」宮、后宮「その由(七)は、かう〳〵思ふことなむある。その人無かりし時こそ、あるに隨ひてと思ひしか。かゝる(八)人ありとならば、同じくばその腹のをとなむ」上、思ほすやう、宮孕み(九)給へ(一〇)るが、それし男ならば、これをもや、とこそ思ひ聞え給はめ。然あらぬものから(一一)、

〔語釈〕
(一)女一の關係上正賴に篤すべき筈なる上又特にあて宮に心を寄せ居る譯もあれば梨壺方に變ぜしむること叶ふまじ
(四)「ならむ」は「ならば」歟
(七)同日に決定したしと思ふ譯は
(八)梨壺腹に皇孫のある上は
(九)女四宮
(一一)「ものならば」歟

四后宮、立太子の事を帝に迫る。帝故らに決せず。后宮の怨。

〔考異〕
(二)侍るめれは—ばべめれば
(三)よにも—「も」ナシ
(五)宣はむ—せさせ給はむ
(六)やは—「は」ナシ
(一〇)給へるがそれし—給へるなりそれしも

しかぐ申せば、かく宣ふなめり。大方はさばれ(一)い(二)」など腹立ちておはす。

畫詞　こゝは后の宮。

かくて又后の宮、右の大殿(三)に、后宮「忍びて、直衣姿にて物し給へ。聞ゆべき事なむある」ときこえ給へば、その夜參り給へり。宮對面し給うて、后宮「宮(四)に、かのありしこと聞えしかば、「ともかうも、あるべからむ樣(五)に。此處にはいかでか」と有りしかど、氣色なむよくも見えざりし。それ思ふやうは、上(六)に聞えて、同じ日定めさせ給ひて。たゞ太政大臣の御心なり。そこには彼方此方により給はんや(八)は。位に居給ひぬ(九)すなはちこの事をこそは思さめ(七)。王昭君を胡の國へやり、楊貴妃を殺させ給へる帝なくやはありける。太政大臣(一〇)は、女を思ひ給へれば、それにつつみ給へるにこそあれ。すべき樣なからずと思ふを。さる心し給へれとなむ」おとど、兼雅「ともかうも、御心と定めさせ給はむになむ。こゝには、みな〳〵人々かのそ(一一)に入りまじりて侍れば、心一つによろづ思ひ給ふとも、力なう侍るべけれ

〔語釋〕
(二)「い」衍文歟
(三)兼雅
(四)東宮に
㊂后宮更に兼雅を招きて事を謀る。
(六)朱雀院に申上げて御讓位の日に太子を定められよ
(七)其方は梨壺の父なれば無論此方の味方ならん
(一〇)東宮が
(一一)「かのぞう」(族)に入りまじりて」歟、一本「人人かのそ」を「人々の數」とかけり

〔考異〕
(一)さばれい―さいはれむ
(五)樣に―樣にとて
(八)やは―「は」ナシ
(九)居給ひぬすなはちこの事をこそは―居たまひぬとどもなほしばしにくゆなりしとこそ

ば、渡らせ給へり。御物語など聞えさせ給ひて、后宮「斯う〳〵なむ思ふ。如何に有るべきことぞ」と聞え給へば宮、いと御氣色あしくて、青くなり赤くなり、物も聞え給はず。いと久しくありて、東宮「昔より、誰も、親の仰せごとは、ともあれかうもあれ、否び聞えじと思ほえ侍れば、否び聞ゆべきには侍らず。この國ならず大なる國にも、國母、大臣ひとつ心にてこそ、事を謀りけれ。臣下ども、(一)御脚末にて、やんごとなくてものせらるめるを、相定めて、ともかくもせさせ給ふばかりになむ。こゝにはた、(二)かの人離れては、いと便なく侍るに、(三)かゝる事侍らば、參るべきにも侍らず。されば、かの人、幼き者もろ共に、生くとも死ぬとも、山林にも入りて侍るばかりにこそは。(四)位なども、顧みむと思ふ人の爲にこそは。(五)なほ俄にこれを徒らになしては、(六)よく共侍るべき」とて涙をこぼして立ち給ひぬ。宮、后宮「聞えじと思ひつる事を、(七)これらが女がたに思ひて、己等は知らず顔にて、(八)然はせむといふを、かゝる中らひに離れたる人をば、入れ交ぜむが憎さに、宮に

〔語釋〕
(一)御血族にて
(二)あて宮に離れては
(三)梨壺腹立太子の事あらばあて宮は再び宮中に歸るまじ
(六)「よく共」は「いかでか」の誤か
(七)忠雅らが事の方の事を思ひての意歟
(八)あて宮腹を立てんとするを歟

〔考異〕
(四)位なども—位即位も
(五)なほ—なせ

はむよな。一人だに賢きものは。たゞ女の子どものやうにて」と腹立ち給ひて、をは(一)その朝にも宮とても、(二)妻まきぐるひをこそし給へ、いと憎げにはおはせず、(三)(四)たあまがつ女なれば、おもてはよけたるにこそあらがはざらむ。げに、氣色の恐ろしげに、人を殺すべからむは何ぞ」太政大臣、忠雅「さ侍る人なり。更に凡人に侍らず。氣色ありさま、いと恐ろしき人に侍り。かの大(五)將の朝臣こそいまだ若き男には侍れど、いとよく人見侍る人なり」大將、仲忠「うたて、遊のやうに申さるゝかな。なほ見侍るに、いとかしこく見え給ふ君也。かの侍る所に住み給ひし(六)時は、近く侍りしことなり。いと恐ろしく侍りし」と聞え給へば后の宮、「さる者(七)しもぞ、神佛はほしうし給ひしかな」と宣ふ。おとゞたち、「よき事に侍れど、え(八)なむ此の中には定め侍らぬを、なほ申しつるやうに奏せさせ給へ」とて皆まかで給ひぬ。

かくて日頃ありて、宮に、(九)后宮「聞えさすべき事なむある。わたらせ給へ」とあれ

〔語釋〕
(一)誤あらんか
(二)東宮とても
(三)女ぐるひ
(五)あて宮をいふ歟
(六)あて宮が里にありし時は
(八)呪ふ詞也
(九)東宮

〔考異〕
(四)おはせずをはたあまがつ—思はずはをあまがへ
(七)侍りし—侍る

㊂后宮、東宮に梨壺腹が皇孫を立てんことを勸む。東宮喜ばず。

〔語釋〕
(四)東宮に
(五)「と」衍文なるべし
(六)東宮があて宮を罷せらるゝとて
(九)あて宮腹第一の王子
(一〇)誤あらんか

〔考異〕
(一)なめれど—なめり
(二)ある—ナシ
(三)かゝれば心おぞくなむ—かく心をとなへてなむ
(七)れなく思したるとて—ふたつなくおぼしたのみて
(八)さても—ナシ
(一一)あなほうしくとくなしつべかりき—あるほうしとなしつるつきて

給ひそ」太政大臣、忠雅「なほこれは私事なり。なほ侍ることを斯うなむと申さるゝなめれど(一)、子を思はぬ人なければ、ことの道理の(二)ある事なり。(三)かゝれば心おぞくなむ、え申すまじく侍る。なほたゞ、啓するやうに、(四)御子の君に、有るべき樣を、善からむ折、こしらへ聞え給え(五)と。仰ごとにて許し給はゞ、この中の幸にてこそ侍らめ」后の宮、「其處たちは、妻方をのみ思して、宮のになく思したるとて宣ふにこそあめれ。よしや。我なほ世の中の事どもまかせて見(六)(七)居らむ」と宣ふ。右のおとゞ、兼雅「さても(八)、此坊(九)がねの君をば、まだ御覽ぜぬにやあらむ。その君は、もとより天地に承けられて、明王がねと生れ給へる人なり。彼をきしろひ思さば、いと悪しからむ。なほかゝる御(一〇)おもてだてもみずと言はれ騷がれ侍りつるに、かゝる事の侍るこそ、恥すこし免かれて思う給へられてぞあらむ。人にきしろひて、徒らにならむと思ひ給へず。知る〳〵のやうにても、え侍らずのみこそ」宮、后宮(一一)「あなほうしくとくなしつべかりき。男の端となりて、斯う物を言

この女どもをも取り離ちて、帝にもかれこれにも、又相見せ奉るべきにも侍らず。いとよき人なれど、いと急に強き人になむ侍る。また然思はむ理になむ。家の尊きことは、(一)かやうの折の用意なり」と聞え給へば中宮、おほきに御聲出だし給ひて、后宮「(二)その仁壽殿の(三)めのとことも侍るはなど、すべてこのめのこどもは、如何なる(四)目かつきたらむ、つきとつきぬる者は、みな吸ひ付きて、大なる事の妨もしつる(五)」と宣へば太政大臣、忠雅「かの大將の(六)朝臣の聞きはべるに、いと不便なる仰なりや」と聞え給ふ。忠雅「忠雅らは、人にも侍らず。かの朝臣は、男だに恥かしく侍るものを」とてうち笑ひ給へば、みな笑ひぬ。后宮「然ぞかし。女なる己らだにこそ、筋の絶えむことは思へ。主たちは、何のなり給へればか、その妻子の悲しとて、かゝる大なる事の妨をば、なさるゝ。世の中に、女はなきか。それに勝りたらむ人をも、おのれ奉らむ。近うは、己が一人もち奉りたる女御子(七)え給へ。然りとも、その女の子どもには劣らじ。いと斯く拙くな計らひ

〔語釋〕
(一)正賴は
(六)仲忠・

〔考異〕
(二)その—ナシ
(三)めのとこともも侍るはなど—女御のことゞもら侍るなど—めのとことゞも侍はなど
(四)目か—一日か—べきか
(五)しつる—したる—しをり
(七)朱雀院第三皇女

の二つなく思ほして三所(一)の君も近うさふらひ給ふ。同じ人の女(二)なり。この御中ども疎なるにもあらず。如何、命をかけ(三)給へるやうなり。この太政大臣君この子ども

の母(四)まかり隠れて後、この女御のはらから(五)から持たまひて、又一日一夜別の所をなむ知り給はず(六)侍るなる。その母に、子四人侍るなり。又この大納言の朝臣は、その妹の八(七)にあたるをなむ持て侍るなり。それまた、子二人。又今日(八)明日にて侍り。これ去年の今日、はかなき人(九)に物言ひ觸れて侍りとて、まかり去りて親の許に侍りければ、この幼きを取り持てなむ、せむ方なくもて(一〇)侘び給ひけるが、辛うじて此の頃なむ、あの父など言ひて、わたりて侍るなる。宰相の朝臣のも兼雅(一一)が姉の腹なり。それも子ども侍り。仲忠の朝臣、かの家に侍らねど、あるが中に君にしてもてかしづき侍る人に(一二)つきて侍り。子に(一三)、限なくかなしうする女子(一四)侍り。またも有るやう侍るなり。かくの如、手を組みたるやうにゆき交り、此の中にいさゝか疎ならず、命をかぎりて侍るに、斯かることをなむ相定むると聞き(一五)侍りなば、

〔語釋〕
(一)あて宮腹の三皇子を正頼の預かれるをいふ
(二)忠雅父子仲忠らと正頼の女どもと
(三)誤あらんか
(四)忠俊等の生母、兼雅の先妻
(五)仁壽殿の妹、正頼の六の君
(七)八は七の誤なるべし
(八)當に生れんとする子もあり
(九)忠俊がつまらぬ女に關係したりとて
(一一)兼雅一本「さねまさ」いづれにても解しがたし、宰相清正の妻は正頼の八の君也
(一二)女一宮の夫になれるをいふ
(一四)犬宮
(一五)正頼が聞かば

〔考異〕
(六)給はず侍るなる—給はざなり
(一〇)なくもてわびーなくてもてわび
(一三)子にーこゝにーはらに

もそこにも申さばこそ、さすがに道理失ひ給はず、賢しくおはする人(一)なれば、心には、あかず悲し(二)とおぼすとも、世を保たむと思ほす御心(三)あらば、ゆるし給ふやうもあらめ。おのれ一人「斯うなむ思ふ」とは申さじ」おとゞ、忠雅「忠雅は、承らず侍りぬべし。公卿大臣さだめ申し侍りなむ。大臣(四)は御女のことなれば、こゝ(五)にこそは、まづかゝる事はしも依りなむ。如何なるべき事ぞ。男ども」と宣へば宰相、大納言、忠俊清正「さらに知り給はぬ事なり。上(六)の定めさせ給はむまゝにこそ従ひ侍らめ」おとゞ、忠雅「さらば、大臣(七)は御女又御孫なり。大将は下臈なれど、ゆく末只今、物のかためと侍り給ふ人なり。その妹、甥の上なり。有るべからむごと定め申し給へ。忠雅はそれを承らむ」右のおとゞ、兼雅「いとも尊く、斯く思ほし召させ給ひける。かく(八)仰を承るは嬉しけれど、こゝに五人さふらふ人は四人はみな犬(九)に侍り。兼雅も此(一〇)の朝臣侍れば、思ひ棄つべきにも侍らず。降り居おはしますべき帝の、数多の御子たちの母(一一)にてさふらひ給ふも、世を継ぎ給ふべき君

（語釈）
（一）東宮は
（四）兼雅
（五）兼雅の意見によりて決すべき事なるべし
（六）帝の
（七）兼雅
（九）正頼の味方なり、忠雅父子仲忠いづれも正頼の縁者なるをいふ
（一〇）我子仲忠が仁壽殿腹の女一宮を妻にし居られば

（考異）
（二）悲しと—悲しく
（三）御心あらば—御心のあらば
（八）かく—ナシ
（一一）仁壽殿もあて宮も正頼の娘なり

思ひの外に夢のごとし給べるに、斯かる折に、これを坊に(一)はすゑむとなむ思ふ。女はよになき物にもあらず、此の御身のすぢを思ほし捨て(二)で、來し方行くさき、又此筋の恥(三)とあるをば、何事をもとゞめ給へ」と聞え給へば、太政大臣、とみに(四)物も宣はず、しばし思ほしためらひて、忠雅「忠雅らは、ともかくもいかでか(五)申さむ。臣下といふものは君の若くおはします、御心の疎におはします時こそ(六)侍れ、斯く明王のことおはします世には、何事をかは定め申さむ。たゞ「そこの(七)(八)御心にかくなむと思す。如何」と聞え給はむに、御心にさだめさせ給ひて、これをと思さば何の疑か侍らむ」中宮、「それは、然ばかり、此の頃里(九)なりとてだに、戀ひ悲しび、物もまゐらず、影のごとなり給はむ人(一〇)は、まいてかけても聞き(一一)給ひなば、徒ら人になり給ひなむものを。他の國にも、大臣公卿定めてこそは、よろづの事をもしけれ。これかれ心を一つにて、この事を、「斯くなむ有るべき。この筋のむげに無くばこそ、他筋のまじらめ。かく然る(一二)べき人を措きては、いかでか」と己等

〔語釋〕
(七)后の御意見を帝に申上げられて帝が決定せられなばそれにて宜しかるべし
(九)あて宮が退出し居れりとて
(一〇)東宮
(一一)梨壺腹の御子を東宮に立つると聞かれなば
(一二)梨壺腹の王子

〔異考〕
(一)坊には—「は」ナシ
(二)捨てで—捨てつゝ
(三)恥とあるをば何事をも—恥となる大いなる事を
(四)とみに—とばかり
(五)いかでか—いかでか申さむ—いかでか何をか申さむ
(六)時こそ—時にこそ
(八)そこの御心に—みこのとみに

〔語釋〕
（三）帝の
（四）百㐧の首班は其方なり
（六）正頼方は
（七）大臣は正頼のみ
（八）季明は薨去したり
（一〇）東宮に忠雅兼雅らが女を奉りし時は其等の中には皇太子を生む人あるべしと思ひしに
（一一）あて宮をいふ
（一四）「あめれと」歟

〔考異〕
（一）人みな—人をみな
（二）斯くし來る—かくしつる
（五）やんごと—やうごと
（九）臣の物し給はずなりぬ—おとゞに物し給へ
（一二）すゞろなる—心のまゝなる
（一三）になく—二つなく

ざさらば、仰せごと侍るにさふらはむ」と聞え給ふ。その夜になりて、皆參り給へり。后の宮、御前の人みな（一）立てさせ給ひて、請じ入れ奉り給ひて、太政大臣に聞えさせ給ふ。后「消息に聞えしやうは、昔よりこの筋に斯くし來る（二）事の今違ひて、行末まで絶えぬべき事聞えむとてなむ。御國讓の事、この月になりぬるを、宣ふ（三）やうは、「同じ日、東宮も定めさせむ」となむあめる。それを、己等もあるに、一（四）の上にては、そこにこそ物し給へ。又次々斯く（五）やんごとなく物し給ふを、かの筋（六）は、おほいまうちぎみ（七）のみこそは。大臣（八）（九）の物し給はずなりぬ。さてはみな下臈にてのみこそは。この筋にしつる事を、一世の源氏の女、后になり、その御子坊にするゑたる事は無かなるを、などかこれしも然るべき。（一〇）宮に女をこれかれ奉り給ひし時は、この中にさりともとこそ思ひしか。年の越ゆるまでさる事のなきを、思ひ歎きし程に（一一）（一二）すゞろなる人出で來て、（一三）になく時めきて、子をたゞ生みに生めば、これにこそはあめれ（一四）。この筋の絶えぬべき事、くちをしく思ひつるを、此の梨壺、

望せる正頼。（三三）立太子の當日。忠雅召さる。（三四）忠雅密書を正頼に贈る。あて宮腹の御子立太子の吉報。一家のさゞめき。兼雅、仲忠等の態度。（三五）立太子の宣旨。東宮付職員の任命。（三六）后宮、仁壽殿女御の榮華を憤る。出家の望。（三七）六君夫の許に歸る。（三八）嵯峨大后の落膽。（三九）梨壺腹の御子、あて宮腹の第二の御子共に親王になさる。（四〇）今上、あて宮の歸りを促す。（四一）仲忠、あて宮の御方に伺候す。東宮參内の用意。（四二）あて宮、實忠にそゞて君を入内せしめん事を勸む。實正の賛成。（四三）東宮、あて宮參内。行列。仲頼の妻と其の母見物の中にまじりて行列を觀る。（四四）今上、あて宮并に其腹の皇子たちを寵愛せらる。登花殿懷胎。（四五）新年。菅原忠保修理頭に任ぜらる。滋野眞菅父子赦されて召還さる。（四六）女四宮、皇子を産む。（四七）仲忠、母を訪ふ。女二宮の噂。（四八）正頼女二宮女四宮を自邸に迎ふ。祐澄近澄等女二宮を途中に奪はんとして成らず。（四九）五宮、彈正宮に托して文を女二宮に贈る。（五〇）女一宮難産。人々の周章。仲忠の悲痛。正頼の同情。男子を産む。（五一）女二宮の乳母が祐澄の賄を受けて、女一宮の御産の騒ぎに紛れて女二宮を盗ませんとせし噂。（五二）嵯峨院の花の宴。今上、朱雀院以下參會。詩歌。仲忠講師をつとむ。嵯峨大后、今上の女四宮に厚からざるを怨む。

かくて中宮(一)より、太政大臣(二)に、その日の夜うさり、后「聞ゆべき事なむある。大納言(三)、宰相もろ共に忍びてものし給へ。切なること聞えむ」とて奉り給ふ。右の大殿(四)にも、后「大将(五)もろ共にものし給へ」とあり。おとゞたち、「畏まりて承りぬ。(六)い

〔語釋〕
(一)朱雀院の后
(二)忠雅、后の兄弟
(三)忠俊、淸正、共に忠雅の子
(四)兼雅
(五)仲忠

〔考異〕
(六)いざさらば仰せごと侍るにさふらはむと聞え給ふ—今さらに仰せごと承らむと聞え給ひて

●朱雀院の后宮、忠雅兼雅仲忠等を招きて梨壺腹の皇孫を東宮に立てんことを謀る。忠雅等之に與かる事を辭す

國讓（下）

梗概

㊀朱雀院の后宮、忠雅兼雅仲忠等を招きて梨壺腹の皇孫を東宮に立てんことを謀る。忠雅等之に與かる事を辭す。㊁后宮、東宮に梨壺腹の皇孫を立てんことを勸む。東宮喜ばず。㊂后宮更に兼雅を招きて事を謀る。㊃后宮、立太子の事を帝に迫る。帝故らに決せず。后宮の怨。㊄あて宮歌を以て東宮に立太子の噂につきての不快を漏す。㊅朱雀院讓位。今上の即位。女四宮（承香殿）、季明の女（昭陽殿）、忠雅の女（麗景殿）、あて宮（藤壺）等女御になさる。㊆后宮、忠雅を招く。忠雅來らず。㊇あて宮の姉妹等あて宮の祝に集まる。立太子の噂。忠雅が后腹の女三宮の聟になるべき噂。處々よりの祝の文。㊈后宮使を以て忠雅を招く。忠雅脚氣と稱して行かず。后宮、忠雅の假病を悟る。㊉忠雅歸りて六の君を招く。六の君歸らず。(十一)即位式。忠雅不參。正賴以下昇位。司召。季英以下昇進。(十二)六の君なほ歸らず。仲忠妻を、警戒す。(十三)朱雀院の氣樂なる生活。御子たちを招く。仲忠警戒して女一宮を參らせず。(十四)后宮、兼雅に文を贈りて立太子の事を迫る。(十五)世間の噂。正賴、あて宮の落膽。(十六)仲忠の女一宮に對する辯解。仲忠、水尾に仲賴を訪はんとす。(十七)仲忠、涼、藤英、行政、忠こそ等仲賴を訪ふ。(十八)仲賴の款待。管絃。讀經。贈物。仲忠、仲賴の子どもを世話すべき事を約す。(十九)仲忠、朱雀院に參りて水尾の有樣を奏す。(二十)仲賴、涼に贈られし米、綿などを妻の許に分つ。(廿一)藤英時めく。妻の己に不滿なるを論す。(廿二)立太子の期近づく。絕

しるしばかり聞え給へ。これが徒らになりなば、いと悲しう」など集まりて申す。君、あて宮「御返聞えずとて、御使を罪し給はゞ、わが爲にぞあらむ。罪し給はずば悅と思はむ。(一)さばかりだに仰せられたらば、これに勝りたらむしきにも申しなし(二)てむ」と宣へば藏人、「いかゞし侍らむ。やがて參らずや侍るべき。參りてかゝる由をや啓し侍るべき」上、あて宮「たゞ參りて、「御返事も聞えず」と乳母たちして申させよ」と宣へば、泣く〳〵參りて、然啓せさす。宮、これは、(三)乳母子とて、いとらうたくするものぞ。これを解き棄てたらば、(四)これが事言ひに、文はおこせてむ、と思ほして、勘事にすゑ給ひつ。かくて、日頃待ちおはしませど、殿の君だちの參り給ふに、是にやとおもほせど、御消息も聞え給はず。(五)いみじう恐ろしき人の心かな。何により、斯く深く怨ずらむ。人々(六)まうのぼらす(七)とにやあらむ、と思し給ふ。殘は次々にあるべしとぞ。

〔語釋〕
(二)「しきじにも」か、職事は藏人の中の事務にて殊に權力あるもの
(三)これはたは乳母子なればとて宮が特に大事がり居る事故
(四)免官せば
(五)東宮の心

〔考異〕
(一)思はむさばかり―思はむと同じ樣のことかゝせ給へり藤壺さらば今日はさもやと御心うるばかり御返事きこえじさばかり
(六)人々―今は
(七)のぼらす―のぼらず

〔考異〕
（一）かくて…御文も侍るとて奉る―ナシ
（二）「心憂かるめれば」歟
（三）出勤をとゞめられん

更に参りそ。さふらはせじ」と仰せらるれば、痛うなげきて、持て参りて奉る。（一）かくて例の藏人參れり。「此頃御返事こと少に、御心ゆかぬやうにてあやしきを、參りて御氣色賜はれとてなむ。御文も侍る」とて奉る。見給へば、東宮たびく聞ゆれど、物も宣はせざめれば、いと覺束なくてなむ。人のあやしがり騷ぐなむ聞きにくく、聞えじと思へども、然てのみは有るまじければ、とて、

もろ共にありてぞ夜々も惜まれしかくてはなぞやつゆの命も

いでや小き人々數多あめれば、そこの御爲にこそ、命もさらぬ事も、いかでかは。心憂からめれば、（二）世に在らまほしくもあらず。

など有り。見給ひて、例の物も宣はず。藏人、「御返持て參らずば、（三）簡削らむ」と仰せられつるものを、御德に、勞りなさせ給へ。とゞめられ侍りなば、いと効なく」など申す。孫王の君をはじめて、兵衞、「あこきを顧みさせ給ふと思はして、

〔語釈〕
(一)君が來ぬ間にの意歟
(二)讓位の事近くなりたるをいふ
(要)東宮よりあて宮へ消息。東宮、あて宮の返事なきを怪む。
(三)「これはた」なるべし
(四)前の如く矢張あて宮の御返事なくば再び歸り來るな

給ふ。

かくて、小野へ物せむと思ほす。北の方、同じ裝束いと淸らにして奉れ給ふとて、

實忠妻 君にとてぬひし衣もこぬほどに涙のいろに濃くぞなりぬる(一)

御返し、

實忠 涙にし濡れけるきぬの黑ければなほ墨染といかゞ思はぬ

とてあからさまに小野へおはしぬ。

かくて東宮は、藤壺の參り給はず、御返きこえ給はぬをおもほし嘆きて、院の御方、梨壺なども久しうなむまうのぼらせ給はず、御局へもわたらせ給はず、つれづれと物も聞食さず、日に隨ひて、御氣色あしうなりおはしませば、內裏にも、朱雀「折しまれ、(二)かゝる頃しも惱み給ふなる事」と聞え給へば后宮、「何か。ことなる事にもあらじ。暑氣などにや。さては、漫なることを思すにこそあらめ」など聞え給ふ。(三)これかたの藏人召して、御文賜ひて、東宮「これ、(四)前々のやうにならば、

中納言見給ひて、實忠「あな忝や。わづらはしく御志あるを、杤え給へる」とて奉り給ひつ。御返事は、

實忠妻何事か、怪しうなむ。とて、(一)この海松は、

伊勢の蜑もみるめをかくしかづきせばうきに心はしづまざらまし

燒米は、大かみにこそはなむ。(二)さてもやまとのには見え侍らずなむ。あなかしこ。いととくやうせ(三)給へ。

と書かせ給ひて、御使に祿賜ひて、奉れ給ひつ。(四)かくて、夜々なほまうで給ふ。姫君に、實忠「今は御服ぬぎ給ひてよ。明日なむよき日」と申し給へば、そて君「人の脱がせ給はむ時にこそ」と母君は宣ふ」と申し給へば、實忠「益なき事。かたの如くにて、親ありとならば」とて御車ども、御前など(五)して、脱がせ奉り給ふ。歸りおはしたるを見給へば、濃き御衣、小袿など著給へる御容貌、いと淸らなり。藤壺のやうなる人の、氣少し劣りたるなり。父君、いとよき御女なりと見

〔語釋〕

(一)「とて」は「さて」なるべし

(二)誤なるべし

(三)「やうせ」は「やかせ」歟

(五)「などして」の下脱文なるべし

〔考異〕

(四)給ひつ—給ふ

餘所なれどなほ夕暮はたのまれきかはるを見つる今ぞかなしき

心細くなむ

とて奉り給ふ。

かくて夜さりつ方、此方にわたり給へるほどに、左大殿より、よき蜜、(二)瓜、燒米、生海松、水茨など奉(一)れ給へり。北の方の御許に御文あり、

正賴 一日參りたりしかど、出で立ちたりしなどありしかば、煩はしさになむ、急ぎ。さてみるはた人(三)の許にとて、

わだつうみの底に入りてぞ求めつるものと見るめをかづき來ぬらむ(四)

とく見習し給へ(五)。燒米は、嫗の齒は立たで、嚙み殘したる。若人の御許に。

とあり。取り寄せて見給へば、いとよき瓜、よき水茨、折櫃に積みて、大なる甕に、「おひ姫君なむ御覽ぜよ」とかきつけたり。あけて見給へば、銀の甕どもに、練りたるきぬ、唐綾など入れて、絲を輪にまげて、組みて、沈の枌につけたり。

〔語釋〕
(一)實忠が妻の方にゆき居る時に

正賴 食物を實忠に贈る。實忠小野に歸る。

〔考異〕
(二)瓜—栗
(三)人の許にとて—ナシ
(四)來ぬらむ—ゐぬらむ
(五)給へ—給へや

〈語釈〉
（二）「あなたのかたまはりて見む」歟

〈考異〉
（一）民部卿の物し給へり—民部卿ものし給ふ—民部卿ものし給ふ
（三）昔のみ—「み」ナシ
（四）給ふるも—給ふるに

ば、民部卿（一）の物し給へり。北の方斯くこれかれ物し給ふに、物いはずと見給ふらむ、と思せば、取りて見給ふに、民部卿 實正「あなたのかたさま見む」（二）と宣へば、姫君、そて君「かしこに立ち給へる、「人に見すな」との給へるを」 實正「いかゞ思すらむと、いとゆかしく思ひ給ふるに」とて取りて見給へば、

實忠 いと哀に、昔の（三）みおぼえしかば、萬聞えむとせしを、山籠の心なきやうにやとつゝましくて、

逢ひも見でふる年月はなになれや暮がたくのみ見ゆるあきの日

暮にだに、心静にもがな。忍びて、こなたにもやがて。

とあり。民部卿、實正「さればこそ。悪くやはたばかり聞えたる。はやく御返事聞え給へ」と宣へば、實忠妻「何か」とて書き給はねば、姫君、

思ほし出づるなるは、近かりし昔の効にや、と思う（四）給ふるも、げに如何にとなむ。いでや、

給へしかど、母君制し給ひしかば、出でて、聞召しもやするとて、よろづの事を聞えしかど、知しめさずなりにしかば、いとこそ悲しく侍りしか」と聞え給へば、心あやまりこそしたりけれと思して物も宣はず。

かくなどぞもてなして、隔て給へど、北の方には、人の寝靜まりたる夜々、中戸より窃に入りて、時々物など聞え給へど、(二)ゆめ人には知られ給はず。みそか人のやうにてぞ聞え給ふ。實忠「年頃、心變りてあるやうなりつれど、御もとより出でて、他人を目に近くだにぞ見ざりつる。この西の院に有りし時、物聞えし人の(一)御許なりし、兵衛といひしになむ、物聞え(三)つがせしこと、ゆめ戯れ事も言はずなりにき。此頃ばかりぞ、斯くてありつる。(四)容貌ことなる頃しも、人に物聞ゆるやうなれば、なほ斯くてはあらむ」とて出で給ひぬ。

晝つ方、御文かきて、中戸のもとにて、姫君を招き寄せて、實忠「これ、母君に奉り給ひて、(五)御返取りてを」と宣へば、持ておはして、然らぬやうにて奉り給へ

（語釋）
（一）あて宮の
（三）「つがせしかどゆめ」歟
（四）出家して後女に近づく樣に見ゆる故矢張今迄通りにして居らん

（考異）
（二）ゆめ人にはーゆめも人には
（五）御返ー御返事

㊅實忠夫婦の情舊に復す。實正、實忠の文を見て其の情を悟る。

〔語釋〕
(一)仲忠をいふ
(五)我が志賀にかくれ家を尋ねし時なぜ名乘りてはくれざりしぞ

〔考異〕
(二)給ひつる—給へる
(三)にてぞありしそれは—にぞありしこれは
(四)思う給へつゝ—覺え給ひつゝ
(六)そで君—ナシ

中納言いと花やかにもてなされて、かくてもつきなからずや、山里につれ〴〵と、男どもをのみ使ひておはせしよりは、と思ほさるれど、なほ世の人の心をつゝみて、北の方には物も聞え給はず。塗籠はなくて、中戸をたてて、東の方には北の方、西には中納言と、いと疎々しうて、女も召使ひ給はず、使ひつけ(一)給ひつる男を召し使ひ給ひつゝおはす。時々、姫君のみ呼びわたし給ひつゝ、物語し給ふ。實忠「年頃は、何事かし給ひつる。一日(二)こゝに物し給へりしは、かの山里におはせし人ぞかし。そのかみは中將にて(三)ぞありし。それは、萬の事する中に、琴の上手ぞ。それこそ、紅葉見るとてありし。そこにや有りけむ、琴彈きしを、「よくなりぬべき琴かな」と宣ひしが、その後はよくなりにたりや」そで君「年頃は、夜晝、こひしく悲しくのみ思(四)う給へつゝ、世にえ侍るまじくのみ思えしかば、「かくてもえ對面すまじきにや」と嘆かれて、萬の事もかひなく、徒然となむながめ侍る」君、實忠「などか(五)、まうでたりしには、こゝには「我ぞ」とは宣はざりし」(六)そで君、「さ思う

はと聞えさせしかば、一日、あからさま(一)と思う給へてまうで來しを、思の外なる事ども侍りてなむ(二)、自ら聞召すらむ。

故郷にありとは人に知られど涙にのみぞ浮寐せらるゝ

(三)いつしか内裏にも。さらば時々、と宣はせしかばなむ、今日までもかく近き程に侍るを、ありしやうなる折もいかでかとなむ。參らせ給ひなば何時を何時とか。

(四)は聞え給へり。御かへり、

あて宮日頃は、ちかく物し給ふと承りつれば、(五)おひなをりをもとなむ。時々と聞えし事は、なほ然てのみ(六)おはせば然る折も有りなむ。とみに參るまじくなむ。

そこにかくありと聞ゆる今よりぞ言ひてしことも思ひ知らるゝ

と聞え給ふ。

〔語釋〕
(三)其内定めし内裏へ歸り給ふべし
(四)「は」は「と」の誤なるべし
(五)「生ひ直り」の意歟

〔考異〕
(一)あからさまとーあからさきにと
(二)なむーナシ
(六)おはせば然るーおはする

正頼「鳥の居るおなじとぐらはとひしかど古集を見てぞとめずなりにし」

とて奉り給へば中納言、何事ならむ、かたはらいたし、と思す。かくて民部卿、凶事の處(一)なれば、かづけ物はせで、御供の人々に腰插などし給ふ。おとゞかへり給ふとて、正頼「かくてのみを、今は物し給へ。さておはせば、かう近き程なるを、さし歩みつゝ參り來む」とておはしぬ。

かくて十日ばかり有りて、民部卿なむ、夜は殿へ(二)おはし、晝はこゝにのみおはす。中納言は藤壺いかに聞き給ふらむと、しづ心なく思ほして、下の殿へ還りなむとおほせど、晝は萬の人々參りて、故殿の人々もなづき奉りなどし給ひ、仕うまつる受領なども、まめやかなる物、菓物など奉れば、時の所のやうなり。藤壺に御文奉れ給ふ。

實忠御消息聞えたりしすなはち(三)、遠くまかりて、山里制せさせ給ひしかば、時々

〔語釋〕
(二)自邸へかへり

㊄實忠、あて宮と文を贈答す。

〔考異〕
(一)處—頃
(三)すなはち—のち

實頼 昔のもいまのも雲ははれぬらむ契りし宿にありと見つれば

左衞門督、

忠澄 雲よりも(一)おのが山々年へつる君をばたれか嘆かざるべき

宰相中將、

祐澄 山里に行きつゝ見ればうちながめひとり經しこそ哀なりしか

民部卿、實正「生憎や。同じ心に」と宣へば、「いらへするはと仰せられつれば」(二)など御酒度々きこしめす。御物語など久しくし給ひて、(三)新宰相の君して、内に御消息(四)聞え給ふ、實頼「いと嬉しくて物し給ひけるを、喜び聞えさせに。いまだに隔て聞えず承らむなどやうにてかへらせ給ふ」と聞え給へれば、北の方、土器にかく書きて、瓶子もたせて奉り給ふ。

實忠妻 巣立つ子とまだ知らざりし雛鳥の枝はいづれぞ知らず顔にも

とあり。おとゞ見給ひて、正頼「げにいと理や。されど、

〔語釈〕
(一)實忠が妻と別居したるをいふ
(二)「などとて」なるべし
(三)正頼が實頼を以て實忠の妻に言傳する也

〔考異〕
(四)聞え給ふ―ナシ

を、いと暑く侍りてなむ。いと嬉しく、思ふやうにておはするを、限なく悦び聞ゆるを」民部卿、實正「あからさまに、妹とぶらひに物し給へりしを、言ひとゞめて侍るなり。なほ山里になむ、いと忘れ難げに」おとゞ、正頼「御心と、かくて物し給ふにあらずやはとて、かねてまうでけるよろこびにこそ、祈などする時さいはひといふ事あるは」とてみな笑ひ給ふほどに、内裏より、精進の御肴して、心ことにいと淸らにて、御酒まゐり給ふ。中納言に土器さし給ふとて、

正頼　忘るなと契りおきけむたらちねも笑みて見るらむ雲の上にて

中納言、賜はりて、

實忠　契りけむ雲非をかつは忘るれば空にて君が見るをしぞ思ふ

民部卿、

實正　おひのぼる雲も知るらむ山里にたづねいでつゝ契るこゝろを

宰相、

〔語釋〕
（一）誤脱あるべし

〔考異〕
（一）言ひ―ナレ
（三）空にて―空にし―こゝろにて
（四）こゝろを―こゝろは

しげなるに物し給ひて、仲忠「こゝに斯うて物し給ふと、只今なむ承る。年頃、おはする所にまゐり來むと思ひ給ふれど、とかく參らでなむ。然るは、かの見付けし山里（一）にも、いかでもろ共にとぞ思ひ給へるや。かの人は、おはしてとひ給ひきや。誰とは聞き給ひつるや」と宣へば中納言、實忠「年頃は、尋ねとはせ給ふとこそ、深き山人には」と申し給ふ。北の方、姫君などは見給ひて、かの山里に物し給ひし人にこそはあめれ。見しよりも、いと宿德に淸げにもなりにたるかな、誰ならむ、と見給ふ。かくて物語などし給ひてかへり給ひぬ。

かゝる程に左のおとゞ、君だちに、正頼「新中納言もとの御妻（二）にかへり給ひて、このたゞ東に物し給ふなるを、訪らひに物せむ。故殿「徒らになすな」と宣ひしものを、かく世づきて物し給ふなる悅申さむ」と宣ひて、左衞門督（三）、宰相中將などしておはしたり。民部卿、おどろきて、三所（四）ながら出でて御迎して入り給ひぬ。おとゞ、正頼「かくて物し給ふとなむ、一日承りし。すなはちと思ひ（五）給へし

〔語釋〕
（一）實忠の妻のかくれすみし志賀の山本
（三）忠澄祐澄
（四）實正實頼實忠
〔考異〕
（二）もとの御妻—本妻
（五）思ひ—思う

(語釋)
(一)舊妻を
(二)不詳、一本「さえ」を「さい」とかけり
(三)實忠が自分の住居の方へ
(四)「物し給はずば」にて自分たちがついて居ればば實忠が小野へ歸るかも知れぬとての意なるべし
(五)實忠の處につききりにして

(梗)仲忠、實忠を訪ふ。正頼、實忠を訪ふ。

りつる、わがことにやと思ひ知られて、いかで訪らひ聞えむと思ひつれど、それにつけても、思ほすことやあらむ、とてなむ」中納言、實忠「何かは、今までは。暫しこそ、人を(一)憎しとは思ひしか」などおほく御物語、年頃ありつる事など、かたみに聞え給ふ。中納言、實忠「いとよかめり、かくて物し給へば。こゝにはさえ(二)ついつけても、そへて物し給へば、煩はしうて、來るをりあらば、親同胞のごと語らひきにたれば、恐ろしとこそ思さるらめ」など夜更くるまで聞え給ふほどに、夜さりの御臺參り物など聞食して、おほん方(三)にわたり給ひぬ。

かくて御同胞の君だちは、物し給はず(四)小野へや歸り給ふとて、北の方たちの御許に、「かゝる事のあればなむ」とて、夜も晝も物し(五)給ひて、人々の參る物なども、皆「持てまうで來」と宣ひて、内にも奉れ給ひ、此方にも取り散らし給ひつゝ、人にも賜ひなどして、物し給ふほどに、皆見かたらひ給ふ人は、上達部も、殿上人も、めづらしがり悦び、あるは興ある物など奉れ給ふ。右大將殿も夕暮のすゞ

は變り給へることもなく、(一)たゞ哀なる人のみなむ」とて扇に書きつけて奉り給ふ。

實忠 雲井よりかへりてみれば故郷のいま雛鶴ぞまち見ざりける

とて奉り(二)給つれば、北の方泣く〳〵、

實忠妻 むかし見しやどもの山に荒れましてかへらぬ鶴をまつも枯れぬる

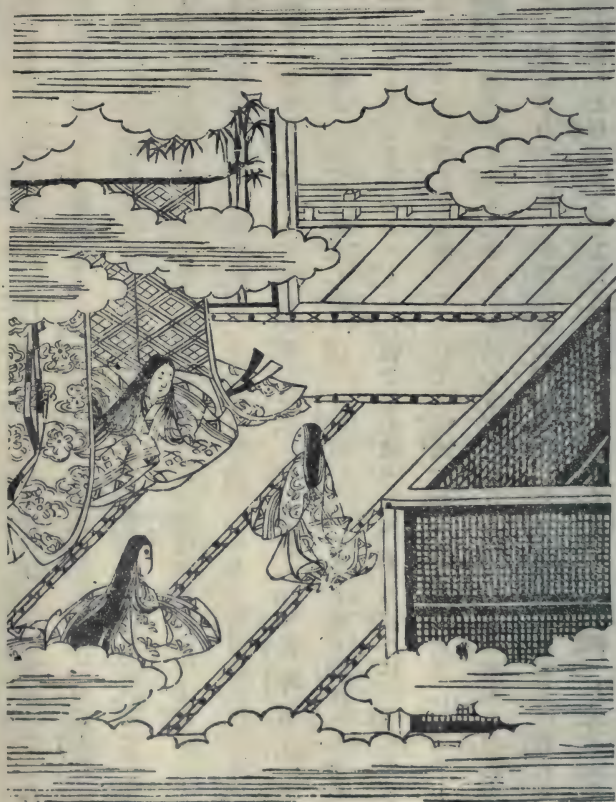
と宣ふをいと哀と思して、實忠「まめやかには、昔怪しきそゞろ心のつきて、あくがれ(三)そめにし心地の、鎭まらざりしかば、世にもあらじと思ひて、あやしき山里に籠り侍りて、親の御許にもまうでざりき。(四)唯此の折にぞ、まうでて見奉りし。其處にてなむ、(五)こゝには平かにおはしますなど(六)聞きし。すなはち(七)思ひになりにしかば、今まで。すなはち聞えむとせしかど、心ふかき所つき給へりしかば、(八)如何にぞ思ひつゝみてなむ」北の方、實忠妻「年頃は、いと哀と物おぼして居給ふ、と承

〔語釋〕
(一)まさご君の亡くなりたるをいふなるべし
(二)「給へれば」歟
(四)季明薨去の時をいふなるべし
(五)北方の無事なる由を聞きたり
(七)父の喪中になりし故

〔考異〕
(三)そめにし心地の—そめにしをなほ心地の
(六)聞きし—きこえし
(八)如何にぞ—いかにぞ

(語釋)
(一)實忠
(二)我があはゞ實忠は彌出家の志を堅くすべし
(三)「聞え給ふめりしだに」なるべし
(六)「見たてまつれど」歟、我は昔とかはりはてたる様にて其方に對面すれど」の意なるべし、一本「見たまへれど」

(考異)
(四)几帳を―「を」ナシ
(五)にも―「も」ナシ

しもあらず。この君の、世に惜まれて徒らになり給へば、とざまかうざまにたばかり聞ゆるなり。(一)早おはして、何心なく語らひ聞え給へ。おぼろけに思ひてやは斯う聞ゆる」と申し給へば、實忠妻「いでや。(二)こゝに對面せむにぞ、いとゞ、鷲の山にも思ひ入り給はむ」民部卿、實正「おなじうは、懸てふ山には」と聞ゆるを北の方うち笑ひて、實忠妻「年頃の住居こそさやうには。いでや、今さらには、と思ひ給ふれど、かく宣へば」とて薄鈍の單がさね、黑つるばみの小袿奉りて、まうで給ふ。几帳おし出でて對面し給へば、中納言、實忠「むかし恥ぢ聞え(三)しなめりしにだに、然もあらざめるを」とて几帳を(四)おし遣りて見奉り給へば、昔にも(五)ことに劣り給はず、仁壽殿の女御のやうにて、面瘦せ給へるしも、あてに兒めきたり。中納言、實忠「あな珍らしや。いと久しうなりにけるかな。あさましう、あり所も知らせ給はざりつれば、年頃山里のつれづれ、春秋の夜寒などには、常に思ひ出でられ給へど尋ね聞えむ方なくて、ありし人にしもあらで見(六)給へれども、そこに

〔語釋〕
(一)誤あるべし
(二)あれがそて君母子のかくれがなりしと
(三)實正の
(五)父季明が
(七)實忠が
〔考異〕
(四)いで何かは―いかで何か
(六)をも―ナシ

へば、實忠「なほ年頃有り經つらむ物語をこそせめ」など宣へば、そて君「年頃、戀しくかなしくのみおぼえ給ひつるを、辛うじて、對面賜はりたれば、夢の心地して」など聞え給へば、實忠「世の中にえ久しかるまじき心地のせしかば、法師にもなりなむと思ひて、山里に、年頃は」そて君「民部卿(一)かなたに物し給ふ所にて、尋ね聞えむばかりなかりしかば、折節に思ひ出でつゝ、いかでとのみ思ひながら、年頃え」など聞え給へば、實忠「紅葉見むとて、知らぬ人ものせし時に、まうでたりし所なむ、其處(二)と、殿かくれ給ひし程に、卿(三)の君の宣ふになむ然なりとは知りにき。いと里離れては有りけむ」など多くの御物語し給ひて、實忠「母君は何方にぞ。物聞えむ、と聞え給へ」と聞え給へば姫君悦びて、北面におはする所にまうで給ひて、聞え給へは、北の方、實忠妻「いで、(四)何かは」と聞え給へば民部卿、實正「かげのごと添ひてと宣ふ(五)をも(六)、斯う宣ふ(七)をも聞き給ひて、吾が佛、など斯うは宣ふぞ。消息し給はずとも、まうでて對面し給へ、とこそは思ひつれ。御上を思ひ聞ゆるに

て同じき同胞と聞ゆとも、親君と仕うまつらむ」とて二所ながらこゝに物し給ひかしづき仕うまつり給ひつゝ、二三日經給へど、北の方にも姫君にも、まだ物聞え給はず。

かゝる事を、內裏にも東宮にも聞召して、「らうたく、徒らになりぬと聞きつるを、今は宮仕せむと思ふにやあらむ」と宣ふ。左のおとゞ、いみじう悅び給ふ、年頃も聞えつるを、わが逢ひて、さて物せよと言ひしかばにやあらむ、と思ほす。

中納言、世の人、藤壺なども心ならずや思ほすらむと思して、四日ばかりありて夕さりつ方、此方にわたり給ひて、姫君に聞え給ふ、實忠「いと珍らしく對面したりしかど、見奉りしにも、己が心からとは言ひながら、よろづの事哀に覺えしかば、まめやかにと思ひてなむ。年頃、いかでか今更にはと、哀にかく物しにければ、それも心憂くおぼえて、此のわたりには、思ひ出でられむによりてなむ。多くはえ」など聞え給ふ。姫君、ともかくも物も宣はで、たゞつくづくと泣き給

〔語釋〕
(一)兄弟なれども實忠を親の如く君の如くにして仕ふべし
㊇實忠舊妻に逢ひて昔を語る
(二)實正實賴
(三)舊妻の方に
(四)思出したらば又も來べけれど度々は來らじとの意歟

になりて、若人にてはありける。童ばかりぞ知らぬはある。かくて物參り、御酒など參りて、山里よりわたり給ひし日、しつらひ置かれたる御方に、「彼方に入らせ給ひて、いと暑きに、休ませ給へ」と聞え給ひて、(一)入れ奉り給ふ。昔持てつかひ給ひし調度、いさゝかに手習し給ひし反故など、とり散し給ひなどして居給ひしまゝに、他御調度の淸らなる、あまた添はりたれば、無き物なくしつらひ置かれたり。中納言、(二)なほ有りがたき心ばへありかし、親もなくて、我をのみ頼みたりし人の、子ども持たりしを見棄てて年頃有りつるに、かく一つも失はで有りける、など見給ふ。こなたにも、むかし見給ひし人々の參りて、御衣とり懸け、(三)御うちはなど參れば、たゞ昔の樣なり。民部卿は、女に聟取したらむやうに、居立ちて、殿へも物し給はで、たゞ此の君の事をいそぎ給ふ。新宰相も、いそぎ參り給ひて、實賴「實賴は、(四)殿かくれ給ひてのち、夜晝かなしき事を思ひ給へ嘆きつるに、今日なむ、その心も忘れて、嬉しう思ひ給ふる。なほ斯くて經給はゞ、すべ

(語釋)
(一)實忠を
(二)實忠が心に舊妻を評する也
(四)父季明

(考異)
(三)御うちは—御うちき

給へ」と聞え給ふ。實忠「年頃見ざりつるほどに、大人にこそは」と宣ふまゝに泣き給ふ。昔の人々あつまりて泣く。(一)まさご君の御乳母の前なるを見給ひても、中納言いみじく泣き給ふ。さても怪しう、心にもあらで來たるかなと思ひ(二)給へり。民部卿、實正「故殿のおはしましゝ時こそ、女親のごと、折々の御すまし(三)の事なども、御口入れ給ひしかど、今は女同胞とておはするは、さやうに心しらひても物し給はず。實正らが如きは、自らの事にもかなふ人し侍らねば、志は有りながら、えおほしき様にも仕うまつらじ。かく世中をおほし離れにためれば、母君は、よ(五)じな知り(四)給ひそ、この(六)君を御後見にて、よろづの事さやうに思ほして物し給へ」など聞え給ひて、御供の人々、所々にすゑさせ給ひて、もの賜はせなどして、實正「遠くよりおはしましつるまゝにて、率て奉るなり。物まゐれ」と宣へば、黒き御臺一よろひ、精進の物、いと淸らにして物まゐる。(七)仕うまつる人は、そで君、まさご君の御乳母、(八)おとなひにたれど、かたち宿德にてあり。童なりし人ぞ、大人

〔語釋〕
(一)實忠が
(三)洗濯
(四)實忠の世話を思ふ樣にすること能はじ
(五)舊事には構はずともよし
(六)袖君
(八)「もとろへにたれど」歟

〔考異〕
(一)まさご君の—またまさご君の
(七)物參る仕うまつる人は—物參り仕うまつり人は

中納言いと怪しく、睦ましと言ひながら、つれなくても居給へるかな。これは、藤壺の御姉(一)なれば、かく良きぞ、と見居給へり。姫君(二)は、とまれかうまれ、わが親に見え奉らむ、親の御顔見むと思ほして、伯父おとゞ(三)見給ふを物にも思ほしたらで、さし向ひて居給へり。中納言は、容貌(四)のいと(五)美しげなる、まほらへ(六)て居給へり。女君(七)は、見や知り給ふと恥ぢたれど、物も宣はず。姫君、父君のえ見知り給はぬをいとかなしと思ほして、え念じ給はで、つぶ〳〵と泣き給ふを、民部卿、いと哀と見給ひて、實正「思ほし出でずや」と聞え給へば中納言いとまめにて、物も宣はず。民部卿、實正「この君を、いとあさましく、斯くなり給ふまで見奉り給はねば、思ひわびて、かくおはしまさせつるなり。今、(八)斯くておはしませ。世の人のあらぬやうにては、え長くは物し給はじと(九)。御髮も、斯くぞなりたる」とてかき出でて見せ奉り給ひて、實正「今一所(一〇)も、かく此處になむ。天下に外に(一一)もとめ給ふとも、勝る人(一二)しもえ侍らじ。實正らを人と思すものならば、なほかくて物し

〔語釋〕
(一)袖君を實正の妻と思ひ違へたる也、實正の妻はあて宮の姉三の君
(二)袖君
(四)袖君の
(六)見つめて
(七)實忠妻は實忠が娘を見知れるならんかと恥かしく思ひたれど實忠は氣付かずして詞もかけず
(八)「今は斯くて」歟
(九)「と」衍文なるべし
(一〇)實忠妻
(一二)舊妻に

〔考異〕
(三)見給ふを—見給ふをも
(五)いと—ナシ
(一一)外に—よに

はせば、御迎にまうでむとなむ。こゝはいとかく便なきを、日頃侍る所に物のさと（一）しなどせしかば、さいつ頃（二）二條殿になむまかり渡りて侍るに、其處におはして、聞えしやうに、（三）内に入りておはしませ」と聞え給へば中納言、實忠「何か。こゝにもしばしは物せむ。尋ねむと宣ひし（四）人は如何は」と聞え給へば、實正「（五）いと暑く侍りつれば、程遠くては物せず。今少し涼しくなりなむ時」などつれなく聞え給ひて、「なほいざ給へ」とて一つ車にておはす。（六）下りてもろ共に入りおはするを、（七）北の方など見給ひて、おどろきて、御几帳立て直しなどす。まづ民部卿入り給ひて、實正「あな見苦し。こは何ぞ」とて御簾あげ給ひつ。あるじだちつい居給ひて、實正「なほ、こゝには恥ぢ奉る人もなし」と聞え給へど、（八）つゝみてえ入り給はず。民部卿、實正「なほ入らせ給へ。女だに恥ぢ聞えぬ所に、（九）いとひが〳〵しく」と聞え給ひて御圓座さし出で給へば、いと澁々に入り給ひて、いとまめやかに見給へば、奥のかたに小き几帳立てて、人あり。（一〇）柱のもとに（一一）若き女のいと淸らなる居（一二）たり。

〔語釈〕
（一）凶兆ありし故
（二）三條殿なるべし、實忠の妻子をおきてある處なり
（四）實忠の妻子
（五）わざとまだ迎へ取らぬ樣に僞り言ふ也
（六）三條へ
（七）實忠の妻
（八）實忠が
（一一）袖君なり

〔考異〕
（三）内に入りて―うちいりて
（九）恥ぢ聞えぬ所にいとひが〳〵しく―恥ぢ聞えぬ所にいとひが〳〵しかうて―恥ぢ聞えぬ所にはかひなくとく〳〵
（一〇）柱の―「の」ナシ
（一二）居たり―居給へり

るを、誰々にも聞えまほしけれど、皆こそ思し忘れにたれ」宮、忠康「さらに忘れ聞えず。かくて侍るをば、何の心ありてとか思す」あて宮「いで(一)なほ心憎く(二)ておはしますとこそは」宮、忠康「このあまたし給ふわざ(三)、時々はこゝにもして賜ひつべくはや(四)。斯くてやは」君、あて宮「いと見まほしくて、數多物せらるめるを、何かは」宮、忠康「まめやかには、年頃かくては侍るを、こゝかしこにも物せよ(五)といふ人侍れど、御心のつらかりしにのみ、忘れ難くて、さやうの心も思ほえぬ(六)に、なほ昔の樣にも思ほさで、忍びて知る人にはし給ひなむや」と宣へば、あて宮「あやし。忍びずとも、然て知らぬ人にやは。かく聞え承るも疎からねばこそ」など聞え給ふ程に、左大辨の君、師澄「いと疎々し」とて參り給へば宮、忠康「生憎や。このう(七)るはし者は何しに來るぞ」とて聞えさし給ひつ。

かくて新中納言、實忠「藤壺(八)ものし給ふこと有りしを、かくてあらば物しともぞ思す」とて小野より物し給ひてけり。民部卿、實正「いと嬉しく物し給へり。遲くお

〔語釋〕
(一)「いで」は「いち〱」の誤歟
(三)方々へ遣はさるゝ文をたまには私にも下されたし
(四)「賜ひつべくや」歟、一本「給へつはや」
(五)我を聟にせんといふ人
(七)眞面目男

〔考異〕
(二)心憎くて—「て」ナシ
(六)思はえぬ—おぼえぬ
(八)あて宮が出京を勸めたりしに

㊅實正、實忠を其の舊妻を置ける三條邸に導く。實忠、女を見識らず。そて君の悲嘆。實正、實頼と共に實忠を三條邸に留めんと盡力す。

藏人「梨壺のなむ、坊には居給ふべき、と申しなりにためり。まつりにも、屢〻まうのぼり給ひ、晝はことにわたらせ給はず。日頃はことに御遊もし給はず(一)」と聞ゆれば、ある時は一行二行と聞え給ひ、(二)ある時は聞え給はず。かゝれば、皆人の申す、「あな異樣や。(三)またなき例をもし出で給ふかな。かく侮られ給ふ事(四)」とそしり申す。殿には、(五)大殿の御方にも藤壺の御方にも、今より宮づかさ帯刀など(六)(七)申す人おほかり。(八)若宮の御方には、人々參り込みつゝ、公のやうになりておはしますを、見奉り給ふまゝに、(九)おぼし嘆くこと限なし。(一〇)山々寺々に、修法おこなはせ、神佛に申し給ふ程に、(一一)七月の中の十日になりぬ。

ある夕暮に、彈正宮、(一二)西の對に參り給ひて、御物語きこえ給ふ。忠康「かくて物し給ふ程に、(一三)しば〳〵聞えまほしけれども、物騷がしう物し給ふめれば、いと(一四)おとなしくなりまさり給ふなりし心地も、みづから聞えむとせしを、あえものの程過しつるになむ」御いらへ、あて宮「あえ物は、年隔ててこそは。こゝにも徒然と侍

〔語釋〕
(二)あて宮が御返事を
(三)東宮の御文に對して御返事のなきをいふ
(四)東宮が
(五)正賴
(六)藤壺腹の皇子東宮になり給はゞ私を東宮付の役人又は帯刀にして下されなど
(八)藤壺腹第一の皇子
(九)正賴が
(一二)あて宮の殿
(一四)分別づきて來りし我が了簡をも直接に申上げんと

〔考異〕
(一)誤あるべし

㊆彈正宮あて宮を訪ふ。

(七)宮づかさ帯刀—宮つかさ藏人殿上人帯刀
(一〇)なし—なく
(一一)七月の中の十日に—七月中の十日ほどに
(一三)しば〳〵—志をも

に、祓しに物すなるを、東河の水に近からむあたりに、車立てさせて、鮎などくふべき樣に物せよ(一)と仰せよ。あやしう(二)若き子のやうに、人のするに隨ひたる人なれば、心苦しくなむ」とて出だし立て給ひてかへり給ひぬ。

畫詞　こゝは三條殿。

かくて、藤壺も、辛崎に御祓し給はむとて、大殿(三)ももろ共に、君だちさながら、御供の人々多かり。御車ひきつゞくる程(四)、大宮、「あなたの御車を一つに(五)」と宣へば、藤壺、あて宮「いかでか先」と宣ふほどに、御車ども二方にひき續けて立ちわづらふ。おとゞ、正賴「なほ彼を促せ」とて藤壺の御車を一に立てさせ給へば、みな人々いと(六)哀と思ふべし。辛崎におはしまして、御祓いかめしうし給ひて歸り給ひぬ。大殿もかへり給ひぬ。(七)此方には例の番むすびて、君だち宿直し給ふ。

かくて經給ふほどに、東宮より、おそく參り給ふとて、ある時は哀に心苦しげに、ある時は憎げに怨じ給ふ(八)。ついでに隨ひて御使あり。その御使の藏人の申す樣、

〔語釋〕
(二)女三宮は
(三)正賴
(五)「一つに」は「一に」にてあて宮の車の最先に遣れとの意なるべし、一本「御車をまづひとつに」
(七)あて宮の御殿

〔考異〕
(一)物せよと仰せよ—物せさせ給へ
(四)程—程に
(六)哀と思ふべし—哀に思ひて
(八)給ふ　ついで　に—ついで ナシ

(大)梨壺腹の皇子の東宮に立つべき噂。正賴等の心痛。

は(一)御目にもかけさせ奉りてしがなとぞ思う給へる。まめやかには、宮にわ(二)たらせ給ふなむと聞えさせむ。

と聞えつ。

かくて明けぬれば、一日すゞみ、鮎ひかせなどし給ひて、(三)かくてその日の夕(四)がた歸り給ひぬ。男宮(五)たちは、あるじのおとゞの御馬、鷹など奉り給ふ。女宮たちには、黄金のかうこ(六)(七)の箱に、萬のあり難き物ども入れて、一の宮よりはじめ奉り給ふ。犬宮には(八)箱の小きに、よべの物入れて奉り給ふ。乳母たちには、裝束一くだりづつ賜ふ。御たちの中に鬘(九)の具など出ださる。

かへり給ひて、右のおとゞ梨壺の御はらへに出ださせ給ふ。大(一一)將御車ども五(一二)つばかり出でたて(一〇)奉れ給ふ。宮たち君だちなど參り給ひ、逍遙などをかしくし給ひて、かへり給ひて、二日ばかりありて宮、(一三)東河に車三つばかりして出で給ふ。おとゞは出で給はず。睦ましき人々して出で給ふ。近江守に宣ふ、兼雅「この東河

〔語釋〕
(一)女二宮の
(二)近澄の來り居らるゝ由を女二宮に申上げん
(三)「かくて」衍文歟
(五)「宮たちには」なるべし
(六)皮籠の箱歟
(一〇)兼雅
(一一)仲忠
(一三)女三宮

〔考異〕
(四)夕がた―夕がたに
(七)かうこの―やつこの
(八)には―「は」ナシ
(九)鬘の―鬘物の
(十)梨壺あて宮等處々に祓す
(一二)五つ…逍遙など―五つばかりして奉り給ふ殿の若宮などして出で給ひて逍遙など

〔語釋〕
（四）近澄が私の爲に衣類の世話をなし下さるゝは恐縮なり

〔考異〕
（一）川邊に―なほともに
（二）御返事―御返
（三）如おはしまさひて―ごとくおはしまさいて

えし事、宮にてはいと難かるべき事を、宮たちも御遊せさせ給ふべし、川邊(一)にすゞみ給ふめる宵の間にたばかり給へ。昨日のつとめて、追ひてまうで來て、このわたりになむ、然る心して侍る。さてこれは、いと暑き日なめるを、脱ぎかへ給へ。

とあり。乳母見て、乳母「あな恐ろし。人もこそ氣色見れ」とて、里より洗ひに遣りたりし物持て來しさまにて、いとよう持て隱して御返事、(二)

乳母かしこまりて承りぬ。昨日は、左のおとゞ參り給ひて、いそがし聞え給ひしが、いととく出でものし給ひしなり。宣はせたる事はあな恐ろしや。宮におはします時よりも、宮たち、垣の如(三)おはしまさひて、夜は御めぐりにおはしまさふめれば、これかれだに、え近くも參らずなむ。いと忝く、旅におはしますなるを、はや歸らせ給ひね。人に氣色見えさせ給ふな。さて賜はせたる物は、あな忝や。かく、(四)御櫛匣殿をせさせ給ふなむ。いかでこの御衣

〔考異〕
(一)給ひつるかな—給へるかな
(二)など…出で給ふ—などかくてその日一日すゞみ鮎ひかせ
(三)藏人の少將の君の御許より—藏人の少將の御許より—宰相中將の君の御許より

㊃近澄、女二宮の乳母に消息す。

ひつ。おとゞ御前に人召して、調ぜさせ給ひて、興じてまゐる。藤壺は、鮎ならぬ魚擇りて參り給ふ。

かくて御使參りければ、青き色紙にかきて、桔梗につけたり。見給ひて、女一「いとかしこうも書き給ひつるかな(一)。只さいつ頃こそ、手本召しゝかば、奉れしか。いとよう似させ給へり」と宣へば、右のおとゞ取りて見給ひて、兼雅「なほかしこき君なり」宮、女二「さいつ頃見給へしかば、手をこそならひ居給ひしか」大將、仲忠「かたちもいとをかしげにおはすや。坊にも、內裏の宮、若宮よりは、この君をこそ。いとらう〳〵しく故づきてぞ生ひ出で給ひぬべかめり」など宣ひて、おとゞはかしこに出で給ふ(二)。

日暮るれば鵜飼はせなどし給ふ程に、(三)藏人の少將の君の御許より、二の宮の御乳母の許に、女のよそひ一くだり、白張のひとへがさね包みて、御文あり。

近澄「昨日のつとめて、消息聞えたりしかど、いそぎて出で給ひにければ。かの聞

る魚ども取らせつ。鮎一籠(一)、鯇一籠、いしぶし、小鮒入れさせ、荒卷など添へさせて、藤壺の若宮の御もとに(二)、手づから、わうらひ(三)月日書きて、せむ(四)たてて、御名し給へり。かたはらに、

仲忠「君がためしづけき空にすむ魚をけふより見せむ千世の日ごとに

と書きて、蘇枋籤にして、赤き色紙に書きて、瞿麥の花につけたり。かてう(五)なる人を召して、仲忠「これ、三條の院の南宮に參りて、若宮の御方に持てまゐれ」と宣へり。御使持て參りたれば、若宮見給ひて、若宮「西の對になむ」とて奉れ給へれば、大殿(六)まだおはします(七)。君たち、御方見給ひて、「此方わたり給へ」と聞え給へば、おはしたり。「かく書き給へ」とて、このやうに書かせ給ひてかたはらに、

君がかくとりそめければ山川のあさぢぞおきの上に見えける

敎へつゝ書かせ給へれば、いとをかしげにかき給ふ。御使に祿賜びて、奉れ給

〔語釋〕
(三)往來歟
(四)籤歟
(五)未考、一本「かんてう」
(六)正賴まだ此處にありの意歟

〔考異〕
(一)一籠—ナシ
(二)御もとに—御もとにと
(七)おはします—おはしまさず

〔考異〕
（一）おもーかほ
（二）あそび給ふ夜明けぬればーあそび給ふにあけぬれば
㊂仲忠鮎をあて宮腹の若宮に奉る。若宮の御文を見て仲忠その筆蹟を褒む

俊蔭女木綿かけて禊をしつゝもろともに有明の月を幾夜待たまし宮見給ひて、

女一ながき夜の有明の月も待つべきをみそぎの神やいかゞとぞ思ふ

二の宮、

女二かくしつゝ月をし待たば淺き瀨のみそぎのかみも何か知るべき

姫君、

女四月まつと桂わたりにさ夜ふけてひく琴の音はかみも聞くらむ

とあるをかんのおとゞ、大將に奉り給へば、また取りて、

仲忠かみも聞けおもがはりせず八百萬世々みそぎつゝ思ふどちへむ

とて、人にも見せでさし入れつ。かくて、夜一夜あそび給ふ。夜明けぬれば、御簾の内に入り給ひぬ。

大將、銀の篝四つ、脚つけさせて、鑄物師ども召して作らせ給ひて、跳びあが

〔語釋〕
（一）「侍れば」は「給へば」なるべし
（二）脱文あるべし
（三）脱文あるべし

御床立てて御屏風ども立てたり。そこに、宮三所出で給ふ。かんのおとゞは床もたてて出で給ふ。高欄におしかゝりて御階の前に、おとゞ、宮たち四人、殿々の御たち、こなたかなたに居たり。陰陽頭、御祓ものして、仕うまつる。馬ども木綿つけて引きたり。御衣脱ぎ給ふ。一二の宮、唐綾のかいねり一かさね、姫宮御小袿、かんのおとゞ、白き綠のひとへがさね、男宮たちも脱ぎ給ふ。宮たち、御はらへ仕うまつり侍れば、（一）夜更けぬ。御遊し給ふ。一の宮和琴、二の宮箏の御琴、かんの殿琵琶。宮たちおはすれば、御几帳の後におはす。一の宮、女一「いと暑し。なほ此處にを」と聞え給ひて、御几帳の中におしやりて、（二）女二「いとよう侍る」とて、御床におしかゝりて、琵琶ひき給ふ。し給はぬ、はたまうけ給ふ。大將、仲忠「こゝもとは遠からず」と男たちの御あそばすにも聞え給へば、やがてならひ給ふやうなり。かゝる程に、十九日の月（三）山の端よりわづかに見ゆ。かんのおとゞ、扇に書きて一の宮に奉れ給ふ。

のところは、かのほとり、おとゞより西によりて、屋あるをしたり、そこに氷召せば、小く割りて、蓮の葉につゝみて、樣器にするゑて、近江守もて參りたり。大將とり給ひて參り給へば、少しまゐりて、女二「辛うじてよかりつる心地を、惑はすかな。此處にな來そ。去ね」と宣へば大將笑ひて、仲忠「前には、かくも宣はざりしを、ものの罪などにや」と宣へば內侍のすけ、「度々の事に侍れば、內裏の御方は、大宮の御時にはいといみじくなむ。この御時には、例よりも違はせ給ひもおはしまさゞりき」と聞ゆ。犬宮這ひ出で給ひて、物どもに取りかゝりて、摑み毀し給へば、父君、仲忠「この人こそ、いとまさなけれ。かゝる業は、女はせぬものぞや。男おほかる簾のもとなどに、這ひ出づるものかは」と宣ふ。夜に入りぬれば、燈籠かけつゝ、御殿油まゐりわたしたり。

亥の時に、「御はらへ時なりぬ」と申す。おとゞの壇の上より、水いだして、石だたみのもとまで水せき入れて、瀧おとして、大井川の如く、簀子には、御簾かけ、

でぞあらむ」とつぶやき給ひて、兼雅「これ見給へ」とてさし入れ給ふ。北の方見給ひて、俊蔭女「げにや」と宣ふ。

かくて、御前ごとに物まゐる。御折敷どもして、わざと清らなり。鮎さま〴〵に調ぜさせて、いと多く、御たちの前に、衝重して有り(一)。大將、宮(二)の御許にまうで給ひて、仲忠「物は聞召しつや。何をか參るべき」と聞え給へば内侍のすけ、「物も聞食さず。削り氷をなむ食す」大將、仲忠「あな恐ろしや。いみじく忌むものを」宮、女二「かゝればこそ、いや增りつれ。氷食はでは、いかでかあらむ。さきに、物忌むといひつゝ(三)、食はまほしき物も食はせず」と宣へば、仲忠「あな心憂や。食物むつかりを。醫師侍り。言ひて聞えむ」とて出で給ひ、典藥頭に問ひ給へば、聞ゆ、典藥「めさぬにや。過し給ひぬる時は、あつく冷やかなる物を驚きて御胸やませ給ひ、まだしき時はいとあしき物なり」と申せば大將、仲忠「斯くなむ」と聞え給へば、女二「あな侘しや。いと暑し」と宣へば、仲忠「團扇も參らせむ」と宣ひて頭(四)

〔語釋〕
(二)女一宮
(四)誤あるべし「頭の」一本「かはの」

〔考異〕
(一)してあり―しつゝあり
(三)いひつゝ―いひて

〔語釋〕
(一)中の君をいふ

それにも劣らぬ。犬にと宣ひつる物は、子の德見つやとて、大將ひとり皆食ひつめり。などかまろには賜はぬ。これさへ妬うこそ。とて出だし給へれば、大將かんのおとゞに、仲忠「まうけの物や侍る」と聞え給へば、單がさねのほそなが、小袿、あはせのはかま、具して奉れ給ふ。もて出で給ひて、かづけさせ給ひて奉れ給ひつ。

鮎の御使ども、いとゝく歸り參りて、御消息どもみな聞ゆ。御返事ども有り。中の君は、

中君近くても同じおぼつかなさなれば、御文はさて手づからとぞ。さればこそ年頃は、

わだのはら餘所になりにし魚とりはくもいづる原を誰かあけけむ

取り散らすなどあるは、ひとり言よく。

とあり。おとゞ見給ひて、兼雅「はかなし者は、例の乳母に取らせて、一つも食は

〔語釋〕
(一)誤あるべし。「えひ」又「えい」「えゐ」などとも書けり
(二)我に書けと仰せらるるか

と聞え給へり。彈正宮の、御ときよくえひ給ひて參れり。御覽ずれば、一つには、參る物にはあらで、いと淸らなる、今一つには參る物なり。(一)取りひろげて、宮たちまゐり、遊びなどす。彈正宮、忠康「この御返は聞えさせよとか。さらばいらへ聞えむ」と、いらへ給ふ人のなきに、空答をし給ひつゝ、(二)忠康「さらば」と聞え給へば、一の宮、「あな見苦しや、御使の見るに。賜へ、その御文」と宣へば、なほ聞えとり給ひ、忠康「御心地苦しと宣はす」など宣へば、大將、いとをかしと思して、うちほゝ笑み給へば、忠康「いで宣旨書き奉らむ。見給へ」とて書き給ふ。

女一みづから聞えさせむとすれど、なほまだ筆も取られ侍らねばなむ。日頃は、如何なるにかあらむ、うちはへ惱ましくなむ今朝は、心にもあらぬありきをぞ。御文は朝夕とか。

みそぎせし瀨々の瀧つせ思ひ出でばわがころもでも忘れざらなむ

〔語釋〕

(一)女一宮

(二)「つれば」なるべし

(三)「いでや」歟

(四)今宮

聞え給へば、みな笑ひ給ふ。

かゝる程に、あかき色紙に書きて常夏につけたる御文、持て參りたり。彈正宮、「何處のぞ」と取り給ふ。使「藤壺の御方の、宮(一)の御方に參らせ給ふ」と聞ゆれば、

忠康「我こそは宮」とて見給へば、

あて宮 日頃なやませ給ふと承りつれ、(二)如何にして參り來むと思ひ給へれど、こゝにもまたいと苦しく侍るを思う給へつる程に、いと遠くわたらせ給ひにければ、七瀬の旅にてなむ。(三)とてや、

もろともに朝夕わかず祓せしはやくの瀬々に思ひでらるゝ

忘れがたくのみこそ。

とて端書に、

あて宮 これはなめげなれど、こゝにある人(四)の小き、物食ひはじめけるを、若宮の、犬宮にとて奉れ給ひける。

〔語釋〕
（一）「宿と」歟
（二）「六の宮」歟

兼雅ゆく水とけふみるどちのこの宿（一）にいづれ久しとすみ比べなむ
彈正宮、取り給ひて大將にさし給ふとて、
忠康水のいろは君もろともにすみ來ともわれらはひとの心やはする
大將、
仲忠水はまづすみ替るともまとゐぬる今日のならしはいつか絶ゆべき
とて宮に奉れ給へば、
女一三千世へて澄むなる川の淵は瀬になればぞ人のこゝろをも知る
彈正宮、
（二）
人はいさわが身にかなふ心だに行くさきまでは知られやはする
八の宮、
我らだにむすびおきてば行く水も人のこゝろも何か絶ゆべき
と宣へば大將、仲忠「吾が君、よく宣はせたり。このわたりこそ、あな心憂や」と

〔語釋〕
（一）「大將の御方の惱ましく」歟
（二）「三條の」なるべし、俊蔭女をいふ
（三）甘い言をいふと
〔考異〕
（四）給ひて—「て」ナシ

兼雅まだ大將（一）の惱ましくし給ふに、すゞませ奉るとて物しつればなむ、聞えずなりける。さてこれは、乳母たちの料に。

とて、ことさらに手づからぞ書き給ふ。中の君の御許には、

兼雅日頃はいかでとなむ。近けれど、しば／＼も聞えぬを、今は覺束なき心地なむ。對面久しくなりにけりや。さてこれは、（二）一條の御曹司の、手づから取りて侍りつる。かひなく、例の人々に取り散らさせ給ふな。

君がためあまのがはらに釣すとて月の桂もをりくらしつる

となむ今日は。

とかき給ひ、兼雅「これ見給へ」とてさし入れ給ふ。北の方、俊蔭女「あな言（三）よやと思ふためとか」とてさし出で給へれば、おし巻きて奉れ給ふ。

かくて遊などこれかれし給ひて（四）、日やう／＼夕かげになる程に、主のおとゞ土器取りて、彈正宮に參り給ふとて、

心ときめきなりきや」と宣ふ程に、父おとゞを見つけて、(一)手さゝげて(二)這ひ出づれば、兼雅「あれはあらぬ人ぞよ。いと恐ろしく憎き人ぞ」と居隠し給へど、泣きて這ひ下りて這ひ往けば、父君かき抱きて、御簾の内に入れ給ひ、仲忠「此處にか」とてさし入れ給へば、更に下り給はず泣けば、御簾と御几帳との中に入れて、こしらふれど、舟漕ぎうたふを見て、外のかたをさして(三)なむ、笑ひてしばし(四)居給へり。祖父おとゞ、持たせ給へる(五)をかしき物ども、多に持たり。

かゝる程に、魚いと多く、川のほとりに、いかめしき木の蔭、花紅葉などさし離れて、玉蟲おほく棲む榎、二木あり。(六)さか木の蔭に、時蔭、松方、近正ら、今かうぶり得て、(七)このすけどもの官人にてある參りて、幄うちて居たり。魚、荒巻、人の奉りたらむ、多く有り。(八)おとゞの、斯かる折の料とて、鮎篝火、いとをかしげに造りおかせ給へり。(九)それをとり出でさせ給ひて、荒巻そへて、(一〇)梨壺、(一一)宮の御方、中の君に奉らせ給ふ。(一二)内裏には、たゞ御消息して奉らせ給ふ。

〔語釈〕
(一)犬宮が
(六)「さか木」は「その木」なるべし
(七)衛府の少將などなるべし
(八)兼雅
(一一)二人共に兼雅の妾
(一二)梨壺の許へ

〔考異〕
(二)手さゝげて—「て」ナシ
(三)さして—見て
(四)しばし—しばしは
(五)給へる—給ひつる
(九)それを—「を」ナシ
(一〇)そへて—そへつゝ

（語釋）
（一）誤あらんか
（二）梨壺
（三）生れおちから
（五）「いぬ宮」は「いま宮」の誤なるべし、今宮は梨壺腹の皇子
（六）兼雅自身をいふ
（考異）
（四）居給へりいぬ宮も—居給へりおとゞはかしこに物し給ふ犬宮も

呼び出でて見むと思して萬のをかしげなる物、宮、内侍のかみの御髪の箱なるを探し取りて、懐に入れて持給へりけるを、取らせ給へれば、悦びて抱かれ給へり。おとゞ宣ふやう、兼雅「人の子は、天下にいへども、女は睦ましく、男は疎くなむ有りける。この朝臣をば、親君（一）のとかくなむ思ひつる。かゝれど、この犬を今まで見奉らざりつる、かゝりけるものを。（二）この宮にさふらふものは、年頃疎く、をさ〳〵見語らはず侍りしかど、彼處に物せらるゝ兒をば、（三）すなはちよりなむ見侍る。今日もこの犬をば見せじとこそは思ひためれど、故あれば、吾が君こそ這ひおはしたれ」とて懐に入れて、奥に向きて居給へれば、人はえ見ず。おとゞ斯く宣ふを、大將いとほしと思して、まめだちて居給へり。（四）兼雅「（五）いぬ宮もいとをかしくなり給へり。起きかへりつゝ、人見ては笑はせ給ふ。これを常に見まほしけれど、兒の里へまかれば、（六）翁をもゆるさず。心にまかせても見侍らずや」宣へば、母宮たちわらひ給ふ。内侍のかみ、俊蔭女「あな聞きにくや。翁をば、誰かゆるさぬ。

らず。男の御車、御簾あげて、こぼれ出でて、道の程遠くて、御笛吹き、琵琶彈きなどしておはします。おはしまし著きて、寢殿の南面を、御方にしつらひ、西面にかんのおとゞ、中には一の宮、東に二の宮、姫宮としつらひたるまゝに、下り給ひぬ。一の宮、「女御の君を率て奉らぬこそ効なけれ。をかしきものかな(一)」舟どものありくを御覽じて、興じて、苦しげになくて起き居給へば、大將の君いと嬉しと(二)思ひ給へり。

犬宮いとをかしくて出で給へば、引き入れつ。左のおとゞ、正賴「なほ〳〵おはせよや。彼は、すきもののする(三)そへ言を申すぞ」など(四)て、御簾の前によりて、萬のをかしき物を取う出てあざむき呼び出で給へば、たゞ出でに這ひ出で給へるに、かしこう抱き取り給ひつ。父君、おとゞの見給ふをば思さねど、外住し給ふ宮たちの見給ふを苦しとおぼす。犬宮は、父おとゞの抱きありき、をかしき物取らせならはし給へれば、(五)おとゞをば怖ぢず、面嫌をもせず。(六)祖父おとゞはかなしや、

〔語釋〕
(一)「物かなとて」歟
(四)「などとて」なるべし
(六)彙雅

〔考異〕
(二)ありく〳〵のりありく
(三)そへ―ナシ
(五)おとゞ―男

〔語釋〕
(一)「などとて」なるべし
(二)兼雅が桂の別莊へ御招待申す由なり
(四)忠こそ
(六)仲頼を尋ねに同行すべき事
(八)君よりも音信し給へ
(一〇)「たひ」は袈裟

㊤女一宮女二宮女四宮兼雅俊蔭女仲忠等桂の別莊にゆく。兼雅、犬宮を愛す。鮎を捕りて所々に贈る。詠歌管絃。

〔考異〕
(三)と聞ゆ―とき
(五)大將―おとゞ
(七)思したれ―思し立て
(九)給へり―給ふ

給ひし夜一夜外に立ちて侍りしこそ。かの君の御聲のほど近う聞えしかど、この常に聞ゆる事をも然も」など(一)て、仲忠「三條に、(二)桂におはしまさせむと(三)聞ゆ。一日二日涼み給へ。宮たちなどして出で給へ」と宣へば宮、女二「苦しきに何方か」と宣ふ。仲忠「何か、なほ」とて、十九日ばかりにと思ほす。(四)律師も十日ばかり有りてまかで給へば大將、(五)仲忠「さらば、かの聞えし水尾へは、(六)必ず然思(七)したれ。今よりはそ(八)れよりも宣へ。これよりも聞えむ」とて御弟子の中にきぬ、物につゝみて出ださせ給へり。(九)律師には、菩提樹の數珠具したるたひ(一〇)など一くだり奉り給ひぬ。

かくて十九日になりて、御車十二、絲毛には宮たち、孫王の君、犬宮いだき奉りて太輔の乳母。つぎ〳〵に大人、うなゐ、下仕、男宮たち、右のおとゞ、右大將、一つに、かんのおとゞ、御車六して、出で立ち給ふ。左のおとゞも引き續きてまうで給へれば、これかれ出で給ふ。宮の御車一に立てて、かんのとの二にて、おし合せて二十ばかりなり。御前は、宮ばら、殿ばら、二かたにおし合せて、數知

〔語釋〕
(一)様子ありげに女二宮に物申上ぐる女中あるときは
(三)女二宮の
(四)「宮より」は「かく」の誤歟
(五)懷胎
(七)國母
㊉仲忠、女一宮の懷胎を悟る。

〔考異〕
(二)けり—ナシ
(六)こそ—とぞ

て、いさゝか(一)氣色ありて物聞ゆる御たちもあれば、氣色あしく宣へば、物聞ゆる人もなし。この二の宮に思ひ困じたる君たちは、皆御たちにつきて、物取らせつつ、「盗ませ奉れ」と宣ふも有り(二)けり。藏人の少將は、中納言の君とて、(三)御身につき仕うまつる人に、萬の財物を取らせ給ひつゝ、「盗人に入れよ」と宣へど、さるべき折もなし。如何ならむ隙に入らむと、うかゞひ給ふ人々あまた聞ゆる中に、五の宮より切に聞え給ふ。

(四)宮より聞ゆる程に一の宮の御心地を、(五)かゝる筋に大將見なし給ひて、仲忠「さりとも著く思さるらむものを、宣はせで、心魂を惑はかせ給ふものかな。なほ〳〵斯くこと〴〵しき御心(六)こそ。世中に佗しかりしは、内裏にさふらひ困じて、南の宮に、御迎にとて參りて侍りしかど、はしたなく宣ひしに、えまからざりしに、藤壺の、(七)國の親となり給ふべき御心なればにやあらむ、局などして賜ひしに、出で給はでやらはせ給ひしこそ、忘れがたく。相思さぬ折おほくなむ。さては御遊し

〔語釋〕
(二)「なりぬるを」歟
(三)兼雅の桂の別莊近ければ也

〔考異〕
(一)月も—月の
(四)すさみなども—すさみなし
(五)承はりて—承はりぬ
(六)如何…入りて侍る—ナシ
(十)近澄等の女二宮に對する熱心。
(七)女二宮
(八)聞えおき給へれば—聞え給ひつれば

見むとて宣ふにやあらむ、と心づかひし給へど、誰も〳〵、何心なくうち語らひ給ふ。大將殿は、御酒など參らせ給ふ。右のおとゞ、兼雅「かく惱ませ給はずば、(一)月も殘少く(二)なりぬる、(三)小倉の方へ御前たまはらむと思う給へるを」と聞え給へば左のおとゞ、正頼「何か、さやうにすさみ(四)などし給はゞ、怪しうはあらじ」と聞え給ふ。兼雅「さらば、(五)承はりて、晦がたにおはしまさせむ。昔御覽ぜしよりは水なども深くなり、魚もいと多く捿み侍り。(六)如何なるにかあらむ、山の前より川なむ入りて侍る。賣り買ふものどもは、家の中よりなむ往き返り侍る、御覽ぜさせばや。春秋は、昔よりも木の數もあまたになりて、いとをかしく侍り」など聞え給ひて、みな還り給ひぬ。

かくて(七)二の宮、姫宮は、このおとゞの西の方におはします。彈正の宮は、二の宮の御乳母など具しておはしませど、女御の君の(八)聞えおき給へれば、二の宮の御許に、夜も晝もおはします。藏人の少將、いかでなどは思せどおとゞ宮おはしまい

宮は、御几帳のかたびらは、うち懸けてまだおろさず、起き給ひて、いさゝかなる事せむとおぼして(一)入り給へるを、いとよく見奉り給ふ。白き綾一(二)かさね奉りて、御髪なども、御殿籠りふくだめたれど、いと氣近くうつくしげなりと見る。姫宮も、起きあがり給へるを、これはまだ小くかたなりにて、あてなり。よくも生みあつめ給へ(三)る御子たちかなと見て居給ひぬ。

ほの〴〵とをかしき朝ぼらけなれば、おとゞたち勾欄におしかゝりて居給ひつゝ、右のおとゞ、實正「昔斯かりし極熱に、この釣殿へこそは度々(四)ゆふらうしに參りしか。今日さて(五)侍る人をや」左のおとゞ、正頼「今日も、昔のやうにせむかし。別いても、朝涼にこそは。(六)さても(七)公の御いそぎは、眞實に、月や定まりて侍らむ」右のおとゞ、兼雅「この八月ばかりにとは承れど、確にはまだ承らず。「朱雀院みな造り果てたんなれど(八)、なほ疾く急ぎて、あるべからむ事を(九)ものせよ」と仰せらるれば、さらば思し惱むことも侍らむかし。言はせしめ給へや」左のおとゞ、氣色(一〇)

〔語釋〕
(一)小用を足さんとて
(四)「ゆふらう」は「遊覽」歟、又は「納涼」の誤歟、一本「いふらう」
(七)御譲位の事
(一〇)正頼の心を探る爲に

〔考異〕
(二)かたびらは—かたびらは御たち
(三)給へる—給ひつる
(五)さて—まで
(六)さても—「も」ナシ
(八)なれど—なれば
(九)をもの—ナシ

り給へど、御目ふたぎて見にだに見給はねば(一)、犬宮膝にすゑて、さしくゝめて(二)參りて、仲忠「御德をも見給ふるかな」と宣へば宮、女二「あつし。簀子にを(三)」と宣へば、仲忠「昨夜をだに思ふ所に、今宵居眠ぞ用なきや」と宣ひて臥し給ひて、仲忠「か(四)の御方に、いざとく人候へ。聞く樣有り」と宣へば乳母胸潰れて、いかで聞き給(五)へらむと。藏人の少將も、簀子に居給ひて(六)、かの人見え給ひつれば(七)、右大將殿、とほくてさし出で給ひ、仲忠「あなかしこや。人去ぬれど、いと(八)恐ろしき兵ありくなり。外にては知らず、此處にてはいとさがなからむ」と宣へば、宮たち(九)御目もさめて起き居給ひぬ。乳母は、身も冷えはてて、我にもあらで居たり。

かくて曉になり、御格子もおろさず。二の宮の御方と此方とは、高き御屛風立てたり。おはする所近ければ御屛風にて隔てたるなりけり。大將この折宮たち見奉らではいかでかと思ひて、一の宮いとよく御殿籠りたれば(一〇)、脇息を踏みたてて、御屛風の上よりのぞけば、明けぬとおぼえて、男宮たちは皆御殿籠りたり。二の

〔語釋〕
(二)水飯を食はせて
(四)女二宮の方を警戒せよと注意する也
(六)此處誤脫あるべし
(九)女二宮姫宮

〔考異〕
(一)見給はねば—入れ給はねば
(三)を—ナシ
(五)いかで聞き給へらむ—いかでかきゝ給ふらむ
(七)給ひつれば—給へるは—見え給ひつるは
(八)いと—ナシ
(一〇)たれば—たるに

〔語釋〕
(一)梨壺
(二)忠澄
(三)近澄
(四)仲忠
(七)誤脫あるべし
(八)何も召しあがらずに

〔考異〕
(五)大將殿—大將のおとど
(六)大將殿宮に—大將宮に宣ふ
(九)かしこ—おそろしや

くなり侍るを、宮(一)へも參るものの侍るをいとあつしく侍りて、片時見給へ棄てがたう、引き入れておき侍りしを、辛うじて出だし立て侍りし。この惱ませ給ふと承り驚きてなむ」かくて御菓物參り御物語し給ふ。

かくて右のおとゞ參り給ひぬとて左衛門督(二)の君、藏人(三)の少將、宮あこの侍從など參り給へり。宮たち、おとゞたち、「いざ、かゝる所にて脚病勞らむ」と宣ひて、楓の青やかに茂りたるもとに立ち出で給ひ、「をかしき鞠のかゝりかな」と興じ給ひて御鞠あそばす。皆上手なり。人々裝束し給へり。宮たち、おとゞたちは直衣奉れり。大將殿(四)(五)、藏人の少將、鞠も上手、樣もよく見ゆ。宮たち、「怪しのわざや」とて御覽ず。暮れぬればみな入り給ひぬ。宮たちは、二の宮の御方に入り給ひぬ。

(六)大將殿、宮に、仲忠「今日は、例の風(七)のいもゐに」御前なる人々、「まして今日はいと物淸(八)くてくらさせ給ひぬ」ときこゆれば、仲忠「あなかしこ(九)」とて水飯してまゐ

〔語釋〕
（一）女一宮
（二）兼雅

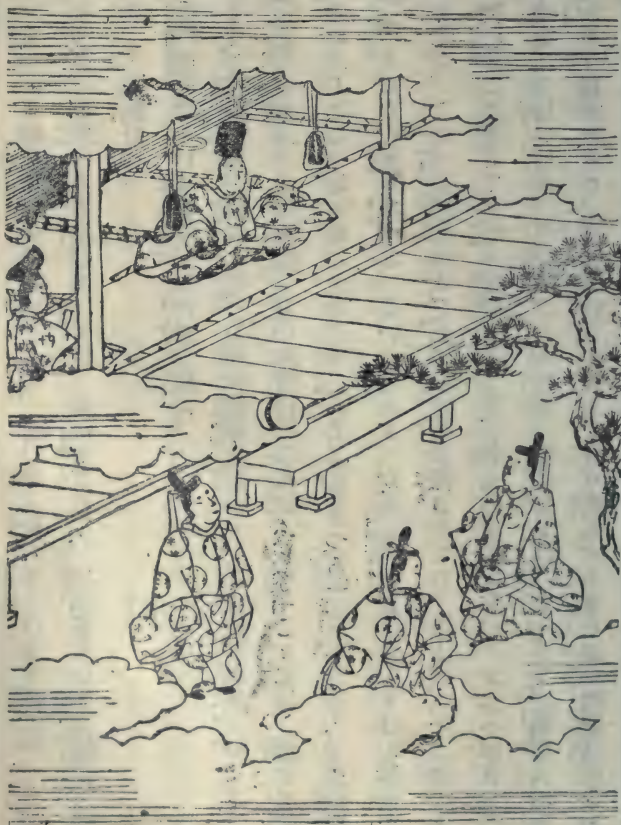
㊈兼雅女一宮の病を見舞ふ。蹴鞠。仲忠女二宮を隙見す。兼雅正頼に小倉の遊覽を約す。

（三）「承りになむ」歟

〔考異〕
（四）など—ナシ

す。そのかみ御前にてあそび侍りし頃、戀ひ申し給ふ事きはまり無し」かくて明けぬれば、御方へ下り給ひぬ。大將、御心とゞめて、家司どもに仰せ給ひて御前に物奉れ給ひつ。

【畫詞】こゝは大將殿、加持參り給ふ。

かくて、宮（一）わづらひ給ふとて、右大臣殿（二）參り給へり。左大殿、大將、いそぎて御迎して入り給ふ。右の大殿、左の大殿にきこえ給ふ、兼雅「こゝには、惱ませ給ふ事のおはしける。如何樣にかと、承りなむ（三）參りきつる」左のおとゞ、雅頼「正頼も然承りになむ參り來つる。さいつ頃より、かく承れど、けしうはおはせずと有りしを、この山籠の律師など召されけるに驚きてなむ。ことに、そこはかとある御心地にはあらで、起り給ひなどして、物まゐらずとなむ。かたへは暑氣など（四）にやとて見給へ侍る。日頃は、かく極熱の頃に侍れば、苦しうて、内裏にも參り侍らず」右のおとゞ、兼雅「兼雅も、久しう參り侍らず。さるは、御國讓のこと近

〔語釋〕
(二)千陰、忠こその父
(三)忠こそが居合せたらば與へんと思ひしに

〔考異〕
(一)仲忠の―仲忠が
(四)侍り―ナシ
(五)仕うまつりし―つかまつりしに
(六)侍る今暇に―侍りける今―侍るを今しも

(一)仲忠のもとに侍り。このおとゞ(二)、亡せ給はむとて、「そこに(三)物し給はゞと思ひしを、今は誰にかは」とて、院になむ奉られたりけるを、内裏になむわたりて(四)侍りけるを、去年の十二月に御書(五)仕うまつりし祿になむ賜はりて侍り。げに世になきいみじき寶にこそは。かゝる物を、然聞えなしけむが恐ろしき」律師、忠こそ「さる禍になむあたりて侍りし」大將、仲忠「この帶は、物し給はましかば、御物とぞならましか。奉りてむとなむ思ひ給ふる」律師、忠こそ「山伏は何の料にかし侍らむ。僧の具に玉の帶さし侍らばこそあらめ。もて侍らましかば、とかくの事、殿ばらにこそ奉らましか」大將、仲忠「たゞそれかと見給へ」とて見せ奉り給へば、律師見給ひて、いみじく泣き給ふ。忠こそ「この帶は、故千蔭の内宴にまかり出で給ふとて、裝束し給ひしになむ、見給へし」と聞ゆ。大將、仲忠「この春日に侍りし少將仲頼の、入道して侍るとぶらひに、その時の同じ人々などこれかれ、今は仲忠もかく上達部にて侍り、あるは頭なんどにても侍る(六)、今暇に訪らひにまからむと

り侍りしは、いとこそ悲しう侍りしか」忠こそ「山にまかり籠りし故は、いといみじき事の侍りけるを、更に知り給へざりき。たゞ漫に物悲しく、世には侍るまじき心地のせしかば、親をも見捨ててまかり出でにし。その人、繼母に侍りし人なり。宮仕し侍りし程に、言ふ(一)ことの有りしを、その事便なかりしかば、聞かぬやうにて侍りしに、怨じたるにや有りけむ、親に、怪しき事を申しける(二)を、え(三)知らで、思ひ給へ嘆きしを、不意に異樣(四)にて逢ひて侍りしに、「など斯くはなりにたるぞ」と問ひ侍りしかば、「繼子なりし人の爲に、親の寶とする帶を取り匿して、これを賣らすと言ひ、帝かたぶけ奉らむとすと奏しけり、となむ聞かせ侍る(五)」と申しよを、(六)山伏の上に聞きなし侍りて、その日(七)つひに後の事まで、先つ頃知り侍りにき。此事を聞き侍りしかば、いとよう逃げてけりとなむ。然ることを聞き給ひて、責め(八)宣せざりける親の御心なむ、いとかなしき」と申し給へば(九)大將、仲忠「恐ろしかりける人の心にこそは。その事は、(一〇)左のおとゞぞ宣ひしや。然る事ありける帶は、

〔語釋〕
（二）此間脫文あるべし
（四）繼母の乞食になりたるにあひて
（五）「侍りし」歟
（六）我身の事と
（七）脫文あるべし
（一〇）正賴
（六）「侍る」なるべし

〔考異〕
（一）言ふことと—いひかくることと—いぶかしきことと
（三）え知らで思ひ給へ—え知らず思う給へ
（八）責め—せめて
（九）給へば—給ふ

へり。律師は加持參り給ふ。さらに、はやき陀羅尼讀ます。童より、聲かぎりなく有りし人なれば、まいていと尊し。

曉になりて、大將殿、仲忠「世の中のこと、とざまかうざまに、皆承り見給へ(一)つるを、この御陀羅尼をのみなむ、音に承れど、まだ承らざりつる。げにいと尊くおはしけり(二)。いかで秋深からむ程に、木葉の降り落ち、風の聲心細からむ時、人の聞かざらむ山里にて琴に合せて承りにしがな」律師、忠こそ「いと尊き仰せごとにも侍るかな。たゞこれをのみなむ、夜晝佛神(三)にも申し侍る。御琴なむ、昔ほのかに承りて、多う(四)はこれによりてまかり(五)出でしなり。されど、仰せごとをだにえ承らざりつれば、思ひ(六)給へ嘆きつるを、かく仰せらるれば、思ひの叶ひ侍るなりとなむ。わいても、御琴の音は、いと承らまほしく、たゞにもえ(七)仕うまつるまじきにぞ思ひ(八)給へわびぬる」仲忠「琴ぞ、え仕う(九)まつるまじかなる。そもそもいと怪しくて、御行につき給ひけるは、などてにて侍りけむ。春日にて見奉、

〔語釋〕
(五)山より
(七)故なく聞くわけにもゆかぬを

〔考異〕
(一)見給へつるを—給へるを—つるを
(二)おはしけり—おはします
(三)佛神—神佛
(四)多うは—ものれは
(六)思ひ—思う
(八)思ひ—思う
(九)仕うまつるまじかなる—仕うまつり合すまじかなる

〔語釈〕
（二）后宮より召されても行かずに此方へ來られしを疎末にしては勿體なし
（三）女一方へ、
（四）懷胎を仲忠に知らせぬをいふ
（七）御懷胎の事を仲忠に申上げむ
〔考異〕
（一）侍りつれど―侍れ
（五）おとゞ―大將
（六）心して―志ありて
（八）おとゞ―大將

には、久しくさふらひ候ひなむを、佛と宣はするなむいと恐ろしくて、まかり逃げぬべく。此の頃は、所々に斯くなむ。后宮の姫宮も、かくなむ惱ませ給ひて仰侍りつれど、まづ殿にをとてなむ」など聞え給ふ。大將、仲忠「おほやけの御許よりだに然りけむ御心を、恐ろしや。奥の方におはしまさせむ」とてしつらはせて入れ奉らせ給ひつ。

かくて「まうのぼり給へ」とあり。南の廂に、よき御屛風立てたり。例の空薫物などして參り給ふ。かくて宮に、内侍のすけの申し給ふ。すけ「いと腹きたなくおはします。これは何の罪にてある御心地にもあらず。知らせ奉り給はねば、おとゞはさわぎ給ふ。それはとまれかうまれ、生きてはたらき給ふ佛と言はれ給ふ、加持參り給へば、ともかうもこそあれ、かゝる人は、さる心してこそ加持まゐれ。いと恐ろし。おとゞに聞えむ」と申せば宮、女二「何心地とも知らず、いと苦しきは、死ぬべきにこそあんめれ」と宣へば、すけ「あなさがなや」などむつかりゐ給

（語釋）
（四）「させむ」は「作善」歟
（五）忠こそは生佛なればとて賴みたる也

（考異）
（一）大將—おとゞ
（二）大將—おとゞ
（三）給ひつるをなむ—給へるをなむかしこう思ひ給へるさて

いとめでたう、御供の者ども、裝束淸らに、容貌よき、十人ばかり、若法師十人、大童子三十人ばかり、擯榔毛の車の新しきに乘りて參り給へり。中門より、大童子はとゞめて、侍、法師、童して入り給ひて居給へり。大將（一）、仲忠「宮の中などにては、對面賜はれど、その事となくては、え取り申さぬ事をなむ。さるは、昔より志侍れど、自然に怠り侍りてなむ」律師、忠こそ「山伏も、いかでかと志し侍れど、殿の仰せごと賜はらぬを嘆き侍るに、たまゝゝ仰せ給へれば」と申し給ふ。大將（二）、仲忠「いと嬉しくて。こゝにも、數に思さねばや、訪はせ給はざらむ、と思ひ給へるに。內裏の召などにも參り給はぬ時おほきを、如何ならむと思ひ給へるに、かくものし給ひつる（三）をなむ。消息聞えたりつるは、此處に、立ちぬる月の晦より惱み給へるを、日頃重くなりまさりてなむ。これかれに物問はせ侍れば、邪氣など申す。させむ（四）など行なはせ侍れど、なほ心もとなきを、たゞ今は現れたる（五）藥師佛にこそはとてなむ。一夜二夜ばかりものせさせ給へ」と聞え給ふ。忠こそ「心

〔語釋〕
(一)脱文あるべし
(二)「もとど」なるべし
(四)梨壺の御供にも行かず

〔考異〕
(三)かへり―まかで

なむ。たゞ后の宮の宣はむ、奉り給へ。(一)非常と見る事も侍らば、いとよき事なり」と聞え給へば、いとど、(二)兼雅「身の爲には、いとよかるべき事なれど、大方騒がしかるべければ、こゝにも然ぞ思ふや。さらば早物せられよ。つとめて此處にもまうでむ」と宣へば、大將かへり(三)給ひぬ。梨壺、御車二十ばかりして、御前いと多くて參り給ひぬ。うまれ給へる宮は、母宮のもとにおはす。

畫詞　こゝは三條殿。

かくて大將歸り給ひて、宮に、仲忠「今の間はいかゞ。言ふべき事有りと侍りしかば、まかりたりつるに、やんごとなき事ども申されつれど、辭答をなむしてまうで來ぬる。さるは、梨壺、今宵ぞ參られける。されど、其方(四)にもまからずなりぬ。里人も今參らむ」と聞え給ふほどに、「律師參り給へり」と申せば、仲忠「なほ此方に」とて、簀子に御座敷かせて請じ入れ給ふ。仲忠「これは恥かしき人ぞや」とて直衣裝束にて出で給ふ。律師は、綾の裝いと淸らにて參り給へり。姿、顔頭つき、

の方、俊蔭女「え更に承らざりけり。如何樣にか。などか、斯くなど宣はざりし。參りて見奉らましものを」大將、仲忠「知らず。靈氣などいひて物まゐらずなむ有りつるを、昨日今日は重くなりてなむ(一)」おとゞ、兼雅「いとほしきかな。參るべうこそあめれ。もし前にありし筋にやあらむ(二)」と聞え給へば、仲忠「さも見え侍らず。然りし時も、かくは物し給はざりき。さても、程なくは如何」と聞え給ふ。おとど、兼雅「消息申したりしは、后の宮(三)より宣ふ事なむ有りし。如何なる事にか、「思(四)ふ時には、然もありぬべき事なれど、世の亂となり、騷がしかりぬべき中に、天下にまさる心ありと、誰々も思ほえし」となむ。如何なる事ぞ、と申さむとてなり。宮もかしこう參らず(五)と宣ふめるに、今宵なむ參らせむ(六)と思ふ。藤壺參り給ひなば、しやうぞく(七)の薫物のやうなるべし。鼬のなき間の(八)(九)鼠としも仕うまつれとてなむ」と宣へば、仲忠「如何なるべき事にか侍らむ。仲忠は(一〇)、いかでかとり申さむ、殿の御爲にやごとなき事なり。それによりて、侍らむ所(一一)に思ひ疎まれむも苦しう

〔語釋〕
（二）懷胎
（三）兼雅の同胞也
（四）立太子の事をいへる也
（五）梨壺が歸らぬとて催促せらるれば
（六）梨壺を
（七）諺なるべし
（八）諺なるべし、鎌倉時代の諺に「鼬のなき間の貂ほこり」といへると同義なるべし
（一一）正頼方より

〔考異〕
（一）なむ—なむ侍る
（九）なき間の—まへの
（一〇）仲忠は—「は」ナシ

〔語釋〕
（一）誤あるべし
（二）我を高官に任じ給ふとも我にあて宮がつれなかりし報は必ずすべしの意歟
（四）女一宮
〔考異〕
（三）などにや—などや

ましや」女宮、女二「あなむくつけ。如何は宣ふ。人をば徒らになさむと思すか。いとゞ、この見ゆる物さぞあらむといふものを、戯にてもあなゆゝしや」と宣へば、忠康「よく宣ふなめり。（一）心ある人の、思ふことをぞ知るかし。たゞ今かく有るほどなめれば、まめやかには然も思はず。世中定まりなむ時、（二）大臣たかき位に物し給ふとも、憎くもてなし給ふらむ本意とげむとす」と宣へば、いみじく怖ぢ給ふ。

かゝる程に大將入り給ひて、仲忠「今の程は、醫師どもに問ひ侍れは、熱などにや（三）おはすらむとなむ。物問ふには、靈氣とぞ。されば、眞言院の律師のもとに、消息言ひ遣はしつ。參り來ば、護身せさせ奉らむ。三條より、「言ふべき事あり」と度々侍るを、たゞ今の間にまかりて、いと疾くまうで來なむ」とて參りぬ。仲忠「召侍りけるを、即ち候はむとせしかど、彼處に侍る人の、（四）日頃いたく惱み給へば、女御など物し給はぬ程なれば、見譲る人なくて、えさふらはず侍りつる」北

八女一宮懐胎。彈正宮の見舞。仲忠の痛心。兼雅、仲忠を招きて立太子に關する后宮の密旨を告ぐ。仲忠、忠こそを招きて女一宮を加持せしむ。帶を忠こそに示す。

〔語釋〕
(一)仲忠妻
(二)正頼
(三)實忠
(四)誤あるべし

晝詞　こゝは晝なり。

かくて一(一)宮五月より孕み給ひぬ。此度はいたく惱み給へど、大將の君には、さも知らせ給はず。たゞ御心地なやみ給ふ樣にてあれば、思ほし騷ぎて、祭、祓せさせ、所々にも御修法おこなはせ給ひて、ありきし給はず。女御の君もおはしまさねば、夜晝、醫師、陰陽師、驗者など召しつゝおはしますに、彈正宮と御物語し給ふ。女二「藤壺の里にものし給ふ時に、まうでて物申さむと思へど、この月頃は(二)殿など物し給ふめれば。はじめまうでたりしに、物騷がしくて、物も申さでまうで來にき。人の志は、いとよく見知り給へるにこそあめれ。(三)新中納言出だし給ふを見れば」忠康「まろが志を知り給はぬにやあらむ」女二「(四)とこそ語り給ひしか。大宮さる事ありと宣ひけれ」と聞え給へば弟宮、忠康「かひなの事や。あまり侮られて、過せられ給はむに、誰も〳〵何わざかし給はむ。幼かりければこそ、然りぬべき折有りけれど、人々の心をつゝみつゝ。今ならましかば、かく妬き心地せ

る。こゝには更に思ほえずなむ。人々に消息したりしに、それも、此頃は惱ましくて、物せず。(一)みたのとり草木だに、待たずともなるめれ。あなすゞろや。

うちはへてまつのみ繁る(二)すみのえは下葉も枝も何かかはらむ

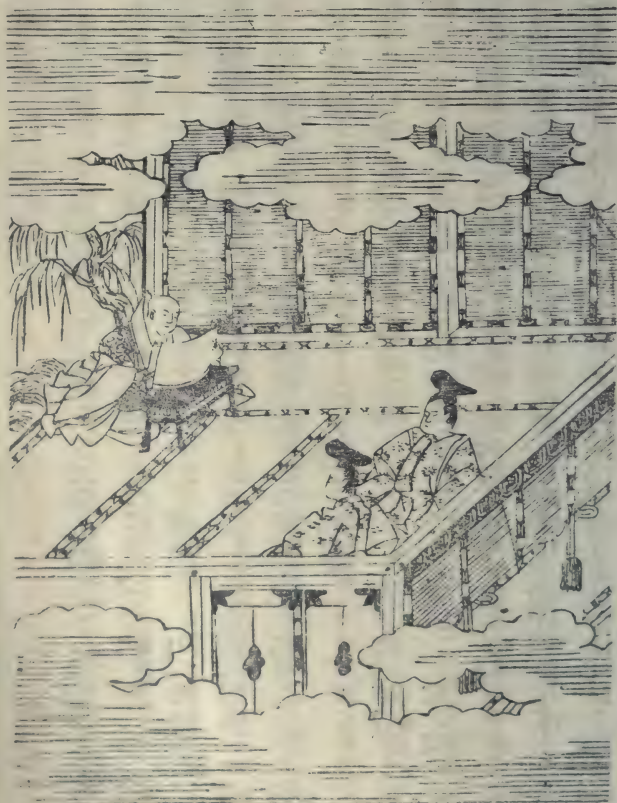
とのみを、己平「かにてぞ。何事もかくては得こそ。

と宣へれば、おとゞ見給ひて、正頼「かく宣ふめるを、參り給へかし」御方、あて宮「何しにか。梨壺參り給ひなむ。(三)人少なればこそあらめ」とて御返、

あて宮み山木の下には風のはやくとも枝には露もすぐなとぞ思ふ

數ならぬ身の、(四)淵瀬思ひ給へずや。

とのみ聞え給ふ。

かくてこの生れ給へる御子をば、今宮と聞ゆ。御湯殿參りて、寐起きたまへるを、大宮はいだき給ひて、大宮「をかしくもおはするかな。たゞ若宮にこそあめれ。これはわが子にし奉(五)らむ」

〔語釋〕
(三)かく御文のあるは
(五)此下脱文あるべし

〔考異〕
(一)みたのとり―えたとか
(二)すみのえは―すみよしは
(四)淵瀬思ひ―淵瀬をば思ひ

〔語釋〕
(一)誤あるべし
(二)嵯峨院の懇なる仰は帝も背き給はじ
(三)若宮以外に太子の立たるゝ樣ならば口出しせんとす
(六)女四宮に女兒の生るる事もあるべければ
(八)折かへし此文を遣る
〔考異〕
(四)御位—わうゐ
(五)一つにして—一つにて
(七)宣ひておはす—宣ふ

事よ。思はずなる御心ぞや」とほろと〳〵泣き給ふ。左衛門督、忠進「何かは、思さじ。よに然るやう侍らじ。こと人々は知らず。(一)おほき大殿腹なるを、え思し棄てじ。何處にも、いかで見給ふれば、疎なる御中どもにも侍らざらめり。いかでか御爲にうしろめたき心は」大宮、「これはさるものにて、四の宮の男生み給ひつらむ時まで定まらずばぞむづかしからむ。(二)院の切に聞え給はむ事は、いかでか」おとゞ、正頼「それは、天下に御眼七つ八つつき給へる男、一度に三つ四つうまれ給ふとも、さかしら、さしいらへせむとす。世を政ちなれ給へる(四)御位だにも、下の諸口と申す(三)事は、え否び給はぬことなり。そのかみ、聟も舅も、心を(五)一つにしてうれへ奏せむ、これこそむづかしけれ。それも、よう思ふ時は、(六)女兒もあれば、さりともと思ふものを」など宣ひ(七)ておはす。

かくて又宮より御文あり、

東宮 心ゆかぬやうに有りつれば怪しさに、(八)たちかへり。何と聞き給へるやうやあ

こそは。(一)太政大臣だにも物し給はましかばこそは。物のあしきにやあらむ、折しもこそあれ、物し給はず。(二)子どもとてあるは、下﨟なり。院かくて物し給へども、(三)わが筋をと思さむ道理なり。女子をば、何とかは心憂しと思ひて、(四)子ともをあらせ奉らずとも、(五)わが身ぞ、寡にて徒らにならめ。何の面目かあらむ。それは、皆思ひたらむかし。いみじき恥をも、(六)老のなみに見つるかな。(七)太政大臣の御氣色は見むと思へど、(八)おこはまだしう物せぬ」と宣へば藤壺、あて宮(九)「何か、むつかしうは思ほす。まことに(一〇)定め果てられぬと聞召すとも、夢ばかりものしき氣色に(一一)な。この折に人々の御志どもを見給へ。人の志のみこそ、哀にもつらうもあれ。年頃(一二)かくて物し給へるに、(一三)然もあらでしもや、と思ふ折にかゝる事のあるは、え然る(一四)(一五)まじきにこそは。また(一六)子にておはするには、などかは。(一七)(一八)吾が佛、さき生ひの子のといふ事も有るを、(一九)聞召したる氣色、(二〇)ゆめ人々に見え(二一)給ふな」と聞え給へば、

正頼「あないみじや。若宮をば、いかでかたゞ、御子にては見奉らむ。かゝる御

〔語釋〕
(一)季明
(二)季明の
(三)我が血筋を帝位に立てたしと
(四)あて宮を取扱したりとも
(五)あて宮自身
(六)「老のはてに」歟
(七)忠雅の態度を見たく思へど
(八)誤あるべし
(一〇)皇太子を梨壺腹に
(一二)若宮が
(一三)立太子疑なしと思ふ折に
(一四)太子に立たるゝ御運のなきなるべし
(一六)「子にて」は「御子にて」歟
(一七)誤あるべし
(一九)梨壺腹の皇子の太子に立たるゝ噂と

〔考異〕
(九)何か—何かいと
(一一)にな—になを—を
(一五)まじきに—まじきことに
(一八)あが佛さき生ひの子の—あが佛をつるのこの子の—あがはとりをいのりの子の
(二〇)ゆめ人々に—ゆめゆめ
(二一)給ふなと—給ふなど

所々、よろこばせ給ふなる。ある所には「物の筋といふもの、絶えぬと(一)見れど、つひには出で來ぬるものなりけり。(二)かゝる折にあはせ給へる事」とて、常にある所には御文(三)通はさせ給ふとなむ承る。(四)かの御方も、とく參り給へと侍るなる」と聞ゆ。宮の御返、

あて宮 承りぬ。惱ましげに宣ふなるは、如何やうにか。いとも〱聞えさせぬ。此處にも、なほいと苦しくなむ侍れば、え參り侍らぬことや。待つ我がとか侍るは、

下葉よりしたより色はかはりつゝまつとは更に言はずもあらなむ

とて奉り給ひつ。正賴(五)「かの事は」おとゞ、正賴「空言にあらじ。内裏の后、いとおぞく心かしこくおはし給ふ。(六)やんごとなき人に御子たちうまれ給へらば、必ず然思すらむ。后宮、大臣、公卿たち、心を一つにし、例を引きてこれをと申さむには、(七)何の疑かあらむ。我は馬にまじりたらむ牛の樣にて、何事をかは。(八)民部卿ばかり

〔語釋〕

(二)恰も東宮即位の時に當りて皇子の生れたる事喜ぶべし

(四)梨壺にも早く內裏へ歸る樣にと東宮より御文あり

(五)「おとゞかの事は」なるべし

(六)梨壺

(七)梨壺腹の皇子の太子に立たれん事は

(八)實正のみは我が味方ならん

〔考異〕

(一)見れど—見れば

(三)通はさせ—通はせ

思ふに、そこには怪しうは物し給はじを、下局にやは。うしろめたくはこそ。
人もろ共によ。いでや、(一)
君をまつわがごとわれを思ひせばいままでこゝに來ざらましやは(二)
思ふこそ妬く。まかでられし時も、はかるやうにて、かく數にも思はれざめれば、しばしはものせじと思へど、怪しく心より外に。(三)
となむあるを御方、あて宮「あな怪しや。たゞにてやは。例の憎げ言し給ふめり。あないとほし」とて、あて宮「此の頃は、誰々かものし給ふ。いづくにか御使は遣はす。内裏わたりには何事かある」と宣はすれば、使「此の頃は、例の御書あそばしなどはせさせ給はず、御心地惱ましとて。まうのぼり給ふ事は、院の御方にこそは。其處にさふらふ左衞門といふ人、忍びて申しゝは、五月ばかりより御氣色ありて惱ませ給ふ、となむ申しゝ。御使は、一日まゐり侍りしかど、申すまじき事なれど、内裏わたりには、梨壺の御方のおほんせうし給へる事をなむ、やんごとなき

〔語釋〕
(一)生兒と共に參內あれ
(二)歎く樣にして退出せられて
(三)文もやるまじと
(五)女四に仕ふる
(六)御懷胎の御樣子
(八)「おほんせうし」は「御子うみ」歟
〔考異〕
(四)外に―外にて
(七)申しゝ―申しさふらふ
(九)せうし―せうそこ

七 東宮度々あて宮を召す。女四宮懷胎の噂。皇太子の地位につきての正頼一家の危惧。

〔語釋〕
(一)「つややかにて」歟
(二)大宮
(三)仁壽殿も然り
(四)誤あるべし
(五)此若宮が太子に立たるゝものと思ひて斯く人人が追從するを

〔考異〕
(六)思す―思ほす

画詞　こゝは三條殿。

かくて藤壺には、御心地も今はさわだち給ひにたれど、大殿はなほおはしまして、勞り奉り給へばにやあらむ、殊に損はれ給はず、づしやかにて、(一)おてになり勝り給ひて、めでたくおはす。綾の掻練のひとへがさね、二藍の織物のきぬ、脱ぎかけておはするを、おとゞ見奉り給ふ。君だちのおはするに、正頼「若き主たちにならひ給へ。子持はかくぞ勞りなすよ」と宣へば、誰も〳〵はゝ笑みておはさうす。宰相の君、祐澄「人がらにこそ物し給ふめれ」おとゞ、正頼(二)「わが御方も、かく恐ろしげなる人こゝら作り出で給へれど、然りげにやは。内裏(三)のなどよ」と宣ひて、若宮の御方を見やり給へば、やんごとなき人參りつどひてころたちて(四)、此方などにもわたり給はず、いときら〳〵しくておはするを、如何ならむ、人々の然思ひて(五)かくはあめるを、恥や見むずらむ、と思す(六)ほどに宮より、

東宮　日頃は如何。うちはへ、此處には惱ましくなむあれば、まだえ對面せずやと

〔語釋〕
(一)誤あるべし
(二)三條の家の謂まは
(三)侍女の名
(六)母君の居所も
(七)内には入らずして
(八)實賴
(九)實忠と同棲の事

〔考異〕
(四)どもも―ども
(五)はひ入りて―はひりて
(一〇)聞え給ふ物など心して奉り給ふ―聞ゆ

の御後見し給ふとおぼしてこそは(一)、かく山里には、この君をすまはせ奉り給ふべき。さりとも、此處(二)には劣らじ。そが内に侍る、中納言(三)の君おはせよ。こゝよく守りて、人に毀たせで仕うまつれ」と仰せ給ひて、われも御車にておはしぬ。北の方は、漫に思さるれど、この君を斯くだにあらせむやは、と思しておはして見給へば、いとおもしろく廣くて、調度どもも(四)なき物なし。いと淸げにて、はひ入り(五)て見給ふに、物憂がり給ひつれど、斯うてもありぬべしと見給ふ。御座所は、こ(六)のおはすべきも、姫君のおはすべき方など樣々なり。おとゞの出居のかたぐならむと思ほす。人々の曹司などは、いとよくて有り。御藏には、故殿の置かせ給へる、布、錢などあり。こまかなる物などは無し。御前の物などは、宣ひおきたる人々參る。民部卿は、實正「三日過して參らむ」とて、外ながら(七)歸り給ひぬ。かうて三日過ぎぬれば、新宰相(八)もろともにおはして、實正「いと目やすくおはしぬる。今一つ(九)の事も、いかでせさせ奉りてしがな」と聞え給ふ(一〇)。物など心して奉り給ふ。

うにしつらはせ、御簾かけさせ給ふ。屏風、御帳よりはじめて新しく淸げなり。この殿は一町は檜皮のおとゞ、板廊、渡殿、板屋どもあまた、藏などあり。池近くをかしげなり。三日まで物參るべき事など人々に宣ひて、御車三つ御前などあまたして、かの麓におはして、近くなれば、我先だちておはして、聞え給ふ、實正「さきには、日の暮れにしかばなむ急ぎて。さらば渡らせ給へ、とてなむ。いと暑く苦しく侍れども、今日ならでよろしき日の侍らざりつれば、參り來つ」と聞え給(一)へば、實正「なでふ心をか。たゞおはすらむまゝにて、人見るべき所にも侍らぬを」と聞え給へば、實忠妻「さらば、(二)早く率ておはしましねかし。(三)わいても、世を憂しと入りぬめりしを、(四)いづちにこそ」聞え給へば、實正「などおもほす事や、(五)いてこむ、わたらせ給ふまじきさまに宣へば、(六)如何なる事ぞ」(七)北の方、實忠妻「こゝには何しにかは。(八)これより深くとこそは。世の中の心憂く思ひ給へられしかばこそ、年頃斯うても(九)うとからぬ」(一〇)實正「一所は、(一一)かく此處にもいかでかものし給はむ。こ

〔語釈〕
(一)「と聞え給へば」衍文なるべし
(三)「わいても」は「わが身は」歟
(四)「いづちにこそ」は「いづちにかと」歟
(五)誤あるべし
(六)「宣へば」は「宣ふは」歟
(八)一層深き山に隠れん積なり
(一〇)誤あるべし
(一一)袖君一人では

〔考異〕
(二)早く—早々
(七)事ぞ—事ぞや
(九)斯うても—かくても

〔語釋〕
（三）誤あるべし

〔考異〕
（一）のべ見し—のべにし
（二）の君—ナシ
（四）なにか—などか

實正　今はかくのべ見し人もなきものを君さへ外へ行かずもあらなむ

と宣へば中納言の君、(一)(二)

實忠　わが故となげきし路にわたれかし君がしるべにならむとぞ思ふ(三)

と聞え給へば宰相、

實正　なき人の路のしるべに君なくばおくれて我もなにか惑はむ(四)

と宣ふを宮の君聞き給ひて、

昭陽　有りし世もかゝらばとのみ嘆かれて君にもつひに後れぬるかな

と聞え給ふ。中納言は、御前などして出で給ひぬ。民部卿も、宰相も、宮の君に、實正實頼「いかに心細く思ほすらむ。今、たがひにしば〱参らむ。宿直人なども
さゝせてを」とて殿におはしぬ。

かくて六日になりぬ。民部卿、そで君の御迎へし給はむとて、三條殿に物し給ひて、損はれたる所つくろはせ、池拂はせ、御調度どもは、皆あれば、置所有るべきや

はじや。見苦し。早く(一)ともかくもし給へ」と聞え給へば、實忠「昔はさても侍りぬべかりし。年頃まからねば、忘れ侍りにけむ。今は人見(二)給へむも思(三)ひ給へず。なほ彼の賜びたる所におかせ給ひて、時々(四)を訪はせ給へ。こゝには、小野にまかりて、暑き程過して、あるやうに隨ひて、まうで來べくば、時々もまうで來むかし」民部卿、實正「何せむにか(五)今更に又かへり給ふべき。年頃さて物し給へるを、公私惜しみ給ひ、交らひのついでなどにも、常に思ひ出でられ給ひつゝ、いみじく悲しくなむ侍る。今はかく、親もおはしまさずなりぬるを、數多ある中(六)らひにもあらず、今は斯うて物し給ふに、旅の樣に思ほさ(七)るらむ。今は、侍る所もいと便なくなりにたり。昔のやうにはあらで、(八)童べの侍る所に入りて見給ひて、同じ所に物し給へ。何せむに歸り給ふべき」と申し給へば、實忠「鈍色(九)のきぬのけにや侍らむ、いとむづかしう侍れば湯など湧かさせて、物せむとなり。今侍りしやうにはあらで、京にもまうで來なむや」と宣へば民部卿、

〔語釋〕
(一)妻を持たんとは思はず
(八)實正の妻の居る簾内にも入りての意歟
(九)喪服を著て居る故か

〔考異〕
(一)早く—早う
(三)思ひ—思う
(四)時々を—「を」ナシ
(五)にか今更に—にかは今又
(六)ある中らひにも—あるなる子にも
(七)思はさるらむ—思はすらむ

もあらむ」と宣へば、昭陽「いで、おなかま、給へ」など腹立ち給ふを、中納言[一]聞き給ひ、かたはらいたく思ほす程に、民部卿おはして、物語し給ふついでに、實頼「先つ頃かの山本[二]にまうでて侍りき。かの宣ひ[三]おきし事ども侍りし文ども奉りて、「此方わたり給ひね」と聞えしかば、「今更に何しにかは、若き[四]人は然も」などなむ。御服いとおもく著給へりき。不益[五][六]にしなし奉り給へるは、如何にぞとて、隠れ給ひしかど、見奉りしかば、皆[七]かたち人にこそば。年頃、さばかり物を思しつつ、服やつれし給へれど、さらぬ人にも多く勝りてなむ。女君[八]は、いとをかしげにて、見まほしき容貌なむし給ひけるに、御髪のいと長げなりしを、搔い越して見給へりしかば、いとうるはしく覺えて[九]、七尺ばかりにぞありし。頭つき、顔様、いとめでたかりき。かゝる人を見給はで[一〇]徒らになし給ふ、何でふわざぞ。よき女子は親の面をも起す[一一]ものにはあらずや。人の[一二]容貌を音に聞き給ひて、御身をも妻子をも、徒らになし給はなむ。そこの思ほし騒ぎ給ひし人に[一三]、かの君劣り給

〔語釋〕
(一)實忠
(二)實忠の舊妻の處へ
(三)季明の遺言の券
(四)袖君は遣りてもよし
(五)實忠がすてたる娘はどの樣になりしぞとて
(七)母子ともに器量よし也
(八)袖君
(九)「おほくて」歟、一本「おもはえて」
(一〇)世話せずして
(一二)あて宮の
(一三)あて宮

〔考異〕
(六)不益—ふよう
(一一)もの—ナシ

昭陽「など己は、密夫し、人と文通はしやはする。(一)然る人をこそは、よきにはし給ふめれ」宰相、實頼「(二)かゝるをぞ(三)宣ひしぞかし。誰か密なるわざする。(四)疎からぬ御中にこそ。かくな宣ひそ」宮の君、昭陽「誰かは、宮にある人の限、(五)この盗人をよしといふ。人は幸(六)のおにこそあめれ。ありとある限、御子にもおはせよ、上臈にもあれ、面やは見え給へる。(七)夜晝入り居給へれば、宮人は上のも下のも、わびごとをこそすなりしか。(八)出でて去にたれば、院の御方もまうのぼり給ひて、立ちぬる月よりは、(九)さはり物し給はず、悩み給ふなり。こゝにも御文(一〇)賜ふ。御返宣ひ聞えさせずなりにけむこそ、陰陽師、巫、神佛もなき世なめれ。許多の人の、我をもとにて、せぬわざをすればとだに言はずなりにけるこそ。同じくば、(一一)この宮、男産み給はなむ、我こそはと思ひて、生み連ねたる(一二)者の、(一三)口開かず押し伏せつべく」と宣へば宰相の君、實頼「天下にいへど、時の人の母とするや。(一四)梨壺と世に思ひためれど、何事もあらじ。まして、更にはおはすとも、(一五)宮などのは、我心よせ

〔語釋〕
(一)あて宮をいふ
(二)其様な事をいふのを
(四)君とあて宮とは従姉妹なり
(五)あて宮
(六)誤あらんか
(七)東宮が
(八)あて宮が里に下りたれば
(九)月
(一一)女四宮
(一二)あて宮をいふ
(一四)此次の太子は梨壺腹の皇子ならんと世人は思へど然あるまじ
(一五)女四腹の皇子には最負はあらじの意なるべし「我心よせもあらむ」は「御心よせもあらじ歟」

〔考異〕
(三)宣ひしぞ—宣ふぞ
(一〇)賜ふ—賜ひ
(一三)開かず—あかで

や。

と聞え給ひて、奥の方に、

あて宮 惑ひけむとか。然らざりせば、

　　山べにしすむときかずば時鳥なべて知らせぬ聲はせましや

　　哀ときゝしかば。

とて賜へれば、私にも文かきて取らせつ。西の對の御産養の物ども取り出でたれば、君だちいどみつゝ取り給へり。物に入れてをさめ給ふ。

かくして中納言御文見給ひて、「げに、わが志を見給へばこそ、かくも宣へ」など宣ふ。

宰相(一)参り給ひて、實頼「宮にも内裏(二)にも昨日参りて侍りしに、宮の御消息、「日頃經るまゝに、いかに心細く、今は效なし。世に人の皆ある事にこそあめれ。たゞ例の人の有るやうにて物し給へ。何かさて物し給ふ、など聞えよ」となむ」宮の君、

〔語釈〕

(一)實頼が昭陽殿へ

(二)東宮

㊅宮の君、あて宮を罵る。實正再實忠に舊妻と同棲せんことを勸む。實正、實忠の妻子を三條の家に迎ふ。

思う給ふるやうにて、(一)平かにおはしまするを、限なく喜び聞えさせつれど、物騒がしさ(二)ためらひて、今までなり侍りにける。(三)ひとは、昔のみ思う給へられて、物も覺え給へざりしかば、何事を聞えさせ(四)侍らむ。いでや、

こゝにてもきゝける聲を時鳥まどはれしかなしでの山路に

とてなむ。(五)獨り(六)侍るはらからなどをこそ、女たよりには(七)すれば、御覽ずらむかし。(八)おとゞも宣はせしやうに、(九)昔侍從の君の御代に思ほしなさば、宣ひし所へもまかり(一〇)歸らじ。今日明日のほどにまかりて、今。さらば、時々は近くを。

と聞えたり。御覽じて、兵衛に、あて宮「かく書き給へ」とて書かせ給ふ。

あて宮かくなむと(一一)聞えつれば、自ら聞えむとすれど、まだはかぐ〜しき心地もせぬを。一夜は御すまひ制し聞えむとてなむ。などかは今は、または歸り給ふべからむ。世の人の有るやうにて、近く物し給へかし。さらば思ひ聞えつべし

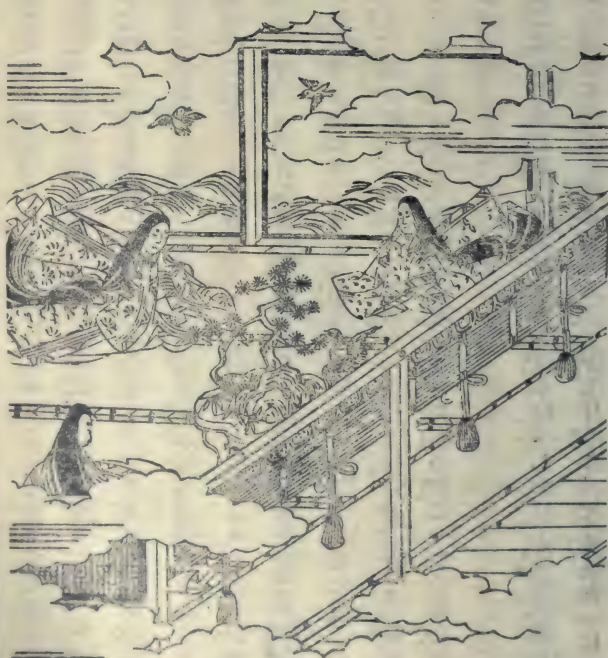
〔語釋〕
（一）あて宮の平産を
（三）「一日は」歟
（四）「侍りけむ」歟
（五）誤なるべし
（八）正賴
（九）「昔の侍從の」なるべし。侍從は仲澄
（一一）あて宮に

〔考異〕
（二）ためらひて—がうちに
（六）侍る—ある
（七）すれば—それは
（一〇）歸らじ—つゝ

正頼「げに然なめり。他人のすべき業にはあらず。これを見知らぬ樣なるは、いと心なきわざかな。如何せむ(一)」と宣ひて、御火取召して、山の土所々試みさせ給へば、さらに類なき香す(二)。鶴の香も似るものなし。白き香はなど(三)見給へば、麝香の臍、半ほどばかり入れたり。取う出て、香を試み給へば、いとなつかしくかうばしき、物の例に似ず。正頼「あやしく、この物どもの、こゝらあるが他物に似ざらむ」宰相中將、祐澄「ある人の忍びて申しゝは、「いと有りがたき所より、故治部卿の御唐物領ぜられたり(四)」とこそ申しゝか」おとゞ、正頼「げに然こそあなれ。去年の冬、人に聞かせで、お前にて御書仕うまつり給ひき。かゝる世に似ぬ物など見ゆるは」など宣ふ程に、新中納言殿より(五)「兵衛の君に」とて御文あり。御覽ぜさすれば、

實忠いと哀に嬉しかりし事は、すなはちと思う給へしかど、世の人の心つくさせ給ひしかば、げにうたてもやと思う給へし程に、念じ聞えししるしにや、

〈語釋〉
(五)實忠

〈考異〉
(一)如何—いかに
(二)香す—かをりす
(三)香はなど—かはなど
(四)領ぜられたり—えられたり

かな、同じ様なる物の音とは言ひながら、此の族は筋ことなることの、お前にて仕うまつりてはなむ、恐ぢ給ひしか」あて宮「さて宮はいかゞ宣ひし」と問ひ給へば、すけ「いかでか、斯うはしも聞き給はぬものを。まことに聞えたるならむとこそきゝ給ひしか」と聞ゆれば、よくも宣ひけるかなと聞召す。

かくて大宮は、孫王の君に一夜とり置かせし物どもして参れり。蓬萊の山を御覧じて、あて宮「いと煩はしくしたるものかな。何處のならむ」と宣ふ。孫王の君に語らひて、(一)参らせ給へれば、をかしと思ひつれども、岩の上に立ちたるこの鶴どもを取り放ちつゝ見給へば、(二)沈の鶴はいと重くて、取る手しとゞに濡る。「あないみじの物どもや」と言ひのゝしる、銀のは、かねなれど殊に重くもあらず。腹に物をしたに入れたり。書きつけたる歌は、黄金の泥して、葦手なり。「これは、誰が手ぞ」とあつまりて見給へどえ知り給はず。御方御覧じて、あて宮「大將の御手にてこそあめれ。若宮にとて、手本ありし、同じ手なめり」と聞え給へば、おとゞ、

〈語釈〉
(一)仲忠が奉りたるものなれば
(二)孫王の君が

〔語釋〕
(二)仲忠
(三)女一宮
(四)女一があて宮方に
(五)仲忠が迎に

〔考異〕
(一)心地は—「は」ナシ
(六)此以下誤あるべし

物は七の寶にしかへして、いと淸らなりきや」といへば藤壺は、あて宮「一の宮の御方にて、げに珍らしき心地(一)はし給ひけむかし。さる人の、心に入れて、居立ちてし給ひける事なれば」内侍のすけ、「さて、更にも生れおち給ひしすなはち、父おとゞの舞し給ひしよりはじめて、面白き事ぞ限なく侍りし。大殿、七日夜は舞し給ふ事、こと上達部すかし給ふとて宣ひ、琴彈かれなどせさせ給ひしは、さる事は何處にか。さる效ありて、犬宮のいとをかしくぞおはする。この頃這ひなどして居給へり。人御覽じては、たゞ笑ひに笑ひ給ふ。(二)おとゞの君は、とみの事あれど、率て遊ばせ給ひつゝ、はた立ち給はず、夜、晝、膝にぞすゑ奉り給へる。げにいと美しきや」御方、あて宮(三)「宮との御中は如何あなる」すけ、「如何ばかりめでたき御中ぞ。そは、先つ頃此方に(四)おはしけるに、(五)參り給ひけれど物聞え給はざりければ、五日六日入り臥し給ひてこそは、恨み奉り給ひしか。(六)御遊これかれし給ひしを立ち聞きしかば、御方の琴の御琴を、この筋にあそばしゝがいと怪しかりし

〔語釈〕
（四）あて宮の

〔考異〕
（一）近く—近う
（二）ごとして—ごとくして
（三）裝束など—裝束どもなど

づつ、入れたり。その鶴に、

　藥おふる山のふもとにすむ鶴のはをならべてもかへる雛鳥

何處よりともなくて夕暮の紛にかきすゑたり。涼の中納言の君、かやうに弄び物の具まで奉り給ふ。その夜も、これかれおほみ遊などして、今宵は氣近くし（一）てなまめきたり。

夜明けぬれば、つとめて御座敷きかへ、例のごとして（二）、人々裝束（三）などしてさふらふ。内侍のすけ、はじめより參りて、例の御湯殿の行事す。御湯殿は、孫王の君に、殿守といふ參る。しめやかなる折にて、お前にてこれかれ物語するついでに、内侍のすけ聞ゆ、「こゝらの御産屋にあひまうでける中に、物多く賑はゝしかりし事は、この（四）御産屋。七の寶降り、おもしろく、心肝榮えし事は、犬宮の御産屋。此度のは、いとあらまほしう、淸らにぞ侍るめる。兵衞督殿は、おもしろき事はなくて、いかめしく賑はゝしき事はいみじく侍りき。かづけ物淸らに、萬の

〔語釋〕
(一)耳は
(二)諺か
(三)口笛
〔考異〕
(四)奉れ—奉り

㊄仲忠の產養の贈物。內侍のすけ、あて宮に仲忠夫婦の噂す。實忠文をあて宮に贈る。

(五)かうばしき—かぐはしき
(六)黑う—ナシ
(七)はらふくらに—はちふくちに
(八)藥—菓

生の恐ろしかりしかば、みゝは(一)すはりにしを、今宵は、いたちのまと(二)こそ聞き給へけるは、物一つあそばせ。仕うまつりて試みむ」と宣ひて、笙の笛を奉り給ふ。おとゞはかはぶえ(三)を遊ばす。兵衛督、中納言、大篳篥。これかれ御琴ども遊ばして、夜一夜遊びあかし給ひ、歌などよみ給ひつゝ、曉には、みな物などかづき給ひてかへり給ひぬ。つとめて宮、昨夜の物、こゝかしこへ奉れ(四)給ふ。涼の中納言、はての日いといかめしくし給ふ。

かくて九日の夜は、大殿、內裏の大饗の御前のものし給ふ。こゝかしこより、いと淸らにて奉り給ふ。右大將殿、大いなる海のかたをして、蓬萊の山の下の龜の腹には、かうばしき(五)葡萄を入れたり。山には黑方、侍從、薰衣香、あはせ薰物どもを土にて、小鳥、玉の枝、竝み立ちたり。海のつらに、色黑き鶴四つ、皆しとゞに濡れて、そらなる鶴をばいと黑う(六)、白きも六つ、大きさ、例の鶴のほどにて、銀をはらふくらに(七)鑄させたり。それには麝香、よろづの有りがたき藥(八)一つ

一の宮の御方より、子持の御前、おとゞの御前、兒の御衣、襁褓、いと清らに調じて奉り給へり。白き折櫃に、黄ばみたる綺かきて、白き黄ばみたる錢つゝみたり。御いし(一)の臺に、例の鶴あり。洲濱に、

ゆく末も思ひやらるゝいしにのみ千歳の鶴をあまた見つれば

大將の君の手にてかき給へり。

源中納言殿の北の方、いといかめしう仕うまつり給ふ。男がたのは、(二)左衛門督の君、よろづの所々のこと、皆君だちあたり給ひつゝし給へり。所々より、御産養し給はぬなし。おとゞの君は、外に出で居給ひて、おはしまさひし時は客人御子(四)たちもいさゝか集ひ(三)給ひしを、今さしもあらねど、太政大臣、御子たちをはなち奉りて、(五)右大殿よりはじめて、まうで給へり。宮の殿上人などは、無きなし。下人も残るなく參れり。かくておとゞの御笛、御琴ども遊ばせば大將、仲忠「年頃、久しく承らざりつる御遊は、(六)今宵の料におかせ給ひけるにこそは」おとゞ、正賴「後

〔語釋〕
(一)石の臺歟
(二)忠澄
(三)此處解しがたし誤あらんか
(六)正賴

〔考異〕
(四)御子たち―きんだち
(五)右大殿―右大臣

なむ。然りぬべくば、夢ばかりも自らも宣へ。うちも驚かされたりとも、(一)いとよく見えつべしや。

とて奉り給へり。大宮見給ひて、大宮「かく人の親になり給ひて、心しておはしますこそ哀なれ。覺束なしとあめるを、(二)御返も、臥しながら聞え給へかし」と宣へば聞え給ふ、

あて宮承りぬ。まだ筆も取られ侍らねど、覺つかなしと宣はせたれば、臥しながら聞えさする。如何にと思ひ歎きつるを、今日まではかく聞えさするを、後はいかゞ。人の親にとか宣はせたるは、(三)よろづはや見るとかいふなることをなむ、今斯う思ひ給ふるこそ。旅人に賜はせたる物は、あるじまでなむ悦び聞ゆる。他事には。

と書き給へれば、宮つゝませ給ひて、御使に女のよそひ、下人に祿など賜ひて、奉り給ひつ。

〔考異〕

(一)ともいとよく―とて
いとゞよく

(二)御返も―御返事も―
御返しも

(三)よろづ―よつ

〔語釈〕
(二)産婦をば
(三)損害なき様にしてあて宮を内裏へ還すべし
(四)東宮
(五)度々の御返事は
(六)あて宮をいふ

〔考異〕
(一)何事をか仕うまつらむ―何事をつかまつらむ

らし給ふ。宮の御腹の君だちは、籠りておはす。御手づからし給へば、君だち、「(一)何事をか仕うまつらむ」と聞え給へばおとゞ、正頼「其處たちは、まだ見知らぬならむ。翁は、多くの子、孫の母も勞りならひたり。(二)かゝる人をば、この折によく勞り心しらひつれば、容貌もことに(三)損はれぬものなり。宮の斯う思すなるに、つひやかさでこそは參らせめ」とてよろづに有り難き物をしてまゐり給ふ。

産養し給はぬ人なく、いと淸らにし給ふ。(四)宮より、七日のは、御屏風、御座よりはじめて、長持の脚つきたる三つ、辛櫃五よろひに、綾錦よりはじめて、萬物入れさせ給へり。御文あり。御使は太夫。

東宮(五)たびたびのは見給へき。自ら宣はねば、おほつかなくなむ。如何にと思ふ驗にや、ことなる事なくて物し給ふなるを。よろこび、萬の事見ぬ物となりにけるこそ、あらためまほしくこそ。さて、これは、(六)旅人の料にとて。あまたの親になり給ひぬるをなむ、いと哀に。今は、とく對面もがな。とのみ

今日ならむ辛うじて一つ(一)づつのりつかひしてくまにはなとか

(二)ねぎごとも肯かずなりにしかさまには神のおほかるくほてそてとぞ

とあるを孫王の君、「誰にか。例の人のすさびにこそあめれ。久しくかやうの事なかりつるを」と宣ふ。乳母、「里におはします程を思したるなめり」といふ。(三)君は、いかでかこれが返事聞えむと思へど、さるべき折もなければ、お前にとり出でて御覧ぜさすれば、あて宮「いと淸げなる神のおろしかな」と宣ふ。鰹などくばり、飯粒、葉盤は持たり。

かゝる程に、晦になりて、いと平かに、男御子うまれ給へり。氣色もなくておはしつる程に生れ給へり。人々は聞きあへ給はず。おとゞ、宮、よろこび給ふこと限なし。如何ならむと思ひつる度しも、何事もなくし給へれば、生れ給へる(四)御子をうつくしみおはさふ(五)。宮より御消息たちかへりあり。おとゞ、睦ましく仕うまつる人を御前に召して、萬調じてまゐり(六)給ひ、思ふやうに人のえせぬをば、御手づか

〔語釋〕

(三)孫王の君

(六)あて宮に食はせ

〔考異〕

(一)一つ…なとか—一ついろのりつるひしてくすにはなとか

(二)此歌誤脫あるべし

(四)あて宮第四の皇子を産む。正賴の喜

(四)給へる—給ひつる

(五)おはさふ—おはさうす

ばり奉り給ふ。藏人少將、近澄(一)「おはせや君だち、然るべからむ人に橘くはせむ」と、手ごとに君だち弄び給ふ。御返は、

あて宮日ごろ訪はせ給はざりつれば、いと心細き心地なむ。さて、これはさしも承らぬものを。

　みにもかく昔の人をならしつゝはな橘をなにかうらやむ

ことごとにまた聞え給ふ。大宮、御使に、女の裝束一くだり賜ふ。

かゝる程に孫王の君、藤壺にある夕暮に、かは、はなれてくろき水桶の大きやかなる、(二)四つ五つかさねて、女どもさし入れて去ぬ。局の人々、「あやしき物かな。御前に、かゝる物を(三)さし入れて去ぬる」とて見れば、大きなる葉盤を、しろき組して結ひて、五つさし入れたり。取り入れたれば、程は桶の大きさなり。あけて見れば一つには、練りたるきぬを飯盛りたるやうに入れたり。今一つには、鰹、鮭などのやうにて、沈入れ(四)たり。葉盤の蓋に、生女の手にて、

〔考異〕
(一)おはせや—おはすや
(二)四つ五つかさねて—四つつゝかされて
(三)物を—「を」ナシ
(四)沈入れ—沈を入れ

黄ばみたる色紙一かさね掩ひて、龍膽の組して結ひて、八重山吹の造り花につけてあり。おほん文には、

東宮おぼつかなからぬ程にと思ひ（一）給へど、たのめし程を過されし（二）かば、それがつらさ（三）にこそ此の頃は夜の間はいかゞと、覺束なく思ひやられ（四）。さて、これは（五）幼き人々に、そこに見給ふほとだに、哀にし給へかし。

うらやましいま（六）五月まつ橘やわがみにひとはいつか待ち出む

と思ふ、心もとなくなむ。

とて奉り給へり。大宮、御袋あけて見給へば、大いなる橘の皮を、横さまに切り（七）て、黄金を實に似せて（八）、包みつゝ、一袋あり、大宮、「あな煩はしや。いかで、こは、せさせ給ひしぞ」と問はせ給へれば、例の藏人、「兵衛殿、中納言殿の仰せごと（九）承り給ひて、お前にて、これかれなむ仕うまつり給ひし」宮、大宮「かやうのをかしきわざは、かの君ばかりぞし給ひ出でられけむかし」これかれに、押し包みてく

〔語釋〕

（五）皇子たちへ贈ると也

（六）古今集「五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」

〔考異〕

（一）思ひ—思ふ

（二）過されし—過されにし

（三）つらさにこそ—つらさにもこそ

（四）やられ—やられて

（七）切りて—「て」ナシ

（八）似せて—はらせて

（九）仰せごと—仰せごとを

さまにても歇み侍りなむ、此處ながらもなむ」いらへ、實正「あぢきなき事を。早わたり給へ。そこにさへ添ひ奉り給はずは、いかでか(一)、後見聞え給ふ人なくては。さても世捨て(二)給ふばかりの程にはあらざめり。(三)かの君も、つひにさてのみや歇み給はましと思す心なぐさめ給ふ折も有りなむ」など聞え給ふ。斯うて物まゐり給ふ。色々の折敷四つして、ひきぼし、菓物などして、御肴とて(四)、前に柑子、橘、ひ(五)とこ、あふち(六)など有るをとらせ給ひて、御酒まゐり給ふ。御供の人には、御前にも、下人にも、皆さまぐ\に、御前には皆腰插賜ひ、下人には祿など賜ひてかへり給ひぬ。

畫詞　こゝは志賀の山本。

かくて藤壺(七)、今日明日にあたり給へば、みな御産屋のまうけさせ給ひて、大殿におはしませば、君たちは、三所、四所、夜ごとに宿直し給ふ。御方におはしまして、あるは夜とまり給ひ(八)などする程に(九)宮より、よき程なる銀、黄金の橘、一餌袋、

（語釋）
(三)實忠
(五)未考
(七)あて宮の御産
(九)東宮

（考異）
(一)いかでか—いかゞ
(二)世捨て—世なれ
(四)とて—にて
(六)あふち—あぶちもち
㊂東宮よりあて宮へ贈物。出處不明の贈物。
(八)給ひなど—給ふありなど

袿一かさね著給へり。御年十七(一)ばかりにて、御髪いとめでたし。頭つき御有様いと美しげにておはす。母君、いと物々しく愛敬づきて、髪うるはしく、淸げなり。年三十五のほどにて居給へり。民部卿(二)、女君に、實正「まろを親とはおぼせ。今はよろづに仕うまつらむ」(三)なとて御髪をかき出でて見給へば、いと多くて、七尺ばかりあり。北の方、實忠妻「髪などは生ひぬべく侍りしかど、世の中の斯くなりにしより、夜晝おもひ歎き、ある時は伏し沈み、頭ももたげず嘆きて、顔かたちも、人のやうにも生ひ出でぬなめり。怪しく、この子どもは、人にも似ず親を戀ひかなしみつゝ、一人は徒らになりぬめりき。(四)これも、今に忘れざめれば、また如何あらむ、となむ」民部卿、實正「いと怪しや。何でふ契ある事にかありけむ。萬の事妨のやうにあめれば、世の常ならぬ(五)御好となむ見給ふる。今はなほ、里の殿へ出で給へ。今よき日とりて、御迎に」と聞え給へば、實忠妻「いなや。今更に、(六)憂かりし里にも何か(七)。若き人(八)の、おはしまさむ所にも參り侍れかし。此處には、やがて黒き(九)

〔語釋〕
(二)袖君
(三)「なとて」なるべし
(四)袖君も今に父を戀ひ慕ひ居る故
(八)若き袖君は實正の處へ引取らるゝもよからん
(九)身を墨染にやつして

〔考異〕
(一)十七ばかり—十七さいばかり
(五)御好と—御好に—御好にと
(六)憂かりし—便りしもなき
(七)何か—何かは

〔語釋〕
（一）季明の薨去も
（二）袖君
（三）季明御存生ならばと
（五）袖君は喪服を著ざる也
（七）喪服をきるべき時

〔考異〕
（四）思ろ―思ひ
（六）山里に―山里を
（八）いかゞ―いかに
（九）御小桂―御桂

世の中のことをさ〳〵聞えぬを、殿の御事も（一）久しくありてなむ承りし。いみじく悲しく、親もなき様なる人を（二）持ち侍りて、さりともおはしまさばと思う（四）給へつるものを、かゝる事をさへ宣ひける（三）」とて泣き給ひ御服などをも著給へり。例の御服をぞ君は著給へる。實忠妻「かく承らましかば、この侍る人にも重き御服をこそ著せ侍るべかりけれ（五）。心ときめきの様なれども」とて濃き鈍色の御衣一かさね、黒橡の御小袿取り出でて、著せ奉り給へり。民部卿、泣き給ひて、

實正 山里に（六）ひとりながめてわが宿の藤のさかりをいかで聞きけむ（七）

北の方、

忠實妻 松かれて藤のみありときゝしかば我も袂はふかくなりにき

と聞え給ふ。民部卿、實正「そも〳〵女君は、いかゞ（八）生ひ出で給へる。昔は、名だたる人に劣るまじく聞え給ひしを」とて御簾をかき揚げて見奉り給へば、鈍色の御几帳立てて、親も子も居給へり。姫君、薄鈍の一かさね、御小袿（九）、かいねりの

(一)あやしき御中ならむ、御歎なるべし。中納言の君の、ありし様にもあらずなりためる」と聞え給へば、實忠妻「あなうたてや。惡しかれとも思う給へねばこそ、あらまほしきやうにては。さても、(二)訪ふべき人だに、年頃まで夢の中にも聞えぬに、思ひの外におはしましたるをなむ」民部卿、實正「(三)宣はせしことのあるを、(四)すなはち參り來むとせしかど、(五)程なく御思になりにしかばなむ。(六)宣はせしやうは「こゝに物したらむ女君をば、殿の御子になし奉りて、實正ら仕うまつれ。親は世の中思ひ離れ給へる(七)人なめり。されば え知り奉り給はじ」とて奉り給ひし物ども記したる文奉り給ふ。實正「この得給へる殿は、ことに廣くはあらねど、若き人の住み給はむに、いとおもしろき所なり。(八)かく思ほしてにやありつらむ、年頃御心とどめて造らせ給ひ、(九)有るべきこと皆なむせられたる。はやく渡らせ給へ。この南殿は、中納言の君なむ賜はり給へる。近隣にて、今だに御中よくてものし給へ」と聞え給ふ。北の方も見給ひて、いみじく泣き給ふ。實忠妻「かくあさましき所なれば、

（語釋）
（一）他に仔細ありての別居ならば一入の歎なるべし
（二）實忠
（三）季明の遺言
（五）父の喪に服することとなりし故延引せり
（六）父の
（七）袖君を季明の子にして
（八）季明がかねて袖君に譲る積なりしと見えて

（考異）
（四）あるを—あるをなむ
（九）有るべきこと—有るべきさま

きにもあれ新しきにもあれ人は（一）更に見給はじ」と宣へば、實正「さらば、かの大（二）（三）君も知り給はじとするか。また（四）出で來とも、小くこそはあらめ。大人になり給へる人を知らじと思すらむこそ」實忠「いで、何か今は。身をだに知らぬものを」と宣へば、實正「さらば、此處（五）にこそは尋ね聞ゆべかなれ。殿の奉られたんなる御料（六）の御調度ども、家など、誰にかは。徒らになされて効なくこそは」など宣ふ。中納言、實忠「こゝに賜へる所は、え侍りぬらむや。然りぬべくば、時々侍りぬべからむ様にしなさせ給へ」いらへ、實正「其處は、全く無くはあらざりし所なり。（七）女君の御料なるなむ、萬の物具して、たゞ今も、おはしたらむに便なかるまじき」など聞え給ふ。

かくて民部卿（八）は北の方の住み給ふ山里にまうで給へれば、北の方對面し給へり。民部卿、實正「年頃（九）いとおぼつかなく、何處にものし給ふらむともえ承らざりしを、ある人の、斯うてなど申すにつきてなむ、承りし。（一〇）いであさましや。されど、

〔語釋〕
（一）妻は持つまじ
（二）袖君
（四）此後子が出來たりとも
（五）自分が袖君を世話せねばなるまじ
（七）實忠の舊妻
（九）實忠の舊妻

〔考異〕
（三）大君も—大君は
（六）御料の御調度ども—そこらのたからなども
（八）民部卿は—民部卿母
（一〇）いで—いらへ

しこと如何にせむ、然宣ふとて里住をせば、今は何の効かは。心ならぬやうに、世の人こそ思はめ、强ひて山里にあらば、本意かくてあらむと思ふにこそ有りけれ、とこそは(一)思ほすべかめれ、など思ほしわづらひて民部卿に、實忠「斯う〳〵なむ有りし」と聞え給へば、實正「然りけむものを、まことにその事を思ほさば、(二)同じやうにて物し給へば、志なき樣にこそは。かくて物し給はど、公私惜しみ聞ゆれば、聞きにくさには。事し佗び、うち(三)あばめて、泣く〳〵まじり給ひしかど、夢ばかりの聲をだにし給はず、世の中に心を(五)つくしやかに(六)思はれ給へる人の、今(四)更に對面してさ聞え給ひけむも聽き給はず、年頃の御志の消えぬるにこそはあらめ。この度の御悦は、(七)(八)おとゞ世におはしまして交らひても、(九)右大辨をば越し給ふべくもあらぬを、おぼろげの御志(一〇)にはあらず。なほ時々は小野にも通ひ給ふとも、かの山里に物し給ふ(一一)人、むかへ奉り給ひて、(一二)御すましの事など申させ奉り給へ」中納言、實忠「身一つは京に通ひつゝも侍りぬべし。(一三)彼處にも聞えてき、古

〔語釋〕
(一)あて宮が
(二)あて宮の話を聞かぬ時と同樣の生活をせば
(四)以下あて宮の事
(五)「ゝしやかに」歟、一本「つゝしやかに」
(六)あて宮
(七)季明存命にて
(九)師澄
(一一)舊妻
(一二)洗濯
(一三)あて宮にも咄したる事なるが

〔考異〕
(三)あばめてーあはせて
(八)おとゞ世におはしましてーおとゞおはしましてし世に
(一〇)にはーにも

ぞかし。見奉り給ふに效なくはよにもあらじ(一)」主のおとゞ、兼雅「されど、本意違ひたるやうになむ(二)。一日、中納言(三)の、いと珍らしう參られたりけるは、如何なる事にか。殿をふかく恨み奉りて交らはれぬ、とこそ承りしか(四)。然あるは、此度のことは、萬のことを斯う忘れぬべき御志ぞかし。これを見給ふるこそ心遣は」客人のおとゞ宣ふ。正頼「故おとゞ(五)のありしかばなむ(六)」主のおとゞ、兼雅「さ宣へる、うしろめたき樣なり。(七)かの筋によりてと見たればこそ、世の人みな心づかひし、畏まり聞ゆめれ」(八)など御物語し給ひて、御中いとよげに見ゆ。女方には、おとな、童、下仕、限なく裝束きていと多かり。かづけ物ども、樣々にいとめでたくして、取り出させ給ひ、引出物みなあり。御たちはいと心ことなり。かくて夜一夜遊びあかし給ふ。御前の池に鶴樂にあはせて、出で來つゝ舞ふ。つとめて歸り給ふ。

かくて中納言(九)は、此の殿に又物し給ひて、小野へ還り給ひなむと思すに、藤壺宣ひ

（語釋）
（三）實忠
（四）實忠が參られたるは
（五）誤脱あるべし、季明の頼みによりて特に實忠を保護したる也との意なるべし
（七）あて宮の事
（九）實忠

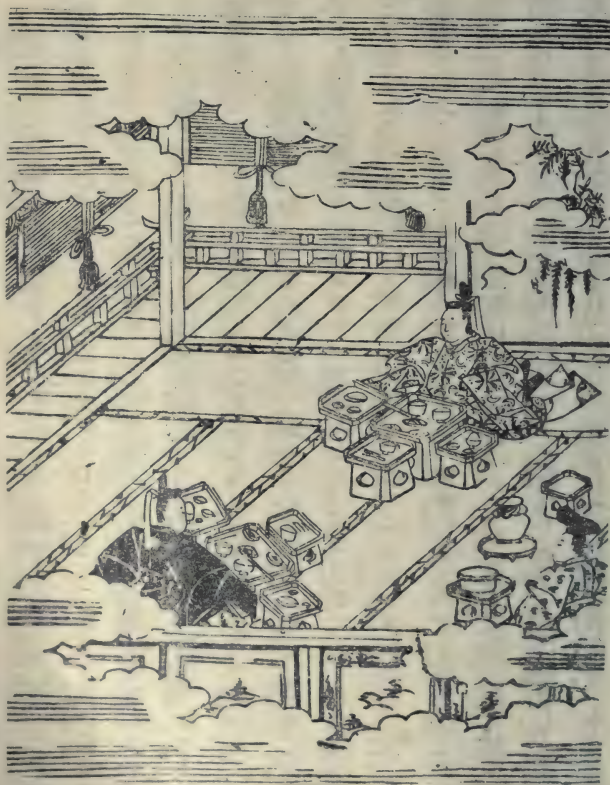
（考異）
（一）あらじ—ナシ
（二）なむ—なむ侍る
（六）なむ—ナシ
（八）など—と

㊂實正、實忠に京に歸りて舊妻と同棲せんことを勸む。滋賀の山本に實忠の舊妻を訪ひて京に出でんことを勸む。

〔語釋〕
(二)俊蔭の卷の末に見えたり
(六)仲忠が正頼の外孫たる女一を娶りたれば
(七)「みすく」、田中道麿曰、未熟歟、一本「みすゝ」
(八)あて宮を仲忠に娶せんと還饗の時約束せし事
(九)仲忠が妻の女一宮は

〔考異〕
(一)らむをとて―らむを聞きていかゞとて
(三)ごと―ごとく
(四)こゝにも―こゝにても
(五)こと―ことども

ば、宮たち「「大饗の所にな著きそと、たび〱上の宣はすれば、左の大殿にだになむ著き侍らずなむ。さりとも、然は宣ふらむを」(一)とて、おとゞ諸共にまうで給ふ。おとゞ、悦びかしこまり給ふ。この大饗のことは、宮吏に知り給はず。

かくてこのおとゞ、主のおとゞに聞え給ふ、正頼「此處には、(二)還饗はじめし給ひし時ぞ參りたりしかし。年頃あらぬさまにしなさせ給ひてけり。昔より斯く習ひたるしきに侍れば、御志もかはらで、同じごと(三)思ひ給ふれど、そのことゝも侍らで、え殊更に聞えさせ侍らぬや」主のおとゞ、兼雅「こゝにも(四)、更に隔て聞ゆることも(五)なけれど、そが中に、今はた大將など然て(六)さふらへば、昔より志ふかく」など聞え給ふ。正頼「さきに參りたりしには、大將のまだみすく(七)にものし給ひしかばこそ、人心地もせしか。此度は、聞え觸るべくもあらぬこそ」と聞え給へば、主のおとゞ、兼雅「さきの御碁代物(八)、たがへさせ給へりとて、常に嘆きしものを」と聞え給へば、正頼「さて奉らずや。かの持(九)給へる人は正頼が孫にて、やしなひ奉る

訪ふ。㉑實忠、あて宮と文を贈答す。㉒實忠夫婦の情舊に復す。實正、實忠の文を見て其の情を悟る。㉓正賴食物を實忠に贈る。實忠小野に歸る。㉔東宮よりあて宮へ消息。東宮、あて宮の返事なきを怪む。

㊀正賴任大臣の大饗。兼雅任大臣の大饗。

(一)かくて今日は、(二)左の大殿の大饗、やがて(三)この御方の御前にて、寢殿おもしろく、造り樣いかめしければ、し給ふ。例の如いかめし。上達部は、皆例の人々なれば、御方ことに見給はず。右のおとゞとばかりぞ客人にて物し給へる。又の日は、(四)右の(五)大殿の、いといかめしうし給ふ。三條殿いとおもしろく淸らに造りなされたれば、其處にてし給ふ。寢殿は上達部の座にしつらはれ(六)たり。東の一の對をば宮たちの御座、大臣の座には二の對、廊かけて、所々せられたり。上達部、つねに物し給はぬ所なれば、御心づかひしつゝまうで給ふ。左のおとゞも物し給ふ。右のおとど、兼雅「こゝには、この大饗しはじむる日なるを、(七)畏くとも、宮たちかたらひ聞え(八)て率て奉り給へ」と聞え給へれば、彈正の宮、帥の宮に斯う〳〵と聞え給へ

〔語釋〕
(二)正賴
(三)あて宮
(四)兼雅任大臣の大饗

〔考異〕
(一)かくて—かうて
(五)大殿の—大臣殿
(六)たり—ナシ
(七)しつゝ—して
(八)て率て—ナシ

國讓（中）

梗概

（一）正頼任大臣の大饗。兼雅任大臣の大饗。（二）實正、實忠に京に歸りて舊妻と同棲せんことを勸む。滋賀の山本に實忠の舊妻を訪ひて京に出でん事を勸む。（三）東宮よりあて宮へ贈物。出處不明の贈物。（四）あて宮第四の皇子を生む。正頼の喜。産養。（五）仲忠の産養の贈物。内侍のすけ、あて宮の前にて仲忠夫婦の噂す。實忠、あて宮に文を贈る。（六）宮の君、あて宮を罵る。實正再實忠に舊妻と同棲せんことを勸む。實正、實忠の妻子を三條の家に迎ふ。（七）東宮屢あて宮を召す。女四宮懷胎の噂。皇太子の地位につきての正頼一家の危惧。（八）女一宮懷胎。彈正宮の見舞。仲忠の痛心。兼雅、仲忠を招きて立太子に關する后宮の密旨を告ぐ。仲忠、忠こそを招きて女一宮を加持せしむ。帶を忠こそに示す。（九）兼雅、女一宮の病を見舞ふ。鬪鞠。仲忠、女二宮を隙見す。兼雅、正頼に小倉の遊覽を約す。（十）近澄等の女二宮に對する熱心。（十一）仲忠、女一宮の懷胎を悟る。（十二）女一宮、女二宮、女四宮、兼雅、俊蔭女、仲忠等桂の別莊にゆく。兼雅、犬宮を愛す。鮎を捕りて處々に贈る。詠歌、管絃。（十三）仲忠鮎をあて宮腹の若君に奉る。若君の御文を見て仲忠其の筆跡を褒む。（十四）近澄、女二宮の乳母に消息す。（十五）梨壺、あて宮等處々に祓す。（十六）梨壺腹の皇子の東宮に立つべき噂。正頼等の心痛。（十七）彈正宮、あて宮を訪ふ。（十八）實正、實忠を其の舊妻を置ける三條邸に導く。實忠、女を見識らず。そて君の悲嘆。實正、實頼と共に實忠を三條邸に留めんとして盡力す。（十九）實忠その舊妻に逢ひて昔を語る。（二十）仲忠、實忠を訪ふ。正頼、實忠を

〈語釋〉
(二)妻として持たずともよくはなきかの意歟
(三)私のいふ樣にして居給へ

〈考異〉
(一)御行心―御行の心
(四)思ひ―思う
(五)多く參り集ひ給へり―多くまゐり給へり

え給ふを、あて宮「怖ぢ給ふは、いみじき(一)御行心にこそあなれ。(二)などかは筋異なる樣には」と聞え給へば、實忠「其の筋を心憂しと思う給へ入りにしなり」と聞え給ふ。あて宮「まめやかには、こゝの爲に御志あるものならば、(三)聞ゆる樣にて物し給へ。聞ゆる樣にてあらじと思すとも、かう聞ゆることに叶ふと思して、思さるゝものならば、疎からず常に聞え承らむ。さらぬものならば、疎くて聞えじ」と宣へば、實忠「例の人の樣にては、なほえ侍らじ。斯樣に時々侍らむ、仰せごとに從ふと(四)思ひ給へて」と聞え給へば、あて宮「よし、多くも聞えじ。此處にも世の中に侍らむとも知らず。平かに侍るものならば、時々兵衛が許に訪はせ給へ。さてを聞えむ。たゞ今は、行く先の事聞えにくし」とて入り給ひぬ。中納言の君は、兵衛の君と物語し給ひて、曉に歸り給ふとなむ。

畫・詞　こゝは西の對に、慶の人々(五)多くまゐり集ひ給へり。中納言、藤壺、物語し給へり。

〔語釋〕
（一）あて宮入内の後
（二）先妻
（三）元の樣にして
（四）實忠及妻子の料として父より受けたる遺産も
（七）女の形したるものは一切見たくなし

〔考異〕
（五）彼等—ナシ
（六）世の中に—世の中には

女を餘所に見給へき。それも、兵衞の君に物聞え給へてなむ。參らせ給ひて後（一）、山里にまかり籠りては、下司にても、さる者をなむ見給へぬ。自ら、君だち時々物し給ひて見給ひつらむ。今更に、なでふことかは見給ふべき。斯くながら死なむとこそ思ひ給ふれ」とて涙をつぶ〳〵と落して、痛くためらひて、聞えもやり給はねば、いと哀と思ほして、あて宮「知らぬ人の、今珍らしきこそあらざらめ、昔（二）見給ひけむ人の哀なるも、持たまへるを、（三）物し給ひけむ様にて經給へかし。世の中に見苦しかりし事どもは、皆あらまほしき様にのみなりにためるを、只其處に斯うて物し給ふなるのみなむ、まだ見苦しかなる」中納言、實忠「それは、まかりにけむ方も知らず。（四）故殿の、實忠（五）彼等が料に侍るなるも、徒らなるべくなむ。自らも侍るべくもあらず。彼等も、（六）世の中に在るにや、無きにや、有らむとも」あて宮「民部卿こそ、在所知りたる様に物せられしか」實忠「尋ね出では、若し近く侍る所には、それら侍らむ。さりとも名殘なく、（七）さる容貌ならむものも見給へじ」と聞

（語釈）
（一）出家して
（二）私の預りてせし事ではなし
（三）安產して
（四）妻を持ちては

と聞え給へば、實忠「世の中の事聞え侍らぬ所なれば、まして思ほされむ事はいかでか。今は親も物し給はず、よろづに身の徒らにならむを、宣ふべき人も物し給はねば、様異になりて(一)、深き山に入りなむと思う給ふるを、斯くとだに聞え承らでや、とてなむ。覺えぬ悦の侍るを、いとも怪しがり侍るに、人のつぐる様に侍りしかば、「さまでさて覺しける事。さりとも聞えさせてむ」と賴みてなむ」上、あて宮「御悦の事は、此度はこゝにも知り侍らず(二)。行くさき平かにも(三)侍り、思ふ様にも侍らば、內裏わたりの御後見は、となむ思う給ふるを、なほ此の御行の事は止め給ひて、例人の有る樣に、宮仕などし給ひなんどして物し給はゞ、此處にも絶えず聞え承らむ。さらば、げに此のわたりに御志ありとは知るべき。かく聞ゆるに、さもし給はずば、なほ元よりさる御心有りけりとなむ」中納言、實忠「かく宣はせば、時々里にまかり通ひても侍りもしなむ。世の人の樣に、人につきて(四)はえ侍るまじ。此處に聞えさせし時より、人の許には侍らず。殿に侍りしまでは

〔語釋〕
(五)「いかで」は「いらへ」歟
(七)古今集「山里は物の寂しき事こそあれ世のうきよりは住みよかりけり」

〔考異〕
(一)先づ—ナシ
(二)たゞ—ナシ
(三)侍らましかば—侍りなましかば
(四)なく死なば—なくてせば
(六)なかりしかば見所—なかりしかば如何はせん見所

も(一)先づ物も覺えぬものになむ。昔、さもせむ方なく惑はれ侍りしかば、魂をしづめむと、度々たゞ(二)御文一行を見給はむ、と兵衞を責め侍りしかど、え見給はざりしを、そのかみ死に侍らましかば(三)、かゝる折もなく死なば(四)」上、あて宮「此處にも、年頃、いかで聞えむと思ふことあれど、さるべき折なくてなむ。此の山里住し給ふこそ、いと心憂けれ。自ら近く聞き給ふ樣もあらむ。さやうにのみ、皆あんなる世の中なれば、うたて言ひなしつゝ驚けば、いと聞きにくしや」いかで(五)、實忠「世の中に片時侍るべうもあらず、せむ樣もなかりしかば(六)、見所侍る所の世離れたるにて、思ひ給へ慰むやとてまかりありきしに、年頃は侍れど「世の憂きよりは」(七)と言ふなれど、猶同じ樣にわびしく侍れば、所がらにも侍らず」と聞え給ふ。あて宮「まだ物の心知らざりし時は、人に物聞えず、疎きものと思ひしを、思へば今こそ、人につらしと思ほさるゝは、いと侘しき心地しけれ。人々の心に見較べ奉れば、まだ忘れ給はざりけるを、常にいとほしと思ひ聞ゆるをも、聞き給はずやあらむ」

たる事を聞えで、世の中になからむことなむ、いと(一)うしろめたき心地する。早う聞え煩らひて、死にかへり惑はれし心地なれど、今は思ほし疎むべきにもあらぬを、「唯こゝもとに出でさせ給ひなむや」と聞え給へ」と宣へば、兵衛、「かく」など聞ゆれば、母屋の御簾の柱のもとに臥し給ひて、あて宮「此處にも、いかで聞えむと年頃思ひつるに、いと嬉しく物し給ふなるをなむ。さて、宣ひつべからむ事は、なほ宣へ。(二)此處にていとよう聞ゆ」と言はせ給へば中納言、實忠「今は耳も聞え侍らず。人の聞召すばかり物も聞えねば、遠くてはえなむ」と聞え給ふ。上、あて宮「かたは人にこそは。睦ましうは物し給はざりけり」と宣ふ御聲いと近ければ、いと怪しく、珍らしく思ほえて、實忠「それも、誰がしなさせ給へるにか」と聞え給ふ。兵衛、「(三)なほ此處もとに出でさせ給へ。おとゞの君も、「御消息聞えよ」と宣はせつるものを」と聞ゆれば、あて宮「いと苦しければぞや。(四)此の簾を上げ給へ」と宣ひて、御几帳外に押し出ださせ給ひて、少しさし出でさせ給へり。中納言、實忠「嬉しきに

〔考異〕
(一)うしろめたき—うしろめたなき
(二)此處にて—「て」ナシ
(三)なほ此處もとに—ここになほ
(四)此の簾を—と宣ひて—みすを—と宣ひてこのすだれを

たるを、おぼろげにはあらざめり、かゝる心ながら、徒らになりなば、恐ろしくもあるかな、うへ我等(一)は哀なりとは宣ひけり(二)、と思して、多くの御物語し給ひて、おとゞ、正頼「兵衛は、此處に物し給はゞ對面せむと有りし。昔人物し給へり。聞えよ」とて入り給ひぬれば、兵衛の君、御簾の内にて、兵衛「むかしを今にとこそ聞えさせ給ふべけれ」と言ふ聲いと近ければ、中納言、實忠「いと珍らしき御聲にもあるかな」とて、御簾のもとなる柱のもとに寄りて、實忠「さも久しくなりにける」など宣へば、「何れの世にか忘れ聞えさせむ。片時も思う給へ怠らねど、餘所に離れおはしますなる中に、物馴れたる樣なれば、さしわけても聞えさせねば、げに忘れずながら年頃になむ。まして此方(三)に渡らせ給ひて後は、おはしましゝ方のみ見やられ侍りて、常に昔戀しくなむ。上(四)にも、更に忘れ聞えさせ給はず、「思はずに、まめやかなる御志の有りけること」と聞え給ふ」中納言、實忠「今まで世の中に侍ると見え奉るをこそ、志なき樣に(五)。昔より今まで思う給へ集め

〔語釋〕
(三)あて宮が御里に下られてからは
(四)あて宮も

〔考異〕
(一)我等は—我所々は
(二)宣ひけり—宣はゞ
(五)樣に—樣にて

〔語釋〕
(一)忠雅が太政大臣になりたるをいふ
(二)あて宮に
(四)季明
(七)「と」は「公」の誤歟
(九)仲澄
(一〇)私を
(一一)仲澄

〔考異〕
(三)魂もなく―魂を失ひ
(五)有る―侍る
(六)面伏すべきは―面伏なるは
(八)まじらひても―まじらはむも
(一二)給へむ―給へなむ

は一(一)のかみなどになり給ひぬれば、「いかでかゝる所には」とて皆殿に渡らせ給ひにしかば、此處をば、此の人(二)にかく取らせて侍るなり」中納言、實忠「もとより愚に侍るうちに、年頃魂(三)もなく、物覺えず侍りて、故殿(四)、宣ひしやうにて、さる御をはりのことも承りしが、ともかくも覺えず侍りしかば、とり申すやうも思ほえず侍りて、自ら心しも有る(五)樣になり侍りける」おとゞ、正賴「何かはさしも。正賴、子ども數多持て侍れど、まことには悔しう(六)面伏すべきは侍らねど、公に交らはむに、面だたしく侍るべきもなく、人の遊せむ所には、草刈笛吹くばかりの心どもにて、いと無心にて侍り。辛うじて、と(七)ざまにまじらひても(八)恥なかりしは(九)、はかなくて先づ隱れにき。されば、忝くとも、今はた親もおはしまさぬを、賴もしけなくとも、殿(一〇)の御代と思ほせ。正賴は、昔侍りし(一一)ものの斯くなり給へると思ひ給へむ(一二)」など宣へば、中納言、物も宣はず、涙をのみ流し給へば、おとゞ、如何ばかり上手めきたりし人の、かう涙をも惜まず、世の中を心憂しとおもひ

進にて損はれたれど、樣もてなしなめきてめでたしと、おとゞ悅び給ひて御裝束して、簀子に御座敷きて、すゑ奉り給へり。正頼「いと(一)嬉しく、年頃覺束なく、え對面せざりつるを、(二)思ひ給へ歎きつるを、過り給へるを、限なく悅び申し侍り。近くは殿に參りて侍りしに、え對面せざりしをなむ、思ひ給へ歎きつる」中納言、實忠「世中のはかなく侍りしかば、行もし侍らむとて、しめやかなる所もとめて年頃籠り侍るを、殿の御事にてまかり出で侍りぬ。思ほえぬ悅び侍れば、驚きかしこまりてなむ。かく徒ら人にて侍れば、つかさ位の用も侍らねど、御志を見給へるなむいとかしこく侍る」とて泣き給ふに、おとゞも、正頼「昔より、おなじ所にて見奉り馴れたれば、よからぬ子どもに等しくこそは思ひ聞ゆれ。されど思ほし疎みたれば、これをなむとり申し侍る。此處には此の宮に侍る者の、とかう侍りける、此の頃物(三)すべき頃なりければ、此方に侍るなり。本意ありていむ(四)えんと物し給はむ人、同じ所にて見語らひ奉らむとて、おはしませしを、(五)ある

〔語釋〕
(一)「と」衍文歟
(三)あて宮の懷胎したるが此頃が產むべき月なれば
(四)誤なるべし、一本「いひえんと物宣はん人」
(五)「おはしまさせしを」なるべし

〔考異〕
(一)思ひ—思ろ

宮の御方の人もいと多かり。御前にこれかれ候ひ給ひて、宰相の中將の君、祐澄「此度の悅をし侍らぬこそ、祐澄悅には思ひ給ふれ。時々、小野にまかりて見給へしかば、いと悲しげに、世中を深く心憂しと思ひて物し給ひしを、哀と思ひ給(一)へしかば、みづからの悅(二)あらましよりも嬉しくなむ。皆人然なむ思ひ侍るなる。右大殿の右大將(三)などは、かく心深く、更に恥かしき事なむ皆聞え給ひし」藤壺、あて宮「怪しき事と聞え置き給ひければ、君だちをおき奉りて、申し給ひければにこそあなれ。此處に知るべき事かは」祐澄「いで然も侍らず。そなたにて宣ひし事を思したるなり。さらずば、此度はよも。辨(五)の君はいと多く先だちて(四)なり給ひき。更に言ふべくもあらぬを、祐澄は後にまかりなりしかど、上の御心しらひに仰せられしなり」藤壺(六)、あて宮「さては君だちにも覺えまさられたりけり」とて笑ひ給ふ。

かくて夕暮になりぬ。おとゞもおはするに、新中納言(七)參り給ひて、御消息聞え給ひて、御前に出でて、おとゞ(八)を拜み奉り給ふ。花やかに淸らなりし名殘に、精

〔語釋〕
(二)實忠の中納言になりたるを悅ぶ
(三)仲忠
(四)あて宮の口添による事と思ふ
(五)師澄
(七)實忠

〔考異〕
(一)思ひ—思う
(六)あらぬを—あらず
(八)おとゞを拜み—おとゞ拜し

㊂實忠あて宮の許へ禮廻りに來る。あて宮實忠に山を出でて舊妻と同棲せんことを勸む

乘雅をはり法師の樣なる喜びに侍れど、聞えさせでやはとてなむ。宰相中將(一)して聞え給へり。御返、

あて宮いと畏く、かく宣はするをなむ、此處には時知らるゝ心地(二)して侍る。など聞え給へり。

歸り給ひぬすなはち、右大將限なく裝束きて、花やかに、伯父にも父にも優れてまうで給ひて、大宮を拜み奉り給ふ。藏人の少將して、仲忠「暫し侍るべきを、此處彼處、喜び申さむとてなむ。御方には、今殊更にさふらはむと聞え給へ」とて出で給ふを、宮も御方も、すべての人、御簾の内に居て見奉り給ひて、あて宮「なほ似るものは無かりけり。一の宮こそ幸おはすれ。見聞くかひある人を、獨り領じ給ひて、つかひ人よりけに從へ給ふなる」と藤壺は宣ふ。宰相(四)、參り、喜び申させ給ふ。裝束いと善くして、拜み奉り給ひて出で給ひぬ。

此の頃は、藤壺今日明日とおはすとて、里の人々參り集ひて、五十人ばかりあり。

〔語釋〕
(一)未考
(三)仲忠
(四)實賴

〔考異〕
(二)心地して侍る—心地し侍り

そ。などかこと物は榮なくは。今の人行末の君とこそ」宮、大宮「いでや、何か斯しうは、習ひたるに侍らねば、唯此の人の姉の、殿にさふらふ御後(一)などの數多物し給ふをのみこそ、かこちもや聞えましと思う給ふれ」おとゞ、兼雅「筋かはりたる樣に宣はすれど、兼雅が後は、大人も、童も、子孫まで皆御中にし侍れば、更に隔て聞ゆること侍らず。近きをも、遠きをも、幼きものどもは、此方に顧みさせ給へ、となむ思う給ふる。若宮、此の世のものにも見え給はねば、御方をば忝きものに。そが中にも、かくまだき、まかりなるまじき職(二)になり侍れば、世中を長くもえ思ひ給へずなむ」宮、大宮「あなゆゝしや。御親の樣なる人だに、然も思ひ給はざなるものを(三)」と宣へば、兼雅「よろづの事御後安くを(四)」など宣ひて立ち給ひぬ。宮、さりとも我等が爲にうしろめたくも物し給はむやは、と思ほす。

晝つかた、右大殿、一の宮の御許にまうで給へり。やがて藤壺の御許に御消息あり。

〔語釋〕
(二)右大臣に榮進したるをいふ
(四)立太子の事を含めて言へるなるべし

〔考異〕
(一)いでや—いらへ
(三)思ひ—思う

〔語釋〕
(一)正賴
(三)正賴
(四)正賴夫婦
(五)あて宮
(六)產の事
(七)初產でも
〔考異〕
(二)拜し―をがみ

人と申すにも侍らず、唯今まかりなるべき職にもあらぬを、且は思ひ給へつゝみ、且は喜び聞えさする」とあれば女御の君、仁壽「いと覺えぬ筋に思しなるを」など宣ふ。(一)父おとゞも參り給へり。大將は拜し(二)奉り給ふ。后の宮、近くて御覽じて、いと憎しと思ほす。かくて今日は、太政大臣の大饗に皆參り給ひぬ。

又の日、(三)左の大殿のし給ふべきなれど、忌ませ給ふことありて明日なり。藤壺のおはします西の對に、(四)宮もおとゞもおはします程に、右のおとゞ、大宮の御許に喜び申しに參り給へり。驚きながら、廂に御座よそひて、對面し給へり。おとゞ、兼雅「すなはち參らむと思う給へしを、昨日は饗の事侍りしかば、それに障りてなむ」大宮「いとも嬉しき御喜びとなむ、例よりも嬉しく。この宮にさふらふ人の、(五)(六)見苦しく珍らしげなき事にかく侍れば、(七)はじめ物し給ふだに、こと榮もなかんめるに、見苦しけれど、此處にさへは見放ち侍らむやは、とてなむ、此の頃此處に侍るを」おとゞ、兼雅「いと怪しう、皆人の羨み聞ゆる事の、かくのみ物し給ふこ

（一）此處になどかくてあるを、同じ親王の胤すへずやなど言ひて、いと下臈なれば、せてうなるを、さる例も有るを、祐澄朝臣をなむ思ふ。實忠朝臣は、かけたる所（二）もなく、今は世を捨てて、法師の樣になりたる人は、何のつかさの用かあるべき」と仰せらるれば、正賴「當時におや侍る正賴が男どもまかりなり侍りて、彼等がおくれ侍らむは、（三）此の朝臣の靈の見侍らむ事なむ、いとほしく悲しう侍り。身を捨てて侍るにおいては、空しうなりて侍る後に賜ふ例と侍りなむ。況んや生きて侍らむに、などかまかりならざらむ」と申し給へば上、朱雀「さらば、ともかくも御計らひにあるべき事なるを、先づと思はれむを、誰も〳〵（四）」と仰せらるれば、源宰相をなし給ふ。おとゞの、なり給ふべき君だち怪しと思す。宰相には、御心と頭中將をなし給ひつ。（五）他官ども皆なりぬ。

かくて、まかで給ふまゝに、（六）太政大臣、右のおとゞ、右大將、仁壽殿に參り給ひて、右大將、仲忠「度々の喜びを、御方にのみなむ。一の宮の御德ならずば、かく其の

〔語釋〕
（一）此處誤あるべし
（二）春海翁曰、猎上の字音歟
（三）季明
（四）誰なりとも思ひ通りに任じ給へ
〔考異〕
（五）なし給ひつ他官―なし給ふつかさ
（六）忠雅、兼雅、仲忠

き人(一)御年若けれど、大納言(二)のやんごとなければなむ、右(三)のおとゞ、いかで此の大臣召の缺に、中納言に思ふ人(四)なさむ、と思ほす程に、祭過ぎて、二十二日に大臣召あるべし。殿ばら、其の設し(五)給ふ。左大將殿いとになく設し給ふ。右大將おりたちて政事し給ふ。此の日になりて、皆參り給ふ。左のおとゞは太政大臣、右は左に、左大將は右大臣になり給ひて、大納言には、又右大將なり給ふ。中納言には、帝、宰相(六)中將をと思ほす。右のおとゞは源宰相をと思ほす。上、朱雀「定められよ」と仰せらるれば右のおとゞ、正頼「此度の順、師澄朝臣にぞあたりて侍る。左大辨(七)の前わたり、まかりならぬもの(八)なり。かゝれど、正頼が思ひ侍るは、故太政大臣の、終取り侍るとて呼び侍りしにまかりて侍りしかば、他(九)の事申さず、實忠朝臣の上をなむ、返す〴〵申し侍りしかば、「男ども(一〇)の上をば知らで、必ず相顧みむ」と申し侍りしを、喜びてまかりかくれ(一一)侍りしを、此の度の缺は、彼を惠ませ(一二)給へ」と奏し給へば上は(一三)、「師澄朝臣はさるべき事なれど、思ふ樣は、院のおはしましゝ、

〔語釋〕
(一)忠雅
(二)「大納言」は「中納言」の誤か、この處誤脱あるべし
(三)正頼
(四)實忠をいふ
(六)祐澄
(七)左大辨を越えて他人が出世することは

〔考異〕
(五)設し—「し」ナシ
(八)もの—こと
(九)他の事—たが事も
(一〇)男ども—この子ども
(一一)かくれ—かくれて
(一二)惠ませ—召させ
(一三)上は—「は」ナシ

〔語釋〕
(一)今は寢殿に女二宮等あれば也
(二)あて宮腹の皇子立太子の事
(三)今度の御産
(六)梨壺腹の皇子が太子に立たぬ筈はなし
(七)梨壺の母は嵯峨院の皇女なればいふ歟
(九)季明
(一〇)仲忠を我在位中に

〔考異〕
(四)思す―思ふ
(五)思す―おもほす
(九)忠雅正頼兼雅仲忠以下昇進。人々の御禮まはり。
(八)御方の御腹に―御かたはらに

こそは。其處にて、そこらの子ども出で來、いと平かなり。此の君だちも、生れ給ひしかども、さて人の御方となりにたるを、(一)かゝる事なむ有ると聞ゆべきにあらず。此處にてこそは。萬のこと、所がらにもあらじ」など宣ひて、かねてより修法行はせ給ふ山々寺々に、禱の師を据ゑて申させ給ふ樣、「思ほす事に疑出で來たる。これ事なく平かに、さては此度の(三)御事思すやうに平かにて(二)」と手をあがきて祈り、願をせさせ給ふ。おとゞ、此の事を疑ひて(四)思す(五)。藤壺、あて宮「さりとも宮知(六)り給はであるべき事か。天下の院(七)の御方(八)の御腹に出でて、とも、かうも思ほすべうもあらず」と宣ひ、物など思ほして、親たちは思ほし歎けど、いとつれなくておはす。

かゝる程に中旬になりぬ。(九)太政大臣の御四十九日は、四月六日ばかりに當りたれば、御わざ果てて、暫しありて帝、(一〇)大將を、御位にておはします程に、大納言になし給ひてむと思して、唯今太政大臣無くてもありぬべく思して、なり給ふべ

（語釋）
（一）彈正宮は同胞なれば宿直して保護せよと言付けんと也
（三）仲忠をいふ
（四）近澄、女二宮に懸想せる人
（五）「御供にて」歟
（六）久々にての參內を戲れて譬へたる也
（七）御產
（八）前々の產は

（考異）
（二）殿ごもれ―宿直し

㊅あて宮の安產及びあて宮腹の皇子立太子の祈禱。

り。ゆめ見せ給ふな。善しとも惡しとも、人には見せぬぞよき。彈正宮に、いと善く聞えむ、夜は（一）此方に殿ごもれ（二）など。他人よりも、宰相の君はいと煩はしき。十の御子は、率て參りなむ」と聞え給へば、女二「承りぬ。いとよう後見きこえむ。夜は同じ所にと思へど、（三）むづかしき者や言ひ煩はさむと思へば、え侍るまじき。彈正の宮に聞え給へ。（四）藏人の少將は、彼の南にありし所に、夜晝ありて、藤壺をぞ責め聞ゆめりし。いみじく恨むめりしかども、耳にも聞入れ給はざめりき」と聞え給ふ。彈正宮にも、同じごと聞え置きて、日暮れぬれば、御車二十ばかり、御前數知らず、君だちさながら（五）御供に、參り給ひぬれば帝、朱雀「（六）高麗人來たなりや」とて卽ちまうのぼらせ給ふ。

晝詞　こゝは仁壽殿の御局。

かくて藤壺、（七）此の月に當り給へり。東宮より御使日每なり。參る時は御文なき折なし。十五日になれば、大宮、此方に渡り給ひて宣ふ、大宮「（八）先のは、彼の寢殿にて

兼雅「末の世に、らうたき人の物し給へば、見るとて彼方がちなるを、(一)見習はぬ心地し給ふらむと思へば、いとなむ恐ろしき」と宣へば北の方、俊蔭女「何か。おはせよ。かゝらでも物は習ふめれば、今よりこそは」おとゞ、兼雅「さればよ。前はかう宣はざりきかし」と宣ふ。されど宮の御方には、夜宿り給ふこといと稀なり。中の君とありしも、あからさまにぞ訪らひ給ふ。かくておとゞ、此の宮(二)に御心止め給ひて、次第に母宮(三)儀式いかめしくなり給ふ。

かくて月立ちぬれば仁壽殿の女御の、御衣更して、五日の日參り給ふとて、一の宮に聞え給ふやう、仁壽「參らまほしくあらねど、御國讓も近くあべかなるに、此の頃は内裏わたりにもと思ひてなむ。其の中にも、いと憎げなる樣(四)に常に(五)宣へば參る。(六)犬宮を見奉らざらむ事の覺束なかるべきを(七)なむ。さて、此の宮(八)たちを、殿の御方に渡し奉らむとすれども、思ふ心ありてなむ。然聞ゆる樣あり。此方にすゑ奉り給ひて、御眼離たず、見とぶらひ給へ。大將(九)いと物ゆかしくし給ふめ

〔語釋〕
(二)梨壺腹皇子
(三)梨壺の母女三宮
(五)朱雀が
(七)梨壺が
(八)女二宮姫宮
(九)仲忠

〔考異〕
㊂仁壽殿女御、女一宮に女二宮の保護を托して内裏に歸る
(一)見習はぬ—見習ひ給はぬ
(四)樣に常に宣へば—こと常に宣はすれば
(六)犬宮—「宮」ナシ
(七)なむ—ナシ

畫詞　こゝは梨壺の御産屋。

又九日の夜は、右の大將の御産養、例の銀の衝重、すみ物、碁代など(一)奉れり。祖父おとゞ(二)、この産れ給へる君を、限なくかなしくし給ひて、臍の緒つきながら抱き持ちて、宣ふ樣、兼雅「子といふものは、かく悲しきものにこそありけれ。唯宮(三)の小くおはするにもこそあめれ。これに、同じくば、參り(四)給ひて、一二年の程に斯からましかば、如何に嬉しからまし」と宣へば、俊蔭女「のちおひ(五)のと言ふことのあれば」などて(六)、俊蔭女「我が孫にこそあれ、必らず異筋とも思ひつくらむ。院の后の宮は、其處(七)の筋にはものし給はずや。うちのは、御心もことにはあらずや。などわかこそこのみにならむからに、此の筋の絶ゆべき」と宣へばおとゞ、兼雅「うたて(八)ある事かけてもえ言ふまじき事なり。昔なりせば、何の(九)疑は」など宣ふ。兼雅「小き子は、この子持(一〇)のみこそは(一一)、目に近くは(一二)。中納言は見ずなりにき」など(一三)て此の君見奉りに常におはすれど、かんのおとゞは惡しとも宣はず。おとゞ

（語釋）
（二）兼雅
（三）東宮
（四）梨壺入内後一二年の間に斯の如くならば
（五）後に生れたる方仕合せよしといふ諺歟
（六）「などとて」なるべし
（七）嵯峨院の后宮は兼雅の姉妹也
（八）誤あるべし、一本「みに」の「に」なし
（九）此皇子疑なく皇太子に立ち給ふべきに
（一〇）我が赤兒を見るはこれがはじめて「子持」は誤なるべし
（一一）「こそは」—「は」ナシ
（一二）仲忠の赤兒の時は我は見ざりき
（一三）「などとて」なるべし

（考異）
（一）など奉れり—などし奉れり

あて宮「梨壺には、御使幾度か遣はしゝ」藏人、「聞召さゞりしに、いたく煩らひ給ふことありとて、御消息申されたる事ありしになむ、驚かさせ給ひて、其の夜、さては今朝なむ參りて侍る。男におはするなりとて、人は、さこそ言へ、終にし給ひつめるかし、いかでか覺えぬ筋にはなむ、申しのよしる。あな聞き憎くや、斯樣の事は」聞かぬ樣にて、物も宣はず。

〔語釋〕
（一）人の噂を藏人が傳ふる也、何といひても終に梨壺が皇子を生み奉りたれば
（二）誤あるべし
（三）忠雅

畫詞　こゝは西の對。

かくて三日の夜、一の宮產養し給ふ。五日夜は大將殿、七日の夜なむ、東宮より例の御とぶらひはありける。產屋いと面白う淸らにあり。父おとゞを始めて左のつかさ人、宮人引きて、幄うちて、夜一夜遊び明かす。其の夜は太政大臣、后の宮、御產養し給へり。右の大殿の君たち、左近中將に、宰相中將、左近少將に藏人の少將、頭の中將など、さらでは上達部、藤大納言、其の御弟の宰相、然らぬもいと多かり。

㊣梨壺腹の皇子の產養。兼雅、皇子を酷愛す。梨壺の母女三宮の勢やうやく盛なり。

㊄梨壺、皇子を産みたりとの報知によりて仲忠夫婦歸る。あて宮、藏人に梨壺の樣子を聞く。

〔語釋〕
(二)觸穢の事ありといふに梨壺の御產の事ならんと悟りて男か女かと問ふ也
(三)東宮より

〔考異〕
(一)侍ればー侍り
(四)有りつやーありや

かくて夜なかばかりに、三條殿よりおとゞの御消息あり。兼雅「あからさまに物し給へ。とみなる事」などあれば、驚きて、仲忠「何事ぞ」と問はせ給へば、使「宮の御方の惱ませ給へば」と申す。仲忠「内裏より唯今まかで侍りて、みだり心地東西知らず侍れば、(一)今ためらひて、唯今」と聞え給ひつ。とばかり有りて御使、「よし。なわたり給ひそ。觸穢の事ありて」とあれば驚き給ひて、仲忠「何ぞ(二)」と問はせ給へば、使「男と聞え給ふ」仲忠「宮(三)より御使は有りつや(四)」と問はせ給へば、使「知らず。え見給へずなりぬ」と申して參りぬ。曉になりて、中納言の君といふして、仲忠「三條にかゝる事侍るなれば、今の間にまかり渡り、立ちながら參らむ」とて出で給ふ。藤壺、あて宮「何とし給へらむ」と宣へば宮、女二「男とか言ひつや」と宣へば、あて宮「あぢきなの事や」と聞え給ふ。大將穢らはで歸り給ひて、切に聞え給へば、其の日の夕さりつ方、梨壺もとぶらひ聞え給はむ、とて渡り給ひぬ。

かゝる程に、御使にはあらで、藏人まかでたり。上御前に召して問はせ給ふ、

と聞え給へば、女二「何か此處には見ずとも、(一)苦しからむ事はおのづから」と宣へば、(二)大將も此方に物し給ふを、強ひてはえ聞え給はず、いと苦しと思して、仲忠「さらば、此方の宿直にこそは」とて物し給へば藤壺、南のひさしに御屏風立て、御座敷かせて、あて宮「さらば此處にを」と聞え給へば宮、女二「あな見苦しや、狹き所に。犬の許に去ね」と宣へば、大將、仲忠「何せむにか、犬の許に。(三)内に伏すとこそ言ふなれ」とて、一日物し給ひし、君たちの宿直所に入り給ひぬ。今宵、東宮のすけの君と、物など調じて、(四)若宮の御方の藏人所、臺盤所に物せさせ給ふ。御前どもには、折敷などして參り給ふ。大將殿の御前には、宮の御前のをまゐる。されど參らず。御宿直物取りに遣はして臥し給ひぬ。内よりも御衾出だし給ふ。御供の人もやがてあり。それにも物など賜ふ。大將、仲忠「(五)こゝの御簾のもとに出でさせ給へ。聞えさすべき事」などあれば、女二「あな見苦しや」とて御帳の内に入り給ひぬ。皆御殿籠りぬ。

(考異)
(一)見ずとも—「と」ナシ
(二)大將も—「も」ナシ
(三)内に—「に」ナシ
(四)若宮の御方の藏人所臺盤所—臺盤所若宮の御方の藏人所
(五)こゝの—たゞ

〔語釋〕
(一)仲忠
(二)早く歸り給へ
(三)仲忠は帝の御前に勤めてありし事故

さやは。

とて、

女二山しげみふみはみずとも風またでちるべき花の色とやはみる

犬は彼方にを。

と聞え給ふ。

かくて、日暮れぬれば、大將(一)まかで給ふ。やがて物し給へり。簀子に御座などよそひて物し給ふ。御車、御前などして御車寄せさせ給ひて、消息聞え給ふ、仲忠「まかで給へるまゝに、渡らせ給ひぬべくばとてなむ、御迎に」と聞え給へれば彼方には、女二「此處に、いと久しう聞えざりつる事どもをなむ、聞えさせたる。今日明日此處になむ。彼方にを(二)早」と聞え給へれば大將、仲忠「あからさまに渡らせ給ひて、又かへらせ給へかし」宮、女二「何か騷がしき樣に」と宣へば、藤壺、あて宮「御前にさ(三)ふらひ給へらむものを、苦しうもこそ思さるれ。渡らせ給ひね。其方に參り來む」

と聞え給へり。藤壺見給ひて、あて宮「いとよく宮(一)の御手に似たりかし」とて、あて宮「さし較べて見るに、優にはえぞあるまじき。まかで(二)給はぬ先に、犬宮迎へ奉り給へ。おはせむ(三)時は不用なめり」宮、女二「よう乳母どもに言ひ置きたれば。先にも、これかれ「見む」と宣ひしかど、大輔とかくして出ださずなりにき」藤壺、あて宮「さらば、今の間にいざ給へ。いかでか、かゝる折にだに見(四)奉らでは」女二「宮など(五)もさだかに見給はじかし。此(六)の人は、己をば物にもせず、物も言はねど、彼をぞ恐ろしきものには。それが出でて行くとては、唯此の事をのみ、返す〴〵言ひ置きたれば、更に人にも見せず」藤壺、あて宮「あなまさり顔こそ」と宣ふ。御つかひ(七)「御返賜はずば、やがてさふらはせ給はじ」と仰せられし(八)。必ず賜はり侍らむ。今更に追はせ給はゞ、わびしく侍るべし」と申さすれば、女二「怪しや。難かるべき事ならばこそ。異なる事もなければむつかしさに、とて、

女一有りしは見しかど、覚束なからぬ程なりしかばなむ。山路にはゆ(九)ふかひなや。

〔語釈〕
(一)東宮の
(二)仲忠が
(三)仲忠が退出したらば到底犬宮を見せてはくれまじ
(六)仲忠は女一を軽んずれども犬宮を珍重すと也
(七)御返事を取りて来ずば此儘放逐すべし
(九)「いふかひなや」歟

〔考異〕
(四)だに—ナシ
(五)などもさだかに—などもなはざりに—などなはざりに
(八)仰せられし—仰せられつる

べて望月の樣に、いと見まほしき容貌になむ。宮(一)、それをいとやんごとなきものに、御志もようありて(二)、唯我こそと思して心高く(三)おはすめれば、常に御中そば(四)そばしきぞ」など宣ふ。かくて御文書かせ給ふ、

あて宮 承りぬ。此處にも、いかで〳〵まことにと思ひ給ふれば、聞えさせたりし樣に、日の經るまゝに苦しう侍ればなむ。立ち(五)いぬと宣はせたる、

しづけきをうちみざらなむ君が爲今より浪のたゝぬなるらむ

とのみ(七)聞え給ふ。內裏(六)より又大將殿御文あり(八)。宮の御許に、

仲忠 度々聞えさすれど、御返の侍らぬは、如何なるにか。かゝる御心ばへの有るにこそ、如何(九)なるにかあらむと、しづ心なく思ひ給へられて、御文も仕うまつり違ふれば、笑はせ(一〇)給ふも御面臥にこそ。

春日山今日もふみみぬものならば花はのこらず散りぬと思はむ

犬いかに侍らむ。必ず御返。

〔語釋〕

(一)東宮

(二)誤りあるべし、「ありて」は「あれど」歟

(五)「立ち出でぬと」なるべし、前の東宮の歌の詞

(六)「うちみ」は「うらみ」なるべし

(一〇)朱雀が

〔考異〕

(三)心高くおはすめれば―心にかけて思ほすめれば

(四)御中そば〳〵しきぞ―御中はあしきぞ

(七)のみ―のみぞ

(八)あり―ナシ

(九)如何にかあらむと―ナシ

〔語釋〕
(一)女四宮
(三)「渡り給ひ　て日一日なむ」歟、東宮が女四の方へ行きて止り居給へりといふ意なるべし
(四)麗景殿、忠雅の女
(五)梨壺
(六)私が御使に
(七)兼雅が居合せて
(八)東宮が寵愛なさる
(一〇)登華殿
(一二)孫王の君に似たる容貌にての意歟
(一三)宣耀殿、正明の三女、「殿のは」なるべし
(一四)女四宮

〔考異〕
(二)まうのぼらせ―まうのぼり
(九)すくよか―すくやか―すゝど
(一一)聞き―見え

御手習、飽くまでせさせ給ふ。院(一)の御方なむ、此の月となりて、三夜ばかりまう(二)のぼらせ給ひぬる。今日は、渡り(三)給ひての日、ひとたびなむ。さてはのぼり給ふ人もなし。御文は、左(四)のおとゞの御方になむ、一度侍りし。左大将(五)殿の御方になむ、此の月に三度ばかり奉り給へる。一夜は參り(六)侍りき。おとゞ(七)、彼の御方におはします折にて、いとかしこく饗ぜさせ給ひき」あて宮「いかでか、其處のみまうでまほしからむ。祿はありきや」藏人、「女のよそひ侍りき」一の宮 女一「梨壺、猶立ち交り給ふなめり」藤壺、あて宮「時の人ぞや。心いと善しとて、いと(八)らうたうし給ふ。其がうちに、親兄弟は恥かしとて、容貌も右大將になむ似給へるとぞ宣ふ。よろづの人憂きこと聞く中に、彼の事ぞまだ聞かぬ。左の大殿のは、いとすくよ(九)かにいかめしき人の、萬のこと、思ひながら言はぬかな。式部卿(一〇)の宮のは、孫王(一一)のかたちにて、何心もなくなむ聞き(一二)侍る。平中納言(一三)殿は、いとさゝやかに馴れたる人の、らう〳〵しきなり。院(一四)のは見奉りき。いと物々しうなむ。淸らに、す

〔語釋〕

(一)誤あらんか

(二)あて宮が「夜は忍びて參らん」といひし事

(三)「一宮も」の「も」衍文なるべし

(四)あて宮が參らぬは東宮を厭ひての事なりと空言せしといふ意歟

(五)東宮が

かで侍らむ。

と聞え給へり。女二「然らばよかなり」と言葉に聞え給て、御文はなし。女御の君おはしまして、宿直もの、寢裝束などは奉れ給ふ。

つとめて、東宮より例の藏人して御文あり、

東宮一日いと心憂かりしかば、かく物せむと思へども、いりてらるゝ(一)と言ふめればなむ。同じ心ならましかば、と思ふこそ。

浦風にたち出ざりける白波のいまよりとのみ頼みけるかな

空言(二)をこそねたけれ。

とあり。一の宮も(三)、女二「何事をかは頼み聞え給ひし」藤壺、あて宮「厭ひて(四)など、空言は聞えさせしなめり」とて笑ひ給へば宮、女二「唯一人々々こそ、さやうにも宣へ」藤壺、藏人に、あて宮「何わざか(五)此の頃はし給ふ。誰々かまうのぼり給ふ。御文などは人の許に遣はすや」と問はせ給へば、藏人「日頃は、晝は御書遊ばし、夜は

宮の御許に御文あり。

仲忠　昨夜、御遊ども承るとて、さも久しく、

しらぶとは音にぞ聞きしことの音をまことにかともひきし宵かな

たち歸り、(一)すくまりてこそ。內裏より召あれば參り侍りぬ。今、夜うさり御迎に。

と聞え給へり。藤壺、あて宮「(二)さればよ」(三)いそ。女二「昔だに、唯(四)其處にのみなむおはすると言ふを、まして今は、珍らしき手ども彈き(五)給へば、いとかしこくなりにけりとぞ聞きけむ。まろをこそをかしと思ひたらめ。ことは皆聞きたり。此の御箏の事は、いとよくなりぬべしと言へばあへなむ」とて御返もなし。あやしと思ひつゝ(六)參り給ひて、夕さりつ方、內裏より御文あり、

仲忠　まかで侍りなむとするを、去年仕りさしゝ御文、今日仕れと仰せらるれば、皆御覽じ果てゝなむ。(七)少しなむ難き所まじり侍りける。明日の夜さりま

〔語釋〕

(一)すくまりてあかしたりといふ意歟

(三)「いそ」は「いら(へ)」の誤なるべし

(四)琴の上手はあて宮のみなりと仲忠が言ひしに

(六)仲忠が內裏へ

〔考異〕

(二)さればよいそ—されぱこそ

(五)給へば—給ひつ

(七)少しなむ難き所まじり侍りける—少し難き心まじり侍りけり

壺も心地を惑はして、「あないみじや。如何にしつる事どもぞ。常(一)に、かく心地なき事どもをする事」とて物も宣はず。宰相中將、驚きて出で給ひて、御座など敷き給へば、仲忠「此處には、宿直に參りつるなり、君の御宿直所に」と宣へば、入れ奉り給ふ。南向におはすれば、南と西との隅に、緣を織物にしたる三尺の屛風、唐錦の端さしたる御座など、中納言殿のしおき給へる物どもあり。(二)宮たち、御かたいとほしく思されて入り給ひぬ。大將、宰相の中將は內に、他君だちは簀子に、大將孫王の君して、仲忠「三條にまかり渡りて、今なむ歸りまうで來つる。覺束なきになむ。今宵(三)は渡らせ給ふまじきか」と聞え給へば宮、女二「此處には、辛うじて對面したれば、暫し斯うてなむ。彼處にあらむもの(四)、一人してあらむを、などか見棄てては」大將(五)、あやしの乳母(六)おほせ言や、げにうしろめたく、と思す。夜更けぬれば、宰相中將、祐澄「怪しく昔覺えたる夜や。(七)大將などもかやうにてぞ」など物語し給ふ程に明けぬれば、つとめて(八)歸り給ひぬ。

〔語釋〕
(二)女一女二女三あて宮等
(三)御歸りなさらぬか
(四)犬宮
(五)我に乳母の役をさせんとするはけしからぬ仰かな
(七)昔は仲忠なども今夜の樣によくあて宮の許に來られしものぞ
(八)仲忠が[illegible]

〔考異〕
(一)常にかく―上のつねかく
(六)乳母おほせ言や―めのとゝはおほせ言や

〔語釋〕
(一)仲忠に今夜我琴ひきたりと告げ給ふな
(二)仲忠

〔考異〕
(三)聞き給ふを然も―聞き給ふさも―聞き給ふをさ

ゆめ〳〵斯く宣はすな」と宣ひて、御琴の音ども彈き合はせて遊び給ふほどに、(一)(二)大將、宮の御迎にとて物し給ひけるを、琴どもの聲しければ、みそかに立ち寄りて勾欄の下にて聞き給ふを、(三)然も知り給はで、よろづの手を遊ばすを聞き給ひて思ひ給ふ樣、いかでか、我淸涼殿にて仕うまつりしを彈き給ふらむ、內裏の人ならばこそ、まうのぼりて聞き給はめ、いと怪しくもあるかな、と聞き驚き給ふ。御琴の音ども一つに合ひて、面白き手どもを遊ばしはやりて、人の有り無しも知ろしめさず。宰相の中將の君、藏人少將、宮あこの侍從などは、御格子の內、母屋の御簾あげておはします。大將、御階よりやをらのぼりて、御簾の間に籠りて、穴をもとめ給へど、いみじく麗はしく造りたれば、隙もなし。あくべき物も無ければ、如何にせむと思ひ立ち給へり。

かくて、夜半ばかりまで遊び給ふ。遊びはてて、物など聞食して、御殿籠りなどする程に、うち聲づくりして、仲忠「孫王の君は此處にか」と宣へば、宮たち、藤

〔語釋〕
(一)祐澄

(西)あて宮女一宮等奏樂。仲忠女一の宮の迎に來りて立聞く。女一宮歸らず。仲忠再び迎に來る。なほ歸らず。仲忠あて宮の方に宿す。

(二)近澄、女二の宮に思ひかけたる人
(四)音樂
(五)仲忠が
(七)女一方の孫王
(八)仲忠の手に
(九)仲忠が清涼殿にてひきし手を聞き覺えたるならん

〔考異〕
(三)二の宮―女二の宮
(六)取り出ださせ―を取り出ださせ―とくいださせ

人に御文を取らせずなりにけることを」など宣ふほどに日暮れぬ。

宰相(一)中將の君御番の夜、同じ番の男女まうのぼりたり。藏人(二)の少將は二の宮(三)の渡り給ひぬれば、御臺盤所に物し給ふ。藤壺、あて宮「いと久しうし侍らぬわざ(四)、今宵いかで。御前には常に遊ばすらむものを」宮、女二「更に此處にもせず。徒然なるにかき鳴らせば、つれなしや、まばゆしや」など笑ひ(五)給へば、見だにぞ見ぬ。いざ今宵、忍びて」とて、琴の御琴ども取り(六)出ださせ給ふ。かたち風をば藤壺、やまもり風は一の宮、箏の琴は二の宮、琵琶は姫宮、やまと琴はあなたの孫王(七)。御前ごとにうち置きて、先づ琴の御琴をかき合せつゝ遊ばす。いと面白し。宮、女二「あやしう、此の御手こそ、聞く(八)あたりの御手にはいと善く似たれ。いかで斯くはなりにたるぞ」藤壺、あて宮「あなむくつけや。いかでそれは、聞きにだに聞かぬものを」宮、女二「いかで、かのわたりならで聞き給ひけむ(九)。彼の夜のならむかし。此處には然ばかりだにぞ聞かせぬ」いらへ、あて宮「いとうたてある事をも聞えてけるかな。

二孫王「更なることをもし給ふかな。言種(一)にし笑ひ給ふものを。彼の御子の御子にえ、其處たちいかで斯うだにあらむと宣ふ」など言ふ。藤壺、あて宮「何事ぞや。(二)此(三)の君かくて物せらるゝを、御供ならずとも、時々はものし給へかし」彼の君、二孫王「然思ひ給へれど、(四)渡らせ給はむとありつれば、同じくばとてなむ。(五)一日は、御方の御事によりて、(六)おとゞにかしこく騒がれ奉りしはや。奉り給へりし御文を、下仕のもの持てまうで來たりしかば、(七)侍りながら聞えぬと、「君こそ、などかは參りこぬとは聞えさせざりし、侍りながら。すべて心地なき」など、例のことに物し給はぬ人のむつからせ給ひしこそ、いとほしく侍りしか。さて見給ひて、「御文はこればかり寶はあらじ。今行末は、かくてしも得賜はじ」とて、人に手も觸れさせ給はぬ御厨子に納めさせ給ひて、と聞く。はしたなき目をなむ見給へりし」藤壺、あて宮「孫王の君の御許にありし本どもを、いと煩はしく書かせ給ふめりしが、其の喜び聞えさせしぞや。此處にこそ、いと心地なしとは物せしか。賜へりける

〔語釋〕
(一)仲忠が
(二)「御子にてそこたち」歟。さらばこの孫王たちは上野宮の子どもなるべし。一本「御子そえそこたち」
(三)我方には姉の孫王が居る事故
(四)女一が御出になるとの仰せ故同じ事なら御供してと思ひて
(六)仲忠に
(七)私が居ながら取次をせぬとて

〔考異〕
(五)一日は—「は」ナシ

筋、かゝりば、一の宮の御髪(一)にいとよく似たり。すべていと同じ様におはするが、これは少しふくらかに、氣近きになむ。三の宮(二)はまだ小くおはするが、あてにそびやかなる御容貌の、御髪長に少しあまりたり。

かゝる程に、大殿(三)の御方より、檜割籠、御酒、椿餅など奉り給へり。左の大殿(四)よりは、梨子、柑子、橘、荒巻など有り。所々よりをかしき物ども、多に奉れ給へり。孫宮の御供には孫王の君、中納言の君、此處の御前には、孫王の君、兵衛なり。孫王たちは物語す。姉君、孫王「われらが宮(五)はなどや(六)、此の下臈の女を上とは思したらむ」中の君、二孫王「更なることかな。一日、それより(七)來たりし人に問ひしかば、或る人、「東宮にさふらひ給ひしぞ九の君とは申すめれ」と言ひければ、捕へていみじう打たせ給ひて、下に籠められければ、更にかけて言ふ人なかなり。限なくかしづきてぞ置かれたる」姉君、一孫王「あな物狂(八)ほしや。人聞きこそやさしけれ。御方(九)のおとゞや、かやうの事聞き給ふらむと、思ふこそ面恥かしけれ」彼の君、

〔語釋〕
(三)正頼
(四)忠雅
(五)上野宮が木樵の娘をあて宮と思ひてかしづき居るをいふなるべし。さらば此の孫王姉妹は上野宮のゆかりの者なるべし
(七)上野宮より
(九)仲忠

〔考異〕
(一)御髪—「髪」ナル
(二)三の宮—ひめ宮
(六)などや—「や」ナシ
(八)物狂はしや—物狂はしや

（語釋）
（一）思ひもよらぬ女一を娶りて
（三）あて宮に對して
（四）「責め給はど」なるべし
（五）「たて」衍文なるべし
（考異）
（一）此の族の―そこらの
（六）言ふ―言ふめる
（七）かねて―かきて
（八）裾といと等し―裾にひとし

此の族の手は彈き給ふべき人は物し給ふ。すゞろに、思ひの外なる所にありて、御爲に志なき樣に見え奉ること」とて、常にのみぞ言ふや」藤壺、あて宮「あなうたてや。世にも然は。御聞きなしならむ。などかは、かゝる使に、夜晝責め給ひて、敎へ聞え給はぬ樣はありなむや」宮、女二「さ言へど聽かず、「今、上降り居給ひなむとき、御前にて、何事も手をつくして仕り聞かせたて奉らむとす。かくてあらせ給ふ御心のいとかしこき畏まりには、斯かる事をだにこそは。其處に參りてを聞け」なんどぞ言ふ」藤壺、あて宮「いみじき事にもあるかな。然侍らむ時は、御消息かねて宣へ。忍びて御供に仕うまつらむ。それをさへはづさせ給ふな。御前には、行末もあり、彼の音あくまで聞召してむ、犬の御德に」宮、女二「あな久しや」など多くの御物語などし給ひて、女二「いで御髪は。こゝのは皆落ちぬ」とてひき較べて見給へば、藤壺のは今三寸ばかり優りたり。女二「いと等しかりしものを、多くも優り給ひにけるものかな」とて、二の宮のを見給へば、袿の裾といと等し。

に琴彈かせて、聞かむ。呼ばむに物せずば、家に入りて彈かせむ」とさへ宣はするものを。此處にはさる事の侍りけるを、と思ふこそ言ふかひなく妬く。誰か先づは遊ばしけむ。何れの御琴ぞや」と聞え給へば、女二「彼の三條にありつる琴ぞや。(一)子こそ先づあめりしか。(二)親のはいと悲しう聞きしかば、たゞ泣きにぞ泣かれし。それ聞きしまゝに、苦しき事もなくて起き居にし。琴の聲の、(三)いと荒々しく恐ろしく覺えて胸なむはしりし」藤壺、あて宮「彼の(四)御琴は然ぞある。清涼殿にて、仕うまつり給ひし夜、せめて聞かまほしかりしかば、おとゞ人々にも泣く〱責め聞えしかば、あな物狂ほしとむつかり給ひしかど、人々の中に率ておはして聞かせ給ひしを聞きしが、何處に生れにたるとこそ覺えしか。あなかま、かう聞ゆと宣ひながら、おとゞの(五)をぞまだ聞き侍らぬ」宮、女二「いさや、(六)其の人のをぞ委しう聞かぬ。いかで聞かむと思へど、更に聞かせず。さて言ふ樣は、「そこの御許にあ(七)らましかば、此の手はいとよく習はし奉りてまし。此の世には、其處にのみなむ、

〔語釋〕
(二)仲忠が先に彈きたり
(四)俊蔭女の琴は
(五)仲忠の琴
(七)あて宮を妻にしたらば

〔考異〕
(一)ぞや—「や」ナシ
(三)聲—手
(六)いさや—いらへ

言ひ侍りけむ」宮、女二「此處にもこれかれ集ひて、男にも女にも、疎からぬどち遊をもし、物語などをもしならひて、さりし人(一)をばいと疎くもてなして、音にも聞え影にも見ざりしかば、恐ろしく恥かしと思ひしものに向ひ居たるは、我か人にもあらず怪しきまゝに、昔の戀しく思ほゆれば、すなはちまうで來むと思ひしかど、辛うじてこそ」と聞え給ふ。藤壺、あて宮(二)「などかく、珍らしき人はとゞめ奉り給へる(三)ぞ。其れをこそ、先づと思ひ給ふめれ」宮、女二(四)「いさや、前に伏せて(五)のみ置きつれば」藤壺、あて宮「などて人には隱し給ふぞ。小き程には、このおはし(六)ますなどを、皆この中には見奉りしは」宮、女二(七)(八)「然前にのみあれば、彼が前には人の物せねばにこそあめれ。かゝる物を見ならはざりければ、たゞに其を友だち(九)にてぞ籠り居ためる」藤壺、あて宮「いでや、聞えてもく\、(一〇)彼の御時の物の音を承らずなりにしこそ。まかでむと聞えしかど、車も賜はせず、御消息も宣はずなりにしかば、いみじうくち惜しうこそ。内裏の上も、「いかで疾く降り居て、彼の人

〔語釋〕
(一)「ありし人」歟
(二)なぜ御子を連れて來給はぬぞ
(五)仲忠が
(六)女二女三をいふ
(七)仲忠の
(九)仲忠が我子を友だちにして
(一〇)犬宮の生れし時仲忠母子がひきたる琴の音

〔考異〕
(三)給へるぞ—「ぞ」ナシ
(四)いさや—いらへ
(八)然前に—お前に

あらず。兵衛の君は、兒めきたる人の、髮長に一尺ばかりあまりて、いといたうはやりざれたり。木工は、ふくらかに、愛敬づきたる人の、髮長にて、いとりやうく〳〵じき、あこきは兵衛の君に似て、頭つき、姿つき、いとよき程にて、をかしげにて、髮長に一尺ばかり餘りて、いとらう〳〵し。あこ君も、それにぞ似たる。それはいとはやりざれたり。

かゝる程に、三月二十八日ばかりなり。(一)一の宮、女宮たち一つ車にて、五位、四位數知らず、君だちも御供にて渡り給へり。(二)おろし奉りて入り給ひぬ。御裝束例のごと。藤壺は紫のかいねりの御衣一かさね、薄鈍の張りあはせの御衣奉りて、あて宮「其方にこそ參り來むと思ひ給へつれ。御傍守りの隙なくものし給ふなれば、(三)思ひ給へつゝみて侍りし程に、いと畏くわたらせ給へるをなむ」と聞え給ふ。女二「まもり怖ぢ給ふは如何なるぞ」(四)あて宮「彼の家をならひて、(五)知らぬ人と時々は交ろひ奉りて、さては徒然と眺め侍るを、いとこそ怪しけれ。宮仕心ゆくとは、何をか

〔語釋〕
(一)女一宮と女二宮女三宮なるべし
(二)あて宮の假御殿へ
(五)我が生家にすみなれての意歟

㊂女一宮、女二宮女三宮を伴ひてあて宮を訪ふ。仲忠母子の琴の噂。髮の長さを較ぶ。孫王の君姉妹、上野宮の噂をす。

〔考異〕
(三)なればーけれ
(四)つゝみて侍りしーつつみつる

しが、と聞えよ、かう聞えよとのみこそ。いさゝかなる私たはぶれをこそし給はざりしか。若き人は然やはある」(二)とて兵衛「いでやかく聖になり給ひける」(三)少將、「何かは私事も言はぬ。されど、人こそ耳に聞き入れね」兵衛、「いさや(四)、まろらが(五)恐しければにやありけむ、聞かでこそ止みにしか」孫王の君いらへ(六)、「まめ人もなきものぞや」上(七)、「然かし。君のみこそは」と言ふ。此の孫王の君の母の師の君は優にざれたれば、此の源中納言殿の渡り給ひぬれど、あざれていと畏(八)まらず。女子は三人あり。大い(九)君はこれに、中の君は大將殿(一〇)の孫王、三の君は源中納言殿の孫王(一一)、此の御方の、昔容貌なんどよくて、髪長にあまりて、物々しう清げなる人の、心にくゝ心有るなり。右大將むかし思ひて語らひしかば(一二)、それをのみ思ひて、よき人君だち宣へど、耳にも聞き入れず、君の御身に添ひて、御前片時去らであり。紀伊國(一三)のをば、萬に勞りて、局なる童、おとな、下仕まていたはる。大將も忍びてをかしき樣にて、物志しなどし給ひしかど、宮の御上參り給ひし後は然も

〔語釈〕
（一）あて宮に
（三）「少將」前に見えず誤なるべし
（七）「上」は「もく」の誤か一本「もて」
（九）卽こゝの孫王の君也
（一〇）仲忠
（一一）涼
（一二）此孫王の君を親しみしかば
（一三）涼に仕ふる妹をいふ

〔考異〕
（二）あるとて―あなる
（四）いさや―いらへ
（五）まろら―まろ
（六）いらへ―いでや
（八）母の―はらから

さだかにだにも見(一)給へらずなりにしものを、今日のみこそ。と聞え給へり。

又の日になりて、上、孫王の君して、御髪參らせ給ふ。御前に孫王の君、兵衞、木工さふらひて、御粥まゐり、御賄なんどす。兵衞の君の聞ゆる、「昔見給へし箱(二)は、此の一日見給へしこそ、いと哀に見侍りしかば(三)」孫王の君、「彼の箱なりし物をかけて侍りしかば、三千兩こそ侍りしか」兵衞、「二百兩賜ひてき。さては、これかれ皆賜ひて、これはたおとと(四)には賜はずなりにき」上、あて宮「あやしの物數へや」孫王の君、「かけつれば多かめるをだにこそ。あはれ此の頃こそ昔思ひ出でらるれ。宰(五)相の君の思ひ惑ひ給ひし事もこそ、つれ〴〵と思ひ出でらるれ」孫王の君いらへ、「かく里におはしませば、斯かる物もうち見ゆるや。内裏に籠りおはしませば、さうざうしくこそ。此の頃かく離れ住みし給ふを、昔(六)なりせば、如何なる事あらまし」兵衞、「宰相の君よ(七)人し給はざりしは、(八)一所おはせし御曹司に召しゝに、常に參り

〔語釋〕

(一)あて宮の御手跡を

(二)實忠より贈られし黄金入りの箱

(三)「ば」衍なるべし

(四)「おとと」は註文の紛れ入りたるなるべし。これはたは兵衞の弟にて實忠より箱をもらひし人也

(五)實忠

(六)入内前ならば

(七)他人の出來ぬ事にはの意歟

(八)實忠が一人居る

〔語釋〕
（一）他に寵姫のあるをいふ。古今「筑波根のこのもかのもに陰はあれど君がみかげにます陰はなし」
（二）「けし」は家司歟。一本「けし」の代りに「か侍りける」

りたき事になむ侍りける。夜の間には、さ思ひ給ふれど、聊か動きもせられ侍らねば、人に知られぬまかりありきは難くなむ。まことや、蔭につけつゝとか。

思ひいづる折しもあらじ筑波根のます蔭(一)をのみ添ふる身なれば

とのみなむ。一日と宣はせたる事は、いとよかなり。さてのみも慕ひ參り來るものならば、さて心安くは。

と聞え給へり。

又右大將殿より、仲忠見えざりける程に、今朝の御返聞え給へり、賜はせたりけるは、唯今なむ。みづから參り來て、この畏まりも聞えさせむとするを、今まで御前にさふらひていと苦しうてなむまかでしか。若宮に侍り參るべき志侍るうち斯く宣はせたれば、いかでけし(二)、雜役にもとなむ。誠は、世にとまらぬと侍りつるは、何事にか。其かたぐに、はま千鳥わが袖のうへに見しあとは涙にのみもまづ消えしかな

（語釈）
（一）前のあて宮の返事にいへる事也
（二）其方へ行きたしとも思へども
（三）女四宮の方へ行きたりと也
（五）女四方
（六）女四が東宮へ
（七）「うち」は「うへ」歟
（八）「なむ」衍文歟
（九）「参りうき」歟。一本「しりたき」
（考異）
（四）なほ…なりてばをさ
ーナシ

かゝる程に宮より御文、

東宮 日頃は如何となむ。されば、「夜の間にも（一）」とかありしかば、頼めてもと言ふなれば、夜毎になむ。そこ（二）にもいかでと思へども、然はえせぬ事なりければ、心にもあらでなむ。彼の物したりし（三）所には一日なむ。いでや、

筑波根の蔭につけつゝ時の間も思ひわするゝ折のなきかな

（四）なほ夜の間には必ず。世の中になくなりてば、をさなき人を如何などおぼさば、物の憂くもあらじ。

とて奉り給へり。上問はせ給ふ。あて宮「院（五）の御方へは、何時かわたらせ給へりし。幾度ばかりか（六）まうのぼり給ひぬる」蔵人、「朔日、うち（七）になむ渡らせ給へりし。さては夜一夜なむまうのぼり給へりし。上は、此の頃は、講師日々に参り、御書遊ばす。夜は夜更くるまで御手習せさせ給ふ」などなむ（八）聞ゆ。御返書き給ふ。

あて宮 日頃は、あやしう悩ましうのみ侍りて、如何ならむと心細き心地なむ。まる（九）

といと大きに書きて、一巻にしたり。見給ひて、あて宮「いとほしくよろづの事に手(一)をえみ給ふ人の、様々に書き給へるかな、一日、たはぶれに物せしを(二)。宮の年頃召しつるも、今日こそは奉らるゝなれ。此の返事は我せむ。使は誰ぞ」と問はせ給へば、孫王「奉り置きてまかりにけり」と聞ゆれば、「いと心地なき所の人かな(三)。彼よりかゝる物あらむ使やる、心せよ(四)」と宣ひて、白き色紙のいと厚らかなる一かさねに、

あて宮 賜はせためれど(五)、「人をとふとも」と言ふなればなむ。此の本どもを、かく様々に書かせて賜へるなむ、限なく喜び聞ゆ(六)。なほ此(七)の人々は、御弟子にし給ひて、これならぬ事も知らせ給へ。誠に後に(八)(九)もとめられたるは、何事にかあめる。我ならぬ人にやと思ふこそうしろめたけれ。

と例よりめでたう、墨つきて、大きやかに書かせ給ひて、あて宮「これ、また心あらむ者して奉り置きてかへり來ね(一〇)」とて奉れつ(一一)。

（語釈）
(一)「手をしみ給ふ人の」なるべし
(三)孫王の君をいふ
(四)かゝる使をかへずには無闇にせぬ様に注意せよ
(五)古今集「玉ぼこの路は常にも惑ひなむ人をとふとも我かと思はむ」
(七)あて宮腹の皇子たちをいふ
(八)「御私には」とありし條の返事なり

（考異）
(二)物せしを—物せしに
(六)聞ゆ—聞え
(九)後に—あと—何とか
(一〇)奉り—奉らせ
(一一)奉れつ—奉りつ

赤き色紙に書きて卯の花に付けたるは假名、はじめには男手にもあらず、女手にもあらず、あめつちぞ。(一)(二)その次に男手、離ち書きに書きて、同じ文字を樣々に變(三)へて書けり。

仲忠　わがかきてはるに傳ふるみづくきもすみかはりてや見えむとすらむ(四)

女手にて

仲忠　まだ知らぬ道にぞ惑ふうとからじ千鳥のあともとまらざりけり(五)

さしつぎに、

仲忠　とぶ鳥にあとある物と知らすれば(六)雲路はふかくふみ通ひなむ

次に片假名、

仲忠　いにしへも今ゆくさきも路々に思ふ心を(七)わするなよ君(八)

葦手、

仲忠　底きよくすむとも見えて行く水の袖にもめにもたゞずもあるかな

（語釋）

（一）「あめつちほしそら云々」といふ文にて此頃の手習のはじめに兒童のならひしもの

（四）墨に澄みをかけたり

（考異）

（二）あめつちぞ―あつめかきて―あつめてかき

（三）變へて書けり―かきかへてかきたり

（五）うとからじ―うといふらし

（六）知らすれば―知らすれど

（七）心を―心に―心あり

（八）わするなよ君―君忘るなよ

〔語釋〕
（一）「しのて」は「眞の手」歟

〔考異〕
（一）本か―本をか

と多く參り仕うまつる。次の對は藤壺の御方の親族たちの御曹司、西の廊はおしなべての人の曹司。御門は東南にあり。かく廣けれど、なほ狹く住みなし給へり。宿直の君だち、夜毎に檜割籠、らうある物ども調じて、御前にも臺盤所にもまゐる。

かゝる程に、「右大將殿より」とて手本四卷、色々の色紙に書きて、花の枝に付けて、孫王の君の許に御文してあり。

仲忠みづから持て參るべきを、仰せごと侍りし宮の御手本、持て參るとてなむ。これは、若宮の御料にと宣はせしかば、習はせ給ひつべくも侍らねど、召侍りしかばなむ急ぎ參らする、と聞えさせ給へ。さて御私には、何の本か（一）御要ある。此處には、世のためしになむ。

とて奉れ給へり。御前に持て參りたり。見給へば、黄ばみたる色紙に書きて、山吹に付けたるはしのて（一）、春の字、青き色紙に書きて松に付けたるは草にて夏の字、

（十三）あて宮の假御殿。仲忠約束の手本をあて宮に奉る。あて宮東宮と文贈答。あて宮の髪を結ぶ前にて侍女等實忠の噂す。孫王の君、兵衛、木工等の容貌性質。

〔語釋〕

（一）「羨まむかし」歟

（二）涼は

〔考異〕

（三）造れど―造れゝば

（四）などは―なれば

む時に、さらば羨むかし（一）」などみそかに宣ふ。

かくて藤壺のおはする町は、いと面白し。遣水のほどに、八重山吹の高くおもしろき咲き出たり。池のほとりに大きなる松に藤のかゝりて數多あり。すべて春の花、秋の紅葉おもしろく、時々の前栽、草木もいとをかし。遣水に瀧おとし、岩立てたる樣なども他處には似ず。かゝる事好み給ふ人（二）なれば、暫しなれど面白うし置きたり。此の西の對は、暗き闇にも照り輝きてぞ見ゆる、世のつねの調度をつかはねば。寢殿は清涼殿の樣を造れど（三）、例の調度など（四）は例の所の樣なり。それは二方にしつらはせ給ひて、東は若宮の御方、めのと四人、童、下仕二人づつあり。皆有るべき所々、せさせ給ひて、東の一の對をさふらひ、藏人所にしたり。方々しおき給へる所々に、あたり〳〵、政所より始めてしたり。東の二の對は、宮あこの侍從、二の御方、寢殿の西面は、二の宮の御めのと、人々あり。西の對は、二宮の御方のさふらひ、藤壺の御さふらひ、これにはやんごとなき四位、五位、い

〔語釋〕
(一)「させ」衍文なるべし

〔考異〕
(二)御名—御判—御對
(三)兄ともいはず勘當し—勘當せしめ兄ともいはず
(四)思ひてこそ—思ひてにてこそ

人どもは、番々に入れつゝ、この番缺かむ人は一日の饗殘さず仕うまつらせさせ(一)む」と書き給ひて、御名(二)して、宮あこぎみに、「これ預りておはせよ。御前の柱に押して、缺かむ人をば兄(三)ともいはず勘當し責めそせよや」と宣ひてとらせ給へば、喜び取りつ。宰相の君、祐澄「さらば、これかれ侍る時わたらせ給ひねかし」と聞え給へば、あて宮「いとなやましく侍れば、安き臥し起きもせむ」とて、あて宮「今又も參り來む」とてわたり給ひぬ。御車には四位、五位、ありとある人、ふさに付きて、引きに引く。若宮二所乘り給へり。君だちうち群れて送し給ふ。

かくておとゞ、正賴「あやしく、藤壺のいかに思ひてものしつる事ぞや」大宮、「有る樣あめり。めにちかう心かはりて有るを、思ひてこそ(四)あめれ」おとゞ、正賴「かたき事かな。いみじうすまひしを、公私居立ちて、强ひてしたるをば」宮、大宮「なほそれぞ。宮仕せさせて、さてもなどは思はれたりける。かく、琴彈き、あそびなどするを、若き心に羨ましと思ふなるべし」おとゞ、正賴「今犬に琴ならはさ

〔語釈〕
(一)東宮
(二)梨壺腹の皇子を太子にと申さば
(三)「后宮は」歟、后宮は兼雅の同胞也
(四)誤あるべし
(五)仲忠が
(六)あて宮腹の一の皇子
(七)仲忠が
(九)我が子どもも仲忠に靡きたるを見ずや
(一〇)宿直の番に
(一一)誤あるべし、「札うちて」歟
(一二)近澄

〔考異〕
(八)べうも—やうも

人の心をつかへば、靡く様なるなり。宮(一)は内裏にしたがひ奉り給ひ、内裏は右大將にかなひ給へば、かの主たちもちて之(二)をと申さば、何の疑かあらむ、われも口開くべくもあらず。中宮(三)はおはします、故郷(四)はみな足末なり。例はさる筋にもあらず」宰相中將、祐澄「いと不便なる事のみ聞え侍れ。天下の御子うまれ給へりとも、(五)然る心あるべき人か。その中に、(六)若宮をばいと(七)志深く思ひかしづき聞え給ふものを。この子日、御前の物調じて、もてあそび物七寶を盡して、し設けてこそ。裝束いとうるはしくて、賄しつゝ、手づから參り給ひしに、さる物から、よの覺おもしとある人なれば、いさゝかに僻みたる心つかふべうも(八)あらざめり」おとゞ、正頼「まづ見給へかし。(九)この人どもも、ようこそは靡きためれ」と宣ふ。左衛門督、忠澄「などかこの番に、(一〇)忠澄等を入れられぬ。こゝにもせむ」と宣ひて、忠澄「宮あこの侍從、いかに御方のふたうして(一一)行へ。(一二)藏人は入れじ。宮づかへ忙がし。この御館は、一人をば忌まむやは。二人づつ六番に結ばむ。彼方になほある

（語釋）
（一）仲澄の事をいふ也
（二）かく入込の處には居られ給はじ
（三）あて宮の方に宿直せん
（四）あて宮を
（五）「なかの君」にてあて宮は我々の主君なりといふ意なるべし
（八）生るべき梨壺腹の皇子に對して兼雅をいふ歟
（九）仲忠

（考異）
（六）何に斯うは—何しかそは—何かそは
（七）通しも—さても

つきてもあるべかりけるものを、さりともかく言はましやは、と思ふ折は多かる。又も(一)心憂くかなしと思ふ事ありや」とて泣き給ふ。大宮、宰相中將は、知り給へば、いと悲しと思す。こと人々は、何事とも知り給はず。あて宮「世の中を知らざりし時は、よろづの事心にも入らざりき。今思へばこそ、哀にも悲しうも」と宣へば宰相中將、祐澄「げに斯く(二)おほぞうにてはえおはせじ。祐澄等よりはじめて、二人づつ、(三)かの御方の宿直仕らむ。行くさき、自らよりはじめて、男女子どもまで、たのみ(四)奉り給へれば、このなか君に(五)こそは」藤壺、あて宮「あなうたてや。(六)何に斯うは。梨壺物し給ふめれば、男にてあらばさしも。四の宮の御許へもまうで通ひ給ふべかなれば。この程にさる事あらば、それこそは世の中定なければ、必ずとも思はず」おとゞ、正賴「梨壺は、さしも(七)知らず。たゞ今、世は右大將親子の御世になりなむとすめり。世の人はおぢおとゞ(八)、わが身よりはじめて、皆靡きはてにたり。それはかの君(九)のおしたち惡きにもあらず。自然に恥かしきによりて、

勘事せられしにこそ、いと面目有りしかど、心々に言ひてさわがれ給ひしこそ、思ふときには面だたしかめれ。なほ人に言はれむ事はつゝましや」藤壺、あて宮「さても、然るべき人は誰かは。さもやと思ふべき人は、ありきすべうもあらざなるを。かの人こそ、(一)いとほしうは聞き侍れ。一日、とふらひに遣はしたりしかば、いみじう喜びて、「今は心にまかせて、野山にも入り、法師にもなりなむ」とぞ言ひける。さらむ志を思ひ知れ(二)ばこそ、人ならぬものだにも、物思ひ知るものなれ」と宣へば皆人いとあやしと思ふ。左衛門督の君、忠澄「この族を離ちて、世にある人は、みな然る心のみこそは。この君しも、かく見え奉りたるぞかしこきや」藤壺、あて宮「思ほえぬ(三)かな。年頃より言ひはじめて、今に忘れざんなる人は、誰かは。はかなき文などは、あこきなども数多書くめる」大宮、「志うしなはぬ人は、あまた聞ゆや」藤壺、あて宮「今は誰も然こそは。こゝには然見ゆる(四)なし。はかなき宮仕をして、ゆゝしき人々のことどもを聞く時は、あぢきなや、志有りし人に

〔語釋〕
(一)實忠
(三)實忠と同じ心なるに

〔考異〕
(二)知ればこそ人ならぬ—知ればよそ人ならぬ—知ればこそよに人ならぬ
(四)見ゆるなし—見ゆることなし

❶あて宮我が寢殿へ歸らんとす。實忠の噂。仲忠の噂。忠澄等兄弟交代にあて宮の爲に宿直せんとす。あて宮歸る。

〔語釋〕

(一)前に懸想せし男どもが目をつけてよき折ぞとて入り來らば如何せん

(二)我が深窓に居し時こそ人並の女かと思ひて懸想する人もありしならんが

(五)あて宮を迎ひにゆきし時の事をいふなるべし

〔考異〕

(三)斯う…言はるれば—かうさりもて萬の人—かうきかりて萬のはずなどにもかくまさなく言はるれば萬の人

(四)いらへ—いいて

かくて大殿の町は、ことに面白き事はなくて、またくいかめし。おほん方々、東の一の對に右大辨、二の對に、二かたにて藏人の少將、大夫の君おはす。さては他人の曹司。君たちは、殿におはせし時はさしもあらざりしかど、里にては人々參りつどひ給ひて見え奉り給へば、いと騷がしとて、藤壺、あて宮「今はあなたに歸り渡りなむ」と聞え給へば、大宮「いかでか、然ばかりひろき所には。(一)物言ひさしたる人々の、みな見置きて、かゝる折とてはしり入り來ば如何。斯うなくても人によからず思はれ給へれば、名を立てむとて、腹きたなき心つかふ人もあらむ。いとうしろめたき事なり。なほ狹くとも此處にを」と聞え給へば、あて宮「誰か心おきては。昔、御子にて、(二)かくも見えざりし時こそ、もし人の樣にもやとて。(三)斯うさかりて下司などにさへまさなく言はるれば、聞き疎みにたらむものを、宰相の中將見え給へど、大宮「殊にかたはならぬ人はそれしもこそ」(四)いらへ、あて宮「かたはなりと見ゆる人もあらむ」おとゞ、正頼「何かは、(五)おのれをも、かの人どもをも、

ゆく末まだ遠き心地のするこそ。

とて、例の藏人して奉れ給ふ。まだ大臣殿の御方にぞ(一)おはしまし(二)ける。これかれ見給ひて、「をかしき筍かな(三)」とて土おし丸がしつゝ、筍一筋づつ取り給ふ。

御返は、

あて宮　承りぬ。賜はらせたる人の御文は、げにさも(四)思すべき事にこそは。宣はせたる事(六)は、いとよう侍り。さふらはぬ程にと思さるとも、御覽じ直す折(五)も侍りなむ。このわたりには、承りぬ(七)。いみじうおもほし(八)嘆くとあれば、いとほしくなむ。はやう聞え給へ。さてこの(九)、

きぬぐの濡れて別れししのゝめ(一〇)ぞあくる夜ごとに思ひ出らるゝ

露は、これにはそれをのみなむ(一一)、

くれ竹のふしにはあらでかゝる身の露のよのみも嘆かるゝかな

とて藏人に、あて宮「かたみにだに」とて、單の御衣に、小袿かさねて賜ふ。

〔語釋〕
(一)あて宮が
(五)女四を召す事は
(七)あて宮の留守中故召されたるならんと女四が思召すとも
(八)嵯峨院が

〔考異〕
(二)ましし—ナシ
(三)かな—なり
(四)さも思すべき—さもおぼえおはすべき
(六)事は—事も
(九)この—これは
(一〇)しのゝめぞ—しののめの
(一一)なむ—なむ明暮

〔語釋〕
（一）照陽殿へ文をやりしかば此通り返事し來れりと返事の文を添へてよこしたる也
（二）「御方のみ」歟、女四宮をいふ
（四）嵯峨院が
（五）女四宮を呼ばんと思ふ
（六）「心ありともや思へば」にて實は義理にせまりてする事なるを女四に心ありての事と思はるゝかつらしとの意なるべし

〔考異〕
（三）方のみ—方なむ
（七）よごとに露の—よゝに露のみ

そき緒をむすび、餌袋の樣にして、黑方を土にて、沈の筍つくらせ給ひ、隙もなく植ゑさせ給ひて、節ごとに水銀の露するゑさせ給ひて、藤壺に奉らせ給ふ。

東宮きのふ一昨日は、物忌にてなむ。かの訪らはむとものせられし人の（一）許に遣りたりしかば、斯くなむ。ことに心地ありげもなき人も、斯うこそは思ひけれ。これにつけても、院の方のみ（二）（三）いとほしく、ゆく（四）さき少げに見え給ふを、かくてありとのみ聞召すらむを、この頃物せむ（五）と思ふ。（六）心ありともや思へば、つゝましうてなむ。宣はむにおきて。これは小き人々に持たせ給へとてなむ。さても、

あけゆくときぬき定めぬしのゝめに老のよまでもわびしかりしか

君には如何。こゝには夜晝忘るゝ時なく、まかで給ひにし後は、まだ寐をなむ寐ぬ。

もろ共にふしのみあかしくれ竹の（七）よごとに露のおきてゆくらむ

宣はせたるは、身の人數に侍らねば、親同胞の思ひおなずり侍るまゝに、幼き心は思ひむつかり侍りしなり。今は何につけても顧みさせ給はずば、親の面をも、君の御面をもふせ侍るべき身にこそは。

とて奉れ給ひつ。

〔畫詞〕こゝはおほき大殿。

かくて藤壺の御使（一）は、歸り參りて御返奉らせて、人も無き折なりければ、侍りつるやう、宣（二）ひつる事など委しく申して、有りつる箱見せ奉れば、あけて見給ふ。書きつけたるものを御覽じて、あて宮「これは見つや」とて賜ふ。箱には黄金一箱あり。君、あて宮「心深きことはた、又はあらじかし。（三）これを置きて、この族に遂に取らせ給へる。御身に添へてや持ち（四）給へらむ」と宣へば、これこそ「いな（五）。外よりなむ持てまうで來つる」と申す。

東宮は銀（六）のむすび（七）物どもを毀たせ給ひて、ほかなる竹原にして、下には銀ほ

〔語釋〕

（一）これこそ

（三）兵衛よりかへされたる儘に仕舞ひ置きて終に兵衛の弟にやりたる事よ

（四）「給ひつらむ」なるべし

（七）銀線を結びあはせてつくりたる籠の如きものか

㊉あて宮の使復命。東宮よりあて宮に御文。御返事。

〔考異〕

（二）宣ひつる事など―宣へる事を

（五）いな―ナシ

（六）銀のむすび物どもを―銀黄金のむすび物などを

（語釋）
（一）季明
（二）あて宮に對して不平ありともの意歟
（三）我々兄弟が宮の君を構はずと
（八）亡き父に

（考異）
（三）思ひ給へずとも—思ふべからむ に と宣はす—思ふ
（四）貴き女…それこそや—かるきめはふるめぞや—みそかをとこぞともそれかぞや
（五）世に人は—よるべは
（六）少し—うち
（七）とぞ—とて

こそ、見譲りても。今よりはなほかの人の(一)心ゆかず思ひ給へずとも心を(二)さめて物し給へ。さて平かに世にあれと思ほせ。

と書き給へり。これかれ見給ひて、「あないとほしや、おの〲(三)顧みずと思したるにこそあめれ」宰相、實忠「いでや、心肝をまどはして思ふ人は、宮もになうおほすなる、貴き(四)女ぞかしこき女なれ、みそかごとぞともそれこそや」など宣ふ。「いかでかよしとしも思はむは、これは今よりは、世に(五)人はとふらひこそは」などさゝめき給ふ。宮の君に御文かゝせ給ふ。

昭陽殿畏まりて承りぬ。あさましういみじき目を見給へて、思ひ給へなげきつるに、いと嬉しき仰せごとを承りてなむ、少し(六)慰み給へる。いでや、昔の人の夜晝思ひ給へなげきし身を、如何樣にとぞ(七)。

見し世にぞかくも言はまし嘆きつゝしでの山路をいかで越ゆらむ

今日の御文を(八)見せ侍らましものを、とぞ思ひ給へ侍る。人の爲によからずと

（語釋）
（一）照陽殿へ
（二）「思ひしを」なるべし
（考異）
（三）とぞ―とて

ずなりにたるぞ」など宣ふ程に、東宮より宮の進を御使にて御文あり。喜びて見給ひて、聲をはなちて、照陽殿「わが親の今々とし給ひしまで、「我（一）はきんちを思ふにぞ、冥路もえ往くまじき、宮仕に出だして、人數にもあらず、かゝる折にだに哀とも宣はねば、おぼろげに憎しとおぼすにあらざめり。かゝるを見棄つること、如何様に惑はむずらむ」と泣く〳〵かくれ給ひにし。吾が君、今日の御文を見せ奉らずなりにし。かくぞ宣へる。天翔りても見給へ」と泣きのゝしり給ふ。民部卿、實正「如何様なる御文ぞ。賜へ。見給はむ」と聞え給へば、さし出で給へり。見給へば、

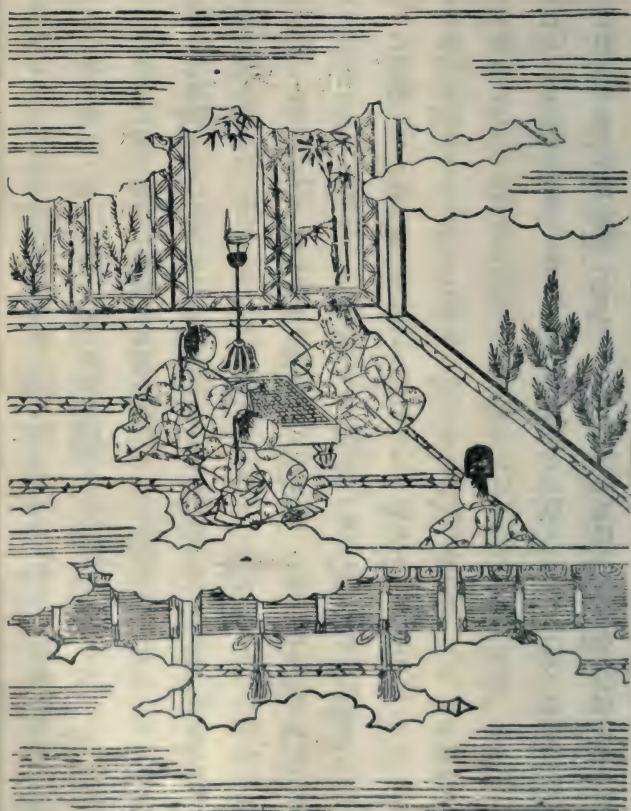
東宮いと哀にかなしき事は、聞きしすなはちと思ひし（二）。忌むなど人のいふ日過さむとてなむ。いかに程經るまゝに心細くとぞ。何か然しもとぞ（三）。

頼みけむ人はなくとも我だにも世に經ばいたく嘆かざらなむ

あやしく、睦ましかるべき人に疎く思はれ給ふめれば、昔、人のし給へれば

實忠「なほ然るにこそ侍るめれ。かの殿に侍りし時、兵衞の君に、御聲をだに聞かせよと責めしかば、中の大殿の東の簾と格子との間になむ入りたりし。（一）格子の穴あり。あけて見しかば、母屋の御簾をあげて、火を前にともして、この大將の君のえたまへる御子と、（二）碁なむ打ち給ひし。さては琴彈きなどなむ。それを見しまゝに塞がりし（三）胸なむ、まださながら」民部卿、實正「さて如何有りし。いづれか優りて見え給ひし」「いさや、（四）かの御子をば委しくも見奉らず。思ふ人をのみ。更に又よに類有るべうは見えざりし人なり」實正「げに斯く名だたる人は然りけむかし。（五）こゝに持給へる人は、（六）擇り屑にこそ侍らめ。それも人よりはよろしかめるを、などかは然見給はざらむ。よくもおし開けて入り給はずなりにし。斯くばかり思はむ人をば、然てこそは（七）おはせめ、かくて歎きおはするよりは」宰相、實忠「人のゆるさぬ人に、さてしもあらませば、今は僞なまし。見ざらましかば、なほ世の中に交らひ侍りなまし」民部卿、實正「かう幸のものし給ふべき人なれば、然しも給は

（語釋）
（一）「入れたりし」歟
（二）女一宮とあて宮と

（考異）
（三）塞がりし—塞がりにし
（四）いさや—いちへ
（五）あて宮を其様に無類の美人と見しは最なり
（六）我が妻にし居る三の君は
（七）こそは—「は」ナシ

〔語釈〕
(一)季明の死したるを云ふ
(三)御頼申すべき人もあれば

〔考異〕
(二)思ろ―思ひ
(四)いくよ―「よに」ナレ
(五)いかでか無慙の人は―いらへかばかりの物は

㊈實正兄に昔あて宮を見し時の事を語る。東宮より昭陽殿へ御文。昭陽殿の狂喜。

れる所なりければ、そこにて物越にて宣ふ、實忠「いと珍らしく嬉しき御使に、ものせられたなれど、かく人にも見えで籠り侍れば、對面せず。忍びて、妹の君して申させ給へ、「御文には、物もおぼえねば、ことごとにも聞えず。今必ずまゐり侍らむ。制し給ひし人もおはせねば、今は山林にも深く入りなむと思う給ふるを、聞えおくべき人の上(二)など侍るを、昔のやうにはな思しそとなむ聞えつる(一)」と(三)申し給へ」と泣く泣く宣ひて、實忠「これは、たゞならぬ折ならましかば衣をも脱ぐべきを、年頃行ひ出でたる佛舍利なり。(四)いくよなるまでこそは、山籠りは」とて賜へば、これはた(五)「いかでか、無慙の人は、賜はりて失ひ侍りなむ。いと恐ろしき事」と聞ゆれば、實忠「よに侍らざらむかたみにし給へ」とて取らせて入り給ひて、御齋參りすゑたれど聞食さず、いみじう泣き居給へり。

民部卿、實正「昔いかなる契をなし給へる人なれば、この御爲にかゝる御心あらむ。音にのみ聞く人をば、斯くしも思はぬものを。物越にても、物聞えなどやし給ひし」

いみじき事のあらむのみこそ、と思ひ給ふるも且は心憂くこそ。たまさかに、里におはしますなるを、今忌過ぎ侍りなば參り來て、今日のかしこまりも、喜も聞えさせむ。例の樣になもてなさせ給ひそ。今はたゞ狹しといふなる

路一つを。

などいと濃き鈍色の紙に書きて、いとおもしろき八重山吹につけたり。この御使に何わざをせむ、と思しめぐらして(一)、兵衞の君のかへしたりし箱の(二)、外にありける、金入りながら取りに遣はして、鈍色の紙につゝみて、その紙に、

實忠 この箱は君に讓らむわが身にはけふとふ人にますものぞ無き

ながき心。

と書きて、實忠「この御使は誰ぞ」と問はせ給へば、「童名これこそと召しゝが今は宮の藏人に侍るなむ參り來たり(三)」君、實忠「むかし睦じかりし人、思して賜へるにこそありけれ。こゝに忍びてたち寄れといへ」と宣へば、簀子も無き、蔀にかゝ

〔語釋〕

(一)實忠が

(二)實忠が黃金を入れて賜りたる箱を兵衞が返したる事前に見えたり

(三)「來たる」なるべし

らへ。實忠「まだ見給へずや、目も見え侍らねば。親と聞ゆるものは、おはしまさぬ世にも、御德嬉しきものなりけり。こゝらの年頃、身を徒らになして侍りつれど、音もし給はざりつるものを」とていみじう泣き給ふを、宮の君聞き給ひて、(一)昭陽殿「然言へどもはた、(二)密夫こそとぶらはれためりかし。(三)斯う忍人まうけ給ふめる人をも、二なく思し騷ぐ」と宣ふを民部卿聞き給ひて、實正「いみじう。これ聞き給へ」とてつきじろひて、爪彈をして(四)おはさうず。宰相、實忠「まだ小野に侍りし時、(五)宰相中將ものし給ひたりき。「哀になること」など、時々宣ふ(六)となむ告けし」(七)などて御かへり書き給ふ、

實忠いとも〳〵珍らしきは、限なくよろこび、(八)かくいみじきよろこびの侍りし(九)にも、今日なむすこし年頃の心地思ひ給へ慰むやうに。さても、

なみだ川袂にふちのなかりせば沈むも知らであらむとやせし

身をすてて思う給へ嘆きつるものを、かゝる折の(一〇)侍るべければ、身の爲には

〔語釋〕
(二)あて宮が密夫の許へ許侍せりとなり
(五)祐澄
(六)あて宮が
(七)「などとて」になるべし
(八)「よろこび」衍文なるべし
(九)「侍るにしも」歟

〔考異〕
(一)聞き給ひて—見給ひて
(三)斯う—斯く
(四)して—「て」ナシ
(一〇)侍るべければ—侍りければ

木隠れてすむときゝつる山川になど藤波の袖にたつらむ

世の中のはかなきにつけても、よろづ思う給へらるゝ。

とて藤の花につけて、兵衛の君の兄の、(一)童なりしが、今は東宮の藏人になし給へるを召して、あて宮「これおほき大殿にもて參りて、人々あまた物し給へらむ、源宰相に定かに奉れ」とて賜へば、よろこびて持て參る。かの御方の人は、皆見知りたり。殿にうちはへものし給ひて、兵衛の君(二)かたらひ給ひし時は、これを使にてぞ、御文通はし給へる。

藏人、かの君の近く使ひ給ひしさふらひの人に これはた、「これ、さだかに參らせよ、となむ仰せられつる」とて取らすれば、侍「いみじう思し嘆くに、この御文を御覽ぜば、すこし思し慰めてむ」と喜びて物も聞えで奉れば、實忠「何處よりぞ」使「知らず。參らせよとて人の申しつる」と申す。ひき開けて見給ふ。かの御手なれば、見はてで、泣きに泣き給ふ。民部卿の、(三) 實正「藤壺の(四)なりや。賜へ。見給へむ」い

〔語釈〕
(一)これはた也
(二)實忠が
(三)「の」衍文なるべし

〔考異〕
(四)なりや—なるか

山に積みたる樣にておはす。

かくて三日過ぎぬ。女御の君、大宮、(一)わたり給ひなむとて、大宮、仁壽「かくて徒然とは。彼處にしばしわたり給へ。年頃の物語も聞えむ」と宣へば、あて宮「いま」(二)などてわたり給ひぬ。藤つぼ、源宰相とふらはむと思す。

かくておほき(三)大殿には、二月二十七日の程に、(四)とかくし奉りて、殿にみな集り給ひて、土殿して、男君たちはおはし、(五)宮の君は、御局しておはす。藤壺はおほいとのの御方にわたり給ひぬ。此西の對には、人々おほくさふらふ。

(六)かくてりやうの鈍色の紙薄らかなる(七)一かさねに書き給ふ、

あて宮 年ごろ、覺束なきまでに、などかはそれよりも。時々は、いと哀に思ほし忘れぬやうになむと人の物すれば、思はずに心長くもと承りつる程に、いとも〱哀にかなしき御思を、いかに〱となむ。いと怪しう御宮仕を怠り給ふべかめる樣なるをだに、いといとほしと思ひ給へるものを。

〔語釋〕
(一)我が御殿へ歸らんとて
(二)「などとて」なるべし
(三)季明邸
(四)季明の遺骸を葬りて
(七)季明の葬送。
(五)昭陽殿
(八)あて宮 文を實忠に贈る。實忠の返事。

〔考異〕
(六)かくてりやうの—ナシ
(七)薄らかなる一紙のすくよかなる

〔語釋〕
(三)涼の上京當時より牽ちんと言ひ居たりとの意歟
(四)今宮の生める男子
(七)女子も生るべきものを

〔考異〕
(一)いと―ナシ
(二)給ひつる―給へる
(五)とする―とやとやする
(六)いらへ―いさや
(八)給ひなむ―給はむ
(九)になく―よく

北の外に倉どもあり。その倉には使ふべき物どもいと多かり。その倉の前に十一間の檜皮屋あり。それは納殿にて、米よろづの物を納めたり。(一)かゝれば藤壺、あて宮「思ほえず富をもせさせ給ひつる(二)かな。あなう君よ、あひなだのみして居眠し給はむに」北の方、今宮「などか、さも眠らまほしうなむ。この三條といふ所は、まだ京にも上らざりける時、設けたりけるとかや。此のあめる物の具ぞ、(三)すなはちよりいふめる。されば、あひなだのめにもあらじや」と聞え給へば、あて宮「まことや、などその珍(四)し人は。それもや、何ならば隠し給はむとする(五)」いらへ、(六)今宮「思ふ樣ならずとて憎むめれば、こゝにも「見苦し。女兒ならましかば、若宮に奉らましものを」とぞ言ふや」と聞え給ふ。藤壺、あて宮「あぢきな。後にさるも有りなむものを(七)」など聞え給ふ。

日暮れぬれば、曉、源中納言殿わたり給ひなむ(八)とす。御車二十ばかり、御前いとになく(九)設けられたり。いと裝ほしうてぞわたり給ひぬ。この殿は、堀河よりは東、三條の大路よりは、北二町、吹上のつほ造りみがきて、よろづの調度はかた

涼　君がためと思ひしやどの鍵を見てあけくれなげく心をも知れ

と有り。見つけ給ひて、(一)北の方見給ひて、うたてありと思して、かくし給ひつ。北の方、今宮(二)「殿の中など、今日御覧ぜよ」と宣へば、宮(三)も此の君も今日出でさせ給はむずればとおぼして、立てたるかうの辛櫃ども、いみじう清らなる十ばかりあり。あけて見給へば、萬のたから物、きぬ、綾など樣々にあり。又、さま〴〵なる物に入れつゝ、さらぬ物もいと多かり。外には、三尺の沈の御厨子、淺香の四尺の御厨子二よろひ、萬の男女のつかひ給ふべき調度ども、ありがたき清らにて、數を盡してあり。すべてよろずの調度などあり。六尺ばかりの金銅の蒔繪の厨子四つ、それに銀の御器調じ、よろづの調度銀にてしすゑたり。今かたへには、さま〴〵の物どもいと多かり。このおとゞの西に七間の檜皮葺にてあり。左右の渡殿あり。御厨子所には、その西の屋をしたり。そこには銀の碗二十ばかり、ちひさきなどおなじ。(四)けにはこしきくしつゝ、そこの具ども、いとめでたうてあり。

(語釋)
(一)「見つけ給ひて」衍文歟
(三)大宮も仁壽殿も
(四)「笥には甑具しつゝ」歟

(考異)
(一)と—ナシ

〔語釋〕
(二)東宮も仲忠に手本をかきてと頼みあるを
(三)犬宮
(四)「からもりの物語」は竹取物語とならびたる古き物語なりしと見ゆ。その物語の主人公なるべし
(五)「などとて」なるべし
(六)涼の奉りたる

〔考異〕
(二)使から書かむものぞ―使からか見む
(七)つなぎて―つなぎつゝ

㊅あて宮涼の贈物及殿内を見る、涼堀川の邸に移る。

や、宮(一)にも「書きてと聞え給ひける、そゞのかし聞え奉れよ、使(二)から書かむものぞ」と宣ひしを、賜はりて奉らばや」大將、仲忠「いと怪しく、異樣なる物をぞ召すや。はやく書きてさふらひたれど、つゝましうてえ參らせ侍らず」と聞え給へば、あて宮「早う奉り給へとぞ。この頃は待たせ給ふとなむ」大將、仲忠「さらば、とまれかうまれ、今參らせ侍らむ。若宮の御料には、たゞ今も侍りなむかし」と聞え給ふ。藤壺、あて宮「今さるべからむ時に聞え侍らむ。その日も取らせ給へ。さて、かの人に見せ給はざんなる人はこゝにいつしか。疾くとこそ思へ」大將、仲忠「いさや、まだきよりいと見憎く(三)けなめれば、からもり(四)がしたりけむ樣にてぞよけなるや」(五)などて、仲忠「さらば靜に、かのからもりを率て參らせむ」とてかへり給ひぬ。
かくてその日暮れつ。つとめて今日よき日なれば、かの(六)小辛櫃をあけて見給へば、銀に塗りものしたる鍵ども多くさしつなぎ(七)ていと多かなる中に、見給へば、源中納言の御手にてあり、

〔語釈〕
(一)仲忠
(二)此皇子たちをいふ
(四)自分が居る間に
(五)手本

〔考異〕
(三)給ふ―給ひつ

ひつる馬車ども、持ておはして見せ奉り給ふ。若宮は、いとおとなしく、紕ついさしなどしておはす。母宮、いとめづらしう哀と見奉り給ひて、あて宮「心地こそ頭白くなりにたる樣なれ、かく大きになりに給ひたれば。御手習などはし給ふや。何わざかし給ひつる」と問ひ聞え給へば若宮、一宮「何わざも、せさする人もなければ、大將(一)、かしこう書習はさむと宣ひしかば」母宮、あて宮「いと嬉しき事かな。かの御弟子になり給ひて、萬のわざし給へ」なんど聞え給へば、大將うち笑みて、仲忠「おとなしう、目に見す〳〵人の御親にならせ給ひて。さても、宮(二)には、いかで仕うまつらむと思う給ふるを、今はいとよう、物遊ばしなどし(三)給ふべかめるを、さる仰せごとも無ければ」と聞え給へば、仁壽「誰かは、こゝには知らで籠り侍れば、おほぞうなるやうなれば、こゝに(四)かくて侍る程に、いかで習はし奉らむ」大將、仲忠「いとやすき事なり。御書を仕うまつらむ。その口と仰せごとを」藤壺、あて宮「手などもまだ習ひ給はざめるを本(五)をこそまづものせさせ給はめ。まこと

人見てはたゞ笑ひに笑ひて、白くをかしければ、前に伏せて、常に守らへてぞあ(一)なる」(二)藤壺のいらへ、あて宮「疎き人にこそは(三)。そが中にも、こゝにも(四)何か宮は(五)隠し給はむ」女御の君、仁壽「宮は誰にもかくし給はず。何事も思したらざんめり(六)」藤壺、あて宮「さておとゞには(七)」仁壽「いであなうたてや。女にだに隠さるゝものは(八)」など宣ふ程に、右大將夕つ方、直衣姿にてまうで給へり。例の簀子に褥参り給へり。居給へるを見れば、見え給ひつる(九)(一〇)人にいとこよなし。藤壺なほこれはこよなくもはた、と見給ふ。大將、仲忠「さいつ頃も參りて侍りしかども上にのみなむ。御局の人も參らせ給はず、と承りしかば、覺束なくてなむ。斯くておはしませば、今はむつかしがらせ給ふまでなむ(一一)」と聞え給ふに、孫王の君していらへさせ給ふ、(一二)あて宮「承りぬ。時々訪はせ給ふをなむ、人心地は(一三)」大將、仲忠「いとやすき事にこ(一四)そは。常に參り來ば、如何なる人の御心にか」なんど聞え給ふ程に、若宮たち二(一五)所ながら、乳母たちなどして、大殿の御方よりおはしたり。かの大將の奉り給

〔語釋〕
(三)疎き人にこそは見せぬ事もあらんが
(四)我には
(五)女一宮
(七)正頼
(九)涼をいふなるべし
(一一)うるさく思召す程繁參上すべし
(一三)誤ならんか
(一五)あて宮腹の皇子たち

〔考異〕
(一)守らへてぞあなる—まもらへてぞある
(二)藤壺のいらへ—かれをいかでとく
(六)たらざんめり—たらずとなむ
(八)ものは—「もの」ナシ
(一〇)給ひつる—給へる
(一二)なむと—など
(一四)こそは—「は」ナシ

女一いと珍らしうまかで給へるを、いつしかとこそ待ち聞えつれ。などかは(一)それよりも宣はざらむ。いかで對面も疾くもがな。こゝにてさへ(二)覺束なきまゝに、(三)「昔を今に」とのみなむ。こゝには立寄り給ひげもなきを、其方に參り來む、宣はむまゝに。

と聞え給へり。

あて宮 承りぬ。まかで侍りてはすなはち、(四)珍らしき人をもまづとこそ思ひ給ふれど、こゝにこれかれ物し給へりけるに、聞えさせ承るとなむ。わたらせ給はむとか。いかでか。御まもりは恐ろしかめれど、今其方にを。

と聞え給ふ。

かくて藤壺、あて宮「宮に參りて、犬宮ふとかき抱き奉らむ」大宮、「こゝにえ見ざりしを、餠食はせに物してこそ。それにだに、疾に出だし立てられざりき」女御の君、仁壽「この頃は、いとをかしくなりにたり。起きかへり、暫し這ひなどして、(五)

(語釋)
(二)里に御下りの今でさへ御目にもかゝれぬ故
(三)古今集「しづやしづしづのをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな」
(四)其方へ參りて犬宮を先づ見たしと

(考異)
(一)などかは—「は」ナシ
(五)して—「て」ナシ

㊄仲忠あて宮を訪ふ。皇子に讀書を授け奉るべき約束。

東宮昨日たちかへりてと思ひ給へしかど、しづかならずと有りしかば、心あわただしくやとて。今宵は、

ありとのみ見ゆる寐覺のわびしきにひとりある頃の夢や何なり(一)

なほ一人はえこそ。夕暮などは、いと便なき心地して、大空をのみながむ。

と聞え給へり。御使、兵衛の君の兄、藏人の内許されたる、御前に參り、藏人「こよひはたゞ一所御遊し給ひつゝ、御殿籠らずなりぬ」と聞ゆれば、あて宮「庚申にこそはありつらめ」御返、

あて宮されぱこそは聞えさせしか。

程もなく忘れにけりな夢にても思はましかばありと見ましや

あな心みじかや。

と聞え給ひて、「祿はうるさし。後には」と宣へば、笑ひて參りぬ。

かゝる程に一の宮より御文あり、(二)

〔語釋〕
(二)あて宮へ

〔考異〕
(一)何なり―何なる

こそ内裏に率て奉らむとすれど、まうのぼりたらむ間のうしろめたく、一の宮の御許にと思へど、人の心も知らず、(一)大將もそらめき(二)給ふべければ、めのみさまなる心もやとて、御方にとこそは思ひ給へつれ。かたはなれたる馬の如(三)あるべかなれば、如何はすべからむを、所々參りて(四)、いと憎げなる事をし給ふなれば、思ひこそ煩ひぬれ。又あやしき事も有りや。みこふさいの人も、ことやうなることを(五)、おのれはゆるさず(六)、例のわざせむとぞあなるや」大宮うち笑ひ給ひて、大宮「若きものの狂ふをだに思ふところに、なほ一の宮の御方にあづけ奉り給へ。その大將は帝の聞召さむにもよからずと思さじ。そが中に、宮にこよなう勝り給はゞこそ」女御の君、仁壽「いさや。人の心を知らねば、恐ろしうこそ。内裏にと思ふがうしろめたきは、この宮たゞ如何にや如何にと宣ふなり。御文も常にあれば、あな恐ろしや。后の宮のようし給はぬところになむ」と宣ふ程に、夜更けぬれば、みな御殿籠りぬ。あくるつとめて、宮より御文あり。

〔語釋〕
(一)手許におきては留守の間が氣がかりにて

〔考異〕
(二)そらめき—うちみ—うちみ
(三)如—如く
(四)參りて—參るとて
(五)ことをおのれは—ことをれは
(六)ゆるさず—「ず」ナシ

なめざましや。一口にても（一）はた。人は位かは。有様するわざなどこそ。がくしら（二）は、みかどをも、とるかどなるらむをばなににかは。おやしく、見聞けば、物し給ふ人にこそ（三）物し給ふめれ。（四）てしにもゆるされたるやうによき人もあしき人も、いかでこの人に物を言ひわたらひにしがなと思はれ給へつるは如何なるにか。（五）上達部、君だち、近く（六）親にものし給ふめれど、同じことをもろ共に申しなるゝにのこ（七）りなり。かしこのみならざんめるに、（八）若き人の昨日今日出で立つに、なさるゝ事、さらぬは心よからざるれど、（九）見る顔かたちに、わけて皆なびき従ひてこそ。かく有り難き人の、皆ならひはててや。（一〇）うたていかでかはすらむ」藤壺、あて宮「かしこくものし給ふなれば、然聞え給ふにこそ。はかなきことを、心一つに思ひて、はかなくなる時は、いと幼しや。よう心し給へと聞ゆるやう有り。いづれとにあらねど、そが中にも（一一）如何なる人にもなり給ひぬべかめるものを（一二）」と聞え給へば女御の君、仁壽「こゝにも思ふ樣有りや。衣更してば參りなむとするを、この宮たちを

〔語釋〕
（一）近澄と仲忠を一つ口に言ふべきに非ず
（二）此處の詞解しがたき處多し誤脱あるべし

〔考異〕
（三）みかど…をば—みかどをもけふことなからむをば—みかども今日ことなからむをば—みかどをもとかうとならむをば
（四）てし—てゐ—てら
（五）なるにか—なる故にか
（六）近く—近くは
（七）のこりなり—このなり—こちなり—又のちなり—このちなり
（八）のみならざんめるに—のはならざめるに—のならざらんめるに
（九）よからざるれど—よからざると—よからざるれ—よからざるなど
（一〇）皆ならひはててや—皆ならひはつや—皆ならひはてや
（一一）そが中にも—ナシ
（一二）ものを—ものぞや

〔語釋〕
(一)譏あるべし
(二)我が願を成就せしめ給へと祈るに非ず
(五)女一宮、仲忠の妻
(六)近澄が
(七)女二宮
(八)女二宮が
(一〇)仲忠
(一一)仲忠を
(一二)他人も帝の聟になる上は我もなられぬ筈なしと

〔考異〕
(三)などこそ—などとこそ
(四)給ふ藤壺—給へば藤壺
(九)のち…とぞいふ—いのちながらなれしかばかくてやかならむとぞいふ
(一三)こそは—「は」ナシ

ば、如何にも〱と思へども、親のさきに命なき人あらはなれば、かく申すに、その如くなし給へとにはあらず。佛神にも、この事な思はせ(一)給ひそ、(二)と申させむなどこそ」など言ひつゝ。常に喜び樂しむを見るこそ、いと世に經まほしけれ」と(三)聞え給ふ。(四)藤壺、あて宮「何事をいかに思すぞ。すゞろなる事、あるまじき、思ひ初むるも、よからぬわざにこそ」と宣へば、大宮「知らずや。その言ふこと、いと恐ろしや。この中らひにこそは、あめれ」女御の君、仁壽「いづれぞ。(五)一の宮をこそ、人よりはことに(六)思ひ聞え給ふべかめれ」宮、大宮「あなうたてや。いかでか。そは、(七)若宮にこそあべかめれ。まだ西の對におはせし時、かいまみをなむしたりしかば。(八)一の宮と御碁うち給ひしを見奉りしまゝに、いとの(九)ちながうなれしかば、かくてやむるならむとぞいふ」女御の君、仁壽「一の宮も、昨日今日侍從(一〇)なりし人につきてこそはあるなるに、上もこよな(一一)う思ひ聞え給ふめりし。かゝるわざ、帝のしおき給ふめりしかば、外(一二)にだに斯くてこそは、我も、とこそ(一三)は思ふらめ」宮、大宮「あ

消息もえぞ聞えず。例の覺束なうこそあらめと思へば、これよりもしば〳〵聞え給はず。(一)先つ頃も、參らせ給へりと承りしかど、え聞えさせず。「我をまつちの」(二)とかや云ふ樣になむ」と聞え給ふほどに、夜さりの御物御前ごとに參る。御折敷など取りかへてまゐる。かくて彈正宮は、忠康「今つねに參り來む。うしろめたきこと侍れば、宿守に」(三)とて立ち給ひぬ。

大宮、「この犬の餅まゐりし日、この宮の(四)怪しきことを宣ひしはまことか」と聞え給へば、あて宮「知らずや。何事にかは」大宮、「世の中に苦しかるべきものは、若き人の好いたる、(五)子にて持たる、うたてき事なりや。見苦しういみじきものを見るこそ、いと命長くなりなまほしけれ。この近澄といふ人の、童よりあやしく好きて見えしかば、(六)そへ物になりぬべし、とて、(七)彼處にもゆるし給ばでありしものの、人さだめてありしかば、目やすしと見しを、如何しけむ、(九)其處にもあらで、たゞ(八)彼方にのみありて、(一〇)おのれ何せむに侘びぬ。(一一)そのいふ樣は、(一二)「心ひとつにえたへず

〔語釋〕
(二)引歌未考
(四)忠康
(六)說あらんか
(七)仁壽殿方の内々へも入れざりしが
(八)妻を定めて
(一一)近澄が
(一二)我慢出來ずば如何なる非常手段をもせんと思へども

〔考異〕
(一)もえぞ聞えず—をもとし聞えず
(三)宿守に—やどりもりに—やどりとりに
(五)子にて持たる—こそ
(九)其處にも—そこには
(一〇)おのれ何せむに侘びぬ—おのれせむなう—おのれがせむなり

〔語釋〕
(一)「きゝ」は「房き」歟
(二)「さすれど」なるべし
(三)御無沙汰なりとて御咎めもあるべきかと憚り思ふ
(四)「いて」は「いらへ」なるべし
(七)あて宮をいふ
(八)東宮へ
(九)あて宮へ

〔考異〕
(五)とう―たふ
(六)とう―たふ

て、[illegible]のやどにて侍りつるを、俄にわたりおはしましたれば、思ふ様にはあれどむつかしげになむある」と聞え給へば藤壺、あて宮「千年を重ねてきゝ給ふと、(一)これよりはいかでか」と宣ふ。御聲もいとほのかにて聞ゆれば、涼「申しつがぬにしも、この度ばかりは心し侍りなまし」とて、涼「參り侍るときは、かならず御消息聞え(二)さすなど、人も聞えつがねば、(三)聞えさせずとて宣はせやすらむと、つゝましくなむ」御(四)いて、あて宮「交らひするは、(五)とう給ふべきことの(六)とう給はぬこそ、あやしき事に。君の宣はざらむには、志ありとも、あこきなどはいかでか」中納言、涼「常にこそ聞えさすと思ほゆれ。御返は今日のみこそなむ」と聞え給ふ程に、彈正宮おはしませば、立ち給ひぬ。宮は御簾のうちに入り給ひぬ。女御の君に、忠康「などか彼方には。十の親王も、こゝにもとめ奉り給ふめり」と聞え給へば、仁壽「こゝに、いと(七)珍らしき人に對面賜へるはや。彼方になほ、暫しおはしませ」と聞え給ふ。彈正宮、忠康「げに珍らしうこそは。(八)宮に參る時は、すゞろなるやうなれば、(九)御

〔語釋〕
(一)「夕つ方」の下「源中納言」あるべし
(三)仲忠は

㈣涼の訪問。彈正宮の訪問。大宮、近澄の身上を仁壽殿女御に聞く。

〔考異〕
(二)さまも―「も」ナシ

あて宮今の程は旅にて、しづかなるにとなむ。

とて、

あて宮花よりもしづかならぬは君やさは風もふきあへぬ心なるらむ

と思う給へるこそ。

とて奉り給ひつ。

かくて三日過してかへり給はむとて、女御の君おはす。男は、はじめのはおはし代りつゝ、珍しがり聞え給ふ。かくて夕つかた(一)、直衣姿にて、いとめでたくて參り給へり。簀子に御座敷きわたしたり。あこ君、簾のもとに御几帳たてて、御褥さし出でたれば、中納言、涼「昔の人にたがはず」など聞ゆ。見ればいとあてになまめきたる人の、右大將のさまも(二)同じ樣にもてなしたる人の、(三)彼はこよなうなりにたるなれど、これもいと花やかに鬢つき色きはなどいとめでたし。あこ君して、涼「かく承らましかば、さる心もすべう侍りけるを、曹司に侍りしかば、身の程にと

あけて見給へば、

東宮たゞ今の程は如何となむ。かくてはえ有るまじかりけり。何せむにまかでさせて、妬うこそ。

吹く風に花はのどかに見ゆれどもしづ心なきわが身何ぞも

前々いかでありけむとこそ。

とあり。おとゞ、正頼「この御手こそ久しく見ね」とて見給ひて、正頼「いと善くなりにけり」とてさし入れ給へば、女御の君、仁壽「かしこけれど、この御手こそ仁(一)大將の御手におぼえ給へれ」藤壺、あて宮「たゞその書きて奉られたる本をこそは、(二)男手も女手もならひ給ふめれ。それ昔のぞとて(三)、今の召すなれど(四)、まだ奉られざめりしかば、それおどろかせ(五)などぞ宣はせし」女御の君、仁壽「御文かゝむとてなりと聞きしは、然にやあらむ」おとゞ、正頼「萬のこと(六)、人には勝らむとなれる人にこそ」とて、宮の御使に饗し、物かづけ給ふ。御返、

(語釋)
(一)仲忠の手に似て居る
(二)漢字をも假名をも
(三)其手本は昔かきたるなればとて
(五)催促せよ
(六)仲忠をほむる也

(考異)
(四)召すなれど—召すなめれど

源中納言殿は、沈の小辛櫃のをかしげなるに、錠、鍵、とり具して奉り給ふ。涼「これ、よき隙なれば奉りてむ。こゝに待てつかひ持る物どもなり。まかり渡るべき所にも侍るなれば、何かはとて。たゞ預からせ給へ」とて、涼「さて、こゝにおはし(一)ませ給へ。寝殿はいと悪かめり。これは、もとのをば取り違へて(二)、かの吹上といひける所のを、取りに遣りて奉るなめれば、いと住みよし。この西なる屋どもなんども、彼處のなれば、對の樣になむ。そが中にも、とかく善かるべきにせさせたる所なめり(三)」と聞え給へば大宮、女御の君、「げに、いかでか。これが樣なる所はいづくにもあらじ。いとものよくこそは(四)、このすぢあたり給はすめれ」と宣ふほどに、源中納言の君は(五)、涼「やがて三日の參り物仕うまつりてまかでむ」と宣ひて、東の對を行事所にて、家司ども、紀伊守などして、御饗仕うまつる。男にも女にも、おはします限、御折敷九つ、下臈には六つ四つなど(六)づつすゑ渡したり。かゝる程に、紫の色紙にかきて櫻の枝(七)につけたる御文、宮より、御使藏人なり。

（語釋）
（一）「おはしまさせ給へ」なるべし
（二）誤あるべし
（三）吹上の建物なれば

（考異）
（四）よくこそはこのすぢあたり給はすめれ—よくこそこのすぢあたり給ふめれ—よくこそこのすぢあたり給はす
（五）の君—殿
（六）など—なんど
（七）枝—花

〔語釋〕
(一)懷胎の子は男か女か鑑定せん
(二)矢張男子なるべし

〔考異〕
(三)いと心もとなうて―一所はよにもとて
(四)まじくこそは―まじくてこそは

さに、物も申さでこそは待ち奉りつれ」と宣へば大宮、「あさましう久しく、一昨年の秋參り給ひにしまゝに、對面せざりつる。かゝる事なくては、えこそ出で給はざめれ。何ぞと見む(一)。かき出で給へれ」とあれば、わらひ給ひて、あて宮「見苦し」と聞え給ふ。女御、仁壽「まかで給ふによりてこそは。内裏にも昔は、後々にこそ。まかづるを喜にも」大宮、「いで、なほいぶかしや」とて御衣をかきあけて見奉りて、大宮「此度も同じものにこそは(二)」と聞え給へば君、あて宮「いづら、この幼き人々は。まづそれをこそ、いつしかと」大宮、「渡りはじめ給ふ所なれば、三日までとて。若宮はいと大人しくなり給ひたり。今一所は、すゞろなる聲をうち出だし給へば、いと心もとなうて(三)」君、あて宮「然言はせ奉るまじくこそは(四)。心もとなくはいかでか」と宣ふ。明くなりゆくまゝに見給へば、此の大殿の造り樣、しつらひ、さらに言ふべくもあらず。やがて出で給へるまゝに、御座ばかりをぞ敷きかへて、夢ばかり取りおとし給ふ物なし。たゞ御みづからぞわたり給へりき。

（語釋）
（一）諸澄
（二）祐澄
（三）忠澄
（四）「四位五位ふきにかかりて」歟
（七）涼の妻今宮
（八）人に妬まれ居る其方故

（考異）
（五）思ひ給ふ—思ふ
（六）女御君…おはします—女御君たち待ち奉り給ふ
（九）まかでたる—まかで給ひたる

南の階に御車よせて、左大辨の君（一）、宰相中將の君（二）と御几帳さして、おとゞ、左衞（三）門督の君、御車の簾ひきあけて、おろし奉り給ふ。こと君たちは、みな御車のもとに立ち給へり。御車には、四位（四）五位にだにかゝりて寄せたり。思ひ給ふ（五）さま、親同胞の御前なれど、めでたき事物に似ず。御裝束、御かたち、物の香など、限なくめでたし。御車には兵衞の君、孫王の君などぞさふらひける。昨夜より、大宮、女御君、ゐ立ちて待ち奉りておはします。（六）源中納言殿（七）の北の方は、この御方に入れすゑ奉り給ひて、かはりて出でむと思して、まだ物し給ふ。

おとゞ、上達部も、南の廂に、こと君たちは簀子におはするほどに、明くなりにたり。おとゞ、正頼「自らしもまうで有りぬべけれど、怪しく人に許され（八）給はねば、路のほど腹汚き人もやと思ひて、まうでたりつるに、遲く出で給ひつる、いと心もとなくなむ」藤壺、あて宮「みな人まかでたる（九）頃しも」とて暇を賜はざりつれば、辛くして、とかく聞えてなむ」おとゞ、正頼「前に催し申して騷がれければ、煩はし

わりなくこそ」君、
あて宮「花だにも同じ春にてはかなきをわかれて(一)外に行くをこそ思へ
と宣ひて、夜半過ぎて(二)暁までまかで給はねば、おとゞ、忍びて御局におはす。君だちは曹司々々に立寄りつゝ物宣ひ(三)、わらは大人は、装束き立ちて待ち奉れど出で給はねば、君、あて宮「さらばまかで侍りなむ。大殿(四)参りて侍る、心もとなくて侍らむ。今幾日、色の(五)ものなどして、立たむ月の程には、夜の間(六)は忍びて参り侍らむ」と聞え給へば、宮、東宮「いと嬉しかなり。人の参るやうにて、出し車にて、夜夜必ず、さらずば(七)相思はれざりけりとなむ」とて辛うじて(八)出で給ひぬ。

おとゞおはしぬれば、まかで給ふ。御車二十、大人四十人ばかり、わらは、下仕八人、ひすまし二人。おとゞ上達部三所は御車にて、兵部大輔(九)の君よりはじめて、皆御馬にて、世の中に目あきたる人の限は四位も五位も、無きなし。六位はものとも見えず。御車、御前乗りつゞきて、源中納言殿の住み給ひし、西の一の對の、

〔語釋〕
(四)父正頼
(五)喪服をきて
(七)其方を薄情なりと思はん
(九)顯澄

〔考異〕
(一)わかれて―わがなは
(二)夜半過ぎて―夜半うちすぎて
(三)物宣ひ―物し給ふ
(六)夜の間は―夜の間に
(八)辛うじて出で給ひぬ―辛くして起き給ひて

を、然はたあるまじければ、いと苦しくなむ」とて例の御車むかへ人参り給へれど、ゆるし給はず。宮、東宮「例の、まかで給ひてば、とみに参られで、待たせ給はむとや」君、あて宮「何か、いかなるにか侍らむ。此度はあやしく心細くのみ侍れば、え参るまじきにや」とて、

あて宮　草の葉に露のわが身し(一)消えざらば(二)まつにも何かかゝらざるべき

宮、東宮「あなゆゝしや」とて、

東宮　露のよもまつにかゝれば貫きとめて風にも消えぬ玉とこそなれ

と宣ひて、夜更くるまでまかで給はず。

大殿、君たち、前に懲り給ひて、ものも宣はず、(三)待ちわび奉り給ひ、たちかへりつゝ御消息申させ給ふ。君、あて宮「まかでて思ふやうに侍らば、かく承ればしづ心も侍らじ、いと疾く此度は。たゞ知らぬをのこゝなむ(四)」宮、

東宮　散る花も夢にみゆなる春の夜を君外にてはいかに寐よとぞ

（考異）
（一）身し—身も
（二）まつにも何か—まつも何かは
（三）待ちわび—待ちわづらひ
（四）をのこゝなむ—をことなむ

いかに訪らひてむ。故（一）太政大臣の、いといたう（二）嘆くと聞きしものを、我だに心止めて思はずば、惑ひぬべき（三）」君、あて宮「實忠の朝臣の爲には、聞きにくき事言ふとて、もとより消息も聞え給はざりき。里にまかでゝ、人はうたて言なすとも、實忠の朝臣とふらひに遣はさむとこそ（四）」宮、東宮「それならぬこそ。疎からぬ中らひなる中にも、（五）此の人々どもは、妹の爲ぞ疎なるや。さるは、おなじ親にこそあめれ。右の大將の、同じ腹にもあらず中もよろしかるまじきが、兄妹哀に思ひためれば、（六）誰々にも心見えてあらまほしくこそ」君、あて宮「あまた侍らねばいかでか。昔里に侍りし時、はかなき言いふ者あまた侍りしを、（七）すなはち皆忘れぬめりしに、實忠の朝臣今に忘れず、宮仕をもせず侍るなれば、あるが中に、心長かりけるよろこび、（八）言ひに遣はさむとなり」宮、東宮「心長さは嬉しや。さらばこゝには頼もしかなり。そこには、此の事今は思し遣るに（九）つけて、退出をのみせらるれば、苦しくこそ。とてもかうても、諸共に見るべき（一〇）身ならば、數知らずもあらせまほしき

〔語釋〕
（一）父季明
（三）「べき」は「べし」歟
（五）あて宮の兄弟
（六）仲忠が梨壺と
（七）あて宮の入内と共に

〔考異〕
（二）嘆くと聞きしものを—嘆きしと聞えつれば
（四）とこそ—ナシ
（八）言ひに—「に」ナシ
（九）つけて—かこつけて
（一〇）身ならば數知らず—身ならねば數知らずとも

㊁あて宮退出、涼の接待

〔語釋〕
(一)季明の同母弟
(三)忌引
(五)女四宮
(六)昭陽殿
(七)日頃他の妃妾たちを顧みぬはあて宮あればなりけりと
(九)昭陽殿

〔考異〕
(二)おはすれば—おはせれば
(四)給ひつらむ—給へらむ
(八)御心持給へるにぞ—心持給へるこそ

かくて右の大臣殿は、一つ御腹の弟(一)におはすれば(二)、殿の君たち、おとゞも御暇(三)になり給ひぬれば、藤壺も、夜さりまかで給ひなむとす。宮も此度はえとゞめ給はで、その日は入り臥し給へり。御物語し給ふ。東宮「斯うてあり習ひて、物言ひ觸るゝ人なくてあらむ。梨壺さへまかで給ひつらむ(四)こそ」君、あて宮「院の御方(五)、左の(六)おとゞのなど物し給ふめり。そがうち式部卿宮のも、今日明日ものし給ひぬべかめり」宮、東宮「そこにものし給はざらむ程に(七)人に物言はじとぞ思ふ。そこにするなりけり、とていとゞ言はんものを。院のは、いとかたじけなく哀にも思ひ聞ゆれど、恐ろしく荒々しき御(八)心持給へるにぞ。女は、何心なく物思ひ知らぬ樣なるこそ。かつは、そこを惡み給ふこそ、然らでも有りぬべき事なれ。さてはこのさ(九)がな者こそ、今はいとらうたけれ。心を人に見ゆべくもあらず、見る目もことなる事なし。子なども今はいかでか。同胞ども、數多あめれども、いとよくもあらざめり。親のものせられつる時こそ、さてもありつれ、いかに心細く侘しからむ。

〔語釋〕
〔一〕「給へつる」歟

き。この藤壺といふもの參りてなむ。己ならぬやんごとなき人の御爲も、斯くのみなむ。世中に經侍る年頃の世の、人のとありかゝりと承るごとには、殿の御事を思う給へつる(一)、胸つぶれておそろしく侍りつれ。かゝる事宣はすなる、いみじく悲しきこと。え免れおはしまさぬものならば、もろ共に率ておはしましね。萬のたからを賜ひても、おはしまさゞらむ世には、いかでか侍らむ。萬のものも女領ずれば片時に無くなる物にこそ侍るなれ」と泣きまどひ給ふ。おとゞ、「何かそは。いとよく物し給ひなむ。今は、ことなる事なくば、な參り給ひそ。わがありつる折、牛車供の人具して參りものし給ひつる時だに、覺束なかりつるものを、人笑はれにて出入し給ふ、いと見苦しかならむ」など聞え給ふ。

かくて萬のあるべき事、後の御世の事など書かせ給ひて、御位かへし奉れ給ひ、御髮おろし給ひてかくれ給ひぬ。二月晦太政大臣の御とぶらひに、左右の大將、一つ御腹の右の大殿の君たち、日々に參り給ふ。

（語釋）
（二）我が如き位に上ることは出來まじとの意歟
（三）柚君を季明の子分にして
（六）實正
（八）東宮

（考異）
（一）在所—在所を
（四）あなり—あり
（五）その—この
（七）こそは—「は」ナシ

かな、如何にをかしくも怪しくも思ひけむ、など思ほすに、哀に悲しく覺ゆることと限なし。おとゞ、季明「はや、その人の在所(一)たづねよ。その女子をだに、徒らになし果つな。朝臣はた、不益の人なめれば、たゞ今のごと(二)わが位はえ有るまじかめり。(三)わが子になして、宮仕をも、よろしからむ事もせさせよ、とてなむ、些なる物どもも物する」など多くの御物語などし給ふ。

かくて、宮の君に聞え給ふ、季明「此の家に、開けつかはぬ納殿五つあなり(四)。(五)その二つの屋々には、やんごとなき物どもあらむ。三つの屋々には、人のなくてえあらぬ物ども、品々置かせたり。荘々あまたある中に、遠江、丹波の國、尾張、信濃、飛驒なるは、ことに勝れたなるを渡せしぞかし。これをだにな失ひ給ひそ。この東宮に侍る君の少し情なくぞ。民部卿心廣くうしろ安き人なり。それぞ、御口入れ奉りてむ。われを忘れざらむ人は(六)、こゝをこそは(七)とぶらひ申さめ」など宣ふ。宮の君の聞え給ふ。照陽「自ら御覽じけむ。宮(八)も、昔は斯くもおはしまさゞり

（語釋）
（三）實忠の舊妻は
（五）元は三條に居たりしに
（六）「言ひしちがふ」歟
（七）祐澄
（九）仲忠

（考異）
（一）いと―けに―ナシ
（二）にも―をも
（四）御昔人―「御」ナシ
（八）籠られ―こもり
（一〇）其處にこそ―そこか
（一一）ありける心地―ありけるこゝろの心地

よりもいと哀にてあり經めれば、子といふもの無かめり。如何にせよと思ふぞ。
など宣ふ。（一）宰相、實忠「知り侍らず。かの侍りし所にも今は物せずとなむ承る。
世の中心憂しと思ひ給へしかば、たづね侍らず」おとゞ、季明「いと怪しかなり。は
や求めさせよ。すべて、現心もなき人にこそあめれ。まづは、我かく世の果に、
年頃ありて逢ひたるにも、（二）ことに悲しとも思ひたらざめるをや。いとかなしき人
にもあるかな」と宣へば、涙を雨の如くこぼす。御前なる人、涙を落さぬなし。
民部卿實正「此處の（三）御昔人（四）は、志賀の山本、比叡の辻のわたりに、いとをかしき山里
侍り、其處にこそ、年頃物せらるゝなれ。（五）三條にものせられけるに、これかれ好
きごと言ひちがふ（六）宰相（七）の中將など、消息絶えずありければ、それに思ひ倦じて籠（八）
られたるとなむ承りし」宰相、右大將殿の中將（九）なりし時、もろ共に往きたりし所
は、然ば其處にこそ（一〇）、若き人の聲せしは、わが女にやありけむ、あやしく、人は
住むものから、音せぬ所、とは思ひしぞかし、あさましく物覺えずありける心地（一一）

〔語釋〕
(三)實忠の母
(六)後妻を迎へずして
(七)實忠の妻
(九)眞砂君

〔考異〕
(一)得給ふそれは—え給ひければ
(二)御覽—御名—御判
(四)思う—思ひ
(五)思う—思ひ
(八)ものしにし—ものせし
(一〇)めり—めりき
(一一)さへ—さへは

給ふ所あまたあり、何も〳〵、民部卿など、みな同じごとく得給ふ。(一)それは、この二所皆え給ひて、斯く書かせ奉り給ひて、御名押し給ふ。右の大殿にも御覽(二)ぜさせ奉り給ふ。さて、よろづの御物語聞えさせ給ひて泣きたまふ。源宰相もいみじう泣きたまふ。御前には、いまだ出で給はず。

さて、右のおとゞまかで給ひぬ、宰相、おとゞの御前に參り給ふ。おとゞ萬の御物語し給ふ、季明「世の中といふもの、事につけて、とある事かゝる事あれど、知らぬやうにて經ればこそあれ、はかなき女の上などにつけて、身を徒らになしつる事」など宣へば、宰相、實忠「何か、さやうなる事にも侍らず。(三)殿の上かくれ給ひにし後、世の中心憂く思う(四)給へしかば、すべて世に侍らじと思う(五)給へしなり」おとゞ、季明「それは、我もいみじく悲しと思ひしかばこそ、(六)また人をも據ませで、年頃一人はありつれ。そも〳〵、かの子ども持たりし人(七)は、何方かものしにし(八)。男子(九)は、はかなくて失ひつめり(一〇)。女子さへ(一一)如何にしなしてし。年頃は、たゞ行ひ人

〔語釋〕
(二)季明の御賴なくとも
(三)わが子どもよりも
(六)遺產處分の證書
(七)其の次なる邸に
(一二)次の詞へつゞく
(一三)袖君也

〔考異〕
(一)委しく—委しう
(四)思ひ—思う
(五)己—我
(八)さし次ぎたるに—さしつぎたるは
(九)莊—莊々
(一〇)國々なる—國々にあなるに
(一一)し給ひたる—したまひあいたる

正頼に委しく(一)言ふ人侍らましかば、何か、ともかくも思ひ給へまし。(二)仰せごとなくとも、昔のことをさらに忘れ侍らず。いはむや、更にかく仰せらるれば、(三)よからぬ男どもよりもいかで、となむ思ひ(四)給ふる」など聞え給ふ。おとゞ、いとかしこくおほんしほたれ給ひて、季明「などか實忠の朝臣の、辛うじて物したなるを、此方には物せぬ。すべて、己(五)には逢ひ見じ、と思ふ心やある」と宣へど參り給はねば、右のおとゞ、いといとほしと思す。さておとゞ、民部卿に筆取らせ給ひて、御處分(六)の文かゝせ給ふ。季明「大きなる殿三つあるを、この住み給ふをば、宮の君に、いま一つさし次ぎたるに、(七)(八)大きなる莊(九)どもの國々なる、(一〇)昔より中に寶にし給(一一)ひたる細かなる物そへて、源宰相に、いま一つの殿に、女のつかひ給ふべき調度加へて(一二)」と宣ふ。季明「これは宰相の朝臣の忘れにし人の女子(一三)一人あらむ、今は大きになりたらむ。あさましう心あやまりしたる樣にて、よろしく聞えし女子をも、徒らになしつめるを、それに取らず」と宣ひて、中將の君などには、所々に領じ

（語釋）
（一）實忠が
（二）實忠
（三）實忠は正頼邸に住み居し故
（四）あて宮
（五）實忠が懸想せしを
（六）勅命は背かれぬものなれば

（考異）
（七）思ひ―思う

させ給へ。世中思ひ捨てて侍れど、これ徒らになし給ふな」と泣く〳〵聞え給ふ。右のおとゞ、正頼「いとも〳〵珍らしくこゝに參り給ふなるを、などか御前にはさふらひ給はぬ。年頃、昔よりいかで志（一）ふかしとは、此（二）の君をこそ思ひ聞えしか。又侍る（三）所に物し給ひしかば、哀にむつましきものに思ひ聞えしかども、あやしう年頃山里に籠りものし給ふらむは、世中に倦じたまふ事やあらむ。なでふ御心ありてか、など思ひ給ふるを。されど、年頃これかれものし給ふこと侍るとき、早くより思う給へ志し侍りしものを、雜役などにも使ひ給へ、など御息聞えたりしに、御返り見給ひしかば、思ほす心あるやうになむ見給へし。それは、此の宮にさふらふものゝ（四）まだ里にさふらひし時なむ、物（五）など宣ひけるを、さらに知り給へざりける。そが中にも、宣旨侍りて「源中納言に賜へ」と仰せられしかば、背（六）かぬものなれば、然（七）思ひ給へしを、宮より重く勘當せられしかば、參らせ侍りしなり。これにこそなむ、人々おほく恨ども侍りける。宰相の君におき奉りては、

（語釋）（一）父の居る處の屏風の後に

（二）昭陽殿

（三）「女御」は「女子」なるべし

押しかゝりおはしまして、内に請じ入れ給へり。御物語など聞え給ふに、中將の君、實賴「宰相の朝臣參り侍り給ふ」と申し給ふ。おとゞ、季明「此方に呼べ」と宣ふ。宰相、右のおとゞさふらひ給へば、更に出で給はず。度々召せども參り給はず、おとゞおはします御屏風の後方に、忍びてさふらひ給ふ。宮の君參りて、おとゞにつき奉り給ひて物し給ふ。右のおとゞに聞え給ふ。季明「月日の經るまゝに病のまされば、なほえ侍るまじきにこそあめれ。何か、人の惜むべき程にもあらず、又命の惜かるべきにもあらず。七十にあまりて、公にも仕うまつりぬれば、理。たゞ思ひ侍ることは、子二人が上をなむ思ひ侍る。實賴も、まだかう下臈に侍れば、うしろめたけれど、殿の物し給へば、さりともと賴み聞えたり。女御の上は、人に聞えおくべきにもあらず。たゞ宰相をなむ思ひ侍るに、冥路も安くもまかるまじく、萬の所の關となる心地し侍るを、心もて身を徒らになしつる人にこそはと見侍れど、なほこれなむあたらしく、うしろめたう見侍る。折あらば、これ顧み

〔語釋〕
（一）實忠に
（三）「たると告げに」なるべし
（四）實忠の閑居
〔考異〕
（二）如何なるにか―如何なる事にか
（五）思ひ―思う

せむ。然なむと申し奉れ給へ。さては宰相に、わが非常の時にも逢ひ見で歇みぬべきか、いかに思ひたるぞ、世の中にかなしきものは親をこそ言へ、そが上も知らず、さてもありぬべかりし身をも捨ててあるは如何なるにかあらむ、哀になりはてぬべき人かな、斯う心地なむ弱くなりにたること、告げにやり給へ。今一度だに見るまじきか」と宣へば、君たちいみじう泣き給ひて、右の大殿には民部卿の君、小野には中將まうで給ひて、有りつる樣をくはしく聞え給へば、宰相とばかり物も宣はで、いと久しく忍びためらひて、實忠「惱み給ふとは、承はりて久しくなりぬるを、いかで參り來むとは思ひ給ふれど、世の中にまだ侍りけると、人の見むも、有樣なども其の人にも侍らず。人々の見給はむことなど思ひ給へつゝなむ。かく重く惱ませ給ふなるを、いかでか參らざらむ」とて夜にかくれて出で立ち給ふ。
民部卿は右の大殿にかう〳〵など申し給へば、參り給へり。太政太臣、御脇息に

㊂太政大臣季明病篤し。正頼と實忠とを招く。遺言。薨去。

〔語釋〕
（一）季明
（二）昭陽殿
（四）親ある時さへ
（五）實忠
（七）實正、實頼

〔考異〕
（三）がたし―がたう
（六）交らはず―交ろはず

かゝる程に、藤壺、「たゞ今出で給はむ」と宮に聞え給へれば、東宮「梨壺も、その程は過してこそまかでつれ。などか其處にしもかねて急ぎ給ふ」と聞え給ふ。

【畫詞】こゝは藤壺。

かくて太政大臣（一）は、御年高くなり給ひにければ、そこはかとなく惱み給ひて、心細くおぼす事どもありければ、季明「君たちみな公に仕うまつり、不益なるもなし。我うち棄てて亡くなるとも、右の大殿のものし給へば、顧み思ひてむ。たゞうしろめたきものは宮（二）の君、實忠思ふに、冥路も往きがたし（三）。（四）ある世にだに、女子は、よろづの事むつかしくやさしきものなり。宰相（五）の朝臣、おほやけに仕うまつりぬべく、容貌、心、人には劣らざりしかば、わが家繼ぐべきはこれかとこそ思ひしか。あさましく幸なくて、物にあやまれる樣に、心魂もなくなりはてて、世に出で交ら（六）はずなりぬる事」をなむ萬に思ほえて、民部卿（七）の君、中將の君などに聞え給ふ、季明「日頃經るまゝに、心地のえあるまじくのみ思ゆるを、いかで右の大殿に對面

〔語釋〕
(一)女一宮

〔考異〕
(一)ことなり―ことなる
り

わたり給ひて歸り給ひねかし。かく年月隔てて怨じ給ふべき事とも思えぬを、人の空言いふにつけてやは。明日よき日なるを、必ず。

と聞え給へれば大宮、「げにいと見苦しきことなり。早わたり給へ。いかでか一所は物し給はむ。かう事なきやうに見え給ふこそ(一)」など聞え給へば、御返に、七君「いざ、さらば渡らむ。ゆゝしげなる人かな」とぞ聞え給ひける。さてそれもわたり給ひぬ。かなたには女御の君、大宮の住み給ひし北のおとゞには、女君たちひき率て、西の二の對かけて住み給ふ。大將殿の御方は、東の一二の對、廊かけてすみ給ふ。西の一の對には彈正の宮すみ給ふ。(二)東の一の對の北面、よくしつらひて、少將の妹むかへてすませ給ふ。藤壺のえ給へる町は、左の大殿住み給へるを、外へわたり給はむとて、御簾かけ、壁代、御帳、御座など、いと清げにしつらひ給へり。式部卿の宮の御方も、御簾などかけ替へ給へり。對どもには然もせず。

給ひぬ。男君たちも、御妻につきてみなわたり給ひぬ。

右大將は、家あれどまだ造らで、西の對にわたりて、住み給ひぬ。さて人々のあがれ給ひし後は、右大將殿のわたりて住み給ひし町を、(一)女御の君に奉り給へれば、さて移り給ふ。今まで、殿ばら、宮ばら住み給へりし町をば、(二)藤壺に奉り給ひ、いま一町をば、(三)あなたの北の方に奉らせ給ふ。御子どももおほく外へわたり給ふやうなれど、たゞ此の殿のめぐりに、あるは向に、あるは傍に、遠しとて、一町、二町を離りつゝ住み給へば、同じやうに、御門の隣といふばかりになむ。

かゝる程に、(四)大納言殿、北の方、まだ對面し給はねば、移ろひもえし給はず、佗びおはす。忠俊「あやしうはかなき事にて、この月頃怨じ給ひてかゝる事」となげき給ひつゝ、御文たびたび奉り給へど、御返なし。たち返り聞え給ふ。

忠俊彼處に待ちわたりなむとするを、人の忌むといふなるを、たゞあからさまに

(語釋)
(三)大臣上
(四)

(考異)
(一)町を—町は—との町を
(二)へればさて移り給ふ—ナシ

——正頼兼雅仲忠等昇進。人々の御殿移り。㊀實忠、あて宮の許に[illegible]りに來る。あて宮實忠に山を出でて舊妻と同棲せんことを勸む。

右(一)の大殿には、御聟の殿ばら、宮ばら、御子どもも、上達部に物し給ふは、ひろき殿おもしろく清らに造りて、萬の調度、寶おきつゝ、「殿のゆるし給はねば、えわたり給はで、狹き住居をする事」とむつかり給ふ。右大將は、仲忠「藤壺まかで(二)給ふべかなり。今日明日(三)、女御后がねなどの、對に住み給はむには、いかでか上にはのぼり侍るべき。西の對しつらひて、其處にわたり給へ」と聞え給ふ。おとゞ聞召して、正頼「げに(四)年頃もむつかり給ふなるを、今は、さらば(五)、殿々にわたり給へかし」と宣ふときこしめして、殿ばら、宮ばら喜び給ふ。源中納言殿も限なくよろこび給ひて、まづ出で給ひなむとすれど、藤壺待ちつけ奉らむとおほす程に左(六)の大殿、式部卿の宮よりはじめ奉りて、移ひ給ひぬ。大納言殿(七)は、まだ出で給はず。西北の町なり。宮たちは、北の方のおほん親につきて、みな出で

㊀正頼の家に同居せし人人の別居。

〔語釋〕
(一)正頼邸
(三)今明日中にも女御后になり給ふべきあて宮が

〔考異〕
(二)給ふべかなり―給ふべかめり―給ひぬべかなり
(四)げに―ナシ
(五)さらば―さて
(六)六の君、五の君
(七)七君

國譲（上）

梗概

㊀正賴の家に同居せし人々の別居。㊁太政大臣季明病篤し、正賴と實忠とを招く。遺言。薨去。㊂あて宮退出。涼の接待。㊃涼の訪問。彈正宮の訪問。大宮、近澄の身上を仁壽殿女御に嘆く。㊄仲忠の訪問。皇子に讀書を授け奉るべき約束。㊅大宮等涼の贈物及び殿内を見る。涼、堀川の邸に移る。㊆季明の葬送。㊇あて宮文を實忠に贈る。實忠の返事。㊈實正兄に昔あて宮を見し時の事を語る。東宮より昭陽殿へ御文。昭陽殿の狂喜。㊉あて宮の使復命。東宮よりあて宮へ御文。御返事。⑪あて宮わが寢殿に歸らんとす。實忠の嘆。仲忠の嘆。忠澄等兄弟交代にあて宮の爲に宿直せんとす。あて宮歸る。⑫あて宮の假御殿の有樣。仲忠約束の手本をあて宮に奉る。あて宮東宮と文贈答。あて宮の髮を結ぶ前にて侍女たち實忠の噂をす。孫王の君、兵衛、木工等の容貌性質。⑬女一宮、女二宮、女三宮を伴ひてあて宮を訪ふ。仲忠母子の琴の噂。髮の長さを較ぶ。孫王の君姉妹、上野宮の噂をす。⑭あて宮女一宮等奏樂。仲忠、女一宮の迎に來りて立聽く。女一宮歸らず。仲忠再び迎に來る。なほ歸らず。仲忠、あて宮の方に宿す。⑮梨壺皇子を産みたりとの報知によりて仲忠夫婦歸る。あて宮、藏人に梨壺の樣子を聞く。⑯梨壺腹の皇子の産養。兼雅皇子を酷愛す。梨壺の母女三宮の勢やうやく盛なり。⑰仁壽殿女御、女一宮に女二宮の保護を托して内裏に歸る。⑱あて宮の安産及びあて宮腹の皇子立太子の祈禱。⑲忠雅

ときこえ給ふ。左大將、檜割籠など調じて奉れ給へり。おとゞは寢殿(一)にわたり給ひぬ。

〔書詞〕此處は梨壺まかで給ふ。こゝは梨壺、おとゞも御物語し給ふ。大將殿の奉り給へる檜割籠、御前にあり。御たち、取りわたし食ふ。檜皮の屋ども多かり。

〔考異〕
(一)寢殿に―寢殿へ

（語釋）
（一）早く安堵せよ

（考異）
（二）心―心地
（三）給ひて―給ひ
（四）來しかな―てしかな

東宮 昨夜は、怪しく急がれしかば、こと〴〵にものせずなどなむ。さりぬべき昔も有りしを、人々に恨みらるゝ、今しも哀にて、まかでられにしをなむ。今宵は、

近くても見ぬ間もおほくありしかどなど春の夜をあかしかねつる

空言人になりぬべしや。さらば、思ふやうに（一）平かにてを早う。

とて、うすき紫の色紙にかきて、梅の花につけて奉れ給へるを、おとゞ取りて見給ひて、兼雅「今ぞ心（二）落ち居ぬる。この御文は、櫛の箱の底によくをさめおき給へれ」とて御使に酒賜びて、物かづけ給ひて（三）、いみじくいたはらせ給ひて、御返、

梨壺 昨夜は、夜更けぬと人々いそがれしかば、心あわたゞしくてなむ。空言人とか、これはかりなむ。まことには、

出で入ると餘所には見つゝ雲居にておほくの日をも過し來しかな（四）

何か、さふらひ侍りても。

こには、この頃ならずともまかでられなむ。又此處にものする人も、暇乞ふをと
思へど、この頃は神事のころなれば、げにいかでかはとてなむ」など宣ふほどに、
夜更けぬとて急ぎてまかで給ひぬ。
かくて南の大殿にまかで給ひぬ。御まうけ、殿の政所より、いと淸らにて參れり。
おとゞ梨壺と物語きこえ給ふ。兼雅「この夢のやうなることは、宮はまめやかに思
したりや。前々も、世人もよからぬ事言はるれば、これをなむ、夜晝思とするを、
今宵ほのめかし給へるは、如何に思したるぞ」きみ、梨壺「知ろしめしゝは如何は。
とかく思ほすらむことは知らず。まかでむと申させたりしかば、まうのぼりて侍
りし」おとゞ、兼雅「世の人のすることを如何は」君、梨壺「さやうになむ」おとゞ、
兼雅「さらばいと嬉しかなり。後はとまれかくまれ、然とだに宣はゞ、恥かくれぬ
べし」など御物語し給ひて、やがて其處にとまり給ひぬ。
つとめて、御物まゐるとておはする程に、宮より御文あり、

〔語釋〕
（一）あて宮
（二）懷胎の事
（三）東宮が我子と認めて下さりさへすれば
〔考異〕
（四）然とだに—しるとだに
（五）御物—御湯

（語釋）
（二）「めぼくあれ」は「めいぼくあり」なるべし
（三）東宮
（四）「つれば」なるべし
（六）裂強は

（考異）
（一）おとゞ―ナシ
（五）こそは―「は」ナシ

となくも。なほおはしませ。人の見る所も、宮のきこしめす所も侍り」と聞え給へば、おとゞ（一）、兼雅「右のおとゞの引き連れて參り給ひて、騒がれ給ふこそ」大將、仲忠「惜まれ給へばめほく（二）あれ。まかでますとて無期の勘事にもあづかれ、それによりて親兄弟の勘ぜられむこそいとやさしかるべけれ」と、澁り給ふを強ひてそそのかし立て給ひて參り給ひて、御局におはすと聞召して、宮（三）「まかでぬべかなり」とてわたり給へり。二大將物し給へば宮は、東宮「こゝにぞまかでらるべかりけれ。かの左大將、いと珍らしうこそ。今年對面せざりつるかな」おとゞ、兼雅「甚だかしこきことに侍り。今は身を捨ててこもり侍りつれ（四）、久しう内裏にも參らず侍るを、今宵、この女の童、まかでむと申して侍りつれば、かく無德に侍れば、從ふ下人も侍らねば、車につきてまかでさせむとて」宮、うち笑はせ給ひて、東宮「いとありがたき車添つかふべき人にこそ（五）は。無德なるにはあらで、有り難きにこそ。さても斯く疎からぬ近き衞は、昔も今もえあらじを。いと有り難きことなりや。こ（六）

㊆梨壺退出。兼雅仲忠迎に參る

〔語釋〕
(一)晝間枕席に侍するをいふ歟
(二)東宮
(三)其方も行くに及ばず

かゝる程に、梨壺まかで給ひなむと聞え給へり。右大將ものし給へるにおとゞ、兼雅「宮のまかでむとあめるは。如何なるべきことにか。かゝる人は帳臺の(一)宿直などしてこそは。許されむとすらむやは」大將、仲忠「いかゞ然侍らむ。先つ頃たびたびまうのぼり給ひけるものを。(二)宮、「藤壺もかやうにてぞ」などこそ宣ひけれ」おとゞ、兼雅「いさや、うたて聞ゆる世なれば、人もやうたて言ひなさむとてぞや。車どもなどして迎に遣らむかし」とて御車とゝのへさせ給ふ。兼雅「一條はたゞ今恐ろしげなめり。此處にてこそは、ともかくも」とて、宮の御方の西おもて、西の對かけて、一條殿の御調度ども運ばせ給ひしつらはせ給ひて、御車十二、御前こゝかしこ取り合せて、數知らず多くて、御迎に宮の御方の御たち二十人ばかり參る。右大將、仲忠「かの御迎に參り侍る。おはしまさむとする」と聞え給へば、おとゞ、兼雅「何しにかは、(三)そこにも。内裏の聞召すにもことなる樣にもこそ」大將、仲忠「いかゞ參らざらむ。女は、さるべき人の追從するにつけてこそ、やんご

〔語釋〕
（一）俊蔭女の方にのみ
（二）女三宮へ兼雅が奉らぬ意と見えたり、此處脱文あるべし
（三）大宮など
（四）兼雅が

あらむと、いとほしかりつれば物せざりし。人も無しと聞きてまかりたりければ、いとこそ哀なりつれ。廣き家に、屋どもおほかるに、人はみな住みあまりてこそ侍りしか、人音もせず、おろし籠めて、草木ばかりぞ有りつる。方々に書きつけたることと」など聞え給へば、北の方、昔の京極を思して、かく書きつけて見せ奉り給ふ、

俊蔭女待つとては尾上の瀧ぞながれにし君すみよしにいかゞありけむ

とて見せ奉り給へば、兼雅「身をつみてのみはた」と宣ふ。おとゞは、たゞこゝ(一)にのみ物し給ふ。物などは奉(二)れ給はねど、かくておはしませば、わが御方のものの、御莊々々より持てつみて奉り、(三)御はらからの宮たちよりも、かく旅におはするなりとて、とぶらひ聞え給へば、これもその御徳にぞあるべき。中の君は、贈物何も〳〵、少しづつ物わけ奉り給ふ。夜は(四)おはすべくもあらず。時々宵の間などになむ。

〈語釋〉
（一）「見給ふに」歟

給ひけれ。とかくあるべき事は、皆物して侍り」おとゞ、兼雅「おないとほしや」と宣ふ。

かくておとゞ、廻りて見給ひて、昔はかたぐに、我もくと淸らをつくして住みしものを、今日はかい掃ひて人もなし、花は色々に咲き亂れたり、さすがに見給ふに哀に思さるれば、うち泣きて、

兼雅 花だにもむかしの色はかはらぬをまつときゝにし人ぞ散りぬる

と宣へば大將、仲忠「これにも」とて、

仲忠 年を經てまつをもちらす宿なれば春なる梅の嘆かるゝかな

と申し給へば、兼雅「あな思ひぐまなや」と宣ひて、御修理すべきことなど宣ひて、かへり給ひぬ。

畫詞 こゝは一條殿。

かくて北の方に、おとゞ、兼雅「年頃一條のいぶかしかりしかど人々の苦しげにて

〔語釋〕
(一)誤あるべし

〔考異〕
(二)ざればみ―戯に
(三)人とて―人ぞ

宰相上「故郷におほくの年を待ちわびてわたり川にもとはじとやする

とあればまして、哀何方へならむ、いかでこれが返事せむ、と思す。東の二の對に入りて見給へば、その對の前に、さま〴〵(一)の對にあたれる柱に、

來ぬ人を待ちわたりつる我なくてまがきの竹よ誰をはらはむ

と有るをいとあはれと見給ふ。ふるものと言ひし所とおほして、一の對に入りて見給へば、居給ひし柱よせに、

來つゝ見しやどにぞ影もたのまれし我だに知らぬ方へゆくかな

と(二)ざればみ書きたり。おとゞ、兼雅「この人何方ならむ。母宮の御許にはたあらざめり」と宣へば、大將、仲忠「仲忠なむ二條の院にわたし奉りて侍り。いま、彼處廣うなりぬべかなれば、そこにかの物したまふが、遊する人なくて、さう〴〵しくし給へば、迎へ侍り」と申し給ふ。おとゞ、兼雅「恥かしく若くよかりし人とて(三)、よからぬこともあらむものを」大將、仲忠「いと目やすくて、らうある人にこそ物し

〔語釋〕
（一）兼雅の心

㊅兼雅仲忠、一條の空屋敷を訪ふ。

〔考異〕
（一）まづ北の―中の

宰相ばかりの人の女、わかくて奉りたるなりけり。それは兄などのありければ、迎へつ。少將の妹は、大將殿二條の院のかごやかなる家に、しばしとてすゑ給へれば、人もなし。たゞ宮の家司どもあつまりて、妻子ひき率て、或は下屋に、曹司しつゝあり。

かゝる程に花盛興あるに、おとゞ、大將に、兼雅「一條の人氣も無かなるを、如何住みなしたると行きて見む。いざ給へ」とてもろ共におはして、まづ（一）北のおとゞに入りて見給へば、居給ひし所にかの君の御手にて、

中君　いもせ川すまずなりぬる宿ゆゑに涙をもなほ流しつるかな

とあるを哀と見給ひて、西の對の更衣の御方を見給へば、居給ひし所の柱に、

梅壺　近かりし雲のおりゐて見るべきに風ふく塵とまどふ身はなぞ

とあり。げに院にさふらひしを率てまかでにしぞかし、あないとほし、と見給ひて、同じ一（二）の對を見給へば、

㊂一條に蹤れる兼雅の妾たちそれ〴〵分散す。

〔語釋〕
（一）同居の女たち
（二）以下女たちの心
（三）女三宮と同居して居てさへ
（四）誤あるべし
（五）「え」衍文なるべし
（七）兼雅の仕方を見ん
（八）忠こそが
（九）誤あるべし、「右のおとゞの大い殿の上の御おとうと」歟
（一〇）此妹を別屋に引取りたり
（一一）梅壺
（一二）わが生みたる嵯峨院の皇女

〔考異〕
（六）おとゞに―おとゞを

方々（一）の思ほしける、かくて（二）集まりて有りつる方に、宮にもかくてこそはと思ひつればこそ、さて（三）だに漫なりつる住居を、宮をば家にむかへ奉らむと思ひしを（四）、はじめの家に迎へつるは、我等をばえ（五）うち棄ておきて、斯くてな在りそとにこそ、と思ひて嘆くほどに、眞言院の律師は、家など買ひて、「わたり給ひね」と伯母おとゞに（六）聞え給ひしかど（七）、し出でむ樣を見むとて、しばし物し給へるに、かく聞きて、御車して、夜自ら（八）いまして、自ら迎へて、率てわたり給ひぬ。北の對におはするは、妹なり。（九）右おとゞ大殿のあなたの一つ御腹の妹、はらからなれど、異腹にて疎かりるけを、妹むつびして、忍びて迎へとりて通ひ給ひしなり。后の宮の御匣殿、異御腹の妹なれど、いとらうたくしてかへりみ給ふを、かく聞召して、御匣殿「さればこそ、窃にわたり給ひねとはものせしか」とて別納（一〇）にわたし奉りつ。更衣（一一）は、宰相の中將のわたくしの殿（一二）に御女むかへ奉り給ひて、西の一の對におはするは、

（語釋）
（一）仲忠は私の子どもらしからぬ男なれば
（三）女一宮一人を守り居るのも
（四）親たる私が年がひもなく
（五）兼雅は俊蔭女が有名なる美人故一人を守る事になりしならん
（考異）
（二）侍れど—侍るなれど

如何なる隱れなどかせむとて、いと心深く、有りがたき心ゆるひも侍らず。息子の仲忠の朝臣此處に侍れば、親になむし給ふ。それが見思はむ事もつゝましく。おのづから御覽ずらむ、（一）あやしく兼雅が子にはあらぬものなれば、わかく（二）侍れど、いとまめに、（三）一所につき奉りて侍るめるも、（四）をさなく此處彼處にまかりありかむを見むが恥かしさになむ。今も昔のやうに侍りぬべけれど、え」など聞え給へば宮、女三「何か、中納言も、昔は其處の御有樣にもおとらず聞えしかど、この宮の名だたり給へる人なれば、いとまめになられたるにこそ。（五）こゝにこの内侍のかみの、世の中にまぎれなきものにものし給ふなれば、一人になりにたるにこそ。他人のえしづめざりしぞや」など御物語おほくして歸り給ひぬ。

畫詞　こゝは三條殿、宮の御方。

かくて一條殿には、夜更けて、おとゞは車ながらさし寄せて、下り給ひしかば、かたがたの人えしり給はざりしを斯く物はこび、家清めなどするにおどろきて、

〔語釋〕
(一)嵯峨院の女三宮
(二)女一宮
畫兼雅、女三宮を訪ふ。
(三)女三宮
(四)俊蔭女
(六)俊蔭女の方に
〔考異〕
(五)見出でて―見つけて

になしてむ。宮(一)とぶらひ奉りてまうで來なむ」とて宮の御方に參り給ふ。

〔畫詞〕こゝは左大將殿。御方に一の宮(二)通はし奉らむとおぼして、寢殿の南遠く離りて、池山近き所、月見給ふべくとて、高くいかめしき家造られたり。西の對、廊あり。御たち十人ばかり。童べなどあり。

宮(三)は、いとらうらうじう、氣高く、ものものしき顏して居給へり。おとゞ宮に、兼雅「年頃おぼつかなくて侍りつるを、近くておはしまさする時だに、しばしば參り來まほしけれど、この(四)侍る人は、彼もまだ小く、己もまだ世の中も知らざりし時より侍りて有りし程に、子なむ有りけるを知らせで、いさゝかなる事に倦じて隱れにしを、年頃はえ求めいでざりしに、辛うじて有りがたく見出でて(五)侍りしかばなむ、あからさまにとてまうでにしまゝに、やがてまかり(六)留りにしかば、如何に怪しく思されけむ。さて、この年頃まかり避る所もなく、宮仕も有りしやうにも仕うまつらで、籠り侍るにならひたるに、例ならずならはぬ樣に思はれ侍れば、又

（語釋）
（一）中の君
（二）「めり」衍文なるべし
（四）中君をわがものと思ひて
（五）これより自分の過去の事をいふ也
（六）父母が
（考異）
（三）有りし物ともなく―ありしものともなくとく―なりしものともなくて

ふ、兼雅「年頃いとほしと思ひつる人々すませて侍るなり。取りすゑたるこの人(一)いとはかなき人なり。父宮の、多くの財、よき庄どもなど持給へめり(二)しかど、年頃口入れざりしほどに、(三)有りし物ともなく、みな失なひてけり。有りし人もたつきなくなりければ、皆出でて去にけり。斯う哀なる人になむ。其處にも、ことに思す人もなかめるを、私(四)の人にしても、見え聞えずとも、思しやりて心しらひ給へ」北の方、俊蔭女「若き人の、親物し給はず、御口入るゝ人もなくては、いかでかは。さてもよくこそ。(五)さしもあらで有りぬべかりける人も、世を過ぐらむやうも知らで、親とてありし人も、呪ふ様に、「惡しかるべくば、よかれと思ふとも惑ひなむ。よかるべくば、恐ろしき物の中に棄てたりともあへなむ。たゞ神佛にまかせ奉る」とゆゝしく言はれて有りし程に、(六)うち續きて亡くなりにしかばこそ、あさましかりしか。まして、御子たちの御子と言はむ人は何事をかは」と聞え給へば、兼雅「げに然ぞあらむ。女子を數多持たらぬこそ安けれ」など宣ひて、兼雅「今日はかゝる日

確ならむ物に入れておき給へ。これをさへはかなくしなし給ふな。こゝには常にも得まうで來じ。近ければ、時々あからさまにこそまうで來む。今は我人(一)にもおはせず、親ものし給はず、有りつる樣にてあらむとな思ほしそ。彼處にある子の母、いと心よく有りがたき人なり。それは思ほし疎まず、語らひて物し給へ」とてわたり給ひぬ。

〔畫詞〕こゝは中の君の御殿。

かくて北の方の御許におはして見給へば、裝束淸らにして、頭梳りて居給へれば、たゞ今聟取もしつべき女のやうにて、いとめでたし。住居、しつらひいふ方なく、くらき所にも北の方御かたちやうだい(二)、照りかゞやきて見ゆ。香のかうばしき事は更にも言はず。御たちもかく容貌あるは三十人ばかり出で入りすれど、なほ二十人ばかり絶えずあり。童、しもづかへも數多あり。この殿は一町なれど、年頃かい廣げつゝ、心に入れておほくの大殿造り重ねたり。北の方におとゞの聞え給

〔語釋〕
(一)「我人」は「わかき」の誤歟
(二)「北の方の御かたち容體」なるべし、一本「北のかたちきやうだい」—北の方に御方のちやうだい

ろひ、一つにはから物、いとようし置きたり。一つには燈臺の具などあり。(一)壁代は白くてあたらし。寢殿の北に、あたらしき長屋あり。隔ごとのうちあまたして、贄殿、酢、酒つくり、漬物、炭、木、油などおきたり。藏一つ、それには、錢、米、よからぬ衣どもなどおきて、錠さして、鑰はづしにあり(二)御厨子所、(三)おほとの具いとよくしおきてたり。

おとゞ見廻りておはし給へれば、君(四)、昨夜おとゞの包ませておはしたる綾、かいねり、織物、(五)ほそながなど著給ひて、年四十に一つ二つ足らぬほどなれど、いとあてはかに見めきて、らうたげなる顏して、髪長に二尺ばかり餘り給へり。いとわかく見え給ふ。おとゞ、衆雅「留まりにし人のもとに、「其處なるむづかしき物どもは、乳母のやどりに殘さず取らせて、そこ〳〵をよく掃き淸めて、夜さりわたりね」と言ひ遣はせよ」と宣ふ。(六)昨夜より三日の家あるじの近江守、今日は御臺かねの御つきして、おとゞ、家の券奉りたる目錄そへて奉(七)り給ふ。衆雅「これは

(語釋)
(二)「はづしてあり」歟
(三)「おものの具」なるべし
(四)中君
(五)「織物のほそなが」歟
(六)誤あるべし
(七)中君に

(考異)
(一)一つには燈臺—一つには調度燈臺。

〈語釋〉
（一）「しろうて」歟

へばおとゞ、雅亮「なでふ物あらばこそあらめ。いさゝかならむ調度などは、こゝに乳母をとゞめ給ひて。今日よき日なり」と宣へば、中君「さらば」とて御車寄せさせ給ひて、載せ奉り給ひて、人給には、ある御たちなど載せたまひて、御包など入れて、いと忍びて、西の御門より出でて、かの殿に入りて見給へば、御座所あたらしく、淸げなる屏風、几帳など立てたり。取りつかひ給ふべき調度、なき無し。おとゞ、さてその夜は、其處にとゞまり給ひて、御まうけいと淸らにしたり。おとゞ、つとめて、殿のうちを見給へば、しらたて（一）被したる辛櫃二よろひ、錠さして、鍵結ひつけたり。さしあけ見給へば、かうの辛櫃どもなり。あるには、御衣ども樣々にし入れ、あるにはよき衣、綿、おの〳〵かみなどあり。御衣掛に被して、御衾など懸けたり。さらぬ物ども、つき、辛櫃など多かり。外には四尺の御厨子三よろひ、三尺の一よろひ、被したり。それにも錠鍵あり。あけて見給へば、男女の御調度二よろひ、被して、硯の具などあり。大いなる厨子、二よ

〔語釋〕
(一)「ばかり」衍文なるべし
兼雅、中君を三條の東の家に迎ふ。中君を俊蔭女に托す。
(二)兼雅が
(五)「物し給ふをもえ尋ねきこえざりつる」歟
(七)「身は」は「こゝは」の誤なるべし

〔考異〕
(三)這ひ入り—まゐり
(四)來たりしかどえも聞えず—來たりしかどもえ聞えず—來たりしかどえ聞えず [illegible]
(六)かの三條の—かの件の三條の

じと申し侍り。「いかばかりの拙きものと御覽ぜられたれば、斯う仰せらるらむ」となむばかり畏まり侍る」と申し給ひてかへり給ひぬ。

二月五日ばかりに、中の君の御許に、車三つばかり、著給ふべき御衣、御衣箱に入れて、御車に入れて、むつましき人五六人ばかりして、忍びて一條殿に、夜更けておはして、中の君の御方に這ひ入り給へば、人々裝束して、御たち四人、わらは、下仕など二人、君も白き衣などあまた著給ひて、御殿油などともしたり。おとゞきこえ給ふ、兼雅「さきに來たりしかど、えも聞えずなりにき。志はさらに怠らねど、あやしく、童なりし時哀なりし人の、己だに知らで隱れにしを見つけて、それを哀と見つゝ年頃侍りつる程に、かくて物宣ふをもえ聞えざりつる。よし、それはしめやかに聞えむ。かの三條の東の外に向ひたる家小きあり。そこにわたり給ひて、いと心易くてものし給へ。身は、かくおほぞうなる所の、心を心にまかせ給はぬなれば、御迎にとてなむ」と宣へば、中君「俄にてはいかゞ」と宣

見ては、たゞ笑ひに笑ひ、うつくし。大將内裏に參り給ふ。
司召には、宮あこ侍從に、兵部の大輔は左衛門佐になり給ひぬ。さては人々、わたくしの御勞あり。右大將(一)は、昔山よりおり給ひし馬添、一人は伊豫介、いと難かりけるを(二)、勞りなし給ふ。その時は、大學の允、所の衆にて有りし。
かゝる程に、月たちて、二月になりぬ。右大將、三條殿にかの宣ひし家の劵奉り給へり。おとゞに申し給ふ、仲忠「仰せられし家奉り侍る。仰せ賜はりなば、かくばかりの家は造り侍りぬべし。これは、かく小くち惜しき所なれど、これをと仰せらるればなむ。やがて内の具(三)ぐして奉り侍るめり。目錄」とてその文奉り給ふ。見給へば厨子、辛櫃、几帳、屏風よりはじめて、人の家の具あり。藏に物おきたり。この家ゆへ(四)ぬしばかり所のかき、いと全くあたらしく造りて、檜皮の大殿、いとをかしげに造りて、たゞ這ひ入る(五)ばかりにしつらひたり。おとゞ、兼雅「この代の家は如何ものする。然るべくば春ものせむ」大將、仲忠「更に賜はら

〔語釋〕
(一)兼雅
(二)この任命はむづかしかりしを
(三)道具類
⑪仲忠約束の家を兼雅に引渡す。

〔考異〕
(四)家ゆへぬしばかり所のかき―家ゆゑぬしばかりの所のかき―家の邊のしばかりそのかき
(五)入る―入らる

〔語釋〕
（一）「かんの」なるべし
（三）「かんの」なるべし
（四）「うちの女御の君」歟
（五）「かんの」なるべし

〔考異〕
（一）いと—いと〳〵

て使はせ給へ」と宮、「（一）いと嬉しかりなむ。あそぶ人無くていとあし」と宣ふ。大將手づから賄して、宮たちに物くゝめつゝ參り給ひて、車どもを、仲忠「雛に子日せさせ給へとて率て參りつる」とて奉り給へば、宮たちも喜びてもてあそび給ふ。かくて常にをかしき弄び物は奉り給ひけり。

畫詞　こゝは東の大殿。

かくて大將は中の大殿にわたり給ひぬ。（二）うへのおとゞは、賭弓の料にまうけられたりしかづけ物ども、取りに遣はして、宮たち三所にはうちき、はかま添へたる女のよそひ、宰相の中將、良中將には、例の裝束、藏人の少將、太夫の君には織物のほそなが、あはせのはかまなどかづけ給ふ。かくてみなかへり給ひぬ。

畫詞　（三）うへのおとゞ南面に御座よそひて、御供の人々など其處にさふらふ。御みづからは、（四）宮の女御の君に御物語きこえ給ふ。こゝは百日の所。（五）うへのおとゞ、曉にわたり給ひぬ。犬宮は頸いとよく居て、おきかへりなどし給ふ。人

〔語釋〕
（一）東宮第一の皇子　あて宮腹
（三）ゐ餘りを大宮に食せしめんとて
〔考異〕
（二）程—ナシ
（四）わざを—わざをも—わざも

いろ取りたてて、仲忠「宮たち出でさせ給へ」と聞え給ふ。はじめの宮は若宮と聞ゆ。御年五つ。程（二）大きに、御色あひ、御髪の筋、母君に似給へれど、これは宮の御樣にて、氣高くおはす。御髪背中ばかりなど、海松をつくりつけたる樣なり。綾かいねり一かさね、あはせのはかま、織物の直衣著給へり。弟の宮は四つ。御髪肩わたりにて、兄宮のやうなり。それも同じごと裝束き給へり。大將、二所ながら御膝にすゑ奉り給ひて聞え給ふ、仲忠「彼處に侍りつる子に餅くはせ侍るを、まづ聞食させて、おろしをとてなむ（三）。若宮、「わが見に出でたりしかば、宮のかくして見せ給はざりし」二の宮、「見せ給はざりしかば、いみじう泣きしかばこそ見せ給ひしか。抱きしかば、うち落して騷がれき」大將、仲忠「さて如何御覽ぜし。憎げにや侍りし」宮、「いな、いと美しかりき。こなたに率て來などせさせしかば、ののしりて留めき。たゞ今抱きておはせよ」と宣へば、仲忠「たゞ今は、穢げにむづかしう、なめげなるわざをし（四）侍れば、今大きになりなむ時に、召してらうたうし

〔語釋〕
(一)此の歌が丁度よき手本なり
(二)「うへの」は「かんの」なるべし
(四)仲忠
〔考異〕
(三)おとゞ—ナシ

とあり。女御、「いとよき物の師にこそは」(一)とて、

仁壽 生ひてさは百日がはにや なりにける子日を千代と かぞふべき松

内侍のかみ、

俊蔭女 かぞへつる今日をけふ知る姫松は千世てふことは習はざらめや

一の宮、

女二 姫松は ねのびを多く かぞへつゝ あまたの世をも 過すべきかな

とてうへ(二)のおとゞ、折敷ながら、外にさし出だし給へれば右大將、

仲忠 姫松は おとねの かぎり 數へつゝ 千年の春は みつと 知らなむ

とてさし入るれば、他人は見給はず。(三)おとゞ宮たち、宰相の中將、良中將、藏人の少將、宮あこの太夫、みな讀み給へれど書かず。

(四)右大將は、東のおとゞの南の方にまゐり給ひて、宮たちの御前に沈の折敷、瑠璃の御坏の小きして、物まゐり給ふを、車二つづつ、銀、黄金の馬、さまぐ\いろ

萬世のゆくへも知らで思ひいづる小松にけふぞ子日しらする

と青き色紙にかきて、小松につけて奉り給ふ。藤壺は、踏歌の夜よりは下にお
しませば、御消息も聞え、君だちも參り給ふ。檜割籠どもは殿上に出だし給ひて、
御返、

あて宮げに覺束なきまで。日頃は御里の御文も見給へざりきや。對面にぞ聞えさ
すべき。この頃はいかでがと思ひ給へつるになむ。さてこれは、

萬世の子日しるらむ姫松に つくべきことの 我もあるかな

まかで侍らむと思ひ給ふれど、心にもあらずのみなむ。

と聞え給へり。

かくて犬宮に、餅まゐり給ふとて、女御の君、折敷の洲濱を見給へば、例の鶴二
羽、しかよろひて有り。松生ひたり。左大將殿の御手にてかき給へり、

鄕雅 百日がは今日としらせつ乙子をぞかぞへて千代となせよ姫松

〔語釋〕
(一)正頼邸へ
(二)「うちの女御」歟

〔考異〕
(三)犬の―犬こその―犬宮の

駒に人乗せなどしてまうけ給へり。

斯くてその日になりて、内侍のかんの殿、車六つして參り給へり。(一)御前の物ども、犬宮の御前には、沈の折敷十二、かねの坏ども。御前どもに樣々にしたり。檜割籠百。かくて右大臣は、昨夜つかさめしの夜なれば、左大臣も參り給ひぬ。宮(二)の女御の御前の物ども參れり。男宮たちの御前にも、例の御衝重、割籠、大宮にも御前の物して參れり。檜割籠にすゑて奉れ給へり。女御の君の御方の人々おなじかず、東宮の若宮たちの人々のも、檜割籠五つに、さての御方々にもみな奉れ給ふ。藤壺に檜割籠十たゞの十奉り給ふとて、女御の君の御文、

仁壽あたらしき年は、すなはちと思う給へしを、怪しく、このわたりの御文は見給はぬやうに承はりしかば、つゝましかりつるほどに、犬(三)のかゝるわざする程になりにけるを、斯くなむとも聞えでやはとてなむ。

上をばいかゞ宣ふ。おとゞに申しょかば、「宮は然など宣はすらむや。如何なることぞ」などなむいぶかしがり聞え給ふなりかし。君をともかくも、いかゞ思召さぬ事は」梨壺「一日も「藤壺もかやうにぞあめる。年頃さもあらざりしことを」などぞ宣ひし」など宣ひてまかで給ひぬ。

畫詞 こゝは梨壺。

かくて七日になりて、人々加階し給ふ。右おとゞ正二位、左大將殿從二位、左衛門佐四位、宮あこかうぶり得給ふ。女叙位、一階こえて内侍のかみ三位の加階し給ふ。かくて賭弓に、左大將參り給はず。右負け給ひぬ。内宴はきこしめさず。

二十五日に出で來る乙子は、犬宮の御百日にあたりけり。此度は内侍のかんの殿し給ふ。やがて子日がてら參り給ふ。やうは右大將は、東宮の若宮に、をかしき弄び物、まるり物調ぜさせ給ひ、雛の絲毛、黄金造の車、いろ〳〵に調じて人乘せ、黄金の黄牛かけて、割籠ども、銀、黄金てうじて、入れ物いとをかしくて、

〔語釋〕
(一)東宮が御寵愛なき事はあらじ
(二)同じく懷胎せり
(三)「はやう」歟
(十)犬宮の百箇日の產養。仲忠、東宮の御子たちに玩物を奉る。

〔語釋〕
(一)梨壺の居られそうな時分なれば
(二)東宮
(三)謂ならんか
(四)女四宮
(六)御身の懷胎の事を東宮は何と仰せらるゝ

〔考異〕
(五)何とにかーなどか

聞ゆれは、仲忠「人は無しや」孫王「たゞ一二人なむ。兵衛あこぎになむ」大將、仲忠「よし然らば」とて歸り給ひぬ。わたり(一)給ふとおほえたる程なれば、梨壺にまうで給ひて、對面し給へり。君、梨壺「一日、人の宮は殿になど言ひしは如何なる事ぞ。(二)宮は聞召して、「上の、己を宣ひしに驚きてこそ、よきやうに(三)そこに給へるならむ」となむ」大將、仲忠「内裏にも然ぞ宣ふなるや。内裏にも、とまれ然ておはすか」いらへ、梨壺「いとみさをなりや。内々のこと知らねども」大將、仲忠「さも聞えねど、さてのみはいかでかはとて、えこそ」(四)君、梨壺「一夜召したり。まう上りたりしに、「院の御方をぞ、いかでかはと思ひきこゆれど、恐ろしく宣ひしのみ覺えて、えこそ聞えね」など宣ひし」仲忠「藤壺は何とにかあらむ」(五)梨壺「たゞ御簾の前に局して苦しげにてぞ。乳母たちなどは、「如何なるにかあらむ。こととあからめをこそし給はね。如何なるべき御中にかあらむ」とぞ嘆くなりし」大將、仲忠「あぢきなの嘆や。時めく人は然こそは。たゞの人も、思ふ時には、片時外にとやは覺ゆる。(六)御

〔語釋〕
(三)誤あるべし
(四)誤あるべし
(五)「御前に」なるべし
(六)正賴

〔考異〕
(一)五所—四所
(二)こそは—「は」ナシ

言殿は、北の方籠りゐて御裝束えし給はねば、參り給はで、子どもうつくしみて居給へり。かくて上達部は、右近の陣に居きぬ。女御の御腹の御子たち五所。(一)右大將は御前に參り給ふ。例の御局どもの前をわたり給へば、后の宮の人々いふ、「かの仁壽殿の腹の御子たちを見よや。有心にこそあれ。女御子のうち連れたるにこそ(二)はあめれ。有所に、などこの名だたる容貌のみこ、大將に氣取られたる」また他人のいふ、「(三)近衛づかさ(四)大將を、上にこそはあめれ」など口々に言ひ騷げど、見ぬやうにてわたらせ給ふ。一宮三品、帥の宮四品、今一所は無品、二所は色ゆるされ給へり。十の御子は未し。皆蘇枋がさねの綾のうへのはかま著給へり。宮たちは御所(五)にさふらひ給ふ。

大將は藤壺にまうで給ひて、孫王の君に、「參り來たるよし聞え給へ」と申し給へば、孫王「日頃は上の御局になむ。一夜おとゞの物(六)し給へりしに、御氣色いとあしくて、その夜さりゐて出で給ひて、御局の人も寄せ給はず。されば え聞えじ」と

(十)新年の拜賀。仲忠、梨壺を訪ふ。正賴以下位階昇進。

〔語釋〕
(二)兼雅
(三)忠俊

〔考異〕
(一)並み立ち給ひて―みな立ちて

の御方に奉り給ふ。

かくて年かへりて朔日の日になりて、殿君たちよりはじめて、十所あまり一所、北のおとゞの東面に並み立ち給ひて(一)、宮おとゞ拜み奉り給ふ。しばしあれば宮たち四所、いと清らに裝束き給ひて、女御の御前に參り給ふ。右大將うちつぎて參りて拜み奉り給ふ。宮たち、大將殿(二)も參り給ひぬ。あを色に蘇枋がさね著たるわらはべ、御禊まゐり、物まゐりなどす。御酒參らむとする程に、十の宮に御土器もたせ奉りて、書きて出だし給へり。

正賴　けふのごと我思ふ人とまとゐしていくよの春を共にまち出む

とて大將に奉り給ふ。大將、宮をかき抱きて、土器を見てかく聞ゆ、

兼雅　まとゐして今日まつことはかはらじを春の來ざらむ年はありとも

と聞えて、土器度々になりぬ。

かくてみな内裏に參り給ひぬ、何方にも〳〵、上達部參り給はぬなきに、藤大納(三)

こふさいなりや。あなかしこ、(一)いとおふけなき人ぞや。わか君をば、わが一條にありし前よりこそ、取りもて來しか。又取らずや(二)」大將、仲忠「さらばかの家のことは、又宣ひて、申さむに隨ひて」(三)などて歸り給ひぬ。

畫詞　こゝは三條殿。

かくて右大臣殿には、(四)大殿の御方に、(五)大納言殿(六)の北の方わたりておはす。大宮、(七)「かかる折にかく離れ居給へれば、(八)かしこは便なくおほすらむ。(九)父おとゞも怪しからぬ樣に聞き給ふらむ。(一〇)何事によりたる御中ぞ」と宣へば、七君「何にかは。今は人と思はであなづれば、見え侍らじとて」大宮、(一一)「をさなき子どもあり、又たゞに物せられざめり。便なきこと。年のはじめに一人はいかでか。今宵はや渡り給ひ(一二)ね」と聞え給へど、いらへも聞え給はず。御子は五つなる男三つなる女、はらみ給へり。(一三)女君はいとをかしければ、父君いとかなしうし給ふ。殿には人々の奉りたる物いと多かり。(一四)種松ぞ奉りたる米五石、炭五荷、女御の君の御かたにと(一五)宮

（語釋）
（一）祐澄を誇る也
（二）父女二をも奪ひ取るかも知れぬ
（三）「などとて」なるべし
（四）大宮
（五）忠俊
（六）七の君
（七）懷胎の折に
（評）大宮、七の君の夫と中違せるを戒む。
（八）忠俊
（九）忠雅
（一〇）夫と中違ひしたるはどういふ譯ぞ
（一二）夫の許へ歸られよ
（一三）三つなる女の兒也
（一四）「種松が」なるべし
（一五）「にも宮の御方にも」歟
（考異）
（一一）をさなき子—をさなど

りて見奉らむ」とおとゞ、兼雅「髪よく容貌よくある人は見しや」仲忠「この中に、ここにおはする宮(一)と、中の君と、御髪はありがたかりし。こゝの御様なるはされど無し。かやうにものし給ふ」北の方、俊蔭女「あなむくつけや(二)。容貌は年こそ。そがうちに、梳るものともせで、うち捨てたるに、(三)かれは、女御の夜昼撫でつくろひ奉り給へば、いといみじや」大將、仲忠「御様になむ常に似たりと聞ゆれば、かれとはいとよきものを。藤壺のこそ(四)。宣ふ(五)この宮は、かの御様にてをかしげなるとなむ承る」兼雅「年老いぬるばかりの寶は無かりけり。昔なりせば、この人たち如何に見まほしからましと(六)」(七)大將、仲忠「こまがへらせ給へかし」おとゞ、兼雅「いまその駒や」(八)などて、「宮のあとは誰をか」(九)大將、仲忠「宰相中將の三の宮にと思ひて侍る女をとなむ。かの君はた、さる御心も無かなれば」(一〇)(一一)おとゞ、兼雅「それも用なかなりや」大將、仲忠「かの宰相こそ、(一二)この宮を、あらはれて、女御にも自らにも物せらるなれ」おとゞ、兼雅「わか君(一三)をば如何にせむとにかあらむ。(一四)おとゞみ

〔語釈〕
(一)女一宮
(二)俊蔭女に比すべきものはなし
(三)女二は
(四)こそ宣ふ—こそと宣ふ
(五)女二宮はあて宮に似て
(六)「と」衍文なるべし
(八)「などとて」なるべし
(九)「あこは」なるべし
(一〇)祐澄
(一二)女二宮を得たき由を公然女御にも仲忠にも語る
(一三)嵯峨院皇女、祐澄の妻
(一四)誤あるべし

〔考異〕
(七)大將—ナシ
(一一)宰相中將—宰相の中將

(語釋)
(一)非分の望をもち居る故
(二)近澄がいふ故
(三)親が
(四)限あるべし
(五)「歎かるゝ」歟
(六)「誰をかは」にて誰を思ひ居るかの意なるべし
(七)誤あるべし
(九)仲澄の例もある事故
(一〇)女一宮
(一一)御器量よしの御家柄で

(考異)
(八)べければ―べかりければ

は侍らで、宮あこと二人、親のもとになむ。少將は(一)あるまじき心ばへなれば、親など制し給ふなれば、「さて仲忠侍らずや」(二)とものすれば、「それは不意に賜へばこそあれ、きむちは、如何なる道、何によりて」となむ、(三)切に責め給ふなれど、思ひやまでなむ。心地も(四)しらぬべき者なめりとなむ(五)歎かる」おとゞ、兼雅「侍從は(六)誰よりかは。もし宮か」仲忠「知らず。氣色見給へむとてものせしかど、異筋こそとなむ。夜實(七)あそび、物思へりしかば、かく世の短かかる(八)べければにや、とこそ見給へりしか」おとゞ、兼雅「(九)例なる事なれば、げに嘆かれぬべくこそは。何れをかは」大將、仲忠「二の宮こそは御裳著給ひてこそは。いまだ小さくなむ」おとゞ、兼雅「御容貌などはいかゞ物し給ふらむ」大將、仲忠「かしこきは、われか人かとのみあるは、まさり給へるにこそ」北の方、俊蔭女「いでや、(一〇)宮はいとめでたくおはするものを。さる(一一)かたち族にて、御子たちにさへおはすれば、色あひ御髪筋などはいかでかは。又然るは見ね。髪のかゝりばこそあき給へらずなりにしかば、いかでか參

かくて晦の日、三條殿に、「大將殿に聞ゆべき事あり」とありければ、まうで給へり。おとゞ、兼雅「申すべき事ありてなむ。(一)此度御勞(二)にてなりぬる近江守の家なむ、こゝに切なる用あるを、其處につかひ給ふ人に(三)こそあなれ。(四)用ぜらるゝ二條の院の東なる、こゝに領するにをとものせられよ」大將、仲忠「いと易きことなり。さらずも、奉り侍りなむ。いとよく叶ひ侍る人なれば、此度は、右大臣ものしと思したりつれど、強ひて申しなし侍りぬるなり。さても、身には過ぎ侍りきや。(五)かの家三條の院のもとなる所になむ。(六)ことに狹けれど、いとをかしげに造りて侍る。宮あこにと思ひて侍る妻の料に侍るなるを、宮あこはおよすけたる心ばへなれば、(七)みも不益になむ」おとゞ、兼雅「さりとも代なくては如何。宮あこは、などかさも得させ給はずなりぬらむ」大將、仲忠「まづかうぶりをとにや侍らむ」おとゞ、兼雅「藏人の少將(八)の、弟まさりになり勝られぬべかめるかな。たゞ今の上人は、これ一人なめりかし。心もよげなり。(九)誰をか持たる」大將、仲忠「侍りしかど、(一〇)今

（語釋）
(一)仲忠
(二)仲忠の庇護にて
(三)近江守は其方の家來なれば彼の家を我が二條院の東なる家と交換する樣に言ひつけてくれ　かの意なるべし
(五)近江守になりたるは過分の出世なり
(七)「そも」なるべし
(八)近江が兄を越えて出世しそうなり
(九)誰を妻にして居る
(一〇)妻ありしかど

（考異）
(四)あなれ—あんなれ
(六)ことに—御には

〔語釋〕
(一)米を殼にかけたるか
(二)拾遺集「夏衣薄きながらぞ頼まるゝひとへなるしも身に近ければ」
(五)此處誤あらんか

㊃仲忠兼雅と物語。家交換の約束、宮あこ祐澄等の噂。

〔考異〕
(三)せられしかど—せられしかば
(四)されど—されども

それも今は、

あまぐもは見ゆとも今は何かせむ見えぬこの世の人はとふとも

さてこのこめ(一)は、夏衣にや。「ひとへなるしも(二)」とかいふなれば、今よりだに。とて奉り給へれば君物どもよりも、一日の文を見てなど思して御返し、

中君 一日は、おぼえぬ便なりしをなむ、めづらしき心地せられしかど(三)、この世の外の心になむ。されど(四)、

まつ人は多くの月日見えねどもいづれの暮か雲を見ざらむ

とあり。かの包みし金は、百兩に足らでぞありける。唐人の來たる頃にて、要ずる物せむとしければ、かゝる物どもあれば、ありしやうに入れて持給へり。衣など(五)人々に著せ給ふと聞きて、里に出で居し人々、空言しつゝ出で來たり。物いとおほく取りひろげて、賑はしければ、ことかたぐの人は、いみじく羨みのよしる。

聞えおき給ひけむものを斯くは(一)」おとゞ、兼雅「いさや、其處を見つけ奉りしに、胸心もつぶれて、萬のこと覺えざりしかば、然しさりつるにや(二)。この中納言の言ひ出でて、斯して、忘れたりつる(三)見苦しき者どもも思ひ出でさするにこそは。如何に、訪らひにやらむ。食物などこそいとあはれなりしか」など宣ふほどに、「右大將殿より」とて、この炭を(四)奉り給へればおとゞ、兼雅「氣色ある物かな。持て來」とて御前に召して、あけさせて見給へば、少將の妹の賜へりし、おなじ樣なり。きぬなどはまつべしやと委しく御覽ずるに、いと美しげなる白きぬどもなり。北の方、俊蔭女(五)「これを遣りて(六)宣ひつる所には物し給へ」と聞え給へば、おとゞ、兼雅「よき事なり」とて、車のはづしたる、破れたる下簾などかけて入れさせ給ふ。納殿、贄殿(七)、魚、鳥、菓物など、よきを擇らせて、炭、油など長櫃に積ませ給ひて、御文は(八)、

兼雅一日は見給へしに日もくれて、物覺えざりしかばなむえ聞えざりしと思せ。

〔語釈〕

(二)「さしたりつるにや」なるべし

(四)「炭米を」歟

(五)誤あらんか

(六)「遣りて」は「やがて」なるべし

(七)「贄殿の魚」なるべし

〔考異〕

(一)斯くは—からくは

(三)忘れたりつる—忘れたりし

(八)御文は—「は」ナシ

卿の殿にも奉れなどし給ふ。水尾には、大將殿、(一)御文添へて、子どもの衣など調じて奉り給ふ。

畫詞　こゝは少將の妹の御方。御たち四人、わらは、下仕一人づつ、女房二人ばかりあり。君、三十餘ばかりにて、愛敬づき、匂ひやかなり。前にことども置きて、住ひよげなり。

かくて種松は、左大將殿にも、きぬ綿など大きなる櫃につみて錦など、(二)世になき(三)錦を奉れり。(四)宮の御方にも、御非々より、節料多く奉れり。

おとどなほ北の方の御許にのみ夜晝おはする、(六)物などはたゞ此處に、あなたには(五)時々晝間などにまうで給ふ。北の方に、一日中の君の有りしやう語り給ひて、投げ出だし(七)給ひし文見せ奉れば、北の方いみじく泣き給ひて、(俊蔭女)「あはれ、親におくれ奉りて、心細き住居するはいみじきものを。若くて親にはおくれ奉りてけり、そこには年頃思ひ聞え給ふとみえず。げに何心地し給はむ。などか(八)、さ哀に親の

〔語釋〕
(一)「大將殿の御文」なるべし
(四)大宮
(五)兼雅
(六)食事なども俊蔭女の方にてのみ食し
㊆兼雅、式部卿宮の中君に衣食の料を贈る。

〔考異〕
(二)錦―きにし
(三)錦を―しきりに
(七)出し給ひし―出したりし
(八)などか―などかは

みじくうるはしき綿二十屯入れたり。見給ひて、仲頼妹「いと物覺えず、づしやかなる節料も賜へるかな。これを如何にせむ」と宣へば、乳母など、「これもおとゞの御徳にてこそあめれ。知らぬ人、御よばひ人ならばこそは、取り入れ給はずもあらめ。はや御返聞え給へ」と言へば、御使を呼び入れて、物食はせ、酒飲ませなどして、大いなる童には白きうちき一つ、小きには單衣一つづつ賜ひて、懐に入れさせて御返し、

仲頼妹 承りぬ。一日は、げに理にも聞えさせずなりにけるかな。山の代と宣はすれば、うまのたとひの侍らむ心地して、いとも〳〵嬉しくなむ。さては、これは炭燒をさへせさせ給ひければ、いかに御手黑かるらむとなむ思ひ遣られける。

と聞えつ。取りひろげて、御たち喜ぶ。仲頼妹「あなかまや。かの君の御物と聞きていき集まりてうけび呪ひぞせむ」とて母君の御許、水尾の料など取り置き、宮内

〔語釋〕

（一）仲忠をいふ

（五）「聞きてば來集まりて」なるべし、同邸内の他の妾たちが也

〔考異〕

（一）賜へるかな―賜ひつるかな

（三）うまのたとひ―うまたとひ―むさのたとひ

（四）黑かるらむ―黑からむ

〔語釋〕
(一)仲忠
(二)「と」衍文なるべし
(三)仲頼の許より來る品と
(五)「おしいれて」歟
(八)未詳、誤あらんか
(九)絹糸の粗なるもの

〔考異〕
(四)書き―ナシ
(六)二十籠を―はみを
(七)積みて―くみて

とゞ、右大將殿の粥の料、すべて調じて奉る。おとゞには炭二十荷、米二十石、右大將殿(一)には炭十荷、米十石奉れたり。大將、三條殿に米一石と(二)、炭二荷奉り給ふ。又同じ數に、米も炭も、御厩の草刈、馬人召しておほせて、小さき童一人、大きなる法師雜仕もとめさせ給ひて、一條殿に、少將の妹につかはす。

仲忠「一日はこと〴〵にと思ひ給ひしかど、日の暮れにしかばなむ。なほ聞えしやうに、何方にも〳〵むつまじき筋にを。さてこの炭は、(三)水尾に見くらべ給へとてなむ。

と書きてぢうしのすくよかなるに包みて、「山より」とて少將の手にいとよく書き(四)似せて、近く使ひ給ふ上童そへて、仲忠「栗出しゝ處におしへ(五)入れて、歸りまうで來ね」とて遣はしければ、到りて、「水尾より」とて入れたれば、見るに、炭(六)二十籠をいと細かに積みて(七)、とのこす(八)を貫き立てて、錢二十貫一籠に入れて、物覆して結ひたり。米は、(九)しけいと俵に編みて、絹五十疋入れて三俵、今一つには、い

はよろこびも申させ給はず。宮(一)の上におはしませば、人々、殿上人などよろこびて、左大將(二)も參り給へり。うたてある事(三)は宣ひつれど(四)、まめなる御心にしあらねば、召して物宣ひなどす。東宮「さいつ頃、いと間近かりしかど、こと〴〵なかりし程にて、こと〴〵にさやうなる事あるべきやうにはあべかりしを、今年は不用なめりな」正頼「大將(五)のこの頃仕うまつるべく侍りつるを、さる事侍りてなむ。年かへりてぞ仕うまつるべく侍る」とてまかで給ひぬ。藤壺を下へおろし給はで、いと近く御局し給ひて、兵衛の君、孫王の君、あこきばかりして、また人召し寄せ(六)ず。東宮「人の用あらば、この人をつかひ給へ」とてする奉り(七)給へれば、御氣色のいと恐ろしかりつるに怖ぢまどひて、物も聞えでさふらひ給ふ。

畫　詞　こゝは司召(八)。よろこびの人いと多かり。殿上にもさふらふ。こゝは東宮。

かくて、晦にもなりぬれば、こゝかしこに節料いと多く奉る。そが中に種松は(九)お

〔語釈〕

（一）東宮

（二）「右大殿も」なるべし正頼なり

（三）正頼があて宮の迎にゆきし時の事

（四）眞からの忠言でもなき故

（五）仲忠が

（八）あて宮が

（九）正頼、仲忠

〔考異〕

（六）寄せず—寄せて

（七）給へれば—給ひつれば

㊅仲忠、節料の米炭等を仲賴の妹に贈る。

（語釋）
（二）東宮

（考異）
（一）内藏頭―うまのかみ

㊄除目。忠澄、近澄等昇進。東宮あて宮を抑留す。

とほしとは思せど、まかで給へとおるをいと憎しと思して、おし揉みて投げやり給ひて、東宮「人々の物すらむことは、こゝには得知らず。面伏なりと思さば、見給ふまじくこそはとなむ」と言はせ給へば、内藏頭（一）、いとはしたなくいとほしと思して、まかで給ひて斯う〳〵と申し給へば、これかれ、いとほしがり騒ぎ給ふ。大宮、「事しも有り顔に、おふな〳〵子どもひき連れて、何かよからぬ文書をして、かゝることもいだし給ふ。そこはとまれ、若き人々の行く末の爲こそおぢきなけれ」と宣ふ。右大將殿聞き給ひて、仲忠「さればこそ聞えしか、えまかで給はじと。おほろけに御心輕くおはしますにもあらぬに、いとほしき事かな」と宣ふ。

かくて、今日は司召なれば、左右のおとゞ右大將など、一日定められて、夜召す。東宮は、その夕さり藤壺もろともに上り給ひて、例の如しつらはせておはします。つとめて、司召はててのゝしる。いと多く召したり。左衛門督に忠澄の中納言、右近少將には近澄の内藏頭かけて、左衛門尉にあこ君なり給へれど、宮に（二）

〔語釋〕
（一）近澄、一本「うまのかみ」
（七）あて宮に

〔考異〕
（二）賜はり給ひて―賜はりて
（三）ほど―ほどに
（四）宣ひしかば―のありしかば
（五）恥かしく侍りしか―恥かしかりしか
（六）有るを―あり

とゞは歸り給ひける。
つとめて、内藏頭の君（一）を御使にて、おとゞの御文あり。
正頼「昨夜は、路の程うしろめたさに、御迎に參り來たりしかど、御暇を賜はり給はざりければ、曉になむまかで候ひつる。御暇賜はり給ひて（二）、消息は宣へ。車どもなど調へさするも煩はしきを。いでや、子ども二十人にかゝりて持て侍れど、そこをば懷といふばかりに生し立て奉りしかば、いつしかも人々しくなり、面たゞしき目をも見給へむとこそ思ひ奉りしか。消息申しつがぬほど（三）、うち休らひつゝ聞き侍りしかば、ある所々に、忌しくいみじき事ども宣ひしかば（四）、いと心憂くなむ。自らはさるものにて、若きものども、人人にも聞きしこそいと恥かしく侍りしか（五）。げに、暫しまかで給ひて、人の目どももやすめ奉り給へ。
と有るを（六）、老人とりて御前（七）に奉れば、宮、東宮「持て來や」とて御覽じて、いとい

（語釋）
（二）懷胎五ヶ月の腹
（四）仲忠をいふ歟
（五）あて宮が

（考異）
（一）となめり―との事なめり
（三）宣ひきこえねば―宣ふうつらむは

あらず。斯く強ひてまかり出でさするは、また參らせじとなめり（一）。斯くながら、我もそこも死なむ」と宣ひて、つと抱きて臥し給へば、五月ばかりの腹（二）、いみじうはたらきて、たゞ惑ひに惑ひ給ひ、いみじう泣き給ふ。宮いと憎しと思せど、腹の騷ぐにいみじと思して、うちゆるして、東宮「宣ひきこえねば（三）いましむるぞ」と宣ふ。東宮「我は、そこによりては、せぬ業々をこそしつべけれ。かく心を隔てて、心強くあしきは、仲忠の朝臣のするぞ。これに逢はずなりにたるをぞ、いと悔しと思ひいますめる。人のいとかなしくする一子（四）、帝の二つなくいたはり給ふ聟、我が國に面もたげたる人、徒らになして、天の下の人かなしませ給ふらむに、そこは容貌よかめれど、心こそ良からざりけれ」と宣へば、水の戰（五）して、汗にしとゞに濡れて、屈まり伏し給へれば、流石にをかしと思して、東宮「今より、我に知らせぬ心な遣はれそよ。まかでらるべき事あめれば、今しばしこそあれ。強ひて斯くすればいと憎きぞかし」と宣へば、夜半過るまで立ち給ひて、曉にぞお

これかれ「夜更けぬ」と消息申せど、「え聞えず」とのみ申す。孫王の君を呼び寄せて、正頼「御後の方より忍びてまうでて申せ。「度々まかでさせずとのみあれば、思ほえず敵など持ち給へれば、うしろめたさに、御迎に」など申し給へ」と宣へば、孫王「聞えむ」とて御後の方よりやをらすべり入るを、宮御殿籠り起くるやうにて、いとあらく走り踏ませ(一)給へば、御脇息に倒れかゝりて(二)、腰を突きつ。御屏風、御几帳もこほ〳〵と倒れぬ。孫王の君、いと久しくためらひて、斯う〳〵と聞ゆれ(三)ば、正頼「翁かく夜のほどに(四)參りて、たゞにやは。顯澄啓せよ、宮の亮(五)なれば。藏人ならずとも」と宣へど、顯澄「何か。御氣色よろしからぬにこそ(六)」とて申し給はねば、むつかり(七)給ふを、宮きこしめして、女君(八)をつと掻き寄せて宣ふやう、東宮「其處は、我をいかに言ひくたしてか、親同胞ひき連れさせて、我をば責めさする。萬のこと、我に知らせてこそ、參りもまかでもせられめ。我に知らせで、親はらから一つ心にて、我をや責めさせむずる。そこを放ち遣りては、我はあるべくも

〔語釋〕
(二)孫王の君が
(三)正頼に
(五)汝は東宮亮なれば
(七)正頼が
(八)あて宮

〔考異〕
(一)踏ませ—出でさせ
(四)翁かく夜のほどに—おふなく夜のほどろに
(六)こそとて—ともかく

〔語釋〕
(一)あて宮を
(二)あて宮に
(三)昭陽殿
(五)「去なれぬべきかな」歟、一本、ぬられぬべきかな
(六)女四宮
(七)百本の鞭を用意して
(八)東宮

〔考異〕
(四)日もへだたりつる―もへざりつる

る氣色御覽じて、東宮「怪しく心地のあしきかな」とてとらへて臥し給ひぬるまゝに起き出で給はず。おとゞ參り給へれど宮入り臥し給へれば(一)えのぼり給はで、下に立ち給へれば、君たちはさながら土に立ち給へり。おとゞ、これかれして君に(二)消息申し給へど、え聞え次がぬほどに、(三)大殿の君の御方に言ふやう、「こゝらの年月日(四)もへだたりつる人の、今宵かく、辛うじて率て去なれぬるかな(五)。如何に腐り亂れたらむ。さるは這ひ出でむぞかし。その樣の聞えぞすめる」と言ふ。又院(六)の御方の下仕、わらはなど、「今宵はよき日なるべし。縫殿の陣の方に、俄に物まきたる車ども、北に立てりつ。今宵ぞ持て出でらるべかめる。(七)もゝずはへして、よく打たばや」など言ひあへり。おとゞ爪彈をして、正賴「女子もちたらむ人は、よき犬乞食なりけり。中にらうたしと思ひしものをしも、出だし立てて、かゝる耳を聞くこと。なほ犬烏にもくれて、籠めすゑたらましものを」と言ひ立ち給へるを、宮(八)はいとよく聞召す。

〔語釋〕
(一)俊蔭女
(二)正頼
(四)忠澄
(五)東宮

㊃正頼あて宮の迎に參内す。東宮あて宮の退出を許さず。

〔考異〕
(三)たうきり——とうきり
——のたうきり

る。由ある檳榔毛の車の簾をいと高くあげて、落ちぬばかりこぼれ出でて見るあり。大將うち寄りて、仲忠「何見給ふ。まろより外にあらじかし」と宣へば、「かかるあたには有りければ」大將、仲忠「のちおひといふなればぞ」とておはしぬ。
かくて三條殿におはして、南の大殿に御車寄せつ。みな下り給ひぬ。今宵のまうけ人々にあづけられたれば、皆まゐりたり。父大殿は、やがてこゝに御殿籠る。大將、仲忠「今なむまかづる。明日もさふらはむ」と北の方(一)に聞え給ひて歸り給ひぬ。
(二)右の大殿は、藤壺の御迎し給はむとて、やがてその車にことなど加へて、絲毛三つ、黄金作(三)たうきり、うなゐ車、下仕車、あはせて二十ばかり、御前の人、國なるのみこそ殘れ、京なるは四位五位無きなし。おとゞ、正頼「暇ゆるされざなるを、參りてまかでさせむ」と宣ひて出立ち給へば、御子ども、中納言(四)をはなちては、皆御供にまうで給ふ。縫殿の陣に御車ひき立て、まうで給ふ。宮(五)は晝よりさ

（語釋）
（一）合子、漆塗りの食器
（二）中の君の方に
（三）序の樣で面白からず

て外にまゐる。おほん酒などまゐる程に日くれて、御車御前など參りたり。政所より炭多く出だして、所々に火おこさせて、車添などすゑて、餅、乾物など取り出で、酒樽に入れてすゑてまがり（一）して、湧しつゝ飲ます。御前どもに、菓物乾物などして酒飲ます。

かくて先づ、うなゐ、下仕等人給へ乘る。御車寄せて、奉りて、引出づれば中の君、「さば斯くするなりけり。我如何樣にあらむとすらむ。この文をだに見せずなりぬる事」と泣く〳〵持ちて思ひ立ち給へり。おとゞ、御車出だしてしばし有りて、（二）立ち寄り給ひて、兼雅「今日は便（三）のやうなり。今ことさらにを」とて歸り給ふに、この文投げ出だし給へれば御供の人取りて御車に奉りぬ。大將は御馬に乘りて、御さきに仕うまつり給ふ。世の中の人、「右大將は、繼母の宮むかへ奉りて、御前していますべかなり」とて車ひき立てて見る。御續松ともしわたして、はやる馬に乘り、をりまはしておはする御樣を、車どもより面をさし出でつゝ見

（語釋）
（一）後に川へ取りよせたり

（考異）
（二）妹を―今は
（三）いかで―人の
（四）せむや―せよや

らへ、仲頼妹「子どもに物習はさむとて、後(一)になむ。女にえ習はさぬは、少し外の方にさし出でて、物の音など調べおきて、彼處よりも深く入りなむとて、常に言ひおこせ侍りつる」大將、仲忠「あはれ、さる所に、何心を思ひて幼き子どもと居給ふらむ。

仲忠むつまじき疎きと(二)妹をふりすてて山邊にひとり(三)いかで住むらむ

と宣へば、妹の君いみじく泣きて、

仲頼妹頼みしも見えしもさらに忘られでひとりは里もすみ憂かりけり

と聞ゆれば大將、仲忠「今日は宮の御方の三條へわたり給ふとてなむ、物せられつる。仲忠侍る所も今いと廣くなりぬべし。今そこに御迎せむ。しばしなほ斯くておはせよ。な思し疎みそ」とて立ちて、宮の御方へおはしぬ。

おとゞ、兼雅「此處にや」と宣ひて、兼雅「右近や。昔思ほえてまかなひ(四)せむや。湯漬せよ」など宣へば、同じやうなるかねの坏にして、湯漬して、あはせいと清げに

におぼえ給へば、(一)かばかりに聞えまほしくなむ」いらへ、仲頼妹「常に聞ゆめりしか
ば、餘所にえ(二)承りなどしたれど、疎々しく思されし筋にや、と思ひ給ふるなむ」
大將、仲忠「それは、親二所おはすとなむ、(三)殿の御かはり、かの君の御かはりに、
人數に侍らずとも相思ほせ。さても、いかでかは、(四)かの君たち世に經給はぬに、斯
くては。この宮内卿殿(五)のは何處にぞ。いかでか」いらへ、仲頼妹「親の御許にこそは。
(六)さきにもしの給へりしには、(七)みになむ、吹上のかへさを思ひ出でて、いみじくな
む(八)泣かるなりし。かの人、(九)「同じやうなる樣になりなむ」などあれど、親の許さ
ねば、心は同じやうにてなむ」大將、仲忠「幼き人など物しげなりしかば、(一〇)何にぞ。
いくつばかりにて、何處にか」いらへ、仲頼女「女一人十餘ばかりにて、男二人、(一一)一
つ二つが弟にてなむ。女は母君の御許に、男は、物ならはさむとて、山へむかへ
侍りき。兄なるは、何事も親には勝りぬべかめり。弟はえせで騒がれ侍るなり」
大將、仲忠「あそびの具も、いとかしこくて持給へりし(一二)。持てのぼり給ひにしか(一三)」い

〔語釋〕
(一)「かはりに」歟
(二)「え」は「こそ」歟
(三)兼雅と仲頼の代
(四)仲頼等
(五)忠俊の娘、仲頼の妻
(六)「さきにものし給へりしには」歟—一本「さきにもしのびしには」又一本「さきにし給へりしには」
(七)誤あるべし
(九)出家したしと
(一〇)「なりしは」歟
(一一)男子か女子か
(一二)仲頼が
(一三)山へ

〔考異〕
(八)泣かる—泣く

（語釋）
（一）「おとゞの御前に」なるべし
（二）「立ち給へり」なるべし
（三）「などとて」なるべし
（四）仲頼

（考異）
（五）山籠しける人—山籠の知るべき人
（六）有りしをかくて—ありしかはかうて

よく仕うまつりなむ。御上をぞかしこまり思う給へる」御いらへ、〔女三〕「今は、ともかくもしなし捨てられなむ僞にを、となむ、一日中納言にものせし」と宣ふほどに、おとゞ御前に、（一）昔のやうにて御臺まゐれり。

多くの御物語し給ふほどに右大將は少將の妹の方におはして、實子のもとに立（二）ち給ひて、〔仲頼妹〕「あな覺えず所たがへか」と聞え給へば、〔仲忠〕「人々もとめ給ひしかば、それ聞えむとてなむ」いらへ、〔仲頼妹〕「かゝる人のしるべきと宣ひしかば、いとよくぞ思ひ知りにき」（三）などて簾のもとに几帳立て、褥さし出でて、赤色の火桶、絵をかしくかきたるに、火おこして出だしたり。大將、〔仲忠〕「今すこし近く寄らせ給へ。（四）山籠の君を、昔はいみじう語らひ聞えしかば、さりとも聞召すやうも有りけむ」いらへ、〔仲頼妹〕「山籠しける人（五）やはと」大將、〔仲忠〕「何か、いとよく承はりたりや。一日も、聞えさすべかりけれども、斯くておはすらむともえ知り給はで有り（六）しを、かくておはせ給ひし由聞えしかばなむ。かく承らましかば。山の君の哀

ねりのこきうすき(一)織物のほそながなど奉りて、御火桶清らにておはす。角櫃に火などおこしたり。御臺一よろひ、かねの御器などして、例のやうにて物まゐれり。おとゞ、兼雅「年頃はあさましく公にも棄てられ奉りたるやうにて。昔は、ゆくさきも人なみ〳〵にや、と思う給へて、かゝる宮仕もさる方なりしを、今は限のやうなる身に侍れば、さふらはむも御面伏なるやうなれば、かゝる身にあえぬべき者の許に籠り侍るを、然てのみやは行くさきも短くなりぬる心地し侍ればなむ。蜑の苦屋のやうなる所に、時々通ひおはしましなむや」と聞え給へり。宮、さらに、年頃見ざりつるとも思したらで、いとおいらかに、女三「世の中はい(二)と斯くてもありぬべしや。たゞ苦しう(三)覺ゆるは、東宮の御方(四)なり。身は心と世の中に住みはふれて、「帝、后の御面を伏すること」と宣ふなれば、と參らで年を經るなむ、悲しき。昔はしば〳〵こそものせしかど、今は參り給へぬをなむ、彼處(五)にはうしろめたう宣ふ」おとゞ、兼雅「春宮の御方は、中納言かくて侍れば、いと

〔語釈〕
(一)「こきうすき」は「こうちき」なるべし
(四)女四宮

〔考異〕
(二)いと斯くても—いとよくかくても
(三)苦しう—苦しく
(五)嵯峨院にては

（註釋）
（一）「わかれし人は」歟
（四）鶯雅

（考異）
（一）耻見る—耻を見る
（三）見えねば—見えねど
（五）おとゞは…御たち二十餘人—左大將おりからりて南のおとゞの方へおはしぬれば御たち二十餘人

みじく悲しき事。わが幸なく耻見る（一）べき宿世の有りければ、幾多の年月こそあれ、かゝる年月を見る事」と伏しまろび泣き給ふ。乳母の孫のわらは、「御硯にかかる物こそ侍れ」とて取りて奉る。見給へば、

鶯雅ともかくもいふべき方も思ほえず見るに涙の降るにまどひて

君、これが返事をだにいかで言はむと思して、かく書き給ふ、

中君ながめつる雲居をのみぞ恨みつるわかれの（二）人は目にも見えねば（三）

と書きて、いかで遣らむと思せど、出で走るべき姿したる人もなければ、おし採みて手に握りて、寝殿にむかひたる柱のもとに立ちて見給へば、（四）おとゞは下り給ひて、東の一の對の方へおはしぬ。なほ其處に立ち居給へり。

かくて（五）おとゞは、宮の御方に參り給ひぬれば、御たち二十餘人ばかり、裝束淸らにして、わらはは四人、青色にあをし重ねて著たり。おはする所のさま、昔に劣らず。御褥敷きて、御簾の前に居給へり。宮は昔の御かたちに劣り給はず、綾かい

〔語釋〕
(一)陶碗歟
(二)ひめ粥
(六)「こゝの」歟、一本「二三の」

〔考異〕
(三)すみおり—すしをり
(四)堅い鹽—堅鹽
(五)櫛の—梨子地の
(七)やは—「は」ナシ

の御前へ、左大將は忍びて中の君の御方に參りて見給へば、うち破れたる屏風一雙ばかり、夏のかたびらの煤けたる几帳、一つ二つ立てて、君は綾かいねりの所所破れたる單がさね、すゝけたる白衣著て、火桶のすゝけたるに、火わづかにおこしたるに、臺一つたてて、白き、(一)たうわんに御物、(二)ひめめきて少し盛りて、(三)すみおり蕈、漬けたる蕪、(四)堅い鹽ばかりして、夜さりの御物にもあらず、旦の物にもあらぬ程にまゐりたり。御前には、古びたる蒔繪の(五)櫛の箱同じやうなる硯の箱すゑて、櫛の箱蓋をとり除けて、一日の柑子の壺の殘をとり出でて、乳母かけて見などす。その女孫など、童にて有り。下仕、一人ばかりなむ有りける。おとど見廻らして、とばかり物も宣はず、たゞ泣きに(六)こゝの御衣の袖のしとゞになりぬまで泣き給ふ。御前なる硯を引きよせて、懷紙に、かく書きて、うち置きて立ち給ひぬれば、中の君、「我斯くていみじき様を見えぬるは、さもあらばあれ、他世に(七)やは經たる。かくなしたるにこそはあめれ。これをかくすと見えぬるは、い

がたく淸らにする所にこそあれ。このうちき添ひたるは、お前に奉らむ。唐衣添ひたるは、内裏の御方(二)の參らせ給はむ御料に奉れ給へ」宮、女二「かたへは三(一)條に奉れむ」おとゞ、仲忠「あな見苦しや。片隅に籠り居たる、生女の著るべき物かは」など宣ひて、その日はおはしまし暮らして、又の日、仲忠「三條にまかりてすべき事侍り」とて、うへの衣裝束淸らにして薫物どもして出で給ひぬ。

三條殿にまうで給ひて、南の大殿を見給へば、いと淸らにしつらはれたり。しばしあれば、殿ばらより御車ども奉れ給へり。源中納言殿より、あたらしき黄金作に男ども二十餘人、裝束一つら(三)にて、擇り立てて奉り給へり。絲毛には、さぶらひの下臈の男どもに、うへのきぬなど著せて、三十人ばかりつけたり。御前四位十人、五位二十人、六位三十人(四)。大將は、仲忠「馬に鞍おきて、男どもかへるべきやうにゐてまうで(五)、三條殿に」と言ひおき給ひて、父おとゞ一つ御車にて、御前二人ばかりして、(六)あかく物し給ひぬ。西の御門よりおり給ひて、右大將は宮(七)

〔語釋〕
(一)仁壽殿
(二)侍從女
(五)「まうでこ」なるべし
(六)明るき中に
(七)女二宮
㊀兼雅仲忠、女二宮以下を三條に迎ふ

〔考異〕
(三)一つら—一すく—一すぢ
(四)三十人—二十人

〔註釋〕
（一）今宮をいふ「殿のは」なるべし
（二）今宮との
（三）「などとて」なるべし
（四）「宮に」なるべし
（五）「れ」衍文なるべし

仲忠「此の君の御容貌は如何おはする」すけ、「内裏の御方の樣にていとをかしげになむ」大將、仲忠「見奉らざらむ人は知りがたくぞ」すけ、「何か、氣色はいとよくぞ」仲忠「さて源中納言殿は（一）」すけ、「それは、宮の御樣の人の若く淸らにおはすること。御方々いと淸らにおはします」宮はおどろき給ひて、女二「何事ぞ。あれ、聞きにくしや」大將殿、仲忠「夢見給へるか。人の物や言ひつる」とて、「中納言と君と（二）の御中は如何なるぞ。兒まろがやうに抱くや」すけ、「御中はいとめでたく思ひ聞え給へり。いたう煩らひ給ひし時は、泣く〳〵手惑をぞし給ひし。兒は、見には見給ふ。おそろしとて抱き給はず」おとゞ、仲忠「また見ずなど宣ひしかば、いぶかしきにや」などて（三）内侍のすけ、犬宮いだきて入りぬ。おとゞ、宮は（四）、仲忠「起き居給ひて、昨夜の所よりある物ども見給へ。これらとり置かせ給へれ（五）。かゝる物の用あるとき、俄にすれば煩はしき」と聞え給ふ。おき給ひて、昨夜のかづけ物ども見給ふ。おとゞ、仲忠「みな人かゝる事すれ。いとあやしく、物の具など有り

かくて内侍のすけ、いと清らに裝束きて御前に參り給ひて、すけ「犬宮のいと戀しくはおはしつれば、「今日明日は」（一）と侍りつれど、急ぎて參りつるなり」おとゞ、仲忠「いと嬉しかなり。日頃うしろめたかりつる。御方々はなどておはしつるぞ。あまた御聲せしは、幾所にか」すけ「大將北の方の御子にし奉れ給へば、いたく惱み給ひしかばおはしぬ。式部卿の宮の御方は、御子をいと安く生み給へばおえ物にとて。（二）大納言殿の（三）北の方は、いづれとも元よりいみじき思ひはらからにて、心細き心などきこえ給へば、かねて渡らせ給ひにける。如何なるか侍らむ、大納言殿御中違にて、日頃は夜毎におはして、簀子になむ居明かし給ふめる。御格子はとくおろしてさしめぐり、人物きこゆればいみじうさいなみ給へば、一所なむ。一夜はいとほしがりて、（四）中納言の君對面し給へりしかば、それも逐ひ出でられてなむ。今日は北の大殿に渡り給ひぬらむ。さるは、（五）それもかやうの事ありげにおはすめり。宜なりけり、例はいたう空めいたる人のいとまめに見え給ひしは」

㊀仲忠夫婦に内侍のすけの噂話、忠俊夫婦仲違の噂、

〔語釋〕
（一）涼方にて仰せられしかど
（二）忠俊
（三）七の君
（四）忠澄
（五）七の君もやがて御産あるべし

を染めてしたり。壺には綾、衝重にはすはうの物入れたり。洲濱を見給へに中納言殿の御手にて、

涼　ゆく水のすむかげきみにかふるまで汀の鶴は生ひも立たなむ

とあり。

畫詞　こゝは源中納言殿。臺盤所におもと人たち居て物食ふ。碁代もみなゐり。みな分けつゝ。

かくて源中納言殿より大將殿に、昨夜のかち(一)物錢いま一御袋、白き添へて、

涼　いと行く先長く思しまうくめる物を、などか忘れさせ給ひにける。心きたなき上達部も侍るものを。

と中納言の御消息にて有り。御返り、

仲忠　人にかきあづけて(二)かは色こそかはれ、いかゞ。

となむ宣へり。(三)

（語釈）

（一）「かけ物」歟

（二）「あづけてしかば」歟

（三）「宣へる」なるべし

とゞ、今少し小くて氣近きにこそおはすめれ。(一)日に二度三度はありし御文に「人に見せ奉り給ふな」とのみありしかばこそ侍りけめ。藤壺の御方よりも、「生ひまさり給ひなむかし」(二)大殿「いでや、容貌あるも、(三)言ひ騒げばあまりに聞きにくしや」など宣ふ。(四)内侍のすけに、御衣櫃に女の裝束一くだり、夜の裝束一くだり、絹三十匹、綿など入れて取らせ給ふ。

畫詞　こゝは源中納言殿。

かくて大將殿(五)は、晝の御座所に、犬宮いだきて臥し給へり。(六)宮もかたはらに御殿籠り給へり。源中納言殿より奉り給へる物どもは、絲を藁にて、白き組を荒卷にて、きぬ一匹を魚にて、そを五葉の造り枝につけつゝ十枝、鯛鯉は、生きてはたらく樣にて、同じ造り枝につけたり。雉子の腹には、黒方を丸かし入れ、骸をば銀にて造れり。鳩は黄金、その腹には黄金入れたり。小鳥には、黒方を丸かしたり。折櫃は銀、鰹は沈、壺燒の鮑は黑方、海松、青海苔は絲、甘海苔は綿

〔語釋〕
(二)「大殿の北方」なるべし
(五)仲忠
(六)女一宮

〔考異〕
(一)おはすめれ—おはすれ
(三)あるも—あなるも
(四)宣ふ—宣ひし

にくせしものを、と思ひて隱しつ。織物のほそながを引きへぎて、兵衛の君に取らせ、中將の君に一重取らせて、殘はとりて入りぬ。

かくて昨夜の御前の物ども引く(一)。すみ物(二)も添へて、荒卷十枝と、魚鳥と二つたかつき一つづつ、大殿、大將殿、藤壺の女御の君の御もとへ、奉れ給ふ。

内侍のすけ、歸りなむとて、すけ「犬宮の御湯殿に參らむ、と大殿に聞えてしを、かくて侍ればものしと思すらむ。おぼろけならで悲しくし給へば、いかに日頃(三)は、御湯殿をうしろめたく思すらむ」中納言殿の北の方、今宮「こゝにも心知らひたる人もなければ、御口入れ給へとこそ(四)思へ」すけ、「時々かよひて參り來む。(五)さばかりある御心に、御方いとよく勞はらせ給へばならむ、と思さむいと恥かしく侍り」北の方、今宮「げに然ぞあらむ」など宣ふ。大殿の北の方、大宮「この兒(六)のいかゞある、いぶかしさに、先つ頃おとゞの内裏に物し給ひしころ、見に物したりしかど、更に見せ給はず。何しかは、(七)かたはやつきたる」すけ「あなまが〱し。たゞ父お

〔語釋〕
(一)方々へ遣はす也
(五)私が此方にのみ長居するは此方にて大事にさるゝ故ならんと仲忠に思はるゝが恥かし
(六)犬宮
(七)片輪な處でもあるか

〔考異〕
(二)すみ物も―すみ物に
(三)日頃は―「は」ナシ
(四)こそ思へ―こそは思へ

(語釋)
(一)優雅が言ひ出したれば也
(二)「わ」は「につ」の誤にて「奉り侍らむにつきても」なるべし
(三)假令退出するにしても
(五)藤壺の方の御用の間もかくまで
(一〇)以下これこその心
(一一)「つて」は「御手」なるべし

(考異)
(四)不益もや—不用にもや—ふえうにや
(六)志せし—志の
(七)えも—「も」ナシ
(八)給へる—ナシ
(九)つくぐ〜—つちくく

將、仲忠「他人の知るべき事ならばこそ。然せむとあれば(一)」「いとよく侍るなり」と人々あつまりて悦び給ひて、涼「車奉り侍らむ。(二)わきても、藤壺の明日まかでさせむとあめれば、それが入るべき樣になむ」大將、仲忠「それはまかり出で給はじ。(三)然るものなりとも、曉がたにぞ辛うじて。それも不益もや(四)こゝには無き。晝つ方に奉れて、その(五)御用にもあたりなむ」「いとよかなり」とこれかれも宣ふ程に、紀伊守、客人の上達部にと志(六)せしもののあれど、(七)えも出だしやらで皆歸り給ひぬ。これこそ、かのかづけ給へる(八)物を持ちて思ふやう、これはかり賜はむとにやあらむとて、(九)つくぐ〜見るに、腰の方に文結ひ付けられたり。見れば、

仲忠 人しれずわたりそめにし名取川なほ見まほしやつけよ何處と

内裏わたりこそ忘れがたけれ。これは寒げなる居ずまひなり。

とあるを見てこの文をいと嬉しと思ふ。(一〇)かくのよしろつて(一一)もちたる人も無きものを、内裏わたりの人、いかでか見むとこそすれ、これ一行にても持ちたる人は心

〔語釋〕
(四)「賜はらむ」歟
(五)兼雅

〔考異〕
(一)いみじき—みじかき
(二)見せざらむ—みをさらむ
(三)など—と
(六)立ちたるか—立ちたる御事か

うて侍れ」とて多くつゝみて持ち給へり。仲忠「かれは心高き人ぞや。怪しうこそは。いみじき(一)契なれしたるものを」祐澄「如何なる御契をか」大將、「見せざらむと(二)こそは」いらへ、祐澄「羨ましくも侍る事かな」(三)など言ふほどに、曉になりぬ。土器たちかへり參る。内よりかづけ物、君たち取りつゞきて出で給へり。中納言取りつゞきかづけ給ふ。織物、あか色の唐衣、綾かいねりの綾、摺裳、三重がさねのはかま、兒の衣褌そへたり。上人には織物のほそなが、あはせのはかまなど樣樣なり。かゝる程に西の方、中納言の伯母君の御許より、織物のうちぎ一かさね、唐綾のかいねり、あはせのはかまなど、上達部殿上人などにも出だし給へり。立ち給はむとする程に、大將、仲忠「まことや、聞えむとしつる事は、明日御車賜(四)へけむ」中納言、涼「なにの御料にぞ」仲忠「女三の宮、三條に迎へ奉る料なり」人々いみじく悅びおどろき給ふ。涼「我が世に、痛はしくかたはらいたかりつる事の、目やすき事かな。是はいかでぞ。(五)殿の御心と思し立ちたる(六)か。御催しか」大

（語釋）
（一）「などとて」なるべし
（二）仲賴
（三）「得る」は「得給」なるべし
（四）「棄つる」の下「と」あるべし
（五）「中納言は醉ひにたるか」なるべし
（考異）
（六）ゐよりて—よすいて
（七）と口々—とて口々に
（八）碁に—擬に
（九）はたまろさりさくるを—まろさりきくるを

れば、別いても萬の事忘るゝにぞ」などて、（一）仲忠「内裏に、「御佛名過して參れ」と仰せられしを、え參り侍らぬかな。折あらば、その由、「いたはる所侍りてなむ、え參らざめる」と奏し給へ」とて、仲忠「水尾の（二）行人の、かやうの折をかしかりしはや」中納言、涼「この藤壺すこしの罪は得るらむやは。昔より、人侘びさせむとなり給へる御身かな。涼らは面やはある。（三）身を棄つる（四）棄てぬとにこそあめれ」大將、仲忠（五）「は醉ひにたるか。など斯くは言ふ」いらへ、涼「醉はぬ時も言ぐさなれば、みな人見馴れにたらむ。吾が君も、言賢しうや」大將、仲忠「そよ。さかしら言ふおろかにと言へばぞかし」平中納言、正明「とほくてる（六）よりて思ふぞよ」と言へば、「さてはえこそ」（七）と口々いふを、御同胞たち、内にも外にも、いと聞きにくしと思へり。宰相中將、祐澄「今夜は祐澄ははしたなき目をこそ見給へれ。碁に（八）負けせまりて、（九）はたまろさりさくるをとて碁代を借りつれば、のゝしりつるに、侘びにてなむ侍りつる。この碁代といふ物、すこし盗ませて侍ればこそ、いと多く斯

知らぬ人なればこそ。今よりだに知る人にを」とてすべし(一)取らせて、其方の御階よりおりて、みそかに出で給へば、中納言見つけて、南の階より、跣足にて下りおはして、追ひ付きて、涼「何ぞ君の、內に入りて、舍人の閨(二)の法師のやうにては逃げ給ふぞ」とて引きもて來て、涼「うとき所に知らぬ人のやうに。上臈もことにおはせず、大納言殿(三)こそ。それも疎からぬ御中なれば、起き臥し昔語も、ゆく先の契もせむとする(四)に、てうぶくまろが樣にては」大將、仲忠「をいたす心や有るとて。まことは、これこそに物は言はむとてまかり入りたりつれば、召し入れて懲ぜられつるに困じて、まかり逃げつるぞや」とて、これかれつくしとりやかへしまとに居竝み給へり。

(五)おとゞの上達部三所、大將、中納言殿と物語し給ふほどに、故侍從(六)の御弟の大夫(七)なりしは、內藏頭にて、藏人にぞものしたまふ。故侍從には容貌も心もまさりたる、類なき色好にぞありける。土器とりて出で給へり。大將、仲忠「此の君見奉

〔語釈〕

(一)もちひたる衣を與へて

(二)「山ぶしも野ぶしもかくて試みつ今は舍人が閨ぞゆかしき」

(三)藤大納言忠俊こそ上臈なれど

(五)正頼の子ども三人。

(六)仲澄。

(七)近澄。

〔考異〕

(四)するに—する所に。

（語釋）
（二）はかまの腰に。

（考異）
（一）かきつけつる—かきける

大將、ともかくも言はで、かき鳴らし給ひて、仲忠「これは、この名だたる物なりけりな」とて一日うなるども謠ひし歌を、いとおもしろき音にかい彈きて、仲忠「いづらや。この折にこそ、かの扇拍子は」とて少しかい彈きて立ち給へば、兵衞の君といふ人、路にふたがり居て、兵衞「かゝる所に入りおはしまして、まさに歸らせ給ひなむや」とてひき留むれば、仲忠「あな煩はしや。群猿の心地こそすれ」いらへ、兵衞「御舍人どもぞかし」大將、仲忠「うたてある隨身にこそは」と宣ふ程に、内より綾かいねりのいと黑らかなる一かさね、薄色の織物のほそなが一かさね、三重かさねのはかま一くだり、えも言はず淸らにてさし出で給へれば、中將の君といふ人、取りてかづけ奉りつ。大將、御たちの歌かきつけつる(一)硯のもとに立ち寄りて、筆をとりて、懷紙にかく書きて、腰に(二)結ひ付く、

仲忠「千歲經むよはひをこゝにいくかへりきてもこそみむ鶴の毛衣

かくて高欄のもとにこれこそのおしかゝりて居たる所に出で給ひて、仲忠「一日は

る程に、内より土器出ださせ給ふとて、

年を經てふたゝび(一)あらむかゝる日のかはらけ幾世君にさゝまし

とあれば大將、

仲忠 うまれいづる世々の土器まつ程にまた(二)一たびの兒を見せなむ

とて又、仲忠「御聲しつるはさののわたりにや(三)」とあれば、「酒飲まざらむ人咎めむとぞ」口々に宣ふほどに、南の方に、宮はたが言ふやう、宮はた「大將殿こそ(四)、この父君の物盗みし侍る。この御物みな取る」とのゝしれば大將、仲忠「盗する親ははやうこ(五)そ打てや」といらへ給へば、内より土器度々強ひ給ふ。

仲忠 盃のめぐりあひつゝ萬世をかぞへて君に幾世知らせむ

など(六)て内にさし入れ給ふ。内には君だち並み居て、と言ひかく言ひ、強ひらるれば、仲忠「いと煩はしき所にも」とて立ち給ひなむとすれば、式部卿の宮の御方、世に名だたる(七)琵琶、源中納言の持給へるを(八)、いさゝかかき鳴らしてさし出で給ふ。

〔語釋〕
(四)祗澄
(六)「などとて」なるべし

〔考異〕
(一)ふたゝび—ひとたび
(二)また—まづ
(三)しつるはさののわたりにや—しつかさののわたりつかさにや
(五)親ははやうこそ打てや—親とはよくぞうつや
(七)名だたる—名だかき
(八)いさゝか—ナシ

〔語釋〕
(二)正賴忠雅

〔考異〕
(一)いみじく―いといみじう
(三)しうへ―しう
(四)めるを―めるは
(五)參りにけむや―參りきなむや
(六)かの―ナシ

つ。こしたかつき四つ、口結ひたる壺四つ奉り給へり。それは御前の簀子に並めすゑたり。あけて見れば、鰹、壺燒の鮑、海松、甘海苔など見ゆ。

大將の君俄にさし出で給へり。人々おどろけば、仲忠「我と君とは、いみじく(一)契りたる中ぞ。かたみに内許さむとぞ言ひたる」とて入り給へば、母屋の御簾の前に、かたぐ\の御產養の物ども參りすゑたり。(二)大殿、左大臣、種松など奉りたる物どもなり。中に、種松が、二なし。母屋の御簾のうちにぞ、產屋裝束したるし(三)うへどもいと多く居たる。大將、仲忠「今は斯くおとなしくなり給ひて、子かき抱き給ふらむこそ。あな恥かしや」大殿の北の方、奥の方にて、大宮「そこは見ならひ給ふらむを」大將、仲忠「物恥すと聞かれためる(四)を、何かこのごろのなのらば、兵衞つかさよりは參りにけむや」(五)北の方、大宮「(六)かのしほちよりこそおひけれ」大將、仲忠「近き衞ならでは、などてかは。よき所に參り來けるかな」とて衝重なる菓物を見給へば、銀の皿の四すばかりなるに、それより高く盛りつゝあり。かゝ

（語釋）
（三）藁苞などにて魚を卷きたるもの

（考異）
（一）火を—「を」ナシ
（二）紀伊守—種松
（四）荒卷一つさけとを一枝につけたり—荒卷をさゝけを一枝につけたり
（五）雉子十捧二つを一枝につけたり—雉子と鯉十捧三つを一枝につけたり
（六）一捧に—一枝に

亂りてたはぶれ遊をし給ふ程に、夜半ばかりになりぬ。大將立ちて、東の簀子に立ちて、柱に倚り立ちて見給へば、御簾を二尺ばかり捲きあげて、おとな四十人ばかり、赤色、青色の唐衣、綾の摺裳、さまぐ\かさね著て、竝み居て、今宵の歌、詠み書き、あるはとありかゝりと言ひあへり。童十餘人ばかり、青色の五重がさね、綾のうへのはかま、綾かいねりの袙、三重がさねのはかま、前ごとに白き錢をおきて賜びつ。簀子には間ごとに燈籠かけたり。蘇枋の大いなる櫃に、銀の箸そへて、火を(一)おこしつゝ、所々にすゑたり。東の渡殿には、すみ物など、棚にかきすゑたり。

しばしあれば、紀伊守(二)、國のつかさたちのらうどもひき率て物奉る。荒卷(三)(四)一つ、さけとを一枝につけたり。鯉十捧二つを一枝につけたり。雉子(五)十捧、二つを一枝につけたり。鳩一捧、二つを一捧(六)にしたり。銀の餌袋二つ、蜜と千歳汁と入れたり。東の渡殿に、持てつらねて竝み立てり。又紀伊守の北の方の御もとより衡重三

〔語釋〕
(二)「人いと」は「人々」歟

〔考異〕
(一)御返り—御返事…
(三)君の—中納言君の

あり。
正頼まうで來むずるを、みだり脚の氣あがりて、東西知らずなむ。そこに男ども侍らむ。御身のかはりには雜役もせさせ給へ。
とあり。御返り、(一)
凉かしこまりて承りぬ。渡りおはしまさねば、人いとさう〴〵しげに。(二)
など聞え給ふ。色紙をひき違へつゝ、碁代おほく包みて、御前ごとに參れり。大將、仲忠「君の(三)財は、みな今宵うち取りてむ」とて碁うち給へば、中納言、凉「まけ給ひぬ」とて打ち給はず居給へば、むすび袋に入れて出だしたり。一度にいと多くおし立てて打ち入れつ。大將餌袋に一餌袋おきつゝみて、二包持給へり。負けたる人、集まりて乞へば、仲忠「またこそ、負けたらむ時つかはめ」とて取らせず。これらは黄金の錢なり。
かくて御酒度々になりぬ。ことに高き人々おはせねば、ある限の君たちは、脚を

や。棄ててまし」大將、仲忠「あはれ吹上にて、我らがあやしき事を、せぬわざわざをせしやは。我らはかく上達部のはじめにて行り、かの少將(一)もかくてあらば、いま頭などにもなりなむ。そのかみ上臈にもあり、御覺もありし人の、哀にて山に籠(二)られたる。久しくえこそ訪らはね。訪らひ給ふや」中納言、涼「涼は、時々とぶらひ侍り。さいつ頃、綿の衣ども縫はせて、かいさう(三)餅など調じて(四)おくり給へりき」大將、仲忠「年かへりて、花の(五)盛にいざ給へ。頭の(六)中將などして、文など作らむ。昔の古き所うしなはぬこそ、生きたる効はあれ。殿上の今はいとさうざうしきに、御遊(七)の折などいとさうざうしや。世の中のはかなきに、今は思ふやうは、人の聞かまほしく(八)し給ふ物の音を、手を惜みて、今日も死なば、何のかひかは。萬のするわざ、年老いぬれば、みな劣り忘れなむ。おり立ちてあそびて、帝にも親にも、聞かせ奉らむとす」中納言、涼「いといみじき事有るべき世の中にも有るかな。まろにも聞かせ給へ」大將、仲忠「君にもせよかし」といふ程に御消息大殿(九)より

〔語釈〕
(一)仲賴
(三)未詳、饌あらんか
(九)正賴

〔考異〕
(二)籠られ—籠り
(四)など調じて—などして
(五)花の—「の」ナシ
(六)頭の—良の—つらずみの
(七)御遊—御みあそび
(八)はしく—はしう

〔語釋〕
(二)生れ落つると早速
(三)鞍歟
(四)誤あるべし

〔考異〕
(一)まろら—「ら」ナシ
(五)まこと…きや—まことおややういはしてきや—まことやとやいはしてきや

大將、仲忠「いふかひなき事する君かな。まろら(一)が子は、すなはち(二)より懐にこそ入れ居たれ」中納言、涼「それ女ならば。我等が子は親に優るなし。男は、我に劣らむには何にかはせむ。女ならば、琴をも習はし、をかしき物をも取らせて、花やかなる交らひもやするとこそ思はめ。まろが許に、女のくら(三)こそ侍れ」大將、仲忠「賜へ。それ益無かなり。まろが子に取らせむ」いらへ、涼「まろが子の妻になし給へ。さながら取らせむ」大將、仲忠「いとまが〳〵しき事するうち(四)出でなむ。さても我等ぞ童の心地しつるに、皆子を設けつるよ。(五)まことや用意はしてきや」いらへ、涼「晦の夜こそは。まことは方々ものし給へば、内へも入らず」大將、仲忠「源氏といふ所、痴れたる事する。我は、人の御親とも知らず、おはするに、たゞ入りに入り臥しにき」中納言、涼「帝の御女えたれば、誰かは御前には入り臥すらむ。何かは、さは祓へられて、鬼も神も、急ぎては逐ひやるべき」大將、仲忠「我をのこは、實法にはあらぬものぞ」いらへ、涼「妻を思はぬか。思はざらむ時、今まであらむ

（一）「これこそ」は童の名

（三）「などとて」なるべし

〔考異〕
（二）まかりし時扇を鳴らして—まかりしかば扇をたゝきて
（四）し給はず—せず
（五）琴は—「は」ナシ
（六）有りける—ある

らか、中將なりし時、灌佛の童に出だされたりしは」いらへ、涼「それぞかし。これこそ（一）とぞ言ひし」大將、仲忠「われらが、一日こゝにまかりし時、扇を鳴らして（二）「夕さり來」といひしかば、いと馴れたりしと見しは、然なりけり」いらへ、涼「童は、藤壺のあこきこそあれ。外にはたゞ今なし。あこきは、兵衞の君の弟にや」仲忠「あこきは、木工の君の弟や。さいつ頃内裏に侍りしにも、あこきをぞ語らひて侍りし」などとて（三）遊もし給はず（四）。

大將、仲忠「などて君は、琴は（五）彈き給はで、人をば呼びもて來て、すゞろ物語の役は」いらへ、涼「年頃思ひつる事を言はむ人もなかりつる。今日今宵思ひ出づるまゝに聞ゆるぞかし。琴は聞く人もあらじ」仲忠「くち惜しくとも、彈きにこそ彈き給はめ。聞きには聞くを」中納言、涼「さや。其處のやうに人に知らるばかりはいかでか。さて書などをこそ、自ら習はゞや。よろづの遊はえ學ばじ」大將、仲忠「子ばかりかなしき物やは有りける（六）。君は思ひ給ふや」いらへ、涼「いまだ穢ければ見ず」

されば、御(一)心地にこそ飽かず思されけめ、人は理とぞ思ふや。さてもかの君(二)は、容貌によりてこそ、誰も〳〵思ひしか。(三)この君も、おとり給はざなるは、小くより大殿も宮も思ほしかしづきたりけるを、かゝる(四)事のありければ、いとほしがりてこそはありけれ。同じ人の御子の、彼は先づ生ひ出で、これは後に生ひ出で給へるにこそあれ。かたちは劣り給はざなるを、何か思す」中納言、涼「然だにあればこそ斯くても侍れ。今は何方かまからむ。天下にいふとも、(五)かの君の御樣(六)なる人は有りなむや。容貌のみやは。萬の事をこそは(七)(八)さだきくは然もや」大將、仲忠「さても有る樣を宣へ」涼「かの君の御樣は、まろぞよく見取りたるかな。髪うるはしく、色白く、目鼻こそは付きためれ」大將、仲忠「然のみやは。さて心は無しや」(九)いらへ涼「それは知らず」大將、仲忠「いかでか今宵はある」とてわらひ給ふ。仲忠「まことに、こゝに見しやうなる童のありしは、誰ぞ(一〇)」中納言、涼「いさ數多あれば知らず。いづれそが中に、承香殿の女御の御許なりしこそあれ」大將、仲忠「もし、このわれ(一一)

〔語釋〕
(一)涼は今宮に不足なりしならんが他人は涼の今宮の聟になりしを道理と思へり
(二)あて宮
(三)今宮
(五)あて宮
(七)評判を聞くの意歟
(一一)「わらはか」なるべし

〔考異〕
(四)かゝる—かゝりける
(六)御樣—「御」ナシ
(八)さだきくは然もや—さたききはさりや
(九)いらへ—いさや
(一〇)誰ぞ—誰にか

り給ひし時、思ひしやうは、如何樣にせむ、法師にやなりなまし、死にやしなまし、滋野の師のやうに訴をや申さまし、(一)となむ思ひさわぎしが、(二)又とりかへし思ひし樣は、いづれも物狂ほし、本意をこそ遂げめ、(三)と思ひて、年頃つれなくまかりありきしに、(四)かゝる事聞え(五)しかば、いと妬く、何でふこともさ(六)ふらはむ、(七)憎くば一(八)夜まからむ、らうたくば二(九)夜はまからむ、我をばたゞなる田舍人と思ひて、かくし給ふ、となむ思ひし。さる程にかゝる事有りしかば、思ふごと二夜はまかりにき。内裏に召しゝ夜は、更に參らじ、やがて歇みなむと思ひて、更くる夜までは侍りしかど、然せむ事のいと哀にうたてかりしかばなむ、え侍らで參りにし。さてだに侍りつきにしかば、斯く今まで、今宵も此處にて君だちに對面する。京人の勞あるなりせば、(一〇)かくては侍らましや」大將、仲忠、それは仰せられたることなれど、其處によりてこそ、(一一)おとゞはいたく思し煩らひけれ。(一二)宮(一三)もたび／＼仰せらるゝめりしかば、かゝる宣旨ありと申し給ふめりしかど、強て召し取りてこそ。

（語釋）

(四)今宮と婚せしむべき由

(七)婚姻して見て相手の今宮だに醜き女ならば一夜て御見棄るべし

(一三)東宮よりも度々今宮を召されしかば

（考異）

(一)申さまし―せまし

(二)さわぎしが―「が」ナシ

(三)本意をこそ遂げめ―うこそ侍るめれ

(五)聞えし―きこえし

(六)さふらはむ―さふらはせむ

(八)一夜―一夜々々

(九)二夜―二夜々々

(一〇)かくては侍らましや―かうては侍らましやは

(一一)よりてこそおとゞはいたく―よりておとゞは心いたく

(一二)けれ―けり

藏開（下）

梗概

㊀涼の家の産養の饗き。㊁仲忠夫婦に内侍のすけの噂話。忠俊夫婦仲違の噂。㊂兼雅仲忠、女三宮以下を三條に迎ふ。㊃正賴あて宮の迎に參内す。東宮、あて宮の退出を許さず。㊄除日。忠澄、近澄等昇進。東宮、あて宮を抑留す。㊅仲忠、節料の米炭等を仲賴の妹に贈る。㊆兼雅、式部卿宮の中君に衣食の料を贈る。㊇仲忠、兼雅と物語。家交換の約束。宮あこ祐澄等の噂。㊈大宮、七の君の夫と仲違せるを戒む。㊉新年の拜賀。仲忠、梨壺を訪ふ。正賴以下位階昇進。⑪犬宮の百箇日の産養。仲忠、東宮の御子たちに玩物を奉る。⑫仲忠約束の家を兼雅に引渡す。⑬兼雅、中君を三條の東の家に迎ふ。中君を俊蔭女に托す。⑭兼雅、女三宮を訪ふ。⑮一條に殘れる兼雅の妾たちそれ〳〵分散す。⑯兼雅仲忠、一條の空屋敷を訪ふ。⑰梨壺退出。兼雅仲忠迎に參る。

かゝる程に平中納言（一）、藤大納言、藤宰相などおはしたり。物まゐり、御土器たびたびになりて、みな人あそび給ひ、詩ども講じのゝしる。かゝれど（二）右大將、源中納言は、あそびもし給はず、つとむかひて物語をし給ふ。中納言、（涼）「人の心ばかりくちをしき物こそなけれ。涼は此處にかくて侍らむと思はざりき。藤壺を宮に奉

㊀源の家の産養の饗き。

【語釋】

（一）正明、忠俊、清正

（二）仲忠、涼

らにして物し給ふ。中納言喜びて、下りて迎へて入り給ひぬ。前には、物の師、軽
うちて、かたにあり。近衛づかさの者ども、皆あり。尉四人、散楽四人、松明と
もしたり。

したり。褥、上席は例のごと。簀子にも斯くしたり。沈香の卓、銀の様器、黄金の土器、火桶には、沈を檜皮色に色どりて、内には黄金の塗物をしたり。箸は銀を丸くし色どれり。おこし炭は、烏の卵。かくて殿の君だち皆おはしつ。上達部は上に、君だちは簀子におはす。他人はまだおはせず。中納言の君、大將にかく聞え給ふ、

涼「松風をはらめる君もえてしがなうまれたる子のあえ物にせむ

いかでく。」

と聞え給へり。大將、仲忠「かく宣はぬ先にまうでむと思ひつるものを」とて、斯く返事に、

仲忠「秋風をあゆとやしれる君が子は千歳をまつの野分とぞきく

唯今參りつるものを、あえものと宣へば物憂くこそ。」

とて奉り給ひて、仲忠「彼處はさすがに人目多く、恥かしき所ぞ」とて直衣裝束淸

（考異）
（一）箸は…色どれり—はひは銀をうちは黒う色どれり
（二）おはしつ—おはして
（三）松風—秋風
（四）野分—わきて
（五）直衣—ナシ

〔語釋〕
（一）車が
（三）仲忠が己れがよい子にならんとて
（四）「紀伊守に」の「に」衍文なるべし
（五）「には」の「に」衍文なるべし

〔考異〕
（二）かレ―ナシ

㊅次の段の覺書

納言の御方にあまた侍り。すべて幾つばかりかは」おとゞ、兼雅「いさや十ばかりこそよからめ」（一）大將、仲忠「御前のことなど、かねて仰せられよかし。彼處にも宜はむ。御座所しつらはせ給ふこと行はせ給へ」おとゞ、兼雅「（二）調度など、淸らなりし所を、よきも無かめりや」と宣ふ。大將歸り給ひぬ。おとゞ、兼雅「なかしき事かな。己（三）宿德に言はれむとて、漫なる其處の御敵ひき出でむと言ふかな。さ言ふ樣こそあらめと思へば、否とも言はぬぞかし」と宣へど、下心には、惡しとも思さゞりけり。

畫詞　こゝは三條殿。

かくて源中納言殿の産屋の、七日の夜になりぬれば、（四）紀伊守に饗應の事どもを、男がた、女がた、御座所しつらふこと仕うまつる。御簾には（五）、淺黃にして、緣の綺を端にはさしたり。南の廂に、めぐりて懸けたる壁代には、白き綾を擣ち瑩じたり。疊には唐の綿をこもに、紫の裏付けて、唐の錦の端さし、白きあやを席に

かく宣ふとも、其處は早う立ち給ひね。な聞き給ひそ」おとゞ、兼雅「男は、身を顧み人の思はむことを知りなば、良き妻は得てむや。文通はして聽されむ時と言はむには、何わざをかかせむ。隙を見てふと入りぬればこそ。まして彼處(一)の亂れてありかむは、(二)をう女しあらじかし。(三)此の宮と、源中納言の妻とは、早うこそ」など宣ふ。大將、仲忠「いと怪しきこと。さらば、彼の日御車どもなど設けさせてさふらはむ。絲毛なむ、彼の宮に内裏よりつくらせて奉り給へり(四)。まだ乘り給はざめれ(五)ば、(六)民部卿の御方になむ、新しき絲毛の車造りてあめるを(七)、先つ頃より、太政大(八)臣惱み給ふとて、彼の殿のうちはへて物せらるれば、御物忌などにあらばなむ、消息を物せむ」父おとゞ、兼雅「如何様にか煩らひ給ふらむ。とぶらひ奉るべくこそありけれ」大將、仲忠「(九)右大辨の昨日申されしは、「御表二度は奉れ給ひつる。(一〇)一日召(一一)ありしかば參りたりしに、作らせ給ひしは、病重くなりにたる氣色(一二)などの樣になむ作らせ給ふ」と申すは、重く煩らひ給ふにやあらむ。え彼處に侍らずば、源中

〔語釋〕
(一)仲忠が行を亂さば
(二)「いとふ女しあらむかし」なるべし、一本「あふしあらじかし」
(三)あて宮と今宮とは早速取るがよし
(四)「給へる」なるべし
(六)實正
(八)實正の父季明
(九)藤英
(一〇)辭表
(一一)季明より

〔考異〕
(五)ざめればーざめるを
(七)あめるをーあなるを

〔考異〕
(一二)氣色ーよし

〔語釋〕
(一)俊蔭女以外の女を捨てたるをいふ
(二)女三宮
(三)「よめる」は「まめに」の誤なるべし
(四)あて宮の許に
〔考異〕
(五)人若し―人も

しかけたる如くして、九尺ばかりあるを、繰り出で給へれば、一御座ひろごりていとめでたし。兼雅「この御後手のひろごりかゝるに見つきてこそは、我は聖にな(一)りにたれ。よき人を家に多くすゑ、つかふ人のよきを集めて、宮をば盗みもて來(二)て、さるものにてすゑ奉りて、人の妻などの許にも到らぬ隈なくありきて、皆悉まれてこそありしか。今樣の人は、怪しうよめるこそあれ、まろは、かしこき天が(三)下の帝の御女を持たりとも、其のおとうとの御たち、其のあたりの人の妻は、女御まで殘してましや。罪の淺きにやあらむ」と宣へば大將、仲忠「いとうたてある事。獨り侍りし時、いかでと思ひ給へし人をだに、よきをり侍りしかど、然もあらずなりにしものを」おとゞ、兼雅「それこそ、いと我が如くなけれ。今もなどか然せざらむ。まかで物せられむ時、空醉をして、唯入りに入るべきぞかし。(四)人若し騷が(五)ば、「いたく醉ひにけりや。此處は何所ぞ。中の大殿にはあらずや」と唯醉ひに醉ふばかりぞかし」北の方俊蔭女「いと惡しき事多くし給ひけるかな。若き人は、親

思へば、宿世心憂く、いかなる人くぼつきたる女子もたらむとぞ見ゆるや。又今(一)一つのくぼありて、蜂巣の如く産みひろぐめり。天の下の御子たちは、此のくぼどもに産みはてられ給ふめり。此の度も、男子をこそ産まめ。此の十二月に同じことの様なるわざしたんなる者は、女の童のかじけたるをこそ産まめ。幸のなき者は、如何はある」北の方(二)俊蔭女「などか外(三)のことは宣はぬ人の、まが〳〵しう斯く悪毒は吐き給ふ。昔思ひ出でて、心地のむづかしきか。(四)彼處を子にて持給へるは、などかはある。まだ腰かゞまり給はざめれば、(五)人と等しくなり給ふ世もありなむ。(六)女子たちしはづし給ふとも、男子の筋にも如何様(七)なる事もありなむはや。いとうたて、世の人の思ひ付きたる(八)ものを(九)も、怪しからぬものこそたはやすく言ふなれ。さやうなる人は、ことにしも言はざなるものを、立ちかへり言へば(一〇)おいらかにも宣ふる(一一)かな」おとゞ、兼雅「さて、其處はつき給へりや(一二)」とてひきまさぐり給へば、俊蔭女「うたて戯れ給へる」とてうちむつかりて、後向き給へる御髪の、瑩

〔語釈〕
(一)あて宮をいふなるべし
(二)梨壺
(四)仲忠を子として持てるは幸福ならずや
(五)官位をいふ
(八)人の尊敬するものをけなすはよからぬ人のする事なり
(一二)くぼつき給へりやの意

〔考異〕
(三)外のことは…吐き給ふ—物も宣はてあち〳〵しうかくあくごくをば宣ふ
(六)女子—「子」ナシ
(七)如何様なる事も—いづるやうも
(九)ものをも—「を」ナシ
(一〇)言へば—いとへば
(一一)宣ふる—宣ふな

（語釋）
（一）己が官位の昇らぬをかこつ也
（二）我身の衰へたるを形容していふ
（三）正頼
（四）此度の除目も

供に小舍人にてありしを召して、仲忠「これ其處々々に」と宣ひて、仲忠「さし置きてまうで來ね」とて賜ふ。

かくて、仲忠「除目侍かなるを、參らせ給はむとやする」おとゞ、兼雅「何しにかは參らむ。出でてありけば、其處にも面伏にて、人の人とも見たらねば、生きたるか（一）ひも無きに」大將、仲忠「闕の侍らざらむには、いかでかは」父おとゞ、兼雅「などかは其の闕の無からむ。此の頃こそ、（二）かく金釘の樣に固まりためれ、其處を御子にして、中納言になさるとて擧げられし闕には、親とてある己をこそなされましか。仁壽殿を思して、其の親をひき越してなされたるは、然るべきことかは。（四）自ら右のおとゞ參り給ひて、（三）心に任せてし給ひてむ。殊なること無くば交ろひせじとて、新嘗會にも參らじとせしかど、久しう參らで、帝の御顏もゆかしうもぞあるとて、參りて見れば、右のおとゞ我はと思ひ顏にて、孫の御子たちは、玉をすぐりて並び居、子どもは雲ゐのごとつきて、土をくひて跪きあへり。いでや、御子たちを

侍りしものを、御覽ぜさせぬ樣にこそ」おとゞ、兼雅「納殿にあらむ、大柑子の中に、大きに疵なからむ、三つ取りて持て來」とて、臍(一)のもとを、壺に雕りおはす。兼雅「何を入れむ」と宣へば、小やかなるかつらの箱を取り出でて、北の方奉り給へり。開けて見給へば金あり。それを移しつゝ入れ給ふ。はたまで(二)一壺入れて、蓋合せて、黄ばみたる薄樣一かさねに包みたり。一つには、かう書きて入れ給ふ、

兼雅「契りおきし昔の人もわすれはて(三)君をば訪はぬ我かあらぬか

と書きて入れたり。栗の所には、

兼雅「宿をいでてあとも枕も定めねば文やるかたもそこはかとなし

今一つには、

兼雅「出で入りし宿をかたみと眺めつゝすむを哀ときかぬ日ぞなき

とて入れつゝ、印つけて、兼雅「これは南のおとゞに、これは、それは」と言ひつつ、兼雅「さらばこれ物せさせ給へ」とて奉り給へば大將、上に使ひ給ふ童の、御

〔語釋〕
(一)柑子のなり口を
(二)口もとまで

〔異考〕
(三)わすれはてーわすれずて

宮の中の君なり。(一)父宮の召して宣ひし樣、「我なむ世に久しくあるまじき。此處にらうたしと思ふものなむある。(二)あだ〳〵しくは言はるれど、然りともと思ひてなむ」とて賜びたりし人なり。十三にて見そめて幾許もなくて、宮かくれ給ひにき。その後、程もなくてぞ、(三)此處には來にしかば、げに如何に(四)思ひ給ふらむ。栗出だしけむは、仲頼の少將の妹なり。いとよく、人の妻にてもありぬべかりし人ぞ。遊は少將にも優りたり。すべてせぬ業なく、勞ありし人なり。容貌も氣近く、愛敬づきてぞありし。橘の所は、千蔭のおとゞの御妹(五)の御子腹なり。梅壺の御息所とぞ言ひし。いみじき色好なりしを、語らひ取りしなり。それが年は、我にこよなく兄にぞおはせし。其の西わたりには、もとの(六)更衣のいますがり。その更衣は、宰相中將の(七)御娘なりしが、琵琶なむ上手におはせし。それに兒の一人出でまうでたりしが、如何に生ひ出でしにやあらむ。又もありや。算へ盡すべくもあらず。この中の君の返り事はせさせむ」と宣へば、仲忠「皆こそせさせ給はめ。取り

〔語釋〕
(一)以下中の君との關係を語る也
(三)俊蔭女の方にのみ居る樣になりしかば

〔考異〕
(二)あだ〳〵しくは言はるれど—あさ〳〵しくは言はるなれど
(四)思ひ給ふらむ—思ふらむ
(五)の御子…語らひ取り—ナシ
(六)更衣のいますがり—更衣などいますめり
(七)御娘…生ひ出でしにやあらむ—ひめみこの腹なり梅壺の御息所といひしいみじかりし色好なりしを語らひたりしぞ

〔語釋〕
（二）かく多くの親族たちを措きて今まで我一人を守り居けるよと

〔考異〕
（一）怪しく——怪しう

る」とて取り出でて奉り給へば、兼雅「怪しくもありけるかな」とて栗を見給へば、中を割りて、實を取りて、檜皮色の色紙に、（一）かく書きて入れたり、

ゆくとても跡をとゞめし路なれどふみすぐる世を見るが悲しさ

とあり。物も宜はで、橘を見給へば、それも實を取りて、黄ばみたる色紙に、書きて入れたり。

いにしへの忘れがたさに住みなれし宿をばえこそ離れざりけれ

柑子を見給へば、赤ばみたる色紙に、書きて入れたり、

結びおきて我がたらちねは別れにきいかにせよとて忘れ果てしぞ

とあるを見給ひて、涙雨の如くに降らし給ふ。北の方、あはれ樣々に、かく憎からず思ひける人々をおきて、（二）斯くありける、と見給ふも悲しければ、うち泣き給ふ。大將の君益なき物ども、取り出でてけるかな、はしたなし、と思ひ給へり。おとゞ久しく思ひみそみ給ひて、兼雅「此の柑子投げ出だしつらむ所は、故式部卿の

〔語釋〕
(一)「浮れ人こそ」歟、一本「うかれそと」
五 復命。菓實の中の文。兼雅の述懷。女三宮等を迎ふべき準備。

〔考異〕
(二)しるし――しるく
(三)宣ひつる――宣へる
(四)はやさて――をとて
(五)し侍りつ――して侍りつ
(六)一子――ひとり子

は」と言ふ。大將、仲忠「うかれうど(一)こそしるし(二)なれ」とて出で給ひぬ。

畫詞 これは一條殿。

かくて三條殿に歸り給ひて、宮の御文奉りて、宣ひつる(三)様かう〳〵など申し給へば、おとゞ、兼雅「哀にも宣ふなるかな。昔の様にて侍らむだに、御面伏にこそあれ。今はまして何のかひも有らじはや(四)。さて宮は毀れなどやしたる。如何様にか住み給へる」仲忠「奥は見給はず。あらはなる限は、異なることも侍らず。政所の家司の男どもなど、あまた侍り。下人などあまた侍りて、御倉開けて、物を納めおろしなどし侍りつ。おはします所も、目やすくしつらはれて、童、おとな數多侍りつ(五)」父おとゞ、兼雅「彼は財の王ぞや。そのかみ一子(六)にて、その祖父の財を、さながら領じたり。よき庄いと多く持たまへる人ぞ。よき調度、こまかなる寶物は、彼處にこそあらめ」と宣ふ。大將、仲忠「不便なる所にまうでて、かしこく打たれ侍りつるかな。かゝる礫どもして、方々にぞ打たせ給へるに、困じてなむ侍

〔語釋〕
(一)古今の「見る人もなくてちりにし奥山の紅葉は夜の錦なりけり」を言ひ響へたる歟

〔考異〕
(二)待ち取るこそ—待ち取るなるこそ

よきも悪しきも、さ思ひ出でらるゝ者あらじや」大將、仲忠「今はこゝにも忘れ聞えじ」とて土器さし給ふ。宮、女三「いと珍らしく見え給へる」とて御几帳のもとに寄り給ひて、土器度々すゝめ給ふ。大將、仲忠「御返なくば、えまかり歸らじ。此處にこそさふらふべかめれ」と聞え給へば、女三「あな煩はし」とて、

女三珍らしきは、現心にもあらじと思へど、うたてある御使にてなむ。いでや、

恨みけむほどは知られで唐衣袖ぬれわたる年ぞ經にける

と書きて、折りて插されたりし紅葉の、枯れ困じたるに付けて出だされたり。大將、仲忠「なくてちりにし故郷の」(一)と言ひて立ち給へば、南のおとゞより、柑子を一つ投げて、大將を打つ人あり。仲忠「待ち取るこそ」(二)とて取りつ。さて出で給へば、東の一二の對より、橘と大いなる栗と投げ出だしたり。大將取り給へば、一の對より、年三十ばかりなる人の、いとあてやかに愛敬づきたる聲にて、「誰にか

給ひて、女三「何かは、心強う聞えても、何のたけきことかは。思ひ出でたりとだに、院に聞召さるばかりにこそ。惡しくもあれ善くもあれ、然もと人に見え聞えにし人忘られたるばかりは、いみじき事なむなかりける。(一)賢き人のもてたらひたる(二)今あらむをば、何にかはと思へど、唯言ひなされむをこそは」と宣へば大將、仲忠「いとも嬉しく、參り來たる効有りて、かく仰せらるゝ事。今二十五日ばかりに御迎に參り來む」と聞え給ひて、(三)御返申し給へば、女三「何か、斯うなむ物し給ひつると宣へ」とあれば、仲忠「いかでか、空參したりともこそ。唯しるしばかりにても」など聞え給ふ程に、御供の人々は、宮の家司ども、政所に呼び入れて、みな樣々に酒飲ませなどす。(四)大將には、よき菓物、乾物などいと(五)淸らにして、御湯漬、御酒などまゐる。まかなひには、(六)おとゞの召使ひ給ひし人の、よき若人なりし、なほ衰へやらぬ、(七)右近と言ふなむ、出で來て仕うまつりける。大將、仲忠「これや、彼處に忘れず、あり難き人と物し給ふならむ」宮、女三「いでや、此處には、

〔語釋〕
(一)俊蔭女の如き申分なき北の方の現在居る處へ行くてもなしとは思へども兎にも角にも御詞に從ふべしといふ意歟
(三)御返事を乞へば
(六)乘雅

〔考異〕
(二)今あらむ—とあらむ
(四)飲ませなどす—飲ませす
(五)いと—折敷
(七)やらぬ—はてぬ—がたき

（語釋）
（一）爾雅の傳言をいふ也
（四）春湖曰、事めかしきの意也

（考異）
（二）ばかりに―ばかりと
（三）給へる―給ひつる
（五）こそ―ナシ

く侍りつゝなむ。今日は「此の御文、(一)人して奉れば、おほめかせもぞし給ふ。しるく御覧ずばかりに、(二)持たせて参れ」と侍りつればなむ」とて参らせ給ふ。宮、女三「げにかゝる御使なくば、え思ひ出づまじくこそは」とて見給ひて、女三「あな怪しや。まことにて書き給へ(三)るにやあらむ」と宣へば大將、仲忠「いとゆゝしき事になむ。なでふ空心にてかは。「人々あまた物し給ふを、昔の事はたえ侍らじ。さし別きては心よからぬ事こそ侍れ。なほ渡りおはしませ」となむ。彼處には人も侍らず、唯仲忠等が母一人、(四)めかいたる女にて、宿守には」と聞え給ふ。女三「其のめかいたらむ一所こそは、さわやかならむ數多よりも、いと恥かしう(五)こそは。さても、時々見奉りし時も、ひがことせられしを、如何なる事にかなむ」大將、仲忠「さも侍らず。年頃此の御前をば、常に歎き聞えさせ給ふ。それを思ほしおこして、聞えさせ給ふなり」宮、女三「世の中は斯くてありぬべし。唯院の「面伏なるものは、死なぬこそ心憂けれ」と宣はすなるを聞くこそいみじう悲しうは」とて泣き

てまかでにけり。かゝるに大將、東の二の對、南のおとゞの前より、丹後掾に御文持たせて、宮の御方に參り給ふほどに、方々立ち並みて見つゝ、人々の言ふ樣、「わが君を佗びさせ奉る盜人(一)の族は、あたの戲に戲れて、とはうの誦經文(二)捧げ持ちて、惑ひ來るぞ」と集りて、或は手をすりて立ち居拜む。或は萬のまがしき事言はぬなし。主(三)どもは、「あなかまや。かくめでたき子持たらむ人(四)をば、いかゞは疎(五)にはし給はむ。すべて、宿世の盡きたればにこそあらめ」とて打泣き給ふもあり、見めで給ふもあり。かく言ひ騷ぐも知らで、いと靜かに歩みて、御供に人いと多くて、寢殿の御階のもとに立ち給へれば、よき童四人ばかり、大人十人ばかりありて、「右大將の君こそおはしたれ」と宮に聞ゆれば、女三「あな覺えず。なでふ路惑ひぞ」と言はせ給へれば、仲忠「大殿の御使にて、とり申すべきこと侍りて」と申させ給へば、南の廂に御座褥(六)など敷きて、よき童出で來て、「此方に入らせ給へ」とあれば、入り給ひぬ。大將、仲忠「屢々と思ひ給ふれど、騷がし

〔語釋〕
（一）盜人とは俊蔭女をいふ
（二）未詳
（三）兼雅の妾たち也
（四）俊蔭女
（五）兼雅が
〔考異〕
（六）御座褥など敷きて―御座などまゐりて

〔語釋〕
（三）「右近の乳母」なるべし
（四）女三宮の邸
（五）女三宮
（七）女三宮、梨壺の母
（八）他の繁雅の妾
圖仲忠、女三宮の邸へ父の使にゆく。女官に菓實を投げつけらる。

〔考異〕
（一）くひーくゐ
（二）今日はー「は」ナシ
（六）他對…住みけるー他對どもにすみしは一つ腹にうめりし子ときめきたりし人對一つを二人にてすむ
（九）年頃ー日ごろの

くひ（一）こそまうくと言ふなれ。かねてこそはとなむ。名取川とも聞えさすめり。

とあり。御使どもには樣々の祿あり。かくて大殿籠りて、仲忠（二）「今日は恥かしき所にまからむずる」とて、よき直衣裝束取り出でて、御薫物どもせさせ給ふ。宮たちの走り給へるを見給ひて、「丹後の乳母（三）のむつかるめりし御髮は、損なはれざめるは、怪しくもかこちしかな」など宣ふ。

一條殿は二町なり。御門は二つ立てり。おとゞ、宮、それに隨ひて、西東の對、渡殿（四）、皆あり。寢殿は、東の對かけて、宮（五）すみ給ふ。他對（六）どもに住めるは、御子一人産めると、いたく時めかし給へる人々、對一つづつにぞ住みける。池面白く、木立興あり。然は言へやう〳〵毀れもて行く。これを梨壺の君に、父おとゞの奉り給ひけるなれば、宮（七）ぞ主にて住み給ふ。（八）こと人々は、上達部、御子たちの御女なれど、親も物し給はず、唯おとゞにかゝり給へりしかば、今斯かりとて、年頃（九）家なむ無ければ、え散れ給はぬなりけり。召人めきたりし人々あるは、次々に隨ひ

（語釋）

（二）彼遊女は萬更知らぬ中でもなければ

（考異）

（一）恥かしさに—恥かしきに

（三）思ひ—思う

（四）いとほしく—いとをかしく

（五）思ひ—思う

（六）せさせ—參り

せらるゝ所なれば、憎しと見給はむ所もあらむが恥かしさに（一）、さし別きてもえ聞えず。御覽ぜざりし（二）人にも侍らぬを、此のいとむつかしげなる所に渡りおはしましなむや。さ侍りぬべくば、其の日ばかり御迎に參り來む。さても怪しくこそ。

餘所ながらおほくの年も隔てけりころもうらみし時はいつぞも

それをさへなむ。ことゞには、此の朝臣聞えさせ承れよとなむ。

などあり。大將、仲忠「いとよく侍るめり」とておし卷きて取りて、仲忠「今日はえ參り侍らぬ。明日參らむ。此の事、とかく思ひ（三）給ふるも、いとほしく（四）思ひ（五）給ふる事の侍りしかな」とて日暮れぬれば、彼の源中納言殿に、家司の中に心有るを召して、奉れ給ふ。御消息あれば、彼の暮にと宣ひし人にとてなと申せよ、とぞ有りける。大將歸り給ひぬ。

其の夜は梳髮せさせ湯殿などせさせ（六）給ふ程に、中納言殿の御消息聞ゆ、

處には、年頃かくて物し給ふに御志は見つるを、(一)今は忘れ給ふとも、思ふべくもあらず。まして其處にかく聞え給はむことは、よき事になむ」と聞え給へばおとゞ、兼雅「此處には知らず。二所の御中に、宜しかるべく定め給へ」大將、仲忠「其(二)の日ばかり御迎せむと、(三)御文書きて賜へ。(四)持て參りて、委しく聞えむ」おとゞ、兼雅「なほまうでて申されよかし。此處には何事をかは」大將、仲忠「いと便なきこと。いかでか御文なくては」とて硯、紙など、取りまかなひて(五)奉り給へば、兼雅「何事をか書くべき」とて、久しく思ひつゝ書き給ふ。兼雅「いさや、斯樣にぞ。物覺えずや」とて見せ給へば(六)(七)取りて見給ふ。

兼雅 年頃は聞えさする事も侍らず。いかでなりにけるにかと思ひ給ふる、怪しくなむ。如何なるにか侍りつらむ、昔の樣にもあらず、まかり歩きもせず、物憂くなりにたるは、無得になりもて侍るにや侍りつらむ。老いほれたるとだに思ひ定めぬ。されば其のわたりにもえ參らず。そが中にも、これかれ物

〔語釋〕
(一)假令我が兼雅に棄てられても
(二)何時何日に引取るべしと
(六)仲忠に

〔考異〕
(三)御文—御文を
(四)持て—もちて
(五)まかなひて—まかなひつゝ
(七)見せ給へば取りて見給ふ—見せ給ふ見れば

〔語釋〕
(一)俊蔭女の住居としてあてがひたる處に
(三)其儘女三宮の物にして仕舞ひては惡からんが
(五)娶嫁をいふ

〔考異〕
(一)まさじものをおはしまさぬとき—まさずとき
(四)恨みては—かぎりては

き。げに院の御世、幾許もおはしまさじものを、おはしまさぬとき、さなど聞かせ奉り給へ。それは、彼處にまうでさせ給はむ、(一)何の著きことも侍らじ。此處は斯く廣く侍るめり。唯仲忠侍るべしとて、つくらせ給へる所におはしまさせ給へかし」兼雅「いかで、此處は此の御料に奉りたる所に、人の物し給はむこと、本意たがひたる樣に。年頃いみじう悲しかりし(二)志、又人なくて心安くてあらむをだにこそ」仲忠「それは、御心寄せさせ給はゞこそは。かく聞ゆるにつけて、などか、やがて奉り給はゞこそあらめ、廣き心に、時々かよはせ給はむに、何でふことか(三)あらむ。昔若くおはしましけむ世に、憚なかりけむことにつけて、仲忠等が物の心も知らぬを恨みては、(四)如何ばかりかは悲しび給ひし」と聞ゆるまゝに涙は雨の如くにこぼる。父おとゞ、母北の方もいみじう泣き給ふ。仲忠「況や、年頃まで物し給ひける人の、宮仕し給はむ(五)御女など持ち給ひて、今かくておはするは、何心か思すらむ。なほ誰々も、此の事許し給へ」と申し給ふ。北の方、俊蔭女「何か、此

忘れ奉るにてこそ。かくのゝしる世の中に、ともあれかくもあれ、然あんなるに、怪しく思ひの外なること」大將、仲忠「内裏にさふらひし頃、宮も上にかゝる御氣色御覽ぜむとにやありけむ、留め奉り給ひて、二日ばかりおはしますめりきかし。(一)ありしよりもいと警策になりまさり給ひにためり。國知り給ふべきことも近げになむ」おとゞ、兼雅「藤壺いみじき人なめりかし。唯今の后にこそは。坊がねを、一人にもあらず、二人まで、玉を磨きて持給へる。かう幸人を、然ともなき我(二)等まで、言ひ煩はしゝかな」大將、仲忠「またも梨壺の樣になむ。それは後よりと(三)なむ承る」父おとゞ、兼雅「あたら明王がねの、多くの人歎かせ給ふにぞあめる。人一人によりて、父母同胞と具して思ひ歎くは、幾許の人の歎きぞは。そが(四)中にも、院の御方いかに思すらむ」大將、仲忠「内裏にもいとかしこく歎かせ給ふ(五)めり。其の事によりては、おぢきなく、殿にも仲忠等も、いと苦しき仰せごとな(六)む。なほ彼の宮とぶらひ聞えさせ給へ。それによりても、いとほしく思されたり(七)

〔語釋〕
(一)朱雀が東宮を内裏に
(二)斯かる幸ある人をつまらぬ我等まで懸想せし事よ
(三)あて宮の懷胎せられし由
(四)あて宮一人の爲に
(五)女四宮
(六)「仲忠にも」歟
(七)嵯峨院の女三宮、兼雅の思ひもの、梨壺の母

（語釋）
（二）兼雅が東宮の御顏をだに見る事なきに懷胎する筈はなし
（三）東宮
（四）密夫などを設けたるか
（五）誤脫あるべし
（考異）
（一）ことなり―ことや

志あらむものを。なほ節會などにさして御覽ぜさせ給へ。此處には然らずとも」大將、仲忠「然らば、彼の侍るを調ぜさせて奉らむ、いとかしこき角どもなど侍りけりや。さる物どもを籠め置かれて、ほと〳〵怪しきことども」おとゞ、兼雅「更に言はぬことなり（一）」大將、仲忠「いと珍らしきことの侍るは、聞召したらむや」御いらへ、兼雅「何事にかあらむ」大將、仲忠「さだすぎたる事になむ。梨壺の御事なり」おとゞ、兼雅（二）「御顏をだに見奉らで、年頃になりぬるを、何でふさることとか」大將、「それが怪しさに、一日まかで侍りしまゝに、やがてまうでて侍りしに、問ひ聞えしかば、「何かは、良きこと聞きつきて」となむ宣ひし」父おとゞ大きに驚き給ひて、兼雅「何時からある事にかあらむ。宮（三）は知ろしめしてや（四）。もし異樣なるわざしたるか」大將、仲忠「いとまが〳〵しき事。如何は知ろしめさゞらむ。人よりは時々まうのぼり給ふなるものを。七月ばかりよりと聞き侍りし」父おとゞ、兼雅「いと興有ることかな。昔頼み有る程（五）にさかり有りて、今然あらましかば、猶

起きあがられ侍らざりつるを、御消息の侍りつればなむ。さるは御覧ぜさすべき物も侍り、聞えさすべき事も多く侍る」父おとゞ、兼雅「何書か仕うまつられつる」いらへ、仲忠「故治部卿の主の御集などの侍りけるを、何かは文書などをさへ祕し侍らむとて、御覧ぜむとありしかば、持て參りて侍りしを、「やがて仕うまつれ」と仰せられしかばなむ。さて、斯かる物をなむ賜ひて侍る」とて帶を見せ奉り給ふ。兼雅「これは、然聞く（一）御帶なり。いと忝く賜はせためるは、一口頭（二）中將の「世の人の言ふ樣なむ。帝のやんごとなくし給ふ物は、皆其處に賜はりぬ。御女の中にかなしくし給ふも、弄びもののいろまで（三）、これを（四）と思したるは皆なむ（五）、と言ふ」と有りしは、然も言ひつべき事にこそは（六）ありけれ」大將、仲忠「故右（七）のおとどの御帶となむ。これは御前（八）にさふらひ侍りなむ、よき御帶侍らざめるを。仲忠は、故治部卿の主の唐土（九）より持て渡り給へりける、未だ革もつけで石にて侍る、これも劣るまじう（一〇）侍るを、調ぜさせてさし侍らむ」父おとゞ、兼雅「何か、忝く御

〔語釋〕
（一）從來音に聞きし御帶なり
（二）祐澄
（五）皆仲忠に賜はると評判す
（七）橘千蔭
（八）父に奉るべし

〔考異〕
（三）いろまで—いつまで
（四）これを—ナシ
（六）こそは—「は」ナシ
（九）唐土—たう
（一〇）まじう—まじく

〔語釋〕
(一)「こそい」は「こそは」なるべし
(二)涼におくる料なり
㊂仲忠父と語る。梨壺懐胎の事を告ぐ。父の妻妾を一所に集めんことを乞ふ。涼に産養の物を贈る。
(五)沈金ぼりにしたる也
(七)靈雅

〔本異〕
(三)出だし—引出だし
(四)にも—「も」ナシ
(六)水を—水の
(八)見給ふ—見え給ふ

む、今日こそい(一)となむ思ふ。ものし給ひて見給へ。

とあり。おとゞ、仲忠「誠や然ることありかし。あな苦しや。いかでまうでむ」とて、仲忠「唯今参りて。さらなれば聞えさせぬ」とて奉り給ひぬ。仲忠「さてもあらじ。また外様へ」など聞えて出で給ひぬ。

三條殿にまうで給へれば、産(二)養のことどもいと清らにて、子持の前のものどもなど皆具して、おしこに出だ(三)したらむにも(四)もどかしからずせられたり。洲濱のわき、水の側に鶴立てり。其の鶴のもとに、葦手にて、黄金(五)の毛にて打ちたり、

こよひより流るゝ(六)水をおのが世にいくたび澄むと見まし鶴の子

とあり。萬の物具して、取り出でて見せ奉り給ひ、物などまゐる。父(七)おとゞいたう興じて見給ふ(八)。大將、仲忠「日頃内裏にさふらひ侍りて、夜晝御書仕うまつり侍りて、一日なむまかで侍りし。やがてさふらはむとせしかど、あくる日までさふらひて、みだり心地のいと惡しく侍りしかば、其のなごりにや侍らむ、昨日今日

（語釋）
（一）明日又御髪を洗ひ直さればならぬ
（二）誤あるべし、一本「よもこそは」とも
（四）物音をさする也
（五）誤あるべし、一本「なるらむ」を「なからむ」とも

（考異）
（三）晝ーナシ

か」いらへ、仲忠「上の御妹の君ならむやは。こと宮たちはいと小くこそおはしけめ」などとて大殿籠りぬれば、右近の乳母うちむつかる。右近「さればこそ聞えさせつれ。（一）明日も御ゆするは参りぬべかめり。さがなく御殿籠りぬれば、おほろげに参りにくき御髪を」と聞ゆれば女御の君、仁壽「おなかまや。夜晝御前に侍はれければ、打休まむとこそは。何かは、御髪のわたりも何も、人の見奉り給はむに、（二）よもこそともかくもし給はむ。更に」と宣ふ。又の日晝（三）になるまで出で給はず。御物参りて、御臺など鳴らせど（四）、聞き入れ給はず。し煩ひて、中務の君、「御臺参る」と聞ゆれば、仲忠「いと眠たく苦し。小さき盤に少し分けていませ」と宣へば、中の盤に御分け、別に少し分けて、しもの御あはせなど持て参れり。先づ宮に少し召させて、御おろし少し参りて、大殿籠りぬ。又の晝つ方まで出で給はず。

内侍のかんの殿より御文あり、

俊蔭女なとか久しく。かねて宣ひしことを、さらむ時と思ひまうけたる事（五）なるら

〔語釋〕
(三)抵抗
(四)祐澄
(五)仲澄

〔考異〕
(一)押し開けて—ひきあけて
(二)なるにきのけうきたる—なるきのけつきたる—なるきいけつきたる

屛風押し開けて見給へば、宮は濃きうちきの御衣に、あからかなるにきのけうきたる織物の細長引きかさね奉りて、白き御衣引きかけて、御髪は少し濕りて、四尺の御厨子より多く打ち延へて、瑩しかけたると見ゆ。小さき御臺して、御湯漬くだもの參りたり。大將、仲忠「あな見苦しの御すまひや。彼方にて乾し給へ。一人はいと侍りにくし」とてかき抱き下して、率て奉り給ひて、やがて御帳の中に入り臥し給ひぬ。仲忠「などか、御文奉れ給へど此處にても彼處にても御返は賜はらぬ」とて日頃の有りつる御物語きこえ給ふ。宮はたの言ひし事どもなど聞え給へば、女二「內裏にならひて、此處なる時も彼方に常にあめれば、見もすらむかし。顏も心もをかしきものと見つるを、憎くも物を見ける」大將、仲忠「さて父上は」宮、女二「それは然も見えぬものを」大將、仲忠「あなかま。御伯父たちは、皆然る心なきものなり。一人は徒らにもなされぬめりき。誰にかあらむ、さばかり物を思ふめりしはや」宮うち笑ひ給ひて、女二「怪しき濡衣なりや。異筋にこそ見ゆめりし

（語釋）
（三）今宮

（考異）
（一）賜ひつるなり―賜へるなり
（二）しくは―しうは―しうらい
（四）とて―と
（五）男子なり―をとこといふ

御書仕うまつりたがへて、上の笑はせ給ひしかば、かしこさに、誦せさせ給ひし句をなむ、わななく〳〵、物も覺えず誦じあげて侍りける。それに「祿何よからむ」など仰せられて賜（一）ひつるなり。（二）しくは、仕うまつりては、重き祿賜はるものなりけり」おとゞ、正頼「それを例にしたらむ人は、如何あるべからむ」と宣ふ。女御君、我が御前、宮たちの御前どもの御臺どもを參らせ給ふ。大將は、まだ物も參らざりけり。おとゞ取りはやし給ひて、御酒など少しまゐるほどに、源中納言の北（三）の方、子産み給ふとて、いたく煩らひ給ふとて（四）騒ぐ。おとゞ、正頼「内侍のすけ、彼處にものせよ。心知らひたる人なくて惡しからむ」と宣へば、「早く晝召ありつれば參り給ひぬ」と聞ゆ。おとゞ、正頼「立ちながら訪はむ」とておはしぬ。大將の君、訪はまほしう思へど、苦しうて物し給はず。かゝる程に産み給ひてけり。（五）男子なり。
女御の君、「御髪は乾給ひぬや。はやわたり給へ」とて奥へ入り給へば、大將、御

仕うまつりつるは、いとこそ難う侍りつれ。(一)然は侍れど、重物をこそ賜はりて侍る」とおとゞ、正頼「何にかあらむ」仲忠「御帶なり」おとゞ、正頼「いで見給はむ」と宣ふ。取りに遣はしたれば、螺鈿の帶の箱に、袋に入れて、御包に包みて持て参れり。おとゞ、引き出で見給へば、(二)貞信公の石の帶、いとかしこきなり。驚き給ひて、正頼「これはまた世に無き物なり。これを賜はり給ふばかりに、仕うまつり感ぜしめ給へるこそ、いと恐ろしけれ。これは、小野宮の大臣の御帶なり。是によりてなむ、多くの事ありし。それによりてなむ、眞言院の律師(三)山籠りしにかば、小野に(四)籠り居給ひて、「今ははた領すべき人も侍らず」とて院に奉り給ひしを、内裏の(五)御位に居給ひし時わたし奉り給ひてしなり。かしこき御寶になむせさせ給へる。數多さふらひつらめども、これが様にはえあらじ」と宣ふ。大將、仲忠「これは、藤壺の御德に賜はりて侍り。宮の御文奉り給へりける(六)御返を御覽じて、何事か聞え侍けりむ、いみじく思ほし入りたる御氣色を、怪しと見奉りしほどに、

〔語釋〕
(二)藤原實頼
(三)「山籠りにしかば」なるべし。一本「山籠り給しにかば」
(四)父千蔭が。此處は忠こその巻の事を語る也
(五)朱雀院御即位の際
〔考異〕
(一)然は侍れど—ナシ
(六)御返—御返事

〔語釋〕
（四）「ものを」歟
（五）東宮

〔考異〕
（一）立て―ナシ
（二）走りうち群れて―走り所々にうち群れて
（三）知り―讓り

はすれ。此の宮たちを、そこばく、瑕かたはなく生し（一）立て奉り、樣々に言ふかひなからず、出で（二）走りうち群れておはしますを見奉れば、女子もち奉りたる心地こそすれ」仁壽「また此の犬こそをかくて見奉り給は、天下の后の位も何かはせむ。來し方行く末も、また類ものし給ふべき人かは。物思し知らずもありけるかな」大將打笑ひて、仲忠「かたはらいたくも仰せらるゝかな。それ等を、ものの榮なく思さるゝにこそ。彼方には、犬にくはれたるだに見捨てられたるとこそは、常に勘當せらるなれ。天下知り（三）給ふべきこと近くなりたる樣に仰せられつる（四）ものかな」おとゞ、正賴「朱雀院修理しはてつめれば、然もあらむ」大將、仲忠「日頃は、宮（五）も上になむおはしつる。月頃見奉らざりつる程に、いと淸らになり給へる」おとゞ、正賴「我國の王には餘り給へる人なり」大將、仲忠「いとゞ辛き役をなむ。東宮はいと氣高く、心憎くて、つと守り給ふ、五の宮はいと物はなやかにて、何事を見付けむと思したる御氣色にて見給ふ。御書を、とざまかうざまに讀ませ給ふを、

〔語釋〕
(四)我が宮たちを生みたる時はそれを捨置きて直に内裏へ歸りたれば
(六)犬宮をば
(七)急ぎて内裏へ歸らんとも思はず

〔考異〕
(一)戸おし―戸をおし
(二)疾く―とう
(三)見ると…宣へる―見るときゝこゆるとのことぞいかにかして宣へる
(五)知り―見

入り臥し給ひし御心は、御髪ばかりには避り給ひなむや」宮、女二「何事を。物な言ひそ」と宣ふほどに大將の君、直衣著て、中の戸(一)おしあけて、女御の御前につゐ給ふ程に、右の大殿もおはしたり。宮あらはなれば、御屏風取り出でて立つれば、仲忠「何か、いとよかめるものを。さて疾く(二)乾させ給へ。彼方にも、御厨子は多く侍るものを」などとて女御の君に聞え給ふ、仲忠「今朝仰せごと侍りつるを、疾く聞えさせむと思う給へつれど、みだり心地のいと怪しく侍りつれば、ためらひ侍るとてなむ。上しかく〳〵なむ宣はせつるは、然ば仲忠が乳母せさせ奉るとなむ仰せ給へる」女御の君、仁壽「さこそ言へ、(三)見ると聞ゆる所、如何に斯くは宣へる。此の犬を見て、えあるまじけれ。(四)宮たちをば知り(五)奉らで、やがて參りぬれば、ともかくも知らぬを、(六)これは初より見、口入れなどし侍りつれば、えふり捨てては。其が中に、物の榮ありて見よげにもしなさぬ宮仕なれば、(七)急がしくも思はず」父おとゞ、正頼「などか然は思ほす。正頼が子どもの中には、其處のみこそ幸はお

〔語釈〕
(一)此様にして居るものを
(六)擣、癖

〔考異〕
(二)たゞして—たゞろて—たがひて—たえかいて
(三)匂はして—「て」ナシ
(四)おとゞ—おとゞの
(五)斯う—かく
(七)つき給ひなむ—つきなむず

ゆるものを。男君たちにかゝるわざをこそ。若君はいとよく隠し給へ。斯くして(一)おはせむをば、何わざをかし給ふべき」太輔、「御髪にかゝりて、二所ながら泣きののしり給ひしかば、いかでかは」と聞ゆれば、仲忠「すべておろかなる業こそは」と物しと思したり。

宮つとめてより暮るゝまで御髪すます。御床高くして、お許人たゞして(二)参る。すまし果てて、高き御厨子の上に御褥敷きて、乾し給ふ。女御の君の御前にあたりて、廂に横様に立てたる御厨子なり。母屋の御簾を上げて、御帳立てたり。宮の御前には、御火桶すゑて、火おこして、薫物どもくべて焼き匂はして(三)、御髪あぶりのごひ集まりて仕うまつる。仲忠「此方にわたり給ひて乾させ給へ」とおとゞ(四)聞え給へば女御の君、仁壽「斯う(五)宣ふなるを、彼方にて乾し給へかし」宮、女二「何か、今乾しはてて」と宣ふ。右近の乳母がいふ、「乾し果てさせ給ひてこそ。渡らせ給へらば、唯大殿籠りなば、御髪にたわつき(六)(七)給ひなむ。御産屋の其の日の中にだに、

（語釋）
（一）髮を神にかけて「天の原ふみとゞろかし鳴る神の思ふ中をばさくるものかは」の歌によりてよめるか
（四）に宮殿をも女一宮をも

（考異）
（二）中だにも―なにゝかも
（三）來べき―ぬべき―さふらふべき
（五）させ給ひ―ナシ
（六）給ひしかば―給ひしが

仲忠「辛うじてまかで侍りつるを、渡らせ給はぬこそ。おほぞらのたきあるものを、今日の御ゆするこそ。

中だにもさくとはきかぬあふことを今日あらはるゝかみは何ぞも（一）（二）

そなたにや參り來べき。（三）

と聞え給へり。されど御返も聞え給はねば、むつかりて、犬宮抱きて晝の御座に臥し給ひぬ。太輔に、仲忠「此の子は人にや見せつる」と宣へば、太輔「さも侍らず。誰も〳〵、西の御方にわたりおはしまして、見奉らせ給はむと有りしかど、御帳の内にかく抱き奉りてなむ。唯東宮の若君たちなむ、おとゞの君に抱かれ奉り給ひておはしまして、隱し奉りしかど、內裏（四）の上をも、此方の上をも、打ちかなぐり奉り給ひつゝ、「宮の兒見せよ〳〵」と宣ひしかば、上なむ、打たれ侘びさせ給（五）ひて、見せ奉り給ひしかば（六）、うつくしみて、抱き持ちておはせし」おとゞ、仲忠「いと物狂ほしき事どもかな。斯ばかりの程のことは、昨日今日の樣に、いと能く覺

〔語釋〕
(一)梨壺が東宮に
(三)仲忠
(四)女一宮

㊀仲忠退出、仁壽殿女御に帝の仰を傳ふ。鳳陽の帯を正頼に示す。正頼帯の來歷を語る。今宮男子を產む。仲忠の母に招かる。

〔考異〕
(二)なる―ナシ
(五)こなど―こを

人なれば、宮に對面賜はる時も、「哀と思へ聞ゆれど、心憂ければ」などぞ宣ふな(二)る」大將、(一)仲忠「やんごとなき所もや、引き破られ給ひつらむ。さてはまして如何ならむ」とて、仲忠「今一二日過ぐして參らむ」とてまかで給ひぬ。

【畫詞】此處は梨壺。

かくて大將(三)の君まかで給ひて、一(四)の宮の御方へ參りて見給へば、晝の御座所にも、御帳のうちにも、宮おはしまさず。怪しと思ひて、中務の君に、仲忠「いづくにぞ」と宣へば、中務「西の御方に、御ゆする參る」と聞ゆれば、あさましと思ひて、仲忠「などか。まかで侍るとは聞召しつらむを、今日しもおほろけに、久しくすまさぬ御髪の樣に。すまし乾さむ程、命短からむ人は、え對面賜はらじかし。さて犬は」と宣ふ。仲務「それも彼方に」と聞ゆ。仲忠「大輔呼び給へ」とて召したれば、犬宮抱きて出で來たり。おとゞ、抱き取りて見給へば、こ(五)など丸かしたる樣に肥えて見知り顏に物語す。いとうつくしと思ひ、宮の御許に御文奉り給ふ。

（語釈）
（一）兼雅
（五）五の宮が
（七）昭陽殿一人の爲に
（八）昭陽殿
（九）四宮

（考異）
（二）いらへ—いて
（三）こそは—「は」ナシ
（四）給ひつらむ—給ふらむ
（六）あくめ—あてめ
（一〇）いらへ—いて
（一一）まう—また

ひし程よりにやあらむ」大將、仲忠「いと久しくなりにけるを、殿（一）には聞召したらむや」いらへ（二）、梨壺「いかでか。聞えばこそは（三）あらめ。時のなく恥かしければ、此處なる人にだに、數多には知らせぬものを。いかでか聞き給ひつらむ（四）」大將、仲忠「一夜、五の宮の奏し給ひしをなむ」君、梨壺「五の宮の御心ぞいと怪しきや。かく徒らにてありとにやあらむ。「我はしも憎まじ」など宣（五）ひしを、此の頃音もし給はぬは、斯う聞き給ひてなりけり」大將、仲忠「世の中のあだ人となり騷がれ給ひて、世をば蔑に思ひて、御前にもつゝむことなく、萬のことを奏し給ふや。なほ能く心つゝしみてさふらひ給へ。あくめ（六）のみ有り」と宣へば、梨壺「一所（七）により奉りて、胸のみなむつぶれ侍る。大殿（八）の君一所のみこそ、數多の人の名は立て給ふめれ」大將、仲忠「院（九）の御方はまうのぼり給はずとか」いらへ（一〇）、梨壺「此の春いみじき御いさかひありて、御衣引き破られ、萬の所搔き損はれ給ひて後は、ま（一一）うのぼらせ奉り給はざなり。されど、斯くてのみは世にも。昔、時におはせし

〔語釋〕
(一)あて宮への傳言をたのみおきて
(二)御懐胎の噂
(四)あて宮入内以來東宮の妃妾たちは皆生がひなしと悲しむ中で

〔考異〕
(三)例ならぬ…思う給へる—例のやうなる世にめでたき事なりとも何かは
(五)いらへ—いで

ふ。此の御書どもは、皆封つけさせて、御厨子に納められぬ。東宮かへり給へり。殿上人、學士など率き居て、大將も藤壺まで御送し給ふ。孫王の君に御消息申(一)し置き給ひて、梨壺に詣で給ふ。宮は藤壺に入り臥し給ひぬ。

大將の君、梨壺に對面し給へり。仲忠「日頃さふらひ侍りつれど、聞えざりつるかな」梨壺「何時も上にとのみ承りつれば、これよりも得聞えざりつる」大將、仲忠「いとつらく思し隔てたりけること。先に參りたりしかど、などか宣はざりけむ」梨壺、「何事ぞや。聞えぬこと無きものを」大將、仲忠「ある樣おはしけるものを。こればかりは、殿の御爲にも、仲忠等が爲にも、面目なることとなむ侍らぬ。(二)(三)例ならぬ御樣のこと承りて、めでたき事になむ思う給へる。かく皆人の不用になりぬ(四)と言ひ騷ぐ世に、如何に。さばれ、かゝる聞えのあるのみなむ、嬉しきこと侍るべき」いらへ、(五)梨壺「怪しの問はず語りや。よきこと、さふらひつきて何かはとてこそ」大將、仲忠「何時ばかりよりかは」君、梨壺「相撲の節の頃、暑氣にやなど思

〔語釋〕
(四)自分が産をしに下りたる時よりも

〔考異〕
(一)世を知り—世保ち
(二)わきても—わいても
(三)これ朝拜—これついたちに朝拜

おろしてむとし給ふなり。世を知り(一)給ふべきこと近くなりぬるを、平かに、謗られなくて知り給へ。人の國にも、最愛の妻持たるにぞ謗取りたるめる。然言はる人持たまへれば、戒め聞ゆるなり。わきても(二)、此處には良き女のかぎり集へたれど、え褒められずなりぬるや」宮、東宮「彼處にこそ侍るめれ。言葉も惜まずののしることは、外には得侍らじ」と聞え給ふ程に、明けはなれぬ。上、世の中に名高くて傳はりくる御帶あまたある中に、良しと思すを取り出でさせ給ひて、大將に、朱雀「これ朝拜(三)などあらむ折、物せられよ」とて賜ふ。大將舞踏し給ふ。明けぬれば、まかで給ひなむとす。上、朱雀「佛名すぐして、必ず今二三日物せられよ。年のはじめには、得讀むまじき文なめるを。仁壽殿は、今年は參るまじきにやあらむ。(四)自らの上に彼樣の時よりも、いと久しかめるは、もし其處にのどめさせて物せらるゝか。まめやかには、唆して參らせられよ。昔は斯くもあらざりしかど、末の世には、女の侮るにこそ」と宣へば、大將かしこまりて承り給

れば。其が中に承香殿の宮のいたく歎かるゝ樣に聞ゆるは、などかはいと然しも。其が中院の聞召す所もあり、(一)御年高くなりぬれば、(二)御世今いくばくもあらじを。其が中にも、院のいとらうたくし給ふ宮なり。(三)天下に、(四)心にかなはずとも、少し心とゞめてこそ」と聞え給へば、東宮「それは、さ思ひ給ふることなり。先つ頃も、「わた(五)り給へ」と聞え、彼處にもまうでて侍りしかども、聞ゆるにも隨ひ給はず、いと荒々しき(六)御氣色のあれば、月頃かしこまりて、物も聞えず侍り」上、朱雀「それも宣ふ樣有りと聞くや」宮、東宮「まかり侍るめるものを、宜しからず思すなり。それはじめ、「彼處になむ今宵出で給ふべき」(七)(八)と聞えしを、さてなむ絶えたるを。如何なるにか侍らむ、よからず思して、(九)此の人彼處に侍るとて、御氣色悪しければ、勘事ゆるさるゝまでなむ。志をば失ひ侍らねば、(一〇)ついでには(一一)自ら聞召してむ」上、朱雀「後はやらへ(一二)ものにもなし給ふとも、(一三)院のおはします世に、かゝると聞召すなむ、(一四)いといとほしきやうなることどもを思したるにあらむ、上も宮も、(一五)御髮

(語釋)
(二)嵯峨院が
(三)承香殿は
(五)參る樣にと承香殿に申し
(七)あて宮をいふ
(九)あて宮
(一一)「つひには」歟
(一二)追出すとも
(一四)「いといとほしきやかやうなる」歟、「う」なき本もあり
(一五)嵯峨院も大后宮も

(考異)
(一)中に承香殿の宮の—中にも人の申すは四の宮の—中に四の宮と申す人の
(四)天下に—そこの
(六)荒々しき—荒ましき
(八)まかり侍るめるものを—そしりて侍るめるものを—まじり侍るめるものを
(一〇)侍らねば—侍らねど
(一三)なし給ふ—し給ふ

りあたりて、聞召して、朱雀「これは内侍のかみの見るべき事どもにこそあめれ。見たりや」と宣ふ。大將、仲忠「さも侍らず。これは見せ侍らむ」とて取り換ふれば、朱雀「なほ見はてよ」とて御覽ずるに、面白く悲しきこと限なし。又ことに取り換ふる卷は、蓮華の花園にて、天人かけり給ひし時、讀み集めたることども、其のよし記せるなり。上めで給ふこと限なし。朱雀「夜明けぬべし。長き夜をしも盡すべくもなき事どもなめり。今は、これ等は唯に見む。集ども、日記ども(二)などをなむ、讀ませて聞くべき。それは、(三)佛名すぐしてせむ。此の朝臣、い(三)と苦しと思ひためり」と仰せられて、東宮に聞え給ふ。朱雀「其の事となければ、對面することいと難し。かゝる序に、聞えむと思ふことどもあり。(四)此の朝臣こそあめれ、それは(五)ゆく先の御後見すべき人なめれば。月頃聞けば、上にも物し給はず。と言ふなるを、猶上に(六)おはして例の作法に、政事あらせてこそさふらはせ給はめ。(七)思す人あらば、夜はまうのぼらせ、晝は上局賜ひなどしてこそ。例に違ひて聞ゆ

〔語釋〕
(一)年の暮の儀式
(四)こゝに仲忠が居れどもこれは後々の後見もせさすべき人なれば憚るべきに非ず
(七)寵姫

〔考異〕
(二)などーナシ
(三)いとーナシ
(五)ゆく先ー御ゆく先
(六)おはしてーおはし給ひて

（語釋）
（一）字音のまゝによむ也
（三）后宮が聞きて解する也

（考異）
（二）聲にも―ずん聲にも
（四）所々―所
（五）所々―所
（六）今宵と―今宵も
（七）京に歸りまうで來て女の―京の女の
（八）彼には―「は」ナシ

ば、すこし高く讀む。所々は聲にも（一）（二）讀む。后の宮、いみじう憎み給ふ。されどいとよく聞召す。（三）他人はえ聞き知らず。聞召し知りたる限は、上も東宮も、泣き給ふ。したる樣は、唯有りつることを、物語の樣に書きしるしつゝ、其の折の歌どもを付けたり。おもしろき所々（四）も悲しき所々（五）も有り。

かくて曉方になりて、上、朱雀「かゝる理なり。此の母御子は昔名高かりける姫、手かき、歌よみなりけり。院の御妹、女御腹なりけり。然りける人の、さる折々にし置きたりける事なれば、かくいみじきなり。是は、女一の宮には見せたりや」大將、仲忠「見給へつけし所にて、外題ばかりをなむ。さては今宵と（六）なむ、開きては見給ふ」上、朱雀「彼處にて講ぜらるべきものなり」とて、朱雀「これは暫し」とて、朱雀「今一つを」とて御覽ずれば、これは俊蔭が京より筑紫へ出で立ち、唐土へ渡りたりける間よりはじめて、京に歸り（七）まうで來て女の上を言ひそめて、言ひつゝ折々に歌あり。これが面白く悲しきことは彼には（八）優れり。其の卷にしも取

〔考異〕
(一)今日は―よべの
(二)ばかりよりは―ばかりには
(三)つくりて―つゞりて
(四)日ごとに―ひとに
(五)心してを―心せよ

給へば、今日(一)は俊蔭の主の集を讀ませ給ふ。讀みくらして暗うなりぬ。上、朱雀「いと日高うはじめつ。更にな立ちそ」と宣ひて、御殿油いと疾くまゐりて、讀ませ給ふ。亥の時ばかりよりは(二)、これは暫時止めさせ給ひて、小辛櫃開けさせて御覽ずれば、唐の色紙を、中よりおし折りて、大の册子につくりて(三)、厚さ三寸ばかりにて、一つには例の女の手、二行に一歌書き、一つには草、行同じこと、一つには片假名、一つは葦手。先づ例の手を讀ませさせ給ふ。めでたきこと限なし。

四所さし向ひて、日ごとに(四)讀ませて聞召す。今宵は后の宮まうのぼり給へり。此方の御たちいと多かり。斯かる事ありとて、御簾のもとに后の宮おはせば、上は、大將に御目くはせて、密に讀ませさせ給ふ。后の宮「御たちにこそ聞かせ給はざらめ、講師は心してを(五)」と宣へば、え讀まで、爪くひもてさふらふ。上、朱雀「いと惡き朝臣なりけり。かくな憶せられそ。唯言ふに隨ひて讀め。これは誰も〳〵讀みつべけれど、さらに他人の讀むまじき由のあれば、まづ讀ますするぞ」と宣へ

（評釋）

（三）食器を取集めてよこしたる故にいふ

（考異）

（一）あつもの—あついもの

（二）此の—ナシ

（四）雜役に—さにふくを

（五）「などとて」なるべし

（六）薫衣香—くえかう

あつもの(一)時は未だ過ぎ侍らざりけり。とて奉れ給ふ。物など食ひ果てて大將、此の(二)奉れ給へる物どもを、さながら取り集めて返し奉り給ふとて、孫王の君の御許に、仲忠「これをいと全く返し奉るは、明日にもいと疾く賜はらむとて。器物侍らずば、求めさせ給はむほど遲くや、とてなむ」と宣へり。孫王の君などいみじく笑ひ給ふ。孫王「空言人にて、今さへもそらごとし給へるかな」とて、孫王「いとよき(三)御厨子所の雜仕なりけり。わきても土器をぞ一つ失ひたりける。衣の袖解かれぬべう」と聞えたれば集まりて笑ふ。大將、仲忠「いまふるを雜役に(四)奉らむ」(五)などとて、醉ひて臥し給へり。上より、遲しとて召せば、仲忠「涼の朝臣、酒を強ひて給び侍りつるに、前後も知らでなむ」と空醉をし、空言をして參り給はず。帝、休むならむと思して、暫し召さず。

かくて巳の時うち下りての程に、青鈍の線のはかま柳がさねなどいと淸らにて、今日のうつしは、麝香たきもの、薫衣香(六)、物ごとにし盡したり。さてまうのぼり

しう」とて取りて見給ふ。後より上も御覧ずれば、

女一 覺束なしとかあるは、(一)御前にとのみ聞けば、上もこそ見給へとてなむ。思ひ出でむとや。

かぎりなくありし昔の見えしかば今も我にはあらじとぞ思ふ

とてぞ聞えにくきや。からうじて物思ひ知られたりけるかな。問ひ給るへ人は、(二)あなたの御懐にのみぞあなる。

とあるをいとよう見給ひて、度々文遣りなどするは、いと蔑にはあらぬなめり、いかで今暫しすゑて、(三)せむ様見む、と思して御心地おちゐ給ひぬ。還りおはして、つれなくて居給へり。

(四)上には、酒飲みのゝしりて、彼の鍋の蓋の返事は、物取り食ふ翁の形を、食物を丸かして造りすゑて、それにかく書き給ふ、

仲忠 白妙の雪間かきわけ袖ひぢて摘める若菜をひとり食へとや

〔語釈〕
(一)仁壽殿の
(三)朱雀の推量
(四)殿上の間にては

〔考異〕
(一)後より—後に

若菜の羹一鍋、蓋には黑方を大いなる土器の樣につくりくぼめて、覆ひたり。取所（一）には、女の一人若菜摘みたる形をつくり、それに、孫王の君の手してかく書きたり、

孫王　君が爲春日の野邊の雪間わけ今日の若菜をひとり摘みつる

羹（二）をば、かくなむ仕うまつりなりにたる。聞召しつべしや。

と書きつけて、小き黃金のなりひさごを奉り、雉子の脚、おり物（三）に高く盛りて添へ奉り給へり。集まりて笑ひのゝしれば、上、朱雀「など、此の朝臣の、今日は遲く出で來て、かく言ふは」とて例の所よりのぞかせ給へば、臺盤に物す爲て取りなしつゝまるゝ。御酒などまゐる程に、例の宮はた、陸奧紙のいと淸らなるに、雪降りかゝりたる枝に文を付けたる持て來て、宮はた「宮の御文」と捧げてひろめかす。源中納言、源「こゝちしあらむ（四）（五）御文を斯うして、惡しかめりや」大將、仲忠「今日はいとよしや。昨日御前にて斯くしたりしこそ淵瀨もなかりし（六）。いとらうがは

（語釋）
（一）取手
（三）澀あらん歟
（四）「こゝち」は「こゝろ」歟

（考異）
（二）羹―あついもの
（五）こゝちしあらむ―こゝちもあらぬ
（六）なかりしいと―なかりしかど

ば、御聲の限をこそ聞き侍りしか。文字一つも覺えぬは、すべて君は、涼をぞまどはし給ふ。琴彈き給ひては、はだか鶴脛にて走らせ給ひて、殿上まで笑はせ奉り給ふ」大將、仲忠「立ちやすき御腹(一)にこそあれ。今も聞い給ふまではえ仕うまつらじや」中納言、涼「なほ物の底にな讀み入れ給ふぞよろしからめ(二)」大將、仲忠「石の辛櫃に入るゝぞかし」右大辨、藤英「壁の中に納めさせ給ふと(三)にやあらむ」大將、仲忠「さては、主ぞ埋もれ給はむ」中將、行政「明王の御世に出で來まじき事どもな(四)り。此の御書祕せらるゝよし、行政こそ承りつけたれ。理なり。げにばうぞく(五)(六)の身こそあぢきなけれ。誰か聞き知りたらむ」など言ふ程に、藤壺より、大きやかなるしふたい(七)の程なる瑠璃の甕におもの(八)一盛、同じき平坏に生物、凹坏に干物盛りて、同じき(九)瓶の大きなるに御酒入れて、銀のむすび袋(一〇)に、信濃梨、干棗など入れて、銀の銚子に、地黃煎(一一)一調子入れて、奉り給へり(一二)。炭取に小野の炭入れて奉り給へり。集まりて興じて、皆取りすゑて參る程に、大いなる銀の提子に、

〔語釋〕
（五）未詳
（七）未詳
（一二）「奉り給へり」衍歟

〔考異〕
（一）立ちやすき御腹―たやすき御耳
（二）よろしからめ―よろしくは
（三）給ふと―給へと
（四）出で來まじき事どもなり―出づまじき事なり
（六）げにばうぞくの―けんかしぞくの
（八）おもの―いを
（九）同じき―「き」ナシ
（一〇）むすび袋―すき袋
（一一）地黃煎―ざかうせん

と聞えさするも思しや知らむ、と思う給ふるこそ。かつは犬こそ（二）いと戀しう侍れ。我が君、御懐（一）に抱かせ給へ。今朝の雪こそいと寒げなれ。

と聞えて御返（三）見て御前には（四）參らむ、昨日の樣にもぞ持て騒ぐ、と思して（五）、暫し參り給はず。

殿上には、源中納言（六）、右大辨、中納言、他人もいと多かり。右のおほい殿の君だち、數多ものし給ふ。源中納言、大將の君に申し給ふ樣、涼「などか君は、昔よりいかばかりかは契り聞ゆる、此の（七）御書を承らむとて、妻子の懐を捨てて、斯く寒き夜に（八）、ふるふるうちはへさふらふ効なく、一文字をだに聞かせ給はぬ。少し高くだにやは仕うまつり給はぬ」大將、仲忠「仰せごとおれば、高くは得ぞ（九）。そが中に、苦しう侍れば、聲も出でず」中納言、涼「さて、いかで昨夜は、一度は雲をうがちて、空にはあがりし（一〇）。此の主こそは、我が世の末の博士とは思ひつれ。それすら、酒を參りて、惑ふまで、讀みのよしらせ給ひしかども、腸の斷えしか

（語釋）
（六）源、中納言、中納言」は「権中納言」なるべし

（校異）
（一）思しや知らむと—思し知るらむと—思しや出るらむと
（二）犬にも—犬にそこそ
（三）御返—御返事
（四）には—へは
（五）思して—おもほして
（七）此の—ナシ
（八）夜に—「夜」ナシ
（九）得ぞ—「ぞ」ナシ
（一〇）あがりし—あがりにし

〔考異〕
(一)つらからぬ—つらからむ
(二)な思しそ暫しと—なほおほぞちにはと
(三)御返は—御返りごと
(四)ゆゝしく—いみじく
(五)なくも—なくと
(六)いかで—おきて

ふるかひの何かなからむあわ雪も積れば山とならぬものかは

とて、

女(一)つらからぬをのみこそ。然らぬ事をば(二)な思しそ。暫しとあればなむ。對面にを。

とあり。御返(三)は、

仲忠 山となる雪ぞ(四)ゆゝしく思ほゆるたえて越路のものとこそ聞け

其れをこそ思う給へあるまじけれ。

と聞え給ふ。

かゝる程に雪高く降りぬ。大將の君、宮の御許にかく聞え奉り給ふ。

仲忠 夜の間は如何。御返も給はせざりしかば、覺束(五)なくもなむ。更に散らし侍らぬものを。

かくばかり見ねば戀しき君を(六)いかで知らで昔をわが過しけむ

（語釋）
（二）あて宮に
（四）「なきこと」は「なきくそ」歟
（五）仲忠
（七）女一宮
（八）仲忠が

（考異）
（一）女に―女房に
（三）給ひつる―給へる
（六）よかなる―よかんなる
（九）よべは―「は」ナシ

るか」宮はた、「然ぞかし」大將いみじう笑ひて、仲忠「我も得させむに物な思ひそ。さて藤壺に參らば、「仲忠なむ然聞ゆる」とて、「日頃さふらへど、暇の侍らねば、え參り侍らぬ」と申し給へ」など言ふに、つとめてになりぬ。

宮はた起くれば、頭かいつくろひ、裝束せさせて遣りつ。藤壺に參りたれば、御たち、「あな芳しや。此の君は、女の懐にぞ寢給ひける」宮はた「然かし。右大將のおとゞの御懐にぞ寢たりつる」御たち、「（一）女にこそは」と言ふ。（二）上に（三）申し給ひつること聞ゆれば、君、あて宮「さふらひ給ふと承れば、頼もしき心地なむ。御暇の頃は、然いふ樣あなり」と言はせ給へば大將、仲忠「いとけやけくも、よからぬこと（四）なきこと」など聞え給ふ。藤壺、（五）「此の君は何處なるぞ」と問ひ給へば、「殿上に」と言ふ。藤壺、孫王の君に、あて宮「彼の言ひしことは、今の間に（六）ぞよかなる」と宣ふ程に、（七）宮の御文あり。（八）見給へば、

女一（九）よべは思はぬ樣に有りしかば、夜もすがらなむ。何事をか然までは。

〔語釋〕

(一)祐澄は其方の姉を愛するか

(二)女三の宮祐澄の妻

(三)女三が

(四)父は何れの宮を得たしといふぞ

(六)父が彼處の外に思ふ所なしといふ故仁壽殿へ行きてみればといふ事歟

(八)「よし」は「さかし」歟

〔考異〕

(五)とか—「か」ナシ

(七)そこ…かは—そこのをおきていづれかはわか—そこのをこえていづれかは

ぬべきもの侍り。それ見せ奉らむ」とて御几帳たてておはしまさせ給ふ。上は入らせ給ひぬ。五の宮は、臺盤所に入り給ひて、藏人たちの中に御殿籠りぬ。大將は、侍に出で給へば、宮はたともに往ぬ。大將臥し給ひて、宮はたを懷に臥させ給ひて、語らふ、仲忠「姉君は、大きになり給へりや」宮はた、「大きにもなり給はず。小さくもおはせず」と言へば、仲忠「御髪は長しや」宮はた「いと長げなり」大將、仲忠「父君(一)は、うつくしうし給ふや」宮はた「いさ知らず。弟宮をこそ、夜晝抱き給へ」仲忠「いで弟宮は、幾らほど大きにおはする」宮はた、「今ぞ立つめる。いとをかしげなり」と言ふ。大將、「など父君は、(二)宮をば思ひ奉り給ぬぞ」宮はた「いさ、南の方に出で居て、餘所人に見なし奉りつる、とて(三)泣きなどこそし給へ」大將、仲忠「何れの(四)宮をとか(五)宣ふ」宮はた、「そこをおきて(六)(七)いづれかはと言へば、内裏の上の御許にまうづれば、いと淸らにて常に見え給ふぞかし」大將、仲忠「などて其をば思ひ奉るぞ。見奉らむとや」と言へば、「よし」(八)と言ふ。仲忠「さて御文は取り入る

（語釋）
（三）解しがたし
（四）誤あるべし
（五）徹曉
（六）「手こそ」は「ことそ」歟

（考異）
（一）面白し聲うちしづめて―面白くあり聲うちしづめて―面白しうちしづめて
（二）雲居をうがちて―雲居にとほりて

せ給ひぬ。大將いとほしと思ひて、かい直して、いと面白く讀みなす。其の聲いと
（一）面白し。聲うちしづめて、いと高く面白く誦する聲、鈴を振りたる樣にて、雲居（二）
をうがちて、面白きこと限なし。御前なる御琴ども掻き合せ給ひて、朱雀「昔の祿
に何よかりなむ」と宣へば、五の宮、「又はいかでか。此の度のにはよかりならば（三）
や」上、朱雀「いと難からむ。文才には何かは」とて御時よく笑はせ給ふ。朱雀「さ
て、是はしばし斯くて、此の冊子を讀まむ」と宣ひて、今一箱のをはじめて讀ま
せ給ふ。これはいと讀み（四）てあり、あはれに面白さも優れり。上、「文才はなほ此の
朝臣のは優れりけり。怪しく此の族の手こそ（六）優るなるかな」と宣ひて、夜一夜、（五）
面白き句ある所を誦ぜさせ給ひて、御琴どもに合せさせ給ふ。曉方に、いと面白
き所あり。大將に誦ぜさせ給ひ我も誦じ給ふ。五の宮に、朱雀「誦ぜよ」と宣へば、
ともかくも宣はで、打出でて誦じ給ふ聲いと面白し。東宮誦し給はず。
かくて曉方になりぬ。東宮に、朱雀なほ明日ばかりは此方にを。いと御心つき

白雪のふればはかなき世の中を獨りあかさむことの侘しさ(一)

あらむ世の限だにこそ。

とて宮はたに取らせ給ふ。(二)これは藤壺をおやにし奉りて、東宮の殿上もすとて、(三)持て參りて奉れば君、(四)白き紙に、

あて宮うきことのまだ白雪の下消えてふれどとまらぬ世の中はなぞ

憂からぬはとこそ。(五)何かならむ、思ひ給へられず。

とて宮はたに、あて宮「上、大將などの御前にては、(六)な奉りそ」と宣ふ。參りて、宮の御後にさふらふ程に、御書讀むさかりに、上あからめし給へる間に、宮取りて見給ひて、(七)世の中を心憂しとも思ひたるかな、心に身を任せば、人の心ごとに(八)よりて、などうち涙ぐみ給ひて見給へるを、大將見合せ給ひて思ひやみにしかど(九)心地うち騷げば、(一〇)鎭むとすれどひが讀を多くすべきを、(一一)點一つも讀み誤たぬを、怪しと思して、(一二)打ちほゝ笑み給ふを、大將見奉りて笑ひぬ。上もえ念じ給はで笑は

〔語釋〕
(二)宮はたは
(三)「すとて」は「すなり」歟、一本「するなりとて」
(四)あて宮
(五)「何ならむ」歟
(七)東宮の心
(八)誤あるべし
(九)あて宮の事をあきらめては居れど
(一二)東宮が

〔考異〕
(一)侘しさ―はかなさ
(六)にては―「は」ナシ
(一〇)騷げば―騷がれて
(一一)多くすべきを―すべきに

（一）昔のみきゝにしものを程もなき戀にぞそではいろ燃えぬべき

昨日は今日こそ佗しきものとは。誠や、きたなきものは賜はり侍りぬ。犬は如何。聞えたりし樣にや。

とて、昨日の御裝束どもは奉れ給ひつ。暗き程になりて御返なし。上よりしきりに召せば、物など參りてまゐり給ひぬ。上、朱雀「書は、夜なむいと興ある。今宵は此處に聞き給へ」と東宮に聞え給ふ程に、雪少し高くなり、御殿油まゐりて、短き燈臺（二）左右に奉りたり。上の御前に琴の御琴、東宮の御前に箏の御琴、五の宮琵琶、御前ごとにうち置きて、大將は書讀み給ふ。上あからさまに入らせ給へる程に、大將書の點直すとてある筆を、東宮取らせ給ひて、御懷紙にかく書きて、藤壺に奉り給ふ。

東宮 今宵は書聞けとのたまへば、心にもあらでなむ。（三）ながらふとも（四）いふなるものを、

〔語釋〕
（三）「心にもあらで浮世にながらへば」の歌は三條院の御歌也時代可考

〔考異〕
（一）昔のみきゝにしものを—昔へはききにしものを—昔へとききにしものを
（二）左右に奉りたり—きらにたてたり—きらに奉る
（四）とも—とても—とぞ

〔語釈〕
(二)東宮といふ

〔考異〕
(一)大将を召せど暫し—大将日をしばし

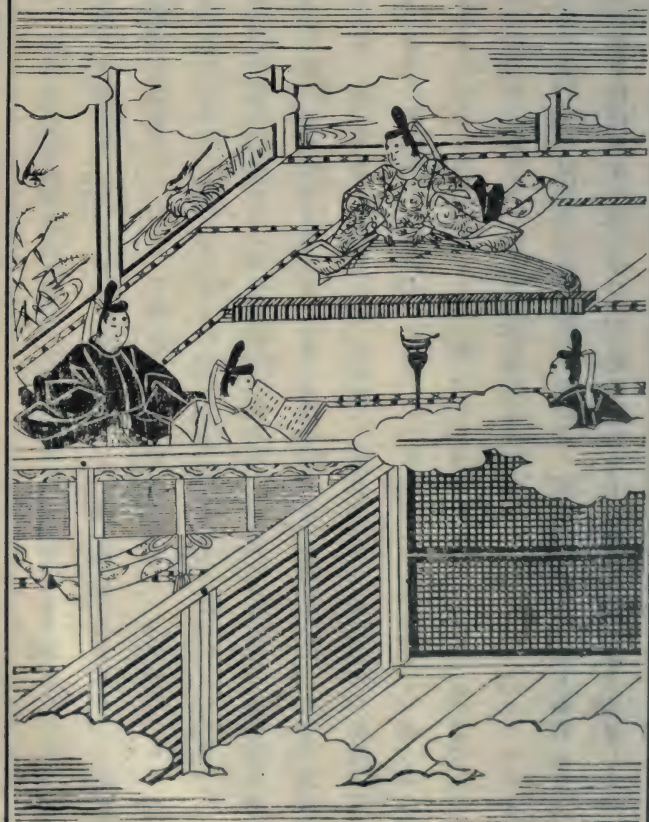
たり。御装束は蘇枋がさね、綾の上のはかまなどにて、いと清らにかうばしくて奉れ給へり。四位、五位数多参れり。装束解きひろげて臥し給へり。午の時ばかりに東宮、いみじく清らに装束き給ひて、まうのぼり給へり。御褥など参りて、御前におはします。(一)大将を召せど暫し休むとて、まうのぼり給はず。御装束しかへて参り給へり。物の色うつくしさ類なく、匂深くて、例の御書仕うまつる。聞召しくらして、暗くなりて、まだ御殿油まゐらぬ程に、大将下り給ひて、藏人して奏せさせ給ふ、仲忠「まかで侍りて、つとめて参らむは、如何侍らむ」と奏せさせ給ふ。上、朱雀「暮れ難く明けやすきうちに、夜なむいと興ある。参でられずやよからむ。(二)また客人の物し給ふを」と宣ふ。大将いたく歎きて、宮に御文奉れ給ふ。

仲忠「今朝は喜びてなむ。すなはちと思う給へれど、「まかでなむ」と侍りつれど、許させ給はねば。其のわたりにとか侍りつるは、あな古めかしや。

（語釋）
（一）嵯峨院第四の皇女承香殿
（三）仲忠の妹梨壺
（五）承香殿は嵯峨の愛子なり
（七）嵯峨の皇女なるべし祐澄の北方
（八）祐澄は兼々より仲忠の妻たる女一の宮に心を寄せ居る故女三に冷淡なる也
（九）夫を持たぬがよからん
（一〇）「大將は」は「ことは」の誤歟

（考異）
（二）給はざなり—給はざるなり
（四）孕み給ひて—にんして
（六）など—いと

處にかは。他人を知り給はゞこそあらめ」朱雀「御子を如何にし奉るらむ」宮、（一）五宮「それは、今年いまだ對面し給はざなり。（二）すべて、誰も見奉ること難く、如何ならむ腳にか侍りつらむ、この御妹（三）こそ、時々見奉りて、孕み（四）給ひて侍るなり」朱雀「あたら人の、色の心ものし給ふこそあなれ。世の中は、いと能く保ち給ふべしとこそ見れ。文にも「酒を好み内を好む」とこそ記せるものを。四の宮如何に思すらむ」五宮「如何に聞召すらむ。其が中にも院の御愛子（五）なり。」など（六）言痛くのみあらむ」朱雀「女三（七）の宮もいと哀にて物せらるなり。祐澄の朝臣も如何しなさむ（八）ともすらむ。すべて女御子たちは、たゞに（九）物せられむこそよからめ。身に良からぬ宮たち多く持たるや」と宣ふ程に、東宮の御使歸り來りて、「唯今まうのぼる、となむ仰せられつる」と奏す。巳四刻ばかりになりぬ。

【晝詞】大將は（一〇）殿上にもの調じすゑたり。宿直所に、宮よりも臺盤所よりも、參れり。御前より立ち給ひて、宿直所に下りて居給へり。參り物ども調じすゑ

にては、

消えずのみ見ゆる思ひもあるものを何か袂の凍りしもせむ

誠や装束どもも物せさす、昨日のが見苦しかりしかば。これも殊更にぞあなる。

といとをかしげに書き給へり。女御の君の御手(二)に似てあてに若くは見ゆれど、おとなしくも後見おこするかな、と(一)思して、押し巻きて投げ遣はしつ。大將賜はりて見て、仲忠「何事(三)にか侍らむ」とて懐に入れつ。上、東宮に、五の宮を御使にて、朱雀「昨日よりいと有り難き書をなむ、右大將に讀ませて聞き侍る。わたりて聞き給へ」と聞え給ふ。五の宮打笑ひ給ひて、五宮「えのぼり給はじ。更にたゞ(四)におはせざなり(五)。吾が所に籠りおはして、上にも物し給はざなれば(六)、男ども侍る(七)所にまうで來つゝ、「此の月頃御前にさふらはぬ事。すべておほん顔なむ見奉らぬ」となむ嘆き侘び申す」上、朱雀「何處に物せらるゝ(八)にかあらむ」五宮「藤壺ならでは何

（語釋）
（一）朱雀の心
（三）「も」又「を」に作る、これによれば「と」は衍文歟
（七）私の所へ籠りて

（考異）
（二）御手に似て—御手の
（四）たゞに—だに
（五）ざなり—ざんなり
（六）ざなれば—ざんなれば
（八）にかあらむ—にかはあらむ

あらむ。取らせよ」とて賜へば、宰相(一)の中將の君の御子、宮はたと言ひて八つばかりにて殿上にあり、それ、宮はた「まろをつかひ給へ」とて、奪ひ取れば、仲忠「など斯くは宣ふ」と宣へば宮はた、「宮の御もとなれば」と言ふ。大將、仲忠「其をばなど」と宣ふ。宮はた「父君の思ひ奉れ給へばまろも」(二)とて取りて、殿上口に立てる侍の人に取らせつ。上は、疎(三)には思はぬなめり、つとめて文やるは、と見給ひて、やをら入らせ給ひて、例の御座所におはしまして、暫しありて召せば、裝束して參り給ひぬ。五の宮も御前にさふらひ給ふ。

さて御書仕うまつる(四)程に宮はた、青き(五)色紙に書きて、呉竹につけたる文を捧げて(六)きて、宮はた「宮の御返(七)」とて持て騷ぐを大將殿、仲忠「暫し今」と言へば上、朱雀「持て來や」とて取らせ給へば大將殿いとかたはらいたく、苦しと思ひ給ふめり(八)。上御覧ずれば、

女一「昨夜は散らされもやするとてなむ。思ひおとしたりとかありし。其のわたり

〔語釋〕
(一)祐澄
(三)仲忠が女一宮を
(四)仲忠が
(九)人に見らるゝかと思ひて自筆では書かざりき

〔考異〕
(二)とて—といひて
(五)靑き—あかき
(六)捧げて—「て」ナシ
(七)御返とて—御返事とて
(八)思ひ給ふめり—思ふめり

大將の君は殿上に臥し給へり。此の君さふらひ給ふとて、殿上人いと多かり。寢(一)入らで身じろき臥し給へれば頭中將、實賴「昔は寐ぎたなくおはせし殿の、など(二)かうしの樣にてはさふらひ給ひにたるぞや」と宣へば、仲忠「そへに」といらへて臥し給へり。

つとめてになりて、上、起きさせ給ひて、殿上の方にみそかにおはしまして垣間見をし給へば、大將殿、人の見ぬかたとて、奥に向きて文書き給ふ。

仲忠「昨夜ばなどか御返は宣はせざりけむ。覺束なくなむ。宿直物賜はせたりしにつけても、

から衣たちならしてしもよしきの袖こほりつる今宵何なり(三)

いかでうちはへて、とこそ思ひ給へつれ。今日もや宣旨書は、いみじうこそ思ほしおとしたれ。

(四)と白き色紙に書きて、咲きたる梅の花につけて、主殿司に、仲忠「宿直所に男ども

〔語釋〕
(一)仲忠
(二)「牛の樣にては」歟

〔考異〕
(三)何なり—何なる—なりけり
(四)と—とて

どなり。酒などうち呑み果てて、(一)文に對ひたる火影、顏ありさま、いとめでたし。上、(二)見る目よりも近まさりする人(三)にこそありけれ、一の宮まことに志ありてや思ふらむ、又我(四)が心を思ひたるにやあらむと思す。斯くて書讀ませて聞召す。女御(五)參り給へり。其の夜は承香殿の御宿直なり。夜更け行く儘に、文讀む聲誦ずる聲も、いと哀に面白し。上は琴の琴かき合せつゝ、誦ぜさせ給ひつゝ、聞召す。朱雀「あはれ、此の朝臣の、昔琴を習はしたらましかば、如何によからまし。此の事によりて、身も沈み(六)にしぞかし。大臣にもなりなましものを」大將、仲忠「いとあぢきなう侍る人にこそ」上、朱雀「あなにく、もどきしにこそ」大將、仲忠「其の朝臣(七)のやうならましかば。かれはいといみじう侍りけるものを」上、朱雀「空言かな。彼の朝臣には、音もこよなく勝りたりと聞きたる人も言へ(八)、聞きしに然こそあれ」と宣ふ程に、「丑の前(九)」と申せば、朱雀「夜更けにけり。暫し打休みて、つとめてこそ」と宣ひて入らせ給ひぬ。

〔語釋〕
(二)以下朱雀の心
(四)我が手前をかねて實は愛せねども愛する振をするのか知らぬと
(七)私の琴が俊蔭の樣に上手ならばよからんに
(八)「言ひ」なるべし
(九)夜警の武士のいふ也

〔考異〕
(一)呑み果てて—呑みて
(三)人にこそありけれ—人にぞありける
(五)女御參り—女御更衣參り
(六)沈みにしぞかし—沈みつゝ大臣にもえならずなりにしぞかし

（語釋）
（一）靫負の命婦
（三）番の御厨部のゐまがりを敷かせよ
（四）「五宮の」なるべし
（考異）
（二）里にて――さぞ
（五）くしは――くしぞ

れ給ふ。御返は中務の君、

　斯くなど聞えさせつれば、御宿直物奉らせ給ふ。夜寒は、何ともまだ思し知らずとなむ。犬宮は然おはします、と聞えさせよ、となむ。

とて奉れ給へば、大將見給ひて、「おぢきなの宣旨書や」と獨言ちて宿直裝束しかへて、召あれば參り給ひぬ。

夜さりのおもの參る。朱雀「靫負やある（一）」と召し出でて、朱雀「此の朝臣勞れや。里（二）にてうしろめたく思ふらむ。此處にておろし（三）を物せよ」とておろさせ給ふ。朱雀「これを彼を」など御覽じつゞけさせ給ふ。后腹の宮（四）にさふらひ給ひけるに、酒殿に御酒召して、朱雀「書は酒こそはやせ。近衞は酒はなれては何業かせむ」と宣ひて賜ふ。五宮に、朱雀「くしは（五）」など宣へば、五宮「檜割籠侍り」上、朱雀「さらば強ひよや。去ぬる年の十五夜に、そこたち強ひためり。此處にても」と宣ひて御覽じて、「斯ばかりに」とて賜へば、兎も角も聞えで、賜ふ限り飲みたる、いと良きほ

〔語釋〕
(一)女一宮に
(三)「西の御方」歟
(六)君と隔りて寝る夜はせめて衣とでも語らひて慰むべしといふ意歟

〔考異〕
(一)しめやかなれば夜―なりぬまた
(四)おいらかにもといふこと侍るなり―おいにもといふこと侍るなり―おいにもといふてらはべなり―をいかにといふことと侍るなり―おいにといふこと侍るなり
(五)わびても―わいても
(七)置口の―置口かりの
(八)下袴―下袴を

かくて仕うまつり暮らす。上、朱雀「此の頃は夜長にしめやかなれば、夜聞かむ。なまかでそ」と宣へば、夕暮に殿上に出で給ひて、宮(一)に御文奉れ給ふ。仲忠まかで侍りなむとすれど、御書聞召しさして、夜仕(二)うまつれと仰せらるればなむ。夜寒を如何にとなむ。南(三)の御方おはしまさせ給ひて、諸共にを。犬召して御前にさふらはせ給へ。まかで侍るまでは、御帳の内出でさせ給ふな。(四)おいらかにもといふこと侍るなり。誠や宿直物賜はせよ。(五)わびても、衣だに(六)と語らひて。なめし。中務の君讀み聞え給へ。

とて奉り給へば、あか色の織物も、たゞの綾も綿入れて、白き綾のうちき重ねて、六尺ばかりの貂の裘、あやの裏つけて、綿入れたる、御包に包ませ給ひ、置口(七)の御衣箱三よろひに、いと赤らかなる綾、かいねりのうちき一重、同じ綾のうちき重ねて、三重がさねの夜の御袴、織物の直衣指貫、かいねりがさねの下袴(八)入れて、包に包みたり。色香擣目、世になくめでたし。はなちの箱、泔坏の具など奉

（考異）
（一）切りて—むしきりて
（二）厚さ—づつあり—ナシ
（三）手づから點し—みづから
（四）讀ませ—讀まさせ
（五）七八枚—七八枚のよみ

開けさせて文箱を御覽ずれば、文箱には、唐錦を二つに切り（一）て綴じたる、厚さ（二）二三寸ばかりにつくれる一箱づつあり。俊蔭の主の集、其の手にてまな文に書けり。今一つには、俊蔭の主の父式部大輔の集、草にかけり。朱雀「手づから（三）點し、讀みて聞かせよ」と宣へば、文机の上にて讀む。例の花の宴などの講師の聲よりは、少しみそかに讀ませ（四）給ふ。七八枚（五）讀みて、やがて一度は訓に、一度は聲に讀ませ給ひて、面白しと聞召すをば誦せさせ給ふ。何事し給ふにも聲いと面白き人の誦したれば、いと面白く悲しければ、聞召す帝も御しほたれ給ふ。大將も涙を流しつゝ仕うまつり給ふ。悲しき所をばうち泣かせ給ひ、興ある所をば興じ給ひ、可笑しきをば打笑はせ給ひつゝ、こと御心なく聞召しくらす。上達部、殿上人等は、大將の、仰にて御文講ぜさせ給ふとて、參り集ひ給へり。されど、人に聞かせじとて、高くも讀まず、御前には人も參らせ給はず。誦ぜさせ給ふばかりをぞ僅かに聞きける。

藏開（中）

梗概

㊀仲忠、祖先の遺文を進覽す。東宮以下列席。俊蔭が入唐の日記。帝の東宮に對する教訓。仲忠帶を賜はる。㊁仲忠退出。仁壽殿女御に帝の仰を傳ふ。恩賜の帶を正賴に示す。正賴帶の來歷を語る。㊂今宮男子を產む。仲忠母の許に招かる。㊃仲忠父と語る。梨壺懷胎の事を告ぐ。父の妻妾を一所に集めん事を乞ふ。涼に產養の物を贈る。㊄仲忠、女三宮の邸へ父の使にゆく。女官に菓實を投げつけらる。㊅復命。菓物の中の文。兼雅の述懷。女三宮等を迎ふべき準備。㊆涼の家の產養。

㊀仲忠祖先の遺文を進覽す。東宮以下列席。俊蔭が入唐の日記。帝の東宮に對する教訓。仲忠帶を賜はる。

かくて一二日ありて、大將（一）殿内裏の仰せられし文ども持たせて參り給ひて、其の由奏せさせ給ふ。帝、朱雀「此の朝臣に見ゆるこそ恥かしけれ。警策に心憎くて、見るに神さびたる翁にて見ゆれば（二）、女一の御子の面伏なりや」と宣ひて、うち假粧じ給ひて、晝の御座におはしまして、召し入れて、朱雀「いづら」と宣へば、沈の文箱一よろひ、淺香の小辛櫃一よろひ、蘇枋の覆したる一よろひ持て參れり。

〔語釋〕
（一）仲忠

〔考異〕
（二）見ゆれば—見ゆるは

文して萬のこと聞え給へ。里住し給ふ時は、つれ〲にいと便なくて、物も食はれずなむ」など更に許さじとぞ思し給へる。

畫詞 こゝは藤壺。

かくて大將殿は、梨壺にまうで給ひて、物など聞え給ひてまかで給ふまゝに、御つかさの人待ちうけ奉りて、おし立てて遊びて、殿におはす。殿には、あるべき樣に御座所しつらはれたり。例の中のおとゞの南の廂に、幄ども打ちわたしたり。中將少將參らぬ人なし。いといかめしくし給ひて、夜一夜あそぶ。さる物の上手の(一)あるじとなれば、いかで難なく聞かれ奉らむとて、遊ぶこと限なし。曉がたに皆、少將よりはじめて、上達部、物かづき給ふ。上達部は、例はかゝるわざなきを、はじめの度なれば、(二)上中下、別の祿など賜ひわたして、明くるまで遊びてなむ(三)まかで給ひける。

〔語釋〕
(一)「あるじし給へれば」歟

(畫)近衛府の屬僚の祝宴。

〔考異〕
(二)上中下—「中」ナシ
(三)まかで給ひける—上達部などは立ち給ひける

（語釋）
（一）東宮とてある宮は女一人を守るものにはあらざれども
（三）他の女を寵することはなし
（四）仲忠、梨壺と仲忠とは兄妹也
（五）どの妃たちをも崩々の様に寵愛ありてこそ
（七）正賴
（八）大宮なるべし

（考異）
（二）ゆく先―ゆく末
（六）こそは―「は」ナシ

わざこそ、こよなからめ、志はならぶ人あらじ、とぞ思ふや。かやうにてある人は、一人につきてはあらざなれど、其處に人をならべては見せ奉らじとこそ、今もゆく先も思へ。參り給ひて後はことに然る事もなし。梨壺ばかりこそ、心もおいらかに、見る目もきたなげなきうちに、親なども心ある人なり。この朝臣の聞くやなど思ひて、時々まうのぼらせ、渡りて見などもすれ。それも、然なせそ、と思さば、さも爲じかし」君、あて宮「いと怪しきこと。誰も、早うおはしけむ樣にておはせばこそ、さふらひよからめ。さらではいと聞きにくゝなむ」宮、東宮「さ覺えざらむ事をば如何せむ。そこばかり、もの思はせ給ふ人こそなけれ。里にものし給ひし時も、夜晝こそは思ひしか。やむごとなき事ありて、まかで給ひても、長居をのみし給へば、いかゞは思ふ。すべてまかでなし給ひそ」君、あて宮「いとわりなき事。いかでか小き人々を見奉らでは」宮、東宮「それは、呼びにやりて見給へ。此處にも見む。おほいまうち君などは、こゝにて逢ひ給ふめり。今一所は、

〔語釋〕
(一)あて宮が
(四)仲忠の舊情を思出してか時々むやみに怒りて我を憎むは、あて宮にいふ也
(五)「給ふはや」なるべし
(六)容貌擧動などは我非常に仲忠に劣りたれども

〔考異〕
(二)それを―「を」ナシ
(三)給ふ日も―給ひひるも

つかられおはしますめる。よからぬ事の樣々に聞ゆるまゝに、御心もゆかで、まかでて心をだにやらむ」と聞え給へど、ゆるし奉り給はねば、(一)夜晝ぞむつかりおはします」仲忠「このよからぬ事の筋には、梨壺のも安からざらむかし。これを思ふこそ、かたはらいたけれ」孫王「いで、(二)それをのみぞ。いさゝかなる御事は、聞え給はず、思し隔てたる御氣色なくて、時々まうのぼらせ(三)給ふ日も、わたらせ給ふ時あるまでは、憂きことのみ」君、仲忠「まことにや、ことばは聞えぬばかり給はる」孫王の君、「何しに侍らむ。まづ御後見はこならぬこともとこそ」仲忠「いで自らのよろこびよりも、先これを申さむ」孫王「あひなうすかせ給ひて、そがよろこびをせさせ給ふらむよ」など立ちながら宣ふを、宮御簾の内に立ち給ひて見給ひつゝ、東宮「いと警策にもなり勝りにける人かな。如何にあらむとて、斯くあるらむ。いとかゝるをも親などはゆゝしと見るらむかし。この昔の(四)心おぼし出でたる時か、取りも敢へず、たゞむつかりにむつかりて憎み(五)給ふてや。(六)かたち、する

仲忠東宮に參る。東宮あて宮と仲忠の噂。

それより東宮に參り給ひて、まづ上によろこび申させ給へば、藤壺になむおはしましけるを、出で給ふとて、藤壺にまうで給ひて、孫王の君して御消息など申させ給ふ、仲忠「久しくさふらはざりつるを、今日はよろこびになむ。(一)わいても聞召し古りたらむに、珍らしげなくや」と聞え給ふ。孫王の君、御前に聞ゆれば、宮、東宮「そや、右大將の御消息ありや」とて告げおどろかし奉り給へば君、あて宮「年頃ちかきまもりに聞き侍りつるを、(二)今もかけ離れ給はざるを、喜び聞えさせむ。珍らしくなむと承るを、今日の御心地のやうに」と言はせ給ふ。大將、仲忠「今(三)日のやうに思されば、いとおほかるべき日になど聞え給ふよとて忘れはて給ひたらむなと」孫王の君、(四)「誰がならはしの」といふ。いらへ、仲忠(五)「君よりそとみゆには、大方こそともかくもあらめ。私心をあらむものを、などか思し棄てたる」孫王の君、「それも今はなぞ」大將、仲忠「むかし思しなすか、萬忘れずながらこそ。いかにぞ宮の御心ばへ」(六)孫王「昔ながら、今はまして立ちまさりもし給はでぞ、む

〔語釋〕
(一)仲忠は前にも近衛の中將なりしをいふ
(三)此仲忠の詞誤脫あらんか
(四)引歌未詳
(六)「は〈」の「〈」衍文歟

〔考異〕
(二)今も—そも
(五)君よりそとみゆるには大方こそ—君よりそもみみにもおぼえんこそ

〔語釈〕

(一)唐土一本「もたう」に作る、「もたう」は「渡唐」の誤歟

(四)近衛府の官人などを饗應する筈なるべければ

〔考異〕

(二)つゝみて—つゝしみて

(三)祟なさじ—祟はなさじ

(五)時—時に

ひて侍るやうは、「唐土(一)のあひだの記は、俊蔭の朝臣のまうで來るまでは、他人見るべからず。その間、靈添ひてまもる」と申したり。俊蔭の朝臣の遺言に、「この書は、俊蔭後侍らず。文書のことは、はかなき女子知るべきにあらず。二三代の間にも後出でまうで來ば、そが爲なり。その間靈よりて守らむ」となむ申して侍る。それにつゝみて(二)今まで奏せで侍りつる」上、朱雀「賢かりし人なれば、朝臣を後に得べしと知りたるにこそは」大將、仲忠「げにその文書をおきて侍りける所、年頃は、あたりにまかり寄る人は皆死に侍りける。その藏開かせ侍りしかば、ほとりに侍りしもの、「いとおどろ〳〵しき事せさすめり。多くの人々徒らになりぬ」と怖ぢ侍りし」上、朱雀「朝臣の讀みて聞かせむには、その靈ども、よも祟(三)なさじ。今日はつかさのものども劣ることあらむを、今日過して、しめやかならむ時(五)、その家の集(四)どもも、詩の抄物どもも持たせて物せられよ」と宣ふ。承りて立ちたまひて、后の宮に參り給ふ。

(語釋)
(二)「それをば然るものにて」なるべし
(四)俊蔭の父
(七)なゝり—なり
(八)文書に—よみの序に

(考異)
(一)無き書なく侍りけり—なき書などは侍らざりけり
(三)朝臣—朝臣の
(五)その—ナシ
(六)俊蔭—俊蔭の朝臣

らぬと思ふに、さる文書、文などをさへ尋ね出でられたらむ、いとかしこき事。萬の書どもなど、具して皆ありや」仲忠「みな具して、(一)無き書なく侍りけり。俊蔭の朝臣の、手かき侍りける人なりける盛に有識に侍りける、それが皆、書き讀みて侍りける、またく細にして侍るめり。(二)それをぞ然るものにて、いといみじき物をなむ見給へつけたる」上、朱雀「如何なるものぞ」大將、仲忠「家の古集のやうなる物に侍り。俊蔭の朝臣(三)唐土に渡りける日より、(四)父の朝臣の日記せし一つ。詩、和歌しるせし一つ。(五)その亡せ侍りける日まで、日づけしなどして置きて侍りけるを、(六)俊蔭歸りまうでける日まで、作れることも、その人の日記などなむ、その中に侍りし。それを見給ふるなむ、いみじう悲しう侍る」など奏し給ふ。上、朱雀「などか今まで物せられざりつる。有識どもの、いみじき悲びをなしてし置きたる物、げに如何ならむ。なほ朝臣は、ありがたきもの領ぜむと成れる人にこそあれ。疾く見るべき物なゝり(七)」大將、仲忠「見給へしすなはち奏すべく侍るを、かの文書(八)にい

入りて、とばかり思ひしみ給ひて、朱雀「などかいと(一)久しくは。先つ頃節會などありしに、參られやすると思ひしに、然もあらざりしかば、いとさう〴〵しくなむありし。(二)人よりは睦しかるべき心地するを、疎き上達部などよりは。されば、物せられむこそよからめ」大將かしこまりて、仲忠「日々に參り來べく侍るを、月頃、仲忠が先祖に侍る人のし置きて侍りける書どもなどの、いと侍りがたき所に、棄てたるやうにて侍りけるを、さすが人のえ取り失はで侍りけるを、いと見捨て(三)がたうて、取り出でて侍る、累代の書の抄物といふ物見給ふとてなむ。文書といふもの見給へつきぬれば、(四)世間のこと侍らぬものなりければ、籠り侍りぬる」上、朱雀「よき事にこそはあなれ。學問など心に入れてものせらるゝは、公の爲にもいと賴もしき事なり。高麗人も來年は來べき程なるを、博士の男どもとても、昔の如く賢き(五)ものども殊に少ければ、藤英が(六)かたへ殊に輕しや。其處にありつぎては、(七)りさうの朝臣をこそは賴もしきことには。それをはなちては、賢しと思ふ者どもぞあ

〔語釋〕

(二)仲忠とは聟舅の關係なるをいふ

(四)「世間のこと知られ侍らぬ」などなるべし

(六)傍の意歟

(七)「りさう」は「家集」を許便に「かさう」といへるより誤れるにて俊蔭の事ならんと春海翁の説なり

〔考異〕

(一)久しくは—「は」ナシ

(三)がたうて—がたくて

(五)ものども…其處に—ものどもなし藤英がため殊に輕しやことなるもなければそこに

れは時々人まうのぼりなどす。東宮（一）のこそいみじかなれ。又二つ人あるものとも知り給はで、年頃になりぬ。などか、坊がね（二）は持たり、いみじきものなめりかし。院（三）の御方は、夜晝音をぞ泣き給ふなる。「昨日今日、兒みどりごと聞きつる人（四）によりて、わがかゝる恥を見つること。さりとて院にあらむとすれば、過もして寄せられぬやうに、上たち（五）も思すべし。交らへば心肝安からぬこと」とこそは歎き給ふなれ」「誰々も皆然にこそは。おほき大殿（六）の君はた、大聲をはなちて、夜晝拜みのろひ泣きのゝしり給ふれ。慰め聞ゆれども聞き入れ給はずとや」など局々言ひさわぎ給ふ。

大將の君、藏人（七）ども上によろこび奏せさせ給ふ。上（朱雀）「斯く、よろこびは正しくなりにけるを、なほ此方（八）にを」と仰せらるれば舞踏し給ひて、上りてさふらひ給ふ。上とばかり物も宣はで御覧ずるやう、わが（九）女を、いと怪しうはあらじとてこそ取らせしか、いとこよなくもなり勝りにけるかな、（一〇）如何に見給ふらむ、など思ほし

（語釈）
（一）あて宮
（二）東宮になるべき皇子は有ちたり
（三）承香殿、嵯峨院の女四宮
（四）あて宮をいふ
（五）嵯峨院等
（六）季明の女、昭陽殿
（七）「藏人どもして上に」なるべし
（九）朱雀の心
（一〇）仲忠が女一を何と思ひ居るならん

（考異）
（八）此方にを—「を」ナシ

なるども扇をたゝきて、「名取川に鮎釣るおとゞの」（一）と謠ひあへり。大將見やりて、仲忠「さ宣ふとも、え知らずや」とておはしぬ。（二）右のおほ殿によろこび申させ給ひて、それより車はさせ給ひて、内侍のかんの殿にまうで給ひぬ。それより内裏へ參り給ひぬ。

かくて陣入り給ふより人々めづらしがる。女御、更衣の御局の前わたり給へば、人々、「いと珍らしく參り給へるかな。久しく見ざりつる程に、めでたくもなり勝り給ふかな。猶女一の宮こそいと心憎けれ。そこと（三）心人に知らせざりつれども、（四）物言ひ觸れぬなかりしものを、あからめもせさせで持給へるよ。仁壽殿の女御の、（五）思ふやうにめでたき人なり。宮仕は、同じき帝と聞ゆれど、上にかぎりなく時めかされ奉りたり、（六）女は、かく世に類なき人に、二つなく思はせたり。（七）めでたし。男御子たちは、いと美しげに、容貌よく、人に譽められつゝ、あまた持たり。たゞ后にするゑ、坊（八）にするゑずといふばかりにこそはあめれ」又他人のいふ、「されど、（九）こ

〔語釋〕
（一）風俗の謠ひ物なるべし
（二）兼雅也「右」は「左」の誤なるべし
（三）「心」は「ことに」の誤歟
（四）方々の女に關係せし仲忠を
（五）「の」衍文なるべし
（六）女一宮をいふ

〔考異〕
（七）たり―たる
（八）東宮にせず
（九）仁壽殿は猶時々他の妃たちに帝の寵を爭はるる缺點あり

仲忠卿右大将に任ぜらる。参内。女官等の拝列。後宴の家事を総覧すべき勅を受く。

（語釈）
（一）右大将兼雅左大将に轉じ仲忠卿右大将となる
（二）正頼
（四）今宮に
（五）相手のなき意歟

（考異）
（三）唐衣濃き—唐衣それも濃き

かくてその日になりて右は左にうつり給ひ、中納言の君右大将かけ給ひつ。御よろこびとて、御装束、蘇枋がさね、綾のうへのはかまなど、あり難きうづしに入れ染めて、装束きて出で給ふまゝに、宮をがみ奉り給ひ、北のおとゞなどによろこび申し給ひて、右のおとゞの御方にまかで給ふ。御供には四位八人、五位十餘人、六位三十人ばかり、御隨身ども、御前すべき人然らぬも多かり。方々の御前をわたりておはすれば、「あなめでたや」など言ひさわぐ。源中納言殿の方を見やり給へば、青色の簾に綺の端さして、懸けわたしたり。勾欄におしかゝりて、簀子に童八人ばかり、青色に蘇枋がさね、綾のうへのはかま、濃きあこめ著て並み居たり。御簾の内に、四間五間にあか色の唐衣、濃きうちきども著たる人居並みたり。大將立ち留まりて、仲忠「君はおはすや」童べ申す、「今朝内裏へ參らせ給ひぬ」おとゞ、仲忠「御方に聞えさせ給へ。よろこび申しになむ。此度はかたきなき心地するを、かつは聞えさする」とて、遣水のほとりよりおはし過ぐれば、う

〔語釋〕
(一)仲忠に大將を讓りたき趣を含めて辭表を作りてくれ
(四)「宣へば」は「宣ひて」歟
(五)仲忠
〔考異〕
(二)てを—てよ
(三)綴り—つくり

わたりにぞあらむ。そのこと藤中納言の朝臣にもがな、と思ふを、その心を思ひて、(一)かの朝臣に讓りげなる氣色とらせてを(二)」と宣へば、すなはち御前にて綴り(三)、書きて奉る。見給ひて、正賴「思ふやうなり」と宣へば(四)、此度はとゞまりなむ、とて奉らせ給ひぬ。

かゝる程に、内裏より中納言の君の御許に、大將かけ給ふべき御消息あり。おとど、宮に、仲忠「かう〳〵(五)の事なむ、仰せられたりつる。設の物などせさせ給へ」と申し給ふ。かゝる程に、内裏より御辛櫃一よろひに、唐綾、やまと綾、織物、一つにはきぬ入れて、「これ、かの日の設のものにし給へ」とて宮の御許に奉り給へり。又源中納言の北の方の御もとより、あか色の織物の唐衣、から裳、すり裳、綟のほそなが、三重がさねのはかま添へたる、女のよそひ五くだり、置口の衣箱にたゝみ入れて奉れ給へり。こゝかしこより、皆かやうにし奉り給へり。ここにもまうけ給ふ。花紋綟など皆具せられたり。

（語釋）
（一）あて宮
（五）出家したるをいふ
（七）あて宮こそあの樣にてありしが
（八）正賴
（九）卜者などのいふ也
（一一）竹折りて卷文を作りくれよ
（一二）未詳、脫あらんか
（今說）
（二）所々に—人と
（三）歎かるれ—なかれし
㊤正賴大將を辭す。
（四）然は—さも、
（六）はぬし—ナシ
（一〇）申せども納められぬ—申すを納められず
（一三）このしき—こしき

人がはりや。かの君は、我だに、同じ所にありならひて、所々になりしかば、いとゞ戀しくて、常に歎かるれ。え然はあらぬものから、仲賴などが樣にあるは、見苦しくこそは」ぬし、仲忠「いとゆゝしき事。よし見給へ、必ず」など聞えて大殿ごもりぬ。

宮に、おとゞの聞え給ふ、正賴「犬は如何ありつる」大宮「いみじく生ひ出でぬべき者にこそあめれ。宮のぞかやうにありしかど、これはいと氣色殊にこそ見えつるや」おとゞ、正賴「父主の、今からいと心にくゝもてなすめるは、如何におほし立てむとすらむ。世の中にありにしがな」と宣ふ。

かくておとゞ、年も老いぬ、愼むべき樣にも言ふを、と思して、大將辭し給ふ御表、一度は奉らせ給ひてしかど、返されたれば、又奉らせ給ふ。此度も留められず。右大辨季英を召して、正賴「かう〳〵公に申せども、納められぬ。實に思して留めらるべく、御心とゞめられよ。このしきは、留められば、論なうこの

〔語釋〕
(二)あて宮
(三)此處誤あるべし
(五)あて宮を見たる人は氣狂の樣になるが常故

〔考異〕
(一)初は—ものを
(四)あらむ—侍らむ
(六)いまそがり—いますがり
(七)何とかは—「と」ナシ
(八)こちたくともなほこそは—こといたくともかれをこそは

まし。初は、いとこそ佗しかりしか、こゝにまうで來し夜までは。見奉りしかば忘れ侍りにき(一)。今はた犬など侍れば、然思ひ侍りけむとこそ。たゞ御心のつらからむにこそ、彼にまさりても。たゞかの御方に御志なく思されたるなむ、恥かしくいとほしくは、さて(三)侍りても何の効かあらむ(二)。源宰相などのあはれにて物し給ふめるも、たゞ今は取り分きたる事もなかめり(四)。疎からぬ御中にこそ、かくおはしたるもよけれ。物思し知らざりけむ昔こそ然りけめ、今は世の中もの思し知りたれば、折あらむ時は、とかく聞え給ひつゝもなぐさめ給ひけむ。餘所人にとても何のかひかは。さてまかで給ふべかなるを、この聞えしこと必ず」宮、女二「言ひしやうに、見たる(五)人の物狂ほしきやうなれば、其處にも然やと思ふにぞ」君、仲忠「何か、今は天女いまそがり(六)とも、何とかは(七)見給へむ。たゞ斯かる中らひに侍るを、さる志もありしに、覺束なからじ、とてこそ。もし初はこちたくとも(八)、なほこそは。そのかみは、御前を他人取り奉らば同じ事ぞや」宮、女二「怪しの

（評釋）
（一）今宮をこそ忠康に奉らんと思ひ居しに不意に涼に與ふべき物合ありしかば本意を遂げざりき
（二）「家の處分」にて財產處分の樣なりといふ意歟
（四）大宮
（五）大宮
（七）多くの下を見たる目
（九）我女一と夫婦にならざりしならば今も彈正宮の樣な心持で居るならん
（一一）女一ならでは我があて宮に對する戀を忘れさするものはあるまじ

（考異）
（三）御物語—御物語などし
（六）宣ひつる—宣へる
（八）とか—とかや—とや
（一〇）失はせ給ひつるこそ—失はさせ給へるこそ

る程なめれど。それをこそ、昔は然も聞えむと思ひしか。思はぬ樣なることの出で來にしかば」（一）三の宮、忠康「それも、え然も侍らざらまし。（二）いへのさうぶのやうにこそ」など暮るゝまで御物語し（三）給ひて、大宮もわたり給ひぬ。女御の君も御方々へおはしぬ。（四）宮、もののはじめなり、とて例のごと取り散らさせ給はず。

かくて中納言、内に這ひ入りて、犬宮かき抱きて、仲忠「犬をば、（五）宮はいかゞ宣ひ（六）つる。（七）おほくの御目に恥かしくこそ」宮、女二「見せざりけりなどこそ」仲忠「見にくしとやありつらむ」女二「親どもには勝りぬべしとか（八）」君、仲忠「仲忠、宮とあるは、さもや見し。さては怪しうはあるまじきものなゝり」宮、女二「よしとこそは思ひけれ」君、仲忠「内侍のすけの言ひしかばこそ。さればこそ聞かせつべしとは聞えしか。彈正の宮の御物語承りつるこそ、然ることぞと思ひ給へつれば、哀なれ。（九）こゝにさふらはざらましかば、かく思う給へてぞ侍らまし。その御心を失（一〇）はせ給ひつるこそ、吾が君はいと嬉しくおぼえ給へ。（一一）他人はかく思ひ消たせざら

かの御局にまうでたりしにも、いと思ふ樣にておはすめりき。多くの人の惑ふめりし御身を。一所見奉り給へば、然らではかひなからむかし。(一)かの君も、今はよづき給ひにければ、まうでたりしにも、いと氣近くものなど宣ひき。早う斯うにてこそはおはすべかりけれ、となむ思ひ給へりし。御容貌もこよなくなりまさり給ひにけり。さは言へど、やんごとなき人につき奉り給ひて、こよなくもてなされ給ひにけり、とぞ見奉りし」大宮、「何かそれは、常に物を思ふなれば、むかしの樣にだにえあらじや。いと久しく見侍らずや。去年の秋あからさまにまかでさせて侍りしかば、「あなずりて籠めすゐたり」などいと憎げに宣ひ(二)しかば、煩はしさに參らせてき。常にまかでむと宣はすれど、まかでさせねば、いみじく恨むるや。この晦ばかりにぞ(三)、然せむと思ひ給ふる」女御の君、「源中納言のは(四)また何時ばかりにかは(五)」大宮「いさ、この頃とぞありしかど、まだ然りげもなしや(六)。それこそいとようなりにたれ。髮などもいとよう生ひためれ、さるは、苦しげな

〔語釈〕
(一)あて宮
(二)東宮が
(四)今宮の産は何時ごろぞ

〔考異〕
(三)にぞ—「に」ナシ
(五)にかは—ぞ
(六)なしや—なかりき

給ひて、忠康こゝにこそ、同じ所にて、よくは知り給へらめ(一)。然宣ひけることも
や、思しあはする事も侍らむかし」と宣へば、宮をかしとおほす。中納言啓しとお
ほす。「三の宮(二)、忠康「さればこそは、なほ昔より數ならずとは(三)」大宮、「など、はかば
かしく斯くなどは宣は(四)ずなりにし。然らましかば、ともかくも聞えてましもの
を。宮仕にとて出だし立てたれど、思ふやうにもあらず、後やすくと頼み聞えし人
さへ許さず、心憂きことどもの多かなれば(五)、常に思ひなげくと聞き侍れば、いとう
たてくなむ。なほ心安くてあらすべかりけるものを、と思う給へつるに」三の宮、
忠康「いとあるまじきことかな。何かとかく(六)思う給へざりき。たゞ答し給はざりし
をのみなむ。今に心憂く(七)なむ。同じやうに文通(八)はしなどし給へりし人も、まめや
かなる心あるものは無かめれど、こゝには、志をだに昔ながらにとてなむ。年頃
は何にか思ほし(九)志して參らせ奉り(一〇)給へりしかひありて、宮は(一一)たこと御心の無
かめれば、いとよかめり。さいつ頃召ありしかば、内裏に參り侍りしついでに、

(語釋)
(四)あて宮の事を
(一一)東宮
(考異)
(一)給へらめ―給ひつらめ
(二)三の宮―彈正の宮
(三)とは―とこそは
(五)多かなれば―多かんなれば
(六)とかく―とくも
(七)同じ―をかしき
(八)文通はし―文あるはかへし通はし
(九)ものは―「は」ナシ
(一〇)給へりし―給へる

たじけなければ、一所をばことにこそは思ひ聞えしか。いと疎々しくこそ思し(一)たれ」三の宮、忠康「年頃は、身の數ならぬを思ひ給へつゝみてなむ」大宮、「など(二)は旅住のやうにては、これもかれも、さてあらせ奉らまほしげに思はれたるを。見給ひづべきも、いとよう聞ゆるや」三の宮、忠康「昔より數にも侍らぬ身なれば、(三)誰かは然思ひ侍らむ」大宮、「などかは然思さるゝ」女御の君、「いざや、この御心にぞ見給へわびぬる。藤壺の里におはせし時、はかなきことを聞え給ひけるに、(四)いらへ給はざりき、とてそれを倦じて、法師のあらむ樣にてのみ、歎きわたり給ひて、ある時は「きんちが拙く、我を人氣なくかう生み出だしたる」とさへぞ宣(五)(六)ふや」大宮、「更に承らざりし。かの人を、兵部卿の宮も然宣ひき。さてはある(七)(八)まじきことなり、と三條の大將さ宣ふと聞きき。源宰相こそ、志あるやうにきゝ(九)侍りしか。更にこそ知らざりけれ」御いらへ、忠康「多くも聞召し殘したりけるかな。いといみじき事ども多く侍りしものを。まづは彼處ぞ」とて中納言を見やり(一〇)

〔語釋〕
（一）忠康をいふ
（二）「などか」歟
（三）君を聟にとり奉りたく思ひ居るやうなるに
（四）忠康の了簡
（五）母の仁壽殿にいふ也
（七）あて宮
（一〇）仲忠

〔考異〕
（六）なくかう—なくは
（八）人を—人をば
（九）志ある—志しぬる

〔語釋〕
(一)五十日の當日を
(二)五十日を小兒の泣聲の「いか」にかけたり

〔考異〕
(三)五十日物—まゐり物

と書き給ふ。大輔の乳母、ほとりに押し付く。

大輔　みどりごの千代てふことは人ごとにならびて誰にと思ふものかは

とあるを人々見給ひて、「乳母ことわりや」とて笑ひ給ふ。

かゝる程に、内侍のかみの殿より御返あり。御使は、白きうちき、はかまかづきたり。御文見給へば、

俊蔭女　これよりも聞えむと思ひ給へるを、日頃はえ聞えさせぬことの侍りてなむ。

さても聞召しつけたるをなむ。(一)

聲かへずいかといふ兒をいかでかはけふのなごりと人の聞きけむ(二)

いと耳敏なりや。

と聞え給へり。かくてもちひ五十日物(三)など參りて、これかれ物聞食して、犬宮は、乳母いだき奉りて入りぬ。

大宮彈正の宮に、大宮などか、彼方にも時々わたり給はぬ。數多おはすれど、か

（考異）
（一）おとらでーおとして

大宮「我をりて松のもちひを くはすれば千歳もつきて おいよとぞ思ふ
女御の君に、大宮「かゝる事ありけりや」とて 奉り給へば、書きておしつけ給ふ。
仁壽「おいのよに千代をのみ知れみとり見のまつの餅をいとゞくふらむ
とて一の宮に奉り給へば、物も宣はず。これかれ、「いかでか」など宣へば、
女一「くひそむる今日や千代をもならふらむ松の餅に心うつりで
とかき給へれば女御の君、折敷ながら中納言の御許にさし出で給へば、取りて見るやうにて、
仲忠「千歳ふる まつの餅は くひつめり 今はみかさの（一）おとらでもがな
とかき給ふを、彈正の宮、「見む」と聞え給へば、仲忠「いとかしこき御手はべれば、え見給はじ」とてさし入れつ。宮、忠康「許されざらむ人のやうに」とて御簾の内にはひ入りて見給ひて、忠康「暇なしや。
忠康「ひめ松も鶴もならびて見ゆるにはいつかはみるのおらむとすらむ

（考異）
（一）からくして—からうじて
（二）すくよかに なり—「に」ナシ
（三）いと—ナシ

時になりぬれば「疾く〳〵」とあれば、兒君いと出だし立て難くし給ふ。（一）からくして御湯殿などして、綾の御衣一かさね著せ奉りて大輔の乳母といふ抱きて參りたり。女御の君かき抱きて見せ奉り給ふ。大宮見給へば、いと大きにて、頸も（二）すくよかになり、白ききぬに柑子をつゝめる樣に見えて、いと白く美しげなり。大宮「これを今まで見せ給はざりける。かゝる人（三）いと多く見つる中に、これはまだ見ぬ樣なり。かゝらぬだに、さてもありぬべくなるを、いとをかしかめり」女御の君、「いざ、見にくし」とて隱さるれば宮、大宮「されど、親たちにも勝り奉りぬべかめり」とて餅參り給ふ御折敷見給へば、洲濱に、高き松の下に、鶴二つ立てり。一つは箸一つは匕くひたり。松の下に、黄金の匕して、帝の御手してかゝせ給へり、

朱雀みどりごは 松の餅を くひそめて 千代々々とのみ 今は いはなむ

とあるを大宮見給ひて、白き薄樣に書きておしつけ給ふ。

と清らなり、又、御前どもの料に、沈香の折敷十二づつしたり。檜割籠五十荷、皆沈、蘇枋、紫檀などなり。寄物なども同じ物、袋しき物のくゝり緒などもいと清らなり。いり物は、皆まゐり物、かたへはかさね割籠一かけ、御前に參るばかりしたり。たゞの割籠五十荷そへて參れり。御前の折敷どもは、大宮、一の宮、女御の君の御前に參る。重ね割籠、中とりて、宮、中納言などには參る。内侍のすけ、大輔の乳母よりはじめて、御たちまでなり。檜割籠三十荷、たゞの五十荷そへて、内侍のかんの殿に、女御の君御消息して、

〓日頃聞えざりつる程に、かゝる日までもなむ。それより。

など書きて、

〓これは、

いか〳〵ときゝわたれども今日をこそ餅くふひとわきて知りぬれ

とて奉り給ふ。藤壺に同じ數に奉り給ふ。かくて餅參るべき時なれば、その

〔語釋〕
(一)實賴の父季明
(二)實賴に贈る
(三)實賴が注文して
(八)かざりにつけたる造り枝

〔考異〕
(四)ことなりければ—ことなりそれは
(五)無くては—ならでは
(六)同じき—同じ
(七)敷物—ナシ

にあらむ物どもを、用に隨ひてものせよ」とおほせ給へば、大政太臣(一)の曹司にて、銀の鍛冶、鑄物師など召して、急ぎせさせ給ふ。「仰せごとにて、かゝる事し給ふなり」とて、所々より、檜割籠手をつくして(二)奉り給ふ。さもしつべき人々には「かゝる事なむある」(三)と言ひて、せぬ所なく、この事急がす。かくて其の日になりぬ、女御の君、大宮の御方に、仁壽「犬に餅くはすべき日になむ侍りける。如何にすべきわざにか」と聞え給へり。大宮、「人に知らせでするやうに、いと多かること(四)となりければ、こゝにのみなむ。わいてもろ〳〵無く(五)てはせぬ事になむ」女御の君、仁壽「いかでかは。いと多くさふらひたり。其方にやは參るべき」と聞え給へれば、大宮「今其處にを」とて、大宮「今日だにわたりて見む」とておはしましたり。頭中將、御前どもの物など參らせ給ひぬ。犬宮の御前には、銀の折敷、同じきたかつき(六)にすゑて十二、御器どもは、わたり三寸の沈を、轆轤に挽けるなり。餅四折敷、からもの四折敷、くだもの四折敷、敷物(七)心葉(八)、い

（語釋）
（一）仲澄
（二）「なむど」は「など」歟
（三）「ある人」は「あてこそ」歟
（六）仁壽殿
（八）正頼

（考異）
（四）中らひに－中らひなるに
（五）こと－ナシ
（七）斯うく－かく

●犬宮五十日の祝儀、彌正宮大宮と物語。仲忠夫婦の物語。正頼夫婦の物語。

宮をいかでかと思せど、聞え寄るべくもあらねば、心一つに思す。さて、正頼「こ（一）の人の爲めに、なほ誦經などせさせ給へ。その誦經の文には、「なほ思ひの罪免らかし給へ」と右大辨季英の朝臣に仰せごと賜ひて、願文書きてせさせ給へ」と聞えて立ち給ひぬ。おとゞ、正頼「この朝臣、そゝめきたりけるは。いとまめなりと見るものを、なむど（二）たはことは多くしつる」宮、大宮「ある人（三）をぞ、年頃けしきありて聞えけるや。それを今はと思ひて、言葉散らすなめり」おとゞ、正頼「うたて、疎からぬ中らひに（四）、かゝる事どものありけること（五）」と宣ふ。かくて侍從の君の爲に四十九日の内に、布七匹づつ誦經にせさせ給ふ。

畫詞　こゝは北の大殿。

かくて犬宮の御五十日は、女御（六）の君し給ふべきと、内裏に聞召して、これより忍びて奉らむと思して、頭中將實頼に、朱雀「斯うく（七）思す事なむある。かの右（八）の大臣の家にはあらぬ所にて、そのこと物せよ。その具の物どもは、納殿

〔語釋〕
（一）仲澄
（二）行くべき處へ行かれぬ樣に
（三）誤あるべし
（四）女一宮、仲忠の妻
（五）祐澄

は養ひ立て給へ。此のわたりこそ、豚の侍らむやうに、物の用にすべきものなく、稀々よろしかりしは、はかなくてまかり隱れにしかば。まめやかには、故侍從の藤（一）壺の御夢に思の罪に、（二）途ならぬやうに見え侍る」など申し給ふ。おとゞ、正頼「何事をかは然思ひけむ。我等をつらしと思ふこともあらじ、官爵のことは限あれば」御いらへ、祐澄「男は女につけてのみこそは」正頼「此の中には誰かは」祐澄「中のおとゞの宮たちの中にこそは」大宮、心を得給ひて、然ば然なりけりと思はして、いみじう泣き給ふ。おとゞ、正頼「など然る氣色見給ひしや」宮、大宮「否や。然もあらずや。なほ然るらむ。かゝる氣色ぞ（三）やみ給ふ。すべて、よくもあれ惡しくもあれ、男女にてぞあるべかりける。中の大殿にて、夜晝ありて、憎げなき人々のあまたものし給ひしかば、さやうなるにやありけむ」おとゞ、正頼「一の（四）宮なりけむ。それぞ人に思はれぬべき樣し給へる」宰相の君、をかしと思へど、かたはらいたければ申し給はず。（五）この君、一の宮をいかでと思しける。今は二の

(卌)祐澄父仲に對面、仲澄の退出、

(評釋)
(一)限あるべし、「たのめとも」又「たのめに」
(二)仲忠
(三)東宮をも
(四)仲忠をいふ
(五)仲忠を
(六)「外にまかり通ふ所なくて侍りしか」歟
(七)從隆女は一人子なれど仲忠をあの樣に立派に養ひ立てたり

君、あて宮「恥かしの事や」と宣ふ。宰相の君まかで給ひぬ。

卌　詞　こゝは藤壺。

かくて北のおとゞにまうで給ひて、祐澄「事の序に藤壺にまうで侍りしかば、しかじかの事を宣ひしはや」大宮「かの産屋の折のことを思ひたるなゝり。天下にいふとも、たゞ人は限あるものを。(一)あねにはたのめとおほえなむとおほえさふらひて、かたち心するわざに心つくものなれば、(二)左衛門督をぞ、ねたくなど思ふらむ。さて、(三)宮をも心に入れ奉らぬなるべし。(四)あれにはまた目ざましき人にはたおり」宰相、祐澄「男に侍る祐澄だに、濁くも侍らざりし人なり。故侍從は、(五)これを妻子のやうにてこそ、これにまかり通ふ所ならず侍りしか。男だちだに然る心ありし人を、この事侍らで(六)夜晝さぶらはせ給ふなること侍るらむ、と思ふこそいと不便なれ」大宮、「うたて近き所に聞えもこそあれ」宰相、祐澄「空言を申し侍らばこそは侍らめ。「よくも知りて侍るかな」とこそ聞召さめ。(七)人は一人なれど、かやうにこそ子

になして、言も出ださずなりにけるにこそ。祐澄しかことのふてうのおぼえぬわざわざはしてまし。あるはまだ宮に參り給はざりしその年の秋の頃(一)、さやうなら(二)む人もがな、とは思ひ侍りし」と宣へば、君うち笑ひ給ひて、あて宮「なき人の御樣にこそ。(三)かの君は、物を思ひしけにやあらむ、見苦しきことなむ見え給ふ」と宣へば、祐澄「あはれの事や」(四)などて、祐澄「常にもとぶらはむとすれど、流石にもの騷がしくてのみなむ。大方をばさるものにて、思しかけむことなどは、などか宣はぬ。(五)かの宮に侍りし物どもも、いかでかは、などか斯うなども宣はせざりし」あて宮「それは、かねてより「さやうのこと、思はむにこそさせむ」(六)と(七)宮の宣ひしかば任せ奉りてなむ」宰相の君、祐澄「金などのいと多く侍りしを、(八)いかでせさせ給ひけむ」あて宮「それをなむ、し煩はせ給ふ。上に奏せさせ給ひ、上にさふらふ陸(九)奧國の守などに召しつゝなむ。さても足らざりければ(一〇)、下には他物入れさせぬとなむ聞きし。人や見けむ」祐澄「中納言こそ取り寄せつゝいとくはしく見給ひけれ」

〔語釋〕
(一)誤あらんか
(二)あて宮の如き女を得たしと
(三)仲澄
(四)「などとて」なるべし
(五)女一宮への贈物なども私に仰せ付けて下さればよかりしに
(六)誤あるべし、一本「こそ」なし
(七)東宮
(九)陸奥は古より金を出せり

〔考異〕
(八)いかで—いかゞ—いかに
(一〇)足らざりければ—足らざりしかば

祐澄「いで、されどいとよく知りて侍り。然ば聞えむかし。侍從(二)の上に侍らずや。つねに然見給へき。御德(三)にぞそこなひ給ひてし人ぞかし」(四)女御ぎみ、あて宮「つねに夢にぞ見給ふや」(五)と宣ふまゝに泣き給ふ。宰相の君も泣き給ひて、祐澄「つねに、聞えむと思ひ給へれど、事の序もなく、常に人騷がしかりつれば、聞えざりつるこそ。如何なりし折に如何に聞えそめしぞ」君、あて宮「いでや、いみじく恥ぢ隱し給ひしを、人に聞ゆな(六)と亡きかけにてもこそ見給へ」祐澄「祐澄をば、數多(七)あれども、そが中に親子の契なしたりしかば、然も思さじ」あて宮「何かは、知り給へれば。まだ少かりし時、箏の琴ならはしゝ心(八)なむ、怪しく思はぬ樣なる氣色なむ見えし。さて、年頃泣きうらみ給ひしかど、見知らぬやうにて歇みにしを、參りて後にも、かかる文をなむ奉りし」とて取出でて見せ奉り給ひて、あて宮「これを持て來て、すなはちなむ、然は言ひ(九)に來たりし。これを心一つに思ふなむいみじう悲しき」とて泣き給ふ。宰相、祐澄「心の、いと見まほしう、(一〇)かしこかりしかば、身を徒ら

(語釋)
(一)仲澄
(二)仲澄はあて宮の面かげにて死にたる人なり
(四)「女御」衍文なるべし
(五)「見え給ふや」歟
(七)兄弟多けれども
(八)「心」は「こゝろ」の
(九)仲澄の死を告げ來れり

(考異)
(三)御德にぞ—御德に—御德にこそ
(六)聞ゆな—聞ゆる
(一〇)見まほしう—みさをに

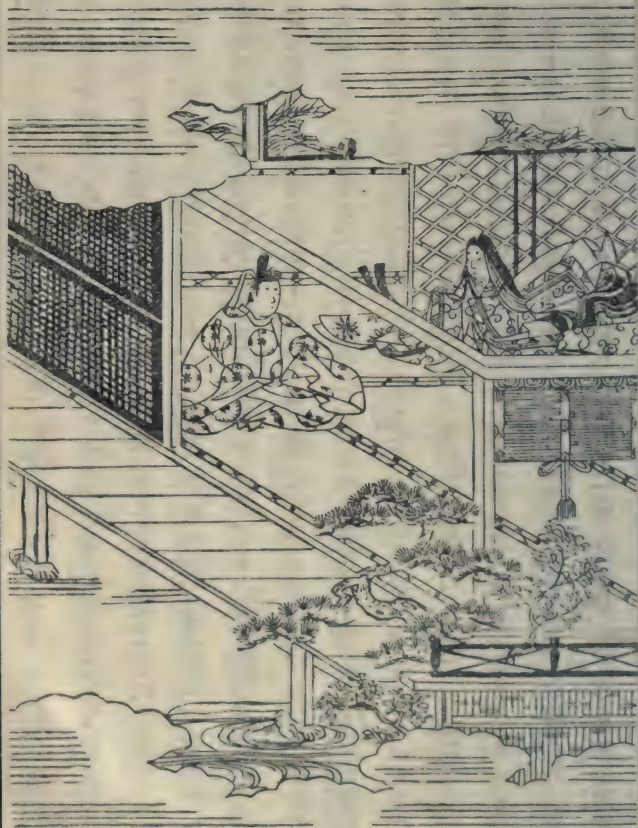
し」君、あて宮「さ思ふべき人こそなけれ。誰をかは。源宰相こそ、今に恨み言ふなれ。まことに思ひけりとは聞け。さてはまことの心ありける人し無ければ、然思（一）ふもなし」祐澄「右大將（二）殿は、さ宣ひてこそは、ものし給はずなりにしか」君、あて宮「然らずとも、それはあからめし給ふべき人ならばこそ」祐澄「いで祐澄を制し給はじやは。左衛門督（三）なども、いたく溢りしを、制し宣ひなどして、おとゞのし給へ（四）るぞかし。今は思ひなぐさみ給ふべかめり。此頃は（五）いと警策なりや。ねびもてゆくまゝに、光をぞ放つべき」君、あて宮「久しく此のわたりに見え給はず。こゝには、月の宴し給ひし時に、消息言はせ給へりし」祐澄「いで、今さへ御消息あちきなかり。なほ人の歎きは生すらむかし。彈正宮も思し倦じにたるにや、これもおはせとのみあめれど、斯くてのみ見え給ふは」あて宮「今一つ、人には聞えで心地にはいみじく悲しと思ふこともありや」宰相祐澄「何事か。もし祐澄が、氣色見給へりし事か」あて宮「いで、いかでか見給へ（六）む。人の知るべきにあらずや」

〔語釈〕
（二）兼雅
（三）俊蔭女の外の女にわき目をふるべき人にあらず
（五）仲忠が
（六）「見給へむ」は「見給はむ」歟

〔考異〕
（一）思ふも—思ふこと
（四）給はじやは—「は」ナシ

（語釋）
（一）誤あるべし
（三）誤あるべし
（四）誤あるべし
（五）昔懸想したりし多くの男の中に
（六）仲忠
（七）誤あるべし

（考異）
（一）と思されーとは思されれ
（八）見給へむーナシ

給へば、ことに花やかにも見え（一）給はず、むつかしきまゝに、目も見合せ奉らず、むつかれば、心よからずと思され（二）ためり。いと（三）心ようなけれ。里にありし昔のみ戀しくて、「あらじものを、何せむに、かく出だし立てられておらむ」と思へば、心憂く、悲しきことも多くなむ」宰相の君、祐澄「あやしき御心にこそあなれ。宮は、御心才も猶ことにはあひおはします。御み遊びなども、誰にかは、し劣り給へる。宮仕し給ふ人（四）は、敵多かるこそはよけれ。淺ましきこそは、惡しうはすれ。昔の人の中に（五）、あはれと思ほすやありし。左衛門督（六）なりけむかし。それにぞ、下臈なれど、返事などし給ふなりし」あて宮「それは、手のよかりしかば、見むとてにぞ」宰相、祐澄「今やは御覽ぜぬ。いとかしこくなりにて侍るめるを」君、あて宮「さて見しかば宮に聞えたりしかば、かしこも、かれぞかは（七）り奉りて返事かきし」宰相、祐澄「いでその返事し給ふ文給へ。見給へむ（八）。論なう私ごと侍りけむかし。物聞えし人々の中には、誰をかは心とゞめては思ほし

（語釋）
（一）誤脫あるべし
（二）誤あらんか
（五）誤謬
（六）女一宮の身上を記する也
（七）仲忠
（異本）
（三）をぞ—「をさ」ナシ
（四）と宣ふ—など宣ふ
（八）すみ給ふれ—ナシ
（記）宰相あて宮を訪ふ。直後の時、

心に入れてせぬわざ〳〵無くしけるは、この子を憐しと思ふにこそはあなれ。手傳へむとや思ふらむ」おとゞ、正賴「然申し侍りき。「この手を如何にせむと思ひ侍りつるに」と申し侍りき」うへ、朱雀「かぎりなかりき。（一）したり顏に然て言ふめる。興あること。出で來べき御家なども、思ふやうならば、その家は、かうぶりも得つべき所ぞや。倭琴、琵琶は誰か彈きし。笙の笛などは誰か吹きし」など委しく問はせ給ふ。正賴「箏は彈正の宮なむ。琴どもは誰にか侍りけむ。一つにあそびて、ことに違はず侍りつるなりき」朱雀「さやうのものをぞ、（三）子持の臥しながら琵琶ひきたる」とて笑はせ給ふ。朱雀「仁壽殿、（二）倭琴は名高きぞかし。すべていといみじかりける夜かな。これを聞きたらましかば」と宣ふ。（四）おとゞまかで給ひぬ。

（五）宰相中將藤壺にまうで給ひて、有りし御物語し給ふ。君、あて宮「中々いとよしや。（六）世に心にくく思ひたる人につき給ひて、（七）一所心やすくすみ給ふれ。（八）己こそ、かゝるおほたかかりに出だし放たれて、かにかくにまが〳〵しき事を聞き見

〔語釋〕
(一)犬宮
(二)生れたりと聞きて
(四)誤あらんか
(五)誤あらんか
(九)誤あらんか
(一〇)大宮に

〔考異〕
(三)舞をなむし侍りしー舞なむ侍りにし
(六)あだなけれーあなたけれ
(七)けるは如何にせしぞーける如何にせし
(八)おとゞーナシ

る、りうかくとなむ承りし。それはなむ、かの兒になむ取らせ侍りにける」うへ、朱雀「いといみじき物得たりける女子にもあるかな(一)」と宣ふ。正頼「然に侍るなり」正頼「さてかの朝臣は、如何思ひたる。らうたしとは思ひたらむや」おとゞ、正頼「知らず。いかに思ひて侍るにか侍らむ。然(二)聞きて侍りしすなはち、舞をなむ(三)し侍りし。日頃は、夜晝懷離たでなむ侍るなる」うへ、笑はせ給ひて、朱雀「思ふ様なりかし。何か(四)はしらむかの親族は。女子も、よろしきは惡からぬものぞかし。さりげもなき人の子をもるらむこそあだなけれ(五)(六)。いかでこれに慶もせさせてしがな。さて、九日に當りける夜になむ遊ばれける(七)は、如何にせしぞ」。おと(八)ど、正頼「琴ども三つ、一つ聲にしらべて、一つづつなむ彈き侍りし。さうが(九)の家のうちに、琵琶は女一の宮、賜はせし御琴倭琴は、侍る(一〇)ところに嵯峨の院より賜はせためりしきりかぜといひ侍る、さて、女方に入れて侍りし笛どもは、これかれに賜ひて、自らは横笛をなむ吹き侍りし」うへ、朱雀「いみじかりけることかな。

（語釋）
（三）源中納言は、仲忠の誤なるべし

❶正頼參內、東宮の有様を奏す。

（考異）
（一）いとゞ然はあらねど―いときはあらねど
（二）中にも…恐ろしの―中の見にくものぬし恐ろしの
（四）事も―事にも
（五）なむ―いと

高く優れたること、いとゞ（一）然はあらねど、見まほしう抱かまほしげなることは又無かめるを、さればこそ內裏の上は、籠り臥しがちにはおはしますめれ」宮、女二「さばかりの心地は、何處にかものし給はぬ。源中納言の今こそは藤壺にもことに劣らぬぞかし。內裏の上こそ中（二）にも似るものなくものし給ふれ」仲忠「恐ろしの事や。な宣ひそ。心地騒がし」など御物語しつゝ、御帳のうちに籠り臥し給へり。

（三）源中納言のおとゞ內裏に參り給ひて、御前にさふらひ給ふ。うへ、朱雀「久しく參られざりつるかな」おとゞ、正頼「侍る所に觸穢のさぶらひつれば。尙かの後は勞りどころの侍りしかば」うへ、朱雀「然りけむ。その程の事どもは如何ありけむ。此頃、上の男どもは、其處の興ありしことを、樣々いふめる。涼の朝臣と行政とを笑ふなるは如何なることぞ」おとゞ、正頼「何でふ事（四）も侍らざりき。右大將の朝臣の內侍のかみなど、琴彈き侍りし程なむ（五）、興侍りしや。いと有難かりける事ぞや」うへ、朱雀「その琴はいづれぞ」おとゞ、正頼「內侍のかみの昔より彈き侍りけ

〔語釋〕
(一)女一をいふ
(二)自分が人らしき女ならぬ故
(四)あて宮
(五)女一宮をいふ
(八)あて宮腹
(九)仁壽殿
(一〇)女一が仁壽殿に
(一二)仁壽殿の

〔考異〕
(三)こそは—「は」ナシ
(六)には—「に」ナシ
(七)宮こそ—宮にこそ
(一一)給へりけるかな—給へりけりな

なりにしものを。いとよく然りぬべき折もありしかば、帝の御女(一)も賜はらずやありける」宮、女二「それは、わが人にもあらねば(二)、御子の數にも思さで、たゞに棄つとこそ(三)は思しけめ。昔は鬼にもこそは賜ひけれ。たゞ人なれど、この君(四)は、親のさばかり思ひかしづき給ひしを、天下に思ふとも何業かせまし」仲忠「そはかしづき女(五)をこそ、かゝる事し給ひけりな。さらば唯棄てられ給へるなり。さても志淺きにはあらざなり。なずらひ給ふべきわが身にもあなりや。まことには(六)、恐ろしきものは、彈正の宮こそ(七)おはすめれ。物も宣はず、御妻もなくて、年月を經給ふに、何心を思すらむ。よし、見給へよ。これぞ事は引き出で給はむ」女二「この東の對におはします、東宮の若宮(八)たちこそ、恐ろしきものは世におめれ。如何やうに生ひ出で給はむとすらむ。今ゆくさきの君がねにやはあらぬ」仲忠「まことに、女御(九)の君を、騷がしかりし曉に見奉りしはや(一〇)。いとよく似奉り給へりける(一一)かな。内侍のすけのよそへ殘し奉りつるこそをかしけれ。その(一二)御容貌は、げに氣

ふらはゞ、又聞え過しもし侍る」など(一)て、犬宮かき抱きて入りぬ。小納言、宮に、仲忠「いみじうも物言ふものかな。別いても、(二)里人を褻むるぞ空目なる。藤壺の御方まかで給はゞ必ず見せ給へ。内侍のすけの言ひつること、まことかと見くらべ奉らむ」宮、女二「まことぞ。いとよく物言ふかな。かの君は、見るまゝによくなりまさり、我は日々に怪しくぞなるや。昔だにこよなかりけり」(三)小納言も、仲忠「いみじき御かたはにもあるかな。見なしにやあらむ、(四)うたていと恐ろしげにおはすとは見奉らぬを、さなることは必ず見せ奉らせ給へ」宮、女二「いでそこたゞに(五)はあらじ。事引き出でて騒がれば、聞きにくからむ」(六)君、仲忠「よしと見奉るとも、今は何ごとにか。昔だに、ひき出でずなりにしことを。上達部の御女の、(七)ゆるし給はぬことを強ひて(八)取りもて去にもしたる人をば公は何の罪にかあて給ふ。又殿(九)も、仲忠をころし給はではやみ給はずこそあらましか。それも、琴一聲かい彈きて聞かせ奉らましかば、憎みもはて給はざらまし。然りし時だに、過たず

（語釋）
（一）「なとて」なるべし
（二）仮隣女
（三）「中納言も」の「も」衍なるべし
（五）あて宮を見たらばよくもや隣にては濟まされまじ
（七）あて宮をいふ
（九）正賴

（考異）
（四）うたていと―御前をも
（六）からむ―からむかし
（八）取りもて去にもしたる―取りもいかにもしたる

やうにも思したらざめり」中納言、仲忠「長さは、この(一)御髪と如何に」すけ、「然ばかりにやおはしますらむ」宮、女二「われは人か。かの君はいといみじきものを。金の漆のやうにこそあれ。同じ所にありし時、常にくらべて見しかば、かの御髪は、色と筋とは殊なりしものを」すけ、「宮斯くばかりこそはおはしまさめ。嫗がつくりごと聞えさするにやは。なほ見奉り給へかし。それを、(二)かの御方の、いと恐ろしくおはしますは、ついまさり給へれば、(三)見まさりにこそはおはすれ。又(四)おとどの君の恐ろしくおはしますは、(五)宮の御前におはすれば、宮の氣劣らせ給ふこそ。藤壺の方はしも、(六)殿下のおとどえうち奉らせ給はじ」おとど、仲忠「忝くはいかで(七)かうたれ給はむ」すけ、「否や。まことはいとぞいみじきや。たゞ今の人は、三條殿の北の方(八)一、(九)藤壺二、(一〇)宮三(一一)にぞおはすめれ。(一二)男は御前ぞ一におはしますめれ」(一三)中納言、仲忠「まばゆくも宣ふかな。そこにあらば、心地すぎぬべけれ」と宣へば、すけ、「さては思ほえずかし、傍ほとりも」(一四)などて、「罷り立ちなむ。今しばしもさ

〔語釋〕
(一)女一の
(二)藤壺の常に美しく見ゆるは傍なる東宮に比較する故一層見まさりするなるべしとの意歟
(四)仲忠
(五)仲忠が女一の前に居る故女一が見劣りする也
(六)「殿下」は「天下」「えうち」は「えかち」にて藤壺に對しては流石の仲忠も之を壓倒する譯にはゆくまじの意なるべし
(七)「うたれ」は「かたれ」歟
(八)俊蔭女
(一一)女一
(一四)「などとて」なるべし

〔考異〕
(三)見まさりに—見まさりしに
(九)一—一に
(一〇)二—二に
(一二)めれ—める歟
(一三)めれ—める歟

（語釋）
（一）此兒もあて宮の如く帝に仕へて寵を專らにすべき美人になるべし
（二）此樣な赤兒がやがて成人して、あて宮をいふ
（四）東宮
（六）あて宮の髮の美しさを形容する也
（七）懐胎の御樣子と見えて

（考異）
（三）今はいといみじや—今いといみじや
（五）並ばせ—並び

とてむつかり給ふ。内侍のすけ、「この御子よ。藤壺の御方の兒顔に似奉り給へるかな。かれは少し小くぞおはせし。これはいと大きなりや。嫗おのづから思ふやう、（一）上仕うまつり給ふべき人などは、又も出で來給ひぬべかめり。（二）かゝりし人こそは、おひ出で給ひて、萬の人まどひはてさせ給ひしか。今はいといみじや。（三）御年加はり給ふまゝに、あてに上臈しさのみまさりて、突きもし奉らば亡せもしつべきおほん顔つきにて、花を織りたるごとぞなりまさり給ふ。（四）宮のつい（五）並ばせ給へば花のかたはらの常磐木のやうに見え給ふこそ。先つ頃參りて侍りしかば、更に御宮仕のやうにもあらで、たゞの人の御中らひの樣にぞおはしますや。宮おはしまして、何事にかありけむ、聞え給へりしかば、うちむつかりおはしまして、御髮を繰り出でて、御座のまゝにうち添へさせ給へりしを、見奉りしかば、（六）登しかけたる如して、筋も見えず、隙もなく、同じやうに見え給ひしかば、萬のこと忘れて齡延ばはる心地こそし侍りしか。さるはこの頃、（七）御氣色にやあらむ、例の

ものを、うまれ給ひしすなはちより、御懐離ち奉り給はず、御尿にそぼちおはします。萬のこと、居立ちてし奉り給ふを見奉り給へれば、嫗もいとあはれに悲しくなむ見奉る。御湯殿は嫗仕うまつりはてむ。(一)こゝら斯かる所の宮仕し侍りつれど、御迎湯参り、その行事をこそ仕れ。たゞ藤壺の御局になむ、大殿の「あまた出で來ぬる中に、これはいとかなしく」など宣はせしかば、(二)御湯(三)殿参り侍りし。(四)この宮の御時には、御迎へ湯をなむ参り侍りし」と聞ゆ。中納言仲忠「いと嬉しかりなむ。(五)なほ然し出で給へ。(六)女子は、見るかひなくおひ出で給ふはくち惜しかるべし。(七)湯浴しがらとかいふなるものを、し出で給へらば慶びもかしこまりも聞えむ。あまた人には見せじとなむ思ふ」と宣ふ程に、父君に尿多にしかけつ。宮に、仲忠「これ抱き給へ」とてさし奉り給へば、女二「あなむつかし」とて押し遣りて、(八)うちそむき給ひぬ。君、仲忠「頼もしげなの人の親や」とて内侍のすけにさし取らせて拭はせ給ふ。宮、女一宮「いかに香臭からむ。おなむつかしや」

（語釈）
（一）あて宮出生の時は
（二）正頼
（四）女一宮出生の時
（六）あて宮女一の樣な美人にしてくれよ
（七）兒は湯のつかはせ樣によりて美しくも醜くもなるといふ說のありしなるべし

（考異）
（一）はてむ—はててむ
（五）嬉しかりなむ—嬉しかなり
（八）遣りて—いでて

に奉り給ふ。中納言見給ひて、仲忠「げにいかで参らせ奉らむ。(一)こゝろよく(二)直り給ひなば参り給へかし」宮、一女宮「あな恥かし。さらぬ時だにつれ〴〵とまもり給ふものを、今はいかでか見え奉らむ」きみ、仲忠「過やはし給ひつる。御心(三)とありしことかは。あなあぢきなの御物恥や。仲忠をも、参る時は、御前に召して、さぞ御覧ずるや。いかに思召すにかあらむ、うちほゝゑませ給ふ時々もけれど、つれなくもてなしてぞ候ふや」など聞え給ふ。

御座所も、奥なる所も、照りかゞやきて見ゆる。御調度など更なり。御産屋どもはみな人おろす。(四)御帳のかたびら、御衣どもも、よきは内侍のすけ、さらぬ物ども、一つづつおろす。この内侍のすけは院の大后の宮の人、(五)若くより、かくよき人の御子生みに(六)仕うまつり給ふ人なり。年は六十餘ばかりなり。(七)中納言は、内裏にもをさ〳〵参り給はず、ありきもし給はず、宮と犬宮とを抱きうつくしみて、居給へり。内侍のすけ、御前に居て、内侍「今の程は、何とも見奉り給ふまじき

（語釈）
（一）女一を参内せしめん
（三）仲忠との婚姻は
（四）頂戴す

（考異）
（二）こゝろよく―こゝちよく
（五）宮の人若く―宮の御人なるに若く
（六）生みに―生み給へるに
（七）なり―にてあり

參り給はむ時は、御子たち、女御子、ゐて參り給へ。かの子持(一)も、久しくなりにけりや。おとなしくなりたらむこそいぶかしけれ。まことや交野の鳥のつらにぞ(二)なさるゝか。されど、これをこそ(三)。

とて、

朱雀 餘所ながらなかよどみする淀川にありけるこひをひとつ見るかな

なほ疾くを。

と宣へり。乳母のは、

乳母 かしこまりて承りぬ。みづからも參りて聞えさせむと思う給へつるを、御あえ物のゆゝしき程に、すぐし侍るとてなむ。賜はせつる風藥なむまうけまほしく侍りき。御消息、斯くなむと奏し侍りつれば、御時よく御覽じて、御文侍り。他事は、みづから聞えさせむ。

と聞えたり。女御の君見給ひて、仁壽「内裏よりかくなむ宣はせたる」とて一の宮

〔語釋〕
(一)女一宮

〔考異〕
(二)つらにぞ—つらき心に
(三)これをこそ—これこそ

（語釋）
（一）「おとゞたちは」歟
（二）爲はせての誤歟

（考異）
（三）樣々に――いと樣々に
（四）なむ――ナシ

つゝ見て、乳母「いとをかしくしたりける物どもかな。理ぞや、内侍のかんの君の御産屋の物、いかでかは斯からざらむ」など言ひあへり。靫負の乳母、「おとゞ(一)たちは、この乾物を一きりづつうち割り給へ」とて、「他物は風樂にせむ」とて取りつ。

かくて奉れ給へるもの、御文などもて參りて、御覽ぜさすれば上御覽じて、朱雀「わざと麗しくしたりける物どもかな。靫負が語りつらむは何事ぞ」と宣ふ。靫負「このかつほづくりをたばはせて(二)切り侍りてこれかれにたばはせつ」と申す。朱雀「樣(三)樣にをかしくしたりける物どもかな」と宣ひて、餌袋は后の宮に、朱雀「女一の宮の殘り物とてものし給へるなり」とて奉れ給ひつ。鯉雉子などは、この頃御子産み給へる、時の更衣の御許に奉り給へり。朱雀「御文はわれ書かむ」と宣ひて、朱雀これより聞えむとしつる程になむ(四)、靫負がもとに宣へるを、今は參り給ひねかし。世の中のはかなくのみ覺ゆるを、御子たちをしば〳〵見ぬなむ。

大將殿の(一)女御の君、梨壺より奉れ給ひし黄金の甕に、供御を(二)入れかへて、それに添へたりし鯉、小鳥、ひぼし、餌袋に入れながら、藤壺より奉れ給へりし雉子そへて、內裏に奉れ給ふとて、志ありて仕うまつる靫負の乳母といふが許に御文つかはす。

仁壽 日頃物さわがしくて聞え(三)ずなりにければ、などかそれよりも訪ひ給はぬ。さてこれは、子持の御殘り物なり。いとさむき頃なめるを、風もやらひ給へとてなむ。この雉子などは、上にまゐらせ給ひて、(四)交野(五)にも御覽じくらべさせ給へ。

とて、乳母のもとには、沈のたかつき五つ、銀のつぼの小きに、黑方入れ、蜜入れたる黃金のかひ(六)五つばかり、沈のかつほ(七)造りにしたる一包、青き色紙どもにつつみて、五葉につけて奉り給へれば、乳母たち、臺盤所にさふらふ折にて、見れば、こと命婦たち、「何處よりあるぞ。興ある物どもかな」と言ひさわぐ。乳母、「仁壽殿の女御の君の女一の宮の御產屋の殘り物とて賜へるぞや」とて引き開け

〔語釋〕

(一)「大將殿の」衍文なるべし、この女御は仁壽殿なり

(五)河內の交野は當時の御獵地なり

(七)鰹のやうにこしらへたる意歟

〔考異〕

(二)供御を―「を」ナシ

(三)聞えず―聞えずも

(四)給ひて―給へ

(六)かひ―ひつ

の御心いかでかはありけむ」中納言、仲忠「時々參り侍る。更にさる御氣色もなく、御心うつくしくなむ、御前に召して宣はする」おとゞ、兼雅「猶人はさふらふや。如何に思すらん、つゝましかりつるを、よべこそいと哀に覺えしか」と宣ふ。北の方大宮の御返きこえ給ふ。

御隨女かしこまりて承りぬ。しばしもさふらはむと思ひ給へるを、むつかしきひきさけ人の急ぎ侍りつればなん。いとあはれなる人も、見奉ら(一)ではおほつかなく侍るべければ、(三)いとむづかしきまでなむ、參り來べき。(三)さてこれは、宿守のぞむ人おほく侍るべかめる。まことや「山ちかく」と宣はせたるは鹿の音にや侍りつらむ。

と聞えさせ給ふ。女御の君の御返も、かやうになむ。御使どもなんどに、かつけ物、祿など賜ひて御返聞え給ひつ。中納言、「今彼處にもさふらはむ」などとてかへり給ひぬ。

（語釋）
(一)引續つて歸る人、袈別をいふ
(二)留守の人々に歸へとありし返事也

（考異）
(一)いとーいま

も、仲忠「まだこゝそ見給はね(一)」とて見給ふ。仲忠「これもいとよき御手にこそ」父おとゞ、兼雅「昔より名取り給ひつる上手にて、藤壺の物せしに劣らざるらむ」中納言、仲忠「一日(二)見給へりしは(三)、これに勝りてこそ侍りしか」など宣ふ。奉り給へる物ども、御前に並めする御馬どもひかせて見給ひて、おとゞ、兼雅「煩はしく、疎からむ人の様にもはた、后の宮よりも忝く(四)せさせ給へりけるかな(五)。御息所の御中は(六)、よろしくもあらぬを、そこによりてせさせ給へるにこそはあらめ(七)」中納言、仲忠「仲忠が許になむ御消息聞え給へることなどあまた侍りき」おとゞ(八)、兼雅「いと煩はしう、人々の事々しく(九)し給へるこそいとほしけれ」中納言、仲忠「いといかめしきこと、多くし給へりつるかな(一〇)。彼處にも、立たむ月ばかりにはかゝる事は侍るべかなるを、訪はではえ侍らじ。そが中にも、梨壺のいとあはれにて訪はせ給へりしこそ、いかでなりけむと見給へりしが」おとゞ、兼雅「そがいと哀なりしをぞ見しや。其處を(一一)ばよしとも宣はじを、宮何心(一二)に思ひてし出し給へりけむ。宮

〔語釈〕

(一)「見給へれ」なるべし

(二)先日わが見し藤壺の文は

(六)后宮と仁壽殿との中は

(一〇)仁壽殿

(一一)東宮が

〔考異〕

(三)見給へりしは—見給へりしかば

(四)忝く—忝くも

(五)かな—よな

(七)こそは—「は」ナシ

(八)おとゞ—ナシ

(九)事々しく—事

(一二)何心に—何心と—何心も

（語釋）
（五）仲忠が迎へにゆきてまだ歸らぬ中に此の使が來たる也

（考異）
（一）留守の―ナ本の
（二）なむ―ナシ
（三）ども―ナシ
（四）せまほしくを―「を」ナシ

物の音のいと〱哀なるをなむ、蓬萊といふなる所は近かりけると思ふ。
さてこれは留守の（一）人々に賜へとてなむ。（二）
などあり。宮の御方よりは、后の宮よりありし衡重のうちの物入れながら、蒔繪の置口の衣筥に、夏冬の御裝束二よそひづつ、夜の二かさね、同じ御髮の箱四つ、一つには沈、一つには黄金、一つには瑠璃の壺、四つにあはせ薫物入れて、今一つには黄金のつぼに藥ども入れて、麝香一臍づつ入る、黄金のつぼ十すゑて、淸らなる包ども（三）につゝみて、宮の御消息にて、陸奥紙に女御かき給ふ。
女一みづから聞えむとすれど、手振はれてなむ。日頃はいと賴もしく覺えつるを、今よりはいとつれ〲になむ。物覺えず、苦しかりし心地、すなはちやめ給ひてし物の音の、いと忘れ難さに、慕ひもせまほしく（四）をとなむ。これは犬の尿に濡れ給ひぬめるを、脱ぎかへ給へとてなむ。
とあり。中納言（五）まだものし給ふほどにあり。北の方の、女御の御文見給ふを中納言

くるしう侍ればなむ」大宮、「見たてまつらではえ侍らじ。今又疾くも」とて、右のおとゞより、うるはしき絹百疋、御たちの中に出ださせ給ふ。(一)かくてわたり給ふ。御前大將殿、中納言殿とりあはせて、四位五位いと多かり。(二)大將殿門へ行き著きたれば、御車どもはこの殿の御門にあり。近さは一町あまりばかりあり。中納言も御送し給ふ。かくてわたり給ひぬる後、あるじのおとゞ、いみじう名高き乘馬二つ、鷹二つ、大將殿に奉れ給ふ。御消息、

正頼これは、御供にさふらはせむとしつるを、急がせてわたり給ひにければなむ。

又北のおとゞより、蒔繪の御衣櫃五かけ、蘇枋の臺、枌さして、きぬ二かけ、唐綾の絢房かけ、えび一つ、丁子一つ入れて、大宮の御文、かんのおとゞの御許に、

大宮近くものし給ひつるほどにだに、聞えまほしかりつるを、騒がしくのみありつればなむ。いと嬉しく、殘り少く思ほえつるを、ゆく先長くなる心地して、

〔語釋〕
(一)やがて又退出して來給へ
(二)「大將殿の御門へ」なるべし

〔語釋〕
(二)しりふたはわらふた、の誤歟
(三)女一宮

〔考異〕
(一)四十二—四十三
(四)ならひて—ならひては
(五)と思ひ—とも思ひ

七　產屋の事によりて集りし人々退散。贈物。產屋の物を帝に奉る。内侍のすけ仲忠大將の前にて當代の男女を評す。

【畫詞】こゝは中のおとゞの東面。宮たち四所なほしすがたにて參り給へり。

これは右のおとゞ、かたちいとあてに物々しく淸らにて、愛敬つき給へり。御年五十四。されど、いと若く見え給ふ。右大將、色あひもてなし、中納言に似給へり。けぢかく、にほひやかに、淸らなり。年四十二(一)。權中納言いと淸げなり。

「この鯉は生きたる樣なるものかな。ほと〳〵庖丁望まむとぞ思へる」と宣ふ。

御產養のものあり。粥桶の蓋には、生絹の絲の赤みたるしりふた(二)といふものの樣にしなして覆ひたり。これは北面。臺盤所。后の宮より奉り給へりつる衡重、竝べすゑたり。こゝは北のおとゞ。女御の君、内侍のかんのおとゞ。御たちの中に物ども賜ふ。

かくて又の日の晝つ方になりて、御乳付かへり給ふ。贈物いと淸らにし給ふ。内侍のかんのとのもかへり給ひなどして、女御の君、宮(三)などに聞え給ふ、[illegible]「かく侍りならひて(四)、如何につれ〴〵に思さむ。しばし斯くてもと思ひ(五)給ふれど、旅住

〔考異〕
(一)色に…らむ—そこに千世も見てしが
(二)どもの—ども—など
(三)イつ—ナシ

権中納言、
　忠澄洲にすめば底にも千歳ある鶴の流れてゆけど盡きずもあるかな
左大辨、
　諸澄まことにや千歳を經るとながき世をおきつゝ霜の鶴の世は見む
宰相中將、
　水底の騷がぬ洲にぞ鶴のこのみづなる色に千世もすむらむ
かくて源中納言の奉り給へりしかづけ物どものいまだ使はれぬを、女御の君取り出で給ひて、御簾のもとなる人々に一くだりづつ持たせて、うちそよめかせ給へば、中納言内にやをら手をさし入れて取りつゝ、まづ主のおとゞよりはじめ奉りて、つぎ〳〵かづけ奉り給ふ。左大辨宰相中將までは女のよそひ、それより下は白張一かさね、はかま一くだりづつ。宮あこ君今はかうぶりし給ひて六位なれば、白張一かさねかづけ給ふ。

〔語釋〕
（一）帥の宮
（三）女一宮

〔考異〕
（一）立ち出でぞ―立ち居てぞ

兼雅「立ち出でぞ千歳も見えむ潟の洲にかひこの見ゆる鶴は幾世ぞ

彈正の宮（一）に奉り給ふ程に、父おとゞ、兼雅「中納言召してきたれ」といと高く言ふ。（二）四の宮、「いと羨まし」と宣へば、仲忠「申さるゝことの侍らば」と宣ふ。父おとゞうち笑ひ給ひて、兼雅「これは望む所なり。猶希有なりや」とて今一度まゐり給ひぬ。さて（三）宮に参り給へば、宮、

女一「かへりてぞ千世も見るべきかひの中にこもれる鶴は幾世經べきぞ

四の宮、

帥宮「東路のかひのうちなる鶴なれやゆき歸りつゝ千世を見るべき

六の宮、

はるかにも思ほゆるかな行きかへり千歳みるべき鶴の雛鳥

八の宮、

みづの色はいくたびすむと川の洲にかへれる鶴の行く末は見む

あそびし止みぬ。

右大將いと快く醉ひ給ひて、衆雅「など(一)今宵は、宮も出で給はぬ。さう〴〵し」と宣へば、宰相の君といふして、女二「たゞ今寐てを(二)」など聞えさせ給へれば、衆雅「唐土よりは近かんめれば通辭(三)なくとも承りぬ(四)なむ。この朝臣どもの痴者や、遊びはべるとて、制して賜はね(五)(六)ば、まだこそ給べ醉はね。いかで御簾のうちの御土器賜はらむ」と聞え給へば宮の君がいらへ、「參り侍らむかし」大將、衆雅「さかの(七)供養は否や」など宣ふ程に、大きなる土器をとりて、中納言あるじのおとゞに參り給ふとて、

仲忠みや濱の洲崎におりて鶴のこによる波たちぬきしを見せばや

おとゞ、

正頼もろともに洲崎の鶴しおいたらばのどけき岸もなどか(八)なからむ

とて右大將に參り給ふ。とり給ひて、

〔語釋〕
(三)取次を通辭と戲れていふ也
(四)「ぬ」衍なるべし
(五)酒をくれぬ故

〔考異〕
(一)など―などか
(二)寐てを―「を」ナシ
(六)賜はねば―たばねば
(七)さかの―さるの
(八)などか―なにか

ほ上手なりと聞召して、しばし彈かせ奉りて、横笛はみづから、(一)笙の笛は彈正の宮、篳篥は(二)權中納言にさし奉り給ふ。中納言、笛をいと音高く吹き立てたり。他はしば〳〵合はせて吹かず。かた〴〵の君たち、「これには聞えぬ笛の音かな。(三)左衞門督にやあらむ。聞かばや。三條の北の方のわざなせさすらむ。さても、(四)人々もあそび給ふかな」など宣ふ中に、良中將まどひ出で源中納言に、行政「いざ給へ、これに。此處にいといみじき物の音どもかな」とて萎えたる狩衣など著ていまして、東の對の隅と御格子との間に入り立ち給ひぬ。琴笛ども吹きあはせ給ひて、いみじくあそび給ふ。かくれ給ひて源中納言、涼「いみじき横笛の音かな。箏のことは北の方のにやあらむ。いまだ聞えぬ聲す。(五)この主、何心ありてせぬわざわざなくし出で給ふらむ」中將、行政「如何は(六)然あらざらむ。物の上手は、手の至らぬばかりの憂侍らじ。琴はかゝる御中にて、留まるべければにこそ侍るめれ。かくし給はずば、内裏の聞召さむにもいと物の榮なからむ」とて聞きさわぐ程に、

(語釋)
(一)仲忠自身
(二)忠澄
(四)仲忠
(五)俊蔭女

(考異)
(三)しば〳〵—しばし
(六)然あらざらむ—然せざらむ

〔語釋〕
（一）未詳
（三）只の撲に對して東撲といふものあるか
（六）「こゝのだは」歟
（八）「給へば」は「給ひ」歟
（一〇）女一宮

〔考異〕
（二）碁—撲
（四）あづまだ—あづまご—あづまごと
（五）こゝの—たぶの
（七）ゆうそう—いふそう
（九）御里人—御前
（一一）はた—は

し」と宣へば、御簾の内にさし入れ給ひつ。かくて内外碁（一）うち給ひて、御土器たびくになりて、あぶら（二）よき程にさし給ひつ。あづまだ（三）（四）など、童、大人うつ。こ（五）のごは、（六）ゆうそう（七）多くうち取りたりけるが、ひぼし一つづつぞ、女房たちは賜はりける。中納言の君、宮たちは、皆うち入れつ。

かゝる程に、夜いたく更けぬ。中納言の君装束かれたる御琴三つ、ふえ三つ、とり出でさせ給ひつ。御笛も、一つ聲に調べ給ひて、琴に手一つづつ弾き給ふ。その音更にいふべきにもあらず。かく弾き試みて、わが御琴は、仲忠「これ内わたりに」とてさし入れ給へば、（八）「琵琶は忍びて宮わたりに、箏の琴は御里人に（九）」と言ひつゝ入るれば君たち取りて参れば、女御の君、仁壽「あなうたてや。如何なるべき事にか」かんのおとゞ、俊蔭女「さ聞ゆるごとは侍らぬものを」とて箏の琴をいとおもしろく弾き給ふ。しばし弾かせ奉り給ひて女御の君は、かの御琴をいとをかしくかき合せ給ふ。宮（一〇）おこし奉り給へば、琵琶かきあはせ給ふ。いと面白し。琵琶はた（一一）な

（考異）
（一）様どもなり―ナシ
（二）硯の箱の蓋に―硯筥の蓋に
（三）「したひ給ひつらめ」歟、絵「したまひつらめ」「したいし給ふらめ」とかきたるもあり
（四）心ばへ―「ばへ」ナシ
（五）ごとに―どもに
（六）の具―ナシ

綾のすり裳、綾かいねりのうちき著たり。かたち清げにらう〳〵しき人様どもな（一）り。五位ばかりの女どもなり。わらはも、赤色の五重襲の上のきぬ、綾のうへのはかま、綾かいねりの袙、三重襲のはかま著たり。髮長にあまり、姿をかしげなり。

かくて御汁物、御酒たび〳〵參りぬ。中納言の君、「紙もがな」と宣へば、黄ばみたる色紙一卷、白き色紙一卷（二）、硯の箱の蓋に入れて出だされたり。かの梨壺の御餌袋ども、召しよせてあけて見給ふ。主のおとゞ、正頼「いと珍らしうし給へる物どもかな」と宣ふ。右大將のおとゞ、兼雅「あはれ如何にして侍らむ。母宮こそはし（三）たひ給ひつらめ。いと物清らに心ばへ（四）おはせし人ぞかし」と見給ふ。斯くて、黄ばみたる一かさねに黄金の錢一包つゝみ、白き色紙に銀の錢一包つゝみ、白き色紙をば外にうるはしく出ださせ給ひ、黄ばみたるをばおとゞたちの御前ごとに（五）參り給ひつ。碁雙六の（六）具參りたり。あるじのおとゞ、正頼「魚鳥、こゝには更に無

は然りし。大鳥(一)の上にや侍りけむ。まめやかには、この御方あたりに聞召さず
なりにけるこそ、疎々しけれ。

野べにすむ村とりよりも一つがひ水なる鷗(二)めづらしきかな

とて、皆、物(三)かづきをしたる者に祿など給ひつゝ、御消息ありしには(四)御返事しつ
つ奉り給ひつ。

斯うて、今夜は、唐綾のさしぬき、直衣赤らかなる綾のうちき一襲、宮たちにも
こと人も著たまへり。南の方に寄りて、北面(五)に宮たち、西面(六)に向きておとゞたち、
母屋の隅の外に、南東にうちそばみて中納言どのの御たち、御帳の内にはやんご
となき上臈の御許人などさふらふ。御簾の外には、(七)左大辨宰相中將をはじめ奉
り、あるじの君だち。この程は大人をば召しつかひ給はねば、童のみなり。大人
召し出づれど、いと〱(八)參りがたくす。中納言、仲忠「例より見奉らぬ人もおは
します」など宣へば、臺盤所より參る。おとな四人、童四人、大人は赤色の唐衣、

(一)風俗歌「大鳥のはねに白き霜降れり誰か然言ふ千鳥ぞ然言ふ云々」

(三)物を持來りし使には

(七)諸澄祐澄

〔考異〕

(二)鷗―かもゝ

(四)御返事しつゝ奉り給ひつ―御かへりしつゝ奉り給ひぬ

(五)北面―北向

(六)西面に向きて―西面母屋にむきて

(八)いと〱―いと

（語釋）
（一）麗景殿、兼雅の長女
（四）菜

（考異）
（二）二斗入る—二斗ばかり入る
（三）して—をへて
（五）給ひつる—給へる

紫のゝべのゆかりを君によりて草の原をももとめつるかな

とく承らましかば、大島もありなましものを。

と聞え給へり。大将のおとゞ、「何處よりぞや。いと艶なる文かな」中納言、「梨壺よりなり」父おとゞ、「いで、かれ見むや」と宣ひて、見給ひて、「如何におよすけて宣ひたりや」など宣ふほどに、左の大殿の大君（一）、東宮にさふらひ給ふが許より、物二斗（二）入るばかりの銀の樋二つ、同じ柄杓して（三）、白き御粥一桶、銀の臺八つに、御粥のあはせ（四）、魚の四種、精進の四種、大きなる沈の折櫃にさし入れて、黄金の土器の大きなる、小さき、銀の箸あまた添へて奉り給へり。これも、中納言に御消息あり。みな御前に取りすゑたり。おとゞたち、興じ給ひて、先この粥すゝりてむ」とて、添へたる坏どもによそひて、皆まゐる。かくて、梨壺の御かへり聞え給ふ。

「承りぬ。久しう參らで思ひ給ひつる（五）になむ。昨日きこしめしきとは、誰か

（語釈）
（一）妃君
（二）魚を火にあぶりて乾したるもの
（四）「ことや」は「まことや」の誤なるべし

（考異）
（三）唐の—からうの

かゝる程に、内裏の后の宮より例の銀の衝重十二、同じおほん坏どもして、上に唐綾のおほひしたり。折櫃、すみもの、いと清らにて多かり。中納言の御もとに御消息して奉り給へり。又東宮にさふらひ給ふ中納言の妹（一）のもとよりも、物一斗ばかり入るかねの釜二つに、一つには蜜、一つには千歳汁入れて、黄ばみたる色紙おほひて、荷ひて、二尺ばかりの銀の鯉二つ、生きたるやうに造りなしたる、紅葉の造り枝に付けたり。紺瑠璃の大きやかなる餌袋三つに、銀の錢一餌袋、黒方を、（二）ひほしのやうにしなして一餌袋、沈を小鳥のやうに造りなして一餌袋。鳥の毛をはぎあつめて、あをき薄様一かさねづつおほひて結ひたり。おほん文は、唐の（三）紫の薄様一かさねに包みて、紫苑の造り枝につけたり。中納言見給へば、

　覺束なきまでなりにけるをなむ。久しう見え給はぬを、あやしく思ひつるに、たゞ昨日なむ理なるやうにてと承りし（四）。ことやこの鳥は、

〔考異〕
(一)折敷六つゞつ―折敷御前ごとに六つゞつ

だちして、かの御消息聞え給へれば、大將殿おはしたり。正頼「かしこく」とて内に入れ奉りつ。

かゝる程に、中納言のまうけさせ給へりける御前の物ども、みな參りぬ。宮の御前には、白瑠璃の衝重六つ、下には銀のつき、上には瑠璃の坏などすゑて參りたり。内のものども、透きて見ゆめり。女御の君かんのおとゞには、沈の折敷六つゞつ、男宮たちには、淺香の折敷六つゞつまゐれり。簀子に中納言ものし給ふ。その御前には、蘇枋の卓二つ、上達部には二つ、たゞ人には一つまゐれり。これは他人なし。殿の君だちの限なり。あるじのおとゞ、正頼「何方のぞ。中納言宣へや。誰をしるべにてか、正頼も侍らむ」中納言はさふらひてければ、あるじのおとゞの、「仰ごとにて請じ入れ給へ」と父おとゞに申し給へば、兼雅「早まかり入れ」と宣ふ。あるじのおとゞ、正頼「忠澄の朝臣も今宵は猶まかり入れ」と宣へば二所ながら入りて居給ひぬ。

（語釋）
（一）「人の」は「日の」歟
（三）女一
（四）正頼
（五）權中納言忠澄
（六）「御なからひを」なるべし

（考異）
（一）起き出給ひ—ナシ

夜もあけぬればつとめて、中納言、仲忠「これ昨日か今日か」と宣へば、人々いみじう笑ふ。驚きて起き出給ひ（一）、仲忠「怪しくもありけるかな」とて物急ぎてまゐらす。かくてその日は九日なり。仲忠「かねて仕うまつる人（一）の延びぬべきに、その日ばかり、わざとにはあらで、たゞ御肴ばかりの設して、内外のこれかれの御料など設けよ。この殿にもたゞ氣色ばかり」と宣へりければ、「物宣はぬ人のかく宣ふ」とて、よくはあらねど設けたり。夜さりつ方、かんのおとゞの御髪梳りて、かいねりの御衣、御こうちぎなど奉りてわたり給へり。女御の君も、さておはしましたり。宮（三）も起きておはします。東面の廂に御座敷きて、御褥どもうち置きたり。簀子にも御座敷きたり。母屋の隅に添へて、御几帳をぞ立てわたしたりける。中納言の君、北のおとゞに、「わたらせ給ひなむや」と聞え給へりければ、おとゞ（四）おはしたり。宮たち例のごとおはす。殿の君だち、中納言（五）よりはじめて、皆おはす。右のおとゞ三條殿に、正頼「おはしまさせむや。今はかゝる御ならひを（六）」とて君

る御文を見れば、あめれ」おとゞ、兼雅「其處をこそ如何に見給ふらむ。(一)よき人多く(二)持たりしもののかく一人につきにたるよ、(三)かゝる妻もたりけるものゝわれといひけ(四)るとこそは見給ふらめ。(五)いま〱しうとかいふめれど、(六)例の衣うち著て見え奉り給へ。中納言の面伏なり」北の方、俊蔭女「げに、子ながら恥かしや」おとゞ、(七)兼雅「同じ時の殿上人のさながらあるにも、わがあれば、えぞ越えつべうはあらじ。その座に上達部にてありつるも、あはれ、はや十の宮して奉りつる(八)土器も、賜ばむ」とて枕がみにうち置きて、二所臥し給へり。

かくて女御の君、乳母を召して、仁壽「日暮れにけり。おこし奉り(九)てものまゐれ」と宣へば參りて、乳母「御臺さふらひたり」と聞ゆれば中納言、仲忠「何ぞの女ばら(一〇)は物まゐる。花盛を待つぞよきもの」とて起き給はず。乳母「然」など聞ゆれば女御の君、仁壽「醉ひぬる人こそあやしけれ。人の怠るをだに然ばかりいふものを」など宣ふ。その日暮れぬ。

〔語釋〕
(一)其方を帝が如何に見給ふならん
(二)あれほど多く美人を集めたりし兼雅が今は其方をのみ持ち居るよ
(四)誤あるべし
(八)仲忠が他人に越えて昇進する事むづかしかるべしの意歟
(九)仲忠夫婦を
(一〇)「女はらか」なるべし

〔考異〕
(三)かく一人に—かくよに一人に—なかに一人に—かにかくに一人に

㊅ 九日の產養。方々よりの贈物。管絃。

(五)見給ふらめ—見給はめ
(六)いま〱しうとかいふめれど—いまだにしらかいふめれど—いまだにかしらかいふを—いまだにかしらかいふせ
(七)おとゞ—ナシ

（語釋）
（一）「いてや」歟
（二）「をぞ」は「こそ」歟
（三）聖にせんと申込まゐる人々の宮に隨ひ給へ
（四）「たち」は「まろ」の誤なるべし
（七）「人も」は「えも」歟

（句釋）
（五）なりなむとすや―なりなましものを
（六）をかしと聞き―をかしと打聞き

忠康「さてや、この宮の東宮におはせしをぞ、特につらくおはすれ。まろを幸なく生みて、物を思はせ給ふ」女御の皆うち笑ひ給ひて、仁壽「怪しの御かごとや。心弱くなおはしそ。一所おはすればこそ、物思さるらむ。これかれ聞え給ふことを、物しておはせよや」宮、忠康「たちはかくて歇みなむとする。思ひ悩むばかりの人もえあらじや。よくせずば法師にもなりなむとすや」とて御文は取りて立ち給ひぬ。女御、仁壽「この御文や。昨日は彼方へしもとり給ひ、今日は宮の取りかくし給へるもからしや。むつかし」とうちむつかり給ふ聲、愛敬づきたり。右大將ちかくて、をかしと聞き給ひて、北の方に、兵雅「この宮こそ、女御に似ておはするか」といらへ、侍従女「人も見知らねどよくおはすとのみぞ聞ゆる」おとど、兵雅「宮はたよくおはすべし。中納言いとあはれに思ひ聞えたり。見所なからむ人さ思ふべき人にあらず」北の方、侍従女「御息所も、然ばかりおはしますめりし。帝のいみじく時めかし給ひて、此の頃も、「とく參り給ひね」とのみこそは、度々あ

〔語釈〕
(一)あて宮の贈物をいふ
(二)女一宮にあやかりて又とく皇子を生み給ふ樣にとて之を奉ると也
(五)仁壽殿の手

〔考異〕
(三)とて—とぞ
(四)思ひ—思う

む。いと煩はしけなりしわざを、(一)一所いかでし給ひけむとなむ。さてはあえものにし給ひて、(二)かやうなる事また疾くをとてなむ。見よげならぬも、數多あるは憎からぬものと、今宵こそ見給へつれ。

とて奉れ給ふ。藤壺見給ひて、あて宮「これこそ煩はしげなりけれ」とて御返

あて宮 昨日思はずなりしかば、うしろめたくやとで。(三)いでや、なほこそ聞えもあなれ。うちにも有りがたく珍しくし給ふことの樣々に侍りけるに、離れ侍りて、承るにこそ、生けるかひなく思ひ(四)給へ歎かるれ。さてこれは、思ほえず月さかりなる心地してなむ。憎からずみ給へりけむ、何れなりけむ。

と白き薄樣一かさねに、いとめでたく書き給へり。三の宮とり給ひて、忠康「よの御手や。(五)そこの御手をこそ、よしと、世人も思ひためれど、これはたゞよなかめり。かゝる折ならでは心と得見ずなりにしはや。人に宣はすと見ましかばつらくもあらまし」女御の君、仁壽「かゝる習のあるまじきことなればにこそありけめ」宮、

〔十四〕詞　御帳の内には、めのと、御たちなどふさにさふらふ。こゝは南面。皆ながら著き並み給へり。(一)宮たち、御土器とりて出で給へり。人々舞し給ふ。客人たち同じうちきの上に著つゝ、御烏帽子し給ひて、御子二ところ、左右の大臣同じやうなり。(二)納言までは同じ姿にてかうぶりし給へり。御前に、つかさづかさの幄ども打ちわたし、左右近衛のつかさの樂所どももあり。卓ども立てわたして、御物ふさにまゐり、籠物など多く置きたり。鳥ども舞す。

かくて女御の君、よべこゝかしこの御前の物ども取うで(三)させて御覧ずる中に、左の大殿の、沈の衝重十二、銀の坏どもは、皆かんのおとゞの御方に、權大納言殿(四)の淺香の衝重、おほん毬など同じ数なるは、北のおとゞに、源中納言の銀の衝重、蘇枋の長櫃にすゑたる内の物ども皆具して、藤壺に奉れ給ふ。醉ひたれどよくし給ふ。中納言聞き臥し給へり。女御の君御文書き給ふ。

仁壽　昨日も聞えむとせしを、怪しく醉ひて、(五)のうまゐりしかば、後にとてな

(語釋)

(四)[illegible]

(校異)

(一)内にはめのと―内にはうんのめのとども

(二)やうなり―やうに

(評)州浜物を方々に頒つ。兼雅夫婦の物語。

(三)取うで―取りて

(五)のうまゐる―のぞまゐる―のみまゐる

柑子をくひ、鶴どもは魚をくひて、舞ふこと限なし。孔雀に、緑の御衣、うちき、鶴には白きあやの、兒のおほん單衣一くだりかづけ給ふ。かくて皆人、例なら(二)ず醉ひ給ひて、脚をさかさまに、倒れよろぼひつゝ、御方々におはしまさふ。おのおの、御子ども、御供の人、雲のごと付きて入り給ふ。あるじのおとゞの御後に、いみじく多く立ちて入り給ふ。右大將よろぼひて入り給へば、中納言しどろもどろに醉ひて、西の御方におほん送して、仲忠「(三)酒をたうべてたべ醉ひて」といと面白き聲にうたひて、入りおはすれば、女御君宮かき抱きて御局に入り給ひぬ。中納言入りおはして、宮の、(四)鳥の舞見給ふとて、御帳の柱をおさへて立ち給へるを、仲忠「あな見苦し。何ぞのやぶれ子持か物は見る」とて引きすゑ奉りて、仲忠「(五)ひとところは、きたない物をだに引き解かざりつる。今だに」とて一ところに臥し給ひぬ。かんのおとゞも、大將のたゞこもり給へる(六)とぶらはむとて、御局へおはしぬ。宮の御乳母と内侍のすけとぞ、御裝束とりかづけなどしてさふらふ。

(語釋)
(三)催馬樂「酒飲」のはじめの句
(四)女一宮
(五)「ひとところ」は「目前」の誤なるべし
(六)誤あるべし

(考異)
(一)魚を—魚ども
(二)例ならず醉ひ給ひて—ていのごと醉ひて

〔語釋〕
(六)朝臣等唐樂しつゝの意歟

〔考異〕
(一)ぞや—「や」ナシ
(二)中納言かづけ物—中納言おなじかづけ物
(三)とく—とて
(四)人こそ—人々歟
(五)より上—以上
(七)二つを—「を」ナシ

ことぞや(一)。宮あこ君の御賀の舞は、これを傳へたるにこそありけれ。何處よりいかでならむと思ひしは」とて騒ぐ程に、殿の君だち、かづけ物とりつゝ出で給へり。中納言、宮たち、一度に取りかづけ給ふ。そのかづけ物どもは、女の裝束、ちごの衣、褔襯添へてなり。源氏の中納言(二)、かづけ物とく(三)取りて、舞する中將に、砂の上に下りてかづけ給ふ樣、いとなまめきてめでたし。つかさぐの幄の人(四)こそ、「そこら興ありつる事よりも、これこそめでたけれ」など言ふ。かくてみな人、三位中將より(五)上には、白きうちき一襲、あはせのはかま一具、さらぬ四位、五位には、白きうちき一襲、六位には單襲、しらはり、下仕には腰差上下のもいとをかしくてあり。

上の御遊は歇みて、つかさぐの(六)あそら、からがくしつゝ孔雀、鶴を舞はせて御覽ぜさす。御簾のうちにもみな立騒ぎ見給ふ。内より黄金を、柑子ばかり丸かして、小き銀の魚二つ(七)を出だし給へれば、式部卿の宮とりて賜ふ。孔雀は黄金の

（語釋）
（三）仲忠をいふ歟
（九）原縁が緑を用ゐるなるべし
（一〇）不審
（甲校）
（一）萬代は―萬代に
（二）ことを―ことは
（四）とく―とて
（五）給ふ所に―給へるに
（六）一日の―つるの
（七）おもかり―おもしろかり
（八）まことや―まとや
（一一）たゞ―ナシ

萬代は（一）まに〳〵みえむあしたづも古にしことを（二）忘れやはする
とて奉り給へば、宮入り給ひぬ。左のおとゞ、季明「かく老學問みなせらるゝ中に、などか衞門督（三）の、いとまめやかにとく（四）をさめられけむ。かうだにみだれ給ふ所に（五）、あふこそまだしからめ」右のおとゞ、正頼「何ぞは、一日の（六）役いとおもかり（七）き。さてもぞまことや（八）」中務の宮、「などかはさのみ座のいたく下りたる。今夜は召し上げよや」父おとゞ、兼雅「早まかり著け」と宣ふ。簀子に殿上人の座に居給へり。式部卿の宮、「いまは、御簾のうちより、流の御土器賜はらばや。かの緑く（九）さき御肴こそ、いと給べまほしけれ」左のおとゞ、忠雅「たゞまさ、かねずみ物し給ふらむ。たゞ（一一）さし入れ給へや」中務の宮、「おとゞの宣はねども、心（一〇）にもあらず」兵部卿宮、さばかり高かりし御聲をなど思ひつゝ、これかれ宣ふ。

ほの〴〵とあけ離るゝ程に、良中將下りて、陵王ををれかへり、無き手を舞ふ。そこらの人、驚くこと限なし。「これはまだ世に無かりつる手かな。如何にしつる

仁壽殿一夜だに久してふなるあしたづのまにく見ゆる千歳なになり

と例（一）よりもめでたく書き給へり。大將いと珍らしく、今年二十年あまりといふに、この御手を見るかな、いみじうかしこくもなりけるかな、と見給ひ、あはれに昔思ほゆれば涙も落ちぬべけれど、かしこく見入れて、懐にさし入れ給へば、十宮「いな。これに御酒入れてまゐれとこそ、（二）うち上は宣ひつれ」とて肌をさがし給へば、兼雅「かく墨つきて汚げなるはつた（三）えじ。これこそ白けれ」とて、御卓なる様器をとりかへて、彼は隱し給へば、人々、「例ならず、など收められぬる」とさわぎ笑ふ。若宮様器に、人々（四）御つきいれさせ給ふ。兼雅「多しや」ときこえ給へど、十宮「いなく」とてこぼさでまゐり給ふ。とり給ひて、宮を抱きながら、人々にはまゐり給ふ。かくて、順の和歌、行政の中將の書（五）きつく、御硯の近きを、さらぬ様にて、筆をとり給ひて、おほん菓物の下なる濱木綿に、かく書き給ふ。

あな珍らしや。

〔語釋〕
（二）仁壽殿をいふなるべし「うち」衍歟
（三）「えたべじ」なるべし
（四）誤あるべし
（五）「書きつくる御硯の」なるべし

〔考異〕
（一）例より—例のより

〔語釋〕
(一)孔雀の服裝したる舞子也下の鶴も同じ
(三)正頼

〔考異〕
(一)舞ひ給ふ—し給ふ

奉りて、左のおとゞに土器參り給ふを見れば、いとあてにきびはにて、何心もなき顔し給ふ。御年十七。左のおとゞに、「聞す多くもな聞食しそ」とて氣色ばかりまゐり給ふ。とり給ひて、あざれ舞しつゝ宰相に賜ふ。賜はりて又舞ひあへる程に右大將の君、兼雅「兼雅は、これならぬ手をば知らぬ」とて、鳥の舞を氣色ばかり舞ひ給ふ程に、右近の幄より孔雀(一)をいだす。左近の幄よりは鶴を出だして、その樂を上下ゆすりてすれば、鳥もをれかへりて舞ふにはやされて、このおとゞその舞をし出で給ふほどに、女御の君の後にうまれ給ひし十の御子、四つばかりにて、御髮ふりわけにて、白く美しげに肥えて、御衣は濃き綾のうちき、あはせの袴、たすきがけにて、葡萄染の綺の直衣著て、土器とりて出で給ふ。祖父(三)おとゞ、兄宮たち、「誰にぞ〳〵」と問ひ給ふに、十宮「あらず」とて右大將の御座におはして奉り給へば、ついゐ給ひてかき抱きて、膝にすゑ奉り給ひて、土器を見給へば女御の君の御手にて、

白く、もの〳〵しくおはす。これも聞召しとり（一）給ひて、舞し給ひつゝ、源中納言に賜ふ。取り給ひて三の宮に又參り給ふ。宮はつゞきて著き給ふ。これは内にぞおはする。年二十二。左のおとゞ、忠雅「この順の舞は、知りたらむに隨ひて、此處ならぬをもあさまじ（二）、たゞ一手あそばさせむ」と宣へば、御太郎の大納言立ちて、萬歳樂を舞ひ給ふ。樂おもしろくす。右のおとゞ、正頼「萬歳樂は、人のさして心なりける。わいても、鶴の命、老も見えじ」と宣ふ。（三）六の宮、紅の掻練のいと濃き一かさね、櫻色の同じ直衣、指貫、えび染の下がさね奉りて、土器取りて、左のおとゞに參り給ふを見れば、いと小くひぢゝかに、ふくらかに、愛敬づき給へり。御年二十。（四）左のおほ殿にぞおはする。例の闕ずに參り給ひて、（五）大納言に賜ふ。又それ更に參り給ふ。これも舞ひ給ひぬ。（六）藤宰相、「この君も舞ひ給ふものを（七）」とて猿樂する人にて龜舞をす。上下一度にほゝと笑ふ。人の御目ども醒めて、いと興ありと思ほす。（八）八の宮は、淺黃のなほし、指貫、いまやう色の御衣、櫻がさね

〔語釋〕
（二）誤あるべし
（三）東宮の弟
（四）季明
（五）實正
（六）清正
（八）東宮の弟

〔考異〕
（一）聞召しとり―聞召しつとり
（七）ものを―「もの」ナシ

(評釋)
(三)催馬樂「我家」の句、「わいへんはとばり帳をもかけたれば大君來ませ聟にせむ御肴は何よけむ」云々
(四)三の宮が式部卿中務宮の次に着席せる也
(五)誤あるべし

(考異)
(一)見たまひて—式部卿の宮
(二)の人か—ナシ

の綺の指貫、同じ直衣、蘇枋がさねの下襲奉りて、土器とりて、中務の宮に參り給ふ。御樣、長そびやかに、氣高きものから、いと匂ひやかなるもてなし、いと心憎し。御年二十三。例ありとて、聞ず、三たびばかり參り給ふ。これを見た(一)まひて右のおとゞ、いとめでたし、誰(二)の人か聟にせむと思す。左のおとゞ、忠雅(三)「御肴に何よけむ」と、箏の琴にいとおもしろくかい彈き給ふ。式部卿の宮、われも思ほす事なれば、いとをかしと思して、うちほゝ笑みて見給ふ。中務の宮、御土器とりて舞ひ給へり。右のおとゞに參り給ふ。(四)御子は、をぢ宮たちの御座の下につき給ひぬ。かくて御土器くだる程に、右のおとゞ、正頼「腰かゞまりたる翁をのみ、かなでさせ給ひて、たゞにてやは止み給ひなむずる」と宣へば、源中納言立ちて舞ひ給ふ。上(五)下かくおもしろし。かゝる程に、四の宮、あからかなる綾搔練一かさね、青鈍のさしぬき、おなじ直衣、唐綾のやなぎがさね奉りて、土器とりて、兵部卿の宮に參り給ふ。これは、いと大きやかに、ふくらかに肥え給へるが、色

實正　わかみどり二葉にみゆる姫松の嵐ふきたつ世をも見てしが(一)

平中納言、

正明　末のよの遠くもあるかな千歳ふる松の二葉に見ゆるこよひは

源中納言、

涼　ひめ松をはやしと生ほすこの宿にいく度ちよを數へ來ぬらむ(二)

權中納言、

仲澄　みどり子のおほかる中に二葉よりよろづ世見ゆるやどのひめ松

これより下に(三)あれど書かず。

かゝる程に式部卿の宮、「事はじめとこそ言ふなれ(四)。(五)いづらそのこなむ」あるじのおとゞ、「侍りかし」とて、輪臺を(六)、景色ばかり立ちて舞ひ給へば、御前のつかさづかさのあそび人ども、男ども、樂奏しつゝ、琴ども彈きたてつゝ、一度にうつ物の音にあはせて、その樂をする程に、三の宮、黒らかなるかいねり一襲、はなだ

〔語釋〕

(四)誤あるべし

(六)青海波の前につけて舞ふ曲

〔考異〕

(一)見てしが—見てまし

(二)來ぬらむ—來つらむ

(三)下に—下も

(五)いづらそのこなむ—いつらのこなむ—いつつあのこなむ

（考異）
（一）さらで―まさて
（二）うきみに―うきみを
―うききそ
（三）たのまむ―だに見む

木高くてすゞしき蔭にみやびとのまとゐするまで生ひよ姫松

兵部卿の宮、

心ゆくこゝちこそすれ二葉なるまつの世々のみ思ひやられて

左のおとゞ、

忠雅 二葉よりおひならひつゝ姫松は枝をばさらで（一）千代はすぎなん

藤大納言、

忠俊 岩の上に今より根ざすいその松たゞはうきみに（二）ありとたのまむ（三）

右のおとゞ、

正頼 年ふればかしらの雪はつもれども小松のかげも待ち出てしがな

右大将

兼雅 昔生ひの松にしならふものならばまだみどりごの頼もしきかな

民部卿、

倭琴、兵部卿の宮笙のふえ、中納言横笛、權中納言大篳篥とあはせて遊ばす。藤中納言、仲忠「ひがみたる樣なり」とて土器とりてまかでむとて、紫苑色の織物の指(一)貫におなじ薄色の直衣、唐綾のかいねり襲(二)ね著て出で給ふ。この頃例よりもかたち盛なり。下がさねの尻いと長くはらひ引きて、土器とりて出で給ふ。兵部卿の宮、「あな珍らしや。(三)いみじくもこふかく(四)籠られたりつるかな」とて目をとゞ(五)めて、皆まもり給ふ。さらに難なき帝の御聟なり。源中(六)納言なずらひたりと言ひしかど、今はいとこよなし。中納言、式部卿の宮に御土器まゐり給ふ。宮、けちずのみた(七)ふとて(八)、斯く聞(九)え給ふ、

式部 ひめ松はいつも生ふなる宿(一〇)なればかけ涼しげに見ゆるたびかな

中納言

仲忠 いさやまた蔭は知られずひめ松(一一)は年へてながき色をとぞ思ふ

中務の宮

〔語釋〕
（四）木深くか
（六）仲忠に比敵すべしとの噂なりしかど
（七）「飫ず飲み給ふ」にてさゝれたる盃を一つも辭せず飲むとての意歟

〔考異〕
（一）指貫に―「に」ナシ
（二）襲ね著て―かさねて
（三）いみじく―いみじう
（五）とゞめて―とめて
（八）とて―さて
（九）聞え給ふ―宣ふ
（一〇）宿―岩
（一一）松は―松の

物はき給へり。式部卿の宮には、草鞋の片足をなむ。それを、例のやうにはあらでうちひがみて兵部卿の宮、「源中納言の(一)みよ(二)とて姿こそしどけなかりし。今宵は舞の師どもには見えじ」中納言、忠「如何なる折にか侍りけむ、良中將の朝臣は、下のはかまを著て、皆かいわぐみて走らるめりし。それも其の道の人とて、裸、鶴脛にても騒がれじや」正頼「正頼が男どもは、例よりも裝束うるはしくして、笏(三)とりくびりてぞ、練り出でにたりし」民部卿の宮、「あはれ、(四)宰相の朝臣世に交らはましかば、如何なる猿樂をして一日かあらまし」あるじのおとゞ、正頼「(五)宮にさふらふ者いかに思ふらむ。正頼をぞ恨むらむかし。先つ頃、まかでむと物せしをまかでさせねば、いみじう怨ずらむかし」左のおとゞ、忠雅「げに然思すらむ。母(六)かたとひあれば、忠雅らが言ふことは、所謂うしのはしるぞかし」と宣へば、一度にほゝと笑ふ。

斯うて、御あそびし給ふ。琵琶、式部卿の宮、箏の琴、左のおとゞ、中務の宮に

（語釋）
（一）（龍沙戸出姿）脫か、前の仲忠の蓑をきかんとて露ひ出て來りし時の事を言ふなるべし
（三）捌りしめて
（四）實忠
（五）あて宮
（六）末拝

（考異）
（二）みよ—みに—みこ

〔語釋〕（二）忠雅
（四）連澄
（七）此處誤脫あらんか

〔考異〕（一）十具―ひとくだり
（三）さま〴〵―ナシ
（五）皆―ナシ
（六）淸らにして―淸らにて

いと淸らなり。沈の御衣箱、黄金の置口したる六つに、かづけもの、女の裝十具（一）、白きうちぎ十かさね、はかま十くだり、蒔繪の御衣櫃にいれて、物五斗ばかり入るばかりの、紫檀の櫃五つに、碁代、彈碁代、かさ高く入れたり。すみ物どももうち具し給へり。又左（二）の大殿よりもさま〴〵（三）、碁代すみもの、御前の物、いと淸らにし給へり。式部卿の宮、民部卿の殿よりも、さま〴〵しつゝ奉り給へり。かくて、中のおとゞの南の廂あげわたして、御座ども敷きわたしたり。あるじのおとゞの君出で給ひて、左衞門佐（四）して、右大將、式部卿の宮の御方に申し奉り給ふ、正頼「今夜、いとさう〴〵しく侍るべき。いとも〳〵畏くとも、渡りおはしましなむや。翁、此處ならば、舞ひて御覽ぜさせむ」と聞え給へれば、「いみじき見物侍るべかなり」とて皆（五）おはしましぬれば、それより下はえ籠りおはせで、皆おはして竝み居給へり。この御前よりの事ども、みな源中納言殿し給へり。いと淸らにして（六）參りわたり給ふ。御酒しひ、物などまゐりて、中務の宮（七）、ひとねたれ

（語釋）
（二）おしろい
（三）仲忠の心
（四）女一
（八）一方によりてありの姿勢

（考異）
（一）あかきぬすこし―あかきぬすこし―あかむひすこし
（五）同じき―「き」ナシ
（六）白き綾―白きはうれう
（七）うるはしく―うるはしき

の大きやかなるに入れて、一折櫃、海松とかき付けて、あかきぬすこし、白きぬを、縫目はなくて、結佩などして、海松のやうにして、一折櫃、（二）白き物を入れたり。今一つには、えび、丁子を、灌突のけづりもののやうにて入れたり。麥しく見つゝ、（三）頬はしく、御心入りて、斯くし給ひつらむ、殿には、さりげも無かりつるものを、など思ほす。内侍のかんのおとゞ見給ふ。夜さりつ方になりぬれば、大宮に御湯殿まゐる。宮も御湯殿し給ふ。

かゝる程に、涼の中納言殿より（四）御産養あり。子持の宮の御前に、銀の衝重十に、（五）同じき御器すゑて、敷物の打敷、いと清らなり。衝重どもの内には、みな物あり。一つには、綾を練りて、一つには花文綾、羅、一つには色々の織物、一つには白き綾、（六）一つには練貫、一つにはねり繰りたるいとすゞしき絲、物うる（七）はしく入れたり。かさ高く入れて、おもき物をすゑたれば、押されてかたにあり。（八）女御の君の御前には、沈の折敷、同じきたかつきにすゑて九つ。打敷、もの毎に

〔語釈〕
(二)「見給はまほしう」歟
(四)脳香歟

〔考異〕
(一)こそ—ナシ
(三)中納言—中納言は

とて、裏にひきかへして、

わたくしには、いでや、今は限といふなればなほこそ。(一)

千歳をば今やとおもふ松なれば昔もそひて忘られぬかな

と書きて、同じ一かさねに包みて、おもしろき紅葉につく。宮、女二「見ばや」と宣へば、仲忠「さぞ見給へ(二)ほしう侍らむ」とて出ださせつれば、召し寄せて、はた得見給はず。女御の君いと淸らなる女の裝束をとり出ださせ給ひて、三の宮請じ奉り給ひて、仁壽「これ、かゝる所よりは、たゞに物せざなり」とて、仁壽「この御使に、ものし給へ」とて奉り給へば、持て出で給ひてかづけ給ふ。亮の君、おりて拜して參り給ひぬ。(三)中納言、奉れ給へる物どもを取り寄せて見給へば、甕に、練りたるうちあや、一つにはねりぎぬ、いとよき、口もとまで疊み入れ、折櫃どもには、一つには銀の鯉、同じき鯛、一折櫃、沈の鰹つくりて入れ、一つには、沈蘇枋をよく〳〵切りて一折櫃、あはせ薫物三くさ、麝香(四)のふかう、黄金のつぼ

返すぐ〳〵もねたくこそ。わが君、かゝる事ありぬべからむ折、いと難きまろが爲に必ず〳〵。

とかき給へり。君見給ひて、うち笑ひて、仲忠「久しく見給へざりつる程に、かしこくも書き習はせ給ひにけるかな。この御返は仲忠聞えむ。まだ、御手慣ひて、え書かせ給はじ(一)。さらぬ時だに侍るものを」とて、ほゝ笑みつゝ見るに、あはれに昔思ひ出でられて悲しければ、ゆゝしくて置きつ。さて、赤き薄様一かさねに、

仲忠御文賜はるべき人は(二)、まだ目もおどろにて(三)え、なほ聞えさせよとて侍ればなむ。思ほす樣にと宣はせたるは、所せき樣におほされけむ。誰も恨み聞えつべしや。まこと御爲にと宣はせたるは、何事か、すゝむる功徳こそ侍るめれ。あぢなき御いりなりや(四)。

おなじ巣にうつれる鶴のもろ共にたち居む世をば君のみぞ見む

と聞えさせよとなむ。

(語釋)
(二)女一
(三)「おぼろにて」歟、「え」は「え聞えず」の略
(四)誤あるべし

(校異)
(一)習はせ—ならせ

とて御文あり。東宮の亮の君持て參り給ひて、宮の御前に參らせ給ふ。淺綠の色紙一かさねに包みて、五葉につけたり。宮あけさせ給ひて、み給ひて、うち笑ひ給ふ。中納言、仲忠「なにごとにか侍らむ。見侍らばや」女二「人にな見せそ(一)とあれば」とて見せ給はねば、仲忠「わが君は、思しへだてたることそ」とて、手をさし入れて取りつ。見れば、かく書き給へり。

あて宮いとも〳〵、思ふやうに珍らしかりけることは、まづ(二)と思う給へしを、しばしは物おぼえぬ様(三)に侍りしかば、もし如何見苦しき、恥かくさでを御覽(四)ぜよと思う給へてなむ、今までになり侍りにける。いでや〳〵、いとも(五)有り難きことの、取り集め侍りけるをりしもこそあれ、近く侍らで、え承らずなりしこそ、世になく思ひ給へらるれ。昔ながら侍らましかば、かく思ひ給へましや、と思う給ふるにつけても、心憂くこそ。

もろ共に巣馴れしものを己がよゝにかゝれるつると餘所に聞くかな

〔語釋〕
(二)まづ第一に御祝を申上げたく思ひしに
(四)此處誤あるべし

〔考異〕
(一)な見せそと—な見せそなど
(三)様に—やうにて
(五)いとも—「も」ナシ

ちたる奉りて、御床の端の方にゐざり入りて、東向におはす。女御の君かんのおとゞかい分けつゝ梳り奉り給ふ。(一)いとおほく、美しげにて、八尺ばかりあり。その御賄ひは、内侍のすけと御乳母と仕うまつる。「かゝる時のはじめ参らする(二)は、する様の侍るものを」女御の君、「何か。然らずとも、心もとなからぬ御髪なれば」かんのおとゞ、「髪は、多く長き、あまた有るべしや。筋ありさまこそ難けれ。これは有り難くぞ」(三)などてかい分けつゝ見奉り給ふ。つやゝかにめでたし。ことに損はれ給はず、少し青み給へれど、(四)いとあてに氣高く、さすがに匂ひやかにおはします。

かゝる程に、藤壺より(五)とて、物一斗入るばかりの甕二つ、衝重沈の折櫃十二に物入れて、蘇枋のたかつきにすゑて銀の雉子二つ、腹に龍腦籠めて、雉子の皮をきせて、大きなる松の造り枝につけて、腹にかく書きて(六)押したり、

あて宮　むらとりの鶴のこほりにすむ(七)雉子の松の枝にぞけふは飛びける(八)

(一)「ゐざりいでて」歟
(二)はじめて産婦の髪をとくには心得あるものぞし
(三)「などとて」なるべし
(五)あて宮

(考異)
(四)給へれど—給ひつれど
(六)書きて—かきつけて
(七)すむ—ゐる
(八)飛びける—すみける

（語釋）
（一）たきしめたれば
（二）女一宮の食ひ殘し
（三）女一が
（四）誤あるべし

りには、大いなる火取に、よき程に埋みて、よき沈、あはせ薫物、多くくべて、籠掩ひつゝ、數多すゑわたしたり。御帳のかたびら、壁代などは、よき器どもに入れてしめたれば（一）、その大殿のあたりは、餘所にてもいと芳し。まして內には、更にも言はず。しるしばかりうちほのめく晝の香などは、ことにもあらず。大宮は、北の大殿にわたり給ひぬ。こゝの御座所は女御の君ぞ、時々うちやすみ給ふ。大人、わらはは、みな例の裝束したり。中納言は、例ものし給ふ東の廂に儀式して、御手水ものの賄ひなどしすゑたれど、母屋の御簾より、頭もさし出で給はで、（二）宮の御おろしをのみ參る。晝間の人なき折には、這入りつゝ宮の御傍にうち休み、これかれおはすれば、御帳の外の土居におしかゝりて、居眠し給へり。夜は、弓弦はしり打ちつゝ寢ず。簀子には睦ましき君たち居竝み給へり。

七日になりて、「女御の君聞え給ふ、仁壽「夕さりは、御湯殿すべし。起き給へ。御髮かき解かむ」と聞え給へば、（三）起き給へり。白き御衣の張りたるに、あかきかう（四）

し給ふ。かんのおとゞの御許には、おとな十人、わらは四人、下仕四人あり。北の方御參物は、あるじの方よりして參らせ給ふ。

かくて御產養の三日の夜は、右大將殿し給ふ。銀の衝重十二、おなじものうちしきもの、花文綾、羅かさねたる、銀の透箱六つに、御衣御襁褓うちしき入れたり。屯食十具(一)ばかりにて、碁代の錢百貫なむありける。籠り給へる人々、夜一夜あそび碁(二)打ちなどし給ふ。又四の宮の御方よりも、いとをかしうし給へり。五日の夜、あるじの大將、(三)同じくいかめしうし給へり。(四)おとゞ御子たちも、樣々にいかめしうし給へり。碁(五)うち物かづきなどし給ふ。

かくて六日になりぬ。女御、麝香ども、多く具し集めさせ給ひて、えび、丁子、鐵臼に入れて搗かせ給ふ。ねりぎぬに綿入れて、袋に縫はせ給ひて(六)、一袋づつ入れて、間ごとに、御簾に添へてかけさせ給ひて、大いなる銀の狛犬四つに、同じ火取するゑて、香のあはせ薰物たえず燒きて、御帳の隅々にするゑたり。廂のわた

【考異】
(一)十具ばかりにて碁代の錢百貫—十具ばかり碁代百貫
(二)碁—攤
(三)同じく—同じう
(四)おとゞ—「おとゞの」歟
(五)碁—攤
(六)給ひて—つゝ

（語釋）
（二）女一宮に
（三）此様之男の児を父はし

（考異）
（一）おぼえぬ―おぼえ給はぬ
（四）うたて―うたても
（五）いらへもし給はず―物も宣はず

図産養、あて宮より女一宮に消息、七夜、饗宴。

御几帳さゝせて入り給ひて、宮の御方にふせ奉り給ひつ。中納言御帳の内へ入り給へば、かんのおとゞ、仲忠「あなさがな。現なるに」と宣へば、仲忠「何か。かゝる宮仕つかうまつる人には、内外をこそゆるし給はめ」とてつゝみ聞え給はねば、女御の君外にゐざり出で給ひぬ。中納言、仲忠「久しういも寝侍らねば、みだり心地いとあしう侍る。罪ゆるし給へ」とて宮の御傍にうち臥し給ひぬ。かんのおとゞ、仲忠「うたて物おぼえぬ(一)様し給ふめり。さて忍びてさふらひ給へ」とて出で給ひぬれば、中納言、御衾ひき居て聞ゆる様、仲忠「(二)かゝるものまたもがな。いと疾く、此度は、仲忠が様にて(三)を」と聞ゆれば、(四)うたて言ふものかな。いと恐ろしきわざにこそありけれ、と思していらへ(五)もし給はず。

かくて皆、御前ごとに物参りなどして、夜さり御湯殿例のごとしつ。御帳の西の方なる母屋に御座裝ひて大宮、子持の宮の御はらからの女宮たち おはしまさふ。西の廂に御座裝ひて、かんのおとゞの御局したるにぞ、右大將の君はやがてもの

〔語釋〕
(三)かにばゝ
(四)二ケ月も浴せしめたる後の兒の樣に奇麗也
(六)私さへ居れば仔細なし
(八)此兒は女故男子は遠慮あるべし

〔考異〕
(一)如して—ごとくして
(二)中納言の—中納言には
(五)おはすれ—おはすめれ
(七)ます—まさす
(九)何か—何かは

かくて女御の君かき抱きて、さし出で給へれば、かんのおとゞ抱きて内侍のすけにわたし給ふ。いまは、御湯あむし奉る。かんのおとゞ、裳の上につい居給ひて、御迎湯參り給ふ。御髮御裳に少したらぬ程にて、瑩しかけたる如して(一)、白き御衣に隙なくゆり掛けられたり。よれたる下うち疊なはれたる、いとめでたし。御髮つき、姿、いふ限にあらず。たゞ今二十餘に見え給ふ。中納言の(二)親とも見えで年二つばかりのはらからに見ゆ。すけのおもと、「こゝら、昔より君たちに仕うまつりつるに、程大きに、かに(三)といふものゆめばかり付き給はぬこそなけれ。二(四)月あむし奉りたる樣にこそおはすれ(五)」中納言、仲忠「見たまへ離たねば、然もあらむ」すけ「すけさふらひて(六)ましかば。いと畏かりけり。親にはおはします(七)とも、立たせ給へや。女におはしますめれ」と聞ゆれば、仲忠「何か(九)そは、そのわたりをもよくつくろひ(八)給へ、と聞えむとぞや」と宣ふ。さて、御湯殿はてぬれば、女御の君、抱かまほしうおほせど、父おとゞ添ひ居給へれば、かんのおとゞいだき給ひて、

(語釋)
(一)産の穢を忌む也
(四)[illegible]
(考異)
(二)なるべし―なり
(三)給ふ―ナシ
(五)なり―ナシ
(六)生絹の白き―生絹の白がされね白き
(七)若宮―若君
(八)襲一かされ―襲ひもかされて
(九)緑の―白きあうの

返すゞ聞えさせ侍る。

ときこえ給ふ。御使に祿なし。忌(一)ませ給へばなるべし(二)。かゝる程に、御乳まゐるべき時なりぬ。御乳は、父の中納言の懐にてくゝめ奉り給ふ(三)。御乳付、(四)左衛門佐殿の北の方、御几帳のもとにさふらひ給へば、女御の君、かき抱きて、御衣きせ奉り給ひ、膝につゝみて御乳まゐり給ふ。御乳母ども召しあつめたり。一人は民部大輔の女、いま二人は五位ばかりの人の女どもなり。

(五)御湯殿すべき時もなりぬれば、その儀式、みな生絹の白き(六)綾をつかはれたり。御湯殿は東宮の若宮(七)の御迎へ湯に參り給ひし内侍のすけ、白きあやの生絹に、單襲のうちき上に著て、あやの湯卷、御槽の底にも敷き、迎湯はかんのおとゞ、白きあやのうちき一かさね、同じき裳(八)一かさね、結ひ込め給へり。中納言白きあやのうちき一かさね緑(九)の青指貫著て、湯ひき給ふ。殿の君たち、弓引きつゝおはす。

を、いとあはれに珍らしかりし對面に、はつかなりし物の音も忘れがたく覺え(一)しかばこそ、時々もまゐられよとて、公になどは。されど、よくこそせいしなされためれ。こゝに、いかでと思ひし事を、樣々に其處にあなるを、いと(二)羨ましく、そのわたりの事をも如何にと思ふに、(三)さやうにて物せらるゝなれば、惱ましきことも忘れぬらむ、と賴もしくなむ。いかで、ありきかやすくて疾くもがなとぞ、内裏わたりにはた參られざめれば。

と宣へり。かんのおとゞ見給ひて、御返し、

俊蔭女かしこまりて承りぬ。此處にさふらふことは、仲忠の朝臣の、又なき事に思ひ給ひて侍るめりしかばなむ。何の數なるべき身には侍らねど、雜役をもろともに、と思ひ給へてなむ。樣々に仰せごと侍るは、何事にかは。齡くらべするがほにや。參り侍らぬことは、かゝる里住にもうひ〳〵しき心地し侍れば、(四)つゝましく思ひ給へられてなむ、いとかしこき仰せごとをぞ、

〔語釋〕

(三)俊蔭女が付添ひ居る事故女一宮も苦痛を忘るるならんと

〔考異〕

(一)覺えしかばこそ—「こそ」ナシ

(二)なされ—そされ

(四)つゝましく思ひ—つつましう

みな掲げわたし、御几帳たてつゝあるに、あるじの大殿、宮の御はらからの宮たち、くづれて皆下り給へば、みな人も下りぬ。おとゞ、宮たち、殿の君たち、並み立ちて拜し給ふ。中納言の君に斯くし給へども(一)、「おなかしこ」とも聞えで、なほ兒抱きて居給へり。

かゝる程に、内裏より頭の中將の君(二)して、御消息あり。

朱雀珍らしき人の、平かにあなるも、ありがたき事の樣々ものせらるゝなるをなむ、限なく聞召す。(三)例あるよろこびなどもせさすべきを、たゞ今その缺などえあらで。

などあり。穢らひたれば、(四)例の作法なし。中納言下りて拜し給ひ、御返しそうせさせ給ひつ。又内裏より藏人式部丞を御使にて、右大將のかんのおとゞの許に御文賜へり。

朱雀おほつかなき(五)程に(六)はなさじとものせしを、心にもあらで久しくなりにける

(語釋)
(三)仲忠に昇進の沙汰などもあるべき筈なれど缺官なき故行ふを得ず
(四)お使饗應の作法
(五)御沙汰はせぬ積なりしを

(校異)
(一)し給へども—宜へども
(二)中將の君—「の君」ナシ
(六)程にはなさじ—程にはなたじ

〔語釋〕
(五)女一宮
(六)産をせぬよりも

〔考異〕
(一)いと—ナシ
(二)いらへ—君—又ナシ
(三)曲一つ—たゞ一つ
(四)思ひに沈みたるも—思ひおちぶれたる人も
(七)給ひつれば—給へれば
(八)御佩刀に—「に」ナシ

なむ。これに御手一つあそばして、鬼にきかせ給へ」と聞え給へば、俊蔭女「いと(一)はしたなげにぞあめる」いらへ、(二)仲忠「仲忠が爲には、これに勝る折なむ侍るまじき」と聞え給へば、かんのおとゞ御床より下り給ひて琴を取り給ひて、曲一つ(三)彈き給ふ。その音、更にいふ限なし。中納言の御手は、おもしろく、ゆゝしきまで、雲風のけしき色ことなるを、この御手は、病あるもの、思に沈みたるも、(四)これを聞けばみな忘れて、おもしろく賴もしく、齡榮ゆる心地す。かゝれば宮は、(五)御琴を聞召しつれば、たゞに(六)おはしつるよりも爽かに、わざをしつるとも思されず、苦しきことも無くて起き居給へり。中納言の君、仲忠「惡しかめり。なほ臥させ給ひて聞召せ」と申し給へば、宮、「たゞ今は苦しうもあらず。この御琴を聞きつれば、苦しかりつるも皆やみぬ」とて居給へり。女御君、かんのおとゞ、「風ひき給ひてむ」とてさわぎ、臥せ奉り給ひつ。琴は彈きはて給ひつれば、(七)袋に入れて、宮の御枕がみ、御佩刀に(八)添へて置きつ。かゝる程に、明けはてぬれば、御格子ども

調べあはせたる聲、むかひて聞くよりも、遠くひゞきたり。おほん方々、上達部、御子たち、「そゞや〳〵(一)。事なり(二)にたるべし。かゝる事はありなむと思ふ所(三)ぞかし。我等(四)がしどけなきぞかし」とて、あるは御履もはきあへ給はず、あるは御衣も着あへ給はで、手惑ひをしつゝ走りあつまりて、御前にあたりたる東の簀子に、植ゑたる如おはしまさふ。涼の中納言は、うち休み給へる寢耳に聞きて、驚きながら、冠もうちそばめてさし入れ、指貫直衣などをひきさげて、まひろげて(五)出で來たり。これかれ(六)見給ひて、いみじう笑ひ給ふ。源中納言涼「物語をだにせざんなり。あなかまや」と手うちかきて、石だたみのもとにて、直衣指貫著てのぼりぬ。御方の御隨身どもは御門のもとに居り。こと供人は近くも寄らず、築土のこの方(七)に立てり。中納言(八)、然るべき曲を音高くひくに、風いと聲あらく吹き、空の氣色さわがしげなれば、例のもの手觸れにくきぞかし、煩はし、と思ひて彈きやみて、かんのおとゞに申し給ふ、仲忠「今曲一つ(九)仕うまつらむとすれど、騒がしければ、得(一〇)

（語釈）
（一）そろ々はじまつたの意
（二）騒動がありしならん
（四）今まで油断して居しは
（八）仲忠
（一〇）よう仕りませぬ

（口訳）
（三）所ぞかし—ものから
（五）まひろげて—まろび
（六）これかれ—たれかれ
（七）築土のこの方—へいのこの方
（九）今曲一つ—今一つ—今こがく一つ

と思ひて、懐にさし入れつ。右のおとゞ、正頼「いで〳〵」とて寄りおはすれば、仲忠「只今は更に〳〵」とて見せ奉り給はず。おとゞ、正頼「今(一)斯くも將」とて笑ひ給ふ。中納言、仲忠「かのりうかく(二)は、賜はりて、いぬ(三)の守にし侍らむ」かんのおとゞ、うち笑ひて、俊蔭女「いつしかとも將。さてもかやうの折には、いふ樣かある」と宣へば、仲忠「大方のことは如何侍らむ。この琴の族ある所、聲する所には、天人のかけりて聞き給ふなれば、添へむとて聞ゆるなり」かんのおとゞ、内侍のすけして、大將のおとゞに、俊蔭女「かの己が琴、(四)此處に要せらるめり。取らせむ」と聞え給へれば、いそぎて、(五)三條殿にわたり給ひて、(六)持たせておはしたり。三の宮とり給ひて、中納言にさし遣り給へれば、唐の縫物の袋に入れたり。兒を懐に入れながら、琴を取出で給ひて、仲忠「年頃(七)、この手を如何にし侍らむと思ひ給へ歎きつるを、後は知らねど」など(八)て「はうしやう」といふ手を、花やかに弾く。聲いとほこりかに賑はゝしきものから、又あはれに凄し。萬の物の音多く、琴の

〔語釋〕
(二)琴の名
(三)いぬは此赤兒の名なれどこゝにていふは稍突然の嫌あり
(四)仲忠が入用なりといふ故
(五)兼雅が
(七)我が琴の手法を誰に傳へんかと憂ひ居たりしに後の事は知らずとにかく今此兒あれば安心なり
(八)「など」とて」なるべし

〔考異〕
(一)斯くも—かうも—かくや
(六)持たせて—とらせて

かんのおとゞ、生れ給ひつる君の御臍緒切り給はむとて、(女房)「たゞ人はさふらへ。人のするわざどもこそはせめ。このもの、見苦しのかたつぶりや(一)」と宣へば、つい居て、(仲忠)「何を召すぞ」おとゞ、(女房)「下なるもの一つ(二)」と宣へば、指貫を脱ぎて奉り給へば、「否や。今一襲を」と宣へば、白きあはせのはかま一かさねを脱ぎて奉りて、「あな命長や」とて御衣掛のもとに立寄りて見給へば、御たち笑ふ。仲忠も、「物いちじるき夜もや(三)」と宣へば孫王の君、「げに、立ち走りやすくせさせ給ふめり」と聞ゆる程に、かんのおとゞ生れ給へる君を、いと清く拭ひて、御臍緒切りて、このはかまに押しくゝみて、かき抱き給ふ。中納言、御帳のもとに寄りてつい居て、(仲忠)「まづ賜へや(四)」と聞え給ふ。かんのおとゞ、(女房)「あなさがなや。いかでか外には」と宣へば、かたびらを引きかづきて、土居のもとにて抱き取り(五)たれば、いと大きに、頸も居ぬべき程(六)にて、玉光りかゞやく樣にて、いみじく美しげなり。いと大きなるものかな、斯かればこそ、久しく惱みつるにやあらむ、

(語釋)
(一)眞あるべし
(二)仲忠を戯に譏りていふなるべし
(四)其赤兒を下され
(五)仲忠が赤兒を
(六)頸がよくすわりそうな程にて
(句解)
(三)物いちじるき夜―くのいちしきよる―物いははしき夜に

の御衣を奉りて、耳はさみ(一)をして、惑ひおはす。いと宿徳に、ものものしきものから、氣高くこめきて、御髮ゆりかけたり。わが親も、いづれとなくめでたし。同じ白き御衣著給へり。中納言、なほ物はた後れりける齒かなと見給ふに、後(二)のものもいと平かになりぬ。中納言、仲忠「何ぞ」と問ひ給へば、かんのおとゞ、俊蔭女「夜目にも著くぞ」と聞え給へば中納言、萬歳樂をれかへり〳〵舞ひ給ふ。三の親王いたく笑ひ給ひて、親王たちその樂を高麗笛に吹き給ふ。主のおとゞ、正頼「など斯くは」と聞え給へば、三の親王、忠雅「中納言のこめ舞し給ふなめり」右大將、兼雅「たゞ今のすきは、あぢきなくぞ侍る」主のおとゞ、御ときよく(三)うち笑ひ給へば一度にほゝと笑ふ。いと心地よげなり。主のおとゞ參り給へば、笑ひ(四)てつい居ぬ。おとゞ、正頼「萬歳樂は、果たしてこそ。半にては惡からむ」と宣へば又立ちて、無き手を出だして舞ひ果てつ。

おとゞ、おひづる(五)の紋の織物の直衣をかづけ給へば、かづきて舞ひ立てる程に、

(語釋)

(一)髮の毛を耳にはさむ也わかひ〳〵しき體也

(二)俊蔭

(三)調子よく節調會よくの意歟「ことゝきよく」とかける本もあり

(四)仲忠が

(五)「老鶴」と傍書せる本あり。如何。一本「おひつか」

〔語釋〕
(一)俊蔭女と
(二)仁壽殿と俊蔭女と兩人にて
(三)兼雅
(四)正賴
(五)仲忠
(六)巨勢氏曰、「女御の君居隱し給へば」歟、仁壽殿が女一宮を掩ひかくすなるべし
(九)「に宮」は「宮に」なるべし
〔考異〕
(七)に居隱れ—はひかくれ
(八)仲忠—仲忠は

て別におはします。女御の君は、仁壽殿「何か。相撲の節の夜、(一)いと睦しくなりにしかば」とて同じ御帳の内におはしまして、たゞ二所(二)にかゝりもて仕うまつり給ふ。ことに痛くあらねど、なほ心もとなく惱み給ふ。右大將殿(三)も參り給ひておはします。あるじのおとゞ(四)君たちは、簀子に弓引きつゝさふらひ給ふ。御格子の内の廂には、宮の御はらから、男宮たちおはします。御帳の前に、弓引きつゝ中納言(五)さふらひ給ふ。内裏より御使、ゆきかへりあり。藤壺よりも御使あり。殿のうち方の上達部は、入らずもあらむと思して、町異なれば、中門を鎖しておはしまさふ。

かゝる程に、寅の時ばかりに生れ給うて、聲高に泣き給ふ。中納言驚きて、御帳のかたびらをかき揚げて、仲忠「何ぞや〱」と聞え給へば、かんのおとゞ、俊蔭女「あなさがなや。現なり」とて女御の君(六)に居隱れ(七)給へば、仲忠(八)「今夜は目も見え侍らず」といふものから、女御の君に(九)宮かゝり奉りて、さわぎ給ふを見れば、白き綾

〔語釋〕

（一）仲忠

（二）女一を

（五）「えうし」にて整きをかけたる如くの意なるべし「やうし」とかける本もあり

（八）傍陰女

（九）「は」衍なるべし

〔考異〕

（三）給ひて―給ふに

㊂女一宮大宮を産む。仲忠琴子奉を彈く。産湯

（四）うしろめたがり―うしろめたげに

（六）如して―如くて

（七）奉りつ―奉る

かくて（一）中納言殿の出で給ひたる間に、女御の君中の大殿にわたり給ひて見（二）奉り
（三）給ひて、仁壽殿「いたくぞ面痩せ給ひにける。上の然ばかりうしろめたがり（四）聞え給ふ
ものを」とて見奉り給ふに、おもしろく盛なる櫻の朝露に濡れおえたる色おひ
にて、御髪はようしかけたる（五）如して（六）隙なくゆりかゝりて、玉ひかる樣に見え給ふ。
御衣は、赤らかなる唐綾のうちきの御衣、一かさね奉りて、御脇息におしかゝ
りておはす。斯くて産屋の設、白き綾、御調度ども、銀にしかへして、殿にま
うけ給ふ。

二月ばかりかねて、うまれ給はむ日まで、不斷の修法萬の神佛にいのり申させ給
ふほどに、十月になりて、中の十日ばかりに、宮氣色ありて惱み給ふ。御座所、
東宮の宮たちの産れ給ひし所を、あるべき樣にしつらはれて、わたし奉りつ（七）。
内侍（八）のかんのおとゞ、御車五つばかりして參り給へり。中納言は（九）おろし奉りて、
宮のおはします御帳の内へ入れ奉り給ふ。大宮もわたり給へり。それは御局し

〔語釋〕
(二)產婦をば
(三)仲忠
(四)女一宮
(五)仲忠と
(七)朱雀の第二女
(九)仁壽殿の生家なる正賴の家は
(一〇)あやかるべき人としては其方も萬更でもあるまじ

〔考異〕
(一)侍りなむ—侍らむ
(六)長く—ナシ
(八)上—君

の宮、御子産み給ふべきほど近くなりぬるを、まかで侍りなむ(一)」上、朱雀「何時ばかりにか」女御の君、仁壽殿「十月ばかりの程になむ」上、朱雀「然るべき事にこそあなれ。さる(二)人をば、かねてより勞りなどこそすれ。如何ならむ」女御、仁壽殿「何かは。かの(三)朝臣、まかり歩きもせで、この頃は侍るなるを、誰も〳〵よに疎には」上、朱雀「この(四)御子を久しく見ぬかな。如何生ひなりにたらむ。かの(五)人と著き竝びたらむには、世に似げなうは見えざりしを」御いらへ、仁壽殿「人はいかゞ見奉るらむ。まことなるにや。御髮も、御覽ぜしよりは長く(六)、うちぎに多くあまり侍る。大方も見るかひなくは物し給はず」上、朱雀「さて二(七)の御子は」女御、朱雀「上(八)に似たまひて、それもことに劣り給はず、ふくらかに氣近きこと添ひてなむ」上、朱雀「なほ所がらにや(九)。女子生し立てらるゝ所なれば、この御子たちも、外のには似ずかし。さらば平かにてを。思ふ樣にて、御子をあまた平かにて持給へる肖物は、其處にも怪しう(一〇)はあらじかし」と宣へばまかで給ひぬ。

（語釋）

（一）女一宮

（四）女一宮に與へむ

（八）產經の記せる所に隨ひて

（九）女一の例を離れず

⊖女一宮懷胎。仁壽殿女御退出。產所の準備。

（考異）

（二）人近く―「人」ナシ

（三）あへなむ―あいなし

（五）今―ナシ

（六）然りぬべき―さるべき

（七）思ほして―おぼして

かの御子（一）ともろともに、琴など彈きつゝきかせ給へ。（二）人近く聞かさらむはあへなむ（三）」とて賜ふ。「その南にこれよりは小き所あり。それは一の御子に（四）、今ものせむ」と宣ひて賜へば、中納言舞踏して賜はり給ひて、まかで給ひぬ。帝、女御の君に聞え給ふ、朱雀「今（五）、女御子たちは、然りぬべき（六）所つくらせて、相次ぎつゝものせむ」など聞え給ふ。

かくてかへる年の正月ばかりより、一の宮孕み給ひぬ。中納言、かの藏なる、產經などいふ書ども取り出でて、卜ひ給ひて、女御子にてもこそあれと思ほして（七）、產るゝ子、かたちよく、心よくなるといへるものをば參り、然らぬものも、（八）それに隨ひてし給ふ。參り物は、刀俎をさへ御前にて、手づからといふばかりにて、我なは添ひ賄ひて參り給ふ。かくてその年は（九）、立ち居りもし給はず、かつは文どもを見つゝ、夜晝學問をし給ふ。

かゝる程に、子うみ給ふべき期近くなりぬれば、女御の君、上に聞え給ふ、仁壽殿「一

させ給はまし。今までは在りなましやは」など宣ひて、すなはち國々の受領などの(一)さるべきに(二)たい一つづつ預け、しつべき人々にみな宣ひ預けつゝつくらせ給ふ。まづ築土、二三百人の夫どもして、その年のうちに築きつ。藏の辛櫃(三)一つに香ありといへるを、取り出でさせ給ひて、母北の方にも(四)一の宮にも奉り給へば、この御族の香どもは、世の常ならずなむ(五)。書どもも、(六)要あるは取り出でて見給ふ。この殿造れば、そのめぐりに、「かく世にさかえ給ふ君住み給ひし」とて、皆家造りて來りぬ。かの出で來りし嫗翁は、政所に召して、布、衣などいと多く賜ふ。

畫詞 こゝは京極殿。藏あけたる所。

かゝる事を、内裏きこしめして、後院(七)にとて年頃造らせ給ふ、大宮の大路よりは東、二條大路よりは北に、ひろく面白き院あり、それを中納言召して賜ふとて宣ふ、朱雀「この家、(八)(九)かく廣き所なるを、まだ私の家なども無かなり。これを文所にして、かの始祖の、(一〇)ことに隱されたらむ手など習はれむに、よかんべかなる。

〔語釋〕
(二)「たい」は「對」なるべし
(四)仲忠の妻
(七)天皇が御讓位後の御住居として定められたる御殿
(八)後院にとて造れる家をいふ
(一〇)俊蔭

〔考異〕
(一)さるべきに—さしつべき
(三)一つ—ナシ
(五)なむ—ナシ
(六)要ある—用ある
(九)この家—この家は

して鎰あり。その戸には、「文殿」と印さしたり。然ればよと思して、また鎰開け給へば、たゞ開きに開きぬ。見給へば、書どもうるはしき帙簀どもに包みて、唐組の紐して結ひ、机ども(一)に積みてあり。その中に、沈の長櫃の辛櫃十ばかり重ね置きたり。奥の方に、よき程の柱ばかりにて赤く圓きもの、積み(二)置きたり。たゞ口もとに、目録を書きたる書を取り給ひて、ありつる様に鎰さして、多くの殿の人残し(三)おきて歸り給ひぬ。

三條におはして、北の方(四)に、ありつるやう申し給ひて、この御文の目録を見給へば、いといみじくあり難き寶物多かり。書どもは更にも言はず(五)、唐土にだに、人の見知らざりける、みな書きわたしたり。醫師書、陰陽師書、人相する書、孕み子うむ(六)人のこと言ひたる、いとかしこくて多かり。母北の方、奴嫗女「あなゆゝしや。昔人(七)は、ことさら己をば惑はさむとこそ思しけれ」中納言、仲忠「いと賢くものし給ひける人なりければ、思す様こそありけめ。これらを其處に持ち給ひてば、如何にかはせ

(語釈)
(四)奴嫗女
(七)奴嫗

(考異)
(一)机どもに—机によるに
(二)積み—つゝみ
(三)残しおき—おしおき
(五)御文—「御」ナシ
(六)子うむ—たらむ

〔語釋〕
(一)陰陽師などに祭文をよましむる也
(二)仲忠が幄舍の内に宿する也
(六)「あぜ」は「あぜぐら」の「あぜ」歟

〔考異〕
(三)先祖―先代
(四)開くべき―わるべき
(五)と見む―ナシ

さすべき人などひき率ておはして、事の由申させ、御誦經をせさせ給ひて、鍵なければ、開くべきたばかりをしつゝ(一)、藏を開けさせ給ふに、更に開かず。其處に、二三日多くの人をひき率て、夜は車にて幄(二)のうちに居給ひつゝ、開けさせ給ふに、更に開くべうもあらず。片手を脱き折りなど、多くの人し煩ふ。

三日といふ晝つかた、御裝束などし給ひて　心のうちに申し給ふやう、仲忠「承れば、この藏先祖(三)の御領なりけり。御封を見れば、御名あり。この世に、仲忠をはなちては、御後なし。母侍れど、これ女なり。この藏、先祖の御靈開かせ給へ」と禱り給ふ。されど開かず。人の申す樣、「天下に如何にいふとも、この錠は(四)開くべきにもあらず。壁を毀ちて開け侍らむ」と申せば、仲忠「如何なれば得開けぬぞ(五)と見む。怪しきわざかな」とうち笑ひて、藏にのぼりて見給へば、いといかめしき錠なり。引きくつろがして見給へば、開きぬ。これは、げに先祖の御靈の我を待ち給ふなりけり、と思して、人を召して開けさせて見給へば、内に今一重あぜ(六)

（語釋）
（一）まつりごとは、まがごとの誤歟
（二）前の如く開けんと試みる者あるかと
（四）呪詛
（八）仲忠

（句異）
（三）如する―如くする
（五）四五日―四日五日
（六）ありて―あれば
（七）祓し―「し」ナシ

ぞ」と問はせ給へば、老人「この藏を開けむ〳〵とし侍りつゝ、「人のあしくするを、我はなど開けざらむ」と、かつ倒れ伏せるを見つゝ、年月を經てし侍りし程に、みな死に侍りにき。然せし人の家には、時のまつりごと（一）おこりつゝ、にはかにほろび給ひにき」と申せば、仲忠「いと恐ろしきことかな。又開くる人やあると見侍れ」とて御衣一襲ぬぎ給ひて、一つづつ賜ひつ。仲忠「この地のうちに見ゆる屋のわたりに侍りて、この藏へ、（二）また然の如する（三）やあると見侍れ。さてその藏のめぐりにうたてあるもの、野邊に拂ひ棄てさせてさふらへ」とてかへり給ひぬれば、嫗翁、（四）老の世に、見知らぬ、芳しくうるはしき綾、かいねりの御衣どもを得て、惝惑ふこと限なし。すなはち、物詣したる人見付けて、價も限らず買ひ取りつ。

かくて其の價のものを、己が孫のあたりの者にくれて、藏のめぐりを拂ひ淨めさせてさふらへば、四五日（五）ばかりあり（六）て殿の家司來て、幄うつ。暫しあれば、大德たち、陰陽師など來て、祓し（七）讀經するほどに、中納言（八）、御前いと多くて、藏あけ

（頭註）

（七）此處に人の住まぬ樣になりしは如何なる故で

（考異）

（一）世にありとも—ナシ

（二）見え侍りて—見え侍らで

（三）所に百歳に—所になむ百歳に

（四）百歳—百年

（五）姿顔—姿の

（六）悲しきに—悲しさに

かば、御門を閉して、人通はさでありしに、天皇、親王、宮、殿ばらの、御よばひの御使は、明けたてば立ちめぐりてあれど、音もえ告げでぞ侍りし。然ありし程に母かくれ給ひ、其の後父かくれ給ひにしかば、かの御女は世にありとも(一)聞え給はずなりにき。然りしかば、この殿は、河原人里人入りみだりて、毀ちはてて、一二年に斯くなり侍りにき。屋どもは萬の者ども取りしが、事も無かめりしに、この藏ばかりは「物ども侍らむ」とてまかり寄る者はやがて倒れて、多くの人死に侍りぬ。夜は、人にも見え侍りて(二)、馬に乗りて來つゝ、弓弦打をしつゝ、夜めぐりする樣になむ侍る。かく恐ろしき所に(三)、百歳に(四)なり侍るまでこの嫗翁の見奉り侍るに、わが國に見え給はぬ姿顔(五)おはする、玉の男の見え給へるは、いみじう悲しきに(六)、疾く告げ申さむとて、惑ひまうで來つれど、えまうで來あへず、惑ひ侍るなり」と申す。

中納言、仲忠「いとよく申したり。このめぐり(七)に住まずなりにけむは、いかである

〔語釋〕
(四)俊蔭をいふ
(六)俊蔭が娘に琴を敎へし時の事

〔考異〕
(一)ほとり―ほど
(二)斯くは―「は」ナシ
(三)御隨身の―「の」ナシ
(五)え待ちつけ―え待ち得
(七)病なくなり―「病」ナシ
(八)ものも―ものは

に、河原のほとり(一)より、年九十ばかりにて、雪を戴きたるやうなる嫗翁、這ひに這ひ來て、老人「まづ此處去らせ給へ〳〵」と泣く。「何ぞ斯くは(二)申す」とて御隨身(三)の問へば、老人「なほまづ此處去らせ給へ。多くの人取り殺しつる藏なり。まづ御覽ぜよ、こゝらの人の屍を。去らせ給ひなむ時、ある樣は申さむ」と言へば、怪しがりて、うち去りて立ち給ひたり。さて、これらが申すやう。老人「此の村は、いみじく榮えて侍りし所なり。今年二十年あまり、三十年にはまだ足らぬ程になむ、斯く滅びて侍る。その故は、昔、一人子(四)を唐土にわたし給へりし人の、御殿になむありし。その子をえ待ちつけ(五)給はで亡せ給ひて後に、その子歸りいましたりし。さてこの殿を、いと淸らに造りて、住み給ひし程に、御女一人なむもち給へりし。その女の小くいますがりし時より、世に聞えぬ音聲樂の聲なむ絶えざりし。その(六)音聲樂を聽く人は、みな肝心榮えて、病あるものは病なくなり(七)、老いたるものも(八)若くなりしかば、京の中の人は、めぐりて承りし。その女、嫁時になり給ひし

〔語釋〕
(一)この邸内のものとも見えず
(三)銅線なるべし
(四)俊蔭
(五)我が家は

〔考異〕
(二)うち寄りて―「て」ナシ
(六)一枚の書も見えず―一枚もふみ見えず

はり住み給ひける所にこそありけれ、わが親の御時に無くなりにたるを、我つくらせて、東北の方に奉らむ、と思して、睦まじき人すこし御供におはして見給へば、この程は野中のやうにて、人の家も見えず。さる所に、昔の寝殿一つ、めぐりはあらはにて、塗籠のかぎり見ゆ。又西北の隅に大きにいかめしき藏あり。中納言、御前したる人の馬に乘りて、めぐりて見給へば、この藏は、(一)この地の程にも見えず。供なる人に、「この地の内か。見よ」と宣ふ。めぐりて見て、供人「此の内なり」と申す。近く寄りて見給へば、藏のめぐりに、人の屍數知らずあり。恐ろしと見つゝ、なほうち寄りて(二)見給へば、世になくいかめしき錠かけたり。その錠の上をば、(三)かねを捻りかけて封したり。その封の結び目に、(四)故治部卿の主の御名、文字彫りつけたり。中納言見給ひて、驚きて、これは文庫ならむ、昔(五)累代の博士の家なりけるを、(六)一枚の書も見えず、その道ならぬ琴などだに、世の中にも散り、此處にも殘りたるものを、これ開けさせむ、と思すほど

宇津保物語

藏開（上）

梗概

〔一〕仲忠、三條京極の舊宅を修理す。寶藏の奇特。仲忠、二條大宮の院を賜はる。〔二〕女一宮懷胎。仁壽殿女御退出。産屋の準備。〔三〕女一宮、大宮を産む。仲忠母子琴を彈く。産湯。〔四〕産養。あて宮より女一宮に消息。七夜。盛宴。〔五〕贈物を方々に頒つ。兼雅夫婦の物語。〔六〕九日の産養。方々よりの贈物。管絃。〔七〕産屋の事によりて集りし人々退散。贈物。産屋の物を帝に奉る。內侍のすけ、仲忠夫婦の前にて當代の男女を評す。〔八〕正頼參內、産養の有樣を奏す。〔九〕祐澄、あて宮を訪ふ。産養の噂。〔十〕祐澄父母に對面。仲澄の追薦。〔十一〕大宮五十日の産養。彈正宮、大宮と物語。仲忠夫婦の物語。正頼夫婦の物語。〔十二〕正頼大將を辭す。〔十三〕仲忠兼右大將に任ぜらる。參內。女官等の評判。俊蔭の家集を進覽すべき勅を受く。〔十四〕仲忠東宮に參る。東宮、あて宮と仲忠の噂。〔十五〕近衞府の屬僚の祝宴。

〔一〕仲忠、三條京極の舊宅を修理す。寶藏の奇特。仲忠、二條大宮の院を賜はる。

〔語譯〕
(一)仲忠
(三)檢非違使の別當になれば華麗な服裝をする譯にゆかぬとてそれは兼ねずの意歟、但「田鶴村鳥」には檢非違使をかねたる事見えたり

〔考異〕
(二)衞門督―左衞門督

(一)藤中納言は、(二)衞門督なれど、(三)裝束淸らにせずとて、非違の別當はかけず、さてあり經給ふほどに、少かりし世のことなれど、京極など覺えければ、昔より親の傳

宇津保物語 下 目錄

宇津保物語

下